折り詰み、虫の息の體を俵へ入れて藍屋へ遣る。（船中）井澄屋番頭多左衛門、お富を助け上げる。〔三幕〕（吾妻明神）藍屋娘お鶴と伊豆屋與五郎の戀。平馬、お鶴に横戀慕するのを非人の妻小笹が支へ、平馬が質入れした香爐の手形を拾ふ。（源氏店）平馬と番頭藤八の密談。多左衛門の妾となつてゐたお富は雨宿りした藤八を內へ伴ふ。（妾宅座敷）藤八、お富へ戀慕。與三郎は向疵といふ渾名の惡者になり、蝙蝠安に連れられて強請に來り、圖らずお富に逢ひ、心變りを責めるうち多左衛門歸り扱ふ。多左衛門再び出た後、與三郎入り込んでお富と情を温め、藤八を葛籠へ入れる。〔四幕〕（雪の下井澄屋）お鶴と與五郎へ多左衛門が意見。（店先）お富與三郎は、藤八を入れた葛籠を質に持ち込み、質物の香爐を請け出さんとして平馬と爭ひになる。多左衛門仲裁。小笹出て香爐を貰請け。與三郎は小笹を實母と知り驚く。多左衛門はお富と兄妹の名乘り、お富と與三郎は金を貰つて悄然と立ち退く。（野陣ヶ原）源左衛門・平馬、小笹を殺して香爐を奪ふ。（稻瀨川三昧）お富・與三郎を捕人が追ふ。（野陣ヶ原）兩人通りかゝり、小笹殺しの嫌疑にて捕へられる。〔五幕〕（女護島）御曹子鈴朝、女護島へ漂つて海濱女と色模樣。八丁堀富平次の注進。常磐津淨瑠璃「島廻色鈴朝」。（海中孤島）捕へられて島へ送られた與三郎、島拔けをして辿りついた島に一睡の夢を結ぶのが前場である。海中に流れ寄つた惡人の密書を手に入れる。〔六幕〕（飛鳥山）與五郎、左近の妻園路に逢つて穗積家滅亡の事を聞く。（辨天堂）惡人達、お鶴を奪はんとす。（山下）非人にやつした與三郎、源左衛門が來る事を聞く。（辻堂）久次、園路を斬つて金を奪ふ。（山下）與三郎、源左衛門を斬らんとして失敗。（山上）巡檢中の本田親常、與五郎を助けて平馬等の惡事を知る（この幕遂に上場を見ず）。〔七幕〕（元山町伊豆屋）伊豆屋宮兵衞は伜與三郎の忌日を弔ふ。（夜番小屋）下男忠助は夜番に出て與三郎に逢ひ、詮議の嚴しい事を告げる。與三郎は名乘つて親を助けんと云ふを忠助が意見する。（伊豆屋表口）與三郎は忠助の情にて、それとなく父に逢ふ。〔大詰〕（觀音久次內）お富、久次の世話になつてゐる。與三郎、偶然二人に逢ひ、一宿。（裏手）海松杭の松、香爐を盜む。（久次內）久次は切腹して血汐に祕藥を合せて與三郎に服させる。與三郎の病ひが癒える。久次は穗積の家來筋である。成川民部の計ひで與三郎は穗積の家を立てる事になる――最終は本田次郎が裁判で解決をつける腹案であつたが、大入りなのでこの場で終つた。

【脚色】この作者の癖で、無理に冗漫に陷せしめた嫌ひはあるが、主役を團十郎の柄に見立てたのが巧く、筋も入り込まず、無理がなく運んでゐる。源氏店の場は、幕末江戸市井の描寫が巧みに、役々の性格も面白く書き分けてあるので、盛んに上場されてゐる。初演が大當りで、その影響で度々舞臺に上るのも、主役の俳優の人氣が強かつた爲めであるが、脚色者の巧緻も勿論、否むことは出來ない。

【備考】河竹默阿彌はこの狂言を增補して「八幡祭小望月賑」（別項）として縮屋新助と連絡させ、又「若葉梅浮名横櫛」「月宴升毛衆」等の書き替へも作つた。

【參考】演藝畫報（大正四ノ五・六、大正五ノ一二）

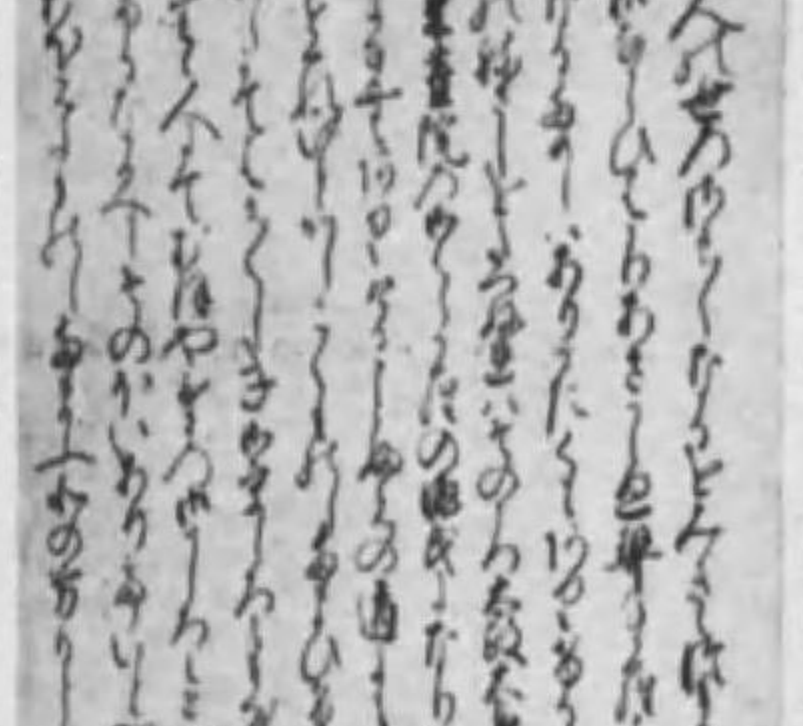
○歌舞伎（一七・七六・九八・一〇一）〔渥美〕

夜半の寢覺

物語　五卷（一本は三卷に分つ）【作者】未詳。傳說によれば「更級日記」の著者で、且つ「濱松中納言物語」（別項）の作者でもあると稱せられる菅原孝標女とされてゐる。【名稱】「無名草子」に「夜半の寢覺」とある。併し、東北帝國大學圖書館藏舊狩野文庫本・靜嘉堂文庫藏本・佐佐木信綱氏藏本・帝國圖書館藏本には「夜の寢覺」とあり、又前田侯爵家藏本には單に「寢覺」とのみ書かれてある（何れも外題。內題はない）。現存諸本の結尾が「後の世をだにいかでと思ふを、さすがにすが〳〵しく思ひたつべくもあらぬほだしがちになりまさるこそ、心うけれど、夜の寢覺絶ゆるまなくとぞ」となつてゐることより推して、或は「夜の寢覺」を、最も妥當な題號と見るべきであらう。【成立】作者を孝標女とする傳說に從へば、大略後冷泉帝の時代か。【諸本】所傳本は極めて稀で、しかも何れも完本ではない。現存の寫本としては、佐佐木信綱氏・靜嘉堂文庫・東北帝國大學圖書館・帝國圖書館（各五册）・前田侯爵家（上中下三册）の各藏本があり、何れも藤岡作太郎（國文學全史平安朝篇）によつて紹介せられた黑川本（五册）の系統本である。現存諸本の間にはさして異同はないが、卷序は諸本不同になつてゐる。今その卷序を示せば次の通りである。

佐佐木氏本	東北大學狩野本	前田家本
一、なになり袖の	一、人の世の	一、人の世の
二、御むかへに	二、なになり袖の	二、なになり袖の
三、かしこには	三、たいの御方	三、五月二十日の月
四、たいの御方	四、御むかへに	
五、人の世の	五、かしこには	

卽ちこのうち、前田家本の卷一は、東北帝國大學藏舊狩野文庫本の卷一及び卷三に、その卷二は、卷二及び卷四の第三十四枚目オ五行までに、その卷三は、右卷四の殘部及び卷五に各々相當してゐる。靜嘉堂本・帝國圖書館本の卷序は佐佐木氏本と同じである。而してその卷序は、物語の內容から推して前田家本が最も正しきものと考へ得られるが故に、東北帝國大學藏舊狩野文庫本以下の四本を、その正しき順序に改めれば、東北狩野本一・三・二・四・五、佐佐木氏本・靜嘉堂本・帝國圖書館本、五・四・一・二・三となる理である。なほ東北狩野本での卷三の冒頭は勿論、前田家本では、東北狩野本の卷一に當るものの後に、行も改めず、續けて書かれて一册になつて居り、第二册・第三册も同樣である。これ等の諸本は何れも中間に數卷、終りに一卷ばかりの缺卷があるとされてゐる。別に、「國文學全史平安朝篇」には、中村秋香氏



前田家本 夜半の寢覺

藏本（五卷）といふものが說かれてゐる。この本は現存本の系統とは全く文章を異にした後世の書きなほし本のやうである。なほこの外に、原富太郎氏の所藏にこの物語の繪卷一卷がある。數節の殘闕にすぎないが、遲くも鎌倉時代初期の製作に成り、その繪詞は缺卷の部分に當ると想像される。この物語の刊本は各時代を通じて全くない。但し繪卷は大正八年にコロタイプ版で出版されてゐる。

【梗概】（五卷本の區劃に從つて說くことにする）。

〔卷一〕朱雀院の御兄弟である源氏のおとどには四人の子供があつた。大君・左衞門督・中の君・宰相中將である。その中で、中の君は容貌ことに美しく、父の才能を享け繼いで音樂に巧みであつたが、その幼い頃の夢に天女があらはれ、その天女から琴の祕曲を授けられ、且つ將來數奇な運命に弄ばれる事を豫言された事があつた。當時左大臣が關白をしてゐたが、その女は春宮を生み中宮となつてゐた。中宮には中納言の兄があつたが、衆望を一身に集めた貴公子であつて、娘持つ親達は無上の幸運として中納言との緣組を望まぬ者はなかつた。源氏のおとどは順序として長女大君を中納言に嫁する事として支度するが、丁度中君が御年當りのためにこれを親類の僧都の家に四十五日の方違へに預けた。その時偶々中納言は、病のために退いて治療してゐる乳母を見舞に來るが、乳母の家は丁度この僧都の家の隣であつた。こゝで中納言は、中の君が月を眺めながら彈いてゐる琴の音に誘はれて、その美しさに驚き、遂に紛れ込んで契を結んでしまふ。ところが案內人の話から中納言は中の君を僧都の姪と誤信し、當座の便宜から自分をその女の情人である式部卿宮の中將と僞る。中の君は中納言を宮の中將と信じたまゝで別れるが、再び中納言が訪れて來た時は、最早其處にはゐなかつた。中納言は中の君の姉大君と結婚を濟ますが、僧都の家の一夜を忘れ難く、妹の中宮に奬めて僧都の姪を出仕させてから思ひを達せんともくろむ。一夜とのゐ所で宮の中將と色々の女の噂などをして、ことさら僧都の姪の話などを持ち出す。やがて召されて僧都の姪が中宮の許に出仕する。美しいが全く別人で當夜の姫君とは比較にならない。しかしこの女は、かの夜傍に琵琶を彈いてゐた人らしいので、遂にその口からあの夜の女が現在自分の妻の妹であつたことを知り、大に驚く。一方中の君は一夜の契に懷姙し、しかも姉君の夫である中納言の變姿がその人であつたことを知り、中の君の驚きと悲みは一倍と甚しかつた。思ひ切れぬ二人は奇しき運命に泣きながらそれ以後中納言は人目を忍んでは中の君を訪れる。中の君の女房や僧都の計らひで九條の僧都の家で對面したりする。女房は中の君の兄の宰相中將にも打ち明け、中納言は妹の中宮に總てを語る。この二人は後まで、何かにつけて力を添へてくれる。〔卷二〕中の君は日を經ても悲しみと懷姙のために、病氣となる。理由を知らぬ人達は處を變へてはと一條の別邸に移轉させる。父のおとどは心痛のあまり自分も病み付き、この機に、日頃の出家の本意を遂げ、廣澤の池の傍に隱居して佛事に勤めることになる。中の君の出產も近づくので、宰相中將の乳人が石山にゐる緣で其處へ行つて、密に產を濟ませることにする。中納言も訪れて來て色々に慰める。やがて女子出產。中納言は石山のことも氣になるが、大君への無沙汰、大臣の出家したこと等のために、廣澤を訪れる。入道は後事をすべて中納言に賴み、中の君のことは事情を知らないので殊に深く後見して吳れるやうに賴む。中納言も後めたく思ふが、萬事引受ける。やがて生れた姫君は中納言が自分の父の家に託し、中の君は廣澤へ行つて父の入道と會見し、そのいたく變り果てた姿に驚く。その間にも中納言は戀しさに堪へかねて、歌を贈つたり、中の君の部屋の格子を訪れたりするので、口喧しい女房等に見つけられるやうなこともあり、それが自然と大君の耳にも入り、此處でまた中納言とその妻と中の君の苦しみが續けられる。大君と同腹の兄なる左衞門督は、大君に同情して中納言と中の君との關係を父の入道に告げる。入道は宰相中將を詰問するが、中將は否定する。中納言夫妻の仲は益々面白くなく、中の君はその立場に苦しんで、遂に廣澤に逃れてしまふ。或る冬の夜、中納言は降りしきる雪を冒して、密かに廣澤に訪れて來るが、遂に中の君に逢へずに歸らうとする時、矢張り大雪を冒して宮の中將がやつて來るのを見て嫉妬に苦しんだりする。明けて翌年の正月、中納言は廣澤に入道を訪ねて、よもやまの物語をして果しもなかつた（以上で卷二は終るが、現存寫本の卷二と卷三との間には、藤岡作太郎博士の言の如く大きな闕卷があつて、三卷以後の意味は非常にとり難い。今、同博士の紹介した中村本の梗概に從つて、この闕卷の部分を補つて說く）。こゝに中納言の有力な二人の競爭者が現はれる。叔父の左大將と帝とであつた。遂に左大將が勝利を得て中の君との婚約が成立つ。その間にも中納言は、侍女や宰相中將の案內で中の君と逢ふ。何とかしてこれを隱さうとするが、遂に成らずして中の君は左大將に嫁し、男子を生む。これは實は中納言の子供であつた。中の君は左大將の愛にひかれて、忠實な妻として勤める。中納言は悲歎の餘、中務卿の姫君や朱雀院の女一宮と絕望的な戀をする。これが原因で大君は產褥で死ぬ。中務卿の姫君も女一宮も幸福を中納言には與へなかつた。左大將は先妻の娘を中納言に與へようとするが、中納言はこれを拒絕する。その中に左大將は、中納言に北の方中の君のことを託して歿くなる。昔から中の君を思つてゐた帝は、左大將の歿後中の君を尙侍にしようとなさるが、中の君はその第一の繼女を自分の代りにおすゝめする（繼女の參內の支度をしてゐる所から現存の諸本の卷三は始まるのであるが、この部分は、上述の中村本と必ずしも一致はしてゐないし、中納言と中の君との間の子女は、中村本では人であるが、現存の諸本では卷三の初めに於て既に男一人女二人の三人である。又朱雀院の女一宮は現存の諸本の卷三では中納言の妻であるが、中村本梗概では二人の緣組は不成立に終つてゐる。その他細部の挿話にもかなりの相違があつたらしい）。〔卷三〕尙侍は參內して藤花殿に入る。繼母の中の君と中納言の後見が總て立派で、故左大臣の知人達は喜ぶし、帝の御覺えもめでたかつた。中の君は尙侍に從つて參內し、局や衣等の世話をしたが、帝はこの機に何とかして中の君と逢つて多年の心の內を述べたいと御考へになる。朱雀院の大皇宮と云ふ方が居られ、自分の娘女一宮は中納言の妻であるが、中納言は中の君に惹かれて宮を愛さないので中の君と帝とを結びつけて我が女の幸を計らうとして、中納言と中の君との間を妨げる。中納言は帝が中の君の寢所に忍んで來られ

のを憫みながら、子女達のことを哀れと思はれるなら、我を思せと中の君に迫る。中の君は數奇な自分の運命に歎きながら、父入道・故左大將への思慕、子女への愛、帝の求愛等に惱んで、いつそ出家でもしてしまつたらと考へながらも、一刻も早く内裏を退出したいと思ふ。帝は中の君の自分に靡かないのは、中納言のあるためである。中の君を得るためには御位を投げ捨てても構はないと御考へになる。〔卷四〕帝は中の君が靡かぬので、中の君と中納言との間の男の子まさこを、せめて忍ぶ草と思ひながら寵愛する。中の君は遂に勅許を得て内裏を退出し、故左大將の邸に歸つて、親子や自分の實子などと昔を追懐したりして靜かに暮してゐる。この間にも、帝は尙侍とまさこを寵愛しながら、なほ中の君を思ひ切れず時々御消息がある。中納言も度々訪れ、二人の間に最初生れた長女を伴つて來たりして樣々に言葉を盡すが、未だ中の君は打解けない。一方、中納言と女一宮との仲は相變らず面白くなく、宮は重患にかゝり氣を失つたりすることもあつた。中納言は益々心を千々に碎く。中の君は、遂に京を避けて廣澤に退いてしまふ。これを聞いた中納言は驚き憤みながら、入道殿の御機嫌伺ひに名を藉りて尋ねて來たりする。〔卷五〕中の君は、遂に病に罹り、三四月經つても一向はか〴〵しくない。そして癒てからの望の通り、出家して憂き世を離れてしまはうと決心する。入道は大に案じて初めの中はこれに反對するが、遂には同意する。このことが尙侍と中納言の許に洩れる。中納言も最後の決心をして、若君・姫君等を伴つて廣澤を訪づれ、中の君に諄々と口說き、翌日は入道に一切を告白して許しを願ふ。入道も驚くが、過去のことは致し方なしと許し、二人の間の子女達をも愛し慈しむ。中の君は折角思ひ立つた出家のことも果さず、又懐妊の兆があり、前世の罪の深さを思つて鬱々として樂しまない。やがて賑かに別れの宴を終へて中納言の一行は京に歸る。帝は尙侍を愛しはしたが、未だ中の君のことを思ひ切れず、遂に讓位の決心をなさる。尙侍は懐妊され、中の君も、尙侍も共に男子を生む。女一宮と中納言との間は相變らず面白くなく、帝は又度々中の君へ御消息がある。中の君は、自分の過去を追懐して罪業の深さに歎きながら、來世にはと考へる（現存の諸本はこゝで終つてゐるが、「無名草子」「拾遺百番歌合」「風葉和歌集」等及び中村本によると、未だ後一卷位の記事があつたらしく、入道殿の七十賀、中納言が關白となること、帝の讓位、春宮の御位、中納言の大君の入内、主人公夫妻の相愛等物語があつたらしい。恐らく最後の一卷・闕けて失はれたのであらう）。

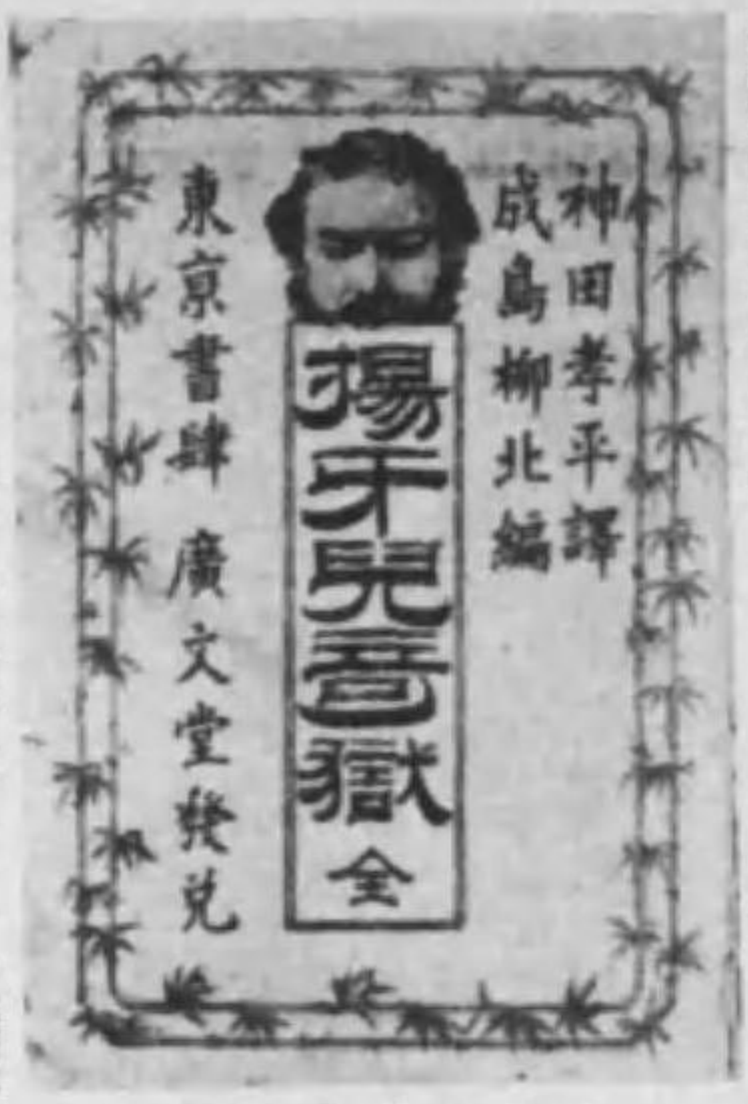
【解說】この物語の構想は、平安末期の物語の常として、「源氏物語」に得るところが少くない。單に取材の方面に關してさう言へるのみでなく、作中の人物の性格及び特にそれを中心として展開される全體としての事象の色調までが、「源氏物語」のそれに影響されてゐることは爭はれない。例へばこの物語の主人公である中納言のまめやかさと宮の中將の色好みとは、「源氏物語」に於ける源氏と頭中將、薰大將と匂宮との對比に等しく、女主人公の中の君が年長の左大將に嫁し繼女三人を後見するのは、玉鬘と鬚黑の大將及びその子女との關係に類してゐる。また卷一に描はれてゐる兩主人公が、はからざる一夜の契に、爾後内的及び外的事情のため絕えず懊惱し、苦悶する構想は、源氏と藤壺との關係に等しい。同卷の宿直所に於て、中納言と宮の中將とが、色々の女の噂をして故意に僧都の姫の話等を持ち出す趣向は、また「源氏物語」の雨夜の品定めの摸倣と見るべきであらう。この物語に就いて注意すべきことは、その全體としてのムードの上に、前代の物語に見ることを得なかつた或る新鮮な氣分の認められることである。それはこの物語が、一方、平板な自然主義的な人生寫實の物語から離れて、物語製作上に相當意識した構想の變化をねらつてゐる傾向を有するためであると同時に、一方、卷三以下に於て、帝の位といふものが戀愛の前には全く無力なものとして描かれてゐる一例によつても分るやうに、現實的な榮位や權力よりも、より神祕的な内面的な深みのある或るものを欣求してやまぬ作者の性向、並に平安朝末期の浪漫的な時代性に因ると云つてよいであらう。

【參考】國文學全史平安朝篇（藤岡作太郎）○夜寢覺物語窓のともしび（[illegible]）橫山由清（帝國圖書館藏）○日本繪卷物集成第五卷解說（田中一松）○校本夜半の寢覺（橋本佳）○よはのねざめ（藤田德太郎・増淵恒吉）○濱松中納言物語末卷略考（松尾聰）（國語と國文學昭和六ノ四）○菅原孝標女その作品夜半の寢覺の形態に就いて（同上）（岩波講座日本文學）○寢覺物語繪卷に就いて（増淵恒吉）（同上）○現存夜半の寢覺は果して改竄本なるか（橋本佳）（思想昭和六ノ四）〔池田〕

揚牙兒奇獄（よんげるきごく）　飜譯小說【譯者】神田孝平【原作】未詳【成立・刊行】文久元年譯述（推定）。明治十年九月より十一年二月まで「花月新誌」に連載、明治十九年單行。

【由來】初め譯者は、和蘭政法の整備してゐることを語る實例として、同國の訟獄の奇案を錄した書册から「ヨンケル・ファン・ロデレイキ一件」と「靑騎兵並右家族共吟味一件」といふ二篇を抄出譯述して「和蘭美政錄」と題した。この稿本を友人成島柳北が借覽し、あまり面白いので將軍家茂に見せたが、江戸城炎上の折燒失してしまつた。ところが、その後「ヨンケル」の方の寫本だけが柳北の手に入つたので、彼はその文を省略修飾し、「揚牙兒奇獄」と題して自分の主宰する「花月新誌」に揭載した。そして「花月新誌」所載の分を編輯したものが坊間稀に見る單行本となつたのである。原本の「美政錄」は譯者の校訂を經て明治二十五年頃雜誌「日本之法律」に發表されたといふ。別に最近「ヨンケル」の方は吉野作造博士の苦心により譯者の手稿のまゝ明治文化全集第十四卷に採錄され、「靑騎兵」の方は、雜誌「明治文化」（昭和四ノ九・一〇）に發表されて、漸く完本となるに至つた。

【梗概】ゲ府大學の學生にヨンケル・ロデレイキといふ少年があつた。富貴の家の一人息子で、秀才であり、殊に戲曲を作るに巧みであつた。或る年の冬、學期終の親睦會で演じられた彼の喜劇（笑狂言）は殊に傑作と稱された。この冬彼は鄕里に歸るといつて學校を出たが、幾日經つても歸らない。父親は心配して百方搜索したが、その結果三週間ばかり經つて彼の死體が道中の河の中から出て來た。それは見るも無殘な慘殺死體であつた。警察では下手人の探偵にかゝつたがどうしても知れない。いろ〳〵な人間を嫌疑者として拘引するが、際どいところになつて、皆さうでないことが分り、事件は迷宮に入る。然るに一年半ばかり經つた頃、ヨンケルの學友の一人が役人になつてこの地方に來た。或る日用事があつて道行の途中一旅舍に休息した。その時物を書かうとして卓子の中を探すと、見覺えあるヨンケルの喜劇の稿本が出て來た。而もその表紙裏の餘白に、拉丁文でヨンケルの遺書が認めてある。この遺書によつて事件は明白になり、その旅舍の主人夫婦と下僕は、死刑にされることになる。



神田孝平譯
成島柳北編
揚牙兒奇獄　全
東京書肆　廣文堂發兌

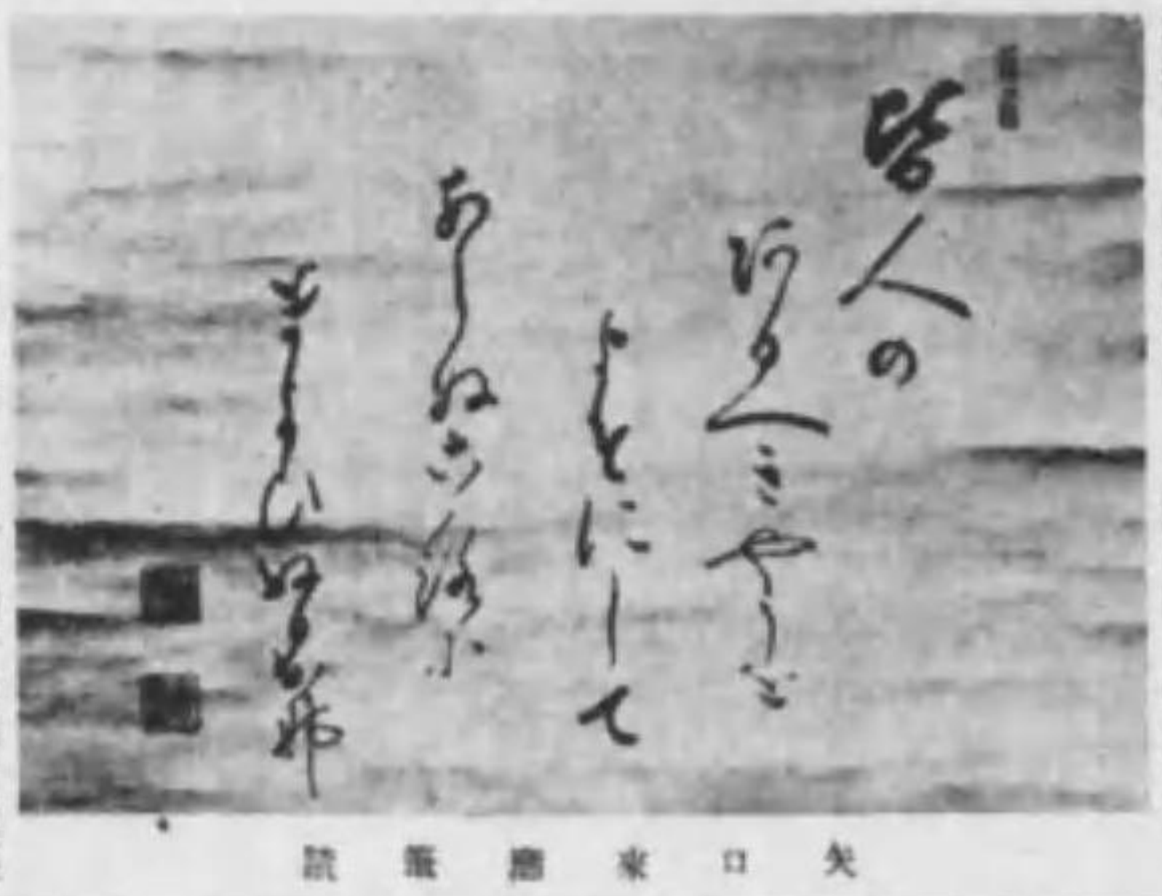
揚牙兒奇獄（初版）

【解說】「花月新誌」所載の分、卽ち單行本の「揚牙兒」は文章は美しいが肝心のヨンケルの遺書が省略されてゐるので遺憾な點がある。少々古風な文體ではあるが、明治文化全集所收の手稿の方が、遙かに興味深く讀むことが出來る。〔柳田(泉)〕

ら

賴園（らいえん）「賴政（よりまさ）」を見よ。

來應（らいおう）　心學者【姓名】矢口直方。本姓嵜原氏。通稱八郎平、幼名幸次郎。【生歿】天明二年二月一日生れ、安政五年（一八五八）六月二十七日歿す。享年七十七。【墓所】廣島城南長久寺【家系】寛政八年、十五歲で矢口家を嗣いだ。養祖父八郎平は小吏より譜代の格に昇進し、又養祖母は孝行の廉を以て褒賞され、小身ではあるが名譽の家柄であつた。彼の妻仲子は林氏の女、彼によつて心學の門に入り、遂に初入善導の免許を得た。增原丈四郎・林左仲太等も、三舍印鑑を授けられた程の立派な心學者となつたが、廣島心學は來應を開祖とし、且つ棟梁として、その一族眞友によつて隆興したと見るべきであらう。【閲歷】京都心學・江戸心學と鼎立して、日本心學の三大勢力の一大要素となつたものは廣島心學で、來應はその指導者であつた。彼は文化十一甲戌年、伊豫松山の心學者田中一如に就いて心學修行の手引を受けたことが「矢口先生事跡書試」には記されてゐるが、その實、彼は享和以來屢々盍簪舍の講莚に列してゐた。卽ち大島有隣（別項）に導かれて心學の堂に上つたのであつた。文政元年には京都から三舍印鑑を授けられたが、翌二年二月に歡心舍に對立して提携する新講舍を建營する目的を以て敬信舍の舍號を京都から受けた。敬信舍は容易に設立の運びに至らず、二十五年を經た天保十三年正月に至つて漸く假講舍が出來上り、彼を舍主として舍開きの式を擧げ得た。彼の業績中最も特筆すべきは、斷書を預め京都から預つて置いて、自からの認定によつて自由に下附し得る特權を明倫舍から獲得したことである。これは江戸の參前舍以外には前例のないことで、廣島心學の權威と興隆との反映でもあり、基調でもあつた。【門下】廣島心學者には、實に人材が多かつた。增原丈四郎・林左仲太・久米道輔・安藤左文次・栗原如心・萬代又郞右衞門・宮本與斎など一々枚擧するに遑がない。女流にはその妻仲子を初めとして、萬代粗子・田上田鶴子の如き俊英があつた。わけても奥田頼杖・中村德水（各別項）が出たことは特筆に値する。〔石川(謙)〕



矢口來應筆蹟

禮記（らいき）　經書　二十卷四十九篇【名義】禮の記錄の意。慣用的にライキと讀む。【著者】「漢書」藝文志には、「七十子後學者所記」と云ふ。周末漢初の儒家の手に成つたと思はれるものも少くない。孔穎達の「正義」には、「中庸」は子思、「緇衣」は公孫尼子の作、「月令」は鄭玄の說を引いて呂不韋の修むるところ、「王制」は盧植の說に據つて漢の文帝の博士の錄するところ、「樂記」は河間の獻王の作と云ふ。陸德明に據れば、漢の文帝の博士の作つた王制篇は、巡守封禪等の事を論じたものであることが「史記」封禪書に見えてゐるが、今の王制篇は恐らく別であらう。また「月令」は「周書」七十一篇中の第五十三篇で、呂不韋・淮南子等の本づくところで、呂不韋の作ではない。「樂記」は或は公孫尼子の作と云ひ（史記樂書正義・宋劉瓛）、或は子貢と云ひ（宋胡寅）、或は荀子とも云ふ（元何異孫）。「檀弓」は子游の門人（陳澔禮記集說引劉氏說）、「禮運」は子游（宋胡寅・黄震）、「仲尼閒居」は子夏の徒（黄震）、「坊記」「表記」二篇は子思の作と云ふ（陸德明）。その他の諸篇は其作者を詳かにしない（大學・中庸二篇はその項參照）。【成立】戰國時代——漢代初期。【由來】秦火の後、漢の武帝の代、魯の共王が孔子の舊宅を毀つて他の諸經と共に「禮記」を得、河間獻王も亦諸儒をして遺經を蒐集せしめてこれを得たと云ふ（漢書）。而して「漢書」藝文志には、記百三十一篇（六藝論）とあるが、共王・獻[illegible]二王の得た[illegible]たかは詳かで[illegible]の「六藝論」を[illegible]篇を得たと云[illegible]亦この說に從[illegible]には、「禮記」[illegible]「孔子三朝記」[illegible]二十三篇、都[illegible]記」の類は凡そ[illegible]典釋文」には[illegible]百四篇と云ふ[illegible]ことが出來な[illegible]及び徐生の二[illegible]

ず、專ら禮容を敎授し、高堂生は儀禮十七篇を以て敎授した。高堂生の學が敎傳して后倉（蒼）に至り、その門に、聞人通漢・戴德・戴聖・慶普の四人があり、後の三者は各々禮を以て家に名づけた。戴德を大戴、戴聖を小戴と云ふ。大戴は當時存在した「禮記」百三十一篇、「明堂陰陽」三十三篇等のうち八十五篇を擇んで禮を說き、これを「大戴禮記」と云ふ。小戴は更にその要を取つて四十九篇とし、これを「小戴禮記」と云ふ。即ち今の「禮記」である。今本の「大戴禮記」三十六篇は、八十五篇中「禮記」四十九篇を除いたもの。錢大昕の「漢書考異」には、「小戴禮記」の中、曲禮・檀弓・雜記は長篇であるために分つて上下としたので、實は四十六篇に過ぎず、これを大戴の八十五篇と合すれば、正に「漢書」の記百三十一篇の數に合ふと云ひ、甚だ巧な說の如くであるが、臆斷に過ぎぬ。又「隋書」經籍志に、戴聖本はもと四十六篇で、後漢の馬融が更に呂氏春秋月令・明堂位及び樂記の三篇を加へて四十九篇としたと云ひ、後人も亦往々これに左袒してゐるが（宋晁公武、明胡應麟等）、その誤であることは、先人の既に論じたところである（經典釋文序錄・四庫提要・戴東原等）。劉向等の「七略」及びこれに據つた「漢書」藝文志に、二戴の「禮記」を敎錄してゐないのは、二戴の記の取材が、所謂「禮」の記百三十一篇等の外に出なかつたがためであらう。【傳來】漢の宣帝の甘露三年（皇紀六一〇）詔して大小戴博士を立てた（「漢書」宣帝紀・儒林傳・藝文志）二戴の記は、各々取捨を異にし、自ら一家の學を成したが、後漢に入つて小戴の學が獨り盛んに、「大戴記」は漢代には一の註家もなく、後周の盧辯が註したのを嚆矢とする。かく二戴の學の盛衰が同じくないのは、その材料の取捨に優劣があつたからであらう。南北朝の學界には、鄭・王の二學が相對立して爭つたが、唐代に孔穎達等が勅を奉じて「五經正義」を撰ぶに當り、「小戴記」を取つて「大戴記」を用ひず、爾後「小戴禮記」は單に「禮記」と稱せられ、「大戴禮記」のみが異名を存することとなつた。孔穎達の「正義」は、鄭玄系の梁の皇侃の疏を本とし、周の熊安生の說を以て補つたもので、太宗がこれを天下に頒布して、學者の敎科書となさしめて以來、鄭註が獨り行はれ、王肅の註は遂に亡佚した。前述の如く「禮記」は元來普通名詞であつたものが變じて固有名詞になつたばかりでなく、「禮經」に對する記に過ぎなかつたものが、遂に上つて「禮經」の地位を占めるに至つたものであるが、もと七十子後、學者の筆に成つたものから取り、且つその篇次も小戴の定めたもので、後學の中にはその篇次を改め、或は改竄を加へんとした者もある。魏の孫炎の「禮記注」、唐の魏徵の「類禮」二十篇、元の吳澄の「禮記纂言」三十六卷等がこれである。【內容】本書の諸篇中には、「儀禮」の註釋と見るべきものが頗る多い。例へば冠儀は士冠禮、少儀は士相見禮、射義は鄕射禮及び大射禮、燕義は燕禮、聘義は聘禮、喪服小記・冠禮・大傳等は公食大夫禮・覲禮・喪禮等、喪大記・奔喪・檀弓・曾子問等は士喪禮・既夕禮・士虞禮等、或は祭義・祭統等は特牲饋食禮・少牢饋食禮・有司徹等の註脚として見るべきが如き、これである。その他の諸篇は上述の如く諸學者の雜記で、必ずしも正統の儒家思想のみではなく、戰國末期から漢初にかけて勃興した道家思想の混入した所も亦少くないので、これを儒家の經典として見る場合には、宜しく取捨する所がなければならぬ。今重要な諸篇の要旨を述ぶれば、曲禮・內則は童幼を主として一家の禮則を記し、王制・文王世子は封建の制度を記し、月令・明堂位・祭統等は祭祀その他の曲禮を記した年中行事の如く、學記は學を脩め敎を立つる事を記して、當時の敎育制度及び敎育法を察するに足り、禮器は禮の效果を、樂記は音樂の理論及び效用を述べ、經解・儒行は儒家發展の迹を記し、禮運は五帝三王以來の治法を引いて、文化發展の理法を敍べてゐる。（別に表章せられた「大學」及び「中庸」の二篇に就いては各々の項を參照）

【註釋書】禮記集說一百六十卷（宋衞湜）○禮記集說三十卷（元陳澔）○續禮記集說一百卷（淸杭世駿）

【參考書】禮書一百五十卷（宋陳祥道）○三禮義疏一百七十八卷（淸乾隆敕撰）○五禮通考二百六十二卷（淸秦蕙田）　〔宇野・本多〕

賴豪阿闍梨恠鼠傳（らいがうあじやりくわいそでん）　讀本　八卷十冊【作者】曲亭馬琴【畫工】葛飾北齋【名稱】題材の一部に賴豪說話を取つてゐるのに據つたものである。【刊行】文化五年【翻本】曲亭馬琴全集（野村銀次郎編）・馬琴傑作集（帝國文庫）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）等所收。【題材】三井寺の賴豪阿闍梨が皇子降誕の祈禱に成功し、戒壇を許されんことを朝廷に願つて聽かれず、怨靈鼠と化してこれを妨げ、延曆寺の經文を喰ひ破つたといふ傳說。これは夙く「源平盛衰記」「平家物語」に見えてゐるが、更にそれ等に軍記物語にある木曾義高や猫間中納言の事に基き、西行の猫の說話、晉の豫讓の故事、盲景淸の說話を配合して結構されたものである。

【梗概】源賴朝は、木曾義仲の勢盛んなるを怖れてゐたが、偶々一條忠賴の讒言により義仲の子義高を鎌倉に人質とした。義仲平家を討つて征夷大將軍を請ひ、容れられずして白河院の使者猫間中納言光隆を辱しめ、家臣竹川正忠を捕へた。光隆はこれを償ふに家寶の金の猫を以てして憤死する。かくて義仲は賴朝の軍に攻められ、粟津の一戰に石田爲久に討たれる。さて鎌倉に在つた義高も賴朝に討たれんとするが、大姬の情によつて危きを逃れ、粟津に父を弔ひ、曾て義仲が賴豪院の靈力を賴みて願文を奉つた緣により、賴豪阿闍梨から妖鼠の術を授かり、石田爲久を箱根に討つて父の仇を報い、なほも賴朝に復讐しようと圖る。こゝに猫間光實は兄光隆の復讐を志してゐたが、義仲が戰死したので、その子義高を討たんとし、由井ケ濱で義高と邂逅するが、その妖術に本意を遂げず、義高が鎌倉を狙ふこともあらうと秩父庄司重忠に身を寄せた。然るに重忠は大姬が深く義高を追慕するので、義高を赦つて大姬を配した。かくて義高は既に僞はつてこゝに在る乳母唐綾と謀し合せて賴朝の寢所に入るが、賴朝の手に渡つてゐた金の猫によりかの妖術は破れ、猫間光實とわたり合ふ。重忠二人をおし止めて訓戒し、義高には賴朝の狩衣を、光實には義仲の兜を與へた。狩衣には大姬、兜には唐綾の首があつた。大姬は孝と貞とに自害し、唐綾は事の成らざるを見て死んだのである。重忠の明智に服し、各々これを刺して豫讓の例にならひ、光實は猫間家を再興し、義高は目をくり拔いて粟津で行ひすました。

【構想】木曾義仲の子義高が源賴朝に對する復讐の企圖と、義仲に辱しめられて亡びた猫間光隆の弟光實の義高に對する復讐を中心としたもので、賴豪說話と猫間家の金の猫との

傳說の上に、猫と鼠との因果關係によつてその葛藤を描いてゐる。また義高・光實が、十分同情をもつて扱はれてゐるのは、史實をも不公平不滿足なものとし、靈怨が因果應報の理によつて嚴しく支配されてゐる人生に引直さうとする作者の見解によるものである。【史的地位】京傳と競爭的に活躍した時代のもので、文化三年に刊行された京傳の「昔話稻妻表紙」（別項）に用ひた題材に據り、又同年の刊行に係る京傳の「善知鳥安方忠義傳」（別項）の主人公木曾義高をもこれに移してゐる。而も京傳は賴豪說話を「本朝醉菩提」（別項）「濡燕子宿傘」（文化十一年）に用ひてゐるのを見ると、兩者の競爭心が見られる。この作は文化五年十一月大阪の大西の芝居に、「軍法富士見西行」の名題で興行された。當時流行した作品の一つであらう。【價値】事件の發展と變化に富み、首尾照應して巧妙を極めた趣向と云へる。とにかく說話構成上に非凡な能力が見られる。併しそれは、彼自ら趣向の苦心を門人鯉紫鏡叟の名によつて讀者に告げてゐるやうに、結構のための結構である嫌ひがある。又引用群書舉語の項を設けて、語彙の典據を擧げてゐるやうに、知識のための知識を誇つて、共に不自然さを增した觀がある。

【參考】曲亭馬琴集解題○馬琴傑作集解說　〔荻野〕

賴光跡目論（らいくわうあとめろん）　淨瑠璃　五段又は三段　時代物【名稱】序に綴られた源賴光の跡目爭論の條による。【作者】未詳【成立】寬文末か【諸本】延寶五年版井上播磨掾正本繪入十七行十三丁本が現存の最も古いものかと思はれるが、その初版は寬文末頃にはあつたらしい。これは新群書類從第五歌曲に收められた。別に三段に收めた（第三の序と二段を上卷、三・四段目を中卷、以下を下卷とし、三段目馬の段などを省き、多少語句の補訂等を加ふ）竹本筑後掾正本八行三十丁本がある。これは校註淨瑠璃稀本集（藤井博士編）所收。【題材】金平淨瑠璃の型を襲つたまでであるが、これより早い寬文三年版播磨掾正本「賴義金剛山合戰」に負ふ所が多く、部分的には謠曲「羅生門」や「融」などが加はつた。「鹽竈の段」はやはり播磨掾正本明曆四年刊「紅葉狩」から得たものである。【梗概】〔序段〕（賴光館）源賴光の病勢思はしからぬため、子息賴親を初め武藏守渡邊の綱・播磨守平井保昌・三河守坂田金時・遠江守碓井定光、駿河守卜部季武等の四天王と渡邊の弟三田の源太廣綱その他諸大名が詰めてゐる所へ、朝廷から跡目を奏上せよとの勅使が下つた。四天王は酒色に耽る賴親を排し、賴光の弟賴信にすべき意見に一致したが、廣綱獨り賴親方で、論爭となり、終に廣綱は諸國修行に名をかりて、髻を切つてその場を立ち去る。〔二段〕（賴親館）賴親はこれを耳にして、乳人杉田平八と語らひ反旗を翻して上洛する。（越前柚山）都からは、わうまう二年五月二十六日、坂田金時を將として五千餘騎を以て攻め上つたが、賴親方は頑強に戰ひ、その將二の瀨源六は都方の勇士七人まで首を落し八人目に出た大將金時のために首を拔かれた。〔三段〕（柚山）賴親方が崩れ立つや、平八は敎へて城に火を放ち落してやつた。金時は、これを豫知して逃したのであつた。（賴光館）凱陣の上、病氣の賴光の慰めにもと、櫻の馬場に於て將士の勇姿を見せる。（馬之段）賴光はこれを一々點檢する。〔四段〕（賴光館）典藥は賴光の病氣回復には心氣を晴らすやうにと申上げる。四天王が考へた末、渡邊綱の案で、鹽竈の景を見せる事となつた。この時、熊野の別當が賴親の賴光調伏の印を持つて訴へ出た。賴光は怒り泣いて、わが死後は必ず賴親の首を佛前に供へよと言ひ遺した。（紅葉の殿、鹽竈の段）賴光はこの殿にゐながら、鹽竈の景を樂しむ。美しい蜑少女の汐汲む風情の中に、しほじの翁がまじつて賴光の萬歲を祝つた。〔五段〕（賴光館）賴光は遂に五十四歲で歿したが、その初七日の通夜に當り、賴親は和泉の國吹井の浦で再擧をはかつた。（戰場）これに向つた四天王は、賴親の强弓に射すくめられる。金時が勇に逸つて立ち向ふのを抑へた綱は、謀つて賴親と組み、終に生捕つて都に上つた。

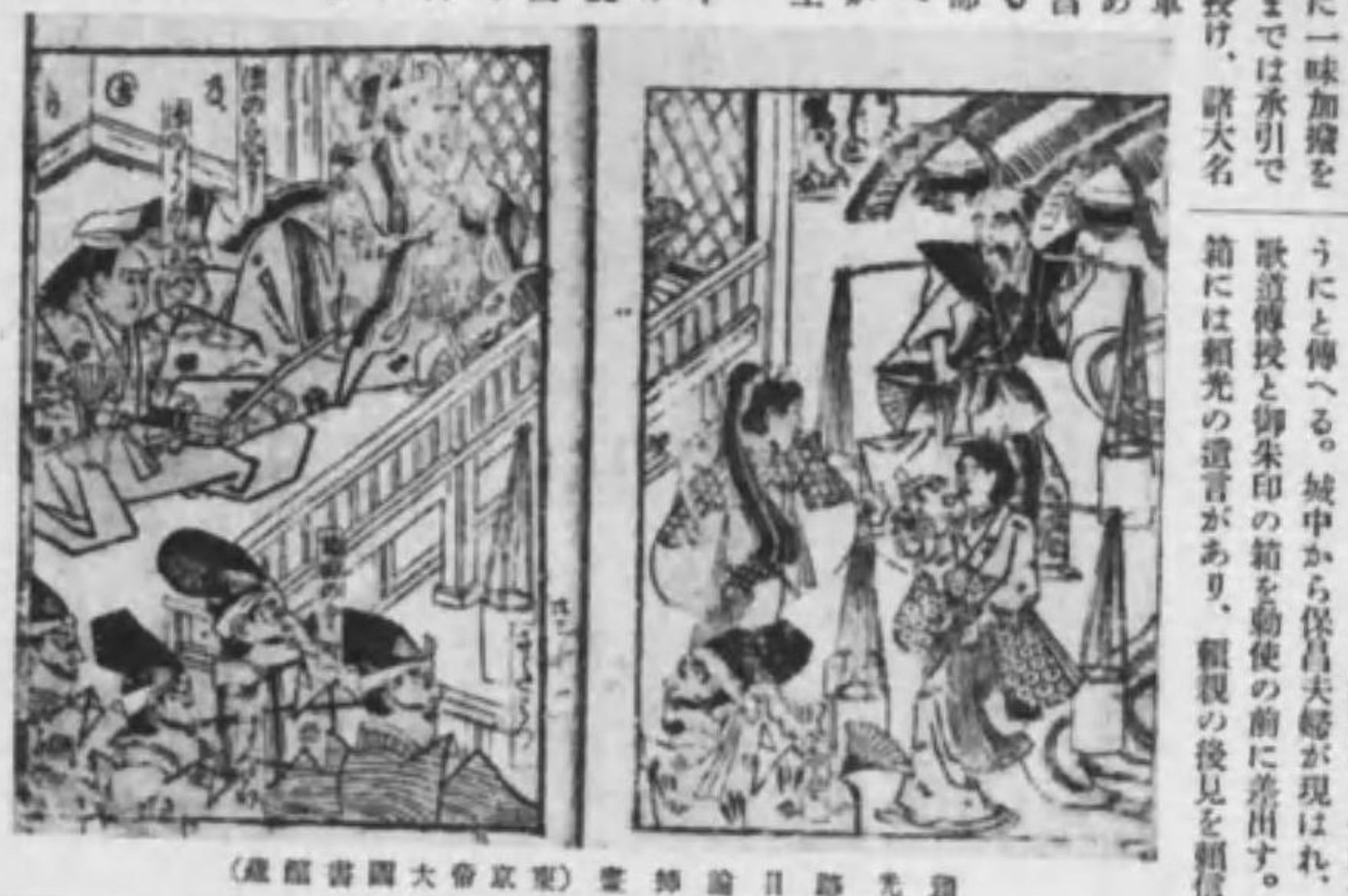
【解說】金平淨瑠璃（別項）の影響が上方に及んだ產物であるが、金平淨瑠璃としては相當人情も加味して後期に屬する脚色となる。但し金時が勇を代表し、綱が智を代表する所は、やはり金平淨瑠璃の型を襲つたものである。金平淨瑠璃としての見せ場は、二段目の越前柚山の場であらう。鹽竈之段は「紅葉狩」からとつたのであるが、挿入の筋としては「紅葉狩」よりも自然である。馬之段と鹽竈之段と節事を二箇所に入れたことが、やゝ煩瑣の感を與へぬでもないが、當時としては、播磨掾としての最も努力し、又成功した方面であるから、却つて舞臺の成功は想像せられるのである。播磨掾の淨瑠璃の效果は、節事の外に機巧によるのを特徵としてゐるが、本曲は後者にあまり力が注がれて居らぬ。而も場面の照應と所詞愁ひと修羅とを巧みに容れた音曲的成功とは、本作を以て彼の語り物中、傑作の一と推されると思ふ。鹽竈之段と馬之段とは彼の節事の代表となつた。又後者は「馬ぞろへ」として筑後掾によつて「古播磨風筑後丸」に收められた。本曲の流行は、改作と見られる「多田院開帳」（近松門左衞門作か、元祿八年三月、[illegible]）後編と見られる「文武五人男」（[illegible]、元祿中竹本座上演か）などを生じた。又改作の形式を追つた新作「賴光新跡目論」（別項）も[illegible]窺される。江戸歌舞伎の元祿中の傑作「源平雷傳記」（別項）も本曲に負ふ所が多い。

【參考】繪入淨瑠璃史（水谷不倒）○古淨瑠璃研究同上（日本文藝講座）○校註淨瑠璃稀本集解說（藤井乙男）　〔守隨〕

賴光新跡目論（らいくわうしんあとめろん）　淨瑠璃　五段　時代物【名稱】賴光跡目論による新作の義。【作者】紀海音【興行】寶永七年正月二日豐竹座興行（[illegible]）【諸本】七行八十一丁本・紀海音淨瑠璃集（[illegible]）所收。【題材】「賴光跡目論」（別項）に據つたものであるが、關ヶ原合戰を點化してゐる。賴光・賴親は秀吉・秀賴であり、賴信が家康である。松名兵左衞門は石田三成、龜島左近が島左近である。

【梗概】〔序〕（源賴光館）賴光の病篤しと聞いた弟賴信は、見舞として[illegible]が、賴光の[illegible]病中身近に仕へた松名兵左衞門が[illegible]勸める。坂田金時は[illegible]そこには三田[illegible]てゐる。兵左衞門は[illegible]賴親をして[illegible]の遺言であつた故と[illegible]。賴信等は兵左衞門の心事を訝かる。（松名兵左衞門下屋敷）賴親の後見役[illegible]訪ねて、乾先生の子主税之助が當代の軍事家故、一味に入れるやう進言する。恰もこの屈

敷に居る兵左衛門の愛妾初秋が主税之助の妹なので、初秋が兄を勸めに立つ。二人は軍用金を出して駈けつけた主税之助に一味加擔を說いた。主税は父の行方が分るまでは承引できぬと答へたが、義のため案を授け、諸大名の奥方を人質にすべしと敎へ、軍略家として妹聟佐々田半藏を勸めた上、自ら首を刎ねて死ぬ。（保昌館）叛逆と見せて丹波に籠城する保昌の留守館。保昌の妻和泉式部は、兵左衛門からの人質となるべき數度の迎へを斷つて思案の折から、屋敷の前に聞えた大峰山藏王權現の勸進行者を呼び入れると、行者は實は保昌に仕へる相川卒平次で、保昌の籠城は深慮あつての事と告げ、早く城中に行くやう說く。式部は喜んで家を去ると、後に兵左衛門からの迎へが來たので卒平次は切りまくる。〔二段〕（丹波口關所）鄙と都の境に設けられた關を守るのは、兵左衛門の命をうけた渡邊綱の弟廣綱。通りかゝつた式部を一應遮つたが、歌道の師とて終に許してしまふ。廣綱は武道を棄てんと髻を切つて諸國修行に出る。（丹波田邊城）保昌の籠城に對して、寄手の公時は敢て戰はず、日夜酒宴に耽る。保昌方から合戰を申込む。（馬ぞろへ）出陣に當り、保昌は櫓に出て武具に身を固めた諸侍の名乘りを聞く。折しも城外に寄手の鬨が響き渡る。卒平次も出たが、公時のため危くなつた時、勅使大納言定房と頼信が現はれて爭ひを靜め、保昌の籠城も叛逆ではあるまいとて和睦を勸める。又和泉式部には歌道のために危險な事をせぬやうにと傳へる。城中から保昌夫婦が現はれ、歌道傳授と御朱印の箱を勅使の前に差出す。箱には頼光の遺言があり、頼親の後見を頼信に依頼し、その息女やよ姫を頼親に配すべき事と、兵左衛門を懲戒すべき事とが記してあつた。〔三段〕（三十三間堂）大矢數の勝負が進む中、浪人佐々田半藏は八千本を超えた。その手詰の數矢の最中に、渡邊綱から急使が來て一挺の乘物が贈られた。中には三田の源太の妻となつた妹となせが、密通ゆゑの闇目の妻でゐる。半藏は綱の態度を怒ると共に、妹を斬り捨てんとしたが、となせは一言半藏の女房初花に恨みがあるといふ。（半藏浪宅）主税之助・初花・初秋の兄妹は、乾先生を父としたが、初秋の縁で初花の良人半藏は兵左衛門に味方したのであつた。母に自害を勸められ、初花が介錯に立つた時、となせは初花が妹の縁で、半藏を兵左衛門に一味させたのを恨み、父先生は頼信に訴へて自刄した由を告げ、その首を見せて實を問ふ。初花も兄主税之助の首を出し、この故に良人を誘つたのだと聞かす。初花がとなせと爭ふのを見た半藏は初花と母とに斬りつける。初花は不義を勸めた罪を詫び、母はわが遺品として頼信への味方を頼んだ爲め、半藏の意も遂に動く。〔四段〕（兵左衛門下屋敷）病態の初秋は、南面の樓に上つて、庭に造つた東海道五十三驛を眺める。「道行」初秋は東海道を下つて清見寺・江之島・品川口と歩き疲れて源廣を誘つて、とある待合の簾を滑つた。これを見た半藏は、思ふところあつて不義を許し、兩人を說得させ、源廣を改めて本名三田の源太と名乘らせた。源太の意は初秋をつれ出し、頼信方に走るにあつた。そして初秋と謀して今宵中に兵左衛門の寢首を搔かうとした。（兵左衛門上屋敷）兵左衛門はなほ源太を許かり、小姓萬三郎を伴つて臥所に入つた。夜更けて源太が初秋をつれて忍び込んだが、兵左衛門の羽織を被つた萬三郎に斬り付けた爲め、兵左衛門に逃げられて、合圖の太鼓を亂打された。（松原）松原で圍まれた二人に危險が迫つた時、半藏が駈けつけて敵を追ひ散らす。半藏の改心を聞いて悅んだ廣綱は初秋を彼に配はす。〔五段〕（青野が原）兵左衛門は數度の合戰に破れ、城を出て決戰を挑む。その臣幾島左近は廣綱に討たれる。都からは頼信が四天王を從へて下つた。深い霧の中を落ちようとした兵左衛門は、半藏のために生捕りになつた。


頼光跡目論挿畫（東京帝國大學圖書館藏）

【解說】原曲たる「跡目論」は、頼光の實子頼親の謀叛であつたが、本曲では家臣の松名兵左衛門が主君の病弱に乘じて遠謀を圖る事にかへた爲めに、脚色は相當複雜に描かれた。殊に兵左衛門の妾初秋の家を源家累代の家臣であつたとして兄妹を編へたのが、この脚色の生ずる所以となつたと思はれる。これによつて義理と恩愛の葛藤が生きて、三段目切の半藏浪宅の場は全曲の山となつた。和泉式部の現はれる事が奇異の感を與へぬでもないが、これも丹波舞鶴城外に於ける細川幽齋の古今傳授をきかせたものである。原曲に金時の勇力に對して綱が智謀を受け持つが、本曲には綱が働かず、保昌がこれに代つた觀がある。「馬揃へ」が跡目論によつたことは勿論であるが、「五十三驛」も「廢曲の段」を改めたものである。海音の作中、脚色の秀れた點に於て一代表と見られる。保昌留守館の相川卒平次は近松の「嫗山姥」の八重桐に安夢し、二段目序の丹波口關所は後年常磐津節の名曲「關の扉」（別項）を生み、和泉式部が小野小町となり、廣綱が關兵衛となつてゐる。〔守隨〕

頼光物の謠曲（らいくわうもののえうきよく）

源頼光主從の武勇傳說を取扱つた謠曲に、「大江山」「羅生門」及び「土蜘蛛」がある。【諸本】謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【大江山】五番目【作者】世阿彌（能本作者註文）とも、宮增（二百十番謠目錄）ともいふ。〔內容〕源頼光（ツレ）が丹波國大江山の鬼神退治を仰せつけられ、保昌・綱・公時・獨武者等（以上ワキヅレ）を引連れ、山伏姿をして大江山に行き、酒呑童子の住家に入つて、一夜の宿を求める。童子（前ジテ）は比叡山を出た時から出家には手をかけないと誓つてゐたので、穩かに一行を泊め、酒宴を開いて頼光等の山伏をもてなし、やがて寢所に入る。頼光等がその閨を開けて見ると、かの童子は二丈餘りの鬼神（後ジテ）となつてゐるので、頼光等は力を協せて遂に鬼神を討つたといふ曲。「大江山繪詞」（別項）に據つたものか。お伽草子の「酒顚童子」（別項）は謠曲以後のものでなからうか。二段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【羅生門】五番目【作者】觀世小次郎（能本作者註文・二百十番謠目錄）【名稱】「綱」ともいふ。【內容】大江山の鬼神退治以後、頼光（ツレ）の館に渡邊綱（前ワキ）・平井保昌（ワキヅレ）・坂田公時（同）等が常に參會してゐる。今日も一同集つて酒宴を催した席上、保昌が九條の羅生門に鬼神が住むといふ噂をすると、綱はさやうな事のあらう筈はないといひ、互に言ひ爭つた。結局綱はその實否を糺す事となつた。やがて渡邊綱（後ワキ）が支度を整へて羅生門に行くと、果して鬼神（シテ）がゐて綱に組んでかゝつたが、腕を斬り落されて虛空に逃げ上つたといふ曲。「平家物語」（別項）劍卷に據つた。二段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【土蜘蛛】五番目【作者】未詳【內容】源頼光（ツレ）が病床に就いてゐる所へ、侍女胡蝶（ツレ）が藥を持つて見舞に來ると、その後より僧形の者（前ジテ）が現はれ、千筋の糸を出して頼光の五體をつゞめようとしたが、頼光が膝丸を拔いてこれを斬ると、形が消えてしまつた。この時の聲を聞いて、獨武者（前ワキ）が馳けつけ、頼光から今の次第を聞き、血のあとを辿つて化生の者を退治することとなつた。やがて獨武者（後ワキ）は從者（立衆）を伴へて葛城山土蜘蛛の栖家に着いた。土蜘蛛（後ジテ）は、絲を投げかけ投げかけて獨武者に對抗したが、遂に亡ぼされたといふ曲。「平家物語」劍卷に據つた。二段劇能。五流現行。

【構想】謠曲に描かれた源平時代の武士は、大抵敗軍失意のものであるが、古武士については武勇傳說をとつてゐる。しかもその武勇は超人間の鬼神・化生の者に對するものである。上揭三曲が卽ちその好例である。三曲いづれも鬼畜を退治する結末には變りがないが、その動機が、一は敕命により、二は武士の口論より始まり、三は主君の救急から出てゐる。そしてその鬼畜の態が、一は童子、二は鬼形、三は蜘蛛の姿をしてゐて、三種三樣の趣を出してゐるのである。いづれも後の文藝に影響を與へたが、「羅生門」が最も大きいであらう。

【參考】謠曲評釋大和田建樹 ○謠曲大觀佐成謙太郞〔佐成〕

來山（らいざん）

大阪

俳人【姓名】小西氏。通稱伊右衛門【號】初號滿平、十萬堂・湛々翁・湛翁・宗無（居士號か）【法號】道法【生歿】承應三年生れ、享保元年（一七一六）十月三日歿す。享年六十三。【辭世】「我は只生れた咎で死ぬるなりそれでなごりも何もかもなし」。生前「辭世」と題した歌「よしやよし身は夕暮のもどり馬月を目あてに一筋の道」【墓所】大阪惠比壽町海泉寺及び上の町一心寺【俳系】前川由平門。後、西山宗因門。【閱歷】父は大阪平野町の藥種商で小西六左衛門（法名道秋）と云ふ。來山は七歳の春、由平に入門して滿平と號し、十八歳にして立机して宗匠となつた。性甚だ酒を愛し、生涯醒めた日がない程であつたといふ。延寶七年二十六歳の時、黃檗の悅山和尙に初めて參禪したものらしく、翌八年悅山にあやかつて來山と改號した。これは西方十萬億土の語に據つたものらしい。西鶴の生玉本覺寺に於ける再度の大矢數に由平等と並んで指合見の役人に加はつたのもこの年である。父は寬文二年九歳の時に歿し、後は母（法名理性）に仕へて至孝であつた。大淀三千風（別項）の行脚を羨しく思つたが、一人の母があるので遠く遊ぶことは出來なかつた。その母は元祿十四年七月に歿した。來山は母に別れて後、大際に及ばぬ時は夢に見ぬ事はないと歎いてゐる。寶永三年には弟（法名淨休）を失ひ、同四年八月妻（法名妙信）に亡くなられた。「女人形の記」はその頃の作であらう。のち後妻（法名貞林）を迎へ、一子（法名淨春童子）を擧げたが、その喜びも束の間で、正德二年正月夭折して了つた。その時「春の夢氣の違はぬが恨めしい」の著名な吟があつた。正德四年以後今宮村に隱棲し、悅山和尙に十萬堂の額の揮毫を乞ひ、これを庵に揭げた。來山は鬼貫（別項）と最も親しく、常に俳作を共にしてゐた。鬼貫は來山が母や妻を失つた時もこれを哀悼し、來山が後妻に一男を儲けた時はこれを壽いだ。鬼貫の來山追悼（七事）、文十の來山追善集「遠千鳥」の鬼貫の序、井上布門の來山追善集「俳諧たつか弓」の鬼貫の跋、同じく布門の來山追善集「俳諧葉久母里」の鬼貫の追悼吟等を見ても、二人の交情の如何に濃かであつたかが解る。來山は一生維摩の靈像を愛し、その風丰も維摩に酷似してゐたといふ。その子孫は今宮に住し、その男一來が十萬堂二世を相續し、一來の子什來同三世を繼ぎ、什來の子什山同四世を繼ぎ、代々農を業とすること八世、明治に及んだ。【著作】大福壽覺帳 ○俳諧誕生日 ○今宮草（別項）古道・長江・尙七編 ○續今宮草小西什山編 ○俳諧五子稿（別項）石原五晴編

來山像（大阪 尙田讓一郎氏藏）

【人物・作風】悅山に參禪しただけに、人物も飄逸洒脫な所があつた。志水盤谷の「來山記」に叙する大阪大文字屋に於ける酒興の叙述の如きは、來山の面目の躍如たるものがある。俳諧は談林系統であつたが、談林の遺化駄洒落に墮ちず、鬼貫の誠とも通じ、芭蕉の寂とも一脈相通ふ所のある作風であつた。芭蕉とほぼ同じ時代に、蕉風に近い作風を取つた一人として注目すべき俳人である。

【參考】木葉駒（一周忌追善集）蒲得舟孝天 ○遠千鳥（一周忌追善集）高橋文十 ○三回忌追善集（編者不明）中西一醒 ○俳諧たつか弓（十三回忌追善集）井上布門 ○俳諧葉久母里（十七回忌追善集）同上 ○時雨集（八十回忌追善集）浪華風鳥堂 ○

來山墨蹟

花見車高島轍士〇桑梓於柞来山記幸水観谷〇七車上島鬼貫　〇誹諧反故集草川文石　〇はいかい袋大伴大江丸〇俳家奇人談竹内玄々一〇誹家大系圖今川春明〇来山に就いて島道素石（古俳書文庫正讃今宮草）〇来山の母の死松木竭里（句と評論昭和六ノ一二）〇来山と俳諧同上（同上昭和七ノ四・一〇）〇浪華俳壇に於ける小西来山の位置同上（同上昭和六・七）〇来山忌に就きて水落露石（趣味彦性集）　〔志田・新屋〕

禮紙（らいし）　古文書【解說】文書の文言を書いた料紙を卷く紙。また點紙とも云ふ。その上に更に上書きを書く懸紙（表卷）（別項）を懸けるのである。「大館常興書札抄」に、「又進上書・謹上書には、白紙一枚にて上を卷て、其上を立ぶみにする也、此白紙を禮紙と申なり、」とある如く、文書の宛名の上に進上や謹上等の敬意を表する語を付ける場合等に用ひられる。畢竟先方に對する儀禮的のものである。「貴嶺問答」や「今川了俊書札禮」などには、先方の返書用とするためのものであるとも書いてある。「書札禮」に據れば、禮紙に七紙禮・五紙禮・三紙禮の別がある。これに就いては、便宜上「貞丈雜記」の記事を左に引用する。

一、昔狀にらいしと云は、文字を書積したる白き所をらいしと云ふ人あり、あやまり也、らいしとは禮紙と書て、狀の上を白紙にて卷く事也、扨其上を上卷とて別の紙にて包て、宛所を書く也、是ひねり文の事也、諸文にもらいし有也、書札御々關有に云、禮紙にて存之は、立文は杉原一枚に書て、其上一枚禮紙、扨上卷橫に卷て、上下をひねり候也、又こし文の禮紙は、三ツ一ツほど切て卷て、扨上卷たるべく候云々、（三ツ一ツ卦禮紙、三ツ二ツ卦禮紙、）

一、禮紙に七紙禮・五紙禮・三紙禮と云ふ有、

〇七紙禮と云は、紙三枚重て狀を書き、禮紙二枚、表卷二枚也、陽儀の禮也、又我花悉葉に云、晴禮以二枚重書之、以二枚爲禮紙、其文又加禮紙一枚、以二枚爲立紙、初度などは如此嚴重可然云々、いずれも都合七枚也、

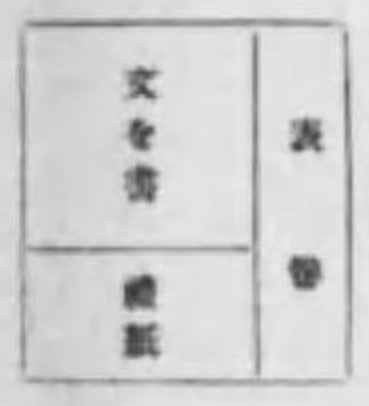
〇五紙禮と云は、狀一重に書、二枚禮紙、禮紙一枚に卷て、表卷一重、二枚都合紙五枚を用也、是は陽儀にあらず、其次なり、儀の禮なり。

〇三紙禮と云は、狀一枚に書て、禮紙一枚に卷て、表卷も一枚を橫に折て卷く也、都合三枚也、是は通例なり、

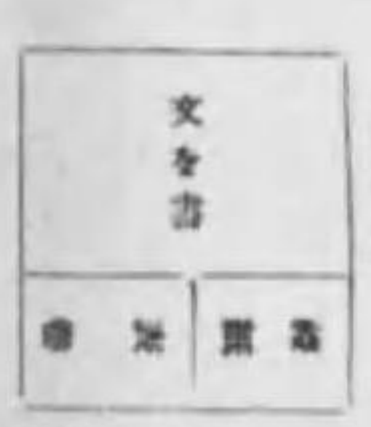
一、四紙禮と云は、狀一重、二枚禮紙一枚、表卷一枚也といふ說あり、この名目古書に見えず、用べからず、

右の文中にある四紙禮の外に、六紙禮といふ名稱を舉げたものもある。何れにせよ、禮紙を付ける場合は、大抵竪文（捻封と切封とがある）であるが、小文の禮紙とて、切紙の場合もある。同じく「貞丈雜記」に說明がある。

一、小文の禮紙と云事、一紙三紙の禮とも云、鳥の子又は杉原を三ツに切り調也、鳥の子の時は、竪紙を三ツに捻り、一ツ分切放し、殘二ツ分を橫に疊み、一ツ分切放し、殘り二ツ分に文言を書く也、一ツ分禮紙にして卷き、右の竪紙にて表卷する也、杉原の時は、一枚橫に三ツに捻り、一ツ分切放して二ツに切り、禮紙・表卷に用ひ、二ツ分へ狀を書く也、上下を捻る事、紙よりにて結ぶ事、宛所以下上中下、常の竪文に同じ、紙の切樣、左の繪圖の如し、一枚紙を三ツに切て用るゆへ、一紙三紙の禮紙といふなり、



鳥の子の時は如此切る也、



杉原の時は如此切る也、

一、小文の事、鳥の子にても、杉原にても、半切にして調へ、殘る半分を上卷に用る也、杉原の時は、文を書く分廣く、禮紙の分狹く切べし、半分に切ては、狀のたけ短くなる故也、上卷になる方は狹くても能也、」

禮紙には普通文言を書かぬ例であるが、時に本文の餘意などを記すことがある。これを禮紙書或は禮紙狀と云ふのである。「消息耳底秘抄」に、「一、禮紙端書事　禮紙ノ端書ヘ、追言上、追上啓ト書ヘ、主・父・師匠・所知ノ領主ニ此ヲ可書、其他ヘ追申、追啓、如此書也、禮紙ノ書止ニ恐惶謹言不書也、」とある如く、禮紙書はまた「追申」「追啓」等で始まる簡單なものが多い。「玉葉」文治元年十二月二十七日の條及び「吾妻鏡」文治二年四月三十日の條に見えたる源賴朝の禮紙狀の如きは、その例である。なほ「平家物語」三の卷、あしずりの事の條には、「きかいが島の流人、少將成經・やすより法師、しやめんとばかりかゝれて、しゆんくわんといふ文字はなし、らいしにぞ有らんとて、らいしを見るにもみえず、おくよりはしへよみ、はしよりおくへよみけれども、二人とばかりかゝれて、三人とはかゝれず、」と見えてゐる。　〔伊木〕

來川（らいせん）「移竹」を見よ。

雷電（らいでん）「古傳說物の謠曲」を見よ。

禮服着用圖（らいふくちやくようづ）　有職　一卷【著者】未詳【成立】帝國圖書館藏本に、「右禮服着用之事、近代大略如此、至其詳則俟後考者也、寛政元年仲六月、山城藤原以文」とある。或は山田以文の著であらうか。【諸本】故實叢書第三輯所收。【內容】典儀・內辨・外辨・親王代・擬侍從・大將代・次將代・主殿・圖書・贊者・門部等の禮服を着用した彩色圖十四を集めたもので、圖中簡單なる解說を施してある。　〔石村〕

落語（らくご）　演藝【名稱】古くは輕口、後には「おとしばなし」と呼び、落語（おとしばなし）から落語と音讀せられるに至つたものであらう。江戸時代に於ては、落語と書かれたものは極めて稀で、噺本（別項）の「新作落語德治傳」（天明七年）が最も古く、「新作落語比文谷噺」（寛政元年）、或は「節季夜行」「新米牽頭持」「極酒閉上手」などには、角書に落語と記してゐる。而してその後の物には、又殆ど落語の文字を用ひてゐない位である。三馬の「浮世風呂」（別項）に、「一夕歌川豐國のやとりにて三笑亭可樂が落語を聞く」とある落語にも、「おとしばなし」と傍訓をしてゐる。故に一般には、「おとしばなし」「むかしばなし」「今昔物語」などと言はれ、音讀で讀むに至つたのは、恐らく明治以後のことかと思はれる。「おとしばなし」は、「おち」「さげ」のある話の意である。

【沿革】落語は必ず聽者を目前に置いて口演すべきもので、口演者は話術家として職業的な意味を持つて來る。勿論初期に於ては大名などの徒然を慰むるもの、或は同好の士の倶樂部の如きものであつたとも考へられるが、落語としての存在の意義は、街の話術家として大衆を對手にする事によつて確立する。笑を愛する日本人、殊に織豐時代の戰亂のために笑を失つた民衆が、漸く江戸時代に入つて笑を求めたのは必然の情勢であつた。未だ大衆に呼びかけるには至らなかつたが、安樂庵策傳（別項）が諸侯の門に入り、滑稽談を試みた點は職業的落語家に先鞭をつけたものと言ひ得る。「醒睡笑」（別項）は實に彼が板倉周防守の前で口演した落語の話稿であつた。併し落語を純然たる大衆の物として街頭に進出せしめたものは、元祿期を中心に、京都に於ける露ノ五郎兵衞（別項）と江戸に於ける鹿野武左衞門（別項）とであつた。露ノ五郎兵衞は延寶・天和の頃旣に辻噺の祖と仰がれ、都の名物入道露休と稱せられて、夏の夕凉の頃は、四條の河原に、北野の境內に、祇園眞葛ヶ原に、滿都の士女の頤を解いたのであつた。鹿野武左衞門も時を同じうして江戸の中橋廣小路の見世場で、葭張りの小屋を設け、木戸六文を取つて口演し、又座敷仕形話をも工夫した。この兩巨人の出現が、やがて落語と云ふ職業を完全に確立し、民衆生活の娯樂機關としての意味をも形造つた。併しその後の落語界は衰靡して振はなかつたが、烏亭焉馬（別項）の出現によつて、玆に再び落語の隆昌を來し、落語中興の祖と仰がれた。焉馬は創作の才もあり、當時の文人墨客との交友も頗る多かつたので、彼が最初の公演（天明四年四月廿五日柳橋の河內屋）にも、向島の武藏屋の落し噺の會（天明六年四月十二日）にも、有名な文人騷客の顏觸れが見られた。この頃は職業的落語家でない文人達も盛んに噺本（別項）を執筆し、極めて氣の利いたユーモアの溢れた所謂天明調の小咄を書き、噺本に於ける黃金時代を現出した。かゝる狀態であつたから落語會も各所に開かれ、頗る盛會であつたが、寬政九年十月に至つて北町奉行小田切土佐守から、落語は風教上面白くないといふ理由で斷然禁止され、文化十二年にも禁止令が下つたけれども、益々盛んとなり、已むなく文化十三年二月六日には、成るべく昔物語で、忠孝の道を述べるといふ條件附で解除となつた。この著しい風潮は遂に純然たる寄席を生むに至つた。卽ち從來の如く料亭の廣間を借りたり、辻講釋といふ事でなく、一定の營業場所が現出したのである。寛政十年六月、神田豐島町家居で、大阪上りの岡本萬作が頓作輕口噺の看板で寄席を開いたのが嚆矢である。これ以來焉馬の二代目・三代目は落語家とならなかつたが、門弟中に錚々たるものがあつて、落語は益々繁榮を極め、漸く長話が喜ばれるに至つた。石井宗叔（別項）は長話の祖と云はれ、二代目宗叔は人情噺を始め、三笑亭可樂（別項）は三題噺を始めて喝采を博した。可樂の門下からは、朝寢坊むらく（別項）や三遊派の元祖たる三遊亭圓生（別項）、怪談噺の祖の林屋正藏（別項）等幾多の名人を出した。一方、圓生等の三遊派に對し、船遊亭扇橋（別項）の系統たる柳派が起り、音曲噺等で大に氣勢を舉げ、落語界は全盛を極めた。併し水野越前守の奢侈取締令の餘波は落語界にも及んで、漸く沈滯を來し、僅かに三遊亭圓朝（別項）の出づるに及んで掉尾を飾つた。彼は芝居噺に、人情噺に、往くとして可ならざるなく、門弟からも幾多の名人を出した。柳派の重鎭柳亭燕枝が出づるに及び、兩々相對して明治時代の落語界を賑はした。明治三十八年三月二十一日、日本橋の常磐木俱樂部で第一聲をあげた落語研究會は、當時の三遊亭圓喬・三遊亭圓右・橘家圓藏・三遊亭小圓朝・柳家小さん・三遊亭圓左等六名の發起で、岡鬼太郎・今村次郎・石谷華堤等が顧問となり、本格的の落語を傳へるといふことを目的とした。そして大正十二年八月まで十九年間、二百餘回に亙つて繼續され、震災で中絕したが、昭和三年三月に再興し、每月一回神田立花亭で開催して今日に至つてゐる。現在の圓生・小さん・可樂・小圓朝・圓藏なども、研究會の若手から今日の名を成したのである。併し現今の落語界は、映畫・レビュー等の出現のため、昔日の人氣なく、加ふるに新形式の落語ともいふべき漫談などの流行によつて、次第に衰微の一路を辿つてゐる。

【內容】新作を除き、古い落語として高座にかかるもののみを見ても三百に近いが、殆ど類型的なものである。中には現代化されたものや或は東京と大阪とにより、或は演者によつてやゝ內容を異にする場合もある。小咄を語つた時代から長話に移るにつれ、內容も複雜化し、構想も脚色されては來るが、落語のをかし味は、事件の推移變化よりも、演者の口頭に上る人物の言動によつて生ずる場合が甚だ多い。落語に現はれる人物は或は誇張され、或は常軌を逸した人間に限る。「將棋の殿樣」「粗忽の使者」「松引き」「たがや」等に見える武士とても、この範圍內にある。併しこの種の人物は町人の獨壇場と云つても差支へなく、就中熊公・八公等の粗忽者であり、無筆者であり、飲酒好色家であり、性格的に見ても多くの缺陷を持つものである。從つてそこに失敗が繰返され、その言動がすべてをかし味を持つて來る。次いで「小言幸兵衞」「法華長屋」の大家の如き、凝り過ぎた口喧し屋・ひねり屋・しわい屋・强情屋などの人物となつて來る。趣味に凝り固まつては、「碁どろ」「寢床」の主人公となる。また矛盾によるをかし味も落語に多く、當然强かるべき盜賊が却つて弱い。「夏どろ」や、「けんつく床」「二十四孝」など、主客顚倒の滑稽がある。かく落語にあらはれる人物には、常人と可なり相距つた雜多な人物が多く、「名作落語全集」（昭和四年、騷人社）に開運長者篇・頓智頓才篇・探偵白波篇・芝居音曲篇・滑稽道中篇・戀愛人情篇・劍俠武勇篇・變人奇人篇・疎忽者と與太郎篇・洒呑居候篇・花柳廓噺篇と分類してゐるが、これとても完全な分類とは言ひ難い。　〔以上小島〕

【落語と落し話】落語はその名稱それ自身が旣に頓狂で、又たわいもない近世の新作であつたが、今日となつてはこの語以上に、日本の話術の變遷を明白ならしめる史料はないのである。落語は勿論、「落し話」の素人藝に對して、話を職業とする者の技術を區別した語ではあるが、その名の新しい割には、實質は意外に早くからあつたらしく、しかも一方には「落し話」といふ名稱も、さう古いものではなかつたのである。話には必ず「落ち」を要すといふ約束は、或はもと初期の專門家の群の間に發生し、後に民間の文藝がこれを踏襲することになつたのかと思はれる。といふわけは「落し話」の方は通例斷片的であり、これに伴ふ細部の技術の、素人に摸倣し難いものを取殘した形跡があるからで、やゝ比倫を失したたとへではあるが、この點は幾分か神話と傳說（各別項）との關係に似てゐる。話を職業とする者には「咄の者」、又は「御伽の衆」なるものが夙くからあつて、彼等はまた「落ち」に該當するものを肝要としてゐたのである。元祿七年に出た「正直咄大鑑」卷四に、「それ咄は一が落ち、二が綺說、三がしかた、殊に當世は古への曾呂利などの噺の風俗とはかはりて、輕口にをかしくしどけなく、まづ落ちが惡うては卑たやうできやしや也、理をつめ下つまらぬ云々」ともあつて、旣にそれ以前から「落ち」のあるものだけがハナシであるかの如く考へられてゐたのである。事によると我々の昔語りを昔話（別項）と云ふやうになつたの

は、却つて後の人がこれに準じたものかも知れぬ。「落ち」が笑ひをただ一つの目的としてゐたことは、今も前代も異なるところはなかつた。さうすると大名や富貴の者に、笑ひを獻じて生計を立ててゐた者が、他の種類の笑はせ方は古臭くなり易く、また時としてくすぐりの嫌ひがあるので、專らその力を頓作の意外に傾け注がうとした動機も察せられるのである。生眞面目で想像力のやゝ鈍い人たちを笑はせるには、「落ち」とか「下げ」とかいふ全く豫測しない話題を持つて來て、突兀として今までの別の話と結び付けるのが效果的であつた。それが俳諧といふ應接技術が、次第に記錄文藝の中まで入り込んだ理由に外ならぬ。併し御伽には元來時をつぶすといふ他の一つの要件があつた。單に最後の滑稽なる「落ち」をたよりに、默つて長い話を聽いてゐようとする者は少かつた。それ故に更に第二第三の笑はせ方、たとへば輕口・秀句やしかた・物眞似等を交へ用ひて、始終華やかに座を持つ必要があつたわけである。當世の落語家なるものは、この中世の同朋たちの技藝、それから轉化した所謂太鼓持などの任務を、ほぼ以前の型通りに演出してゐる。ただ昔と異なるのは、その物々しい名稱以外に幾分か輕口・秀句の採集範圍を擴めたといふことと、極度に練習を重んじて粉本の拘束の外に出ようとしなかつたこと、及び社會事情の變化のために、旦那がただ一人の、我儘大名などでなくなつて、廣く錢を持つて聽きに來る一般の公衆であつたことである。「落し話」といふ一種の民間說話は、その名稱としては「落語」よりも先だが、實際は新たなる應用に過ぎなかつた。ちやうど村々の臼唄踊唄が、弄齋・隆達（各別項）等の遊び坊主の新作を取入れたやうに、笑話の流行が次第に「話の種」の缺乏を感ぜしめた結果、機會ある毎にこれを「咄の者」の遠くから運んで來たものから補充したのである。都會の需要が追々とこの座敷の藝人を分業させたに反して、田舍では咄の運搬だけでは生活し難かつた爲めに、大抵は昔のまゝの兼業の者があるいてゐたが、その中でも殊によく旅行をしたのは、下級の巫女であり座頭であつた。笑話は大部分盲人がこれを運び、又往々にして自身これを新作してゐる。按摩といふ近世の職業に携はる盲人が、話の上手であつた理由は、彼等は即ち笑ひ話の行商でもあつたからである。〔以上柳田（國）〕

落柿舍（らくししや）　「去來」「嵯峨日記」を見よ。

落柿舍日記（らくししやにつき）　俳諧集　唐本型一册【編者】井上重厚【刊行】安永三年【諸本】近世俳諧名家集（俳書大系）所收。【由來】重厚及び規慶の序によれば、去來の落柿舍は去來生存中に取拂はれたのであるが、重厚は去來にゆかりあればその再興を圖り、「明和のはじめ菊亭殿に參りて、ことの序そのよし申上げるに、いにしへをしたふ心を哀れと聞し召上給ひて、御庭の額掛一字を下し賜ひ、又むかし落柿舍に額を給ひける故內府公の舊例を思召出給ひて、落柿舍の三字を染筆し下されし」たので、北嵯峨小倉山の麓山本村なる弘源寺の址といふ所を相して落柿舍を再興し、去來の「柿ぬしや梢はちかきあらし山」の發句を石に彫つて庭中に建てた。然るに出羽の規慶といふ俳人が、落柿舍の舊址に建碑すべき希望を以て上京し、岡崎の蝶夢法師から重厚建碑の二年後であることを聞き、重厚に集を作るべき事を勸めて刊行したのが本書である。【內容】卷頭に重厚の自序、規慶の序があり、次に越前敦賀の白崎琴路がその家に傳來し、この度再興記念として寄贈して來た去來眞蹟の落柿舍記（「風俗文選」所載のものとは文字に多少の出入がある）、重厚が菊亭殿から賜はつた額の同公染筆の落柿舍の三字の摹刻、長崎聖堂の祭酒向井元仲（去來の姪魯町の子）から、再興記念として寄贈された「柿ぬしや」の句の去來眞蹟の短册の摹刻があつて、それから本文として、初めに「於落柿舍古人發句」と標題して、芭蕉の句十一句、其角・嵐雪等四十一家の句五十五句、去來の句十二句、都合七十八句の發句があり、次に落柿舍に因みある歌仙六卷（中に表六句のもの一卷ある）があり、終りに去來の忌日九月十日に再興落柿舍に於て興行された重厚・規慶・蝶夢・用舟・五東・鯉風・瓦全七吟歌仙の「去來忌懷舊之俳諧」一卷が添加されてゐる。本書はかくの如く日記とは云ふが實は俳諧集といふべきものである。併し兎に角本書は、落柿舍に於て乃至落柿舍を詠んだ落柿舍關係の元祿時代の發句連句を殆ど網羅したものであるから、落柿舍及び去來の研究資料としては便利なものである。（笹川）

落書（らくしよ）　「吟頌」を見よ。

落書（らくしよ）　【異稱】おとしぶみ・落首【性質】政治・軍法等を批判し、又は個人の言行を諷諫する目的を以て、匿名の文書・詩歌の類を作り、これを門壁に張り、又は途上に落し置きて人に拾はせたもの。後には專ら狂歌の形が多く用ひられたので、狂歌の元祖は落書であると云ふ一說さへ出るに至つた。【沿革】落書は南北兩朝の頃より行はれたもので、「太平記」に楠正成の首を六條川原に懸けた時「疑ひは人によりてぞ殘りけるまさしげなるは楠が首」といふ落書を札に書いて建てたといふ事が出てゐる。室町時代以後、世々の軍記物語には落書又は落首として掲げられた諷詠が少からず存し、寶永年間には「寶永落書」といふものさへ發行せられた。近古の落書はかくの如く批評的・諷刺的のものであり、又その滑稽的のものも比較的品位を具へてゐたが、德川時代のものになつていたく墮落し、人の秘密を發き弱點を捉へて、冷笑惡罵の種とするに至つた。なほ幕末には遊戲文學者の間に惡摺といふものが行はれ、惡摺作者の評判記等が刊行せられたが、これも亦一種の落書といふべきであらう。（野崎）

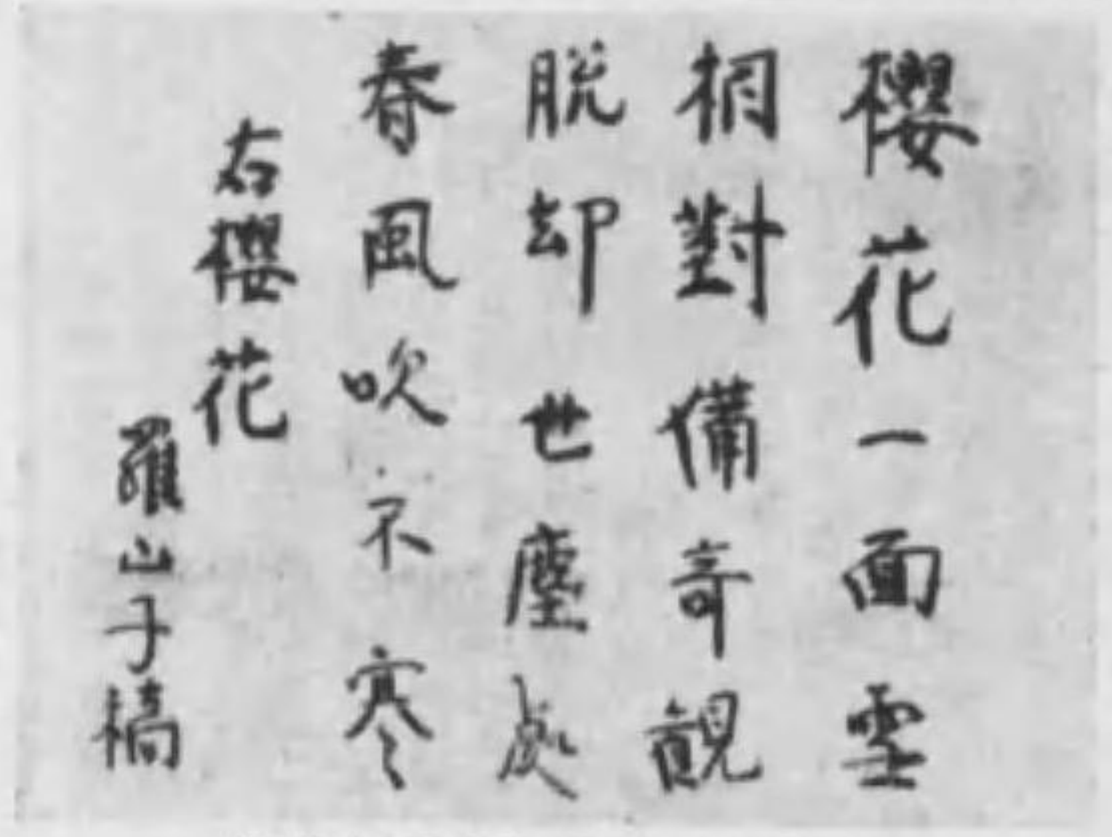
落書露顯（らくしよろけん）　歌論連歌論　一卷【著者】今川了俊【成立】應永二十四年【諸本】彰考館に藏本がある。群書類從和歌部にも收めてゐる。【由來】當時二條派（別項）の歌が盛んで、頓阿の「草庵集」（別項）を規範とし、反對の立場にあつた冷泉黃門爲尹の歌風が想の自由を旨とするを誹るのを見て、世の蒙を啓かうと志し、初め「落書記」といふ一書を匿名で著はしたが、遂に思ひ切つて自著の銘を打ち、且つ當時邪路に入つてゐた連歌の風體を、良基（別項）の敎に基いて正に復さうとして著はしたものである。【內容】幽玄體及び「草庵集」の批評、歌も連歌も立所に據るべき事、當代の連歌の批評、連歌會の事、救濟・周阿の句風、歌連歌・連歌歌、同類、歌の詠體、連歌の句數、枕言、竹園抄、短册のこと等が論述されてゐる。（福井）

落梅集（らくばいしふ）　詩文集【著者】島崎藤村【刊行】明治三十四年八月、春陽堂。【解說】著者の第四詩集。美文、「雲」「利根川だより」「七曜のすさび」。詩、二十四篇三十七首。「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情の歌」等を佳品とする。「勞働雜詠」は詩集「夏草」の「農夫」の展開である。外に「雅言と詩歌」といふ小論文一篇を附してある。著者はさきの處女詩集以後、特に詩的精進の鮮かなるものを示さなかつたのであるが、本集に於ては再びその進境を示し、美文も亦「七曜のすさび」に麻鄕のひびきを傳へた。が、七五・五七調によるこの種の青春詩は、全くその詩型の極致を示したので、この以後は徒らに再說するのでなければ、他への轉向があるのみである。彼はこゝに於て小說に一轉した。その志向は早く三十年の頃に現はれ、明治三十年十一月號「新小說」所載の小說「うたゝね」の「はしがき」に、その片鱗が現はれる。（日夏）

洛陽田樂記（らくやうでんがくき）　漢文記錄【作者】大江匡房【成立】文中に、「義粹を翫ずして遂に以て崩御云云」とあるのは、永長元年八月七日郁芳門院媞子內親王の崩御をさし、又「御葬送の事云云」とあるのは、八月十六日である。故にこの書は、その年八・九月頃に記したものであらう。【諸本】群書類從卷三六三・朝野群載卷三所收。【解說】堀河帝の永長元年（一七五六）夏、京都の上下に田樂の流行したことを記したものである。「中右記」や「醍醐雜事記」にもその事が見えてゐる。最初は田舍から起つて次第に公卿にも及んだ。同年七月十二日には、淸涼殿の南庭に張行せしめられ、上皇は六條殿に於てこれを觀給うた。又その翌日には侍臣の田樂をも見給うた。同十九日には郁芳門院は北の陣、即ち朔平門の陣に御して殿上人の田樂を見られた。即ち夏から秋にかけて田樂が盛んであつたのである。この記の中には惟宗孝言の如き老人を初め、季綱・敦基・在良・通俊・宗通等も熱中したことが記されてゐる。田樂の資料として必ず參考すべきものである。（山根）

蘿月庵國書漫抄（らげつあんこくしよまんせう）　隨筆　七卷【著者】尾崎雅嘉【諸本】隨筆文學選集第五卷所收。【解說】蘿月庵は著者の號。編者が多くの國書閱覽の際、その中から會心の條節を拔鈔したもので、長短詳略さまざまの考說集となつた。卷一に小野道風佛冠服考以下九條、卷二に慶佛一如之圖以下八條、卷三に小栗小次郎遊女てる姫の事以下五十九條、卷四に夜御殿以下二十二條、卷五に八所の御靈以下八十七條、卷六に物の數以下二十六條、卷七に筑紫箏の祖のこゝろ盡しの曲の調以下五十三條を收む。流布の本は轉寫の際魯魚の誤を生じたものも少くない。又元來所錄の書錄中には僞書もあるので、悉く信用はしにくい。要するに他人に示すのが主意でなく、自己の心覺えに記して置いたのであらう。序跋はない。（和田）

羅山（らざん）　儒者【姓名】林氏。名は忠、又信勝、字は子信。幼名菊松、通稱又三郎【諡】文敏【別號】羅浮・浮山・羅洞・四維山長・胡蝶洞・瓢巷・夕顏巷・雲母溪・尊經堂・梅花村・麝眠【法號】道春【生歿】天正十一年八月生れ、明曆三年（二三一七）正月二十三日歿す。享年七十五。【閱歷】祖先は加賀の人、後紀伊に移り、羅山の父信時の代に至つて京都に住した。羅山は幼より性强記、甚だ學を好んだ。十四歲の時建仁寺に寄寓して勉學した。宿僧等その宏才を知つて僧となさんと計つたが從はなかつた。當時未だ宋學を奉ずるものは稀であつたが、羅山は初めて朱子集註を讀んで心服し、徒を集めてこれを講じた。然るに博士淸原秀方は新說を講ずるの非を鳴らして羅山を罪しようとし、德川家康に訴へたが、家康はこれを斥けたので、その學大に行はれるに至つた。その頃藤原惺窩宋學に名あり、羅山はその門に入つて高足となつた。家康その名を聞いて時に迎へて諮詢し、慶長十一年朝鮮和議使と伏見城に於て折衝した。同十二年三月遂に駿府に於て家康に謁し、四月江戸に下つて將軍秀忠に書を講じた。又駿府に歸り、朝鮮信使に接した。この頃家康の命により剃髮して道春と號し、爾來その侍講となつた。同十三年駿府在住の料として廩米三百俵を賜はり、後又江戸に出で、秀忠の侍講となる。同十三年駿府在住の料として廩米三百俵を賜はり、文庫を預り、書籍の閱覽を許された。同十九年方廣寺の鐘銘糺問に際し、家康に從つて大阪に行つた。元和元年駿府に於て「群書治要」の補正、「東鑑綱目」の撰修、「大藏一覽」等の開板に與つた。次いで家康薨じ、同三年秀忠の日光山參詣に從ひ、寬永元年四月將軍家光の侍講となる。これより先、羅山は老中に陪して政治を議し、公事訴訟を裁斷した。同六年法印に叙し、民部卿と稱す。同七年九月明正天皇の御卽位を拜し、その記を作つた。この冬上野忍岡に宅地を賜はり、學問所及び文庫造營料を拜領した。同九年秀忠薨去に際し、勅賜院殿の事に就き上洛、十二月廩米三百俵を加へられた。次いで尾張侯德川義直より忍岡學問所內に聖像を安置せる先聖殿を贈られ、同十年三月先聖殿に於て釋奠を行つた。これが昌平黌の起原である。翌年三月酒井忠勝と共に日光山の法制及び年中行事を撰し、又增上寺の年中行事を定めた。同十二年四月、武家法度十九ケ條、旗下の法度二十三ケ條を草案した。慶安元年家光薨去し、家綱將軍となるに及び、累進して采地九百十石を領するに至る。明曆三年正月江戸に大火あり、類燒の厄に遭ひ、盡くその藏書を失ひ、ために病を發し遂に歿した。【著作】羅山文集七十五卷○羅山詩集七十五卷（各別項）○東鑑綱要○群書治要補○儒門思問錄○倭漢法制○寬政恤民錄○本朝通鑑○寬永諸家系譜○京都將軍系譜○織田信長譜○豐臣秀吉譜○中朝帝王譜○六義考○周易私記○性理字義諺解○經籍和字考○羅山渉獵抄○駿府政事錄○四書集註○道統小傳○寬永私記○謠抄○神道祕傳。その他その編著は百七十種に及んでゐる。【業績】德川幕府創業の時に際し、家康に重用され、その制度・法令殆どその手に成つたといつてよい。次いで四世に歷仕し、卽位・改元・行幸・入朝の禮より、宗廟祭祀の典及び外國との折衝に至るまで、參與せざるはなかつた。


櫻花一面雪
桐對備奇觀
脫却世塵處
春風吹不寒
右櫻花
羅山子稿

林羅山筆蹟（高野辰之氏藏）

又初めて昌平黌を開き、徳川三百年間の官學の基礎を置き、子孫相繼いで幕府の儒官となり、後學に所謂林家の學統を傳へた功績は甚だ大であり、惺窩に發した日本に於ける朱子學派の大成者としても記憶すべきである。その門下からは、嗣子の春齋をはじめ、人見卜幽軒・岡鵞山・永田善齋・那波木庵・坂井伯元・菊地耕齋・白井雲麗等が出てゐる。

【參考】近世叢語○先哲叢談○事實文編○近代名家著述目錄○寛政重修諸家譜　（佐久）

羅山詩集（らざんししふ）　漢詩集　七十五卷

【著者】林道春（羅山）【刊行】寛文二年。昭和五年に京都史蹟會から飜刻本が出た。【解說】紀行・乾象・坤儀・居處・歲時・月・雪・時事・典籍・祭典・親戚・遊覽・會集附尋訪・送別・慶賀・哀悼・贈答・花・草木・禽獸等に分類し、凡て四千六百三十九首を收めてゐる。文集と合せて六十冊として刊行した。編者は道春の子林恕（春齋）で、七十五卷にしたのは羅山が七十五で歿したからである。詩體皆備はつてゐるが、謂はば學者の詩で詩人の詩ではない。理窟めいたり註釋めいたりした作が多い。　（佐久）

羅山文集（らざんぶんしふ）　漢文集　七十五卷

【著者】林道春（羅山）【刊行】寛文二年。昭和五年に京都史蹟會から活版本一册が刊行された。【解說】千七百數十篇を收め、詩集を合せて六十册として刊行した。編者は詩集に同じ。賦あり書あり記あり論あり、諸體皆備はつてゐるが、和習に滿ちてゐて漢文としては至れるものではない。　（佐久）

羅生門（らしやうもん）　謠曲　「觀光物の謠曲」を見よ。

羅生門（らしやうもん）　小說　【作者】芥川龍之介【發表】大正四年九月「帝國文學」。【刊行】大正六年短篇集「羅生門」に收錄。後芥川龍之介全集・現代日本文學全集（芥川龍之介集）・新潮文庫等所收。

【梗概】京都にはこの二三年、地震やら辻風やら火事やら饑饉やらの災が續け樣に起つて、洛中のさびれ方は一通りでない。朱雀大路にある羅生門さへ荒れ果てるに任せて、狐狸や盜人の棲家となり、遂に引取り手のない死人の捨場にされてゐた。或る日の夕方その羅生門の下に、一人の下人が雨に降り籠められてゐたが、彼も都の衰微の餘波を受けて主人から暇を出され、行き場もなく途方に暮れてゐるのだつた。饑死するか盜人にでもなるか、明日のことを思ひ煩ひながらも寒さと空腹に追はれて、彼は取り敢へず今夜の塒を求めるため門の樓へ上つて行つた。すると幾つかの死骸がごろ〳〵轉がつてゐるだけだと思つたのに、一人の猿のやうな白髮の老婆が、松の木片のあかりをたよりに、女の死骸を探しては長い髮の毛を頻りに一本づつ拔き取つてゐた。下人はその所業に憎惡と憤怒を感じて、妖しい老婆を捻ち倒して詰ると、「この髮を拔いてな、この髮を拔いてな、鬘にせうと思うたのぢや」と答へた。何ぼう惡い事かも知れぬが、さうしなければ饑死するばかりだ。現にこの女なども、蛇の切干を干魚だと僞り賣つて暮しを立ててゐた。生きて行くために仕方がなくする業だから、死人とても大方とがめまいと云ふのだつた。これを聞いてゐるうちに下人には或る勇氣が生れて來た。饑死するか盜人になるか、最早思ひ惑ふところではなかつた。矢庭に老婆の襟髮をつかんで「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ」と云ひながらその着物を剝ぎ取り、しがみつく老婆を死骸の上に蹴倒して急な梯子をかけ下りると、いづことも知れず、黑洞々たる夜の闇にまぎれて去つて了つた。

【批評】作者が公にした作品としては、第三作であるが、讀者にその存在を注目せしめた最初の名品である。「今昔物語」卷二十九の「羅城門登二上層一見二死人一盜人語」のアレンヂであるが、機智縱橫の才筆に依つてよく逆說的なテエマを生かしてゐる。作者が新技巧派の代表作家として名を成すに至つたその前半の業績、題材の新奇と着想の警拔を以て鳴る所謂王朝物の一聯は卽ちこの作に始まる。主人公の下人の頰の上に大きい面皰を生ぜしめたユーモラスな點景の如き、また彼の作風に於ける一特色となつた。かくてこの作は夙く作者が獨自性の全貌を示すものではあるが、翌春これと同趣の出世作「鼻」を發表するに及んで、嘖々の好評を浴び、當時、漱石からも激勵された。　（水木）

落句（らくく）　「和歌」を見よ。

樂調（らくてう）　「益軒十訓」を見よ。

蘿葉集（らえふしふ）　句集　三册　【著者】橫井也有【刊行】明和四年三月の跋がある。名古屋風月堂孫助等刊。【諸本】本書はその後板木が散逸した爲め、書肆風月堂が文樵に乞うて拾遺百五十三句を「蘿の落葉」と題して增補し、天明二年に小本二册として再版した。也有全集（俳諧文庫）は再版本によつて翻刻してある。【解說】也有の發句を各卷毎に、春・夏・秋・冬及び前書・讃物等に類別し、初篇を有支子、第二篇を猿月、第三篇を文樵が撰賞して編纂したものである。也有生前の出版で、且つ門弟が責任を以て分類編纂したものであるから、その內容は最も信憑するに足る。卷頭には也有の親友內藤東甫の筆に成る著者の肖像がある。　（潁原）

羅陵王（らりようわう）　「陵王」を見よ。

亂菊物語（らんぎくものがたり）　小說　【著者】廣津柳浪【發表】明治三十三年二月から二六新報に連載。明治三十五年十二月、春陽堂刊。

【梗概】飯田町で三百軒もの貸家の差配をした上、小金貸しをする寡婦西山竹が、養子とは名目だけの男妾佐藤勘十郎、勘十郎の妻お露と一緒に棲む。勘十郎はこれまでも何回か妻を迎へ、竹と謀つて妻の持つて來た財物を捲り上げ、虐待して裸同樣で逐ひ出す。お露も同樣逐ひ出される運命になつた。勘十郎には、三崎座のピカ一女優紀久次との情交がある。竹と勘十郎とは、お露を離緣したが、お露が承知せぬので、或る夜急に紀久次を妻として家に引き入れる。お露は屈辱に堪へず、媒人の家に去つた。その後で紀久次と竹の不和が萌し、竹はお露を再び呼び戻す。紀久次は、勘十郎が愛よりも金に執着する薄情を怒つて實家に歸り、再び女優として「妹脊山女庭訓」を演じ、竹の一家三人が見物に來てゐるのを見て發狂する。勘十郎は竹と絕緣してお露と家出し、竹は色情狂になる。

【批評】この作家の作物としては、よい出來榮えでない。通俗を意識して書いたものか、人物も事件もひどく誇張され、現實性が稀薄で、構想の苦心がないのも遺憾である。勘十郎の紀久次に對する戀愛關係が不明なのは重大な缺陷である。ただ深刻で陰慘な場面を冷たく書き續ける作家の傾向を知るべき作品で、發表當時評判になつたものである。これは有名な女優某をモデルにしたと噂された。　（千葉）

亂曲（らんきよく）　「曲舞」を見よ。

亂曲集（らんぎよくしふ）　嘉太夫節景事道行集　半紙本一册【刊行】天和元年十一月。八文字屋八左衞門版【解說】「道行揃」の姉妹篇ともいふべき宇治加賀掾正本中より、道行景事の段十章を選び集めた節附細字の繪入本で、文中の語句を上欄に頭註してある。本書は大正九年六月稀書複製會から刊行された。

目錄　　加賀掾宇治好澄正本

（一）和氣淸麿	〽さいこく名所馬之段道行
（二）きやしや物うり	〽姫君わか君てたての離別
（三）淨花物がたり	〽まぞめ永もんこてふのまひ
（四）ふないこん	〽ちくぶしまもふで島めぐり
（五）つれ〳〵草	〽花うりのたん
（六）平安城都うつし	〽傳教大し王城鎭護神をろし
（七）いざよひ物語	〽日本けんぜよづくし
（八）ゆや物がたり	〽わかのうら八景名所づくし
（九）うし若千人切	〽みやこめぐり
（十）三じやのたくせん	〽いせみやめぐり

（藤井）

蘭更（らんかう）　俳人【姓名】高桑氏。諱は正保（もものやどり）、名は忠保（中興六家集）、通稱長次郎。【別號】半化房・李桃亭・狐狸窟・二夜庵・南無庵・芭蕉堂【生歿】享保十一年金澤に生れ、寛政十年（二四五八）五月三日京都に歿す（十一年說は誤）。享年七十三【辭世】我がたつも世の眞中か夜半の月。【法名】實際庵唯一居士【墓所】京都東山高臺寺【閱歷】家は金澤の釣瓶屋何某といふ商家であつたが、家業を厭ひ、夙く希因（別項）に就いて俳諧を學んだ。初め金澤に李桃亭を營み、又狐狸窟を修し、更に淺野川に二夜庵を結んで住んだ。狐狸窟時代には同門の間に彼の俳名漸く高く、親友既白法師の「破れ笠」（寶曆十年）、「夕日島」（同十二年）や松襄庵如本の「北の時雨」（同十二年）等に序跋をものしたりしたが、寶曆十三年には自ら「花の故事」を撰び、芭蕉の古事を集めて貞享・元祿の昔に復るべき精神を示した。次いで二夜庵時代に至つても、「有の儘」（明和六年）「落葉考」（同八年）（別項）等に、芭蕉の清風を發揚する事に努めた。併しながら彼は机上の論だけで滿足せず、自ら山川の間に俳魂を養ふ必要を感じたのか、庵を捨てて烟霞の間に放浪し、洛中に年を越えて更に京都・須磨・橋立等を周遊した。門人蟠水は當時の事について、二夜庵時代に初めて支考・麥林の夢を破られたやうに言つてゐるが（半化坊發句集序）、寶曆末年の頃から既に復古の志はあつたのである。近畿から更に甲信地方へ杖を曳いて、その間に年を重ね、遂に江戶に落ち着いて、こゝに再び二夜庵を興した。かの「枯芦の日に〳〵折れて流れけり」の吟は、既に「有の儘」に見えて居り、明和初年の作であるが、「もゝのやどり」に「一年倚二杖於東都一再二興二夜菴一會有二枯芦唫一明世號二枯芦翁一」とあるのによれば、この句は東都に於て最も持て囃され、當時蘭更の俳名が全國に遍かつた事が知られる。然るに彼は又筑紫行脚の志があり、京都まで來たが舊知の人々に引止められ、遂に永住する事となつた。初めは市中御幸町で暫く醫業を業としてゐたが（合歡雨集）、老來遁世の心起り、芭蕉の「柴の戶の月や其儘あみだ坊」の吟に因んで、洛東双林寺中に南無庵を營み、許六の刻んだ芭蕉の像をそこに安置して芭蕉堂と呼んだ。かくて師に參じ、俳に遊び、又池大雅に就いて書を善くしたので、風流の名聲は都鄙に藉き、門人遊子の來り集る者が門に溢れた。曉臺に次いで寛政二年十月、二條相公から特に中興宗匠の職服を賜はつた（中興六家集）。寛政十年三月初旬からの風邪が募つて遂に同五月三日夜亥の刻ばかり（おしてる月）に歿した。

【編著】花故事（寶曆十三年）○俳諧落葉考（別項）○俳諧世說（別項）○芭蕉翁消息集（天明六年刊。蘭更が實見した芭蕉の書簡を集めたもの）○半化坊發句集（天明七年刊。門人蟠水が師の發句を四季類別に集めたもので、蘭更生前の編輯であるから、その句集としては最も信憑すべきものである）○桃のしろみ（天明八年刊。門人來斎との共撰で、芭蕉の遺句の遺を拾つたものである。其「新七部集」の中にも收められた）○續七部集（寬政七年冬序。深川集・卯辰集・鵲藁・刀奈美山・有磯海・小文庫・千鳥掛等の代表的な七部を翻刻したもの。俳文學大系所收）○蘭更發句集（金澤の竇術が諸書に抄錄して蘭更の句を集めたもので、その數は「半化坊發句集」に數倍してゐるが、稿本の儘で世に知られてゐない）。

【俳風】蘭更が、早く芭蕉の古に復る志があつたことは、「花故事」に序した浮巢庵文素の言によつても明かであり、次いで「有の儘」「落葉考」を著はし、又後年「芭蕉翁消息集」や「俳諧世說」を編したり、「三冊子」「續七部集」等を刊行したりした事に徵しても、芭蕉の清風を世に知らせようとした誠意は認められる。特にこれ等の著述は、いづれも眞摯な態度で撰ばれて居り、好い加減の杜撰なものでない點にも、彼の仕事が決して名聲を貪らうといふ考でなかつた事が察せられる。かうして彼が希因の門に出て、而も支考・乙由の風に倣はず、直ちに貞享・元祿の昔に復らうとした志は、同門麥水と揆を一にしてゐたのであるが、「爲レ人温順篤好能容レ人」（中興六家集）と許された通り、急進過激を喜ばなかつた。麥水等の虛栗調に對しては、暗に反抗の語勢を洩らして（落葉考參照）、ただ天地人情の自然に出でて一毫の私を容れないことが風雅の本體だと論じた。而して奇矯に趨り、粉飾を施すやうな技巧的要素を全然排斥したのである。隨つてその句風は淡雅平明を旨とし、彼の代表的句ともいふべき枯芦の吟の如き、少しも奇を弄しないのがその特色であつた。併しかうした境地に詩を求めることは、一歩を誤ればただごととなり、更に聊かの私情でも加はれば卽ち卑俗に墮してしまふ。不斷に藝術的感激を持し、功利的欲望から離れてゐなければ、出來にくいことである。蘭更自身も亦その危險から免れることは出來なかつた。特に天明末年以後、彼の世間的名聲が加はるに隨つて、彼にもやはり他の好評を迎へようとする心が動いて來たことが見られる。寬政年中の吟になると、甚だしく俗調に傾いてゐる。所謂天明中興の諸家中、蘭更の世間的勢力は恐らく曉臺に次ぎ、曉臺を凌いでゐたであらう。それは「敎諭不レ倦諄々誘レ人、以レ故名冠二今時一」（中興六家集）といふ如く、彼の寬容溫和な性格によることは勿論であるが、やゝ俗調を帶びた彼の俳風が、より大衆的歡迎を得たのに違ひない。後年南無庵が所謂月並調の本山と見られるやうになつた淵源は、既に蘭更に發してゐる。京都に居りながら、蕪村や樗良とはやゝ時を異にしたとはいへ、几董・曉臺等とも餘り交渉がなかつたといふことは、少からず物足りない感がする。

【門流】蒼虬・梅室を初め京都には車蓋・[illegible]・あふひ、大阪に江涯、安藝に篤老、甲斐に可都里・嵐外、信濃に何丸等、化政以後の俳壇に雄飛したものが頗る多かつた。就中、蒼虬（別項）は蘭更の甥と傳へられて居り、最も深い關係があつたので、師の歿後芭蕉堂二世をついで一時に覇を唱へた。併し蒼虬は師の妻得終尼と不和で、蘭更の歿した折も、難波の秋風が「お

してゐる月」を編み、一周忌に誉前の有隣が「三日の光」を撰んで手向けてゐるのみで、尺艾が「芭蕉堂追善の俳諧は二世蒼虬うし念頃に營み給ふべきなり」（おしてる月）と言つてゐるにも拘はらず、遂に師のために追善の集を發企しないで終つた。それでその七回忌には蒼虬の態度に憤つて、得終尼は書帝山縣百啼の助力を得、追善集「もゝのやどり」を撰んだ。そして自ら南無庵得終と稱してゐるから、この頃蒼虬との確執が甚だしかつたことが知られる。然るに文化十一年十七回忌集として篤老が「合歡雨集」を撰んだ折には、蒼虬も句を列ねてゐるから、當時得終尼も既に世を去つてゐたのであらう。兎に角南無庵綱永に就いては、かうした紛紜があつたのである。なほ芭蕉堂は葉顋千岸が三世を繼ぎ、爾來連綿として今日に至るまで續いてゐる。（潁原）

蘭山（らんざん）　讀本作者　【姓名】高井伴寛。字は思明、通稱文左衛門【歿年】天保九年（二四九八）十二月二十三日。享年七十七。【墓所】東京大崎町增上寺別院中戒法寺【閲歷・作風】江戸の人で、芝御組屋敷の與力高井伴昌の長子。文化文政頃讀本を作つてゐた。それは多く鎌倉時代の史實を材料とし、殆ど正史と見られるやうなもので、却つて凡庸な作者に見る不自然が目立たず、行文の簡素なると共に喜ばれたものであらう。その「星月夜顯晦錄」（別項）は彼の傑作とされ、馬琴の「新編水滸畫傳」（別項）の二編以下を續稿してゐる。なほ讀本の外、「孝子經抄解」一卷、「和漢朗詠國字抄」八卷、「撫箏雅譜抄大成」「（改正增補）江戸大節用海嶽」等もある。【著作】繪本三國妖婦傳〇孝子嫩物語〇青葉笛〇鎌倉年代記（以上各別項）〇奇談竊內外記〇繪復讐手引糸七卷（淺山蘆洲畫、文化十一年刊）〇繪本重綱應仁記十五卷（溪齋英泉畫、文政七年刊）〇平家物語圖會十二卷（有阪蹄齋畫、文政十二年前編・嘉永二年後編刊）等。

【參考】江戸時代戲曲小說通志　雙木園主人　（荒野）

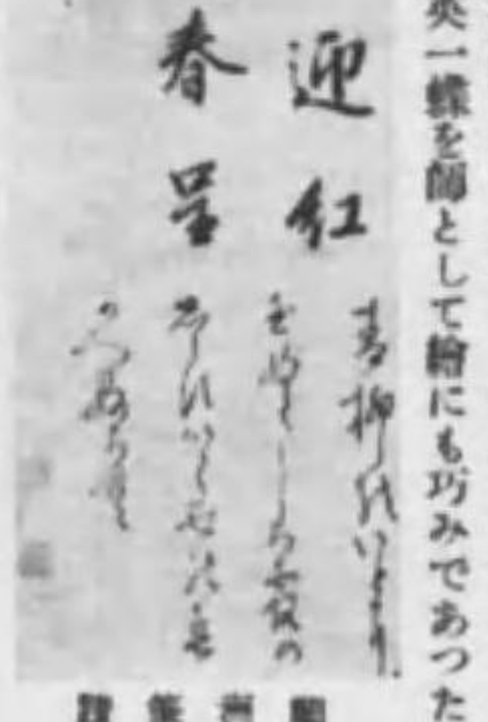
蘭奢待新田系圖（らんじやたい にったけいづ）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松半二・竹田平七・竹本三郎兵衛【興行】明和二年二月九日、竹本座（北新地芝居での興行）。【讀本】近松半二淨瑠璃集（續帝國文庫）所收（後の歌舞伎臺帳は「日本戲曲全集」卷二十八に收められてゐる）。【題材】「太平記」に現はれた新田義貞の忠節を背景とし、小山田高家の節義を中心に、勾當內侍・正成の後室・大森彥七・兒島高德・楠正行とその一黨・大塔宮護良親王などに關する史實を按排した作で、小山田高家の所謂「身替新田」の件は、近松作の「吉野都女楠」（別項）から多少の暗示を得てゐる程度である。

【梗概】〔一段〕（神泉苑）足利尊氏は、坊門宰相清忠と共に將軍宣下の綸旨を護良親王に乞ふが許されぬ上、心にかくる勾當內侍が勅命にて義貞の室となるので憤る。折しも北條の殘黨蜂起のしらせに義貞は追討に赴く事となる。（なぎの宮）紅葉時に櫻花が滿開し時ならぬ花見客で賑ふ。尊氏の息女績部姫の腰元は姫の玉章を大塔宮に屆けるが宮は出家の身ゆゑと斥け給ふ。坊門宰相の雜掌が春宮藏の宮を奪うて來ると、案山子に化けてゐた男がこれを射留め、櫻樹を削つて何事か認め、宮を抱いて去る。宮を盜まれた小山田太郎が駈けつけ「天勾踐を空しうする事勿れ」の詩句を櫻樹にみとめる。（義貞館）內侍の色香に溺れ出陣を延引してゐる義貞を家老小山田高家が切諫する。尊氏も義貞の眞意を探りに來る。この家の腰元歌絹と戀仲の尊氏の下僕里平は、義貞の不埒を面罵するが却つて侮辱され傷けられる。彼は北條高時の遺見なる事をひそかに尊氏に教へられるので愈々心逸り、義貞を討たうとして留め立てする歌絹を刺す。尊氏は里平に謀叛に加擔せよと誘ふ。里平實は新田の忠臣栗生才門敎定で尊氏の陰謀をあばかんための計略であつた。〔二段〕（鞍馬山庵室・山中）護良親王の庵室へ績部姫が慕うて來る。足利の家老須部伊賀守は、戀を以て宮を御還俗させ申さば國のため父のためと諭す。姫の戀物語に聽き入つてとの法印が氣絶するをかし味。宮はつれなく戀を斥けるので法印はこれを弑せんと裏山に誘ふが、栗生才門が現はれて危急を救ふ。（伊賀守邸）下僕新兵衛と婢おたくとが新しく傭はれる。伊賀守の妻雪枝は夫に秘して匿まうてゐる春宮藏の宮と娘初音とを祝言させる所へ尊氏方の山名監物が現はれ宮を引立てようとする。伊賀は妻を離緣して二心なき證とする。婢おたくは己が初音の眞の母である事を明かしてこれを連れ去り、離別された養母への義理から自害させる。おたくの夫の下僕新兵衛が春宮を盜み出さうと忍んで來るのを伊賀はそれとなく盜ませて、己は監物の面前で切腹する。併し急所を外した切腹で、尊氏の家老須部伊賀守として自殺、南朝方の篠塚伊賀守として更生する。春宮と稱したのも楠正行であつた。娘を失うた新兵衛は剃髪、和田新發意源秀と名乘り正行に隨ふ。〔三段〕（戰場）義貞は尊氏勢を迎へて奮戰。浪人寺內の子助一は臆病のため勘當されてゐるが、義貞と名乘つて討死すれば勘當を許さんと言ふ父の詞に、落ちてゐた義貞の鎧を着て戰場に向ふ。（寺內住家）勾當內侍が匿まはれてゐる。寺內の先妻の子で家出してゐた彌太郎が、その妻磯波を伴うて訪れ、義貞を討つた物語。其處へ身替りに立つた管の助一が戾つて來るので寺內は驚愕する。助一の嫁おそれは、夫の勘當の途に許されぬのを悲しみ、內侍の身替りにと自害する。助一は介錯と見せて却つて內侍を討ち、尊氏の臣妻鹿孫三郎なりと名乘つて去る。彌太郎・磯波と稱したのも實は義貞・內侍で、討死した義貞は寺內の一子彌太郎即ち小山田太郎高家、今討たれた內侍は、その妻磯波であることが判る。孫三郎があらはれ、贋首と知つて義貞・內侍の首討つたりと呼ばはる。寺內とは兒島高德で、尊氏の懇望に應ぜず、その代りに伜の一人を味方に贈らうと約したが、助一はそれを察して足利方となつてゐたのであつた。〔四段〕（道行關生の紫竹）（住吉社頭）大塔宮と宮の跡を追ふ績部姫との道行。（住吉社前）追手を受けた二人は、住吉社前で逢うた後家に匿まはれる。（河內水越村寺小屋）後家の娘お此と緣組の約ある大森彥七から結納の繪馬と太刀が屆けられ、相應の聟引出をとの所望に後家は心を砕く。お此は曾て見染めた權見に焦れ、今は眼を泣きつぶした不具の身であるが、宮の身替りに死なうと決心する。結納の太刀は十操の劍で、その奇特によつてお此の眼が開き、匿まはれてゐた宮が初戀の人と判り、娘は嫉妬に燃える。お此に言ひ寄るがま六はお此に住吉の社前で拾つた鬼女の面を與へ、姫を殺せと敎唆する。結局お此は姫の身替りに役立ち、大森は鬼女の面を被せた宮を娘と稱して後家に返し、繪馬に言ひよせて和睦を說く。後家實は正成の後室、がま六實は村上義光と判明する。〔五段〕正行は家の子と共に奮戰。妻鹿孫三郎は坊門清忠を生捕り、宮を護つて來り會し、義貞方と尊氏方とは和睦となる。

【構想】二重底三重底を設けて、筋を複雜にする享保期以後の淨瑠璃の特性を最も極端に示したものの一つである。半二には特にこの傾向が甚だしいが、就中本曲の如きはそれが著しく、ただ煩雜の感を與へるのみに止まる。この事は淨瑠璃文藝が町人生活の現實に對する健康な視力を喪失して行きつつあつた事の一つの現れでなければならぬ。全曲の眼目は言ふ迄もなく三の切「寺內住家」と、四の切「楠後家住家」とであるが、前者では所謂「身替新田」の小山田高家を陰にして、彌太郎・孫三郎兄弟をそれ〴〵二重底に組立ててその穴を行かせ、見物の意表に出たところ、後者では盲目から救はれたお此が、その瞬間に嫉妬の闇に陷つて行くことになる怪路が作者の味噌であらう。原典たる「太平記」や、近松の「吉野都女楠」からは多くの作を胚胎し、特に明治の演劇改良運動に伴ふ新史劇の流行に乘じて、幾多の太平記ものを生じたが、本曲は直ちに歌舞伎に移された外には、直接的な影響を後のものに與へてゐない。（近藤）

【參考】傳奇作書殘編中の卷（蘭奢待助市役の話）

蘭洲（らんしう）　儒者　【姓名】五井純禎。字は小祥、通稱藤九郎【別號】洲庵【生歿】寶曆十二年（二四二〇）三月十七日歿す。享年六十六。【閲歷】大阪の儒家五井持軒の男。蘭洲、家學をつぎ、享保中、中井甃庵が大阪尼ケ崎に塾を開くや、その助敎となつた。間もなく江戸に出で、津輕侯に仕へたが志を得ず、病と稱して致仕し、大阪に歸つて再び甃庵の塾に敎授して終つた。津輕侯を辭するに際し、諸方から召されたが遂に仕へなかつた。その據るところは朱子學であつたが固執しなかつた。徂徠等の復古學全盛の當時にあつて、よく宋儒を護つた。又蘭洲は和歌をよくし、國文にも通じ、「萬葉集話」「古今通」「源語通」「勢語通」等の著もある。【著作】瑣語〇質疑篇〇非物篇〇若語兵論等。（佐久）

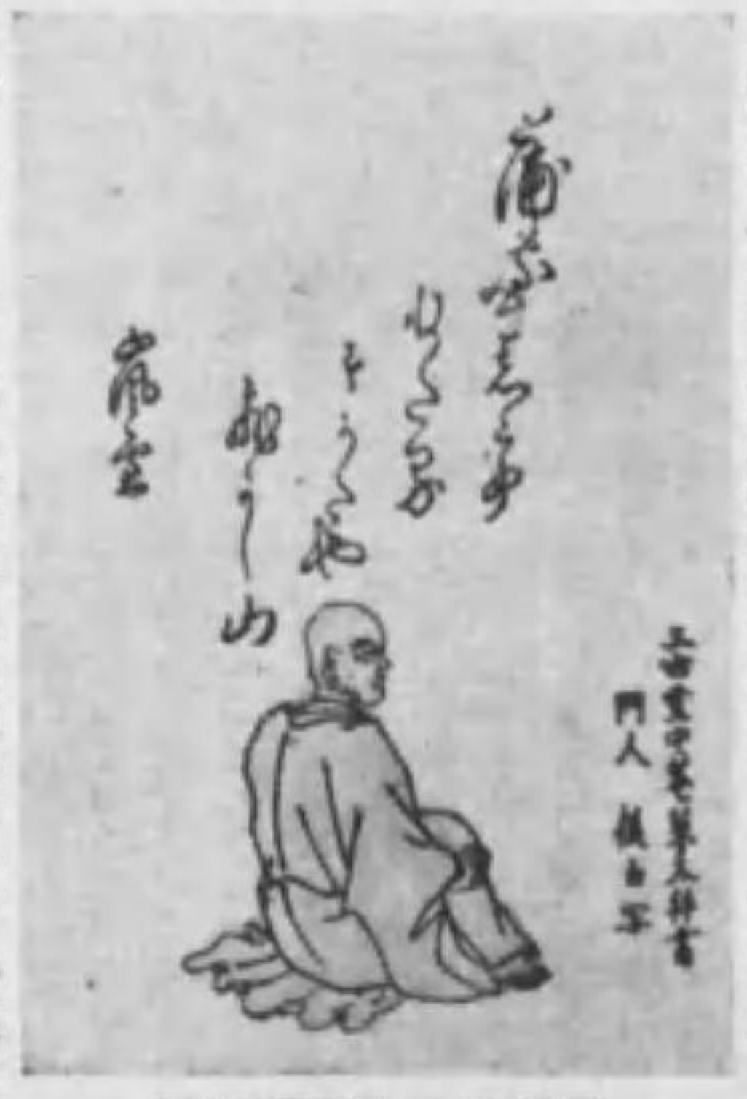

雞聲拂曉迎紅
日柳色尋春呈
麴塵

蘭洲筆蹟（高野辰之氏藏）

嵐雪（らんせつ）　俳人【姓名】服部氏。幼名久馬助（幼名を久米之助とする說は疑はしい）。通稱彥兵衛、後、孫之丞。【別號】嵐亭治助・雪中庵・寒綠堂・黃落庵・不白軒・石中堂・玄峯堂・良香（書號）【生歿】承應三年生れ、寶永四年（二三六七）十月十三日歿す。享年五十四【法名】雪中庵不白玄峯居士【墓所】東京駒込竹町日蓮宗常驗寺（芭蕉の句によつて濡髮と呼ばれた）。大正八年東京雜司ケ谷水久保本敎寺に移された。【辭世】一葉散る咄一葉散る風の上【俳系】芭蕉門【閲歷】淡路國三原郡小榎並村に生れ、服部彌次兵衛の七男である（江戸湯島に生れたとの說は誤であらう。今淡路に嵐雪の生家十一代の當主服部善四郎氏俳號嵐岳があると云ふ）。幼年時に江戸に行き、新庄隱岐守に仕へ、後、井上相模守に仕へたが、致仕して浪人となつた。英一蝶を師として繪にも巧みであつた。芭蕉に入門した時期は明かでないが、延寶八年以前である。延寶八年の其角の「田舍句合」の序や「桃靑門弟獨吟二十歌仙」の中に嵐亭治助として出てゐるのが俳名の見える初めで、翌年頃には既に嵐雪と改號してゐる。貞享元年の頃は其角のてれふれ町（堀江町）の住居に破笠と共に同居し、炬燵に三人雜魚寢したりしてゐるが、翌二年から三年の春まで越後の高田にあり、稻葉丹後守の國替入城を目擊して「胡寒記」を作つてゐる。嵐雪が或る湯女と一緒になつて一子梅松を儲け母子共に亡くなつたと云ふのは、この貞享二三年頃以前の事らしく、又遊女上りの烈女と一緒になつたのは貞享四年頃らしい。芭蕉生存中、芭蕉によつて、「門人に其角嵐雪あり」と云つて「兩の手に桃と櫻や草の餠」と詠まれ、爾來江戸蕉門中、其角と並び稱せられ、芭蕉病歿の時は桃隣と義仲寺に駈けつけて新塚の前に涙を灑ぎ、一周忌の元祿八年には、追善集「若菜集」を出してゐる。元祿十二年、烈女が歿し、その翌十三年が芭蕉の七回忌にも當つたので、義仲寺に赴いて芭蕉墓に詣で、京に出て亡妻の新盆を營んだが、それが「襲遊稿」として書かれてゐる。嵐雪は、其角の堀江町の宅附近、石町一丁目、神田天神側、濱町山伏井戸附近といふやうに前後幾度か居を轉じてゐるが、山伏井戸附近に移つたのは元祿十六年の地震火事の後で、こゝに雪中庵を結び、遂にこゝで終つたのである。嵐雪はいつからか濟雲方丈に參禪したので、別號の不白軒・玄峯堂といふ號も、禪語の雪千山を埋む什麼孤峯不白なるといふ句から出てゐると云はれる。嵐雪と云ふ號は、「嵐の庭の雪ならで」の古歌から思ひ寄つたものらしいが、妻の名の烈は嵐雪の反だと云はれる。烈女はもと遊女であつた身の罪を懺悔して禪を學び、京を憧れつつ歿したのであるが（法名雪山院孝白妙悟信女）、性甚だ唐猫を愛し、その爲め度々夫婦喧嘩となり、近隣の物笑ひとなつた。或る日、嵐雪が猫を隱したので「猫の妻いかなる君の奪ひ行く」（其袋）と詠んだ烈女の愁歎の句、猫が出されて和睦して「よろこぶを見よやはつねの玉はゞき」（其袋）と詠んだ嵐雪の句が、興味ある逸話として語られてゐる。

【著作】若水（貞享四年刊）〇其袋（別項）（元祿三年刊）〇或時集（別項）（元祿七年刊）〇若菜集（元祿八年刊）〇杜撰集（別項）（元祿十四年刊）〇その濱ゆふ（別項）（寶永二年刊）〇俳諧つるいちご（寶永四年編、明和八年大島蓼太刊）〇玄峯集（小栗旨原編）（寛延三年刊）〇續其袋（大島蓼太編）（安永三年刊改題「雪中庵嵐雪文集」）〇嵐雪全集（曾我部雀志）（俳諧文庫所收）〇蕉門名家句集（嵐雪の部）。

【人物・作風】嵐雪は湯女や遊女を妻にしてゐるやうに、其角などと同じく放蕩兒であつた事が知られ、締りのない疎懶な習癖が後までも拔けなかつたやうである。併し元來が溫厚誠實な素質の人ではあつたらしい。然るに疎懶な習癖は出不精にもなつたらしく、元祿十



服部嵐雪（芭蕉堂歌仙圖）

三年の旅の外は、いつの年かに箱根入湯の旅（「湯澤記」成る）、寶永二年に朝叟と伊勢・熊野を廻つた旅（「その濱ゆふ」成る）及び貞享二三年の越後行の外殆ど知られず、これ等の時に書かれた旅行記も微して小さく、又句集「玄峯集」の作句數が僅かに四百二十四句を數へるに過ぎぬやうに、あらゆる點に彼の疎懶が考へられる。作者としての天分は相當にあつたやうであるが、才の其角とは違つて重厚な作風である。特に濟雲方丈に參禪した爲めであらうが、後に至るほど觀相的な傾きが濃くなつてゐる。ただその中に多少の解脫味を帶びてゐるのが取るべき點であらう。許六は同門評判に「嵐雪器用分限し、本性柔弱にして花あるに似たれども實はなほなし。相應にとりはやすやうなれども全體とりしめたる血脈なし。（中略）柔弱にして弱く、よはきによつて美しきやうなり」（俳諧問答）などと評してゐるが、これは全く見當違ひの酷評といふべく、白雪が「誹論」（別項）に「芭蕉翁の骨肉を得て、其角は花を咲かせ嵐雪は實を結び、故に花實相對して芭蕉翁と共に行ふ」と云つてゐるのは、大體公正を得た適評であらう。

【史的地位】江戶に雪門（別項）の一派を拓き、其角が洒落風として變風したのに對して、芭蕉の遺風を傳へ、洒落風の勢力には及ばなかつたけれども、正風を遺した業績は大であつたと云はねばならぬ。その門から櫻井吏登や大場蓼和等を出し、吏登門の蓼太に至つて雪門が隆昌に赴いたのであるが、蓼和（もと昆尺）が「五色墨」（別項）の匡正運動に參加し、蓼太が「續五色墨」に參加する如き結果を齎してゐるのも、畢竟嵐雪の餘光と云はねばならぬ。蕉門十哲（別項）に撰ばれてゐるのは不當でない。

【附說】「二弟準縄」の中の「雪中庵嵐雪傳」は、恐らく僞書であらう。

【參考】風の上（追善集）高野百里○遠のく（一周忌追善集）同上○きくいたゞき（七回忌追善集）清水超竹 ○ひろ葉（十七回忌追善集）拾翠 ○風の末（三十三回忌追善集）大場蓼和○桃櫻（其角・嵐雪三十三回忌追善集）早野宋阿 ○一葉塚（五十回忌追善集）服部乙貫・同虎州 ○ゆきまろげ（百回忌追善集）白際○俳諧問答 森川許六○風俗文選（作者列傳）同上○花見車 高島轍士 ○老の樂 市川柏莚○元祿寶永珍話 著者不詳 ○綾錦 菊岡沾涼 ○蕉門頭陀物語 建部涼袋 ○誹諧家譜拾遺集 青木十口○誹諧世說 高桑闌更 ○誹論 白雪○嵐雪發句撰解 高都庄丹 ○俳家奇人談 竹内玄々一○蕉門諸生全傳 遠藤曰人○俳諧人物便覽 三浦若海○味地草○源之丞由來記 十三世引田源之丞○雪中庵嵐雪傳 酒井僊一（國語と國文學昭和三ノ一〇）○淡路俳人傳 多見要乙貫・菅井魚里（ひむろ昭和四ノ六）○和露莊叢話 嵐雪の家譜、系圖 琅庄（ひむろ昭和六ノ七）○芭蕉其角嵐雪 穎原退藏（俳句講座俳人評傳篇）○蕉門十哲 志田義秀（岩波講座日本文學）○嵐雪の死とその前後 酒井僊一（句と評論昭和七ノ七）　（志田）

蘭蝶（らんてふ）　脚本　淨瑠璃物【作者】清水先勝軒【本名題】（市川屋敷）若木仇名草（わかぎのあだなぐさ）【別名題】「七草若菜切」「仇情浮名鳳」「移鄕仇名草」「由緣の色紫頭巾」等。【初演】安政二年十月大阪筑後芝居切狂言【曲節】新內節【太夫】鶴賀鳳蝶【作曲】初代鶴賀若狹掾。但し鶴賀鳳蝶補訂。【振附】二代山村友五郎【傳來】曲・振とも傳存。但し振は上演の度毎に少しづつ添削されてゐる。

【役割】市川屋蘭蝶實は朝顏三郎（中村翫雀）、傾城此糸（片岡愛之助）、女房お宮（市川新車）、朝顏左衞門（中山文七）、二朱判吉兵衞（中村雀右衞門）、鞘ヶ瀬傳藏（中村仲助）。

【諸本】若木仇名草（初演番附）。仇情浮名鳳（文久二年四月、大阪若太夫芝居番附）。日本歌謠集成卷十一・歌謠音曲集（日本名著全集）等に所收。

【題材】初代鶴賀若狹掾作の「（市川屋敷）蘭蝶此糸若木仇名草」に據つて、歌舞伎に脚色したものであるが、原作の男藝者蘭蝶と遊女此糸との心中の事實については明かでない。從つてその作曲年代も未詳であるが、詞章の中に、「身振りは中車高麗屋」とあるのは二代市川八百藏（安永六年歿）と四代松本幸四郎とを指したものであるから、遲くとも安永初期までに出來たことだけは疑ひない。勿論、新內節の原作とは直接の關係はないが、文政七年版の人情本「（娼妓）蘭蝶記」（桑山人作・溪齋英泉畫）は明かに新內の語物によつたものである。歌舞伎に脚色されたものでは本作が古く、且つ現行の原作でもある。

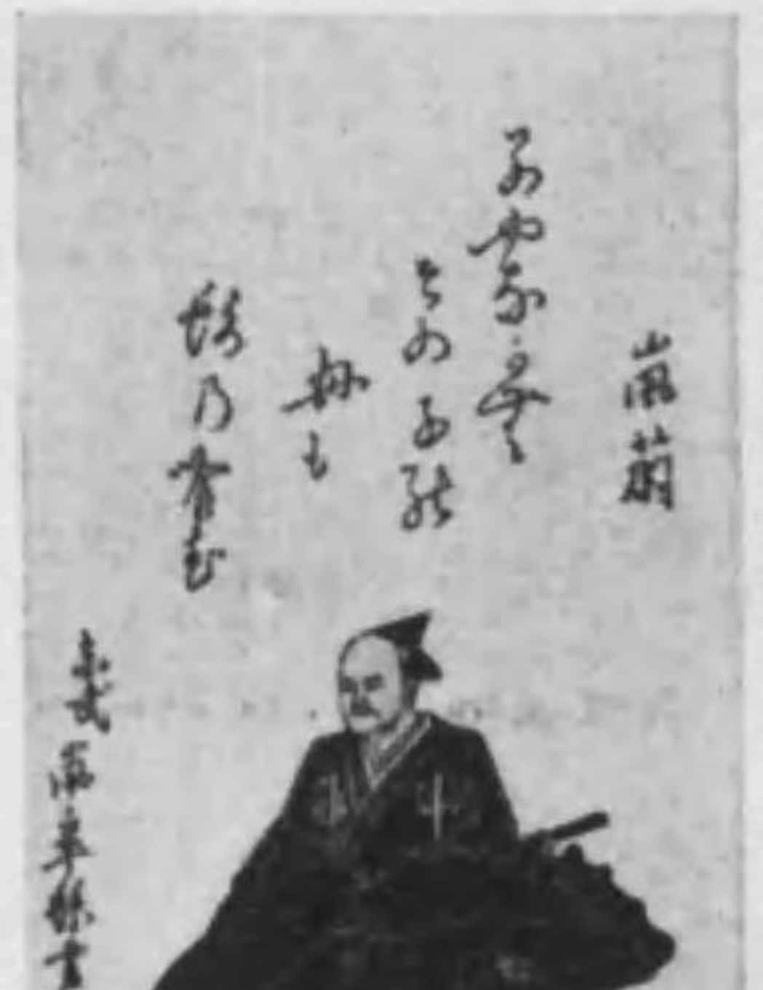
【梗概】紫頭巾の男藝者市川屋蘭蝶實は石山藩中朝顏三郎は、主家の重寶桐壺の茶入詮議のため廓へ入り込んでゐる。蘭蝶はお宮といふ女房があるのに、いつしか若木屋の此糸と馴染んで浮名を謳はれ、稼業を全く顧みないので、夫のため二度の棲を取つて深川の藝者となつてゐる女房のお宮は、密に此糸の許を尋ね、その心底を打ちあけて蘭蝶との緣を切つてくれと泣いて訴へた。此糸は義理と情に絆されて是非なく緣切を約する。これより先、蘭蝶の兄朝顏源左衞門はお家の息女藤姬が將軍家へ輿入變替へのために身替りを詮索してゐたが、ふと此糸が姬君に生寫しと聞き、蘭蝶の馴染を幸ひ、彼が歸參の功と忠義のために茶入詮議の外に此糸を斬つて姬の身替りに立ててくれと頼み、家の重寶不動國行を蘭蝶に渡す。此糸はこの事を知り、お宮との約束もあるので、今まで振りぬいた鞘ヶ瀬傳藏が桐壺の茶入を持つてゐるのと幇間の二朱判吉兵衞が蘭蝶の稼業を知り、廓の法を破つたと折檻して此糸に迫るので、傳藏に靡くと見せかけ蘭蝶に心にもない愛想づかしをする。蘭蝶は遂に怒つて此糸を刄にかける。萬事を覺悟してゐた此糸は、お宮との約束と桐壺の茶入を取らうばかりに最前の愛想づかしをしたと打明け、死んで行く身のこの首を姬君の身替りに立ててくれと言つて果てる。蘭蝶は傳藏を殺して桐壺の茶入を手に入れ歸參が叶ふ。

【批評】原作は蘭蝶を軸にお宮と此糸との情味を點綴して、飽くまで新內節獨特の情調に富んでゐるのに對して、本作は強ひて蘭蝶を歸參する武士に仕立て、そのために詮議の茶入を手に入れさせんと鞘ヶ瀬傳藏や二朱判吉兵衞等の敵役を出し、剩へ兄朝顏源左衞門を點出して此糸を殺してまで、その首をお主の姬君の身代りに立てる等、忠節に重きを置いた感じがある。そこに無理があり破綻がある。原作を尊重して心中物に脚色すべきであつたと思ふ。曲は「明烏」（別項）と共に新內の二代表曲ではあるが、寧ろ詞章の妙はこの方が優つてゐる。而も脚色に於ては、遙かに「明烏」に及ばない。【影響】清元の「（白糸主水）重褄闇の小夜衣」（通稱白糸、嘉永五年三月江戶市村座）で、鈴木主水の妻お安が、新宿橋本屋の白糸のもとへ緣切りを頼みにゆく趣向は、本作の翻案である。　（秋葉）

蘭亭（らんてい）　漢詩人【姓名】高野惟馨。字は子式【別號】東里【生歿】寶永元年江戶に生れ、寶曆七年（二四一七）七月六日歿す。享年五十四【閱歷】蕉門の俳人百里居士の子。荻生徂徠（別項）に學んだが、徂徠は甚だこれを奇とした。年十七の時に失明したので、徂徠これに勸めて心を詩詞に專らにせしめた。詩名は服部南郭（別項）と相比し、當時詩を言ふ者で二家の門牆に倚らざるはなく、諸侯爭ひ延いて詩を講ぜしめた。その詩は盛唐を摸擬、音韻清暢であつた。【著作】蘭亭遺稿十卷。　（佐久）

亂觴誡（らんしやういましめ）　「觴法」を見よ。

嵐蘭（らんらん）　俳人【姓名】松倉盛教。通稱甚兵衞又は又五郎。【生歿】正保四年生れ、元祿六年（二三五三）八月二十七日歿す。享年四十七【法名】陽譽宗鏡信士【墓所】東京谷中感應院【家系】肥前島原の城主松倉氏の裔である。母は田中宗夫の孫。嵐蘭には嵐戎といふ子があり（嵐戎は芭蕉の附けた號である）、後、井上河內守に抱へられ、三百石を領した。【俳系】芭蕉門。芭蕉の「嵐蘭誄」に、「予と因む事十とせあまり九とせにや」とあるから、延寶三年頃の入門であらう。【閱歷】板倉侯に仕へ、三百石を領したが、元祿の初め君を諫めて用ひられず、致仕して淺草に隱棲した。江戶蕉門中の故參者の一人で、延寶八年の「桃靑門弟獨吟二十歌仙」にも加はつて居り、技倆も優れてゐて、芭蕉の信任も厚かつたやうである。元祿四年の春には吉野の花を探り、舊友嵐窓の句を想起して感動し、その夜の夢に亡き人を見、翌五年許六の芭蕉入門の際には俳諧に一座し、又この年彼の唯一の著作「罌粟合」を撰したのであるが、翌六年八月十三日鎌倉に遊び、歸途病を得て二十七日の夜歿したのである。その時の芭蕉の「嵐蘭誄」は切々の情を盡してゐる。【人物】芭蕉の誄に、「松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ」とあるから、剛直清廉の士であつたらしい。「罌粟合」の自序に、「僕蕉門に在事二十年、いまだ蘭室に入らず、辨理に昧くして半解の悟なく云々」と謙遜してゐるが、同じ正義の人曲翠・去來（各別項）などからは尊敬されてゐたやうである。【著作】罌粟合（別項）（元祿五年刊）。【參考】雜談集 寶井其角○末若葉 寶井其角○風俗文選 森川許六○蕉門諸生全傳 遠藤曰人○續俳家奇人談 竹內玄々一○俳林小傳 中村光久○芭蕉隨春秋 中島秋擧○俳諧人物便覽 三浦若海　（穎原）



松倉嵐蘭（芭蕉堂歌仙圖）

蘭陵王（らんりようわう）　「陵王」を見よ。

り

李于鱗（りうりん）　「前後七子」を見よ。

李王（りわう）　「前後七子」を見よ。

里鶴風語（りかくふうご）　洒落本　一册【作者】風來山人【名稱】內題に「里鶴風語」とある。序文に里鶴は吉原丁字屋雛鶴の俳名と斷つてある。雛を鄙のひなに轉じて里としたのであらう。風語は諷刺の語の意。【刊行】未詳。但し中に出てゐる流行語で明和末年、安永初年なることが知られる。【諸本】賞奇樓叢書・滑稽文學全集・洒落本集・洒落本大系等所收。

【題材】播隨意院良石が、松葉屋瀬川と禪法問答をした逸話を換したものである。【梗概】淺草の片邊り、閑寂な庵室に住む大悟和尚のところへ、十八九の美女が十二三の女童を隨へて訪れた。和尚は色界の三昧か、摩耶夫人の再來かと思はず合掌した。美女少しくうち微笑み、妾は廓の雛鶴と申す者、ちとお話があつて參りんしたと云ふ。和尚喜んで罪深い女子の身の多くの人を迷はせた懺悔か、後生菩提のため、我等が血脈を受けに來たものであらう、奇特々々といへば、雛鶴びんとしてそんなこつちやありんせん、良石さんが松葉屋の瀬川さんとの法問答で悟られたやうに、和前の生悟りが笑止さに、ほんの生佛にならんすやう世話しに參りんしたと云ふ。和尚むつとしてせき上げるを雛鶴は騷がず、人間も生き物、色道を知らいで何の悟りと滔々と論ずる。和尚もなる程と悟る。女、和尚の膝に凭れかゝれば、和尚もあぢな氣になり、現なき折、女は飛びのき、近い內廓へ御ざんせ、必ず待つぞへ、と小褄揃へて振り向きもせぬうしろ姿、和尚ぽんやり見送り、普賢菩薩が道心を試みんとて來現ありしものか、今頃は大方白象に打乘り、西の空に行き給ふであらうと、障子の隙から覗いて見れば、おろせ駕籠に打乘り、若い者を連れて北の里へ去つた。【批評】枯木寒巖流を眞の悟道とせぬ、色道の悟りを說いたものであるが、作者の最も力を籠めたのは前半で、雛鶴が現今の佛教、僧侶を罵倒した點であらう。時代に不平を持つ作者の冷嘲が僧侶の方面に向けられた作品と見るべきである。後半の遊女の悟りには何等の鋭さをも奇警な觀察をも見出せない。　（山崎）

力婦傳（りきふでん）　滑稽本　一册【作者】風來山人【成立】安永五年【諸本】風來六々部集（寬政十二年刊）に收む。風來山人傑作集（帝國文庫）・滑稽文學全集所收。【解說】安永五年の夏から堺町樂屋新道に女の力持の見世物の興行があつた。この女は越後者で、もと大根畠の娼婦であつたが、膂力があつたので力持ちの見世物となつたのである。風來山人はこの女を材にして、治世にかゝる力婦の出るのは、恐らく武道を盛んにすべき、武士の若い者が安逸に流れてゐるのを警めるためであらうと、慨世嘲俗の意を寓したものである。「根南志具佐」「放屁論」（各別項）などと同じく、市井の些事に託して、胸中の磊塊を吐いたものの一つである。　（小池）

李嶠雜詠（りけうざつえい）　漢詩集　二卷【著者】李嶠（唐の人）【異名】「百詠」又は「百二十詠」とも云ふ。【諸本】平安朝鈔本（京都田中氏、成簣堂藏上）・鎌倉時代鈔本（東山御文庫）・南北朝鈔本（帝國圖書館）・延寶刊本・佚存叢書本・正覺樓叢書本等所收。【傳來】「唐書」藝文志（卷四）に「李嶠雜詠詩」十二卷とあるのは、「十」の字を羨したものらしく、「宋史」藝文志には「李嶠新

詠二一卷とあり、新の字は雜の字の誤で、已に舊形を失つてゐたものと思はれる。支那では夙に亡佚したが、我が國に於ては「蒙求」（別項）等と共に童蒙の課本として家傳戸誦の流行を來し、王朝時代の文人に感化を及ぼしたことも亦少くない。源光行の「百詠和歌」の如きは全く本書の體に倣つたものである。又朗詠の集註に往々本書の註を引いてゐるが、その原據は失はれて知ることを得ない。この註は序と共に張庭芳の下したものと思はれるが、「宋史」藝文志に、張氏註の「哀江南賦」を擧げながら、本書の註に及んでゐないのを見れば、早く失はれたのであらう。京都の神田氏に唐人の註本が藏せられてあると云ふ。或はこれを明かにすることが出來よう。本書の傳本は一二に止らず、又全唐詩に收錄せられたものは、諸書に散見するものを掇拾したらしく、散句を佚するものが多い。【内容】乾象・坤儀・芳草・嘉樹・靈禽・祥獸（以上上卷）・居處・服玩・文物・武器・音樂・玉帛の十二部に分ち、各部に十題（例へば乾象部には日・月・星・風・雲・煙・露・霧・雨・雪、坤儀部には山・石・原・野・田・道・海・江・河・路の如し）を選び、各題毎に五律の詩一首を詠じて纒めたものである、すべて百二十首。卷首に天寶六年の張庭芳の序があり、「藻麗詞清、調諧律雅、宏從靈運に逾え、密緻延年を掩ふ」と評してゐる。（宇野・木多）

六運圖略并辨　りくうんずりやくならびにべん　歌學書　一卷【著者】富士谷成章【成立】明和年間【解説】かみつよ、なかむかし、なかころ、ちかむかし、をとつよ、いまの世の六期に分ち、歌の歷史的變遷をのべてゐる。第一「かみつよ」は神武元年—四十九代光仁天皇天應元年、凡そ一四四一年、第二「なかむかし」は自五十代桓武延暦元年至六十五代花山院寛和二年、凡そ二〇五年、第三「なかころ」は自六十六代一條院永延元年至七十七代後白河院保元三年、凡そ一七二年、第四「ちかむかし」は自七十八代二條院平治元年至八十六代四條院仁治三年凡そ八四年、第五「をとつよ」は自八十七代後嵯峨院寛元元年至百四代後花園院寛正五年、凡二二二年、第六「いまの世」は自百四代後土御門院御宇之始至當時（明和也）、凡そ三〇〇年餘とし、これを圖示し、この時代區分に基いて、この六期の歌の變遷、その時代的特色を論じ、それ〴〵例歌をあげてゐるのである。第一の上つ世は、今の歌の道のおやで、記・紀の歌、「萬葉」その他風土記・續古記に見え、中昔以後の書にも混り入つてゐるものがある。中昔十六代は今の歌の祖であつて、今も耳遠からず、代々の歌人達の手本とした歌の時期である。水のを（清和）までが初期で、「ふかくもてあそばせ給はむよしもみえず」、この後醍醐・村上の御時までは中期で、上下よみ人多く、「ことがらおのづからうるはしくとゝのほりて」ゐる。この以後は末期で、歌は盛んになつたが、中期に比し、「すこしつくりたる姿もみえそめ」、次の期の姿をはらんでゐる。集には「古今」「後撰」「拾遺」「菅家萬葉」「六帖」等があり、「伊勢」「大和」等に見られる。第三の中頃十二代は今の歌の心のおやといふべく、初め六代を本といひ、後六代を末といふ。前期は中昔の名殘りがあつて言葉豐かに眞によき歌の多かつた時で、後期は「物明らかに晴れやかなる姿になりはてゝ心も詞もとゞこほりなく」、巧みになりすぎた觀がある。「後拾遺」「金葉」「詞花」「續詞花」「堀川百首」、その他多くの集歌合等がある。第四近昔は、「千載」等は「やゝもすれば中頃にもさしいれつべくやすらか」であるが、後鳥羽院の好ませられた姿は他と異なつてゐる。この期は家隆・定家の出た時で、姿も、前後に截然と變つてゐる。集には「千載」「新古今」「新勅撰」等がある。第五のをとつ世の文保以前は初期、元應以後は中期、永享以後は末期で、末期に至ると「やう〳〵美しさ劣りてしひてもつけたるふし」も出て來た。「續後撰」「續古今」「續拾遺」「新後撰」「玉葉」「續千載」「續後拾遺」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」「新葉」等の集がある。第六の今の世のよき歌は、をとつ世の姿である。又近昔の姿をよみ似せるものもある。が、自分（著者）もこのうちに入るのであつて、よしあしは言ひ難いといふやうなことを今少し詳しくのべてゐるのである。【價値】富士谷の學風は精微にして分析的である。強ひてくだくだしき名稱を冠する如き弊もないではない。この和歌史觀に於ても妥當でないところもあらうが、かく細かに和歌の變遷を論じたものは、この時迄なかつたといふべく、枝直の論などと共に注意すべき説である。

【附記】寛政五年御杖によつて刊行された「歌袋」中の六運辨の内容と殆ど同一であつて、御杖は父成章のこの書を殆どそのまゝ板にしたものである。（藤川）

六義　りくぎ　漢詩【名義】「詩經」（毛詩序）の詩に就いて、その性質及び體裁の上から分類した語。卽ち風・賦・比・興・雅・頌の六をいふ。而して風・雅・頌は性質上の分類で、これを稱して三經といひ、比・賦・興は體裁上の分類で、これを稱して三緯といふ。【性質】（一）風とは民族歌謡の詩卽ちはやり歌のやうなもの、「詩經」の大序に「風は風なり、教なり。風して以て之を動かし、教へて以て之を化す」といひ、又「上以て下を風化し、下以て上を風刺す」ともいつてゐるのは同じ意味である。故に當時の諸侯はその領土内に行はるゝ詩、卽ち風を採つてこれを天子に貢獻し、天子はこれを受けて樂官に列して以てその風俗の善惡美醜を考へて、その政治の得失を知る好材料とした。勿論國々の風俗によつて詞も聲も節も各別であるから總稱してこれを國風といふ。而して「詩經」には、周南・召南・邶・鄘・衞・王・鄭・齊・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳の十五國の詩が集めてあるから、普通にこれを稱して十五國風といつてゐる。（二）雅とは、朱熹は說いて「雅とは正なり、正樂の歌なり」といつてゐる。風が民庶の作であるに對して、これは朝廷の詩である。風は多く下に在る人から出てゐるに對して、これは士大夫の作る所である。從つて雅に於ては、刺る意味を敍するにしても、その文辭は頗る莊重であつて、風などとは大に異る所がある。雅には大小の相異があり、加之、古來の學者は多く正變の別を立ててゐる。「詩經」の大序には、「雅とは正なり、王政の由りて廢興する所を言ふ。政に小大あり、故に小雅あり、大雅あり」といつてゐる。蓋し正小雅とは燕饗の樂をいひ、正大雅とは會朝の樂で、釐を受け戒を陳べた辭をいふのである。小大の正雅は、倶に或は歡欣和說を以て群下の情を盡したものがあり、或は恭敬齊莊を以て先王の德を發したものもあつて、詞氣に於ても音節に於ても一樣でない。大體周の周公制作の時に定めたものであると稱せられてゐる。變小雅・變大雅に至つては、その事必ずしも同じでない。又制作された時世なども考定することが出來ない。「詩經大全」には、

「王政旣に衰へて變雅兼ね作る。大雅の音を取つてその政の變を歌へるもの、これを變大雅といふ。小雅の音を取つてその政の變を歌へるもの、これを變小雅といふ」と說いてゐる。諸國の別なく、十篇を以て一卷となし、これを呼んで什と稱してゐる。（三）頌とは、宗廟の詩を稱していふ。「詩經」大序には、「頌とは盛德の形容を美し、その成功を以て神明に告ぐるものなり」と說いてゐる。頌に周頌・魯頌・商頌の三つがあつて、その中に於て大序の說は周頌を解釋するには當つてゐるけれども、魯頌・商頌を解釋するには、當てはまつてゐない。何となれば、商頌は祭祀の詩ではあるが、併しその先王の廟を祭つてその生時の功を述べたものであるから、正しくこれは死後に於て功を頌したもので、成功を以て神明に告げたものとはいふことが出來ない。從つてその體の上から見ても、周頌とはその趣を異にしてゐる。又魯頌は僖公の功德を詠ずるを主としたもので、風と比するに大同小異である。（四）比とは、全篇譬喩を以てその義を敍したもので、朱熹は、「彼の物を以て此の物に比するなり」と說いてゐる。（五）賦とは、或る事物を述べる場合に、譬喩を用ふることなく、その事物をありのまゝに表現した詩をいふ。朱熹は、「その事を敷陳して而して直ちに之を言へるものなり」と說いてゐる。（六）興とは、前述の比と賦との兩者を合併したやうなものである。朱熹は說いて、「先づ他の物を言ひて以て詠ずる所の詞を引き起すものなり」といつてゐる。卽ち初めに他物を借りて思ひを述べる導きをなし、次に或る事物をそのまゝ述べるのである。例へば周南關雎の篇に「關々雎鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑」とあるはその好例である。而して三經と三緯とは、その分類の趣を異にして居り、篇に依つては兼備のものもあり、又その一二を偏得してゐるものもあるのは勿論である。

【六つの歌のさまとの關係】「古今和歌集」の紀淑望の眞名序に、「倭歌有二六義一、一曰レ風、二曰レ賦、三曰レ比、四曰レ興、五曰レ雅、六曰レ頌」とあり、又同じく假名序に、「そも〳〵歌のさまむつなり。からの歌にもかくぞあるべき」といひて、その歌・かぞへ歌・なぞらへ歌・たとへ歌・たゞごと歌・いはひ歌の六體を列擧してゐる。これは紀貫之が一時の作意で、漢詩を貶して和歌を揚げるために、強ひて本末を顚倒したものである。蓋しそへ歌は風、かぞへ歌は賦、なぞらへ歌は比、たとへ歌は興、たゞごと歌は雅、いはひ歌は頌に當てて書いたものであらうが、その稱呼の旣に當を失してゐるものが多いのみならず、その解釋に苦しむものが少くない。（毛詩・歌論參照）（西澤）

【參考】詩律初學鈔　梅室雲洞○詩轍　三浦安貞

六合雜誌　りくがふざつし　雜誌【刊行】明治十三年十月創刊、大正十年二月第四百七十八號を以て終刊。同三月より「創造者」と改題、一號のみにて自然廢刊。發行所は東京青年會雜誌局、後に警醒社に移り、六合雜誌社となり、日本ゆにてりあん弘道會に轉じ、最後に又六合雜誌社となつた。【名稱】六合とは英語の cosmos の漢譯によつたもの。【解說】發行當初編輯同志の意圖は基督教主義の高級啓蒙雜誌を作るにあつた。が、事實は基督教主義による學術・宗教・教育・社會・政治・文學等の啓蒙的評論研究雜誌である。最初小崎弘道が本誌を創刊した際、彼を助けて本誌の生長に努めた人々に植村正久・田村直臣・平岩愃保があり、寄稿家中最も健筆を揮つた人に高橋五郎がある。同二十年に及んで特別寄書家なる一種の同人制を設け、宗教界・思想界・評論界の名家數十名を網羅したが、これが本誌發展の第一期であつた。それ等特別寄書家中著名な人々に、橫井時雄・井深梶之助・原田助・本多庸一・德富蘇峰・金森通倫・田口卯吉・高橋五郎・竹越與三郎・桐島住吉・浮田和民・植村正久・松山高吉・海老名彈正・宮川經輝・島田三郎・平岩愃保等がある。就中、中心となつたのは橫井・原田・浮田の諸氏であつた。寄稿家には、ラーネッド、內村鑑三等の名も見える。二十七八年、發展擴張の第二期に及び、正式に編輯委員制なるものが設けられ、大西祝・原田助・松本亦太郎・岸本能武太・浮田和民・小野英二郎等、青年有爲の篤學の士がその任に當つた。殊に大西祝は三十一年外遊するまで約四年間獻身的努力を以て本誌を主宰した。それだけに本誌が評論研究雜誌として立派な面目を備へたのはこの間の事であつた。この六名の委員には時々異動があつて、橫井時雄・片山潛・小西增太郎等が參加したりした。片山潛の參加は本誌の異彩で、勿論社會主義者としてではなく新歸朝の知識として加はつたのだが、熱心に社會問題・社會主義・勞働問題等を論じた。三十一年三月、宗教的自由主義進歩主義の點で步調を一にしてゐたユニテリアン派の雜誌「宗教」と合同し、誌名は本誌を襲ふ代り、發行所はユニテリアン派に移つた。從つて編輯委員も兩派混合で、岸本能武太・橫井時雄・海老名彈正・村井知至・安部磯雄・本吉武之・佐治實然の諸氏となり、主として岸本が局に當つた。三十二年六月、岸本に代つて安部が編輯を主宰するや、毎號社會問題を提げて天下に呼號する有樣で、一時壯觀を極め、本誌の最も活潑な言論の時代であつて、河上淸・木下尙江等も寄稿した。安部辭任後、佐治が主宰し、黑岩淚香・廣井辰太郎・三並良等がこれを助けた。日露役後、三並が佐治と交代したが、本誌が哲學・文藝に殊に力を入れ始めたのは、この頃からである。四十五年一月から小山東助・內ヶ崎作三郎中心の同人制度となり、相原一郎助・內藤濯・吉田絃二郎・沖野岩三郎・一條忠衞・野村隈畔・加藤一夫・佐野袈裟美・鈴木文治・帆足理一郎の諸氏がこれに協力した。この頃の寄稿家として目立つたのは、岡田哲藏・佐藤淸・土井晚翠の諸氏である。而して、本誌の文學的貢獻は、全體に通じていへば、外國文學の紹介と文藝の研究批評とにあつた。

【備考】本誌第七號所載の論文「近世社會黨ノ原因ヲ論ズ」（小崎弘道）は、邦人がマルクスを紹介した最初の文獻として知られ、社會思想史研究家の方面には甚だ重視されてゐるものである。（鶴田（泉））

六書　りくしよ　「漢字」を見よ。

六如　りくによ　「慈周」を見よ。

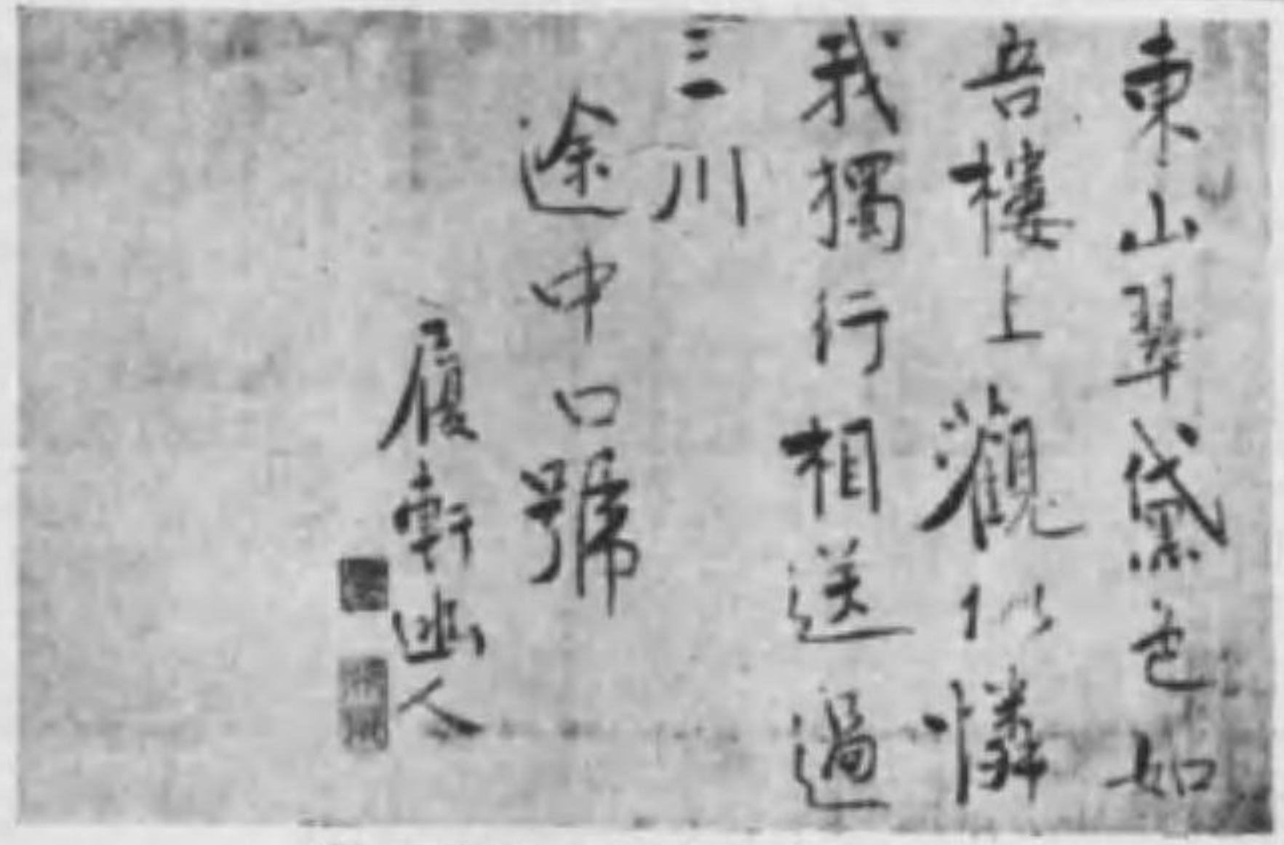
李娃物語　りけいものがたり　假名草子　一卷【名稱】正しくは「りあ」であらうが、「娃」を「桂」と同音と誤り考へた爲めか、「りけいものがたり」と呼び慣はされて來た。【成立】「近古小說解題」には、「徒然草」をひいた文があるから左程古いものでなく、天正頃足利末葉のものにやと云つてある。【諸本】古板本なし。室町時代小說集所收。【題材】唐の白行簡の撰と稱する「李娃傳」一名「義妓傳」（唐代叢書所收）の飜案。卽ち長安の名妓李娃が娼婦に珍らしい節行を敍したもので、唐の天寶中の事とし

てあるのを後光嚴帝の朝に引直し、常州の刺史滎陽公が薩摩守、その子の公子が中將、娃後に汧國夫人が白拍子李娃に當る。行簡は白居易の季弟、この小說は蔣防撰の「霍小玉傳」と共に、唐代艷情傳奇中の雙璧と呼ばれる（國譯漢文大成文學部第十二卷、晉唐小說に國譯が收めてある）。

【梗概】後光嚴院の御宇、薩摩守藤原隆の左衞門安義の子中將安則、十三歲にして和漢の學に秀で、父母も我が家の千里の駒と誇つてゐたが、十六歲の時上洛して修業するうち、嵯峨の館を訪うての歸途七條邊で琵琶を調べてゐる美女を見染め、親友飛驒三郎國光からその全盛の白拍子なる由を聞き、遂に囊中の空しくなるまで通ひ續けた末、懷を見透かした女に謀られて捨て去られ、惡疾にまで惱まされた。哀歌をよくする所から西洞院の哀歌の黨に加はり、東洞院との歌競べに竹聲の曲を歌うて妙技を示したが、偶々上洛勤番中の父に見出され、太刀の脊で折檻せられ哀歌の黨にも見放されて路頭に食を乞ふうち、圖らず五條邊で前に姿を晦ました白拍子李娃の手に救はれた。先非を悔いた女は親切に看護して安則の病を癒し、且つ資金を補助し、勵まして研學させ、能才天下に知らるゝに及んで朝廷の試驗に應ぜしめ、その結果大納言に任じ、河內掾非を賜はり、赴任の途薩摩から上つて來た父と再會し、歡宴の中に掾非の新館で改めて安則と李娃との婚儀が擧げられ、後五子を設け、李娃の母は別館に奉長御前と册かれ、一家めでたく榮えた。（島津）

【參考】近古小說解題○室町時代小說集解題

履軒りけん　儒者【姓名】中井積德。字は處叔。通稱德二【生歿】大阪に生れ、文化十四年（一八一七）二月十五日歿す。享年八十六。【閱歷】甃庵の子、竹山の弟。五井蘭洲に就いて宋學を學んだ。研學の結果、大に發明する所あり、必ずしも宋學を墨守しなかつた。その文章は「左傳」に倣ひ、圓滑にして奇趣がある。竹山の死後、懷德書院を監して子弟を敎授した。大正三年十一月從四位を贈られた。【著作】七經雕題略二十四卷○七經逢原八十卷○昔昔春秋一卷等。（佐久）



中井履軒筆蹟（先哲書影）

俚言集覽りげんしふらん　語學書　二十六卷九册【著者】村田了阿といふが、疑ひがある。大田方かとの說もある。【諸本】寫本で傳はつてゐたが、明治三十三年、井上頼圀・近藤瓶城の二人が增補訂正し、組織を改めて「增補俚言集覽」（三册）と題して刊行した。【內容】主として後世の俗語を集めた辭書である。凡例に曰く「此集鄙俗ヲ先トシテ雅調ヲ後トシ、當今ヲ主トシテ上古ヲ賓トセリ、鄙俗ハ人々ノ知ルトコロ、當今ハ耳目ノ及ブ所ナレハナリ」と。その排列の順序は、凡例に「此集總ルニ五十音ヲ以テス、五韻アイウエオヲ以テ五集トナス、（阿集、伊集、鄔集、衣集、於集是也）每集橫列アカサタナハマヤラワヲ以テ次序ヲナス、每例一母ノ言ヲ首母トス（アギレアハ是色キレハ切也）（アハ一母ナリ）二母以上ノ言ハ言第二文字亦橫列ノ韻ヲ以テ次序ヲナス」といふ如く、普通のものとは違つてゐる。「增補俚言集覽」に於ては原本の五韻橫呼の組織を改めて、普通の五十音順にし、又原本は五韻橫呼の組織を用ひながら、一方に類に從つて集めてゐるが、これを凡て五十音順に改めてしまつた。又增補本は語彙にも解釋にも增補したものが甚だ多い。增補した語彙は德川末期の小說類から蒐集したもの、明治になつて集めた諸國の方言、動植物の異名等である。かくて增補本は、原本よりも遙かに豐富な內容を有し、使用にも便宜になつてゐる。【價値】本書は「雅言集覽」（別項）に對して作つたもので、その表題も亦「雅言集覽」に對して附したものと思はれる。江戶時代に於ては、所謂「雅言」ばかりが研究せられ、口語は鄙俗なものとして殆ど顧みられなかつたのであるのに、本書の如きが現はれたのは頗る注目すべきことである。本書はかの「物類稱呼」（別項）と共に、江戶時代に於ける口語の二大研究書であり、語彙の豐富な點に於ては、「物類稱呼」の比ではない。近世語の研究に對して、少からぬ貢獻を爲すものである。（龜田）

里紅りこう　「盧元坊」を見よ。

理齋隨筆りさいずいひつ　隨筆　初編六卷【著者】志賀忍【名稱】「理齋隨意」とも題してゐる。【刊行】天保九年【諸本】名家漫筆集（續帝國文庫）・隨筆大觀第二卷所收。【解說】著者が幼年の頃からの讀書録に任せて、和漢の書籍通覽の際に、會心の條項を抄錄して備忘に供したものが、老年に積り積つて百卷ばかりになつた中から、數百則を選んで先づ初編六卷六册を作つたのが本書である。二・三編各六卷刊行の豫定であつたけれど、實行せられなかつた。但し第二編は、本書の奧付に「全六卷在刻」としてあるが、何かの事情で未出に了つたものと見える。本書は四男原義（德齋）の校合、三男谷城柳川（寬信）の調査に成る。所收の題目は極めて廣汎で殆ど定限はないが、史上人物の逸事、古今の文學談、雅俗の風習談、手近い醫療談・修養談等の外に、自家の感想談をも加へ、主として俗人の通讀に便した趣が著しく、逸事談なども新聞よりは人口に膾炙したものが多い。書物の體裁も當時流行の讀本類を學んで、本文傍訓附、挿圖澤山にしてある。隨つて一時は俗間に大に行はれたと云ふ。每卷の首に、六玉川の歌及び風景畫を配置してある。これは全部が六卷になつてゐるからの思ひ付である。內容は、卷一に六孫王の神龍池以下十九條、卷二に熊谷次郎直實以下十七條、卷三に神の德和歌の德以下三十五條、卷四にしら拍子の起り以下二十七條、卷五に漏刻の博士以下九十九條、卷六に素人ねどしの俳諧以下六十四條を收めてゐる。文政六年馬島安節、同年杉本良、天保八年原義の三序の次に、著者の副言（凡例）がある。【著者小傳】志賀忍。字は子填、通稱理助、號を理齋・天錫山人・叡北山樵等と云ひ、幕府に仕へて累進して大阪金奉行になつた。和漢の

學に通じ、文才もあり、殊に狂歌を能くし、我樂多老人と號した。天保十一年正月十二日歿す。享年七十九。隨筆數種の中に、隨筆「三省錄」がある。（和田）

リズム　美學【獨】Rhythmus.【佛】Rythme.【英】Rhythm.【解說】韻律・律動・旋律、或は節奏と譯す。稀に調和の意味にも用ひられる。生理的、或は物理的現象について、或る同樣な出來事が週期的に繰り返されることを指していふ。心理現象として說明すれば、適當な速さで、或る刺戟系列が規則的に反復されると、それの時間的變化や或は强勢化のために、それ等の時間的に與へられる印象は統團化される。かういふ心理上の現象をリズムと云ひ、聽覺とか觸覺に與へられる時に最もよく感ぜられる。その起因は吾人の期待の感情とか、運動感覺とか、或は規則的な生理的律動に對する注意作用にあると云はれるが、とにかく、吾人の感情の側面に效果することが多い。美學乃至は藝術學に關する限り、リズムは音樂美の重要な要素とされ、從つて詩文學の美の一面もリズムから說かれる。リズムの與へる效果と勞働との關係からビュヒェルは音樂藝術發生の必然性、並にその功利性を說いた。「詩に於けるリズム」は言葉のもつ綴音を一定の單位に按配することから來るが、各國語の性質の相違によつて言葉の排列の仕方に幾分の相違があることは當然であるが、リズム的效果の統制をなすものは言葉の音のアクセント、及びセジュール（休斷）である。「散文」に於ても、言葉の音の律格を重んずれば、音樂的に表現することは出來るが、散文小說などについては、別に意想の思想とか、その他の內容的なるものを交互に組合せ、敍述する場合などに於てリズム的であるなどといふことがある。その他美術に於ても線や、色彩、形などの一定の排列反覆によりリズム的效果を與へる工夫は常に見られるが、特に描線が一定の秩序ある律動的效果を與へることは、線の把握が吾々の運動感覺に深く關係することから見て當然である。現代の美術運動のうち、リトミズム（律動主義）と名づけられる一派があり、カンヂンスキー等の未來派（別項）に於てすでにその現はれがあるが、彫刻家に於てもヴァウエルの如き直線・圓、種々な曲線を利用して運動感、リズム的效果を與へることを試み、深い精神の表現を目標としてゐる。（立體派參照）

【參考】Bücher: *Arbeit u. Rhythmus.* ‖ M. Braunschwig: *Le sentiment du beau et le sentiment poétique.* ‖ *Bericht d. dritter Kongress f. Aes. u. allg. K. W. 1927.* ‖ Lipps: *Aes. Bd. II.* ‖ M. Ettlinger: *Zur Grundlegung einer Aes. d. Rhythmus. Zeitsch. f. Psychol. Bd.* 22.（村田）

理想化りさうくわ　美學【獨】Idealisierung【英】Idealization.【解說】美意識（別項）に於ける觀念化と同義である。故に、假象說（別項）に於て、現實の對象を假象として觀ずる場合も、主觀の現實の感情を美意識に於ては假象感情として感ずることも、或は自己の體驗をよそびとの體驗であるかの如く觀ずることも皆理想化に外ならない。次に美的態度に於ける具體的實質的方面に關して云へば、（一）多樣な對象の中に一貫してあるところのもの、統一的なもの、對象の本質と思はれるものを表現する場合。即ち對象の類型を表現することこの場合は特に類想化といふ。所謂古典的な形式美表現の如きは一の理想化の場合である。（二）かういふ理想化的表現がなほ進むと、現實客觀には具體的に存在しない形式・表現を行うて、深遠幽玄な本質的意味をあらはす象徵化となる。例へば丸い三角、赤い白鳥といふ表現の如き、この理想化の一つの場合である。（三）理想化を行ふ場合、創作主觀の理想とし、價値とするところのものを、（イ）消極的に現はす場合、卽ち理想の主人公、作者が好むものを描くにしても、行爲や人間的感情その他そのいゝところ、美しいところを主に描く場合。これは日本の勸善懲惡の劇や、浪漫的戀愛小說の主人公の描寫表現などにその例を見ることが出來る。（ロ）この度が進んで、作者のみでなく一般的に人類の理想とか最高最美のものを表現する場合、卽ち宗敎藝術に於ける如く、超人間的なものの表現にまで、積極的に理想化される場合もある。造形美術の場合、對象を寫實的に寫すといふ態度であつても、對象の選擇とか、或は一般的に云つて雜多な形式の中に統一ある構成を行ふことが、美的表現に要請される限り、やはり理想化があるべきであり、この意味で、樣式（別項）化といふことは理想化であり、樣式はつまり創作に於ける價値實現である。（樣式・理想藝術・創作の心理・假象說參照）（村田）

理想藝術りさうげいじゆつ　藝術論【解說】一般的に云へば、創作活動に於ては多かれ少かれ理想化（別項）の事實が行はれる限り、また藝術的表現が單なる客觀對象の摸倣（別項）でないとされる限り、大概の藝術は理想藝術である。しかし作家の創作の態度や主觀表出の程度に應じて、相對的意味に於て理想化の傾向、特色がより多く現はれてゐるものを、理想主義的藝術（Idealistic art）と稱して、寫實主義（別項）乃至自然主義（別項）藝術と區別することが一般に行はれる。理想藝術（Ideal art）といふ名稱は藝術の分類（別項參照）に關して、ヴントが用ひてゐる。彼によれば、自然の摸倣を目的とする摸倣藝術に對して、表現の對象の中に、作家自身の理想を見出すことを目的とする藝術、卽ち單なる自然形象の摸倣だけに止まらず、自己の理想とするところのものを表出しようとする藝術を理想藝術とした。故に元來非摸倣的形象の藝術である建築の如きに於ても、作家の主觀・想像が加はり、理想化が行はれるから、貴人の家、神や死人の靈を祭る家といふやうな理想藝術としての建築藝術が現はれる。而してこゝから建築の內外を飾るために彫刻や繪畫も促されて來るし、又繪畫だけについても、理想を見出すことを目的とするとき、遠近法などが用ひられて來て、大に發達することになるのであると說いてゐる。（理想化參照）

【參考】Wundt: *Die Kunst.*（村田）

理想主義りさうしゆぎ　藝術論【英】Idealism.【佛】Idealisme.【獨】Idealismus.【名義】ギリシャ語の idea 卽ち模範・典型の意味から出た語。哲學上ではカント等の觀念論を指す。實在論又は自然主義の反對。藝術上では寫實主義・自然主義（各別項）の反對のものを指す。【解說】（一）哲學上の理想主義は、デカルトに發し、スピノザ及びライブニッツを經てカントに至つて大成されたもので、それによれば、外界の事物は主觀に對する單なる現象に過ぎない。經驗的外物を知る可能性は、空間と時間とに條件づけられる。從つて事物は絕

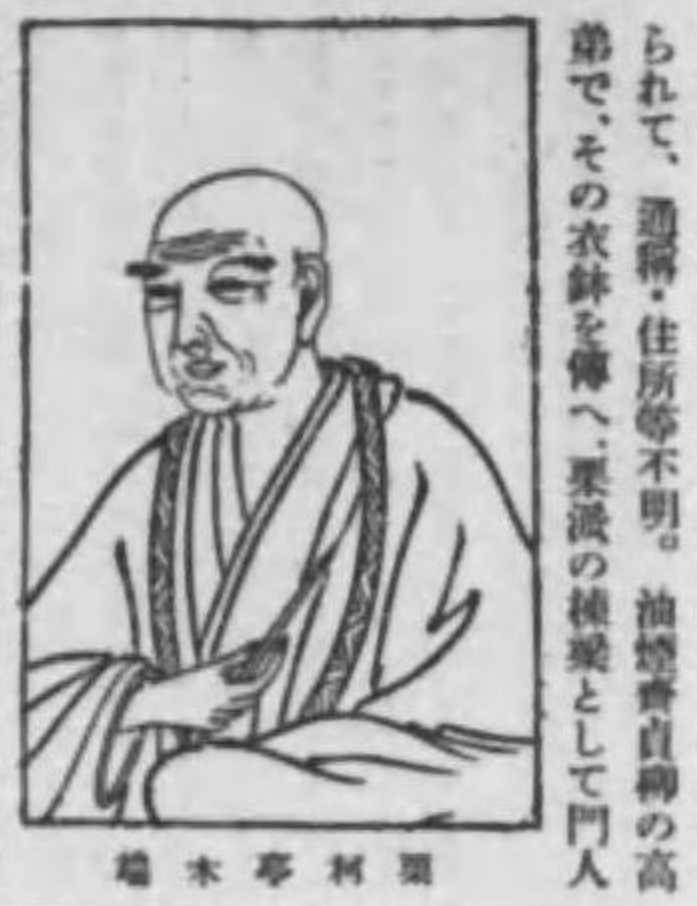
えず變化してゐるので、その結果、われ〳〵には在るがまゝの事物は分らないで、ただ主觀の媒介を通してのみその事物を知るに過ぎず、眞の實在は超感覺的なもの、即ち Idea であるとする。（二）藝術上に於ける理想主義は超感覺的なもの、現實以上のもの、即ち理想美といふやうなものの表現を主張する。從つてそれは常に自然主義乃至現實主義などに對立するが、それは藝術一般に現はれる一種の特色を抽象的概括的に表示する概念で、歷史的意味に於ける或る特定の主義や立場を指す言葉ではない。この意味の理想主義を最もよく發揮したのは、ウィケルマン、レッシング、ヘルダー等ドイツの藝術家である。又カントの如き論理的な學究的な學者ですらも、「判斷力批判」を著はして藝術的理想主義を確立し、ゲーテ、シルレルは理想主義と藝術とを一體とし、シェリングは藝術に於て最高の精神活動を見出さんとし、理智的なヘーゲルでさへ藝術を絶對精神の現はれであると主張した程である。殊にカントは藝術活動を認識及び道德と並べて人類生活の三方面の一と認めた。かく理想主義は、藝術を他の目的のための手段と考へるものにあらずして、飽くまでそれを獨立の價値、獨立特殊の絶對價値としたのである。理想主義者がかく認めるに至つた根據は、多くカントの哲學であつて、カントによれば、藝術活動は實際活動・道德活動及び概念活動とは區別さるべきもので、嚴格なる獨立特殊の直觀的感情である。これが即ち近代美學の根柢となつたもので、理想主義者はこの説に基づいて、藝術は感性の中に感性以上のものを宿すこと、自然の中に超自然を宿すこと、感覺の中に理想を宿すこと、具體物の中にイデーを示すことを主張するのである。即ち variety は自然であつて、その中に宿る unity は超自然であるといふのが理想主義者の藝術上の主張である。而して藝術は、ただ單に特殊な快感を與へるものであるとか、又は一種の慰藉を與へるものとかいふだけでなく、直に自然以上の何ものかを與へなければ已まない一種不可思議な價値であつて、吾々をゐながらにして自由の世界、絶對の世界、從つて神祕の世界に導くものであつて、決して自然の模倣・摸寫に止まらず、何等かの意味に於て、必ず超自然性を示すものであるといふのである。理想主義は自然乃至現實以上の絶對的價値を求むる點に於ては、共通であるけれども、これを細かに檢すれば、甚だ多岐に亙るが、浪漫主義・人道主義（各別項）の思潮は、その主なる主張であつて、浪漫主義の神祕的な點を極端に押し進めて行くと、神祕主義・象徵主義（各別項）ともなる。なほ理想主義の語は、藝術の表現又は樣式の傾向に就いて言はれる場合もある。〔宮島〕

李太白集 りたいはくしふ　詩文別集　三十卷・附錄六卷【著者】李白【傳來】李白の詩文は嘗て天寶の末年、魏萬に命じて集錄せしめたが、亂に遭つて失はれ、晚年更に自ら草稿を一族の陽冰に授けて序を作らしめた。これが原本であるが、序中に卷數を云はず、「舊唐書」本傳には「文集」二十卷と云ひ「新唐書」藝文志には「李白草堂集」二十卷李陽冰編と云ふ。宋に至つて樂史が序を作り、翰林の歌詩は李陽冰が纂めて「草堂集」十卷としたと云ひ、更に史が別にその歌詩十卷を收め、合せて二十卷とし、號して「李翰林集」と云ひ、又その賦・表・書・序等を輯めて、「李翰林別集」十卷とし、すべて詩七百七十六篇、文若干を得たと云ふ。熙寧中、宋敏求が廣く逸稿を搜り、又詩二百二十五篇を得てこれを舊集に合せ、析つて二十四卷とし、雜文を六卷に分つて都合三十卷とした。元豐中、晏知止がこれを刻して以後弘く行はれ、樂史の本は遂に佚した。南宋の楊齊賢、元の蕭士贇は各々これに註し、明に入つては、林兆珂の「李詩鈔述註」十六卷・胡震亨の「李詩通」二十一卷等があつたが、清の王琦が諸本を參校し、逸篇を益し、纂めて三十卷とし、別に年譜外紀を集めて附錄六卷とし、最も具はつてゐる。我が國には、古く王朝時代に傳はり、「見在書目」に、「李白歌行集」三卷を附錄し、降つて延寶七年には、楊齊賢の「分類補注本」を刊行してゐる。【內容】王琦本の目を擧ぐれば、古賦一卷・古詩一卷・樂府四卷・古近體詩十九卷・表書共一卷・序文一卷・記頌讚共一卷・銘碑祭文共一卷・詩文拾遺一卷である。【價値】文宗の右文に駢儷を極めた盛唐詩壇の最高峰に在るもの、世常に杜甫の詩聖に對し、詩仙と稱してゐる。その飄逸放曠の性格に發し、靈妙入神の着想を以て悠々自然に放吟して千古に絶飛し、後世詩人の太宗として欽仰するところである。【註釋書】分類補注李太白集三十卷（宋楊齊賢集注・元蕭士贇補）○李太白詩集注三十六卷（清王琦）。【著者小傳】李白字は太白、青蓮と號す。「舊唐書」には傳へて山東の人と稱すと云ひ、「新唐書」には隴西成紀の人と云ふも、李陽冰及び魏顥の序に據れば蜀の出である。涼武昭王九世の孫に當り、聖曆二年（或は大足元年）に生れ、十歲既に詩書に通じ、長じて後四方に遊んで濟風を友とし、賀知章等八人と飮中八仙の遊をなし、安史の亂に一時獄に繫がれたが、郭子儀のために免され、爾後悠々江南の風物を樂しんで、肅宗の寶應元年（皇紀一四二二）病を得て歿した。年六十四（或は六十二）。〔宇野・本多〕

麗澤園隨筆 りたくゑんずゐひつ　隨筆　二卷　寫本【著者】未詳【名稱】初め「故事雜譚」と題した趣に見える。【解說】卷一衣服門の下に、上下・道服・白衣・踏皮等八條、飮食門の下に、茶・香物等四條、器用門の下に、琴・印籠・巾（巾著類）・風呂敷・鞍鐙等十六條、館舍門の下に、道・茶の湯・賦物・諷・能等十五條、歲時門の下に、門松・萬歲・鳥追・走百病等十條、人事門の下に、苗字・佛工・普請・大工・左官・瓦工等十一條を收め、卷二には人事門を承けて、かちん染の事・壇盃・しきみをさす事・團子の事・盧紫達磨の事・鬼門の事・味噌の事・楊枝の事・風折烏帽子の事・月中兎の事・しきせ・彼岸・八朔白小袖・格天井・蘇命路の山の歌等の雜件七十餘條を擧げてゐるが、順序も次第もない。俗傳的の考證が多い。〔和田〕

六花 りくくわ　俳人【本名】實谷良哉【流派】碧梧桐門【閱歷】明治十年七月十二日、東京淺草馬道に生る。同三十年六月、下谷三の輪梅林寺（禪宗）の寶を嗣ぎ、現にその住職である。同三十三年、俳句に志し、四十年以後、新傾向運動の興起してより、中堅作家として名があり、東京俳句會を主宰して同人研究の道場たらしめたことなど功績少くない。新傾向の後期に至つては沈滯の風である。作句は「日本俳句鈔」第一・二集や「現代俳句集」（現代日本文學全集）に見られる。著作に句集「寒烱」「梅林句屑」等がある。〔荻原〕

栗柯亭木端 りつかていぼくたん　狂歌師【本名】未詳【生歿】生年未詳。安永二年（二四三三）七月七日歿す。【墓所】大阪天王寺東門善法寺



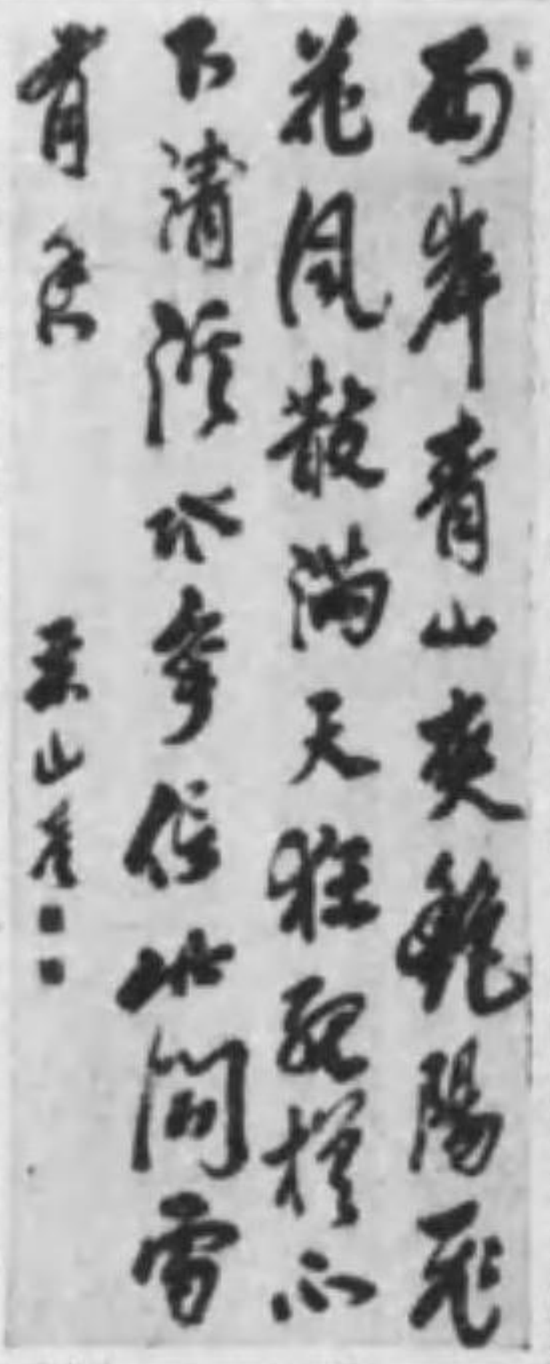
栗柯亭木端

【閱歷】大阪の一向宗某寺院住僧とのみ傳へられて、通稱・住所等不明。油煙齋貞柳の高弟で、その衣鉢を傳へ、栗派の棟梁として門人を養成した。關西の狂歌壇を維持したのは實にこの人の力である。狂詠多き中に、「世の中を何のへちまと思へどもぶらりとしては暮らされもせず」といふ一首は、最も人口に膾炙されたものである。【著書】狂歌手なれの鏡一冊（寬延三年刊）○狂歌かゞみ山三冊（寶曆七年刊）○狂歌叢の塵一冊（同十三年刊）○狂歌詞寸鏡一冊（同十三年刊）○續狂歌詞寸鏡一冊（明和二年刊）○由緣齋狂歌調一冊（同三年刊）○狂歌友かゞみ一冊（同四年刊）○狂歌栗園實一冊（天明年間刊）〔野崎〕

律管 りつくわん「調子笛」を見よ。

六國史 りつこくし　歷史書【解說】奈良朝より平安朝にかけて、勅を以て次々に撰修せられた六箇の國史、即ち「日本書紀」（神代より持統天皇まで）、「續日本紀」（文武天皇元年より桓武天皇延曆十年まで）、「日本後紀」（桓武天皇延曆十一年より淳和天皇天長十年二月まで）、「續日本後紀」（仁明天皇天長十年二月より嘉祥三年三月まで）、「文德實錄」（文德天皇嘉祥三年三月より天安二年八月まで）、「三代實錄」（清和天皇天安二年八月より光孝天皇仁和三年八月まで）（以上各別項）をいふ。〔坂本〕

栗山 りつざん　儒者【姓名】柴野邦彥。通稱彥輔【別號】古愚軒【生歿】享保二十年讚岐國高松の八栗山下に生れ、文化四年（二四六七）十二月一日江戶に歿す。享年七十二。【閱歷】初め後藤芝山に學び、後、東遊して林氏の門に入る。學成るに及び、阿波藩に仕へて儒員となり、祿四百石を食んだ。後京都に住して宋學を講じた。天明八年幕府の召に應じて江戶に赴き、昌平黌教官となり、幕命を受けて林述齋・岡田寒泉等と學政の改革を行ひ、異學を禁じて朱子學の盛行を謀る。明治四十四年六月從四位を贈られた（寬政の三博士、異學の禁參照）。【著作】栗山文集二十二卷（別項）○雜字類編七卷。〔佐久〕



柴野栗山筆蹟（高野辰之氏藏）

栗山文集 りつざんぶんしふ　漢文集　六卷五冊【著者】柴野栗山【刊行】天保十三年【解說】卷一には雜著六、卷二には序記六十四、卷三には書十八、卷四には墓碑二十五、誄一、祭文五、啓箋三、卷五には贊銘三十八、卷六には題跋七十、凡て二百十三篇を收めてある。我が邦人の漢文は所謂寬政の三博士（栗山はその一）に至つて、初めて觀るに足るものとなつた。諸體皆誦するに足る。〔佐久〕

律詩 りつし　漢詩【名義】絶句（別項）と共に近體（漢詩參照）に屬する詩の體の名である。律詩の名稱は「尙書」堯典の「聲は永きに依り、律は聲を和す」から出てゐて、聲律ある詩の意味である。併し苟も詩たる以上は、如何なる體の詩でも聲律のないものはないわけであるが、今日律詩といへば必ず初唐の詩人沈佺期・宋之問の創めた詩體に限つてゐる。これは二家の詩が、研練精切を極め、聲勢を穩順にしてゐるからである。而して彼等の詩風を律詩と稱することは、既に唐代から行はれてゐたことが、唐の元稹の唐故檢校工部員外郎杜君墓誌銘に徵しても明かである。今日律詩と稱するものは、必ず八句の詩であるが、唐宋時代には必ずしもさうではなかつた。或は絶句をも律詩の中に包含したものもあり、或は六句の詩を稱して律詩といつた例もあり、又甚だしきは百句以上の律詩もあつた。それが必ず八句に限定せられるやうになつたのは、元・明の際であつた。【構造】律詩は八句から成り、第一・二句を起聯、第三・四句を頷聯、第五・六句を頸聯、第七・八句を尾聯といふ。この四聯には異稱が多い。皎然の詩式には起聯・頷聯・頸聯・結句といひ、嚴羽の「滄浪詩話」には發端・頷聯・頸聯・落句といひ、作文大體には發句・胸句・腰句・落句といつてゐる。併し起聯・頷聯・頸聯・尾聯といふ名稱が、最も普通に用ひられる。起承轉合（別項）を以て律詩の四聯に配當した學者もあつたが、併し今日はそれは絶句に施すことになつてゐる。この四聯の作法は起聯は狂風が浪を捲いて、その勢、恰も天に滔せんと欲する如くなるが宜しく、最も陡頓を戒める。頷聯は驪龍の珠を善く抱いて、脫しないやうな趣が必要で、促迫の感のないやうにせねばならぬ。頸聯は疾雷が山を破つて、觀る者をして駭愕せしむる如くにするのが宜しいので、最も落魄の趣を戒める。而して尾聯は高山から放たれた石が、一去して復た廻らざる如くにするのが最妙で、斷送とならぬやうにせねばならぬ。又頷聯・頸聯の二聯は、必ず對句（別項）にすることを忘れてはならぬ。律詩の生命はこの對句にあつて、律詩の巧拙は、一にこの對句の巧拙に左右されるものであるから、古來の詩人は、皆心血を玆に傾注してゐる。律詩の押韻法は、五言なれば第二句・第四句・第六句・第八句のそれ〴〵末尾の文字に韻を押し、七言なれば第一句・第二句・第四句・第六句・第八句のそれ〴〵末尾の文字に韻を押す。變格として、七言律詩で第一句に韻を押さぬもの、五言律詩で第一句に韻を押したものなどもある。最も特殊なものになると、兩韻詩といつて上下の句に互に韻を押したものもあるが、これは詩人の遊戲であつて、素より法とするに足らぬものである。次に五言律詩一篇四十字、七言律詩一篇五十六字の平仄式を圖示すれば左表の如くである。五言でも七言でも、第一句の第二字が平字であるものを平起式、仄字であるものを仄起式と稱する。

○五言律詩の平起式

第一句	◑○○●●	起聯
第二句	◑●●○○	
第三句	◑●○○●	頷聯
第四句	◑○◑●○	
第五句	◑○○●●	頸聯
第六句	◑●●○○	
第七句	◑●○○●	尾聯
第八句	◑○◑●○	

○五言律詩の仄起式

第一句	◑●○○●	起聯
第二句	◑○◑●○	
第三句	◑○○●●	頷聯
第四句	◑●●○○	
第五句	◑●○○●	頸聯
第六句	◑○◑●○	
第七句	◑○○●●	尾聯
第八句	◑●●○○	

○七言律詩の平起式
第一句◑○◑●●○○
第二句◑●◑○◑●○　起聯
第三句◑●◑○○●●
第四句◑○◑●●○○　頷聯
第五句◑○◑●○○●
第六句◑●◑○◑●○　頸聯
第七句◑●◑○○●●
第八句◑○◑●●○○　尾聯

○七言律詩の仄起式
第一句◑●◑○◑●○
第二句◑○◑●●○○　起聯
第三句◑○◑●○○●
第四句◑●◑○◑●○　頷聯
第五句◑●◑○○●●
第六句◑○◑●●○○　頸聯
第七句◑○◑●○○●
第八句◑●◑○◑●○　尾聯

以上の如く、律詩は八句を以て普通の形式となすのであるが、排律若しくは長排と稱して、十句以上十二句、十四句、十六句、更に長きものは百句以上のものがある。排は排列の排で、ならべる意味である。排律にも五言と七言との二體があるが、五言が多く作られる。しかも十二句を以てその正式とされてゐる。起聯と尾聯とを除いて他の聯は皆對句にするのである。平仄も押韻法も、すべて普通の律詩に準ずればよい。但し普通の律詩に於ては●○○●●○の如くに孤平になつても、さほど嫌はれてはゐないが、排律に於ては嚴律の正を嚴守して、必ず○○●●○の如くにせねばならぬ。

【参考】初學詩法（貝原篤信）○詩格集成（長山貫）○詩轍（三浦晋安貞）○詩學逢原（祇園瑜）○丹丘詩話（芥川煥）○詩律兆（中井積善）○詩境骨髓（松村良猷）○唐詩平仄考（原支淳）○諸體詩則（林義卿）○作詩志彀（山本北山）○詩法正義（石川凹）○作詩質的（冢田大峯）○詩式（皎然）○滄浪詩話（嚴羽）○詩藪（胡元瑞）○支那文學考（兒島獻吉郎）　（西澤）

立身大福帳（りつしんだいふくちやう）　浮世草子　七巻【作者】唯樂軒の署名がある。【刊行】元祿十六年板。【諸本】江戸時代文藝資料第二所收。

【梗概】〔巻一〕勢州松坂の川里喜兵衛は三十四歳の時に一家離散し、鍋釜まで賣拂ふ窮境に陥つたが、海道筋の人夫となり、その才覺を認められて、遂に江戸で土木請負を營むやうになつて巨富を致した。〔巻二〕泉州堺の商人小西道圓方の丁稚市太郎は主人の愛女の美しい姿に思ひをかけ、聟にならうとして粉骨砕身する。道圓が西國廻船問屋を營んで失敗した後をうけ、僅か三十貫目を資本として同じ廻船業により、一年間に見事千五百貫の銀を得、十一年間思ひつめた一念を達して小西家の聟となり、子孫相續いで繁昌した。〔巻三〕大阪すりがらしの久三は永年の奉公に二十軒を經めぐつた後、志を立てて鎌の仲買人となり、買占めの思はくが當つて、十五箇月間に三十八貫目を儲け、長崎の瓦商大賀や太左衛門の一人娘の聟に入り、一代に數千貫の主に經上つた。〔巻四〕都新在家松屋某の後家は、夫のあとを守つて手代三十六人を使ひこなして繁昌する。或る時得意筋の殿様の御用を他に取られてしまつた。茂兵衛といふ北濱の米相場で失敗し、大阪から流れて來てその頃松屋に奉公してゐた手代が、十一歳になる幼主人淸之助に同伴して京より江戸に下り、その才覺で、再び御用を仰せつかる。それより茂兵衛は、たつて望まれて主家の入聟となり、四千貫の身代を蓄へて都長者講中の年寄となつた。〔巻五〕伏見新町に住む浪人只右衛門は貧困の果て、箍師とまで零落する。そこで只右衛門は、竹の買置きをして近所の貧しい職人に貸し、その手數料をまうける。次に小さい通ひ船を造つて淀川の船着場京橋あたりの夜船の乘合ひへ、うどん・そば切を賣り歩き、三年間に銀十貫目を殘した。四年目には大勢同類が出來たので、うどん賣りをやめて伏見街道筋の中程、稻荷の森の上手に酒林を出して產を造り、米の相場でまうけ、天王寺屋長左衛門といつて今伏見に一番の立身男となつた。〔巻六〕始末の帥と題し、商賣でいくら儲けても、儉約をしなければ保たぬとて、飯米の買ひやうの事以下二十七項を述べてゐる。〔巻七〕鍋かまの次第以下四十五項の家庭心得書である。

【解説】本書は、西鶴の町人物の系統をひいた致富談集であつて一歩西鶴を出てゐる。本書には志學といふ言葉が用ひられてゐる。これは西鶴の才覺といふ言葉に相當する意味を持つてゐて、更にそれに道義的觀念を加へてゐるらしい。堅實な筆致と眞摯な態度とは注意すべきである。ただ作中に於ける作者の教訓的強調は、屢々主觀の露出となつてゐる。六・七巻に至つては、衣食住に關する家庭重寶記の備忘書となり終つてゐる。そこに藝術作家としての救ひ得ざる缺陷を見る。作中の說話は當時の事實をモデルとしたものであらう。巻の三の久三の鎌の買占めの話は、「好色萬金丹」（別項）巻之一の「一の一歩の數」の中に、「鎌買ひが三千貫目の身代となつた同じためしなり云々」とあるのと同一素材に據るものであらう。（小泉）

律旋（りつせん）「調子」を見よ。

立體派（りつたいは）　藝術論〔英〕Cubism.

【解説】近代フランスを中心として發生せる一美術様式の名稱。即ちそれは初め自然形象の基本形を立體形（Cube）と考へ、この立體形を主要素として自然形象を構成して描く畫派に對して與へられた名稱であるが、後には彫刻上にも影響し、更に詩歌様式としてもこの名稱が用ひられるに至つた。この立體派は又日本では三角派・立方派とも譯されてゐる。この派の畫家の一人レヂェの作風は、立體形の中でも圓管形を主として用ひるので、圓管派（Tubism）と呼ばれる。又立體派は、自然形象の立體面を現はすために同一の對象を種々な觀點から同時に描き込むので、未來派と共に同存主義（Simultaneism）とも呼ばれる。この立體派といふ語は、一九〇九年のアンデパンダンの展覽會に出品された立體形のあるブラックの靜物と風景との二枚の繪に對して、批評家のヴークセルが立體派（Cubisme）といふ語を用ひたことから始まる。

【沿革】立體派の樣式は、スペイン生れのパブロ・ピカソとフランス出のヂョルヂュ・ブラック（Georges Braque. 1882—）との二人の畫風によつて生起する。ピカソはセザンヌの立體的形象を認め、又アフリカのニグロの彫刻によつて立體的形象の單純化を暗示され、遂に一九〇七年の初め、人形のやうな立體的な女を描いた。これが立體派の畫風の起原となる。一方、ブラックはマティス（Matisse）、ドゥラン（Derain）と共に色の研究をしてゐたが、ドゥランが形象の研究を始めたことに影響されて、一九〇七年以後形象の研究を始め、一九〇八年の終りにはピカソと交通した。更に一九〇九年には、ピカソが凹浮彫を始めて繪畫と彫刻とを結合しようと試みた。これが後の彫畫（Skulptomalerei）の起原となつた。一九一〇年の初め、ピカソが色彩を光の描寫の手段とせずして、それ自身を表現の手段とするに至つて、益々具體的自然形象と離れ、抽象的な立體面の構成となつた。かくしてピカソとブラックの畫風が多くの畫家の上に影響した。一九一一年のアンデパンダンの展覽會に至つて、初めてその四十一號室に於てこの立體派の作品が集められ、こゝに立體派第一回の展覽會が開かれた。同年の十一月にパリの「現代美術會館」でも開かれ、翌一九一二年にはアンデパンダンのサロンで開かれ、同年五月にはスペインのバルセロナ、六月にはフランスのルーアンで開かれ、こゝに至つて立體派の樣式が一般的に普及された。

【参考】Gleizes & Metzinger : *Du Cubisme.* Paris, 1915. ‖ Gleize, A. : *Du Cubisme et des Moyens de le comprendre.* Paris. 1920. ‖ Henry, D. *Der Weg zum Kubismus.* München. 1920. ‖ Apollinaire, G. : *Les peintres Cubistes.* 1915. ‖ Raynal, M. : *Picasso,* München, 1921.　（渡邊）

律呂（りつりよ）「調子」を見よ。

裏店譴語（りてんけんご）　隨筆　二巻一冊【著者】江東山人（本名未詳）【別名】世俗隨筆【解説】武藏國豐島の鄕の隱士某、家主德左衞門の家の祝宴に招かれた時、僧侶・神主・俳人等と會して所見を聞はすに擬して、寶曆頃の時弊を摘非した遊戲半分の隨筆である。巻一に浮房子罵俳人、隱子罵浮房子、隱士打俳者等の諸條、巻二に庸僧伏淸談、守屋・馬子評、隱士辨僧國、富士講俗案評等の諸條を收む。寶曆五年の著者自序がある。（和田）

吏讀（りと）【解説】吏讀は吏道・吏頭・吏吐等とも書し、朝鮮にて漢文又は朝鮮文を讀み下す際、語句の下に添加せられる朝鮮語起原の助詞・助動詞等で、漢字を以て書き表はされたものをいふ。恰も我が國の祝詞・宣命に於ける送り字と似たものがある。その起原は朝鮮國字諺文の創制以前にあることは勿論であるが、その以後と雖も場合によつて使用せられ來つた。抑々朝鮮に於ける漢字の傳來は餘程古いといはねばならぬ。「魏志」東夷傳、半島諸民族の記述をなせる中に、漢字を以て國名・地名・事物名等を書き表はせるものを見ることが出來るが、それ等の中には朝鮮人常用の書方に據つたものもあつたらう。その後支那文物の移入と共に、半島人は日に月に漢字に親しみ、終には漢字の音訓を自由に利用して各種の思想を文字の上に書き表はすことに成功した。今日「三國史記」「三國遺事」その他の古書及び金石文等に見られる地名・人名・官職名・事物名乃至鄕歌・吏讀の如きはその例である。吏讀なる名稱の下には「尺文」（租稅の受領證）「辭緣」（理由・內容）等の如く、名詞に屬するものも少數含まれてゐるけれども、その大多數は助詞・助動詞・副詞等に屬するものである。例へば、

本師律乙依良施行爲齊（本師律に依りて施行す）（大明律）
夜間更直使令亦違心不冬爲臥乎在乙良（夜間に更直使令が注意せずして違反したならば）（同上）
借得使船兩箇造是白去乎今番良置云々（使船を借得して兩箇造したのでありますのに今度は云云）（海行總載）
病臥爲有如可有遣教之旨乙病中聽取（病臥してゐたが、遣教の旨有ることを病中に聽取し）（光海君日記）

なる文中右傍に圏點を附した部分が吏讀であつて、何れも漢字の音又は訓を基として讀まれるのである。我が國上代に於ける漢字の利用法は、「萬葉集」その他地名の表記法等に於て、朝鮮上代に於ける漢字の利用法は、新羅の鄕歌その他地名の表記法等に於て見ることが出來、何れも自由なる使用法をなせる點に於て相類似するものがあつたが、その後に至つては使用の範圍著しく縮小せられ、我が國にあつては祝詞の送り字等に、朝鮮にあつては啓文・契約書等の語句の切れ目に、即ち何れも儀式又は公儀に關する文書に使用せらるゝに至つたことも偶然の一致といへよう。

【吏讀と吐】朝鮮には吏讀に類したものに別に吐と稱するものがある。これは吏讀と同樣に、語句の下に添加せられる朝鮮語起原の助詞・助動詞等を意味するのであるが、これを書き表はす方法には三通りある。一は、「大學之道ㄴ在明明德며在親民며在止於至善이니라」に於ける如く諺文を以て記すもので、經書の諺解等に最も普通に行はれるものである。二は「天地之間萬物之衆厓唯人伊最貴爲尼云々」（童蒙先習）に於ける如く漢字を以て記すもの、三は「子ヽ曰君子ア周而不比口小人ア比而不周ヽ」等に於ける如く漢字の略體（ヽは是、アは隱、口は爲古、ヽは是尼羅（又是尼ヽ）の省略體）を以て記すものである。これ等の中第二即ち漢字を以て記すものの中には、吏讀に於ける漢字と同一文字を使用し、且つ同一作用をなすものがあり、又吏讀の「讀」と「吐」とが類音で同一語に出でたるものなるべきを考ふる時、吏讀と吐とはその起原に於て決して別箇のものにあらざることを知るに足るのである。又第三の漢字の略體の吐は、我が國の片假名の發達と經過を同じうするものであつて、中には兩者の字形に於ても類似を發見することを得るのは、最も注意すべきことである。

（片假名）	（漢字略體の吐）	（語　音）	（字　源）
カ	カ	더（to）	「加」の略、訓讀
タ	タ	다（ta）	「多」の略、音讀
ト	ト	와（wa）	「臥」の略、音讀
ナ	ナ	대（tai）	「大」の略、音讀
ヒ	ヒ	니（ni）	「尼」の略、音讀
ロ	ロ	고（ko）	「古」の略、音讀

【作者】「三國史記」には薛聰に關し、「聰性明銳、生知道術、以方言讀九經、訓導後世」とあり、「三國遺事」に「聰生而睿敏、博通經史、新羅十賢中一也、以方音通會華夷方俗物名、訓解六經文學」などあるを典據とし、後世の人々は吏讀の作者を薛聰なりとなすに至つたが、根據が甚だ確實でない。方言（朝鮮語）を以て六經文學を訓釋するといふことは、漢文を朝鮮語流に讀み下したといふことを意味するのであつて、その內容には吏讀の如き書き方までも案出したといふ意味が必ずしも含まれて居らぬと思ふ。當時既に漢字に習熟した半島人は、漢文讀み下しに際し、必ず現はれ來るべき朝鮮語の助詞・助動詞等を文字の上に表記せんとする場合には、最初は必ずや各々その思ふところに從つて思ひ〳〵の漢字を選擇し、利用したに相違ないことは、當時に記された古地名・人名・官職名等の漢字表記法によつてもほぼ推知することが出來る。かくの如く最初は區々として統一なき觀を呈した漢字の用法も、歲月を經るに從ひ、その間に自然

淘汰が行はれ、適者のみ生存して今日見るを得るが如き一定の形式にあてはまつた吏讀なるものの發達を見るに至つたものではなからうか。平假名・片假名が當時の社會の産物で、一個人の發明に係るものでないことが明かにせられたと同樣に、吏讀の發明を薛聰一人の手に歸するが如きも、その根據甚だ淺弱なるを覺えるのである。

【研究史】我が國にありては吏讀なる名稱は、古く朝鮮より傳へられた李朝太祖四年に編まれた「大明律」の跋に吏道とあり、世宗二十八年に公布せられた訓民正音の序に吏讀とあるなどによつて早くから知られてゐた。併し江戸時代の學者は、吏讀に就いては餘りに無知識であつた。卽ち或る學者は大明律にある吏讀を以て衍字なりとし、或る學者は吏讀を以て諺文の異名又は諺文の古體であると論ずるなど、今日から見れば絶對に許すべからざる誤りをなした。明治以後に至り、この誤解は一掃せられたけれども、未だ徹底的の研究あるを見ぬ。朝鮮では從來吏讀を類解したものに「儒胥必知」「新式儒胥必知」の如き書が流布してゐるが、これ等はいづれも從來行はれ來つた吏讀を字數によつて類集し、讀を附したものに過ぎずして、一も語原・用例等に言及せるものなく、內容極めて貧弱なものである。ただこの間にありて李朝正祖頃の人李義鳳が「俊語口訣」として、一部の吏讀及び吐に日本譯を附して公にしたことは、やゝ注目するに足る。（諺文參照）

【參考】鄕歌及び吏讀の研究　小倉進平　（小倉）

吏登　りとう　俳人【姓】櫻井氏【別號】初め李洞、後、人左・班象。晩年嵐雪・風雪・雪中庵二世。【生歿】天和元年生れ、寶曆五年（一七五五）六月二十五日歿す（七部捜序に據る）。享年七十五（宗祇戻談に據る）【墓所】本所法恩寺【俳系】嵐雪門【閲歴】江戸の人。嵐雪生前、その點印を門人周竹に附與したが、周竹老齢の故を以てこれを辭して吏登に讓り、吏登が雪中庵二世を嗣いだ。晩年衆の勸めによつて嵐雪と嗣號した。併し師の高風を瀆さん事を恐れて風雪と呼んだといふが、吏登の眞蹟で嵐雪と署したものが見られる。常に「我に句なし」と云つて僅かに十八句を選び置き、人の需める時もこの中の句のみを書き、病中死期を知つて、蓼太をして多年の詠草を燒き捨てしめたと云ふ（吏登句集序）。常に眩暈を患ひ、年中頭巾を被つてゐたので、おのづから尊卑の交を避け、自ら病隱と呼んでゐたと云ふ（七部捜序）。一世湖十の妻花千は吏登の姉で、花千の七回忌追善に二世湖十が「織花摘」を編した時、追福の文を書いてゐる。【著作】或問珍（別項）（享保十七年刊）○七部捜　吏登述・蓼太記（寶曆十一年刊）○俳諧十三條　蓼太編（明和四年刊）○吏登句集　嵩三輯編（天明七年刊）○二世雪中庵吏登全集　吉澤醉雪編（明治三十一年刊、嵐雪全集所收）【人物・作風】老後深川に卜居した頃は、疊二枚を敷いたのみで、書を積み机を置くと、膝を容れる所もなく、客來つて語る時は、後の客が先客の出づるを待つ有樣であつたと云ふから（俳家奇人談）、三世の蓼太とは違つて淸貧に甘んずるといふ風であつたらしく、又陰へ日な謙遜な人であつたらしい。作は雪門として正風を傳へたものではあるが、もはや平弱を免れない傾きがある。　（志田・穎原）

【參考】綾錦　菊岡沾涼　○俳家奇人談　竹內玄々一　○俳林小傳　中村先久　○俳諧人物便覽　三浦若海

離別歌　りべつのうた　和歌【名稱】歌の題材上の分類の一で、離別を扱つた歌。記・紀の歌謠や「萬葉集」の中にも離別をうたつた歌はあるが、「萬葉」までは、歌の分類として羈旅歌（別項）はあるが、離別歌といふ名稱は立てられてゐない。離別歌が歌の分類の一として用ひられるに至つたのは「古今和歌集」からであつて卷八を離別歌とし、四十一首を含んでゐる。それ以後、勅撰和歌集にも私撰和歌集にも、又私家集にも分類の一として加へられてゐる場合が多いが、「後撰和歌集」の如きは卷十九に離別・羈旅と合せて一卷をなしてゐる。「拾遺和歌集」「後拾遺和歌集」には、「別」として卷六をこれにあててゐる。「金葉和歌集」も卷六を離別歌にあててゐる。「詞花集」も卷六を「別」として一卷をあててゐる。「千載和歌集」も卷七をこれにあて、「新古今集」も卷九をこれにあててゐる。八代集のうち、「後撰和歌集」の外は一卷を離別歌が占めてゐるのを見ても、四季・戀等についで重きをなしてゐると言ふべきである。【性質】離別歌は、旅へ出る場合の別の歌を主とするが、入唐の際の離別歌もあり、みちの國や筑紫の旅にゆく離別歌もあり、また修行にゆくに對する離別歌もあり、程近い旅への離別歌もある。また夫婦や愛する男女の間の離別歌もあり、親子の間の離別歌もあり、先輩知人との離別歌もある。場合もしくは人の相違によつて、離別の悲哀も或は痛切に或はそれ程でない時もあるが、離れゆくを悲しみ寂しむ情を常に根柢とし、又逢ふ日を待つの情を常に懷いてゐる。離別歌には戀愛歌と異なつて題詠が殆どなく、何れも實際の離別の時にうたはれてゐるために、その情に眞實味があり、人の心をうつ作に富んでゐる。それだけ高い價値を有する歌が多い。

【參考】勅撰和歌集　（久松）

李部王記　りほうわうき　日記　一卷【著者】式部卿重明親王【名稱】もと「吏部王記」に作つた。式部卿の唐名吏部王といふに因んだ名で、吏李相通ずるので、いつか「李部王記」と書くに至つた。一に「重明親王記」、又略して「重記」と稱へた。【諸本】「醍醐寺雜事記」を改題し、又は同記に引く他書の文をも混載して、「李部王記」「李部王記抄」「李部王記類聚抄」など題したものもあるが、いづれも事理に通じない人の所行で論ずるに足らない。十卷本の如きは親王薨後の事實をさへ載せてゐて、妄人の愚舉として見る外はない。【解說】この書の全本の散佚したことは久しいことで、傳本は一本もない。後人「醍醐寺雜事記」（群書類從卷四五三）中に「李部王記」から醍醐寺に關した事蹟を抄錄してあるのを拔き出して一書とし、これに原名を題したのがこの書で、延長八年七條、九年九條、承平二年・三年各一條、六年五條、八年二條、天慶二年四條、天曆二年一條、六年六條、都合三十六條を集めたものに過ぎない。もとこの記は、事實・典故の考證に引用されたことが尠くないので、「西宮記」「扶桑略記」「花鳥餘情」等に散見し、「西宮記」のみにても、七十一條二十八年の記事があるが、今これを集めて見る便のないのは遺憾な事である。　（石村）

略言　りゃくげん　國語學【名稱】略語、又は略音ともいふ。【解說】「あさあけ」（朝明）を「あさけ」、「いへ」（家）を「へ」、「うら〳〵」を「うらら」、「あめ」（天）を「あ」といふ如く、一語中の音を省略して出來た語をいふ。賀茂眞淵が「語意考」でこれを古代日本語に於ける法則の一として擧げ、語釋や語源の解釋に應用し

てから、一般に用ひられるやうになつた。併しこの思想はずつと古くからあるので顯昭の諸註釋書などにも見られ、仙覺の「仙覺抄」や、卜部兼方の「釋日本紀」等に於ても同樣に音の省略といふ事を認めてゐる。下つて松永貞德の「和句解」では語源解釋にこれを頻りに用ひ（上略・中略・下略と言つてゐる）、貞德の影響を多く受けたと思はれる貝原益軒は、「日本釋名」で、語源解釋の原則の一としてこれを擧げ、略語と名付けた。契沖も語釋にこれを用ひた（「略す」「省く」と稱してゐる）。益軒の說に對してはすでに新井白石が批判を加へたが（東雅）、眞淵やその末流に至つて略言を濫用した嫌ひがあつたので、略言と云はれるものの性質を改めて檢討しようとする人々が出て來た。卽ち大國隆正は、略言と言はれてゐるもののうち、「いひにうゑて」を「いひにゑて」、「なをおきて」を「なをきて」といふ類は、一種の用言の格で、略される音は母音に限られ、「のりたまふ」を「のたまふ」といふ類は、合語（複合詞）の一格であるとした。而して「たかくらし」（高倉下）の「し」は、「しも」（下）の「も」が略されたものではなく、かへつて「し」に「も」を添へて出來たもの（かゝるものを添語と名付けてゐる）が「しも」であるのであつて、世間で添語と略言とを顚倒して考へてゐることが多いと言つてゐる（通略延約辨）。また義門は、梵語の「佛陀」「菩提薩埵」を、支那で「佛」「菩薩」とした如きものがいはゆる略言であるが、これは、ことさらに省略したものであつて、古代語にはかやうな意味の略言はないとし、古代語に於て略言に近似したものとしては、假略・非略・訛略の三が見られると論じた。假略とは、「かりいほ」（假廬）を「かりほ」、「わがいへ」（我家）を「わがへ」といふ如く、連語上（複合詞をも含む）一語中の母音が省かれるもので、姑く略言といふべく、非略とは「いや」（彌）・「ぬし」（主）・「やなぎ」（柳）・「みづ」（水）・「ごとく」（如）に對して「やへ」（彌重）・「とじ」（刀自）・「あをやぎ」（青柳）・「みを」（水脈）・「ごと」といふ語がある類であつて、これ等はそれ〳〵別個のもので、一方から一方が出たと言ふやうなものではなく、訛略とは、「いまだ」を「まだ」、「あづまびと」を「あづまど」といふ如く、時代を經ると共に轉訛して生じたものであるとした。　（岩淵）

【參考】日本釋名　貝原益軒　○東雅　新井白石　○和字大觀鈔　文雄　○語意考　賀茂眞淵　○通略延約辨　大國隆正　○雅言成法　鈴木重胤　○音韻啓蒙　義田年治　○古典註釋に現れた語學的方法　時枝誠記（日本文化叢書）○國語音韻論　金田一京助

略頌　りゃくじゅ　歌謠【名稱】頌は誦の意に用ひた。「文机談」に「古き頌に、西の小路にあやめ子生みたり、びむでうすぢなまめいたり」と記してゐるのも、催馬樂の歌を頌と記したものであつて、頌は歌唱の意味に用ひた。略誦とは複雜な記憶し難い事物を簡單な覺え易い文章に作つて節謠に便ならしめ、更に節謠するには、一定の律格を持つ歌に作られ、或る曲節音調を以て歌誦すれば腦裏に印し易きよりして、一種の童謠ともなつた謠ひ物の名稱である。童蒙のために、また學問の入門として、啓蒙的に作られた歌が謠と化したものである。

【作品】略頌として世に殘されてゐる啓蒙的な記憶に便じて作られ、童幼の口ずさみに供せられた作品を二三擧げる。いづれも歌ではないが、中には大體七五調で作られたものもある。「體源抄」（別項）の第十二卷の下に、「樂之略頌」と云ふものが出てゐる。同書に註して「大用ヲミテ樂說ノ異名作者ヲ能爲ニ知レ之ニ略シテヘシ〳〵ヲ書之」と記してゐる通りに、舞樂（別項）の名を網羅して、略解題を附したものである。江戶時代の初めに編纂せられたものでは、「京師略頌類纂」二卷がある（續群書類從雜部に入る）。神社略頌以下十四篇を集めたもので、その中、官位相當略頌が古頌で、他は大概新作である。また「皇年代略頌」は古頌を小補したものと見える。寬永の年までであるから、その頃編纂せられたのであらう。小補者は中原職忠である。この書が最も纏まつた編書であるが、この外、荷田在滿の「令條略頌」の如き名高いものや「聲明略頌」と云ふものもある。これ等とはやゝ趣を異にせるものに、「弘傳略頌抄」一卷がある（續群書類從傳部に入る）。「高野大師御廣傳」を主として、その他の弘法大師に關する著書の中から拔萃して、種々の項目に分ち、弘法大師の傳記を分り易く見易く箇條書にして排列したものである。所々に私云とて、私案が加へられてゐるが、根本の精神に於ては上記の諸作物と同一で、ただ形式が聊か異つてゐるのみである。終りの方に一代の傳記を記した後「已上略頌」と記し、終りに文曆元年七月二十一日、仁和寺二品親王の命で抄し了つた旨の奧書があり、阿闍梨道範と署名してある。次に「聖傳書」と題する寬永頃の古寫本があり、「抑天照太神者地神五代ノ始也、二代ハ正哉吾勝々速日天忍穗耳ノ尊ト申ス三代ハ」に始まり、「家光公は左大臣征夷大將軍トシテ彌子秋萬歲ト仰ガヌ者社無リケレ」で終る七五調一句として、約千百七十五句から成る長詩篇で、國史の大略を述べ、年代・人名・官名等を多く擧げたものであるが、その句調內容より察するに、略頌の一種となすべきものである。官位相當略頌の初めの句を揭げると、「太政大臣從一位、左右大臣是二位、大納言等正三位、太宰都督中納言、近衞大將彈正尹、以上皆是從三位」。この如く、略頌は大抵漢字ばかりで記されてゐる。

【歌謠】歌謠としての略頌の最も古き歌詞は、慈覺大師作と傳へるもので、「山門堂舍記」に、

佛法及文殿、山王及傳敎、多門摩訶迦羅天、慈覺
還和來

「是根本中堂所作次第、慈覺大師御略頌也」と記され、これをそのまゝ音で讀み下した歌が、「梁塵祕抄」の四句神歌に出てゐるから謠ひ物なる事が明かである。次いで「寺門高僧記」卷四の賴仁の條に、「于レ後幼學之徒、製ニ和讚一頌レ之、其中云」として、

一定武者は賴仁が口八丈にぞすかさる、、香爐を
取らせし隨兵は知束までこそ昇りけれ、玩前の證
が隱はせる擁護御牧の土器造り、少しき得たりし
證には何る・所に土器かや

と載せてゐるもので、幼學の徒が作り頌したと云ふも、體裁形式も凡て略頌の樣式を具へてゐるから、和讚（別項）と云ふよりは略頌の一となすべく、且つこれによつて略頌は和讚より派生し、聲明（別項）の系統を引く聲樂ではないかと考へられるのである。次にこれ等とやゝ體裁を異にせるものに、「口遊」に出でた歌がある。元來「口遊」はその書の體裁內容が略頌を集めた書としてもよい位で、「口遊」と云ふ書名も、その意味で名づけられたものと思はれ、序文にもその旨が見えてゐるが、その中に、「誦曰」とか「誦之」とか記して、呪文の歌などを載せたのは、略頌の一體であらうか（同じ類の呪ひ歌は、「拾芥抄」の諸頌部にもあ

る。これまた略語の意であらう)。就中、その書籍門の中に「略語」と題する一首の歌が見える。

　田居に出で、菜摘む我をぞ、君召すぞ、求食り追ひ往く、山城の、打酔へる兒ら、藻干せよ、元結繫けぬ(原本萬葉假名に記す。今、「北邊隨筆」及び「日本音韻歌考」によつて翻字す)

とあり、今の世俗の人が、「天地星空」の歌を誦するのは里女の訛りで、この歌を誦する方が優つてゐると註してゐる。天地の歌も亦略語として童謠に歌はれた誦文であると思はれ、「宇津保物語」「順集」「相模集」等に散見する所で、これ等の歌は何れも手習歌として習字にも用ひられたものであるらしい。然らば、かの伊呂波歌の如きは、天地の歌の次なる上揭の「田居に」の略語の後を受けて世に出でた手習歌であり、幼童に歌誦せられた事も想像に難くないところである(伊呂波歌は「今様」參照)。これ等は何れも啓蒙的な童謠略語の體を備へてゐる歌である。「天地星空」の歌の如き就中さうであり、「田居に」の歌に至つては、略語が既に啓蒙童訓の地位を離れて、立派な童謠となつてゐることを示してゐる。以上三首の歌に次いでは、諷刺的な童謠として「後三年合戰記」に、

　鏑の音を聞かじとて、耳をふさぐ聯の者、紀七高大宮藤三、腰瀧口末四郎

なる略頌が出で、次いで「源平盛衰記」の中宮御産の條に見える略頌は、

　剛は何翁主膳、八幡の騰馬の殿の寄猫

と云ふ童謠である。また「古今著聞集」卷七には、「道風朝臣大師の書かせ給ひたる額を見て難じて云ひける

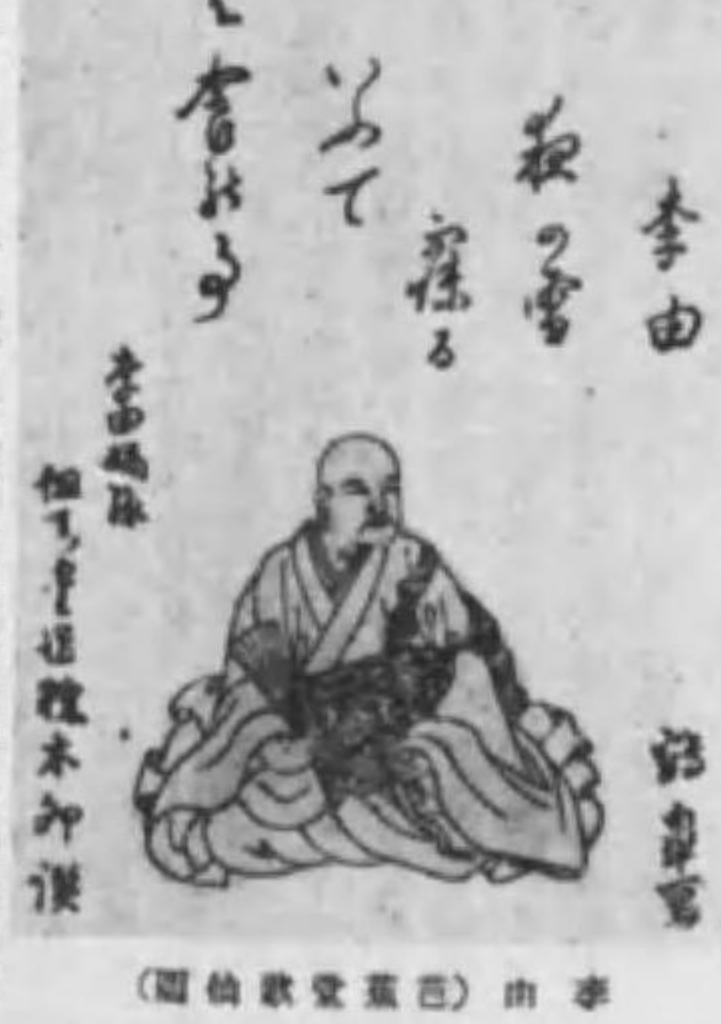
　美福門は田廣し、朱雀門は米雀門

と略頌に作りて嘲り侍りけるほどに」とも見えてゐる。これ等にて略頌の行はれた事が知られる。何れも物盡しの體裁で作られてゐる事は、前述の童蒙の略頌と似た體裁で、それより出でた事を示してゐる。「古今著聞集」の略頌は落首と同一だと見る說があるが、歌詞によつて考へると、門と云ふ同一語の重疊してゐる所は、童蒙の略頌に近いから、矢張り元より略頌として歌はれたものであらう。但し「建武年間記」に、去年(建武元年か)八月二條河原の落書として長篇の七五調の歌詞を揭げてゐるのは、その體裁頗る略頌に似てゐる。殊に「京童の口ずさみ、十分一をもらすなり」と歌ひ閉ぢてゐるのは、口遊卽ち歌謠の一種ではないかとも思はれる。「一話一言」に揭げた旗本を詠んだ長篇の諷刺の歌謠で、これと全く形式內容を同じうしてゐて、これ等の歌の如きは、寧ろ略頌に屬する歌謠で、略頌は落首、卽ち落書より一轉化したものではないかとも思はれる所以である。落書は既に平安朝の諸書に見え、「法曹至要抄」にも、落書によつて訴へることを記し、「本朝文粹」にも落書を揭載してゐる。何れも名を匿して訴訟する體裁のものである。略頌が諷刺的であるのは、或は落書より出た分子がある故かも知れぬ。從つて歌謠的なる略頌は、素よりある童訓の略頌と諷刺の落書とが混同して成立した童謠であらう。但しこれは內容上の問題であつて、略頌の名稱が落首より出たとするが如きは當らぬ說と思はれる。また江戸時代の「淋敷座之慰」にも揭載した本朝王代記之歌、異國王代謠等は、矢張り略頌の形式であり、小謠によつて童幼の諳誦口吟に便し、記憶を助けた歌謠かと思はれる。謠曲の小歌(別項)には、この種略頌に類するものが散見する。

【備考】「あめつちの歌」の註解には、加納諸平に「安米都知の歌の考證」があり、また那須高堅に「あめつち歌并解」があり、その他、伴信友の「安米都知詞文考」(比古婆衣卷四)、大矢透博士の「音圖并手習詞歌考」(假女都女ノ詞の項)などがある。(藤田)

李由

りいう　俳人　【俗姓】河野氏【諱】通賢【釋名】亮隅【幼名】亞古丸【字】買年【號】四梅廬・去耶觀・月澤道人【生歿】寬文二年生れ、寶永二年(二三六五)六月二十二日歿す。享年四十四(明照寺の由緖記に據る)。【俳系】芭蕉門【家系】安藝の宍戸を領有してゐた河野伊豫守の嫡流で、父は亮雄といひ、母はやんごとなき家の女で藤原氏であつた(斷桂ノ文)。【閱歷】近江犬上郡平田村月澤の光明遍照寺(通稱明照寺。本派本願寺派院家)十四世の住職で、律師に任ぜられた。碁を好み、茶を愛し、丹青の技をも善くした。芭蕉に入門したのはいつの頃か明かでないが、元祿三年幻住庵の芭蕉を去來と二人で訪うて居り、同年の風雪の「其袋」及び其角の「いつを昔」に初めて作が見えるなどの點から、大凡この頃の入門と見られようから、芭蕉の晩年に近い門人である。彥根の許六(別項)とは特に親しく、許六の著書の中の三篇は、李由との共撰の形になつて居り、許六の五老井の四絕を賦した四家の文の序を書いて居り、元祿十年か十一年かの春には二人相携へて伊勢參宮をし、「南行ノ記」が成つてゐる。庭に四株の梅のあるに因んで、元祿十年秋、四梅廬と稱する庵を作り、「四梅廬ノ賦」を作つたが、こゝに許六や丈草も遊んでゐる。芭蕉は元祿四年の冬、李由の寺を訪うて「百年のけしきを庭の落葉かな」の句があり、主客の唱和などもあつたが、芭蕉の歿した時には、義仲寺の追善俳諧にも列し、その時、形見に芭蕉の被つた檜笠を乞ひ受け、(これを芭蕉の吉野行の時の檜笠とするは誤で、それは李由の笠塚の祭文(たまゝつり所載)に附した句及び李由の追善集「笠の影」によつて知られる)、後、寺內にこの笠を埋めて笠塚を築いた。顏を病むこと四五年、壯年にして歿した。許六は「斷桂ノ文」を書いてこれを悼んだ。嗣子亮貞(十五世住職)は亦俳諧を好んで自踐と號し、四梅廬を稱し、その養嗣子亮淳(十六世住職)も和歌俳諧を好んで錦坡と號し、四梅廬を稱した。【著作】韻塞(別項)(元祿十年刊)○篇突(別項)(元祿十一年刊)○宇陀法師(別項)(元祿十五年刊)○李由句集(穎原退藏編)(藝文大正一五ノ八・九及び國文東方佛教叢書第二輯文藝部)○蕉門名家句集(李由の部)。【作風】許六の同門評判(俳諧問答)には李由を許することを避けてゐるが、李由は芭蕉生前の作が乏しく、芭蕉歿後の作が大部分なので、かゝる時代的關係によつても、その作に理知



李由（芭蕉堂歌仙圖）

的な傾きが強く、この點に於ても許六に似てゐる。併し誦すべき句もないではなく、その比例も許六に似てゐて、大體二人は作の關係に於ても似てゐると云へる。【參考】蕉影隨筆(十三回忌追善集)陶丘編○笠の影(三十三回忌追善集)自笑編○たまゝつり(桂中選中)○風俗文選(作者列傳、斷桂ノ文等)森川許六○蕉門頭陀物語(建部涼袋)○諸國翁墳記(義仲寺)○俳家奇人談(竹內玄々一)○蕉門諸生全傳(遠藤曰人)○俳林小傳(中村光久)○俳諧人物便覽(三浦若海)○李由句集はしがき(穎原退藏)(藝文大正一五ノ八)○芭蕉の笠(志田義秀)(俳文學の考察)(志田)

柳菴雜筆

りうあんざつぴつ　隨筆　四卷　【著者】栗原信充【刊行】嘉永元年【解說】本邦の史傳・地誌・武具・故實・制度等に關する考證の雜集で、史家の參考に資すべきことが多い。著者の別著「玉石雜誌」の餘材とも見るべきである。卷一は世續抄百貫領主馬一疋持と云事以下二十四則、卷二は步士若黨の衣服以下十二則、卷三は農工商の恆產以下九則、卷四は再生勝五郎以下六則を收めてある。圖畫を挿し加へてゐるところが多く、弘化二年著者の序がある。(和田)

柳菴隨筆

りうあんずゐひつ　隨筆　初編一卷　【著者】栗原信充【刊行】不詳。文政の初めか。【解說】初編一卷のみで、論語・千字文、書法、聖像、釋奠、多賀城碑・多胡郡碑、古墨跡、古畫、古別本、太子傳、宋板書の十項を收めてあり、挿圖が二面ある。文政二年塙田一知及び無年紀高田與清の序、文政二年櫻擬門の跋がある。

【著者小傳】栗原信充は上野國の人、江戸幕府に出仕した。通稱孫之丞、柳菴はその號。老年に及んで剃髮して又樂と稱した。屋代弘賢等に學んで故實に精しく、殊に武具・兵器の研究を好んだ。明治三年閏十月二十八日歿す。年七十七。著書に「先進繡像玉石雜誌」「水雄岡志」「武器袖鏡」「鞍鐙新書」「刀劍圖考」「甲冑圖式」「鷲工譜略」「大內裏圖」「令義解講義」「職原抄私記」「日本紀私讀」「柳菴雜筆」「柳菴雜記」等がある。(和田)

柳菴隨筆

りうあんずゐひつ　隨筆　十卷十一冊　【著者】栗原信充【諸本】初編第一卷として刊行された同名の書と別で、一部十卷十一冊寫本で傳はつてゐた全き異本である。明治三十九年百家說林續編に編入刊行された。同名の別本卽ち初編一卷刊行本との著作の前後は判らぬが、一卷本は文政初めの刊行で、著者壯年の頃の作であるから、本書の大作はそれより後の事であらう。百家說林本は黑川眞賴博士所藏本に據つた由である。【解說】許多の考證の題目をその綱語の伊呂波順に排列したもの、伊部より奴部に至る部分だけであるが、留部以下は整理を了せずにあつたのであらう。卷一は伊部で一里塚に始まつて一休像に終る五十六則、卷二は呂部で六十賀に始まつて論語の撰述に終る二十則、卷三は波部で八月十五夜から羽織に至る四十六則、卷四は仁部で二字から日蓮宗派に至る十三則、卷五は保部で本命から菩薩に至る二十五則、卷六は邊部でへなたりから平家蟹に至る二十三則、卷七は止部で屠蘇から藤樹先生に至る二十五則、卷八上下は知部で乳付から蓄三に至る四十六則、卷九は利部でりんだうから隆達節に至る十五則、卷十は奴部で鵺からぬために至る十則を收め、所々に圖畫を挿んである。考說・記事の範圍は極めて廣汎で、何を主とすると言ひやうもないが、强ひて云へば有職故實類に係る事項が多いやうである。題目を伊呂波順に排列したのは、索引の便を圖つての事であるのは言ふ迄もない。(和田)

柳園詠草

りうゑんえいさう　歌文集　二卷二冊　【作者】石川依平【成立】門人山崎八峰・平尾八束・中山光雄の三人が和歌の遺稿を校正し、飯田年平の序を附し、終に依平の小傳を附したもの。【刊行】明治十四年【諸本】續日本歌學全書第八卷(但しこの方は拔萃)・近代諸家集第四卷(國歌大系)所收。【內容】短歌を上卷に、長歌・文詞・今樣の類を下卷とする。長歌七首はすべて萬葉假名にて記し、文章の題は、郭公・水雞・蟲・雪等の季寄類のものから各種の序跋類に及んでゐる。今樣は二首、その他に連歌が一首交つてゐる。

【歌風】依平は遠江の人、六七歲頃から秀でた歌を詠んだので、普く神童と謳へられ、參覲交代の途中諸侯の招きに參見することが多かつたと云ふ。宣長の如きもその歌を見て、狐狸の所爲であらうと云つたといふ。九歲の時、郡山侯の紹介により冷泉家に入門した。長ずるに及びて「玉襷」(別項)をよみ、その說に感服して春庭の門を叩いた。近藤芳樹・加納諸平(各別項)と交り深く、世人總稱して一木二平と讃へた由である。併し宣長門の諸家の例に洩れず、彼の詠歌は特に傑秀なものなく、諸平に比して二平と稱するに足らないが、取材の清新な例として、

　みよし野は山風さえて國巣人の若菜つむ野に淡雪ぞふる

　我宿の垣のくちなし花咲きぬいそげや早苗時すぎぬ間に

があり、優美溫情といふ類の特色は、次の例に見られる。

　あがた見に春くる人のかざしにとうゑし山吹咲きにけり

　若めかるしるはの磯の夕なぎに聞ゆる末や伊豆の遠山

(齋藤(清))

流香

りうかう　「子昔」を見よ。

柳花苑

りうくわゑん　雅樂曲　【名義】柳花を詠めてこの曲を作つたので、この名がある。【異稱】「柳花園」「柳花怨」「柳花攀」【性質】唐樂。新樂、中曲。双調曲に屬する(初め大食調であつたのを双調に移したのだといふ)。拍子二十四、七反。昔は舞があつたが後に絕えてしまつた。【沿革】「教訓抄」に、「抑此曲者嘉青仙人陶明柳園、詠柳花之時奏此樂。嘉青公一子青龍仙作之。大國樂也。或大唐樂也」と。また同書に「或云、柳花怨は葬送のれうに作たりける樂なれども、いきかへりにければ、此樂還て祝所にも用ゐるべき樂か」などあつて、その起原は判明しない。白石の「樂考」には、「按ずるに教坊記に柳含烟あり。もしくはこれらの轉じたるにや」とあるが、これも信ずるに足りない。本邦へは桓武天皇の御時、遣唐舞生久禮眞茂が傳へたといひ、初め「柳花怨」と言つたのを、天曆の內宴の日、議定あつて怨の字を苑に改めたといふ。また初めは太食調であつたのを、仁明天皇の勅によつて双調に改め奏したといふ。舞は後に絕えて樂だけが今に殘つてゐる。(田邊)

柳下亭種員

りうかていたねかず　草雙紙作者　【本名】本姓は坂倉氏、通稱は坂本屋新七(又金七)、幼名は金次郎、又萬太郎【別號】黃園【生歿】文化四年に生れ、安政五年(二五一八)八月二十一日歿す。享年五十二【閱歷】江戸淺草今戸に住み、酒屋・小間物屋・書肆と轉業した。一度は講釋師乾坤坊良齋の門人となり、

紀海香と映し、寄席に出で、後初代柳亭種彦の門人となり、種員と名乘り草雙紙を綴つた。處女作は「名譽奮曲獨樂」（弘化元年）、「勧善懲惡乘合噺」（同年）で、爾來毎年數部の作品を發表し、就中「白縫譚」（嘉永二年―萬延元年、初編より三十二編まで）、「兒雷也豪傑譚」（嘉永三年―萬延元年、第十二編より三十六編まで）、「[illegible]妙々車」（安政二年―同六年、初編より九編まで）等は最も歡迎されたものである。【作品】彼は健筆家で最盛期には一年に十三部を發表してゐる。その代表作は前記の外「海榮宇治曙」（嘉永三年―安政二年）「浪間朝比奈」（嘉永四年―同六年）「源氏雲扶月」（嘉永四年―同六年）「四谷雜談」（嘉永五年―安政二年）等。

【業績】當時の他の草雙紙作者と同樣、何等の獨創力なく、而も手近な先輩の有名な作品の燒き直しを綴るに過ぎなかつた。例へば「浪間朝比奈」は馬琴作「朝夷巡島記」、「源氏雲扶月」は同作「椿說弓張月」の換骨、「四谷雜談」は南北作「四谷怪談」、「海榮宇治曙」は師種彦作「田舍源氏」の踏襲に過ぎない。ただその中で「白縫譚」（別項）は黑田騷動の脫化であるが、北九州を背景とし、輪廓も大きく、蜘蛛の妖術を行ふ大內若菜姫も妖艷と怪奇とに滿ち、最も合卷本の體を得たものである。「兒雷也豪傑譚」（別項）は彼の創案ではなく、美圖垣笑顏（別項）が感和亭鬼武作「自來也說話」（文化三年）（別項）より脫化したものであるが、その中間二十五篇を彼が綴つて、よく聲價を保つたのは彼の手腕と稱し得よう。而して又この兩書が彼の代表作と稱し得るであらう。

【參考】戲曲小說通志（蟹木園主人）○兒雷也豪傑譚（續帝國文庫第八編）○白縫物語（續帝國文庫二八・二九）○狂歌人名辭書（狩野快庵）【山崎】

琉球劇

演劇 【起原】正德・享保間、琉球に尚眞王時代（西曆一四七九年―一五二六年）に次ぐべき黄金時代が出現し、島津氏の琉球入後、頓に衰へて瀕死の狀態にあつた諸藝術が、日支兩文化の刺戟を受けて漸く蘇生し、鬼才玉城朝薫に綜合統一せられて、組踊と稱する劇文學が發生した。【沿革】祭式舞踊は、どの原始宗教でも、祭式の必須條件の一になつてゐるが（琉球文學參照）、首里の小宮廷でも「おもりくわいにや」が行はれ、各邑落の祭儀にも、さうしたことが行はれた。沖繩の村々・島々の祭儀には、現に原始演劇的要素―世界民族一般に窺はれる―を示すものが、まだ〱澤山に殘つてゐる。時を定めて來臨する神及びその迎へに出る神と信じられてゐるものは、皆巫女の假裝するところである。さうして又、その巫女のやつし姿だとさへ知つてゐるところも澤山ある。或は既に巫女自身の資格において、さうした神事を行ふと考へる地方が、却つて普通になつてゐる。さうして、これ等はいまだに演劇としての立ち場に入つたものとの自覺なしに行はれてゐるのである。併し、その中から分化した演劇は、夙くから意識せられ、今も行はれてゐる。これが、都では「組み踊り」、地方では「村踊り」と、言はれる二種のものである。その他、彼等は外來の藝術を受け入れるにも吝でなかつた。折口信夫氏は「ふし踊り（註、女性の舞踊から出た男舞）に、大きな影響を與へたのは、千秋萬歳を祝する藝能の渡來である。日本の乞食者や記錄家の知らぬ間に、幾度か、七島の海中の波を凌いで來た下級宗教家の業績が、こゝに見えてゐる」（校訂琉球戲曲集序）と述べてゐるが、これは鎌倉時代以後、日本との交通が頻繁になつたといふ事實と、これ等下級宗教家の後裔或はその後繼者の二部落が、首里及び那覇の郊外に殘つてゐるのとで、ほぼ證明することが出來る。この時代には、禪宗は既にはひつて來てゐた。やゝおくれて眞言宗もはひつて來た。慶長の頃に渡海した念佛宗の碩學袋中の「琉球神道記」中に、おもろの謠ひ方は唱名のやうだとあるのを見ても、記錄には見えてゐないが、そのずつと以前に、念佛宗がはひつて來て、おもろの謠ひ方に影響を及ぼしたことは推測するに難くない。そして念佛踊なども、この頃輸入されたに違ひない。室町時代に、神事又は佛會の餘興に用ひられた猿樂が、間もなく輸入されたことは、尚眞王卽位の元年に、琉球を訪れた朝鮮人の記事中に、「七月十五日、諸寺刹造幡蓋、或用彩段、或用彩綺、其上作人形及鳥獸之形于王宮、居民選男子少壯者、或金假面、吹笛打鼓詣王宮、管如我國小管、鼓樣亦與我國同、其夜大設雜戲、國王臨觀、故男女往觀者、塡街溢巷、獻戲財物、諸宮者亦多」とあるのでも知れる。後世、村芝居のことを似念佛（こゝによつたら二才念佛かも知れぬ）といつたのは、かういふところから來たのであらう。袋中は支那へ渡るつもりで渡海したので、布教の目的で渡海したのではなかつたが、その感化は上下に及んで、その後繼者は念佛者（念佛聖の義）、又は淨土といつて那覇の垣花に住し、今でも葬式の時には、依賴に應じて小鼓を打ち、念佛を唱へるのである。ずつと以前に渡つたらしい下級宗教家の後裔は、行者（もとはヤンジヤイといつたが、マンザイの類似からヤンザイとなり、更にヤンザヤーに轉せて、卑下する意味が強くなつた）、又は萬歳といつて、首里郊外の安仁屋といふ特殊部落に住してゐるが、年の始めに萬歳・京太郎を以て島中を祝福して廻り、首里那覇の豪家からは、特別に喜び迎へられた。かうして彼等は啻に人形を舞はしたのみならず、時々狂言もどきをも演じて、觀客の頤を解かしめてゐた。これ等の詞章は、三十年前、最後の京太郎の口から採錄されたが、その中には對話體で劇的色彩に富んだのが可なりある。それから島津氏の琉球入りの時、捕虜となつて日本にいつた尚寧王の一行が、慶長十四年の十月十三日に伏見についた時、陸奥守の屋形で、歌舞伎を見物したことが、「喜安日記」の中に見えてゐるが、亡國の君臣は、歌舞伎が始まつて間もなく、これを觀たわけである。しかもその頃、既に琉球で能の行はれてゐたことは、「通航一覽」の同十五年八月二十五日、一行が江戸に着いた時のことを記した所に、「琉球にも日本のまねをして、詩・和歌・連歌又猿樂之能などもあり」と見えてゐるので明かである。これから半世紀後に出でて、琉球の制度を改革した向象賢の「仕置」にも、大和藝能を奬勵したことが見えてゐるから、貴族の子弟が琉球入以前から日本の藝術を嗜み、琉球入以後は、一層盛んにそれを嗜んだことが知れる。もうこの頃には、日本との交通は頗る頻繁となつて、王子や貴族が年毎に薩摩や江戸へ出かけるもの多くなり、支那との往來も可なり盛んになつて、進貢使や官生（官費留學生）の福建や北京へ行くものも少くなかつた。當時彼等が朝聘觀風するところの兩國を見ると、一は八代將軍幕府中興の時で、他は聖祖が兵亂を平げて文學を奬勵する秋であつた。しかも江戸及び北京の文運が將に花を開かうとした頃には、自家も亦古今未曾有の黄金時代に到達してゐた。琉球では、この時代ほど各方面に人才の輩出した例は嘗てない。かうした雰圍氣の中で、衰頽した民族的藝術が新しい形式を以て更生し、果然、琉球の世阿彌とも稱すべき玉城朝薫が出現した。

【組踊作者としての朝薫】貞享元年八月二日、首里の門閥家に生れ、姓は向、幼名は思五郎、諱は受祐、能達と號し、尚眞王の第四の王子韻威が十世の後裔である。藝術的素質を多分にもつてゐた彼は、元祿十六年、二十歳の冬、美里王子に隨行して薩州へ赴き、初めて本土の風物に接した。寶永三年の春、越來王子に隨行して再び薩州へ赴いたが、饗宴の際、太守の仰せによつて「軒端の梅」の仕舞を舞つた。彼は日本語が非常に達者であつた爲めに、同七年の夏、慶賀使美里王子の通譯となつて、初めて江戸に上つた。歸國後、彼は古琉球の史料編纂局ともいふべき系圖座の中取に任ぜられたから、鄕土の史實及び民間傳承に就いての彼の豐富な知識が、其處で得られたことはいふまでもない。正德二年の夏、國王尚益の訃に際し、飛脚使となつて麑府に赴いたが、九月の初旬、公務を竣へて歸國するに臨み、先年江戸上りの時、能く通譯を勤めたから、他日、與那城王子が江戸へ赴く場合には、樂主取となつて隨行するやうにと、太守から內命が下つた。そして久しく人質となつて麑府にゐた與那城王子と共に、殿中に招かれて陪食するの榮を得、この時、囃子狂言を觀た。暫くたつて再び陪食の榮を負うた際には能を觀た。同四年の夏の江戸上りの時には、座樂主取（譯名樂正）兼通事として出かけた。そして兩度も新井白石に逢つてゐる（白石紀記）。かうして朝薫は五度も日本の地を踏み、その都度、短い時は半年、長い時は一年餘も滯在したので、思ふ存分に能及び歌舞伎等を味ふことが出來た。歸國後先王尚貞の七年忌に際して踊奉行に任ぜられた。彼が組踊と稱する劇文學を創作する四年前である。組踊以前にあつても、踊といふものが可なり發達してゐて、番組を作つて演奏し、それで宴席の興を助けしめたことは、これでも能くわかる。享保三年、再び踊奉行に任ぜられて作戲を命ぜられた。來年國王尚敬の卽位式が行はれるので、冊封使の宴席の興を助けしめるためである。この時、彼は三十五歳であつた。

【組踊】自國の故事や古譚に精通し、兼ねて歌舞や音樂の素養があつたので、能・歌舞伎にヒントを得て材料を自國の神話傳說に取り、琉球歌の調及び詞を基礎として律語の戲曲を創作し、これりやしのぐ等の如き古舞踊の手を基礎とし、能・歌舞伎の所作事をも取入れて歌劇を仕組んだ。かうして亡び行く諸藝術を綜合して作つた歌劇を彼は組踊と名づけたのである。組踊の語原としては、古來「五組」とか「三番」とかいつたやうに、劇舞踊を一組として勘定したところから、能樂の上の番組を摸倣したものだと考へられてゐるが、それは後の合理解で、折口氏が「組踊り以前」に、端的にこれを組唄の踊りの義に解して、「來歷を重んじる藝道者流において、三味の組唄に、まづ琉球組―組唄の義―を据ゑたのは、琉球唄の調子に則つたものゝ義で、早く這入つた琉球唄の行はれなくなつて、その替へ唄が行はれ、それが固定したものを元唄ときめたのである。さすれば、この組唄に既に三味線の古調を存してゐたものと思つてもさしつかへはなからう。かうして、新來の樂器に、小唄の一群をうつして彈く組唄組轉が、逆に、もと來た琉球に戻ることになつた」としたのが、正しいやうに思はれる。彼はとにかく歌劇の要素を各方面から攝取して日本近代の樂劇を大成した世阿彌にも比すべき鬼才であつた。彼が作戲の命を受けたと聞いて、踊が物言ふ事やあると人々擧つて嗤つたが、演ずるに及んですつかり感心して了つたといふ。所謂「物言ふ踊」が、以前からあつたことは、前にも述べた通り、京太郎の詞集を見てもわかるし、また村芝居などにもあつただらうが、嘗て能や歌舞伎を觀たことのない連中は、さういふことは至つて下品なことで、それを國賓の前で演ずるのは、にが〱しいことと思つてゐたのであらう。彼の創作は五篇あつて、俗に五組又は五番といつてゐる。「二童敵討」「執心鐘入」「銘苅子」「孝行の卷」及び「女物狂」である。首里王府では、上流社會の子弟の中から、適任者を選拔して役者となした。そして彼が師匠となつて一生懸命に仕込んだ。彼の組踊は純然たる樂劇で、詞の用ひざまといひ、舞の型といひ、各々特色があつて、その苦心のほどが察せられる。これより彼を摸倣する者が續出して、五十餘篇が傳へられてゐる。但し彼と同時代の平敷屋朝敏の「手水の緣」と無名子峰の合作「大川敵討」など、見るに足るものがないではないが、多くは技藝の點は全く顧みず、徒らに冗漫な文句を長々と連ねたものばかりで、その脚色も大方、所謂敵討、さもなければ、親子尋めのみが多い。もし彼の五組を能とすれば、これ等は田舍歌舞伎の如きものであらう。とにかく組踊は、五組で始まつて、五組で終つたといつてもいゝ。同四年の夏、いよ〱冊封使海寶・徐葆光の一行が渡海して、尚敬王の冊封があつた。そして中秋宴と重陽宴とに、初めて國劇を演じて冊封使の一行を歡待した。この時の舞臺の繪と觀劇の記事とは、徐葆光の「中山傳信錄」に出てゐる。爾來、國劇は冠船（冊封使渡來の義）渡來毎に演ぜられて近代に亘つた。俗にこれを冠船踊といつてゐる。

【脚本】「傳信錄」中の國劇の順序書を見ると、中秋宴には、まづ神歌が歌はれ、それが濟んで、番屋の假面を被つた一人が登場して口上を述べ終ると、笠踊・花索踊・籃舞・拍舞・武舞・毬舞（獅子舞のこと）・桿舞があり、重陽宴には、老人祝（老人老女のこと）・鶴龜二兒復父仇（護佐丸敵討の事）・鐵臂事（執心鐘入のこと）・太平歌六曆（入子踊六組のこと）がある。組踊は重陽宴に護佐丸敵討と執心鐘入の二組しか演じられてゐないが、他の三組はまだ出來なかつたのか、それとも出來てゐて演ずる機會がなかつたのか、その邊は判然しない。この最初のテキストは、今に發見することが出來ぬが、目次はまづそんなものであつたらう。次の冠船踊の時のも、見出されないが、時の冊封使周煌の「琉球國志略」に記してある內容によつて、巡見の官・萬歳敵討・孝行の卷・大城崩等の演ぜられたことがわかり、その外に、女身替外二組の演ぜられたことも知られるが、後の三組は傳はつてゐない。その次の冠船踊のテキストも遺つてゐないが、時の冊封副使李鼎元の「使琉球記」（嘉慶七年）によつて、銘苅子・忠士身替・巡見の官・執心鐘入・孝行の卷・護佐丸敵討・大城崩の收めてあつたことが知れる。この時は支那の皇室に不幸があつて、國劇は取止めになつたが、テキストのあつたことは、その次の冠船踊のテキスト（今遺つてゐる中の一番

古もので、（清の嘉慶十八年編纂）に、嘉慶本に據る云々の文句があるので明かである。王府ではその都度演ずる組踊の梗概を漢譯し、「故事集」と名づけて冊封使の參考に供したから、李使もこれを見て書いたのである。その次のも見えないが、多分前のをそのまゝ採用したのではあるまいか。最後のテキストは、尚泰王の時のもので、今なほ遺つてゐる。今度頭註を附し、ローマナイズして春陽堂より出版されたのは即ち前者である。試みにその目次をあげると、中秋宴のは、一番神歌こねり、二番入子躍六組、三番獅子をどり、四番護佐丸敵討、五番女笠をどり、六番執心鐘入、七番羯鼓をどり、八番忠士身替の卷、九番唐棒、十番まりをどりで、重陽宴のは、一番老人老女、二番若衆笠躍、三番銘苅子、四番扇子躍、五番まりをどり、六番孝行の卷、七番籠をどり、八番大川敵討、九番天川をどり、十番大城崩である。これを「傳信錄」中の目次と比較すると、順序は異つてゐるが、大體に於て、似よつたところがある。しかも老人老女の翁が述べる口上は、古格を有するもので、嘉慶本に據ると書いてあつて、「傳信錄」中の老人祝の口上は、その飜譯とも見るべきものだから、その朝薫の手に成つたものであることは疑ふ餘地がない。又このテキストの奥附のところに、くはしくは詳細書を見よと記してあるから、組踊の上演について、別にくはしく說明した記錄のあつたことが知れるが、まだ見附からない。

【興行】冊封使の一行は、大方五月頃にやつて來て、十月頃に歸るのであつたが、その滯在中に、國劇は冊封式の日に演ずるのが皮切りで、中秋宴と重陽宴とに、都合三回ほど演じた。その外、王弟及び攝政の邸で冊封使を招待する宴席でも演じた。大典が濟むと、踊奉行の邸内で演じて一般民衆にも公開した。こゝで特筆すべきことは、役者が國家の官吏であつて、首里人士が役者になるのをむしろ名譽としてゐたことである。だから、國劇の餘波は、都會地や田舍に及び、那覇では市の劇が興り、田舍では村芝居が盛んになつた。村芝居で演じてゐる長者の大主は、從來老人老女のまねそこなひだとされてゐたが、折口氏は、かへつてその中に、原始演劇的要素のあることを看破して、所謂「首里親國」文化の影響を受けない以前の村芝居のもとの姿を暗示した。因にいふ朝薫は、その後二回ほど薩州に使ひし、御物奉行職（大藏次官の格）に累進して、時に三司官（國務大臣）にならうとした時、享保十九年の正月二十六日に、五十一歳で歿した。〔伊波〕

【參考】校註琉球戲曲集（伊波普猷編）○冠船躍（右原本）（縣立沖繩圖書館）○組踊り以前（折口信夫）（民俗藝術二ノ八）○玉城朝薫年譜（組踊の發生）（伊波普猷）（同上一ノ六）○琉球古今記（同上）

琉球語

世界の言語の一【名稱】南島語ともいふ。【解說】古の所謂南島、即ち琉球諸島並に奄美大島諸島の住民の間に行はれる言語であつて、琉球語として日本語と對立するものとして取扱はれて來たのであるが、日本語と同系統のものであることと明かであるから、近來日本語中の方言として取扱はれることが多くなつた。しかし日本語の方言としても、日本本土の言語と對立すべき大方言である。

【方言】琉球語内の方言的差異は甚だ大きい。大別して、沖繩・宮古・八重山・大島・德之島・鬼界・沖之永良部の七方言とする。これ等の中に更に多くの方言に分れる。標準語と見るべきは首里の言語である。【文語】古くは、外國に對するものは漢文を用ひたが、國內では公式の文書にも琉球文を用ひた。然るに慶長年間に島津氏に征服されてから日本文（公式には候文）を多く用ひるやうになり、一方、支那との交渉もあつたので、漢文も依然として用ひられたが、琉球文の方は「おたかべの詞」「御拜つゞ」（琉球文學參照）等の形式的なものを綴る以外には用ひられなくなつてしまつた。而して漢文は古くは音讀したのであるが、慶長以後、日本から渡琉した五山の僧侶が文教に勢力を得るに及んで、專ら日本式に訓讀するやうになつた。明治以後は、日本語が普及した結果、文語にはこれを用ひる。

【特徵】〔音韻〕音韻組織は、國語のと大同小異である。普通用ひられる母音は a i u の三つであるが、鼻音の前にある時に限つて、e o があらはれる。長母音には a i u ē ō がある。母音が語頭にある時は獨逸語などに於けるやうに喉頭破音（glottal stop）を伴ふ。古くは國語と同じく a i u e o の五母音があつたのであるが、e は i に、o は u に變化して本來の i u と合併してしまつた。ē ō は二重母音 ai au の變化したものである。宮古・八重山・大島・德之島には、三母音のほかに ɪ（i と u の中間音）があり、大島・德之島には ë（e と o の中間音）がある。宮古・八重山の ɪ は本來の i の轉じたものであり（ɪ は本來の e の轉じたもの）、大島・德之島の ɪ は本來の e の轉じたものである。又大島・德之島の ë は、二重母音 ai の轉化したものである。子音の種類は日本語と大體同じく、p t k s ʃ tʃ ts b d g z ʒ dz dʒ m n ŋ ɲ w r j ɸ h 等があるが、その他喉頭破音を伴ふ j w m n p b がある。鬼界では j w が鼻音化する事があり、沖永良部では喉頭破音を伴ふ p であつて鼻音化するものがある。那覇及び國頭郡北部地方には k t p の無氣音があり、大島・德之島には k t の無氣音がある。宮古には齒唇音の f v があり、r の外にロシア語の ɫ にほぼ似た一種の側音がある（語中にある時、屢々 r が ɫ に變ずる）。宮古島の周圍の小島には、r の外に側音 l がある。音節の構成法　ほぼ日本語と同樣で、音節の多くは、一の母音、又は一の子音と一の母音とから成立つてゐるが、一の子音のみで一音節をなすものも多少ある。しかし日本語に比して二三特異な點がある。即ち子音と母音との結び付き方は、一般に日本語よりも自由である（琉球語では tʃi tsu と共に ti tu があるが、日本語は tʃi tsu のみである）。但し、ŋ は與那國島方言を除いては母音と結び付いて音節を構成する事はない。又母音 i に結び付く子音には、他の母音 a u にも結び付く子音の外に、その口蓋化（又は濕音化）したものがある。即ち ki gi si 等に對して tʃi dʒi ʃi 等がある。かやうに i 列音に結び付く子音に二種の區別があるのは、母音が三つだけしかない鬼界・沖之永良部でも同樣で、鬼界では i 列音の外に u 列音に於ても同種の區別があつて、こゝでは普通の子音とその無氣音化（或は口蓋化）したものとで區別されてゐる。併し四母音を區別する宮古・八重山及び大島にはこの現象はなく、ただ德之島では u 列音に於ては普通の子音とその無氣音化したものがあつて五列を區別してゐる。即ちこの口蓋化又は無氣音化の有無は、e o から轉じた i u と、元からの i u との區別に相當するものゝやうである。

語詞に於ける音韻の特徵としては（イ）長母音が用ひられること多く、（ロ）外來語を除いては、大體に於て r が語頭に來ることが稀なのは、日本語と同一であるが、濁音が語頭に來ることが少くない（gani（蟹）gansi（島）gassaŋ（輕い））、（ハ）語頭に於て、m が m p b の前に、n が n d tʃ ʒ の前に、ŋ が k の前に來ることがある（mmu（芋）mpana（鼻）mbusaŋ（重い）nna（皆）ndi（助詞ノ〈で〉）ndʒi（見て）ŋgutʃuŋ（動く）ŋkai（助詞ノ〈へ〉））、（ニ）語尾は母音か ŋ 又は n で終る。語のアクセントは日本語と同樣、音の高低即ち調子による。

〔語法〕主な點では、日本語のそれとほぼ同一である。形容詞の活用には二種類あつて、丁度日本語のク活シク活の兩類と對應する。但し國頭郡與那原地方等では區別がない。而して形容詞の終止形は、形容詞の語幹に sa を附したものに aŋ（有り）がついて出來た形と考へられる。動詞は、少數の例外を除いては一樣の活用をなす。例へば、「書く」といふ動詞は、將然形 kaka 連用形 katʃi 終止形 katʃuŋ 連體形 katʃuru 已然形及び命令形 kaki 又は kakë といふやうに、日本語の四段活用に似た活用をなし、動詞の多くはこれに屬する。ただ例外となるのは aŋ（有り）wuŋ（居り）ʃuŋ（爲る）haŋ（掃く）等である。aŋ（有り）wuŋ（居り）以外の動詞の終止形は、連用形に wuŋ（居り）が結び付いて出來た形であらうといふ說がある。音韻の變化は別問題として宮古・八重山及び沖永良部の動詞活用も全然これと同一であるが、大島・德之島及び鬼界では多少異る。即ち「書く」の終止形が kakjuri 又は katʃuji 連體形が kakjuŋ 又は katʃuŋ となつてゐる。動詞には助動詞をつけてその意味を補足する。例へば、打消には動詞の將然形に助動詞 ŋ をつけて表はし（ikaŋ（行かぬ）kuŋ（來ぬ））、完了の意を表はすには、動詞連用形に aŋ をつける（tutaŋ（取つた）tʃitʃaŋ（聞いた））。又助詞を用ひて語法上の關係等を表はすが、助詞には ga（の）nu（の）ni（に）ŋkai（へ）madi（まで）ja（は）du（ぞ）gutu（如く）kara（から）kutu（故）tu（と）等がある。國語の「は」にあたる助詞が體言について、その語尾と融合してしまふことがある。語尾が a の場合は ā、i の場合は ē、u の場合は ō、ŋ の場合は nō となる（jama（山）→jamā、mitʃi（路）→mitʃē、tabaku（煙草）→tabakō、tiŋ（天）→tinō）。而して語尾が長母音の場合には jā を添へる（Fintō（返答）→Fintō-jā）。琉球語には日本語の文語に似た係結の規則が行はれる。普通は終止形で終止するわけであるが、du がある場合は、連體形で終止する。また古くは si 又は ʃi の動詞を受けては已然形で終止した。

【歷史】〔研究資料〕琉球語の歷史を研究する資料としては、琉球人自身の記したもののほかに、朝鮮・支那・西洋等の外國人が記したものがあるが、日本人のはあまり見えない。

（一）琉球人の記したもの。平假名で琉球文を寫したものが殘つてゐる。金石文では、文龜元年（一五〇一）の「たまおとんのひのもん」を最古として、以後元和九年（一六二三）の「ようとれのひのもん」に至るまで七つばかりが殘つてゐる（「琉球國中碑文記」に所收。そのうち五つは現に碑石が殘してゐる）。又琉球文の古文書がある。殊に首里市の田名家には四百年以前からの辭令書（しよりのおみこと）が保存されてゐる。以上は散文であるが、韻文としては、古くは「おもろさうし」がある。今殘つてゐる「おもろさうし」は、その第一卷は西暦一五三二年に、第二卷は西暦一六一三年に、第三卷以下第二十二卷までは西暦一六二三年に結集されたのであるが、十二世紀の中葉から同十七世紀の中葉に至る五百年間のおもろ千五百五十三首を收めて居つて、中央のは素より各地のおもろをも集めてゐるから、當時の中央語のみならず方言をも知ることが出來る。次いで西暦一七一一年に編纂された辭書「混效驗集」がある。これは前代の古語を集め、その意味を和文で註したものである。その他くわいにや、琉歌、脚本等も或は筆錄によつて、或は口傳によつて傳へられて居り、日本の祝詞にも比すべき「おたかべの詞」「御拜つゞ」はおもろ時代から行はれたものらしいが、今傳へられてゐるものは當時の原形を失つてゐる（琉球文學參照）。

（二）朝鮮人の記したもの。申叔舟の著「海東諸國記」（成化七年一四七一の自序がある）の附錄に琉球國に關する記事があり、その終りに「語音飜譯」と題したものがあつて（その最後に弘治十四年一五〇一の日附がある）、支那語で語句を擧げ、その下にこれに相當する琉球語を諺文で記してゐる。

（三）支那人の記したもの。その多くは語彙を集めたものであるが、明の茅伯符の所輯と稱せられる「華夷譯語」、明の周鐘等編の「音韻字海」、屠赤水等編の「籌海類編」、余象斗等編の「海篇正宗」、淸の徐葆光の著「中山傳信錄」等がある。「華夷譯語」中の琉球語彙「琉球館譯語」が纂錄された時期は明かでないが、相當古いらしい。「音韻字海」の語彙は、閩の地で琉球の通事について調べたものであるといひ、「中山傳信錄」の語彙は、萬曆三十年に渡航した冊使夏子陽の使錄及び康熙二年の冊使張學禮の雜記中に收めたものを基礎としたものである。而して「籌海類編」「海篇正宗」の琉球語は、「音韻字海」と大同小異である。

（四）西洋人の記したもの。英船長 Captain Broughton の「北太平洋探檢記」（1804 倫敦版）の附錄に琉球語彙があり、二十一語を擧げてゐるが、文化十三年（1816）に琉球に來航した英艦 Lyra 號の艦長 Captain Basil Hall の航海記（1817 倫敦版）には、Clifford の編纂した琉球語彙があり、單語一千語、文例百十六及び琉球日本蝦夷三語對照表を擧げてゐる。又 Lyra 號と共に來航した Alceste 號乘組の軍醫 Mac-Leod の航海記（1817 倫敦版）には、Fisher の蒐集した琉球語彙百八語を擧げてゐる。又弘化三年（1846）より安政元年（1854）まで在琉した Bettelheim が琉球語に譯した聖書がある（上海で出版）。那覇方言で記したもので、片假名で寫してある。

〔沿革〕琉球語史を明かにすべき資料としては、上記の如く、確實なものとしては十六世紀初頭以後のことに屬し、「おもろさうし」に收錄されたおもろ中の製作年代の古いものにしても、十二世紀中葉以前に溯ることが出來ないから、それより以前のことは明かでない。ただ琉球諸方言の比較研究によつて文獻以前の狀態を多少は明かにすることが出來よう。文獻以後の琉球語は、慶長年間の島津氏の琉球入りと、明治維新以後、日本に直屬するやうになつたこの二つの政治上の變革によつて劃期的の變化が行はれた。即ち島津氏の琉球入り以前の琉球語は、謂はゆる「みせせるの書

葉」の行はれた時代で、日本語の影響も多少はあつたらうが、未だ古格を保つてゐた。島津氏の琉球入り以後は日本語（主として薩摩方言）の影響を受けて一變し、又獨自の變遷を遂げて、「おもろさうし」等の言葉が理解し難いやうになつた。明治維新以後は標準日本語の普及や日本文化の弘通によつて一層日本語に近い形をとるに至つた。琉球語の母音については、現在aiuの三母音であるのを見て、チャンブレン（B. H. Chamberlain）はこれが即ち日本語と琉球語の祖語の姿の生き寫しであるとしたが、却つて古くはaiueoの五母音を區別してゐたやうである。おもろ時代には多少混同して行く傾向は見られたが、未だ五母音を區別してゐたらしい。その後iとeが混同し、uとoが混同するやうになつたが、その前に來る子音の口蓋化又は無氣音化等の有無によつてi列音とe列音、u列音とo列音との區別が保存せられた。又日本語の波行子音に對應するものは、現在首里ではF音h音が行はれ、漸次h音に統一されて行く傾向が見られるが、その他の方言では、p音に發音してゐる所もある。而して古くは各方言ともp音であつて、それがF音になりh音に轉じて行つたらしい。動詞の活用の種類についても現在の琉球語のそれが單純な所から、チャンブレンは日本語の奈變式の活用が、祖語に於て行はれ、その後日本語では幾つかの種類に分れたが、琉球語は祖語に於ける狀態をさながら傳へたとしたが、琉球語に於ても古くは幾つかの種類があり、後に漸次整理されて現在のやうになつたらしい。而して係結は、おもろ時代にあつては、日本の古代語の「こそ」と同樣に、si又はri（日本語の「こそ」に當る）を受けて已然形で結ぶものも行はれてゐた。

〔文語の沿革〕琉球に固有の文字があつたかどうかは明かでない。現存の文獻は多く平假名で書かれてゐるが、西暦一四四五年に朝鮮で印行された「龍飛御天歌」卷二「琉球南蠻重譯入貢」の條に「則用倭字、言語與日本相似」とあるのによつても、相當古くから假名を用ひてゐたことが分る。而して島津氏の琉球入りまでは多く琉球文を平假名で寫して一般に用ひてゐたのであるが、琉球入り後は、公式には日本の變體漢文を用ひ、從つて文字も漢字であり、御家流に書いた。又一方支那にも朝貢してゐたので漢文も用ひられた。

【系統】 琉球語が日本語と同系であることは、古く琉球の政治家羽地王子向象賢や宜灣朝保や、明治初年の琉球處分の時に琉球に使ひした松田道之等も述べてゐるが、チャンブレンが琉球語の研究をなし、日本語との間に本質的一致の存することを明かにしてから、何人も疑はないやうになつた。チャンブレン以後の琉球語研究の結果に徴して見ても、兩者間には大體規則正しい音聲の對應が見出されるし、語法上の特徴にしても、日本語と一致するところが多いので、全く同系統であると斷じて間違ひない。ただ日本語と琉球語がどういふ關係に立つかの點に就いて異論がある。チャンブレンは、兩語の關係はスペイン語とイタリヤ語、或はスペイン語とフランス語との關係に似たものであるとし、同一祖語から分れて、一方は本土に於て日本語となり、一方は琉球諸島に於て琉球語となつたのであると論じたが、安藤正次氏は、この說に反對し、日本語といふものが形成された後に琉球語が分れ出たものであらうとした（古代國語の研究）。琉球諸島のことは、推古天皇の頃から國史に見えてゐるが、我が國では外國として取扱ひ、入貢歸化などの文字を用ひてゐるのによつても、當時相當の隔りがあつたやうに考へられる。その後兩者間には公式の交渉が途絶え、日本の勢力は及ばなかつたが、鎌倉時代に至つて日琉間の交通が再び劇しく行はれるやうになつてから、又日本語の影響を受けることが多くなつたのであるが、琉球王國として獨立して居り、島津氏に征服された後も、表面では獨立國の體裁を保つてゐた狀態で、日本本土の言語と分れたのは何時か分らないにしても、琉球語は琉球諸島内で獨自の發達變遷をとげたのであらう。而して同一系統に屬する日本語と琉球語との比較研究によつて、原始日本語、又は共同祖語を再建することが可能であらう。（國語・方言參照）

【參考】 B. H. Chamberlain: *Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language. 1895.* (*Transactions of the Asiatic Society of Japan. vol. 23*) ‖ E. D. Polivanof: *Sravnitelino-phoneticheskiy ocherk Yaponskavo i Ryukyuskavo yazikof. 1914.* ○琉球の方言伊波普猷（ことばの講座第二輯）○琉球の方言同上（國語科學講座）○南島方言研究について東條操（國語教育一一ノ二）○再び南島方言について同上（國語教育一一ノ五）○琉球語就中八重山語の研究宮良當壯（國學院雜誌二九ノ七・八・九）○琉球語の體系的考察奥里將建（國語國文の研究九・一〇・一三）○南島方言の音韻現象東條操（國語教育一一ノ一〇）○「琉球語」と「國語」との音韻法則服部四郎（方言二ノ七・八・一〇・一二）○琉球語の母音組織と口蓋化の法則伊波普猷（國語と國文學七ノ八）○琉球語の母韻統計伊波普猷（民族一ノ二）○琉球に於けるカ行鼻音宮良當壯（國學院雜誌三二ノ四）○琉球語の波行音の變遷新村出（東方言語史叢考）○沖繩語典仲本政世○混效驗集（「古琉球」三版附錄）○琉語解釋宜灣朝保（琉球語便覽附錄）○沖繩對話沖繩縣學務課編○琉球語便覽糖業研究社編○（標準語對照）沖繩語の研究桑江良行○採訪南島語彙稿宮良當壯○八重山語彙同上○南島方言資料東條操○語音翻譯釋義伊波普猷（金澤博士還曆記念東洋語學の研究）○海東諸國記附載の古琉球語について同上（國語と國文學八ノ三）○吾が古代語と琉球語との比較宮良當壯（史學三ノ三）○琉球人の見た古事記と萬葉集奥里將建○琉球戲曲新辭典（方言三ノ九・一〇・一二、四ノ三）○古琉球伊波普猷○琉球古今記同上○南島を思ひて新村出（南蠻廣記）○南島研究の現狀柳田國男（啓明會第十五回講演集）○沖繩方言研究の必要金澤庄三郎（國語の研究）○古代國語の研究安藤正次○改訂增補日本文化史（古代）同上○日本語の根本的研究北里闌（伊波・服部）

琉球文學

【解說】 日本民族の遠い岐れであつて、古代生活の樣式を多く保存してゐる琉球には、治者の興亡が頻繁であつたのに加へて、島津氏の琉球入があつた爲めに、四百年以前の文獻は大方失はれて今日に傳ふるものは少い。第二尚氏の初期に自國語の金石文が刻まれ、「神歌双紙」が編纂されたが、後者はとりもなほさず琉球最古の文學で、古琉球人の生活と思想とをかいま見るに、都合のいゝ資料である。

【神歌】 第二尚氏の第三世尚眞王の治世は、年代からいふと、室町時代に當る比較的若い時代であるが、社會狀態から見ると、國家統一の

大業が完成された崇神天皇の朝に比較さるべきものである。この頃まで沖繩本島には方々に間切と稱する邑落があつて、その住民は何れも氏神を中心として、邑落生活を營んでゐたが、これ等の邑落民に取つては、政治は即ち祭事であつたから、集會のある毎に、そのおもろねあがり（詩人の義で、詩王又は歌聖ともいふ）等は、日本上古の語部のやうに、神事若しくは邑落の歴史に關する神歌を民衆に謡つて聞かせたり、或は自らおもろを作つて、手拍子や鼓に合せながら謡つたりしてゐた。だが間もなく琉球古代史の幕は下りて、かうした享樂の日は終りを告げた。即ち尚眞王の中央集權によつて、各邑落のあぢべ（領主等）が首都に引移つた後、所謂邑落生活の狀態は一變せざるを得なかつた。かうした社會制度の激變によつて、氏神を中心として叙事詩を歌ひくらした詩人の中には、職業を失ひ、郷里を離れて、放浪した者も多かつたらしい。團體生活を離れる刹那に、人間の個人性が目覺めるものとしたら、そこから自然抒情詩が發生して來なければならぬ。丁度その頃支那から三絃樂が渡來したが、放浪詩人のアカインコが、これをおもろに合せて彈き始め、これを提げて、津々浦々を謡ひまはつたと言ひ傳へられてゐる。この新樂器の採用も亦、抒情詩の發達に與つて力があつたと見なければならぬ。かうして、おもろの内容は叙事詩から抒情詩へ變り、その形式も長篇から短詩へ遷つて、遂に八八八六調の琉歌にその位置を讓らざるを得なくなつた。おもろは所謂素樸詩で修辭の側から見ると、取立てていふべき程のものでもないが、西詩などのやうに、韻を踏んだものが多く、しかも盛んに對句が使はれてゐる。そして並行する前後の兩脚は、語詞は異なつてゐるが、意味には餘り變りがない。何れも大方定數の音節で成立つてはゐるが、どこまでもそれによつて制限されることはない。だが後世琉球詩歌の基調となつた八八調が、到る處に現はれてゐるのは注意すべきことである。おもろ（古い形はおもりで、その同義語はせるむ）は祭政一致時代の産物であつて、大部分が神事に關するもので、神事若しくは神と稱せられる巫女その他の神職の間にのみ用ひられたところから、神歌又は御唄といふ漢字があててあるが、語源を調べて見ても、その釋言であることが知れる。「遺老說傳」に神歌のことが見えてゐて、それに「俗稱於毛呂三比也志」と注がしてあるが、この三は敬語の御で、比也志は拍子から轉じて謡の義になつてゐるから、おもろみひやしといふ熟語に御杜御唄、即ち神前で謡ふ歌の義のあることは明かである。古くはおもろせるむといふ同義語のあつたことも、容易く類推することが出來る。琉球語で書かれた金石文には、おもろのことがみせせるとも見えてゐるが、みせせるは神託の義で、「さゝやく」といふ義のある語だから、おもろに形式化された神の言葉の義のあることはいふまでもない。その姉妹詩くわいにやが、「おもろくわいにや」（神謡）と呼ばれるやうに、おもろもかつておもろひやし（或はおもろせるむ）と稱へられてゐたが、被限定語が落ちて、限定語だけ殘つても、なほ本初の意味は忘れられず、神歌と解せられて今日に至つた。これで見ると、琉球文學の發生もやはりその根源を宗教的のところに求めなければならなくなつて來る。又おもろをゑととといふ場合のあることも注意すべき事である。

現代琉球語では、ゑとは人が働く時に、働きにつれて歌をうたひ、或は聲を出すことに言ひ、又勞働者などのかけ聲にもいふが、天保の頃に出來た「南島雜話」にも、奄美大島で勞働歌のことをゑとといつたことが見えてゐる。この語は歌謡の上に現はれたおもろ人即ち古琉球人の生理的心理的律動性に就いて簡單に語つてゐるやうに思はれる。古代に溯るに從つて、人間の團體意識は次第に强くなるから、祭祀とか戰鬪とか貿易とかいつたやうな社會的大事件に際して、敏感なおもろ人の生理的心理的律動性は、發動してゑととなつたに違ひない。初期の長いおもろは大方かうして歌ひだされたであらう。おもろに旋律的なのが多いのは專らそのためではあるまいか。口碑に、尚眞王が諸侯を首都に聚めた時、各地のおもろを纂めて、神歌主取といふ職を置いたといふことがあり、王の第四子韶威の後裔向氏具志川家の家譜に、韶威が北山の監守となつて今歸仁城に赴く時、父王から唄雙紙一冊を賜はつたといふことも見えてゐるから、當時に於て既に一種の「おもろさうし」のあつたことがわかるが、このテキストは最早見出すことが出來ない。そして今遺つてゐる「おもろさうし」は、やゝ後に出來たものである。即ち尚眞王の子尚淸王の即位五年（西暦一五三一年）におもろの第一回の結集があつて、第一卷が出來、それから八十年後（島津氏の琉球入りより五年後）尚寧王の即位二十五年（西暦一六一三年）に第二回の結集があつて、第二卷が出來、それから十一年後、即ち尚豐王の即位三年（西暦一六二三年）に、第三回の結集があつて、第三卷から第二十二卷までが出來た。これやがて第二種の「萬葉集」とも稱すべきもので、西暦十二世紀の中葉から同十七世紀の中葉に至る五百年間のおもろ千五百五十三首を集めたものである。中央部のものばかりでなく、沖繩本島内の各邑落及びその周圍の島々から蒐集されたものであるから、いづれもその發生地の現今の方言と比較すると、音韻その他の點に於て、現今の方言の訛りがおもろのそれと符を合すやうなのが可なりある。最後の卷の「みおやだいりのおもろさうし」は、その名稱の示す通り、國家的祭式の時に謡つたもので、國王當時までは、その四十七首が全部謡はれたらしいが、明治の初年頃には、最早八首しか謡はれなくなつてゐた。いづれも國家的祭式の時に神歌主取及びその部下の男子によつて謡はれたもので、その謡ひ方は唱名のやうなものである。手拍子又は樂器に合さないで謡つたもので、これをフク（鳴る）といつた。おもろ人は鶯の囀るやうに、うたひ出したので、さうすることをフクといつたが、おもろが全く作られなくなつてから、單にこれを謡ふことをフクといふやうになつた。第九卷の「いろ〳〵のこねりおもろさうし」も、その名稱の示す通り、舞踊の時に謡はれたもので、傍註にはこねりの手まで書き込んであるから、やはり國王當時まで、舞の本として使用されたことがわかる。古くは「おもろさうし」の大部分がさうであつたらう。こねりはコネラ、コネリ、コネル、コネレと活用する動詞の名詞形で、その同義語にしのぐといふ語があるが、何れもド・モルガン氏の所謂 Danse rituelle（祭式舞踊）の義を有つてゐる。古くはおもろが、單に謡はれたばかりでなく、音樂と舞踊とが伴つてゐたことは、おもろの中にも見えてゐる。これは大方祭式でない遊びの時に行はれたの

であるが、この時には、ねとりといふ音頭取りがゐた。以上は「おもろさうし」編纂のいきさつであるが、例の具志川家の家譜に、清の康熙四十八年、首里城に火災があつて、「おもろさうし」が燒失した時、傳ふるところの「おもろさうし」を獻じて公補の用に備へた、といふことがある。その翌年、首里王府では、具志川本から二部を寫して一部は王城に保存し、他の一部は特に傳註や句讀をつけて、宜野灣間切大山村の神歌主取家に保存させた。翌年その副産物として、「混効驗集」といふおもろの辭書が編纂された。かうして琉球の古典は漸く後世に傳へられたが、先年帝國學士院補助の下に、南島談話會から出版せられた。

【くわいにや】 くわいにやは、おもろから派出して、おもろと並び用ひられた歌で、その名稱はこれを謡ふ時のコーイナーといふ囃子から來たものである。コーイナーはおもろにも見えてゐるこいのといふ囃子と同じもので、現代琉球語のクェーナー即ち五位鷺のことである。祭式の時に謡ふくわいにやはおもりくわいにやといつて、「女官御双紙」及び「久米島由來記」に二十餘首錄したのと「聞得大君加那志御新下日記」の卷末に載つてゐる二首の外には、容易に見出すことが出來ない。琉球最高の神官聞得大君（國王の姉妹）が任命されて、初めて聖地サヤハ御嶽に參詣する時、道々「道ぐわいにや」を謡つたが、その時にはくわいにやを手拍子や鼓に合せて謡つた。そして愈々聖地の社に這入つて、おもりくわいにやをやる時には、鼓をぬきにして、手拍子だけ打つて踊つた。おもろとくわいにやとが同一の母體から出た姉妹詩であることは、詩形や囃子の類似からいつても、舞踊に合せて謡ふ點から見ても、手拍子や鼓に合せて謡ふ點からいつても、又さうした場合に音頭取りのゐた點から考へても、何等疑ふ餘地がない。ただ後世おもろには男子がたづさはるやうになり、くわいにやには女子がたづさはるやうになつた爲めに、甚しく異なるもののやうに考へられるに至つた。おもりくわいにやの外に、くわいにや一名やらしくわいにやといふものもある。多くは記錄されずに首里那覇の婦人間に傳へられたもので、家人親戚の遠方へ旅立ちした後で、婦人達が相集まつて、これを手拍子や鼓に合せて謡ひつつ、輪になつて踊つたものであるが、それにはくわいにやね又はねとりと稱する者がゐて、くわいにやを記憶して居り、依賴に應じて音頭を取つてゐた。中には目に一丁字もない老婆が、三百行位の長篇をそらで覺えてゐるといふ珍らしいこともあつた。やらしくわいにやの名は、「屋良ぐわいにや」といふくわいにやから來たもので、室町時代に日琉の貿易が盛んであつた頃、日本に使ひした屋良子（即ち屋良の頭主）を歌つたものであるといはれてゐる。やらしくわいにやはかうして旅立ちした人の家で能く謡はれるので、又「旅ぐわいにや」ともいはれる。おもろやくわいにやの外に、おもりといふものがあつて、各地方の祝女及びその他神事に關係する女人の間に行はれてゐるが、これは三十幾年か前に、田島利三郎氏に採錄されて、百篇以上傳へられてゐる。村の祭りの時に謡はれたばかりでなく、新築祝や船の進水式の時などにも謡はれ、久米島や勝連村では葬式の時にも謡はれた。おもりにはおもろやくわいにやに劣らない長篇があつて、おもろに似たものもあれば、くわいにやに似たものもあるから、公認されないおもろ或はくわいにやといつても差支なからう。祭式以外の時に謡つたおもろの曲のどんなものであつたかは、知ることが出來ぬが、幸ひにくわいにやや、このおもりがまだ謡はれてゐるので、かういふものであつたらうといふこと位は推測することが出來る。とにかく琉球の音樂は、島津氏の琉球入後、民族性の變化につれて、だん／＼しぶくなり、その上日本音樂の影響など受けて、大變化を遂げたが、かうして婦人の間に保存された素樸で、しかも陽氣な音樂をとほして、その原形をかいま見ることが出來るのである。

【琉歌】 島津氏の琉球征伐は、琉球民族に取つては空前の大悲劇であつた。爾來三百年間、彼等は奴隷の境遇に呻吟し、從つておもろやくわいにやも歌はれなくなり、琉歌と稱する三十字詩によつて、僅にその諦めを表現することが出來たが、それさへ後には上流社會の專有物となつて、下郷にゐる者はただそれを三味線に合せて謡ふだけになつた。もし島津氏の琉球入がなかつたとしたら、おもろなども化石にならずに、八重山諸島の民謠のやうな狀態を經て、立派な詩にまで發達したであらうに、壓制度のためにふみにじられたのは惜しみてもなほ餘りあることである。然らばおもろに代つて勢力を得、今なほ餘喘を保つてゐる琉歌は、如何にして發達し、如何なる使命を果すことが出來たか。田島利三郎氏は八八八六の四句三十音節を以て綴りなした琉歌が、慶長前後に行はれ、日本との交通が頻繁になつてから、大に流行し出したといはれたが、既に第二尚氏の大親尚圓が二十歳の時に、この詩形で歌つたのがあり、又彼が幼い時分、伊平屋にゐた頃、彼を歌つた同形の歌が遺つてゐる以上、この詩形が五百年前からおもろと並び行はれたことは明かである。又おもろの中に、この形式に近いものが二首ほどあつて、琉歌への推移を示してゐるのも證とすることが出來る。しかも琉歌の中にも、八八八八……六といつたやうな所謂長歌が可なりあつて、大抵田舍に殘つてゐるのは注意すべきことで、「歌三味線」（歌を三味線にのせて謡ふことで、おもろを鼓に合せて謡ふことをおもろつづみといつたのと同じいひあらはし方である）流行後は、殆ど八八八六調が勢力を得て、遂に長歌を都會から驅逐したことを推測させるものである。田島氏はこの短歌の形式が、和歌の影響を受けて、發達したやうに言はれたが、高野博士は「日本歌謠史」中に、都々逸の如き七七七五調の詩形が勢力を得たのは、三味線と共に琉球から這入つて來た八八八六調の琉歌の影響であらうといはれた。なるほど琉歌はずつと後になると、和歌の影響を受けて、七五八六又は五五八六の如き仲風、或は今風（折衷或は新調の義で、今ではこの詩形のものを謡ふ時の曲の名をいつてゐるが、本來は詩形の名であつた）といふ和歌調の詩形も發生したが、琉球の文藝復興期（享保正德間）頃までは、八八八八……六調又は八八八六調が唯一の詩形であつた。試みに二百年前の片田舍の女歌人ウンナ・ナビーの歌を一首だけ出してみよう。

明日からの明後日、君が番上り、たんちや越す雨
の、降らなやすが。

萬葉歌人の「鳴る神のしばし動みて空くもり雨も降らなむ君とまるべく」を聯想させる歌である。勿論彼女は一生中に萬葉の名を聞いたこともなければ、こんな歌があらうとは夢にも見なかつた筈である。和歌の影響を受けなかつた琉歌には、かうした調の高いものが多い。同じ頃の遊女ヨシヤの歌に、

及ばらぬと思ば、思ひ增鏡、影やちよも（影ト）寫
ち（ウツシテ）拜み欲しやの（イタイキャ）

といふのがあるが、これが即ち和歌の影響を受けた琉歌の見本である。無學なる一遊女が「思ひ增鏡」の一句をつかつたのを見ただけでも、日本文化流入の程度を想像することが出來よう。當時の創作家（實家記・苔の下・若草物語・萬歳等の擬古體の小說を物し、又は「手水の緣」といふ琉球語の戲曲を書いた）にして歌人なる平敷屋朝敏は、和歌の詩形を取入れて、所謂仲風といふ詩形を創作し、盛んに和語を攝取したので、最初の間は非難されたが、それが漸く承認されて、一部の歌人の間に行はれ、さては三味線にものせて謡はれるやうになつたので、和語も從つて一般歌人の耳に馴れるやうになり、やがては三十字詩にも採用されて、とう／＼口語にまで取入れられるやうになつた。琉球語に和語のはひり込んだ經路には、かうした方面のあつたことも忘れてはならない。同様な現象のおもろ時代にあつたことも、これから類推することが出來よう。兎に角、今日琉球ほど歌よむ者の多いところはあるまい。その巧拙は措いて男女といはず、貴賤を問はず、凡そ物ごゝろを知れる者に、歌のよめぬと思はれる者は一人もない。そしてこれを三味線に和して歌ふ節の數が大凡二百五十もある。だから、こゝでは歌の巧拙を評價する場合、まづ三味線に合せて歌へるかどうかが第一の標準になつてゐる。かうした關係から、琉歌でいゝといはれるのは、構想はともかく、大方リズミカルなものである。よむ歌と謡ふ歌とがまだ分離しなかつた記紀・萬葉時代にも、かういふことがあつたに違ひない。今日南島の中で琉歌のうたはれてゐる所は、沖繩本島と沖之永良部とであるが、嘗て鬼界・德之島・大島の三島でも、盛んに行はれてゐたことは、そこに澤山の三十字詩が保存されてゐるので知れる。これで見ても、琉歌が慶長前後に發生したといふ說の取るに足らないことがわかる。琉歌の外に、七七七……五調の口說といふのがあるが、その名稱から見ても、又謡ふ調子から考へても、日本文學の影響を受けて發生したことは明かである。別につらねといふものもあるが、比較的近代の發生で、男女の關係、衆道のことをつらねた外は、何物をも見出すことが出來ず、その數も亦至つて少い。これは八八……の調で出來てゐて、琉球歌謠の中で、こればかりはただ詠むのみにして謡はれないものである。その外に、木遣の歌・子守歌・毬歌及び童謠などもある。

【散文】 既に琉球文學の中心問題なるおもろその他の韻文のことを述べ了つたから、その散文について數言を費さなければならぬ。神職が神に對つて言ふ詞をおたかべの詞（祝詞の義）といふ。「琉球國諸事由來記」その他の記錄には、おたかべの意趣と記されて殘つてゐる。今の神職は多く普通の話のやうにして祈願報謝のことを神に述べてゐるが、なほ神人（巫覡の義）の言葉といつて、往々普通には解しにくい言葉だとされてゐる。盛んに對句が使はれて、やゝおもろに近いが、その用語はおもろのそれのやうに古くはない。今一つ御拜つゞといふのがあるが、いはば當時の祝文奏辭といつたやうなものである。但しこれは、上に對して謝恩の意を述べる時に用ひるものである。又王城中の儀式の時に言ふ或る定められた言葉をも「御拜つゞ」といつた。これ等は詳しく「下庫理御双紙」（式部官日記の義）に記載されてゐる。いつ頃綴り做かれたかは詳かでないが、必要の時には、昔から傳へて來たのを寫し取つて、これを用ひる例になつてゐたとのことで、その意味の如きは、當事者さへ解し得ないのが往々あつた。おたかべの詞と御拜つゞとは、おもろ時代から行はれたに相違ないから、用語などもおもろと大差はなかつただらうが、言語の變遷に伴ひ、所謂みせせるの言葉が解しにくゝなるにつれて、その時々に新語にすげかへられ、遂にその原形を失つたのであらう。でも、その原形といはれるものさへ、當時の口語ではなく、古語をもじつたり、造語をしたりしてわざとわかりにくいものにしてゐたことは、想像するに難くない。だからおもろの場合と同じく、これ等の語彙や語法を、言語研究の對象とする時には、餘程の注意が拂はれなければならない。

【參考】 琉球文學研究 田島利三郎 ○日本文學の源泉としての琉球文學 伊波普猷（日本文學講座）○琉球文學 同上（岩波講座日本文學）○校訂おもろさうし 南島談話會出版 ○おもろさうし選釋 伊波普猷 ○オモロ七種 同上（「古琉球」の中）○琉球音樂の鼻祖アカインコ 同上（同）○可憐なる八重山乙女（宮古島のアヤゴ）同上（同）○歌謠に現れたる八重山の開拓 同上（同）○鷲の歌（八重山の民謠）同上（同）○小さき蟹の歌（同）同上（同）○南より（同）同上（同）○琉歌と頭韻 同上（同）○琉球文にて記せる最後の金石文 同上（同）○古琉球の歌謠に就て 同上（「琉球古今記」の中）○祭式舞踊（おもりくわいにや）同上（同）○宮古群島のアヤゴ 柳田國男（民族一ノ二）○沖繩の人形芝居 宮良當壯 ○八重山古謠集 宮良當壯・宮良長包 ○八重山民謠誌 喜舍場永珣 ○三十字詩（琉歌）の詩形について 山內盛彬（國語と國文學二ノ五）〔伊波〕

柳橋新誌

繁昌記 三冊 **【著者】** 何有仙史（成島柳北）**【刊行】** 初編は安政六年、明治七年二編、初編と合冊して世に行はる。三編は明治九年の著なるも發行禁止となり、僅に序文の傳はるのみである。**【內容】** 初編は柳北二十三歳の時の著であり、江戶爛熟期で柳橋の全盛時代であり、多情多感の風流才子たる柳北が柳橋の事情を叙し、洒脫・漫談を記して懷を遣つたものである。その好評に乘じて出たのが第二編であるが、この時は時勢は變じて明治政府となり、薩長の田舍侍が得意となつて花柳界に耽溺してゐる時であるから、生粹の江戶ッ兒で通人たる舊臣出の柳北は、不平の餘りその才筆に任せて柳橋を題材となし、これを諷刺したのであるが、これが人氣に投じ、またその才筆に魅せられ、洛陽の紙價を貴からしめた。次いで出た第三編は風俗壞亂の故を以て發行を禁止せられた。實際第二編あたりでも、隨分如何はしい文句もある位であるから、第三編はなほ甚だしかつたと思はれる。ただその序文が傳はつてゐるから左に揭げる。

柳橋新誌第三編序

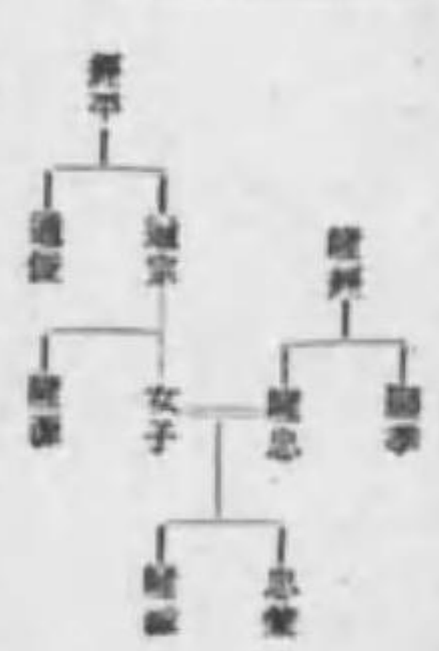
[illegible]柳之詩、[illegible]。余之始著柳橋新誌也、年二十有三、[illegible]之時、而柳橋之繁華有大可觀者焉、及第二編則、[illegible]於東京、百事維新、余齡三旬加四、[illegible]

余亦寡矣。花晨月夕、時呼舟命酒、且輙歌子憐紅水砦之間。而收坊所謂可以試其技者、皆四散而盡。静復往昔之歡、偶有一二新吾輩相之足傷欲者。亦乍來乍去、食頃驟々、明日見是遠草弘宮聚散、送刻舅夜白髪之編、燈底篤及花柳場裏。寂寞夢於秀句、都寛活乎水擢之頃、比々既出于新聞紙上。而柳橋景況多云。其冷落寂寞、使人顔黯之感、今然湖勢、者亦不足與語、猶氏附韻色即是空者、安知非無御橋今日之事、而遺也哉。嗚東京第一風流之地、而繁已如是、其他可推而知也。吁人無情朝已、果有情明安得不之慨然乎。昨偶過古柳橋、天將晩、霜氣逼寂、然月在樹、柳條俺蓋如詩。嗚見一種哀数片悄々幽水已、余潤雖不御去。然有一老姥、詢其衣落、悔余而日、義時有何有仙史者、作柳橋新誌、盛記其盛也。所今繁難至此、不知仙史亦既在、猶能作誌語否。余悟徒然涙下。書且寄三郎三編序。明治丙子十二月二日。

川田甕江云、静竹関熱之地、有此国寂寞、多情知御北仙史、安得不愴然乎。末段寄傷絶妙。又曰纔々著撰、有情有韻、感慨俱至、便情深、堅孤俱餘山來。

【影響】「柳橋新誌」を以て知らるゝは、柳北の本意ではなく、寧ろその餘技に過ぎないのであるが、柳北の著書としては確かに出色のものである。難解なる漢文を自由に驅使して、市井の雜事を記載した「江戸繁昌記」（別項）の系統を引いて、同じく漢文を以て花柳事情を叙したのであり、この文體は一世を風靡し、明治初期の繁昌記、花柳事情は皆この體を摸し、また雜誌の軟派記事さへもこの體裁に據つてゐる。　（尾佐竹）

隆源 りゆうげん　歌人　【姓】藤原　【別名】隆源阿闍梨・若狹阿闍梨隆源・阿闍梨大法師隆源・阿闍梨傳燈大法師位隆源　【生歿】未詳　【閱歷】若狹守通宗の子。康和の頃から天仁の頃まで凡そ十年間の事を知り得る。若し若狹守通宗朝臣女子達歌合（應德三年）の歌人に阿闍梨とあるのが隆源であるならば、應德から天仁まで凡そ二十餘年間の生存がわかる。「顕季集」に贈答歌があるが、顕季の歌は、「花見んとねこしにうへしわか櫻咲にけらしも風なふきそも」とあつて、左に「あざりのこのむ歌のすがたになん」と註がある。「散木弄歌集」にもその名が見えて、俊頼と交のあつた事がわかり、長治三年藏人頭から參議に陞つた重資が未だ頭であつた頃、殿上の人々をあまた具して大井川に逍遙した時、彼も俊頼・仲實・教隆等と共に隨行したことがわかる。但し「十訓抄」によれば、俊頼が源中納言國信卿家の歌合を判じたのを、隆源・基俊各々をこつき樣々の事どもを書き付けたとある。「國基集」にもその名が見え、備中守仲實が任に下るのを國基と共に難波に見送つてゐる。隆源の知識は外甥の隆縁に傳はり、隆縁は清輔と何等かの關係があつて、通宗・通俊から清輔・顕昭に至る學統がわかる。【著作】隆源口傳一卷○勅撰集に入れる歌は「金葉集」以下凡そ十首。　（西下）



康和二年	仲實朝臣女子根合の作者
康和年中	堀川太郎百首の作者
天仁三年	山家五番歌合の作者

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱

流行歌 りうかうか　歌謠　【名稱】「はやりうた」「流行うた」とも云ひ、「時花歌」などの字をも宛てる。時々に流行する歌のことで、「はやりうた」には、逸り勇んで歌ふ歌の義もある。世謠・時謠・俳謠・衰謠などとも云ふ。【解說】各時代に流行歌謠は存した。上代の大歌、平安朝時代の風俗歌・催馬樂・朗詠・今樣の類、中世の小歌（各別項）等、何れも流行歌である。併し特に各種の流行歌が頻繁に現はれて、他の諸種の歌謠に對し、その存在を明かに示したのは、江戸時代に入つてからである。（歌謠參照）【江戸時代】　江戸時代の流行歌は、隆達小歌（別項）に始まるが、これは寧ろ中世小歌の傳統が多く、弄齋（別項）を近世流行歌謠の祖とすべきである。ついで片撥（別項）・平九節・小六節（別項）・綱り節・芝垣（各別項）・背笠節・加賀節（別項）・土手節（別項）・鯛節・藤節（別項）・伊勢節・小室節・れんぼ・ぬめり（各別項）・秋田節・信田節・清十郎節・源五兵衛節の類が、元祿時代までに順次行はれたが、就中、投節（別項）がその代表である。清十郎節・源五兵衛節は、お夏清十郎や小萬源五兵衛の情話より出たもので、近松や西鶴に作品の材料を供給してゐる。この期の流行歌は、假名草子の類にも散見する。また芭蕉の「貝おほひ」には、伽羅節・お竹節・長太郎節・晩鐘寺節等の流行歌の名が出てゐるが、伽羅節や晩鐘寺節は、名高い流行歌である。元祿時代の流行歌は「松の葉」や「落葉集」（別項）の類の外、浮世草子・淨瑠璃・狂言本等にも見える。いよこの節（五尺手拭節）・小宗節・伊勢の櫛田・さいこの節・彥惣節・さんさ節・蔦の葉節・ちんく節・しよがえ節・山中藥師節（山中節）・江島節・金澤節・はねそ節・捨ててん節・横手節など行はれた歌は無數である。小寺玉晁の「小歌の巷」には、「元祿正德頃の流行歌」と題する寫本を收める。ついで「享保諸賓のはやり唄」（享保諸賓實刊）には、もつとも節・ゑいやこの節（もつとも節と同じ）、とゝりき節・太郎左衛門節・あれ見さしやんせ節等がある。この外、ちりんつ節・浮名節・猿太郎節（ちやんちやん節）・金平したりや節・信田妻與勘平節・おしやる節・何のこちや節等が享保頃より寶暦頃にかけて瓦版として出た。享保頃の流行歌は、「吟曲古今大全」に見える清澄節・のうさ節・草づくし・ゑちやゑ節・云ふわいな節・松の二葉などや「三原繁覓記」に見えるよいや節など數が多い。前者は上方、後者は名古屋における流行歌である。明和乃至天明時代の流行歌は、洒落本を始め、滑稽本・黄表紙の類にも見えるが、瓦版として出でたものも益々多くなつた。しんぼ寺大寺・金比羅節・どん〳〵節・柿の暖簾等は、洒落本や黄表紙に散見するところ、例へば「廓中奇譚」（明和六年版）に、

ほうづきほどの血の涙ヨ落ちて松露になるまいか

と出てゐる歌は、「辰巳の園」（明和七年版）にも、

さうなすほどの血の涙落ちてかはちやにヤアなりやしよまいキタきたきたさの讃岐の金比羅

と見え、この終りの囃子詞よりして、金比羅節とも云はれて、「きの〳〵金比羅節」（安永元年）と云ふ黄表紙も出た。この流行歌は、元來近松作の淨瑠璃「心中宵庚申」の道行の野菜づくしの文句より出てゐる。かやうに、流行歌と小說類との關係が密接であつた。その他、してな節・八重櫻花のなぞ節・やつとこせよんいやな節等があつた。文化文政時代以後、幕末にかけては、その存するものが甚だ多い。潮來節・よしこの節・都々逸節は、その尤なるもの、その他、とつちりとん節・いよさ節（いよさかすいしよで氣はざんざ）、やだちう節・両白節・

大津贇節・伊豫節・角力取節・數へ唄（一つとせ節）・追分節・名古屋節・しんぐいく〳〵節・鎌倉節・いゝかか節・だんよ節・はねだ節・何だへ節・下室節等無數である。就中、甚句の出現と拳唄の盛行は注意すべく、又くどき節が流行した。かくて長篇の踊音頭も流行歌の一體をなしてゐる。流行歌の一種に唐人歌と云ふのがあり、この時代を通じて、各種の唐人歌が現はれてゐるが、元祿時代では、かんぷらん、幕末では、特にかん〳〵節（別項）が行はれた。流行歌は、或る遊里で行はれ始めたものが一般に流傳する。古くは江戸の吉原、京の島原、大阪の新町の三大遊里があり、幕末では、江戸深川より出た流行歌が多い。深川節・佃節の類が即ちそれである。又歌舞伎芝居で歌はれた歌が一般民間に流傳して流行歌となつたもの、或は歌舞伎芝居の外題や俳優などを讀み込んだ流行歌が、その時々に瓦版として出で、芝居の人氣を煽ると共に、これを利用して流行の因をなしたものもある。上方には特にこの種の歌が多く、又「色里町中流行歌」とか「都島原流行歌」とか、上方版、特に京都版の瓦版に記したものが多いのは、京阪でも流行歌の中心、又はその發源地が遊里にあつた事を示してゐる。例へば「（うはきのゝとるかはるばし　はなしのゝとるさくらばし）以上かしくよし　新調紛絞　淡州木版東都三尾（染色里はやりうた）」と題する瓦版に、

手がみかくにもかくものじやさ思はんせ、もじしゆさ思はんせ、
はおんなのみちのもの、てがみかくにもかくものじやさ思はんせ、かしく
じやさ思はんせ　引合詞　にんじん中ぬき大こんお
へさんよろこはしやんやな　みつはに大ぶきさん
せうヱ・かしく糸引

等の歌六首を收めてゐるが如きである。流行歌には、地方の民謠より出たものをしば〳〵見る。會津地方の玄女節が、寛政年間に江戸で流行したのなどは、その著しい例であつて、「浮れ草」（文政五年版）に收めてゐる田舍唄は、地方唄が上方の都會地で流行したものであらう。潮來節も潮來の民謠より出たことは明かである。これ等の民謠が流行したのは、飴賣を主とし、その他の物賣が歌ひ歩いたので、弘まつたものが多い。明和時代の土平飴の土平節、文化時代の勇節（豐年飴の行商人が歌ひ弘む）、文政時代のダンボサンの歌等、何れもさうであるが、これは明治十一年頃の豐年おこしの行商人が廣めた豐年踊や明治二十年頃のよかよか飴屋の流行歌などをもつて終りとするやうである。踊歌が、流行歌となり、踊を忘れて三味線や尺八の伴奏のもとに世に行はれたことは、「糸竹初心集」所載の大和踊・雛子踊等以下元祿時代には殊に多く、幕末に及んでゐる。【明治・大正時代】明治十年代迄は、舊時代と大體に於て同じ傾向である。ただ維新の際の宮さん〳〵（トコトンヤレ節）の如きは、軍歌の祖と見なすべきで、流行する因縁が違つてゐるが、曲節等は舊時代の特徴を受けついだ。明治十年代には、かつぽれ・へらへらへ・縁かいな節・すててこ・豐年踊などが寄席藝人によつて演じられた爲めに弘まつたものが多く、オッペケペー節も亦その一である。併しこの節の出た明治二十年前後に至り、民衆の政治熱が煽られた結果、壯士が演歌して一般に流行歌を弘める因をなすに至つた。その節は、從來の江戸時代の調子ではなくて、熱をこめて悲憤慷慨する底のもの、川上音二郎（別項）のオッペケペー節の外、壯士によつて種々の元氣な歌が歌はれた。愉快節・欣舞節などがその代表的なものである。この前後には、また追分節・磯節・木曾節・文山節・米山甚句・琉球節等の地方唄が流行して長く行はれ、どんがらがん・さいとどん〳〵・仙臺節・木遣節・推量節等も一時流行したが、殊に法界節は明治二十年代の流行歌の主たるものであつて、これには月琴の伴奏を伴つて歌ひ歩いたから、これを法界屋と云ふやうになり、また壯士の演歌も政治熱の冷却と共に、法界屋と混じられ、ヴァイオリンを伴奏して男女の青年が新しい流行歌を歌ひ弘める書生節となり、これが流行歌傳播の因をなすことが長く續いた。その間、早く孝女白菊の歌（別項）の如き唱歌や、拔刀隊の歌の如き軍歌が一般に行はれて、唱歌・軍歌（各別項）の流行歌化する始めとなつた。この類では、明治三十五年の鐵道唱歌、日露戰爭當時の戰友・出征等は、特に著しきものである。一般的には法界節の一轉したさのさ節や、東雲節（ストライキ節）・ふいとさ節・ラッパ節・自轉車節・ちりつぶちやらつぶ等が明治三十年代の流行歌の主なるものであつた。日露戰爭後、演歌師の書生節が盛んに起つた。松の聲・殘月一聲（以上神長瞭月作）・男三郎の歌（八雲山人作）・間がいゝ節（竹石夢村作）・むらさき節・奈良丸くづし・まつくろ節（以上添田唖蟬坊作）・どん〳〵節等がその代表的なもので、その中には、唱歌の曲節によつたものや、浪花節より出たものや、いろ〳〵特色あるものがあり、學校の校歌や寮歌等、その他の學校唱歌の類も亦歌ひ弘められたのである。さうして奈良丸くづしに至つては、既に大正時代に入つてゐる。この時代には、劇・映畫の勃興に伴ひ、それの主題歌謠と云ふべきものが行はれた。カチューシャの唄（島村抱月・相馬御風合作）・さすらひの歌・酒場の歌・煙草のめ〳〵・籠の鳥・別れの歌（以上北原白秋作）・ゴンドラの歌（吉井勇作）・森の娘（島村抱月・楠山正雄合作）等がそれで、これは何れも中山晋平氏の作曲に成り、これより、かうした形式の流行歌謠が行はれるやうになつて現今に至つてゐる。又外國の歌劇の歌や流行歌を輸入して、これに日本語の歌詞を附けたものが行はれた。リゴレット女心の歌、ボッカチオ（戀は優し）、ディアボロの歌、タブリンベイなどがあり、世界大戰當時の流行歌チペラリーの歌などは、原語のまゝで歌はれた。さうして演歌師が、やはり、これを一般に弘める役目をなした。大震災前後よりは船頭小唄が最も流行したが、これが何々小唄と云ふものの最初で、野口雨情作詞、中山晋平作曲にかゝる。ついでストトン節・籠の鳥等が行はれた。地方民謠も都會地で流行するものが多く、早く明治四十年代のでかんしよ節（丹波）を初め、大正となつては、安來節や鴨綠江節を主として、おけさ節・關の五本松・小原節等があり、昭和に入つてからは、串本節・草津節・おばこ節等がある。

【參考】日本歌謠史 高野辰之○日本歌謠集成 同上○日本歌謠叢書 藤澤衞彦 ○瓦版のはやり唄 三田村鳶魚○俚謠集拾遺 高野斑山・大竹紫葉 ○俗曲全集 田村西男・中内蝶二 ○はやり唄と小唄 藤澤衞彦 ○明治流行歌史 同上 ○流行歌・明治大正史 添田唖蟬坊 ○明治・大正・昭和流行歌曲集 堀内敬三・町田嘉章 ○流行歌謠集 日本ヴィクターレコード　（藤田）

龍虎問答 りゆうこもんだふ　洒落本　一册　【作者】蓬萊山人歸橋　【畫工】無署名、自畫らしい。【名稱】吉原深川の優劣に就いて、里通と歸橋との問答を龍虎の爭に比したのである。【刊行】安永八年　【諸本】江戸時代文藝資料

第一卷・洒落本大系所收。【題材】序文に、「美地の蠣殼」（別項）を出し、更に本書を出すとあり、內容は「美地の蠣殼」に深川のみを讃美したのを憤り、吉原品川の里通が議論しに來る筋になつてゐるが、實は兩書共同年春の刊行であるから作者の戲れである。篇中の俳優の名、龍波の富三は新下りの中山富三郞、江戶の濱村は三代目瀨川菊之丞、秀鶴は初代中村仲藏、幸四郞は四代目松本幸四郞、勘左衞門は中島勘左衞門、金作は二代目山下金作、德治は大谷德治、杜若は四代目岩井半四郞、路孝は前述の三代目瀨川菊之丞（路考）をさしてゐる。皆當時の人氣俳優である。【梗概】作者蘭橋はしやれて、踏まるゝ美地の蠣殼と題して本を新刻し、深川に遊んだ折の事を描いた。或る日里通と稱する吉原通が彼を訪れて「美地の蠣殼」の深川よりよい遊び所はないやうな口吻は、甚だ意外に思ふと須々と吉原の歷史があり、又淨瑠璃操にも採られてゐる事を述べ、深川は近頃出來た岡場所に過ぎぬ事を論ずる。蘭橋も負けてはゐず、この頃多くの人の思ひつくのは深川であると主張する。里通は躍起となつて深川の遊女達が金のかゝらぬ服裝に苦心する。髷も前の日の島田を引つくり返して挿頭で留め、樂屋本田と名づけて醜惡化すなどと攻擊する。蘭橋は流行の風俗言葉は深川より起つて北に移る。短い羽織の長くなつたのも深川客が始めたのである。何れ遊び場所の面白からぬ所はないが、就中深川は岡場所とは云ひながら吉原にも劣らぬといふ。【構想】深川の遊里が繁昌するに隨ひ、勢ひ吉原との優劣を論ずる通人も現はれたらしい。これを先づ代表したのが本篇である。要するに水掛論に過ぎないが、本書の目的は深川を特に上げるよりは、寧ろ兩所の通を並べ、穿ちを誇る點に存する。【影響】本書の系統をひける作品には、「[illegible]」（天明元年）、「通人の寢言」（天明二年）がある。前者は本篇と同じく吉原・深川・品川の比較描寫、後者は吉原と岡場所との優劣論である。必ずしも本書の影響とは斷じ難いが、その系統をひける書とは言ひ得る。實はその前年「浮女皮肉論」（安永七年）が發表され、吉原と深川その他の遊里との爭鬪が描いてある。當時かゝる概括的比較論の流行した事を看取し得る。　（山崎）

柳條亭華彦　りうでうていはなひこ　戲作者【本名】三品長三郞【別號】蘭溪・藤岡、又は芳華舍。【閱歷】安政四年一月一日、江戶淺草の庭方拜領屋敷（今の黑船町邊）に生る。父淸三郞は舊幕府の作事方であつた。明治三年九月（十四歲）、大學南校入學、同六年一度退學、翌七年更に工部大學に入り、電氣建築科を專攻したが、八年十一月工部省技手見習（電信建築課員）、九年十等技手、十年には西南戰爭のため九州へ出張して戰地の電信事務を秉掌し、十二年七等技手に昇進したが平生の豪酒のため腦病となり、聽覺に故障を生じたので十三年末退職した。靜養の間に慰み半分の新聞投書が動機となつて、東京繪入新聞の主筆前田香雪（健二郞）に知られ、次いで柳亭種彥（高畠藍泉）の門に入つて戲作道に足を入れた。十五年東京繪入記者となり、傍ら「芳譚雜誌」編輯に從つた。處女作は明治十五年の「落花雨談」（芳譚雜誌）である。十六年六月下阪、爾來五年間、此花新聞・日本繪入・浪華新聞・東雲新聞等に執筆した。二十一年六月歸京、東京改進新聞に入つて九年間在社した。二十九年の暮東京朝日に移り、三十一年の第一次夕刊發行當時は第一線に立つて奮鬪したが、夕刊中止後は社會部にあつて小說を執筆し、後整理部校正科に轉じ近年に及んだが、今は同社を辭して悠々自適してゐる。【作品】（第一期）操の一節○嘩の橫○小夜千鳥濱の松風○常夏草紙○書生草流行新形○日本晴港賑○寒梅開化魁○浮沈現世狀態等。（第二期）枯骨椿○冒險者○あづさ弓○冬牡丹○寢亂れ髮○筒井筒○大鵬丸○玉椿○俠骨香○錢屋五兵衞嘯疾錄等。（第三期）浮世修行○わか竹○のぼり鯉○女俠追分節○夏木立○江戶紫○黃金大王○あぢさゐ○冬至梅○雪間の紅梅○美人魔○青年士官等。【業績】新聞小說への貢獻は、大衆文學の先驅として、正直に公平に再檢討さるべきものであらう。小說家としては勸懲主義を根本信條としてゐるが、必ずしもこれに囚はれず、小說としての興味といふ點を主眼とし、一作每に變つた趣向を樹てようと試みた。なほ明治期の新文學熱につれて新傾向の社會小說を試みたが、成功したものはない。その作風は須藤南翠（別項）に似てゐる。　（柳田（泉））

龍神物の謠曲　りゆうじんもののえうきよく　【曲目】龍神を後ジテとした謠曲は、「春日龍神」が趣を異にしてゐる外、いづれも脇能として神事物（別項）と同樣な脚色を以て描かれた。卽ち朝廷に仕へ奉る臣下（ワキ）が或る宮寺に參詣すると、漁翁（前ジテ）が出てその緣起を語り、後に龍神（後ジテ）が天女（後ヅレ）等と共に現はれて、國家を守護する盛んな勢ひを示し、天女と共に福德を授けるといふ筋であるから、一々の梗概を省略して、その曲名と役割とを列擧すると左の通りである。

曲名	ワキ	前ジテ	後ジテ	後ヅレ
江島	欽明帝敕使	漁翁	五頭龍王	辨財天
竹生島	延喜帝臣下	漁翁	龍神	辨財天
九世戶	當今臣下	漁翁	龍神	天女
和布刈（早鞆）	早鞆神職	漁翁	龍神	天女
岩船（[illegible]）	當今敕使	（童子）	龍神	

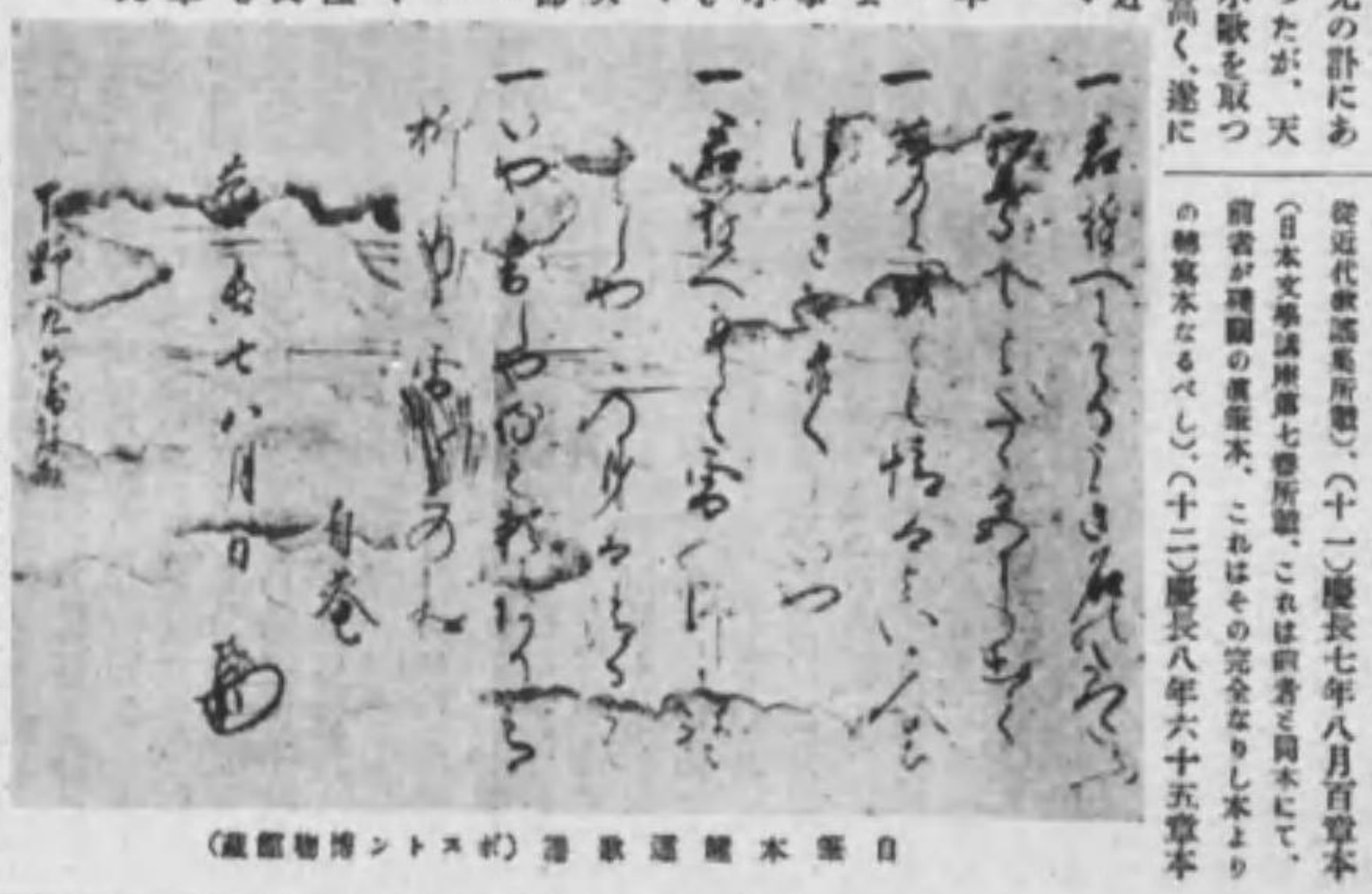
【諸本】謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。【春日龍神】五番目　【作者】世阿彌（謠本作者註文・二百十番謠目錄）。【內容】栂尾の明惠上人（ワキ）は入唐渡天を思ひ立ち、御暇乞のために春日明神に參詣すると、宮守（前ジテ）が出て、佛在世の時ならば入唐渡天の利益もあらうが、今はこの春日山が靈鷲山であるから、渡天を思ひ留まり給へ、やがて五天竺を寫し、摩耶の誕生から雙林の入滅まで悉くお見せしようといつて消え失する。上人はありがたい御神託と感激してゐると、春日龍神（後ジテ）が現はれ、八大龍王を引連れて、天竺釋迦一生の樣を現はして見せ、堅く渡天を思ひ留まらせるといふ曲。五流現行。劇的夢幻能。「古今著聞集」卷二に據つた。「白樂天」（住吉物）、「善界」（天狗物）と相並んで、國土の讚美を高唱したものである。【參考】謠曲評釋大和田建樹○謠曲大觀佐成謙太郞　（佐成）

柳水亭種淸　りうすゐていたねきよ　戲作者【本名】櫻澤堂山【別號】八功舍得水【生歿】文政四年飛驒の高山に生れ、明治四十年三月歿す。享年八十七。【法名】桂光院智俊堂山和尙【墓所】相州酒匂川上寶寺【閱歷】六七歲の時父母と共に越後に行く。間もなく兩親を喪ひ、某寺に敎はれて數年を過ぐ。偶々遊行上人の巡錫に遭ひ、伴はれて江戶に出づ。淺草日輪寺の小僧となり、やがて役僧になつた

が、常磐津の女師匠と關係して寺を逐はれ、それが機緣となつて文筆に親しむに至つたといふ。最初は狂言作者となる積りで默阿彌に入門し、更に初代柳下亭種員（別項）の弟子となり、柳水亭種淸の號を貰ひ、爾後合卷草雙紙の戲作に精進した。安政の末再び遊行上人に見え、常陸の某寺に住したといふことであるが年代不明。明治二十年前後に相州酒匂上寶寺の住職となつて晚年を終つたといふ。【著作・作風】彼が處女出版と思はれる安政元年の「都鳥汀松若」八冊、「鍋形笄花鍛」二十冊以下文久二年まで約四十種の合卷本を出してゐる。安政四年には新作十一種の讀切本（三編十二冊）册數にして百三十二冊を出してゐる。少々濫作の傾きがあつた。然るに明治期に入るや反對に寡作の人となつたのは、境遇の變化と創作能力の減退に原因してゐるが、今日世に傳へられてゐるものでは、僅かに左の五種に過ぎない。「五人囃苦艱物語」九冊（明治十二年）、「豐時田秋錦新雁」（同年）、「鬢蛇毒蛇調」九冊（同十三年）、「猛田婦娃新白石」九冊（同年）、「明治紀聞赤穗の復讐」二冊（同十六年）。以上の內「五人囃」は東京市內藪本一家の家庭悲劇を扱つたものであるが、明治初年の新舊混沌たる世相の一面が巧みに描かれてゐる。「豐時田秋」は、例の藤田傳三郞の贋札事件を扱つた際物小說で、三編を出す豫定であつたのが、事件が有耶無耶であつた爲めか、初編だけで二編以下は出版されずに終つたらしい未完物である。「鬢蛇」は混沌期に於ける毒婦小說の一佳作として推賞するに足る。主人お初が數奇な運命に操られて、色餓鬼のためにさいなまれる悲劇的な物語で、普通の毒婦とはやゝその性質を異にする同情すべき女性であつた。殊に當時この種の戲作類は、結末は必ずめでたし〳〵で終つてゐるのが普通であるが、本書は珍らしく結末が悲劇で終つたのが、異例として特筆するに足る。　（石川（巖））【參考】草雙紙研究號（早稻田文學大正一五ノ四）○寫實主義以前の小說石川巖（日本文學講座）○新修日本小說年表○明治初期戲作年表

龍澤　りゆうたく　禪僧【號】默雲【法號】天隱【法諱】龍澤【生歿】應永二十九年に生れ、明應九年（二一六〇）九月二十三日に寂す。享年七十九。【閱歷】龍澤は播磨揖保郡の人、七歲にして京都に上り、十歲で建仁寺に入り、實洲宗衆和尙の侍童となつて得度し、二十年間師事した。後天柱和尙の法嗣となり、又眞如寺住持となり、文明十四年三月建仁寺住持となり、後に南禪寺住持となる。晚年は建仁寺の大昌院に隱退した。【著作】翠竹眞如集○默雲稿一卷○錦繡段一卷（別項）等。　（鷲尾）【參考】默雲稿○延寶傳燈錄○本朝高僧傳

隆達節　りゆうたつぶし　歌謠【名稱】高三隆達の始めたものであるから、かく稱し、又ただ隆達とも、隆達流とも、隆達小歌とも云ふ。龍達・立達などとも記す。併し「鈴鹿家記」の應永六年六月十六日條に、「諸出雲歌リウタツ色々」同六月二十一日條に、「將監ニリウタツ御所望ニツウタフ、右京大夫私ヘ大角將監ヘリウタツ都一番ノウタイテ、年々御望ノ由長橋殿ニモ御申候」と見え、新しくは、「御笑草諸國の歌」に「大島木伐唄（割註）其節全く平家の如し、多は三十一字なり、句を切時に斧を打撞るなり、木こりぶし又りうたつぶしといふ」とも記して、地方民謠に、「りうたつ」と稱する歌謠が存在してゐたやうである。それとこの隆達節と、いかなる關係があるか明かでない。【解說】高三隆達は堺の人、幼少で出家し、同地顯本寺內にゐた。日蓮宗の僧（一說に、曹洞宗の僧、初名を印達）、天正十八年兄の許にあひ、還俗して家業を嗣ぎ、藥種を商つたが、天性美音にして、從來行はれた室町小歌を取つて一流の小歌を歌ひ始め、世に名聲高く、遂に貴顯にまでその名が聞えた。實に近世小歌の祖である。自ら自庵と號し、又自在院・高三坊と稱したと云ふ。慶長十六年十一月二十五日歿。享年八十五。自在庵隆達と諡した（堺鑑・陰德太平記・織物反古・顯本寺高三坊過去帳）。能舞臺で小鼓で囃して歌つた事もある（織物反古）と云ふから、室町小歌と等しく小謠に類似したものかも知れない。元來扇拍子で歌はれたが、後、大森宗勳等によつて一節切で吹奏せられた（[illegible]）。又隆達節は投節であるとも云はれてゐる（投節參照）。【歌集】自筆と稱する本が數種殘つてゐるが、眞の自筆本は少く、多くは轉寫本であるが、轉寫の時代は隆達と時代を同じくしてゐる。（一）文祿二年八月百首本（日本文學講座第七卷所載）、（二）文祿二年八月百五十章本（有朋堂文庫近代歌謠集所載）、（三）文祿二年十月百章本（岡本撫吉氏藏）、（四）文祿三年二月本（[illegible]記載）、（五）文祿三年九月本（歌曲考・三養雜記・鵜鶩類聚記載）、（六）慶長三年二月百章本（近世國文學史に寫眞出づ、岡本撫吉氏藏）、（七）慶長三年八月本（うた澤新刊號に寫眞出づ、前田長三郞氏藏）、（八）慶長四年百章本（歌舞音曲第一年五・六月號所載）、（九）慶長五年百三章本（佛教文化大講座第二卷に寫眞出づ）、（十）慶長七年八月四十六章本（ボストン博物館藏、日本歌謠史・校註日本[illegible]近代歌謠集所載）、（十一）慶長七年八月百章本（日本文學講座第七卷所載、これは前書と同本にて、前書が現[illegible]の轉寫本なるべし）、（十二）慶長八年六十五章本（吉川觀方氏藏）、（十三）慶長十年九月本（角倉素庵筆と云ふ、現所藏者未詳）、（十四）慶長十年百五十章本（日本文學講座第七卷所載）、（十五）年代不詳百章本（岡本撫吉氏藏）、（十六）年代不詳三百章本（經遠傳讚所引、高野辰之氏藏、日本歌謠集成卷六所載）、（十七）年代不詳百四章本（菅野吟平氏



自筆本隆達歌譜（ボストン博物館藏）

藏）、（十八）傳讀本松花堂筆百三十五章本（佐佐木信綱博士藏）、（十九）植田仲慶筆四十四章本（原本は下谷谷中實泉寺藏と云ふ、安永四年寫）、（二十）文化十一年寫六十四章本（以上二種、日本歌謠集成卷六翻刻に據る）、（二十一）延寶四年寫二百章本（日本文學講座第七卷）、（二十二）年代不詳七月本（うた澤雜誌刊行會に寫眞出す、前田長三郎氏藏）、（二十三）年代不詳百二十八章本（日本歌謠類聚所載）。この外、金澤・大阪等に自筆本と稱するものを所藏する人があり、その數はまだ多いことと思はれる。右のうち、（八）や（十）は確實に自筆本と思はれるが、他は補がついてゐても疑はしいものが多い。「書籍目錄」によると、元祿以前に「りうたつのうた」一卷、又は「隆立の小歌」二卷が刊行せられたやうである。日本歌謠集成卷六の隆達節小歌集は、四百三十九首を五十音順に類聚してゐるが、（八）（十八）（二十二）等の諸本によつて少くとも四十首以上は補ふことが出來る。以上のうち、大方順序の一定したものあり、百章本を元として百五十章本・二百章本と增加し、二百章本に早歌百首を加へて、三百章本としたのである。（十二）の本は「初歌集」と題し、早歌集二十九首を附錄とした。「編笠節」と題する寫本（日本歌謠集成卷六所收）も、この種の本よりの拔萃書と考へられる。なほ大田南畝は、隆達自筆の寫本に「左續若集」と題したものがあると云つてゐる（歌曲考）。右の一定した順序にも種々錯簡脫落挿入等があつて、順序が變化し、又全く順序の異なるものもある。大抵最初の歌が、「君が代は」の歌で始まつてゐる點は同じである。「恨之介」にも、この歌を「當世はやりける隆達節」と稱してゐる。この外、「面白の春雨や花の散らぬ程降れ（程に降れ）」と云ふ歌も行はれたこと、「陰德太平記」や「甲子夜話」卷二十所引の「古筆集」や「雲萍雜誌」卷三所載の古畫の歌詞などによつて知られる。

【歌詞】調子は室町小歌の形式を受けついで、歌詞も、それより多く出てゐるが、隆達自身の作詞になるもの、又は節附したものなども多からう。長さは室町小歌よりも短くなる傾向があり、且つ一定の長さを保つやうになつてゐる。特に、

かはす枕に涙のおくは、明日の別れの露はれて

の如き、純然たる近世調の歌の存する事は、從來の小歌に見られない現象である。隆達節は、慶長以後は多く行はれず、次に起つた平九流や、弄齋・片撥等の流行歌に盛りを奪はれたが、その影響を與へるところ多く、歌詞も亦後世に傳へられた。元祿の流行歌投節節もその一である。

身は破れ笠よのう、着もせで掛けて置かるゝ（閑吟集）

身はやれ笠着もせで、すげなの君や掛けて置く（隆達小歌）

破れ菅笠ヤシヤしめ緒が切れてノエイ、更に着もせずエイサンサヤアサンサ捨てもせず（「松竹初心集」所載菅笠節。「二葉集」には初句を「さんさ菅笠」として掲げてある）

【參考】古事類苑○小歌總考（朝倉無聲）（初版日本文學講座第七・九）○日本歌謠史（高野辰之）○日本歌謠集成卷六○近代歌謠集（藤田德太郎）○隆達上人（宇田川文海）（うた澤一ノ二・三）○高三隆達（同上）（上方趣味大正九ノ八）○「隆達節」と人名「隆達」と（板橋倫行）（歌と評論四ノ一）○隆達法師の歌曲と生活（藤田德太郎）（傳統文化大講座第二卷）（藤田）

柳亭遺稿（りうていゐかう）　隨筆　一卷　【著者】高屋種彥（柳亭種彥）【諸本】續燕石十種卷二所收。【解說】著者の隨筆「骨董集」「柳亭筆記」（各別項）「柳亭雜筆」等に漏れた雜考を、その殘後に纏めたもので、主に婦人の帶の稱々、女合羽、綿帽子、枕名のくさ〴〵等を錄し、又紙煙草入、葛西海苔、駒込の富士まうで、名字飯等の諸項を舉ぐ。江戸初期の俳書・浮世草子類を典據にしてゐる。挿圖がある。收むるところ僅に十五六條に過ぎぬ小冊であるが、江戸風俗史の資料となるものである。（和田）

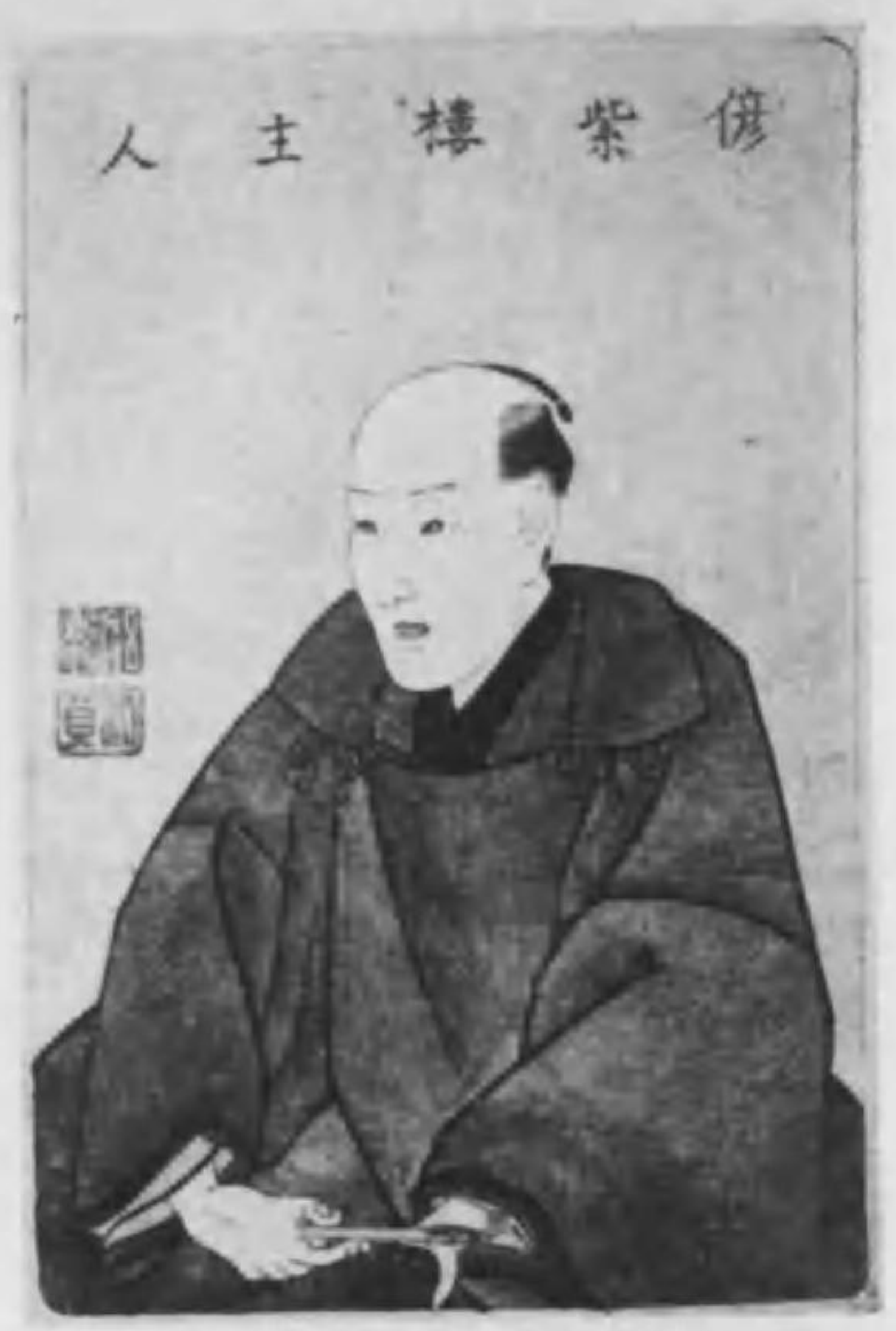
柳亭記（りうていき）　隨筆　二卷　【著者】高屋知久（柳亭種彥）【諸本】百家說林續編所收【解說】著者の別著「足薪翁記」（別項）と大同小異の隨筆で、上卷に田植うた以下五十條、下卷に立かゝし以下五十一條を收めてゐる。江戸時代流行の雜技・歌謠・俗謠・調度等に關する雜考が主である。所々に挿圖がある。（和田）

笠亭仙果（りふていせんくわ）　戲作者　【本名】高橋廣道。通稱彌太郎、幼名鎗三郎。【別號】鱗齋・狗々山人・松綠（或は松祿）翁・四世淺草庵・柳亭種秀（義）・二世柳亭種彥等。【生歿】文化三年生れ、明治元年二月九日歿す。享年六十三【法名】忠山宗儀居士【墓所】東京本所區原庭東盛（或書）寺【閱歷】尾張熱田大神宮社領の里正高橋彌左衞門の子。幼時熱田祠官礒野政春について習字句讀を學ぶ。やゝ長じて尾張の儒臣鈴木朖の門に入り、又高松中納言に就いて歌道の敎へを受けた。後江戸に出て淺草新旅籠町に住し、狂歌を黑川春村に學び、四世淺草庵の號を許さるゝに至つた。これより先き鄉里にゐて戲作に耽り、初代種彥の作風を慕ひ、遙に書を寄せて添削校閱を願、稿料を要しない條件で、江戸鶴屋仙鶴堂から出版するに至つた。鶴屋からは校訂并に序跋等の謝儀として、その都度約二百匹づつの禮を種彥へ拂つてゐた。併し清廉な種彥はその儘これを仙果の許に送り返した。かくするうち仙果の著も漸く世間に弘まるやうになつたので、仙果ひそかに思ふやう、書肆は若干の潤筆料を出すべきに、種彥その多分を收め、我には薄謝を贈るとは心得ぬ業なりと邪推し、江戸に來るなり、旅裝も解かずに鶴屋方に抑り、剌を通じて潤筆料の事を聞き、然る後種彥を訪ねた。これ等の事が種彥に洩れ聞え、仙果も大に面目を失し、これより師弟の交りも絕えた。種彥の歿後、恣に二世柳亭種彥と稱したので、同門の先輩や遺族より故障が出で、一時種秀と改めたり、「種ひで」と假名がきにしたのもこの時のことである。その後、梅素玄魚の骨折で師名相續が叶ひ、柳橋の柳屋樓で嗣號披露の宴が開かれたとのことである。【著作】仙果は可なり多作家であつたが、別に評判となつた當り作も出なかつたが、「八犬傳犬の草紙」二十八編が仙果の最長篇として世に知られてゐる。

【二世】通稱篠田久次郎【別號】萬石亭積丸。【閱歷】初代笠亭仙果の門人。明治十二年頃、雜誌「月とスッポンチ」と題する滑稽雜誌を發行した。明治十七年三月五日歿す。享年四十八。墓所は下谷廣德寺塊中。（石川（巖））

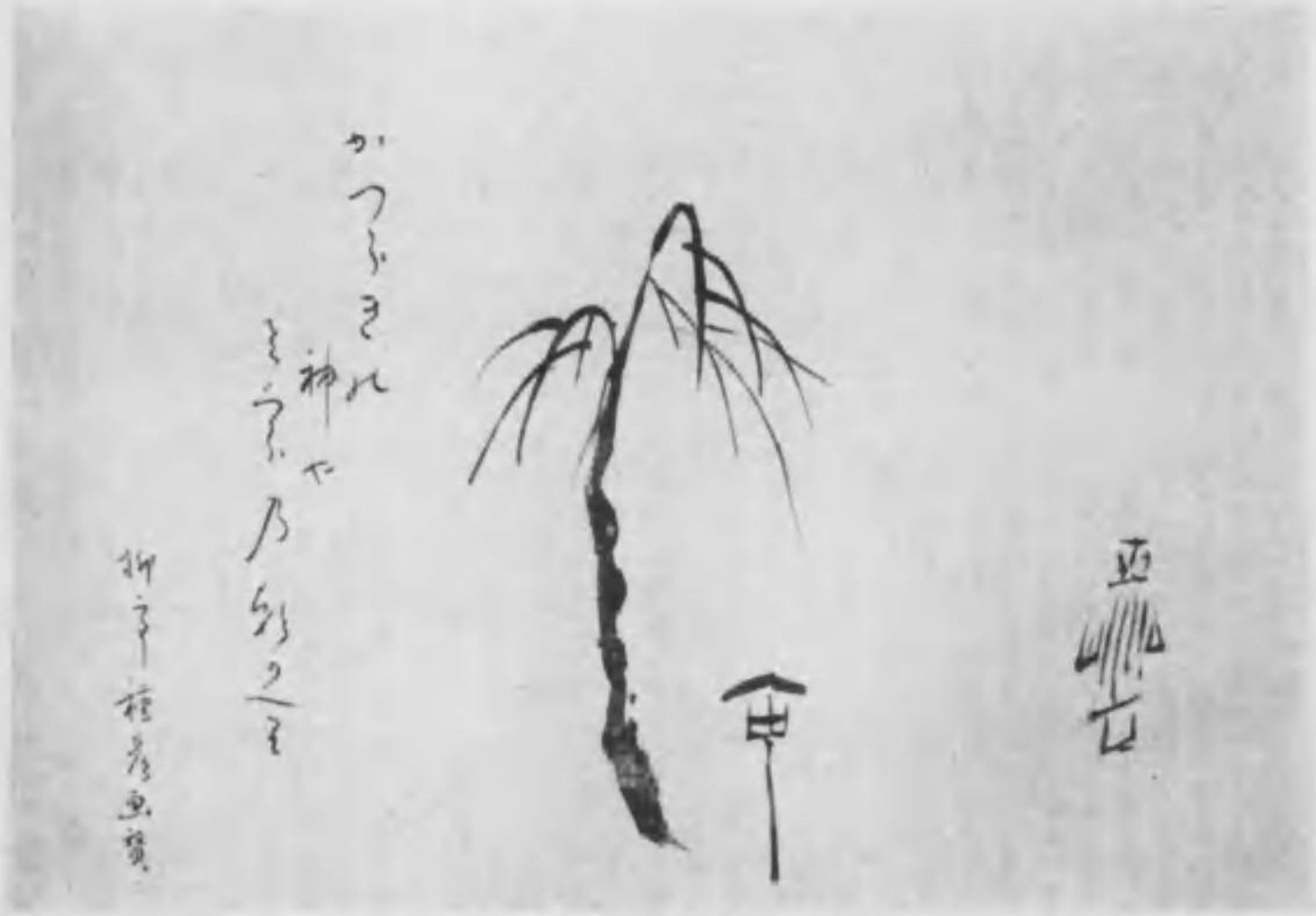
【參考】小說史稿○人情本略史○江戸時代戲曲小說通志○日本小說年表○狂歌人名辭書

柳亭種彥（りうていたねひこ）　讀本・草雙紙作者　【本名】姓は源、もと橫手氏、のち高屋氏。通稱彥四郎、名は知久。【別號】愛雀軒・偐紫樓・足薪翁・柳の風成・心の種俊・木卯・三ツ彥【生歿】天明三年生れ、天保十三年（二五〇二）七月十八日江戸淺草堀田原の自邸で歿した。「名



柳亭種彥（稿本戲作者考補遺所載）

種彥愛用の硯蓋の銘



種彥自畫賛（松宇文庫藏）

人忌辰錄」には「十八日（或は十三日）」と記つてある。享年六十。【法名】芳寛院殿勇譽心禪居士【墓所】赤坂一ツ木淨土寺【閱歷】先祖は甲州武田の遺臣と云ふ。幕府直參の士で祿は二百俵、初め下谷御徒士町先手組屋敷に住み、後淺草に移つた。俳諧・和歌・狂歌・川柳等をよくし、演劇を好み聲色が巧みであつた。三ツ彥の號は坂東三津五郎（後に秀佳と號す）の聲色に長じ、通稱を彥四郎と呼んだのと併せて朋友が附けた化名をその儘襲用したのである。少年時代は短氣で頑介、人と爭論する事が多かつたので、父がこれを心配して柳の句を詠じ誡めた。彼もこれに感激し、柳に因む雅號狂號を附したのであると云ふ。彼が創作に筆を染めたのは文化四年と覺しく、二十五歲の時である。讀本に「阿波之鳴門」（文化四年）「奴の小萬物語」（同年）等あり、以後數年の如く讀本を發表したが、文化八年「鱸庖丁青砥切味」を發表してから、讀本より轉じて草雙紙を多く著作するに至つた。中にも「偐紫田舍源氏」（文政十二年―天保十三年）（未完）の如き、江戸の婦女に最も歡迎せられた。淺草の寓居はその編作に依つて建てられたと稱せられ、これを偐紫樓とおづけたのも「田舍源氏」に因んだのであると云ふ。その他洒落本「やまあらし」（文化五年）（別項）や人情本「綟絹けい下帶」（天保十年）の作があるが、彼の文才はかゝる方面に向かなかつたのか、これ以外に洒落本・人情本の作が見出されない。その他古書の蒐集と考證趣味があり、その產物として「好色本目錄」（寫本）、「吉原書籍目錄」（寫本）、「還魂紙料」（文政九年）（別項）、「用捨箱」（天保十二年）（別項）、「足薪翁記」（寫本）等の著作がある。然るに天保十三年水野忠邦の改革に遭ひ、彼の「田舍源氏」も罰を受けて絕版を命ぜられ、譴責を受けた。その理由は公然發表せられないが、該小說が德川大奧を摸寫し、特に將軍家齊が大奧の構造・裝飾・風俗等を摸寫した爲めと推測せられる。これが原因となり、憂憤の餘り病を發して歿したと稱せられる。一說には、この著作の爲め町奉行に呼ばれ、拷責を受けて退下したが、更に奉行所より呼出の差紙が來り、その理由が春本「春情妓談水揚帳」も彼の作なることが發覺した故と判明し、病氣延期を願つて許されず、遂に即夜自殺したのであると云ふ（異說に病歿說、大酒自害說）。

【作品】〔讀本〕霜夜星（文化五年）○[illegible]（文化五―六年）○淺間嶽面影草紙（文化六年）（前編）○逢州執着譚（同九年）○綟手摺昔木偶（同十年）（前編）○勢田橋龍女本地（同八年）等。〔草雙紙〕夥しい數に上るが、その代表作のみを擧げる。○正本製（文化十二―天保二年）○昔々歌舞伎物語（天保元―二年）○[illegible]（天保元―四年）○邯鄲諸國物語（天保五―同十三年）（以下未完）等。

【解說】種彥の作品の特徵をあぐれば、（一）構想の複雜にして變化波瀾を主としたこと。（二）主として題材を浮世草子・歌舞伎・淨瑠璃より採り、翻案脚化を旨とし、京傳・馬琴の如き支那小說の影響比較的に輕く、隨つて其文系の勸懲さが稀薄で柔軟纖細であつたこと。（三）演劇趣味を最も多く小說中に採用した事等であらう。彼は先輩山東京傳（別項）を最も崇拜私淑したやうで、且つ生粹の江戸人として趣味の共通な點もあつたらうが、獨創的な點、才氣縱橫の點は遂に京傳に及ばなかつた。洒落本「やまあらし」（別項）の如き、京傳作「古契三娼」（別項）を摸したのであるが、趣向洒落の點に乏しく、この種の作品に適せぬ事を現はしてゐる。「勢田橋龍女本地」は、作者自身「讀本淨瑠璃」と命名し、新しい試みを發表したのであるが、淨瑠璃の技巧を散文化し、その調子を出さんとした戲曲の讀本で、餘りに世人に歡迎されなかつたのは後輩が實の上みに終つたので推測される。これも異例に乏しい一證左であらう。大に歡迎された「正本製」の構成は、既に前に烏亭焉馬・山東京傳等に依つて發表せられた趣向の摸倣であつて獨創ではない。しかしこれに全力を注いで、「芝居見たまゝ」の如き合卷本とし、芝居の舞臺背景を描いた點に種彥の努力と功績が認められよう。彼の作品の他に傑出してゐるのは、實に草雙紙（合卷本）であつて、草雙紙作者は夥しいが、その中での代表作者は先づ彼を推さねばならぬ。それは草雙紙の性質上、挿下繪があり、文と繪と相俟つて渾然たる藝術品をなすのであるが、彼の筆致が戲曲的な流麗さで、變化に富んだ構想を描いてあるのが、最も合卷本に適應してゐるからであつた。特にその挿繪畫家として五渡亭國貞の艷麗優婉な筆を得た事は錦上花を添へたものと云ふべく、而も種彥がその挿繪の下繪を丁寧綿密に指圖して與へたのが、成功した重要な理由であつた。この事は勿論、他の作家も試みたことではあるが、彼が最も凝つた構圖を與へてゐるのである。彼の作品の內容を檢討するに、勸善懲惡の思想を顯示し、京傳・馬琴の讀本を一步も出でず、何等の新味もないが、多くの戲作者中やゝ品位を保つてゐるのは彼である。これは地位ある武家の體面を顧慮した結果であらうか。要するに巧妙な翻案作家と見るべきであつた。ただその取材は他作家が手近の陳腐な戲曲で間に合せてゐる際、彼は奇拔な浮世草子・古淨瑠璃をも渉獵して用ひた。かゝる點に彼の學究的趣味を見得ると共に、彼の作品が比較的千篇一律に陥らなかつた所以である。彼が草雙紙に於て讀本系統の說話文學を更に平民化し、戲曲化し、今日の大衆小說の先驅をなしてゐる點は最も注目すべきで、彼の文學的存在價値は玆に在ると言ひ得よう。彼の作品の「浮世形六枚屛風」（文政四年）が弘化四年（西曆一八四七年）獨逸語に翻譯された一事は、該書は別に傑出せるものではないが、會々以て彼の作品が弘く流布されてゐた一證左と見るべきである。

【門葉】笠亭仙果（別項）、二世を次ぎ、高畠藍泉（別項）が三世を次いだ。尤も藍泉は仙果の襲名を僭稱となし、自ら二世と稱したが、普通にはこれを三世としてゐる。

【參考】狂之本江戸作者部類 曲亭馬琴○戲作者六家撰 岩本活東子○狂歌人物志 六樹園飯盛○列傳體小說史 水谷不倒○戲曲小說通志 鐵石道人○柳亭種彥作品解題 [illegible]（國語國文）○種彥傳作品解題 山口剛（國語國文）○草雙紙史考 宮武外骨○上方文學と江戸文學 藤井乙男○柳亭種彥研究 山口剛（日本文學講座中）（三田）

柳亭筆記 りうていひつき 隨筆 四卷

【著者】高屋知久（柳亭種彥）【刊本】百家說林續編所收【解說】著者の隨筆「足薪翁記」「柳亭記」（各別項）と相似たもので、卷一に女の髮の名くさぐさ以下十九條、卷二に尻下臈并下臈の名稱々、卷三に右近源左衞門以下六條、卷四に子の日遊以下十一條を收め、又江戸市井の風俗・流行物・俗謠等についての考證を集錄してゐる。古書を引くこと、恰も「足薪翁記」に似てゐる。所々に挿圖がある。（黒田）

瀧亭鯉丈（りうていりじやう） 滑稽本作者 【本名】池田八右衛門、別名八造 【生歿】生年未詳。天保十二年六月十日歿す。享年六十餘（三田村氏說）。【法名】淨觀信士 【墓所】東京市小石川區第六天稱名寺 【家系】實家は三百石の旗本の家柄であつたが、鯉丈の實父に當る池田八右衛門が早世したので祿を失ひ、その女が成長の後、吉左衛門といふ婿を迎へたが去つた。鯉丈はその後へ婿入りして八右衛門を嗣いだ。實家に就いては未詳。【閲歷】明瞭でないが、鬚節屋とも（江戸作者部類）、櫛を鬻ぐ業とも、新内節の上手であつたとも（戯作者小傳）、寄席藝人とも（わすれのこり）傳へてゐる。三田村氏は淺草田原町、東本願寺別院前の乘物師で、大名その他の駕籠の新調修復を家業としてゐたともいつてゐる。「和合人」の二編の自序には、「僕元來業の、小刀細工のいとまある日、亦は夜なべの燈皿に、つれて小首をかたむけて、自在ならぬ筆先に、かき立てみる燈心と共に短き才をもて、そこはかとなくかいつけし」とあるを見れば、彼は細工人でもあり、三味線彈でもあり、寄席藝人でもあつて、一九のやうな純然たる作家ではなかつたであらう。彼の住居も「八笑人」初編の二には、「江戸下谷廣德寺門前いなり町の市隱」とあり、「八笑人」四編追加の自序には、「金龍山下の市隱」とあり、「和合人」二編の自序には、「淺草諏訪街河岸の市隱」とあるから數次轉じたものであらう。作家としての彼を見ると、「大山道中膝栗毛」は一九の摸倣であり、「柳髮新話浮世床」の第三編、「人間萬事虛誕計」（各別項）の後編などは、三馬を摸したものである。彼ははじめ、一九・三馬等に私淑して、彼等が完成しなかつた作の續編を摸倣して喜んでゐたが、「花暦八笑人」「滑稽和合人」（各別項）を作るに至つて彼自身の世界を見出した。而してこの世界に於ては、容易に他の追隨を許さない獨特の技倆を有してゐた。滑稽の生活に太平逸樂の江戸末期の氣持を描寫した所には、また捨て難い妙味を見出すのである。【著作】（滑稽本）○大山道中栗毛後駿足（文化四年）○花暦八笑人（各別項）○柳髮新話浮世床第三編（文政六年）○滑稽旅話々女三編（文政八年）○人間萬事虛誕計後編（天保四年）○滑稽和合人（別項）。〔人情本〕明烏後正夢（別項）○（二編は白山、三編は立山）驚駭存名瀧水 ○於染久松艶の油屋等。
【參考】江戸作者部類 ○戯作者小傳 ○わすれのこり○娯樂の江戸（三田村鳶魚） （小澤）

龍笛（りゆうてき） 「橫笛」を見よ。

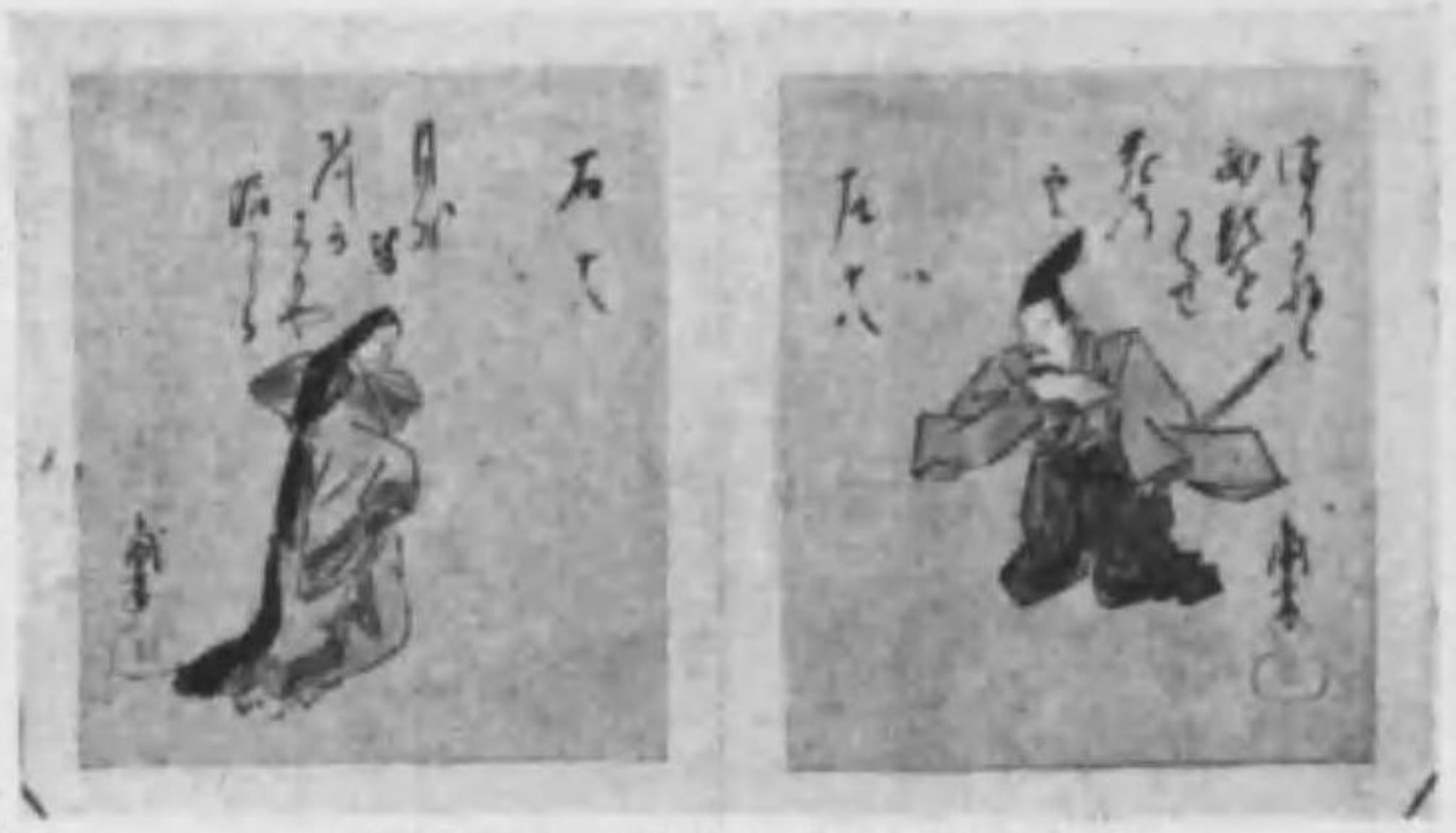
龍統（りゆうとう） 禪僧 【俗姓】平氏 【號】蕭菴 【法號】正宗 【法諱】龍統 【生歿】明應七年（二一五八）正月二十三日に寂す。享年七十一。【學統】龍統は俗緣である江西龍派、瑞巖龍惺の二師に師事し、內外の學を受けた。高弟に常菴龍崇あり、師の後を繼いだ。【閲歷】龍統は美濃の人で、父は下野守東益と云つた。建仁寺瑞巖龍惺に投じて弟子となり、聖福寺建仁寺住持となり、後南禪寺住持となつたが、常に建仁寺靈源院に住し、七十一歳で寂した。「禿尾長柄帚」一卷（別項）の著がある。
【參考】角虎道人集 ○東山歴代延寶傳燈錄 ○本朝高僧傳 （荒尾）

龍土會（りゆうどくわい） 文學的グループ 【名稱】會合した場所が東京麻布の龍土軒といふ西洋料理店であつたのによる。【解說】この龍土軒は、主人が西洋人に料理法を學んだといふので、パリー歸りのハイカラな畫家達に喜ばれ、和田英作・岡田三郎助等が早い頃の顧客であつた。後には、文壇の人々も出入りするやうになり、遂に龍土會なる會合が生れるに至つた。メンバーは、國木田獨歩・島崎藤村・柳田國男・田山花袋・中澤臨川・蒲原有明・岩野泡鳴・小山內薫・武林無想庵（各別項）等で、外國の新しい文學、殊に北歐ロシヤの文學などが、その話題の中心であつた。年代は凡そ明治三十七八年頃からで、四十一二年の交、自然主義の擡頭するに及び、以上の新人をメンバーとするこの會合は、文壇に非常な勢力を持つに至つた。その頃は、早稻田派・赤門派・文學界派・硯友社派（各別項）等が分立してゐたが、これ等の中で、新思想・新文藝に憧憬をもつてゐた者は、爭ひ來つて投じた。長谷川天溪・川上眉山・小栗風葉・德田秋聲・生田葵山・片上天弦・吉江喬松（各別項）等の名がその中に見られ、詩人・評論家・畫家等で參加した人も尠くなかつた。その後この會合も次第に行はれなくなつて、自然消滅の形になつた。この會合が自然主義文學の勃興に寄與した點は意外に大きく、明治文學史上逸することの出來ない重要な事柄である。なほこの會合の中からイプセン會が生れた。 （木本）

龍女物の謠曲（りゆうによものゝえうきよく） 【曲目】龍神物（別項）は脇能の一部を占めて、その數も少くないが、龍女を後ジテとした謠曲は餘り多くない。現行曲には「現在七面」と「海士」があるだけである。「身延」は龍女物ではないが「現在七面」の變型と見られるものである。
【諸本】謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。
【現在七面】四番目 〔作者〕不明 〔內容〕甲斐國身延山で僧（日蓮・ワキ）が法華經を讀誦してゐると、里女（前ジテ）が來て花水を佛に供へ、女人成佛の教理を聽聞し、自分はこの七面の池に住む蛇身であると打明けて消える。僧がなほも讀誦してゐると、大蛇（後ジテ）が現はれ出たが、法華經の功力によつて忽ちに身を變じ、成佛したことを喜んで神樂を舞ひ、七面御生の約諾をするといふ曲。日蓮靈驗譚の一であらうが、出典は見當らない。劇的夢幻能。觀世・金剛現行。
【身延】三番目 〔作者〕未詳 〔內容〕日蓮上人（ワキ）が甲斐國身延山で法華經を讀誦してゐると、いつも聽聞に來る女性（シテ）が、自分はもはやこの世に亡い者であるが、法華經の功德によつて成佛することが出來たと喜びをのべて、法謝の舞を演ずる。劇的夢幻能。觀世現行。
【海士】五番目 〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄。「申樂談儀」にこの曲の事見ゆ）。〔內容〕藤原房前は、母が讃岐國志度浦房崎で死んだ者であると聞き、追善のためにその地に下る。折柄來合せた海士女（前ジテ）の語る所に據れば、淡海公の妹は唐高宗の后に立ち、氏寺興福寺に三つの寶を寄進した。ところがその一つの明珠をこの沖で龍宮に奪はれたので、淡海公はこれを取り返すためにこの浦に下り、賤しい海士少女と契りを結んで一子を儲けた。房前が卽ちそれで、母海士女はこの子を世繼に定められる約束の下に、海底に飛び入つて龍宮から明珠を奪ひ返し、そしてわが身は殺されてしまつたのであつた。海士女はその時の樣を演じて見せ、自分はその幽靈であるといつて海に入つた。房前は愈々母を追慕して鄭重な佛事をすると、龍女（後ジテ）が現はれて回向を喜んだ。房前はこの地に志度寺を建立したといふ曲。「元亨釋書」の男狹磯傳說と「今昔物語」卷十一の、元興寺傳說との結びついた古い志度寺緣起に據つたものであらう。幸若「大織冠」（別項）はこれと同工のものである。劇的夢幻能。五流現行。
【構想】「現在七面」は、八歳龍女變成男子の法華經說を再現した龍女說話の正系といふべきものであらう。併し特殊な劇的興味はない。この傍系といふべき「身延」も亦同樣である。「海士」の後ジテを龍女としたのは、海士女の緣によつたものであるが、本曲の主材、興味の深い傳說をすべて前段に掲げ盡してしまつた爲めに、後段は甚だ力の弱いものになつてゐる。
【參考】○謠曲評釋大和田建樹 ○謠曲大觀佐成謙太郎 （佐成）

柳髮新話浮世床（りうはつしんわうきよどこ） 「浮世床」を見よ。

立圃（りふほ） 俳人・假名草子作者 【姓名】野々口親重。通稱、紅屋庄右衛門（又、市兵衛・宗右衛門・次郎左衛門とも傳へられる）。【別號】晩年、松翁・松齋・如入齋 【生歿】文祿四年生れ、寛文九年（二三二九）九月晦日歿す。享年七十五（過去帳に據る）。【法名】松翁庵立圃日榮。【辭世】月花の三句目を今知る世かな 【墓所】京都二條寺町要法寺 【俳系】連歌を猪苗代兼與に、俳諧を貞德に、和歌を烏丸光廣に、書を尊朝法親王に學び、又畫を狩野探幽に學んだと云はれ、兎に角狩野の一家の風を成し、立圃風と云はれた。【閲歷】家はもと弓馬の家で、藤原氏の諸司野々口義親の孫で、丹波桑田郡ほんめ（？）に隱れてゐたのが（貞德追悼文）、京に出て雛人形の細工を業としたので雛屋と呼ばれ、又雛屋紅粉と云つて紅粉染も名人であつた。畫には俳畫風の體のものが少くなく、「狂歌三十六歌仙」の如きは、その代表的のもので、立圃は俳畫の端を開いたものとも言ひ得る。自著の繪入本の繪は自ら畫く所で、その著「雛源氏」「十帖源氏」などは皆自畫である。初め兼與に就いて連歌に志したのであるが、後、貞德に就いて俳諧に專らとなつたのである。「犬子集」（別項）の編纂に當つて重頼（別項）と不和となり、自ら別に「誹諧發句帳」（別項）を編し、これが本となつて二人とも、貞德から離れるに至つた。かくて俳諧に於て必ずしも貞德の說を奉ぜず、「はなび草」（別項）の篇に於ても一家の見に從ひ、その跋も光廣である。又賦物（別項）に於て新制を試みたりしてゐる（空つぶて跋）。歿する五日前の二十五日に、遺偈のため辭世の句を自ら書いて石に刻ませ、鳥部野の墓所に建て置かせて歿した。



野々口立圃筆休息歌仙（井上辰九郎氏藏）

【著作】（原本を見得ないものが多く、俳人の書の遺入なきを保し難いが、擧げて置く）。○誹諧發句帳（別項）（寛永十年刊）○追善九百韻（寛永十四年刊）○はなび草（別項）（寛永二十年刊）○空つぶて（別項）（同上）○萬句（承應元年刊）○河舟德萬歳（承應二年刊）○誹諧千句（同年刊）○小町躍（寛文五年刊）○阿太花千句○蓚打花見○江戸𥿻○硯誹諧○つゞら折○花鳥千句○休息歌仙○美濃郡上○三十六歌句合○片輪車○兎はいかい○壬生忠岑○老鳥千句○都萬句○六日の菖蒲（文集）○袖中記○誹諧明鏡○雛源氏○十帖源氏。〔立圃の加はれるもの〕花月千句（慶安二年刊）○鶴聲誹諧○返り花○こきりこ千句○誹諧獨吟。
【人物・作風】多藝多才、行くとして可ならざるなく、千句を多く作つて居り、著作が頗る多いなど、器用な才人であつたと思はれるが、「滑稽太平記」によると、他門の者が多く俳卷を送つて來る中、自己の風俗を述べた句は他流で不用と臨書を加へ、或は何れも我にあはず添削に及ばずと云つて戻したり、又多く集を編んだのに、我が門葉でない人の句は少しも等類を繕らず、ただ我が門流を貴いものにして片意地を云つたので、門葉の方は末々まで水際をも立てて雛屋方と云つたと云ふ事であるが、これは確實とも言ひ難いけれども、重頼との不和の事情などから考へても、片意地な所があつたのかと思はれる。作風に就いては、「貞德永代記」の立圃傳に、「誹諧も上京風にて、句作りやはらかに、詩言よはく／＼として、仕立うつくし。（中略）誹諧の花は得たれ共、其實たる事すくなし」と云ひ、「滑稽太平記」には「俳諧和らかにして、心付を元とするに依て、世人、是を習得る事かたし。しかはあれども、其門に入者は、一節をかしく、誠は和歌の道にて學たり」と云つてあるが、これ等によつて大體その作風は知られるであらう。兎に角貞德の門人では故參の一人で、重頼と共に貞門の二客と稱せられ、貞門の七俳仙（別項）の中にも入つて居り、その門葉も頗る多かつた。
【參考】立圃追善集○誹諧作者名寄（暉江雅寛）○貞德永代記（中島隨流）○歴代滑稽傳（森川許六）○滑稽太平記（北藤浮生）○綾錦（菊岡沾涼）○誹諧家譜（早川丈石）○隨齋諧話（夏目成美）○はいかい袋（大伴大江丸）○浮世繪類考（山東京傳）○誹家大系圖（生川春明）○俳家奇人談（竹内玄々一）○[illegible]多村傳說○維舟と立圃との確執（潁原退藏）（俳諧史の研究）○俳諧史の研究（岩波講座日本文學）○俳書の鑑賞（三宅長策）○立圃重頼集（藤村作）（俳句講座俳人評傳篇） （志田）

立圃句集（りふほくしふ） 俳諧集 二冊 【著者】野々口立圃 【名稱】「空礫」ともいふ。【刊行】慶安二年 【諸本】俳諧珍本集（俳諧文庫）所收
【解說】立圃の四季の發句三百六十餘句を集めたものである。中に跋文が出てゐる。慶安二年五月、賦物に關する立圃の跋がある。跋文に巧みであつた事と、賦物の取りやうに就いての意見とが參考になる。 （潁原）

柳葉亭繁彦（りうえふていしげひこ） 戯作者 【本名】中村邦太郎。一に邦彦とも。【別號】雨香子
【閲歷】柳亭門下の一人であつたといふ以外に所傳がない。【著作】自來也物語二册（明治十七年刊）○千代田城噂白浪一册（同上）○長者

鑑紀文實傳二册（同上）○實說名糞血達勝二册（同上）○東土產大和錦繪一册（同）○雪解川浪葩一册（同十八年）○輪廻因果清恨傳一册（同上）○勇立春若駒一册（同上）。その他。以上のうち「東土產大和錦繪」一編は明治時代に關係あるものであつて、他は悉く江戸期の遺作を補綴したものに過ぎない。　（石川（巖））

立禮（りふれい）　國語學者【姓名】八木立禮。もと鈴木氏。【生歿】文化六年に生れ、安政三年（二五一六）十二月二十日歿す。享年四十八。【閲歷】旗本鈴木攝津守の子であるが、故あつて八木姓を冒した。幼少の時から秀才で、漢學を佐藤某に、國學を本居春庭に學んで國語及び音韻の學に造詣が深く、又和歌にすぐれてゐた。壯年に及んで北陸・近江・伊賀等に旅行したが、後、若狹の小濱に住んで、和歌・文法等の教授をしてゐた。當時小濱では東條義門（別項）が歿し、斯學の教授をする者がなかつたので、義門の遺弟等は立禮を師と仰いだ。後、近江の彥根に移り、そこで病歿した。立禮は大酒を好み、ために病を得たのであると云ふ。因みに歿後は妻敏子が代つて歌文の教授をしてゐたと云ふ。【著書】詞の玉緒繪接三卷（嘉永四年の自序あり。刊。別項「詞の玉緒」の條參照）○用語大成一卷（嘉永四年九月成る）（別項）○活語捷徑操様一卷（明治四十三年刊。五十音圖に依り用語の活用を說いたもの）○歌文極要二卷一册（明治四十三年七月刊。手爾波の呼應を說いたもので、上卷は係辭（手爾波）について、即ち「は」「も」「ぞ」「の」等の類、及び「の」「が」、「になる」「となる」、「にゆく」「をゆく」等の區別を說き、下卷は「き」「し」「しか」「めり」「める」「めれ」「まし」「らし」「つつ」「かな」等を說いてゐる）○むすびことば一卷（寫。「き」「し」「しか」乃至「つ・」「かな」等二十餘の結辭を說いたものであるが、「歌文極要」の下卷に相當するもののやうである）○倂平語格之說一卷（明治四十三年刊）○韻東解論○韻學一貫等。

【業績】要するに立禮が最も力を注いだのは手爾乎波及び語格の研究である。その說の根柢となつたものは、本居父子・義門等の研究であるが、これ等の人の誤りを正し、不備を補つてゐる點は大に多とすべきである。　（龜田）

柳灣（りうわん）　漢詩人【姓名】館機。字は樞卿、通稱雄次郎【別號】實用老人【生歿】寶曆十二年越後に生れ、弘化元年（二五〇四）四月十三日江戸に歿す。享年八十三。【閲歷】越後國西蒲原郡卷町の人、年少江戸に出でて學び、安永中召されて幕府に仕へ、驛吏となり、陞りて縣佐となり、郡丞となつた。公務の餘暇、書に親しみ詩學を學んだ。遂に一家をなし、又歌をよくした。【著書】柳灣餘唱○浮萍○刪定三體詩○杜樊川絶句法○林園月令○山村蒐耕志等。【詩風】その詩は中晩唐を標準とし、市河寬齋・菅茶山が、東西に崛起して宋詩を唱へた後に出で、廣瀨淡窓・賴山陽・岡本花亭諸人と一時の大宗となつた。　（佐久）

俚謠（りえう）「歌謠」を見よ。

了阿（れうあ）　國學者【姓名】村田直溫。字は春山、通稱小兵衛。剃髮して了阿と云ふ。【號】桑翁・高風・一枝堂【生歿】安永二年生れ、天保十四年（二五〇三）十二月十四日歿。享年七十二【法名】願誓院一鶴了阿居士【墓所】東京下谷金杉西藏院【閲歷】江戸淺草黑船町の商家（書賣商）に生れ、早く佛教に歸依し、十四歲の頃下谷坂本に遁れ、後淺草の金藏院に移つた。三十歲頃剃髮し、一生獨身で終つた。年少の頃から讀書を好み、後には大藏經を二回も通讀したと傳へられる。【著書】俚言集覽（別項）（本書に了阿が筆を加へてゐる事は疑ないが、了阿の著とするには多くの疑問がある）○考證千典十卷（刊。和漢の事物を考證解說したもので、いろは引の辭書の體になつてゐる）○異域同事錄前集・後集・續集各二卷（刊。日本・支那・印度の三國で事を同じくしてゐるものを考證列擧したもので、例せば詠歌に三鳥と云ふ事は古今和歌集の序、毛詩の序、佛說觀經等の語を擧げて對照してゐるが如くである）○一字編一卷（刊。種々の古事を和漢の書に依つて考證解說したもの）○了阿遺書（別項）○事物類字七卷○遠讀抄類標一卷○老松考一卷○方寶抄一卷○一枝堂抄錄二百六十二卷○一枝堂全書八十四卷○說叢一卷○鄉離語原○五色石○三千方等。

【批評】了阿は學和漢梵に通じてゐた爲め、諸種の文獻から事實を蒐集するには長じてゐたが、學術上特に注目すべき程の專門的研究はなかつたやうである。　（龜田）

了阿遺書（れうあいしよ）　隨筆　三卷【著者】村田了阿【諸本】新燕石十種所收。【解說】古歌・近諺・俗諺・流行語、その他事物の稱謂等につき簡單な考證を施したもので、著者の親友高田與清・山崎美成・喜多村信節・山東京傳・柳亭種彥等に請うて得た考證資料を附註してある。上卷にイツマデ草・一里塚・贋者等二十六則、中卷に田町の法印・涙資竹・玉翦柱等五十七則、下卷に十二ヶ月異名・書目年表・俊成定家贊等十八則を收めてゐる。　（和田）

了意（れうい）　假名草子作者【俗姓】淺井氏【別號】瓢水子・松雲【法號】了意【生歿】生年月未詳。元祿三年（二三五〇）春、洛本性寺昭儀坊に寂す。享年未詳（但し八十歲以上）【閲歷】記錄の徵すべきものはないが、了意は元來江戸の人で、少年の頃から佛籍に身を置いて學を勵み、二十歲前後には業大に進み、本願寺などの用務を帶びて、屢々京・江戸の間を往來したものらしく思はれる。寬永十四年、如儡子の「可笑記」（別項）に對し、瓢水子の名を以て批評を試みたが、當時この書は未だ出版にならず、草稿であつた時であるから、如儡子とは何か關係のある人に相違ない。兎に角これが了意の文學的生活に入る端緒である。明曆三年江戸の大火後に、京都黑谷に移住し、萬治元年自ら實見踏破したところを基礎として、「東海道名所記」（別項）を撰した。その頃から盛んに假名草子を刊行してゐる。著述家として知られたのはそれからで、寬文中頃に至つて本性寺昭儀坊に住し、爾來主として佛書の國字解に從事し、間々「伽婢子」（別項）の如き假名草子も作り、內典外典に通じ、所謂八宗兼學の宏才で、文筆に携はること實に五十餘年の長きにわたり、多數の著書を殘して元祿三年春、八十歲以上の高齡で歿した（以上は林九成の「狗張子」の序文及び了意の著作上に現はれた諸種の材料から推定したものである）。

【著作】〔假名草子〕可笑記評判十卷（萬治三年二月刊。如儡子作「可笑記」を寬永十四年の夏、瓢水子の名を以て批評したもの）○東海道名所記六卷（別項）（萬治三年成る）○堪忍記八卷（別項）（萬治四年刊）○孝行物語卷五（萬治三年刊）○浮世物語五卷（別項）（同年刊）○武藏鐙二卷（同年刊。明曆江戸大火の記事）○京城物語三卷（同年頃刊。役行者の傳）○三井寺物語三卷（同上）○晴明物語三卷（同上）○安倍晴明記三卷（同上）○本朝女鑑十二卷（寬文元年刊）○江戸名所記七卷（同二年刊）○かなめ石三卷（同年刊。寬文二年京都大地震見聞記）○京雀七卷（同五年刊。京都の地誌）○日本二十四孝二十四卷（別項）（同年刊）○伽婢子十三卷（別項）（同六年刊）○曾呂利狂歌咄五卷（同十二年刊）○新語園十二卷（天和二年）○狗張子七卷（別項）（元祿五年刊）○月見の友二卷（元祿十六年刊。儒佛の理を論じた漫筆で、寬文七年の序がある。これも遺稿を出版したもの）。〔佛書の國字解〕法華利益物語十二○阿彌陀經鼓吹十八○盂蘭盆經新記直講十九○十王經直解十五○太子傳備考三十○觀法發心集直談六○恩重經和談鈔五○戒殺放生文平假名四○三部經鼓吹二十八○觀經鼓吹三十○大經鼓吹三十○大原談義句解十○往生十因直談十五○勸化三國往生傳六○觀信念佛集一○說法法語鼓吹四○法林樵談十○寶寶藥性能毒六（以上は了意の著として、まづ間違ひないものである）。〔雜書〕三綱行實假名九○將軍記十九○武家根元三○鎌倉九代記十二○北條九代記十三○百人一首頭書二○伊勢物語抒海十○源氏雲隱抄三○花火草大全等。

以上の雜著中には、なほ一二別人の作が混入してゐるかも知れぬ。そはこれ等の書を現在悉く見ることが出來ないのと、その外には同時代に淺井了意といふ同名異人の著述家が他にあつたといふ說があつて、未だ確定しないからである。淺井了意に同名異人二人があつたといふことは、柳亭種彥の「好色本目錄」以來行はれた說で、關根只誠著「名人忌辰錄」には、淺井了意、號靜齋、名松雲、字子石、平安の人、寶永六年九月二十七日歿、歲七十とあつて、別人の方だけが記してあり、なほこれを敷衍したものは、朝倉無聲の「浮世物語」の解題（德川文藝類聚第二）で、了意に僧俗二人あることを述べてゐるが、第一年代に齟齬があり、共に信ずべき確證がない。併し若し子石・靜齋といふ著述家があつたとすれば、或は右の雜書中に、いくらかあるかも知れぬから、これは姑く取除けて置きたい。なほ了意二人說に就いては、「新撰列傳體小說史」に詳しく述べてある。

【批評】人物は傳記さへ判然せぬ位だから、よくは判らないが、著作を通じて見た了意は、自分の經歷や感想を濫りに宣傳しない沈毅で、彼の口からは、自負も、不平も、愚痴も、泣言も聞くことが出來ない。勿論名を賣らうと云ふのでなく、博學宏才を衒ふ氣分もない。殆ど世捨人の境涯で、一見無頓着の如くであるが、併し天性であるか、修養を積んだ功であるか、兎に角寬厚な人であつた事が判る。尤も佛學の立場から、批評諷諫を試みてゐることは屢々見るが、これは彼の教訓主義に基づいたもので、殊に風教問題に關しては深い注意を拂つてゐる。「浮世物語」の瓢太郎の生立を述べるに當つて、腰抜武士に鋭い譏戒の筆鋒を加へ、「江戸名所記」に芝居町の風俗を叙するや、歌舞伎若衆を論じて男色流行を痛罵したなどはその適例で、道義觀念の強い人であることを證してゐる。併し彼は世捨人であつても、室町末期に行はれた寂滅爲樂主義の悲觀論者ではなく、新興時代に適した明るい性格で、眞摯の半面には滑稽な頓才があり、都の錦の所謂「一向の粋僧」の面目が躍如として現はれてゐる。卽ち彼の著作は、この性格の產物である。されば假名草子と佛書とは方角違ひではあるが、了意に取つては裏と表の兩面である。元來了意の著述生活の主體は、佛書の註釋にあることはいふまでもなく、その準備として多年の修養を積んだので、假名草子が彼の前半生を覆ふは、卽ちこの讀書時代の副產物であることを證してゐる。いはば佛書國字解の小手調べに、漢文を譯し、種々面白い題材を集めて刊行したものに外ならぬ。佛書のことは姑く措き、假名草子に就いて云へば、編纂物と創作との二つに分れ、更に細別すると、編纂物には高僧傳（高僧物語の類）・孝子傳・烈女傳（日本二十四孝・本朝女鑑）・怪異小說（伽婢子）等があつて、これ等は古書抄出が基礎となり、創作は名所記・見聞錄（武藏鐙）で、これ等は體驗から得た題材である。而してその一貫する思想は教訓主義にあつて、この主義のために著作したとも言へる。その意味では、「孝行物語」「日本二十四孝」「本朝女鑑」「堪忍記」等は代表作である。しかし題材の漁り方は頗る大膽で、孝子傳は「二十四孝」より、「本朝女鑑」は安弘正の「本朝烈女傳」より、「堪忍記」は樵軒人の「堪忍記」より、その構想を取り、題材を流用し、その他古書は勿論、先輩の著作も、彼の蹈襲にならぬものは殆ど稀である。而してその學と才とを驅使し、新作として世に流布せしめた手際は頗る巧妙であつた。寬永以來光廣（別項）を初め、如儡子・正三・元隣・宗鑑（各別項）等の作家が出で、種々の新作に各々その特色を發揮したが、未だ大に行はるゝに至らず。了意が出て諸長を總攬し、更に新生面を開くに至り、假名草子は一大發展をなして寬文の盛時を打出した。了意は實に假名草子の代表作家と言つてよい。

【影響】名所記（別項）の流行や、また浮世草子（別項）中、怪談の一系の存在は、概ね了意の影響を受けたものである。殊に京都を中心とした、西村市郎右衛門・都の錦・林文會堂・青木鷺水等はその系統に屬するものであるが、殊に文會堂は了意に私淑した人である。【參考】狗張子○書籍目錄（寬文十一年山田市郎兵衛刊）○同上（貞享四年西村市郎兵衛刊）○同上（元祿五年永田調兵衛刊）○列傳體小說史前編（水谷不倒）○浮世物語解題（朝倉無聲（德川文藝類聚第二））　（水谷）

良因朝臣（りやういんあそん）「素性」を見よ。

凌雲集（りよううんしふ）　勅撰詩集　一卷【撰者】小野岑守・菅原清公・勇山文繼等。その間疑はしい點は嵯峨帝の天鑒を仰ぎ、又當代の碩儒賀陽豐年にも質すところがあつた（序文）。【名稱】正しくは「凌雲新集」。凌雲は健筆又は卓越した詩文を意味する。【成立】集中作者の官位によつて見るに、弘仁五年の成立であらう。【諸本】內閣文庫（寫本三部）・神宮文庫（寫本一部）・九條家舊藏本（寫本藥師寺藏）等。群書類從一二三・日本古典全集第一期所收。【內容】本邦最初の勅撰詩集である。「懷風藻」（別項）の撰後六十四年である。序文には、「延曆元年より弘仁五年に至る作者二十三人、詩すべて九十首、合せて一卷となす」と見えるが、現存本には二十四人九十一首が載つてゐる。目錄は本文と合致する。序文は各々その一を缺いたのは何故か明かでない。「文華秀麗集」（別項）の序文に九十二首とあるのは誤つてゐる。編輯上排列は作者の爵位を以てした。故に太上天皇を初めとし、無位の巨勢志貴人に終つてゐる。その點は當時流行した「文館詞林」の排列に負ふ所があるかも知れない。平城・嵯峨・淳和三帝の御作は別として撰者の作品が多い。嵯峨帝二十二首、岑守・豐年各十三首、淳和帝五首、淸公四首等の外は何れも一二首に止まつてゐる。全體から見れば五言三十九首、七言四十六首、雜言六首になるが、雜言も七言

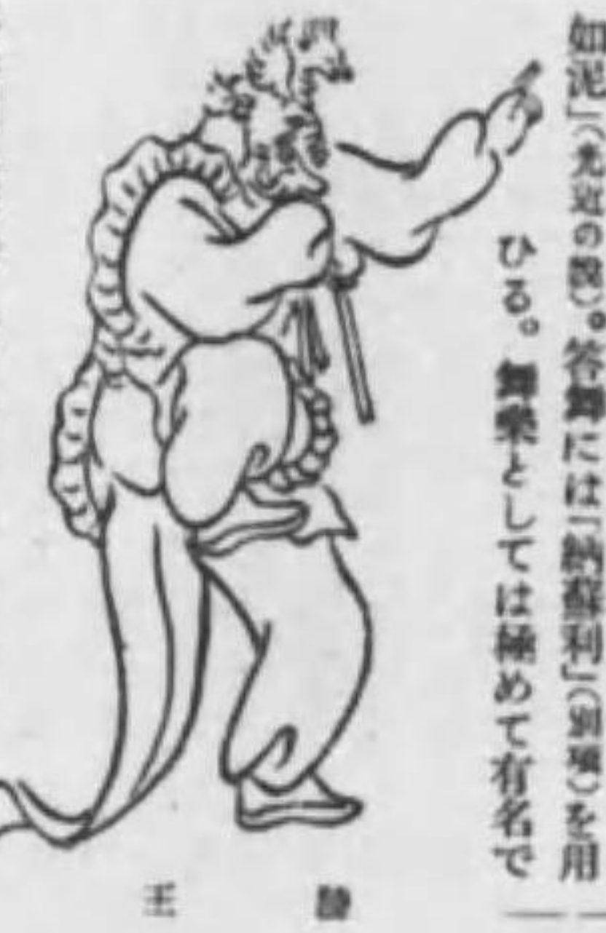
と見るべきである。これ等を通じて見るに七言の詩の多くなつた點が注意せられる。「懐風藻」には五言の詩のみであるのに、本集に入つて七言詩を增加したのは唐詩の影響に因る。「懐風藻」の詩人は、多く晉・漢等の詩の影響を受けてゐた。所謂古詩の感化を受けることが多く、五言を詠み、格調に偏しても亦古詩の調を學んでゐる。然るに本集は、唐詩、就中盛唐以後の整正なものに影響せられた。殊に中唐以後からは、唐にも七言の詩が多くなつた。殷璠の「河嶽英靈集」の如きも、五言・七言を採錄した點は、多少「凌雲集」に類似する點とも見られる。要するに本集の詩は、唐詩の洗練せられたものに匹敵し、「懐風藻」の詩の格調と全く趣を異にする點である。又集中、平城帝の詠櫻詩は、我が詩に櫻を詠じた濫觴である。詩の例として滋野貞主即ち滋貞上の王昭君を詠んだものをあげる。

朔雪翩々沙漠暗　邊霜慘烈隴頭寒
行々常望長安日　曙色東方不忍看

【價値】本集の撰時は、恰も唐の德宗から憲宗に至る約三十年で、正に中唐に當る。唐詩の影響の偉大な事は、卽ち唐の文化が我が國に浸潤した事の偉大さを物語るものであらう。この集は我が平安初期の詩文隆興期の詩として、又王朝時代を通じて最も端潔雅麗な作品の一として推重すべきものである。【參考】日本漢文學史（岡田正之）〇日本古典全集解題　（山岸）

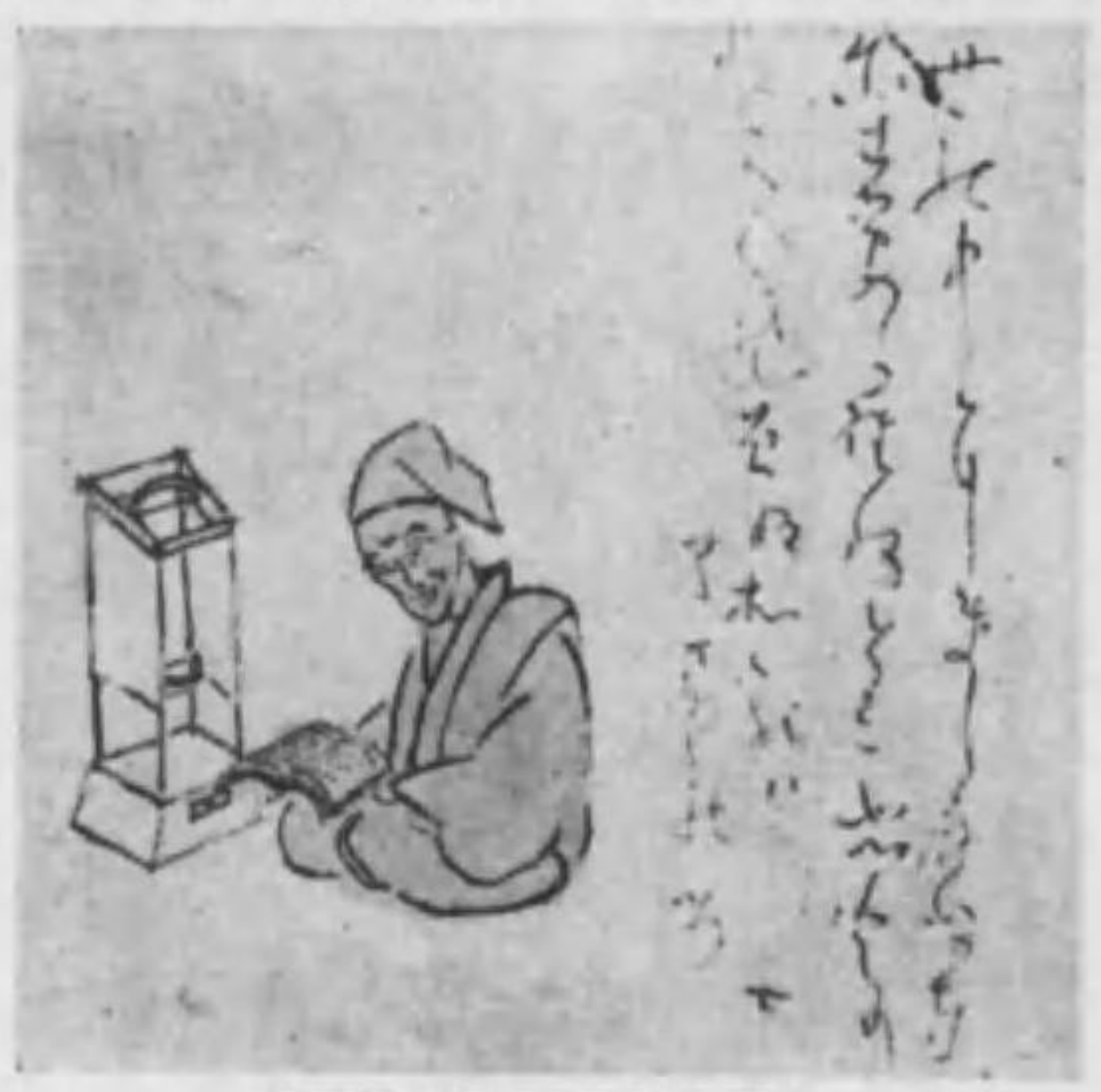
凌雲新集（りょううんしんしふ）「凌雲集」を見よ。

陵王（りょうわう）雅樂舞曲【名義】龍王を誤つて陵王と書いたものらしく、印度劇の中の龍王の舞から來たものであらう。【異稱】「龍王」「羅陵王」「蘭陵王」「蘭陵王破陣曲」「沒日還午樂」【性質】林邑樂。古樂の中曲。沙陀調の曲であるが、今は壹越調曲に屬する。亂序一帖、囀二度、嗔序、荒序八帖（拍子八）、入破二帖（拍子各十六）。舞があり一人で舞ふ。舞人は特別の舞裝束を着け、頭に龍の附いた恐しい假面を用ひ、手に桴を持つて活潑に舞ふ。舞の中に囀がある。卽ち舞者は次の句を三度唱へる。その句には三說がある。卽ち「吾爵胡人、古見如來、戎國守護、翻日爲樂」（龍王の說）、又は「我等胡人、許還城樂、石於踏泥如」（先師の說）、又は「阿力胡兒、吐氣如電、我採頂電、踏石如泥」（光近の說）。答舞には「納蘇利」（別項）を用ひる。舞樂としては極めて有名で平安朝以來最も屢々行はれ、今に盛んである。【沿革】林邑八樂の一つで、天平八年に林邑國僧佛哲が我が國に傳へたものである。平安朝に至り、支那の有名な「蘭陵王破陣曲」と誤り傳へられるやうになつた。併し、これは支那樂ではなく、印度樂であることは、舞容・樂曲・音階・假面及び囀などによつて明かである。察するにこれは當時印度で、佛教歌劇として最も盛んに行はれてゐた所の、戒日王作の「龍王の喜び」の一部で、菩薩と結び付いたものらしく、菩薩は乘雲菩薩で、金翅鳥が龍王を殺さんとする所を、菩薩が身を以てこれを救ふといふ舞劇であるが、龍王はその一部であつたのを、佛哲は恐らくその劇中の龍王一人の舞の所を引離して、これを一つの舞として我が國に傳へたものらしい。然るに後に至り、菩薩の舞は滅び、龍王はその劇の意を失つて單に一つの舞樂となつた。そこで平安朝の初期に至り、樂制改革の當時、支那の書籍を見て、その發音の上からこれを陵王と誤り、有名なる支那の「蘭陵王破陣曲」であると附會するに至つた。「蘭陵王破陣曲」は南北朝頃の作曲であつて、白石の「樂考」に「唐教坊樂、蘭陵王入陣曲也。北齊の世、蘭陵王長恭、才武ありて容貌美なりしかば、敵にのぞみて必ず假面を著し、北周の師を金墉城下に破りてその功ありし時、その容をまなびて此舞を作る」とあるものが卽ちこれである。實際、支那の「蘭陵王破陣曲」は、その音階も舞容も悉く異なつてゐて、佛哲の傳へたものではなく、その曲は決して我が國へは傳はつてゐない。（田邊）



陵　王

良寛（りやうくわん）歌人【俗名】山本榮藏。字は曲（まがり）。【生歿】寶曆七年十二月生れ、天保二年（二四九一）正月六日寂す。享年七十五。【墓所】越後三島郡島崎村隆泉寺境內【家系】代々越後出雲崎の名主兼神官の家柄である。祖先は橘諸兄に出で、その五世の孫泰實が山本中納言を稱したのが、その元祖となつたものだと云ふ（沙門良寛全傳）。山本家の家號を橘屋と稱してゐるための假託かも知れない。その家系に新左衞門と云ふのが出たが、子がなかつたので、外孫で佐渡相川町に住む秀子を養女として迎へ、越後與板町の荒木左門（諱、以南）を養子としてこの女に配した。良寛は左門が二十二歲の時、その長子として生れた。弟妹には由之・圓澄・香・たか子・むら子・みか子があつた。【閲歷】父左門以南は國典の研究に沒頭し、寬政三年、五十六歲の春京都に上り、憂國の志士を以て自任してゐたが、幕府の嫌疑を被り、寬政七年桂川に投身して自殺した程の情熱家である。俳句を好み、久村曉臺を師友としてゐた。良寛の幼少時代に關する傳記は異說區々であるが、名主と云ふ家柄から見ても、父母の寵をうけたらしい追憶から見ても、境遇的に惠まれてゐたことは疑へないし、その天性に就いても魯鈍とか暗愚とかであつたやうには思はれない。但し疎慵で非社交的であつたことは事實らしく、兎に角十五歲にして元服し、父より莊官の役を一たび讓られたが、安永三年十八歲の時、出雲崎に隣接した尼瀨町光照寺の玄乘破了和尙の得度によつて出家を遂げた。その時、當然山本家の繼嗣者となつた弟の由之は十三歲であつた。かくて良寛は一沙彌として五ケ年間光照寺で修行を積んだ。安永七年、彼は折柄越後に巡錫した備中玉島圓通寺の國仙和尙の碩德を慕ひ、隨行して備中に到り、更に修行を積んだ。その後、天明五年、二十九歲の年、母の喪にあひ一度歸郷したが、更に備中に赴き、その後寬政十一年（四十三歲）までは、備中圓通寺を中心にして西國方面を遍く行脚して托鉢修行を積んだ。勿論師よりは印可證明をうけ、「良也如愚道轉寬云々」の贊偈なども與へられてゐる。この間の二十ケ年餘は、良寛の修行期で、詩歌の詠作の方には未だ殊更の興味を持つてゐなかつたらしい。寬政十一年、彼はどうした心機の轉向からか、伊勢・江戸・信濃等を巡錫して郷里越後の人となつた。併し生家は當時甚だしく頽廢してゐて、彼は出雲崎に住むことさへ遠慮されるほどの狀態であつたらしい。その後、中山・郷本・寺泊などと諸地に轉々して庵住した。五年後の文化元年（四十八歲）に至り、初めて越後國上山の五合庵に身の落着きを得るに及んだ。この五合庵には文化十四年、彼が六十一歲まで前後十四ケ年の間住んでゐた。この期間は、實に彼の大成時代に相當し、更にその後、國上山中麓の乙子宮の境內に住むこと十ケ年、文政九年（七十歲）老衰の結果、三島郡島崎村の能登屋木村元右衞門の好意をうけて、その裏庭の一角に住みかはることとなつたが、四年ばかりの後胃腸を病みて永眠した。門下には貞心尼・遍澄がある。【人物】良寛傳に就いて最も遺憾な點は、その漂泊時代の事蹟が全く不明なことである。歸國後の良寛は、概ね托鉢によつて生活を續けたやうであるが、地方人からその高潔な人格を敬仰されたことは云ふまでもない。これは、彼に關する無數の逸話によつて證明される。畢竟彼は、孤獨的・純心的・非世才的資性を禪定の修行によつて大乘的悟境まで高め、一切融通無礙の心境に到達したものと云へよう。或る時は、村童に交つてあどけない遊戲に耽り、或る時は村女と共に野邊の若草を摘み、常に貧を友として知足の心境に出入した。と云つて、彼は陋々世評に存するやうな禁慾を實行したものではなく、酒も煙草も嗜んでゐる。知人からその揮毫を强ひられた時は憤慨の返書もしたことがある。特に彼の七十歲の年、醫師の未亡人で時に二十九歲の貞心尼がその門人となるや、兩人の間は全く神祕的の愛情によつて硬く繫がれることとなつた。「うたやよまむ手まりやつかむ野にやいでむ君がまに〳〵なして遊ばむ」と云ふ貞心尼の歌は、よくその親交を語るもので、彼女は四ケ年を通じて幾度も良寛の隱棲地を尋ねてゐる。示寂の地島崎村でも、良寛がいかに村人の崇拜をうけてゐたかは、葬儀當日會葬者のために一石六斗の米を炊いたと云ふ記錄によつても、その一斑を推すことが出來る。



良寛自書贊（安田靫彥氏藏）

【著作】在世中の自撰のものはない。家集は熱心なる愛好者の努力によつて編まれたものである。良寛の弟子貞心尼の「蓮の露」が最初の編著で、天保六年五月一日成る。短歌百十餘首、長歌十餘首、旋頭歌數首、俳句十一句を收め、貞心尼の序文がついてゐる。次に林甕雄が蒐集した。別に「沙門良寛御歌集」と云ふ寫本がある。二卷に分れ、短歌三百五十餘首、長歌二十一首、旋頭歌十四首を收めてゐる。次に村山半牧編「僧良寛歌集」は明治十二年刊歌數は最も少い。また輪池叢書に「良歌子歌」と題する一寫本を收めてある。明治以後には小林二郎編「僧良寛歌集」、西郡久吾編「北越偉人沙門良寛全傳」、大宮季貞編「良寛歌集」、玉木禮吉編「良寛全集」中の歌集等が相次いで出で、相馬御風編「良寛和尙詩歌集」中の「良寛和尙歌集」及び大島花束編「良寛全集」はその集大成で、最も歌數が多く備はつてゐる。歌集は短歌・長歌・旋頭歌に分れ、凡そ四季・雜等の分類になつてゐる。その他戲歌・俗謠・俳句・文章等を附錄とした本もある。【批評】生前の良寛は、書を以て却つて遍く知られてゐた。草體に最も秀で、その瀟洒なる個性を遺憾なく表示し得たもので、一般の草書の如く纖弱の弊なく、狹肉に獨自の緊張味を見せ、稜角にすぎる鋒味もなく、圓滿滑脫の氣韻に充ち溢れてゐる。同時代の龜田鵬齋が激賞して措かなかつた點も、書家の書でないところのさうした妙味にあつたやうである。次に漢詩は和歌よりも早く試作したものらしく、備中に於ける吟詠も一首傳はつてゐるが、これ又平易枯淡の趣致に溢れ、寒山の詩風を傳へ得てゐる。多く叙景詩であるが、規格に囚はれず、自由で俗談的な詠みぶりに原始味が橫溢してゐる。口碑によれば、良寛は「余に三嫌あり、書家の書、歌人の歌及び詩人の詩、及び料理人の料理之れなり」と云つてゐたと云ふ。かくの如く書にせよ、漢詩にせよ、所謂玄人味の拔けてゐるところは、彼の內的生活のありのまゝの表現であるためで、その最も明かなものは歌道に於てである。彼の詠歌に於て範としたものは「萬葉集」のみであつたやうであるが、彼はその樸直素純の精神のみを撰て、その格調には必ずしも拘はつてゐない。

飯乞ふとわが來しかども春の野に菫つみつゝ時をへにけり
秋の日にひかりかゞやくすゝきの穗これの高屋にのぼりて見れば
いざさらばわれはかへらむ君はこゝにいやすくいねよ早あすにせむ（貞心尼）

淡々として純無礙の調べと評すべきものであらう。良寛には別に多少ながら長歌及び旋頭歌の遺作も傳へられてゐる。【參考】彌彥神社附國上と良寛（小林紫暉）〇大愚良寛（山崎良平）（僧良寛歌集附錄）〇北越偉人沙門良寛全傳（西郡久吾）〇短歌私鈔（齋藤茂吉）〇大愚良寛（相馬御風）〇良寛和尙歌集（同上）〇一茶と良寛と芭蕉（同上）〇良寛和尙の歌につきて（宮城義臣）（あさみどり一ノ三〇）〇良寛の歌の價値を論ず（三井甲之）（詩歌八ノ四）〇良寛の研究（藤秀璻）（國語と國文學二ノ六・七）〇良寛雜纂（大島花束）（とねりこ九ノ一三）〇良寛の父山本以南について（佐藤吉太郎）（解釋八ノ四・五）　（齋藤（清））

龍虎（りゆうこ）「鳥獸物の謠曲」を見よ。

令旨（りやうじ）古文書【解說】大寶令の公式令の規定に依れば、令旨は皇太子の公文書で、三宮（太皇太后・皇太后・皇后）もこれに準ずとしてある。その樣式は左の如きもので、大體詔書・勅書（別項）に據つてゐる。

令旨、云々、
　年月日
奉令旨如右、令到奉行、
　　大夫位姓名
　　亮　位姓名

然るに平安朝以後となれば、宣旨（別項）に倣へるもの現はれ、次いで綸旨・院宣（別項）に倣へ

る令旨が出來て專ら行はれた。これは皇太子に限らず、親王を初め、法親王・女院等からも出されてゐる。

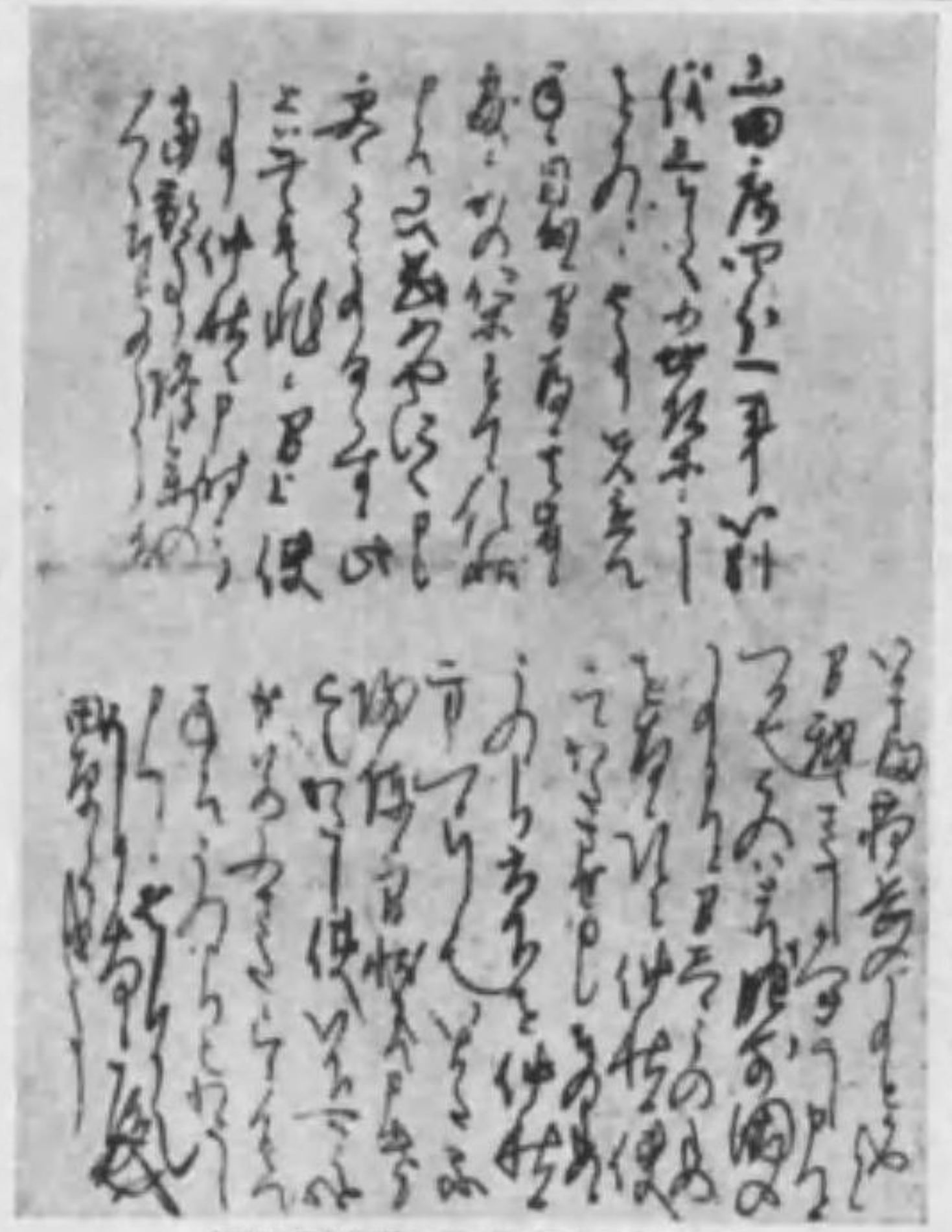
被侯兩門院令旨云、以紀伊國紫河庄、永令寄進金泥一切經藏、每年初奏延阻修一切經會、每月初三二晝夜不斷品經聲既畫尾、件貴鳥羽仙院之舊規、可期三會之曉月之故也、以彼所當充其用途、執行修養、一山衆徒、殊任願狀、相共奉行、宜備軌者、云法會、云金扇、無過失、無省略、只備庄家所出、相隨可計申也、抑功德者在經王書寫之功、全字梅佛之一切經巳篇簽籌、靈場者在大師入定之地、尤少梓界之一勝者、必可爲所歟、仍卜此地安此經矣、有比顧徵者、令旨如此、悉之謹狀、

七月十七日　（花押）奉

奉　金剛峯寺執行俊覺御房

明治以後も、皇族の御旨はこれを令旨と稱へさせられる。（伊木）

了俊 りやうしゆん　歌人・連歌作者【姓名】今川貞世。本姓足利氏【號】剃髮後了俊と號した外、德翁とも云ふ。【稱呼】別稱としては、左京亮・伊豫守・源の金吾などがある。【生歿】元應二年に生れ、應永二十七年（二〇八〇）八月歿す。享年九十六。【法名】海藏寺殿德翁了俊【家系】足利國氏初めて今川氏を稱し、その孫に上總介國範あり、それが了俊の父で一族足利氏の藩屏であつた。了俊には、範氏・仲秋等の兄弟があり、家は實子の貞臣が繼いだ。【學統】了俊の歌學は冷泉派（別項）に屬し、冷泉爲秀の門人であると共に、また後に正徹・心敬・宗砌・宗祇等、堂上外の冷泉派歌人を輩出せしめた上に大きい意味を有つてゐる。連歌は二條良基の敎を受けた。【閱歷】曆應三年（興國元年）十六歲の時、源經信を夢みて歌道に志し、その後冷泉爲秀に入門の禮を執つた。專ら足利義詮に仕へ、遠江の守護を授けられてゐたが、當時干戈の騷ぎ絕え間のなかつた際の事とて、その前半生は殆ど陣中に過ごされた。正平十四年の吉野戰及び東寺戰、同十六年の京都戰等に於て勳功を立て、ために建德二年、九州探題の榮職を與へられたのであるが、その時、彼は既に四十七歲、剃髮して了俊と號した後の事であつた。探題の職はその後七十一歲まで二十數年間續く。併しそれは彼にとつて必ずしも安易幸福の年月ではなかつた。先づ菊地氏との間に數年の苦戰が續き、更に島津氏との交戰も勃發した。唯わが海賊の行爲になる朝鮮の捕虜を返して大藏經を求めたとか（永和元年）、上洛中歌會に招聘されるとか、又義滿の嚴島詣に當り、自ら案內者の勞をとり得たとか（康應元年「鹿苑院殿嚴島詣記」）、彼の面目の顯現し得る機會も、時にあるにはあつたが、應永二年大內義弘の讒を被り、探題を辭せしめられ、强ひて都に召還せしめられるに及んだ。且つはその翌年僅か駿河半國の主に落されて東下せしめられたのみならず、藤澤に幽居せんとしたことをすら、鎌倉との結託と疑惑せられ、遠江の方に移されるに至つた。而も義滿の輔佐細川賴之すら「貞世の謙讓及び難し」と讚賞してゐる。即ち晚年、その身の潔白を證し得て、歸洛を許されてはゐたが、時既に彼の齡七十六歲であつたのみならず、地位に於ては一隱遁者と云ふ程度を出で得なかつた。尤も歌人としての名を後世に遺すには卻つてそれがよい結果を生んだ。即ち殘年まで二十年の間に、「難太平記」「和歌所へ不審の條々」「言塵集」「了俊辨要抄」「今川了俊日記」「落書露顯」等の數著を次々に書き、當時歌壇を風靡してゐた二條家（別項）風の歌に對し、冷泉家の特色を發揮したことも尠くはなかつた。また連歌に於ても、年頃その風體の惡しくなつて行くのを慨して、「落書露顯」を著はしてこれが匡正を謀つた。「八十の年もこまがへりて、斯道（連歌）の稽古の志を勵まし侍らばや存ず。執心の淵深く侍る」とも言つてゐる。而して彼はまた書畫をよくし、故實に明かに、和文を行るにも甚だ巧妙で、種々の文章が殘存してゐる。


今川了俊筆書狀（荻野由之家藏）

【著書】（和歌）和歌所へ不審條々〇言塵集〇辨要抄〇落書露顯（以上各別項）〇落書抄一卷（實。落書露顯の一部である）〇二言抄（和歌所へ不審條々の別名）〇師說自見集六卷（續群書類從卷四六八所收。師說と自見とを取交ぜて編した歌書。寫本には了俊自編の如く奧付も附いてゐるが、後人が言塵集等より抄出して作つたものらしい）〇明題和歌全集（刊本十五卷、寫本六卷）（古今集より續後拾遺集まで勅撰十六代集の歌を採り、題を附し分類したもの）〇二八明題集（明題和歌全集の別名）。〔紀行〕道ゆきぶり一卷（群書類從卷三三三、扶桑拾葉集採收。二月二十日京都を立ち、十一月二十九日赤間が關に著するまでの旅路紀行で、應安三年九州探題を命ぜられた時の西下記かと思はれる。多くの地名を擧げ、舊跡に就いての關心は特に深い。六十首近い詠歌が挾まれてゐる）〇鹿苑院殿嚴島詣記（以上の兩書同一のもので一卷。群書類從卷三三三收載。康應元年三月四日了俊自らの案內を以て、將軍義滿を周防國まで迎へた折の往復の紀行で、月の二十七日に歸着。文學味には乏しいが、了俊の思想の一端を窺ふ句節に富んでゐる。又扶桑拾葉集に選入）。〔雜書〕今川壁書一卷（了俊がその弟仲秋に傳へた二十三箇條の訓戒書であるが、武士たるもの日常の起居に關して說くところ懇切であるため、廣く流布して伊勢貞丈や新井白石の解が出てゐる程の修身入門書である。日本敎育文庫家訓篇に選入）〇難太平記一卷（群書類從卷三九八所收。主として太平記中に書き漏らされた了俊一族の武功を錄し、以て誤りなきところを子孫に傳へようとしたもので、太平記その物の記事に就いての誤謬指摘は尠い。併し太平記成立に關する片言が混つてゐて、太平記研究者の書過し難き好參考書）〇今川大双紙（別項）〇今川了俊書札禮（續群書類從卷七〇三所收。書簡・文具等に關した入門書。十四項に亘り、連歌執筆の用意にも及んでゐる）。

【作風】社會の混亂期の後に於て、先づ現はれるものは新社會組織の批評であり、新文化建設論でなければならぬ。了俊もさうした文明批評家の一人たるを失はない。實際作品に於ては、かなり貧弱で、傳へられたものも僅少である。

鈴なれば國おさめにさいなみ野のあさぢの道もまよはざらなん

中々にわかれのきははさもかくもいはれざりしぞ今はかなしき

制詞の束縛、一體偏重を排し、自然筆調を讚美してゐるのに對しては、なほ平俗・無興・軟弱と云ふ弊を脫却し得てゐない。その文章の格調も同然である。【史的位地】彼の著書は各方面とも廣く普及してゐる。彼は黎明期に於て確乎たる一啓蒙家たるの地位を失はない。即ち倫理道德史上には殊に逸すべからざる代表的人物であると共に、和歌史に於ても歌學者としての價値を沒することが出來ない。武家の中から、かうした文人の出たことも文化史上逸し難い一事實である。

【參考】難太平記〇大日本史〇今川家譜〇翁草〇白石紳書〇鶯埃隨筆〇鹽尻〇野史〇了俊に關する覺書　小島吉雄（國語國文の研究第二歌論號）　（齋藤（清之））

梁塵愚案抄 りやうぢんぐあんせう　註釋書　二卷

【著者】一條兼良【成立】文明九年か。【別名】「神樂注祕抄」「催馬樂注祕抄」「神樂歌古註」「催馬樂祕傳抄」など。【由來】兼良が綾小路有俊の所望に應じて著作した書だと云ふ。【諸本】神樂の跋文の末に、天正七年八月十五日と年月日を記した本があるが、多くの寫本にはこの一行はない。何かの誤入であらう。本書は著者の在世中に既に書寫せられたと見えて、この神樂催馬樂の祕註を中院中納言通秀より借りて、書寫校合せしめたと云ふ權中納言有俊（源院藤季の子にて藤家の流を汲む人、神樂血脈參照）の康正元年九月十日（催馬樂の奧には、九月晦日とある）の奧書があり、次に本書の正本を應仁元年の亂に紛失したから、この寫本を以て正本に準ずると云ふ文明元年八月五日（催馬樂の奧には、文明十八（十は元の誤りか）年九月十六日とある）の釋有瑞の奧書のある本が流布本の原本となつてゐる。釋有瑞とは綾小路有俊の法名で、文明元年には五十歲であると一本に註してゐる。然るに一本の催馬樂の奧には、「先年綾小路前中納言有俊卿令所望之間、愚案之（朧朧ヵ）遺之。其後思得事共重加筆削。凡以難不足信用、暫以此本可爲後證者也。文明九年六月初吉。三關老人」と云ふ奧書が加はつてゐる。三關老人は兼良の別號である。これによれば、本書はもと有俊の所望によつて兼良の著はしたもので、それに文明九年の頃筆削を加へて證本としたのである。即ち初校は康正元年以前に成り、再校を修訂完了したのは文明九年である。初校は應仁の亂に紛失したと思はれる。かくてこの本は綾小路家に傳へられ、豐原統秋は、綾小路入道（紫陽林軒）より、この本を借りて「體源抄」の中に收め、又一寫本には、神樂の奧に、この本は世間に流布しないが、所望によつて貸し與へ寫し置かれたと云ふ文明十六年四月十六日の桑門有瑞の奧書を存し、同十七年九月には悉く勘へ終つたと云ふ奧書のある一本もある。別に兼良が訂正を加へ、文字を消して自筆で直し置かれたと云ふ良慶の奧書があり、更に延德二年十一月に、この祕本の書寫を許したと云ふ綾小路中納言有隣の奧書のある寫本もある。又堯孝法師の門弟堯憲所持の本を東左近將監の寫せる本によつて、七十一歲の四條一品入道隆量（法名常夢）が、明應八年四月より六月十七日にかけて隆永朝臣に書寫せしめ、校訂を加へた本を明應九年四月二日に兼良の御息所より竹內僧正（兼良の子良鎭大僧正）が借り受けた。この本によつて四月二日より六日にかけて七十七歲の釋蓮光が書寫した本が、續群書類從に入つて居り、また多く傳寫本が存してゐる。更に右本を大永三年十一月に中山中納言宣親が書寫し、同年十二月二十五日には宣親本を清原宣賢が書寫した本などがあり、江戶時代には一層多くの寫本が現はれて流布した。以上の奧書によつても分る如く、本書は兼良の改訂を加へる以前の初稿の流を汲む本と、改訂を加へた以後の系統の本がある。故に寫本によつて可なりその文句の相異する所があるのは、兼良自身筆を加へたからである。刊本は寬文八年版と元祿二年版がある。賀茂眞淵の書入本は有名で、その著「神樂考」「催馬樂考」（各別項）の基をなした。この眞淵書入本には又宣風・敬孝・尙之・魚彥・道麿・伴蒿蹊等諸家が、順次に書入を加へた書入本もある（神樂考參照）。國文註釋全書所收本は、この眞淵書入本である。伴信友にも元祿版に校註を加へた書入本があり、栗山滿光が百花庵の說及び自說を書き入れた本（明和六年成る）や狩谷棭齋の書入本（文化元年成る）等も存する。日本歌謠集成には刊本によつて收めた。

【內容】上卷は神樂の註釋、下卷は催馬樂の註釋で、神樂の庭火の歌の次に「古語拾遺」を引き、他は歌詞を掲げた後に、凡て「愚案」と記して註解を加へた。歌詞は謠ひ物として古譜の通りに記したものではなく、讀解し易きやうに語句を連ね改め記されてゐる。故に眞の歌詞よりはやゝ異なるものとなつてゐる。註解は簡明で、「古今集」等に同歌の出でた歌はその旨を一々記した。催馬樂の奧には「西宮抄」の「私逆宮事」の條と「顯昭法師袖中抄云」として催馬樂譜の事を記した二箇條の按書が附いてゐる。【價値】註は誤りも多く、不十分で意味の不明瞭なところも少くないが、本書の價値は神樂・催馬樂の全註の嚆矢たる點にある。故に江戶時代の學者も、多く本書を基として註解を加へ、誤りを訂してゐる。又その歌詞は一異本として歌詞の校訂に役立つものである。要するに歌詞そのものの研究にも註解にも逸する事の出來ぬ價値を持つてゐる。後の註釋書の牽强に過ぎるもののあるに比すれば、本書の註釋の簡素にして素直なる點に寧ろ取るべき所が間々見える。併し要するに註釋書としては史的價値以上に出でない。（藤田）

梁塵後抄 りやうぢんこうせう　註釋書　四卷

【著者】熊谷直好【成立】安政六年【刊行】萬延元年【諸本】國文註釋全書の「物語註釋十二種」の附錄に收めた本は、黑川眞賴博士が淺草文庫本により、天治本催馬樂と校合した本である。又日本歌謠集成卷二にも收めた。

【內容】神樂催馬樂の註釋で、神樂二冊、催馬樂二冊より成る。神樂上卷の卷首に、平瀨儀超の安政六年秋の序文があり、催馬樂下卷の末に「七十八翁長春自書」とある。江戶須原屋茂兵衞以下、三都書林十書肆の合梓に係る。歌詞は、神樂の方は流布の「神樂次第」に、博雅三位の二男雅樂頭信義の自筆本と稱する古譜及び左近衞將曹八侯部宿禰重種の古譜、（この二古寫本は、何れも伶人安倍家の所藏で、天保八年の季良の奧書がある）によつて校合し、傍註の形式でその異同を記した。卷首にも信義の譜の流布本と大に異なる神樂歌、北御門以下七首を

揭げてゐる。歌詞は假字で記し、囃子詞は圏點を附して、次に囃子詞を除いた意味の通る歌詞を假名交りに書き下して記してゐる。催馬樂は天治本によつて歌詞を記した。その形式は神樂歌と全く同じである。註解は諸抄を引くことが少いが、丁度この書を書き終へた時分に世に出た橘守部の「神樂歌入文」（別項）を見て、その考證の廣きに驚くと共に、又飽き足らぬ所もあるので、「入文」の說を多く引いて、且つそれを駁したところも所々見える。【價值】本書の特徵は、その註解の穩健な所にある。「入文」の如き卓拔な說は見えず、寧ろ「入文」の說に啓發されたかに見える點があるが、同時にその說には首肯に値する說が多い。本書の簡明平易なる說と「入文」の博引卓拔なる說とを併せ見れば完全に近からう。〔藤田〕

良人の自白

小說　四篇四冊

【作者】木下尚江【刊行】（前篇）明治三十七年八月から十月まで東京每日新聞に揭載、同年十二月單行。（中篇）明治三十八年四月から六月まで同新聞に揭載、同年七月單行。（後篇）明治三十八年七月より十月まで同新聞に揭載、同年十一月單行。（續篇）原題「新曙光」明治三十九年一月より六月まで同新聞に揭載、同年七月單行。木下尚江全集所收。

【梗概】（前篇）銀時計の秀才、法學士白井俊三は日出度い卒業式の日に獨りで煩悶してゐる。當年クロムウェルを理想とした反抗の子たる彼も、一人の母のために伯父の家の養子として、伯父の娘と結婚する運命に縛られ、そのために、學生當時戀し合つた美貌な松野翠の熱烈な愛をどうともなし得ない。翠は失戀の惱みを忘れるために亞米利加に行き、俊三は故鄕に歸つて伯父の娘お高を妻とし、彼等の希望に從つて松本で辯護士になる。伯父は吝嗇・强慾の頑物、お高は家附の我儘娘で共に俊三を理解しない。俊三は人道主義の立場から法律の正義を主張し、間もなく起つた小作爭議で養父と仲違ひになる。一方、その人道主義から賣春婦お玉を辯護し、お玉とその獄中で生んだ子とを引取つて世話する。お高は一度は俊三のよい妻であらうと努めるが、遂に俊三に反感をもつ。（中篇）俊三の實母は、家內の不和を心配しながら死んだ。これが俊三に精神的に大衝動を與へる。春雷禪師といふ面白い坊さんがゐて、悟の鍵は生命がけの戀だと敎へる。これが豫言となつたかのやうに、間もなく白糸溫泉で、深志屋の女房お登喜と熱烈な戀の交渉が始まる。お登喜は金力結婚の犠牲にされた不幸な女性で、有名になつた俊三を慕つてゐたのであるが、姙娠が俊三に迷惑を及ぼすのを氣にして自殺する。俊三との噂が誰言ふとなく立つ。俊三はこの頃から一種の神經興奮症に陷る。（後篇）俊三は煩悶を紛らすために待合に入りびたり、藝妓の梅次や女將のお浪等と關係する。その中に日露戰爭となる。俊三の町で赤十字總會があつた日、總代の華族某が梅次を人身御供にすると聞いた俊三は、その席に暴れ込んで町中の噂になる。養父母が怒り出し、お高の未練を抑へて離緣する。これを更生の第一歩とした俊三は、亞米利加行を決心する。出發の間際に、俊三の親友で白井家に深い恨をもつ與三郎のために負傷させられるが、俊三は與三郎の罪を赦し、自分の去つた後の土地・財產を與三郎に賴んで共產主義を試みさす。お玉は喜んで與三郎を助けることを誓ふ。〔續篇〕與三郎とお玉とは俊三の意志を着々實行して行く。お高には二度の養子が來るが和合しない。悔い改めたお高は、昔敵視した與三郎とお玉とを唯一の友と親しむ。與三郎の計畫が漸く成功しようとする所へ突然露西亞から俊三の變死が報ぜられる。數月の後、松野翠は俊三の遺骨を抱いて與三郎の許に着く。翠・お高・お玉・與三郎は兄妹の如く慰め合ふ。

【批評】尚江の社會小說の最長篇であり、「火の柱」（別項）などとは、見違へるやうに、板について來た。俊三の性格は多少理想的で誇張があるが、惱みの心理過程には、强い實感が籠つてゐる。この點同じ著者の「懺悔」と讀み合はすべきであるが、題名の「良人の自白」はどうかと思ふ。自白としては書かれてゐない。女性の性格描寫や會話などは、ひどく手に入つて來て、その複雜さが相當效果的であり、場面としては春雷禪師の昔語りのあたり、お登喜との戀の場面、お浪と二人お登喜の墓參りをするところなどは忘れ難い。殊にお登喜との戀の交渉を描いた一段と、お登喜が自殺の場景などに、作者の專門藝術家に迫る巧妙さが見られる。男性では、或る點で與三郎の方が俊三より鮮かな印象を與へる。お玉にトルストイのカチューシャの面影の見えることは爭はれぬ。家と社會、個人と人道主義、戀愛と世俗道德、結婚と自由戀愛、婦人の解放、社會害、富の罪惡、土地私有、罪による償ひ、その他こゝでも基督敎的なものが顏を出すが、要するに相當藝術的に消化されながら、中心にこれだけの主義思想を主張した思想小說として、明治文壇に特殊の地位を占め得べき大作であることは爭へない。〔藤田（泉）〕

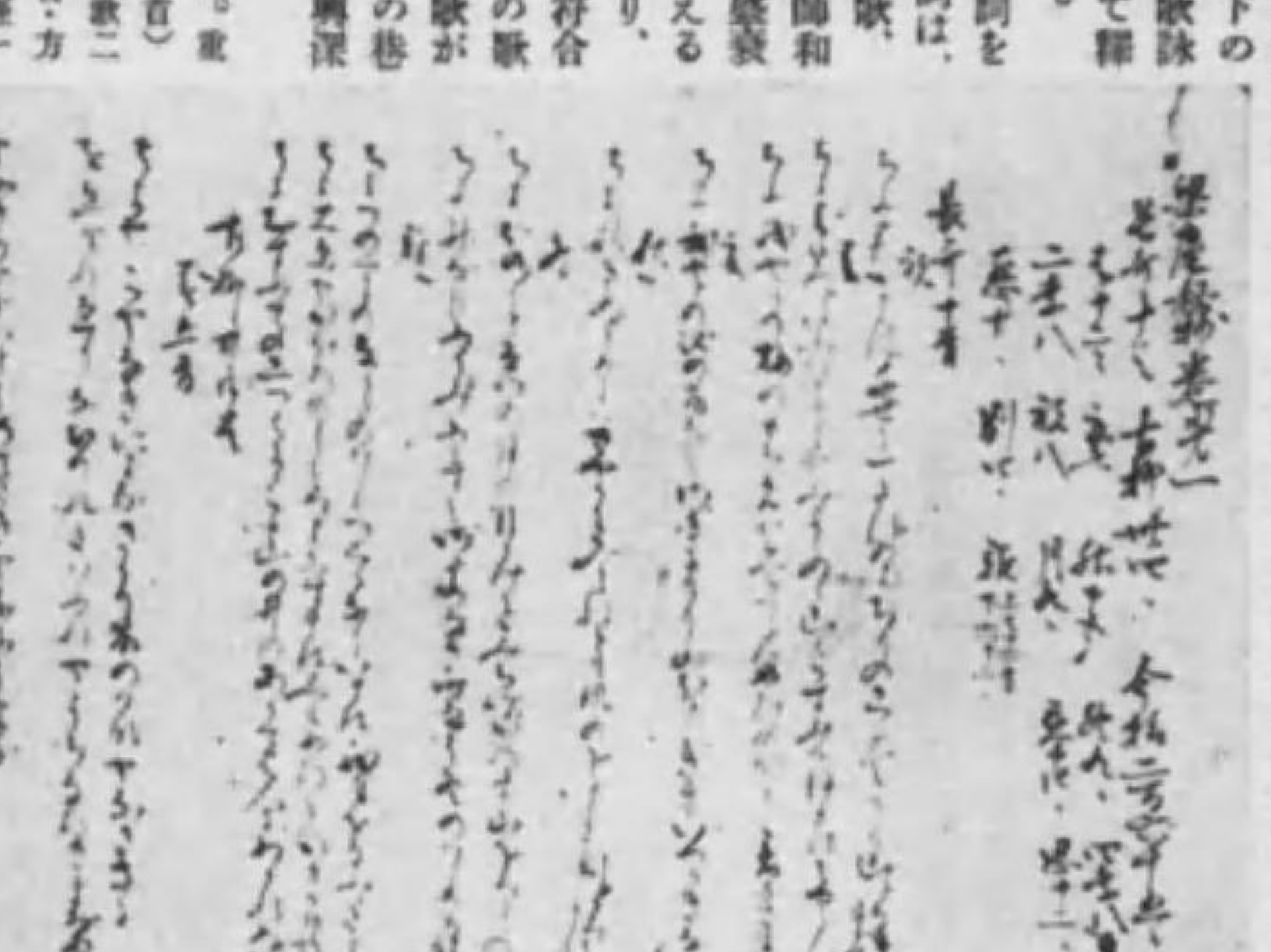
梁塵秘抄

歌謠集

【編者】後白河院（右記・八雲御抄）【卷數】「本朝書籍目錄」に「梁塵秘抄二十卷」と見える。但し「梁塵秘抄口傳集」（別項）は、卷第十で終つてゐるから、「梁塵秘抄」の正編として歌謠集十卷、別に口傳集十卷を合せて、總計二十卷としたものであらう。故に歌謠集の部分は十卷より成つたと思はれる。その中、卷一の抄出本と卷二の全部が今日傳存してゐる。但し、この卷一・二によつて類推すると、歌謠集を全部十卷としては尨大に過ぎる憾みがあるから、原本二十卷の組織は、今日想像されるところと異なつてゐるかも知れない。【諸本】現在傳はる卷二は、江戶時代の新寫で、歌に脫落があり、後に增補した歌があり、誤字脫字も多く、異本と校合し、註記した所もあるので、他にも本書の寫本はあつたのであらう。元來原本は、「文机談」（別項）に「梁塵秘抄」の納めてある御手筥は六條殿の御文庫に納められた由を記し、六條殿は後白河法皇の御所で、屢々火災に罹つたから、或は燒失してしまつたのであらうが、「徒然草」にも「梁塵秘抄の郢曲」と見えて（橋經亮の「橡窓自語」にも、伏見宮家に傳へられた「梁塵秘抄」の謠ひ物の部には催馬樂の事が書いてあると記してゐる）、後世にまで傳存したのである。寂蓮手跡本で正徹の門下正韵が奧書を書いた本の轉寫本が和田英松博士によつて發見せられ、今竹柏園の所藏となつてゐる。越後國頸城郡高田の室直助平手壽舊藏、村岡良弼氏の舊藏本で、今二册の册子となつてゐるが、もとは一册本であつたのであらう。これが唯一の傳本である。卷一の抄出本は綾小路子爵家所藏の卷子本で、「口傳集」卷一の斷簡と合し、もと袋綴三枚の本であつたと見える。室町時代の寫本らしい。大正元年に和田英松博士・常盤大定博士・佐佐木信綱博士の解說を加へて刊行せられ、更に大正十二年、考證・釋言・翻譯・實考等の附錄を加へて增訂刊行せられた。昭和七年の改訂版には、更に諸家の考說によつて脚註を付し、解釋に資した。その他、列聖全集御撰集第二卷・日本歌謠集成卷二・國歌大系第一卷・岩波文庫にも入り、國文東方佛敎叢書の文藝下の今樣四百首にも取られ、釋敎歌詠全集第一卷には、註釋を付して釋敎歌の部分だけが收められた。

【內容】平安朝末の雜藝の歌詞を分類集成したもので、その歌詞は、「狹衣物語」に出てゐる琵琶の歌、惠心僧都の作と云ふ「天台大師和讚」の句、「古今著聞集」「源平盛衰記」「體源抄」「寶物集」等に見える今樣の歌と合致するものがあり、その他、古書に散見する所と符合する歌が數多く見える。現存の歌は佛敎や神社の信仰に關する歌が最多數を占めてゐるが、民間の巷謠と見える。野趣に富んだ感興深い歌も亦數多く散見する。

【目錄】卷二（實數五百四十六首。重出二首を除けば總數五百四十四首）〇法文歌（別項）二百二十首・佛歌二十四首・華嚴經一首・阿含經二首・方等經二首・般若經三首・無量義經一首・普賢經一首・法華經二十八品百十五首（實數百十四首、本文に記せる各品の歌數の合計は百十六首となる）・懺法歌一首・涅槃經三首・極樂歌六首・僧歌十首・雜法文五十首（實數五十一首）〇四句神歌（神歌發題）百七十首（實數二百四首）・神分三十六首（實數三十五首）・佛歌十二首（實數十一首）・經歌八首（實數七首）・僧歌十三首（實數十二首）・靈驗所歌六首（實數九首）・雜八十六首（實數百三十首）〇二句神歌（神歌發題）百十八首（實數百二十二首）・雜（實數五十首）・神社歌六十九首（實數七十二首）。卷一（實數二十一首）〇長歌（別項）十首・祝一首・春二首・夏一首・秋一首・冬二首・戀三首〇古柳（別項）三十四首（實數一首）・春五首〇今樣（別項）二百六十五首（實數十首）・春十三首（本文には春十四首とあり）・夏七首・秋十五首・冬九首・四季八首・二季八首・祝八首・月九首・戀十四首・思十二首・雜二十首・別四首・雜（上七十六首 下六十二首）



梁塵秘抄卷一斷簡（高野辰之氏藏）

【價值】平安時代の雜藝に關しては、古書に散見するところが多いが、傳へられた歌は少かつた。然るに本書の發見によつて、五百首を超える歌數を加へ、雜藝の各種目に亙つて內容を明かにする事の出來たのは、文學史上のみならず、音樂風俗その他の文化史上思想史上に絕大の寄與をなしたものである。「枕草子」「源氏物語」等の註解にも本書によつて新しい資料を得る所がある。歌詞にも愛誦すべき優れたものが多い。本書の殘餘の部分は零簡斷片でもその發見は最も望ましい事である。【備考】本書と同じ內容の「雜藝集」と題する書が本書以前にあつた事は、「梁塵秘抄口傳集」卷十にも記し給うた所であり、「源平盛衰記」にもその名が見える。本書には恐らく「雜藝集」の歌が材料として取入れられてゐるであらう。「夫木和歌抄」には、本書に見えない「梁塵秘抄」の歌を載せてゐる。又「樂道類集」卷二十三所載の今樣の

海道下れば波高し、山道過れはすぐれて山きびし、ましてや北陸道は雪深かむなるものをや、いざさは、伊勢路にかかりなむ

の如きも、全く同調子の歌を本書の四句神歌の中に見出すことが出來るから、恐らくこれ等は「梁塵秘抄」の遺漏とも見做すべき歌であらう。（今樣參照）〔藤田〕

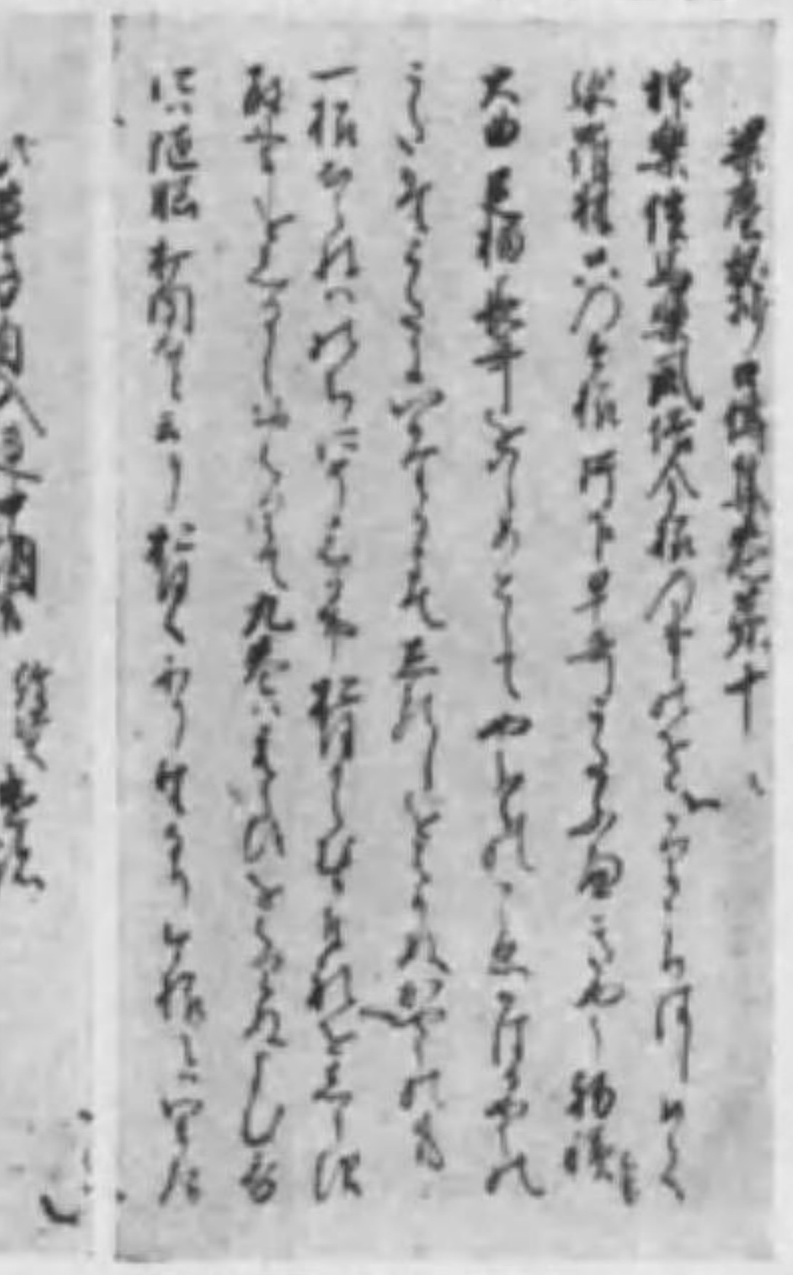
梁塵秘抄口傳集

雜藝書

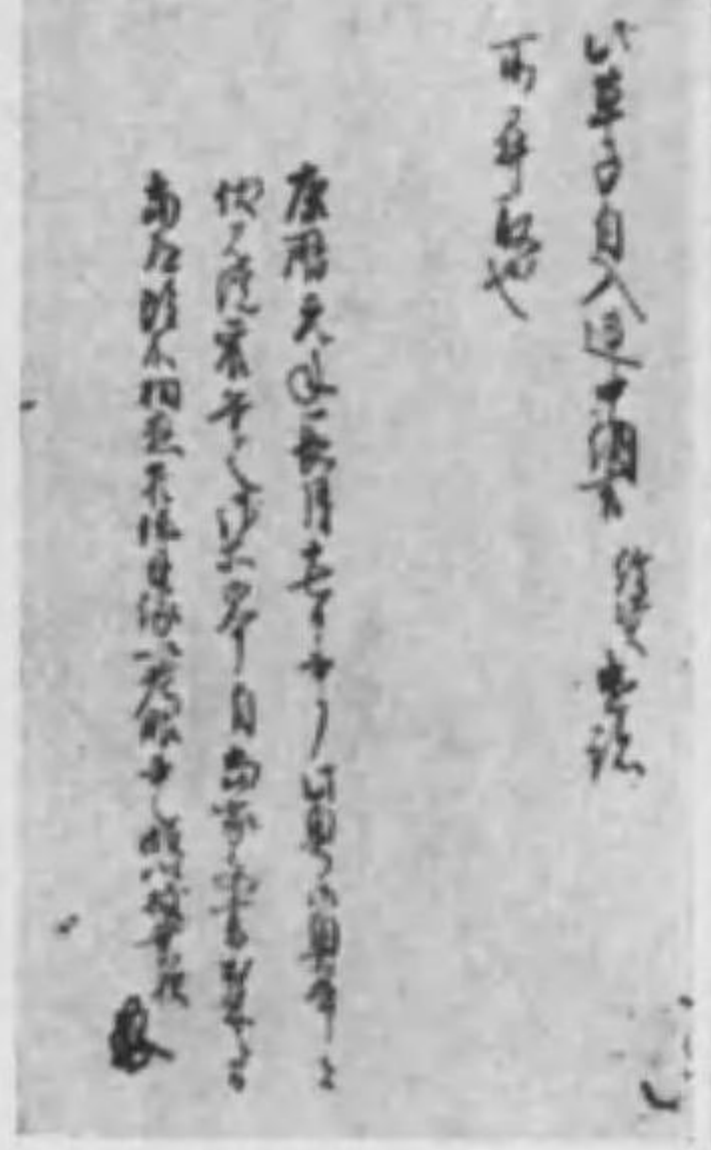
【著者】後白河法皇【成立】嘉應元年三月成る。後、治承三年以後、養和・壽永頃にも所々增補訂正を書き加へて完成せられたと見える。それは十卷の初めに「六十の春秋を過しにき」とあり、本文の終りの方には「我身五十餘年を過し」とあるからである。【傳本】「口傳集」の卷第一の斷片は、「梁塵秘抄」の卷第一の抄出と共に併せ記されて綾小路家に藏せられる。卷第十は妙音院師長の所持本で、九條師實に傳へられ、二條經定の預かれるを寬元四年に經定の師有資が寫し、更に有資の子經資より伏見院に獻上して、それより康曆元年に伏見宮榮仁親王の書寫せられたと思はれる奧書の存する寫本が唯一の傳本である。【諸本】寫本としては、卷一は綾小路家・佐佐木信綱博士・高野辰之博士に、卷十は伏見宮家・佐佐木博士・高野博士・和田英松博士に藏せられてゐる。刊本では、卷一は佐佐木信綱博士編の「梁塵秘抄」に收められ、卷十は群書類從管絃部に入り、更に兩卷とも日本歌謠集成卷二（卷一は複製版で載せた）・岩波文庫に收められてゐるが、これが最も善本である。【解說】今殘存してゐるのは、卷第十の全部と卷第一の初めの一小部分である。卷第一に於ては、我が國音樂の起原沿革を書き起したものと思はれる。それ以下、神樂・催馬樂・風俗・今樣より、沙羅林・只の今樣・片下・早歌の類・足柄・長歌・田歌等に至るまで、雜藝の故事口傳を書き記し、卷第十に於ては、著者御自身の音樂上の御經驗や當代の名人（傀儡女、法皇の門弟）等に就いて述べられたものである。もと和歌の髓腦・打聞の類あるに對し、今樣の類にはそれがないので、他類の「髓腦」に擬して撰ばれたものと云ふ。「梁塵秘抄」（別項）は即ち歌集であつて、それに對する髓腦の役目をするものが本書である。「梁塵秘抄」は、元來二十卷あつた（本朝書籍目錄）。而して本書は十卷で完結してゐることは、卷第十の內容が示してゐる。故に「梁塵秘抄」二十卷のうち、十卷がこの「口傳集」で、歌謠集が他の十卷を占めてゐると考へられる。また「梁塵秘抄」の歌謠の順序の如きも、本書に次第された順序とほぼ同一であつたらうと思はれる。【價值】平安朝末の雜藝や音樂に關す

る著書は可なり多く傳へられてゐるが、その中でも、雜藝（別項）の名手につき、最も具體的に且つ甚だ詳細に書き記してある點で、本書の右に出づるものはない。當代の遊女の名も多く見えて、風俗史の側からも好參考書である。雜藝の曲名の最も多く出てゐるのも本書で、その曲がいかなる性質のものか、多分に暗示を與へる所があり、種々の歴史的事實と相俟つて、音樂雜藝の研究上のみならず、歴史家にも多大の參考となる書である。若し十卷全部が傳へられたなら、この時代の音樂雜藝がいかばかり明瞭になる事か、測り知るべからざるものがある。

【撰者】「梁塵秘抄口傳集」卷第十一・卷第十二・卷第十三・卷第十四と記した音樂書が、四卷寫本として存する。卷第十一は、「郢曲抄」（別項）にかくの如き題名を附したもの、他の三書は、何れも後白河法皇の御撰でないことはその內容が示してゐる。それには、資賢の說が多く出で、また北院御室（守覺法親王）の著「絲管抄」もしばしば引かれてゐる。いづれも資賢の門弟の撰と見える。その中には、御撰の「口傳集」卷第十に縮撰して、後人の撰んだもの、或はみだりに音樂書にこの名を冠したものもあるであらう。但しこれ等も、御撰の時代より遠からざる時代に撰せられ、種々歌謠研究上に注意すべき記載が多く、甚だ價値あるものである。卷第十一には「次の卷に、さし聲ものめし仰せ言葉などを記し侍る」と見えるが、卷第十二にはその趣が見えないので、兩者別個の撰を、何人かがかく一部の書の如く仕立てたものであらう。卷第十四以下もあつたらしいことは、卷第十四に「是子細は次の卷に記し侍る、師長公の聞書の事なりと承傳ぬぞ」と記してゐるので察せられる。以上の本は全部、日本古典全集「歌謠集」上（志田延義校）及び岩波文庫「梁塵秘抄」（佐佐木信綱校）に收められ、寫本には綾小路家本・平松家舊藏本等がある。平松家舊藏本は後白河院御著の「口傳集」卷第一の斷簡及び同卷第十と共に、この「異本口傳集」卷第十一・十二・十三・十四があり、綜體で卷子本六卷で、最近佐佐木博士の手に歸した。他に高野博士藏に卷十二（卷子本）、和田博士藏に卷十二・十三（口傳集第十二とあり）・十四を併せた冊子本一冊がある。「橘窓自語」に伏見宮家に傳へられた「梁塵秘抄」を拜觀した由記してゐるのも、この種の「口傳集」であつたらうと思はれる。（藤田）

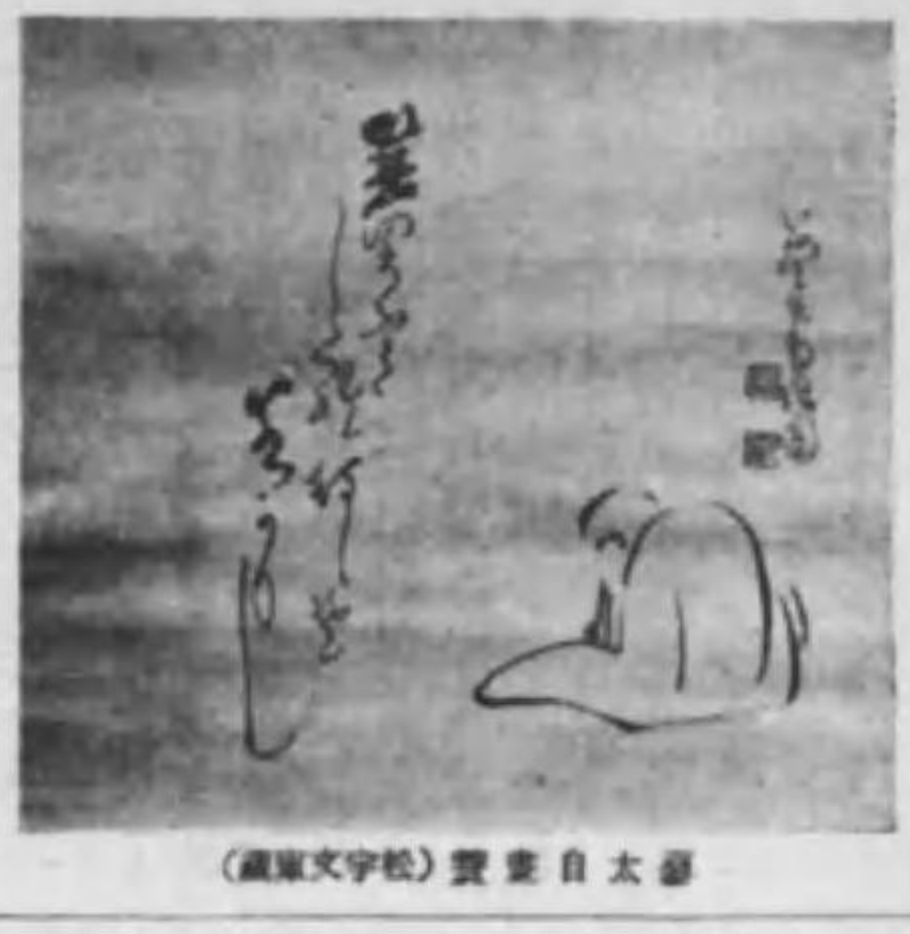


梁塵秘抄口傳集卷第十（名野圓之長藏）



同上奧書

蓼太 れうた　俳人【姓名】大島陽喬。本姓吉川氏。通稱平助（一說平八）【別號】雪中庵・里席・宜來・雪來・老鳥・老鶯巢【生歿】享保三年生れ（逆算推定）、天明七年（二四四七）九月七日歿す。享年七十（蓼太居士終焉記による。八十歲說は誤り）。【法名】雪中庵空阿蓼太居士【墓所】深川六間堀要津寺【閲歷】信州伊那郡大島の人（「十三條」による）。父が夙くから江戸に住んでゐたらしいので、彼も赤少時江戸に出た。一說には少壯家を出て幕屋平助と稱し、御用縫物師を勤めたといふ（俳諧人物便覽）がなほ明かでない。彼が自ら言ふところに據れば（松の嵐）、若い頃に一時隱遁の志を抱いたが、俳諧を好んでこれに心を紛らすやうになつた。併しなほ向上の一路を辿ることが出來なかつたが、偶々[illegible]老人から吏登（別項）のことを聞いて、その深川の庵を敲いて師弟の約をなしたといふ。「雪中庵傳灯記」に據れば、それは元文五年三月五日のことで、同年五月剃髮して空際居士と稱したといふが、若しこの說が正しいとすれば、彼が二十三歲の時である。兎に角寬保二年正月には、既に吏登の許に在つて七部集の講義を聞いたのであるから、遲くもその以前には入門してゐたことが明かである。延享元年には芭蕉の遺跡を訪ねて遠く松島象潟に遊び、莎青に翁の遺章を探じて「奥細道拾遺」を編させた。その後七八年間、或は須磨に暮れ吉野に明けて、多く行脚の間に日を送つてゐたが、寬延三年冬、師吏登も古稀の齡を迎へて隱退したので、彼に雪中庵を讓ることになつた。時に三十三歲である。かくて寶曆元年には、「續五色墨」の一人に加はり、又「雪おろし」を著はして江戸座一派に拮抗するなど、漸く俳壇に活躍し始めた。寶曆五年夏駿河に遊歷中、師翁の病變に驚いて歸つたが、吏登はその年六月二十五日遂に歿した。爾來江戸に於ける彼の聲望は益々重く、寶曆十三年十月、要津寺に佛塚を築いて芭蕉を供養した時の如きは、諸國から參會する者五百餘人、三萬六千餘句を手向けたといふから、その如何に盛んであつたかが知られよう。次いで明和八年四月、同じく要津寺に芭蕉庵を再興し、その再興供養と吏登の十七回忌追善とを兼ね行つた時の盛大な樣は、「芭蕉庵再興集」に詳かな通りで、當時彼は五十四歲、その門下には天府・葵心等の諸侯があり、祀堂料と句とを寄進する社中は殆ど全國に亙つた。その勢力は江戸は勿論、全國俳壇を蔽ふ概があつた。彼はかうした追善供養や華々しい句會等で世間的な名聲を博したのみならず、また屢々全國に杖を曳いてその勢力圏の擴張に力めた。東海道の往復は十九回に及び、白河の關を越えた事も二度あるといふ。そして駿河に時雨窓、遠江に七應庵、仙臺に喜定庵、その他月弓庵・大庾窟などを所々に結んで杖を留める便とし、又兼ねてその地方の社中の會所にした。江戸でも今戸の雪中庵の外、根岸に老鶯巢、稻荷堀に子規亭等があつて、自ら老を養ひ又人々を會させた。かくて一生の間東西南北の吟行三十餘度、集を編むこと二百有餘部、文臺を免す輩四十餘人、門人三千に餘る（蓼太居士終焉記）といふ大きな業績を殘して歿した。「ゆく秋や抱構かけておとし水」といふのが最後の吟で、自ら辭世となつた。【編著】彼は集を編むこと二百有餘部と言はれ、或は自ら手を下し、或は門人に筆記させ、或は校閲監修等の立場で世に公にした編著は實に夥しい數である。今その主要なものだけを年代順に擧げる。



蓼太自畫贊（松宇文庫藏）

○奧細道拾遺（延享元年、莎青撰）○秋の夜（延享四年）○雪おろし（寶曆元年）（別項）○花だんす（寶曆二年）○芭蕉句解（寶曆七年）○續其袋（寶曆九年）（別項）○七部搜（寶曆十一年）○無門關（寶曆十三年）○柳さがし（明和三年跋）○十三條（明和四年）○三物句解（明和五年）○鈍帶（明和七年）○芭蕉庵再興集（明和八年）○天狗問答（安永元年）○俳諧未來記（一名三時未來記、安永三年）○付合小鏡（別項）○三春日記○蓼砂歌（安永四年）○住吉千句（安永元年）○七柏集（別項）○筑波紀行（天明元年）○墨水南岸行（天明二年）○採荷集（天明三年）○百羽搔・武藏野三歌仙（天明三年）○一夏百句（天明五年成、同七年刊行）○發句小鑑（天明七年）（別項）。なほその他の著は、「十三條」に多く擧げてあるから就いて見るべく、又句集には門人の編した「蓼太句集」（別項）がある。

【俳風・史的地位】蓼太は元來瞑想的な詩人肌ではなく、活動的な實際家であつた。隨つてその作品も高踏的な藝術の香よりも、大衆的な通俗味の方が多かつた。彼が四方の吟行三十餘度に及ぶといふのも、芭蕉のやうに一簑一笠の姿で、靜かに山水の間に魂を浸さうといふのでなく、駕籠に乘り供を連れ、到る處に歡迎の宴を張り、句會を催すといふ有樣であつた。三間柄の駕籠を飛ばして顯貴の門に出入し、豪華な屋形船を泛べて墨水に遊ぶといふやうな行跡に徴しても、彼が如何に俗つぽい人物であつたかは知られよう。奧の細道を辿つて芭蕉の遺草を拾つたのを初め、或は「芭蕉句解」「七部搜」「柳さがし」「無門關」の類を撰び、或は佛塚を築き芭蕉堂を再興したのなども、勿論凡てが名聞のためとは言へないが、その大部分は名を得んがためであつた事が窺はれる。だが、かうして盛んに芭蕉に復らうとする意を示したのは、時代の趨勢を見るに敏であつたといふべく、而もかうした仕事は必ずしも彼のみでなく、闌更や曉臺などもやつた事ではあるが、彼はそれを自家勢力の擴張手段として、最も有效に用ふる實際的の才を十分に持つてゐた。この機を見るに敏なのと經營の實際的手腕とは、相俟つて彼を名實共に當代の大家たらしめたのである。彼が白隱禪師の膝下に丹田を練り、寶曆九年冬免許された（續俳家奇人談）といふ事にも、その人物の單なる小才子でなく、しつかりした實行力に富んでゐた事が見られる。彼は先づ從來の江戸座（別項）が奇僻に走り、穿ちに陥つてゐるのに對し、伊勢・美濃風（別項）の平明暢達な風調を探るべき事に着眼し、而もこれを蕉風復古の名の下に宣傳した。これは確かに江戸座の弊を衝いて大衆的歡迎を得べく、最も有效な策であつたに違ひない。そして遂にその事は成功した。隨つて彼の俳風は、等しく天明中興の一家と言つても、他の人々とは全くその行き方を異にしてゐた。即ち白雄・曉臺・蕪村・麥水等（各別項）が力めて平俗の調を排しようとするのに反して、彼は却つてこれを迎へようとした。彼の作として汎く人口に膾炙する「むつとして戻れば庭に柳哉」「世の中は三日見ぬ間に櫻かな」「五月雨やある夜ひそかに松の月」等の作が、如何に俗受けする性質のものであるかを見れば、その傾向は推して知る事が出來よう。この五月雨の句の如きは、安永四年長崎に滯在中の淸人がこれを見て大に感じ、詩文を彼に贈つた事があるが、その時彼は「もろこしに見ぬ友ひとり初霞」と喜んでゐる。畢竟當時の群小に比すればなほ才氣の潑剌と取材の縱橫とに優れた所を認むるに十分であるが、既にその一家の格調を定める根本精神に高尙さを缺いてゐたのであるから、到底蕪村や曉臺等と同日に論ずることは出來ない。所謂中興の名家中最も下位に置かるべきものであらう。とは言へ、彼が多數の門人を養成し、許多の撰集を殘して雪門中興の實を擧げた點に至つては、當時の何人も追隨し得ない大業績で、歷史上の實際からこれを考察すれば、彼こそ所謂天明俳壇の大勢を動かしたものといふべきである。それが假令平俗に流れたにせよ、兎に角大衆を率ゐて或る程度の藝術的水平線にまで導いて行つた功績は、沒却する事が出來ない。特に彼の連句の技術に至つては、これを發句と同一視する事は出來ない。勿論それも或る程度の藝術的觀點によつて統制されてゐるといふのでなく、臨機應變の才に富む、言はば連衆といふ手腕であるが、その一句一句が江戸座風の奇警のみに流れず、能く前句の情に應じて變化の妙を極めてゐる。その圓轉滑脫の趣は、「天狗問答」「百羽がき」「七柏集」「住吉千句」等によつて十分窺ふ事が出來よう。

【門流】門人は三千と稱せられる程多いが、彼の歿後雪中庵四世を繼いだのは完來で、師の小祥忌には追善集「藤ごろも」を撰んだ。「蓼太居士終焉記」をものしてゐる。その他、主な人には松平天府侯・岡本素侯・安藤冠里侯・眞田菊貫侯・岩波午心・秦三睡・堀口沙羅・山村月巣・飯島吐月・川路宜芽・樹家弘・平尾則竹・大伴大江丸等がある。午心以下の人々は、いづれも天明期の俳壇に活躍した人々である。

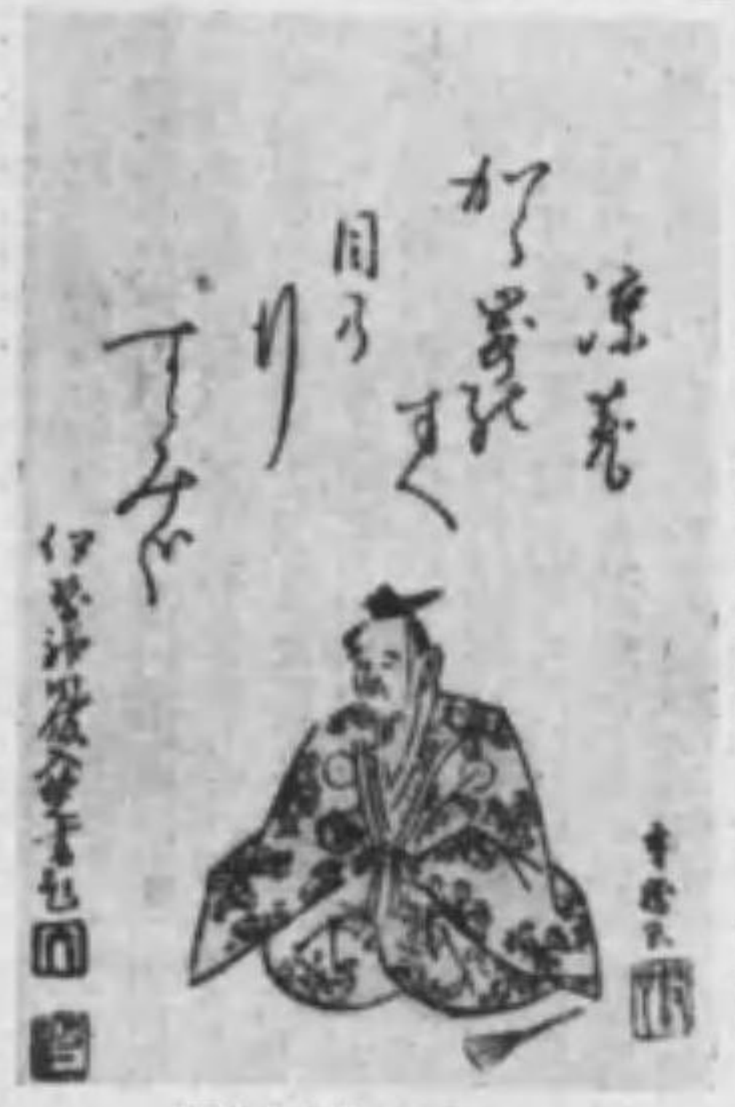
【参考】續俳家奇人談 ○蓼太全集（俳諧文庫）○大島蓼太の出身地に就て（鵜殿嶺雲 江戸時代文化、昭和三ノ三）○信濃と蓼太（小松玉人 石楠、昭和二ノ二）（潁原）

凉帒 りやうたい 「綾足」を見よ。

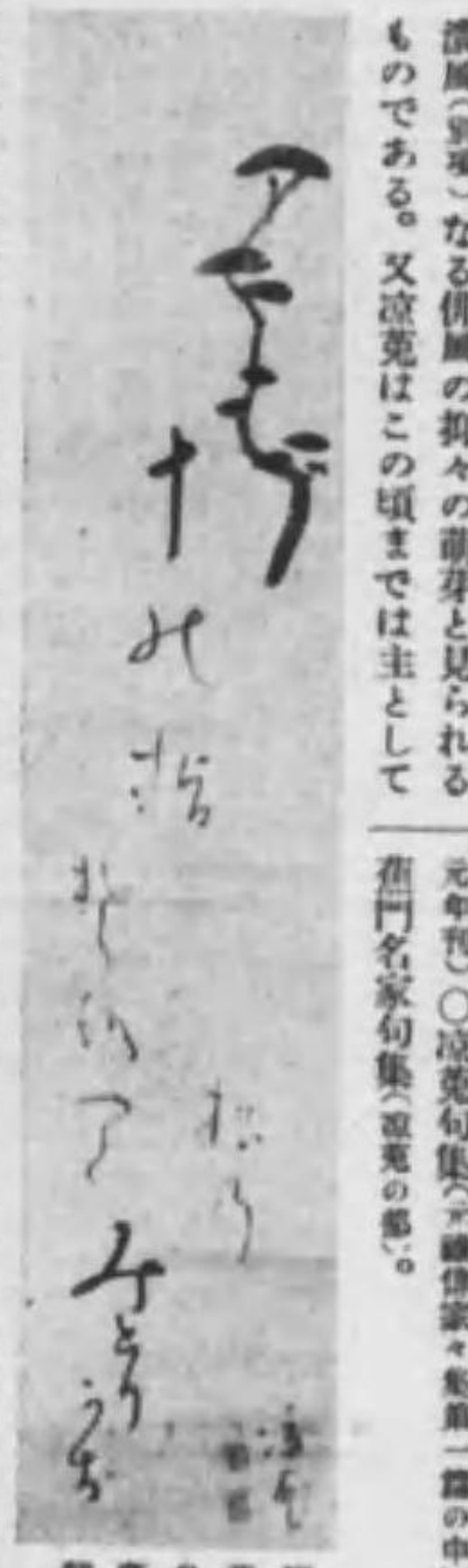
蓼太句集 りやうたくしふ　句集 二冊【著者】大島蓼太【刊行】安永六年六月の大田南畝の序があるから、當時の刊行であらう。【諸本】蓼太全集（俳諧文庫）・名家俳句集（有朋堂文庫）所收。【解說】雪中庵蓼太が自ら其句集を上梓しようと思つて、度々蓼太に其の事を乞うたので、門人吐月に託して編纂させたものである。月窓の跋文には「明和六丑の秋」と識してある

から、その頃から刊行を企てゝゐたものであらう。蓼太句集第二篇の序に、初篇は明和六年に梓行したやうに書いてあるが、上梓の運びになつたのは、蜀山の序文に「丁巳季夏蓼太請序其集」とあるので、安永六年なることは明かである。内容は蓼太の發句を四季類題別に集めて最後に東登を弔した「松の嵐」の一文を添へてある。元來蓼太は多作の方であつたが、本書編纂に當つては、「俳士に句の多きは硯に筆の多きに似たり」と言つて、句稿の十が一を與へたに過ぎなかつた。それで天明五年二篇が更に七百餘章を拾ひ、文章數篇を加へて刊行し、又蓼太の殁後寛政五年に、同じく三篇が第三篇を纂輯して全部三篇と成し、以て師の面目を遺漏なく傳へることに努めた。隨つて以上三篇を通覽して初めて蓼太の全貌を知り得る譯であるが、初篇は蓼太自ら嚴選したものであるから、以て十分彼を代表させるに足るであらう。　〔潁原〕

凉菟（りやうと）　俳人　【姓名】岩田正致。後、正雄と改む（雄は甫であるといふ）。通稱又次郎、後、權十郎と改む。【別號】團友齋・神風館三世。【生殁】寛文元年生れ、享保二年（二三七七）四月二十八日殁す。享年五十七（墓石を見られたらしい山田の山本勾玉氏の說に據る。「俳句の研究」所載）。【辭世】合點ぢや其曉の時鳥。また病中吟として傳へられるものに、「今までは人が病むぞと（イ死ぬると）思ひしに我が身の上にかくの仕合」の歌がある。【俳系】芭蕉門　【閱歷】伊勢山田の祠官であるが、系譜上の詳細は知られない。俳歷に於ては、貞享二年の伊勢の一有撰の「あけ鴉」（別項）に句の見えるのが初見であり、「皮籠摺」の其角序の趣から考へると、芭蕉の貞享元年の參宮の時に入門したらしくも思はれるが判然しない。芭蕉が元祿元年に參宮に來た時に對面したらしくも思はれるが、これも判然せず、兎に角凉菟は芭蕉生前には判然とした直接交渉の知られない人で、凉菟の俳壇に於ける活動は芭蕉殁後に屬してゐる。支考とは支考が元祿七年に山田にト居して以來親密となり、元祿十一年冬の「伊勢新百韻」は、團友（凉菟）一派に支考の加はつて試みた新調で、これが伊勢風（別項）及び美濃風（別項）なる俳風の抑々の萌芽と見られるものである。又凉菟はこの頃までは主として團友の號で諸集に現はれてゐるが、この翌年頃から主として凉菟の號で現はれるやうになつてゐる。「新百韻」の年の夏に江戶に出で、其角その他に會し、秋歸途に就き、大阪に木因を訪うてゐるが、木因とはこの後特に親密の間柄となつて行く。この東武行の時の收穫を主としたものが、翌年の「皮籠摺」である。元祿十六年には、乙由その他を伴うて北陸行脚をなし、「行脚戾」「山中集」（別項）が成つた。寶永元年には九州に下つたので、「潮とろみ」が成つた。正德四年には、上洛した脚を延ばして、曾北を伴うて越後まで到り、越年して雲鈴に會し、芭蕉の「奧の細道」（別項）の跡を踏まうとしたが、老驥の故を以て止められ、雲鈴に送られて歸郷した（其の若葉）。かくて翌享保元年、木因を訪うたのを最後の行脚として、その翌年病痾で殁したのである。【著作】皮籠摺（元祿十二年刊）○行脚戾（元祿十六年刊）○山中集（別項）（寶永元年刊）○三疋猿支考共撰（同年刊）○はだか鳥嘗前中律凉菟共撰（同二年刊）○同跡追（同年刊）○中やどり（同年刊）○潮とろみ（同三年刊）○あさかり（正德四年刊）○新凉菟句選近江主人補選（寬延元年刊）○凉菟句集（元祿俳家々集第一篇の中）○蕉門名家句集（凉菟の部）。



凉菟（芭蕉堂歌仙圖）



凉菟自筆短冊（松宇文庫藏）

【人物・作風】「潮とろみ」の紀行の條に、「團友のぬしは、筑紫見むと茶づけからすぐに又いつもの無分別に得手の帆をひらき、汐風に帽をあらひて」（樂及）とある如く、無頓着なところがあつたらしく、「誹諧世說」に載せる「凉菟花を尋ね肥前に至る說」は、全くこれに基いてゐる逸話のやうに考へられる。猶は、「其の若葉」の中に、名古屋の風月堂主人夕道が「佗言て髭そりたまへ祭雨」と詠み掛け、凉菟が「あつくろし宗祇の旅も髭男」と答へてゐるので、髭男で而も不精髭であつたらしく、こゝにも無頓着さが考へられるが、「潮とろみ」の自序に、「吾肥大、一日步則三日倦、不ㇾ惟無ㇾ瓣情、身赤不ㇾ便ㇾ跋涉ㇾ也」と云つてゐて、而も度々行脚してゐるところに、彼に風雅を追ふ情のあつたことが推せられ、また奧羽行脚を諫止された所以もほぼ解せられるやうである。俳諧は元祿十五年の「花見車」には、「風俗（發句）は衣裳こそわるけれ、都にも江戶にもはづかしからず」とあつて、その俗談平話體を認めながら、作がすぐれたものとしてゐるところに、伊勢風の祖たる面目を窺ひ得るのであるが、かゝる作風が殆ど行脚をしないほどであつた乙由から、平俗に過ぎるものとなつてしまつたのである。

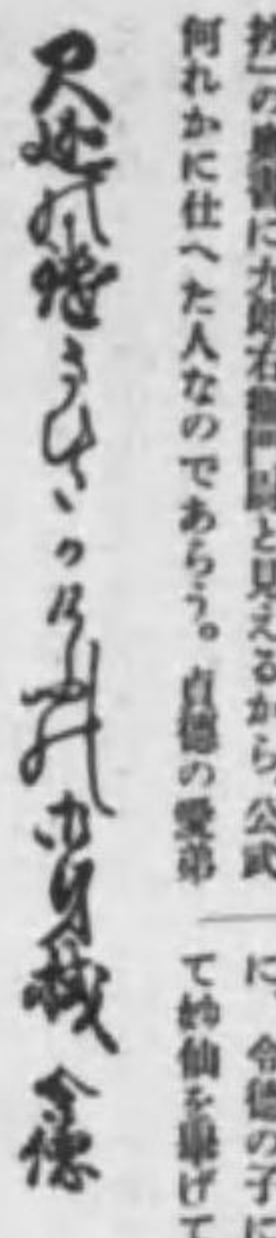
【神風館俳系】凉菟は神風館三世を嗣いだのであるが、神風館（伊勢久居藩主藤堂任口の命名といふ）は、山田の神官で談林派の俳人であつた足代民部弘氏（俳號雪堂）の男弘員（俳號胡來）が二世を嗣いだのであるが、凉菟は同じ神官の關係で三世を嗣いだものらしく、凉菟以後は暫く凉菟・乙由の系統でこれを嗣ぎ、以後連綿と續いて、明治の十七世西村穩雨まで至つたのである。俳統を擧げると次の如くである。

一足代雪堂―二同胡來―三岩田凉菟―四世木曾北―五中森梅
路―六雲故―七何樂―八鈴木入楚―九松尾洗刊―十足代弘臣
―十一野營十大―十二矢井木兆―十三岡尾兵高―十四小林秋水―十五猫
田只青―十六杉木馨兆―十七西村穩雨（明治三十八年歿）

【參考】其あかつき（殁年追悼集）門人○此あかつき（五十回忌追善集）大巒○花見車轍士○風俗文選作者列傳許六○蕉門頭陀物語涼袋○誹諧世說蘭山○俳家奇人談玄々一○蕉門諸生全傳曰人○俳林小傳先久○俳諧人物便覽若海○浪化と凉菟河東碧梧桐（俳句の研究）○凉菟の句に就て一碧生（同上）○鬼貫凉菟淡々翰木素朗（俳句講座俳人評傳篇）　〔志田〕

兩都妓品（りやうとぎひん）「兩巴巵言」を見よ。

令德（りやうとく）　俳人　【姓名】鶴冠井氏。初め良德、後、令德と改む。明曆二年後西院天皇御即位遊ばされ、天皇御諱を良仁と申されたので、これに憚つて良を令に改めたのであると云ふ。通稱九郎右衞門。【別號】陀隣軒・梨柹園。【生殁】天正十七年生れ、延寶七年（二三三九）殁す。享年九十一（殁享年は「滑稽太平記」に據つた。「誹諧家譜」には延寶二年三月七日殁、六十八歲とあるが、後述の元和元年歲旦三ツ物筆寫の事實から考へると、年齡が合ひにくいものになる）。【俳系】貞德門　【閱歷】京都の人。「天水鈔」の奧書に九郎右衞門尉と見えるから、公武何れかに仕へた人なのであらう。貞德の愛弟子の一人で、貞德の元和元年の歲旦三ツ物を筆寫した書面があると云ひ（藤井乙男博士貞門俳諧史）、寬永六年に貞德が西武（別項）のために開いた妙滿寺の會席にも加はつてゐるので、貞德の故參の門人の一人で、且つ早く西武と共に鍾愛を得たものと思はれる。されば其の後貞德から、貞德自ら俳諧の式法等を說いた「天水鈔」（寬永二十一年の奧書がある）を與へられた（貞德奧書）。その後貞德は令德に「崑山集」（別項）を撰せしめたのであるが、同集は西武に撰せしめた「鷹筑波」（別項）、貞室に撰せしめた「玉海集」（別項）と共に、貞門の代表的な三大集で、又正式が「崑山を前集とし、玉海を後集とせり」（玉海集序）と云つてゐる如く、「玉海集」と姉妹篇をなすものでもある。「崑山集」は杜撰な點もあつたので、立圃系の池田長式が「馬鹿集」を著はして本書を非難し、特に貞德の非を打ち、著者不明（但し同人か）の「馬鹿集追加」（一名嘲難書）も出たのであるが、杜撰は杜撰として令德の功も沒し難い。この非難書兩書合册が、明曆二年正月に刊行されてゐるので、同年令德の出した「土器集」（寬山土器集とも見える）は何等かこれに對してなす所あつた集らしい（傳本知られず）。「滑稽太平記」に、或る時令德が獨吟千句を作つて貞德に添削を乞ひ、貞德から守武以後最初であるとの眞名の奧書を與へたとあるが、事實は分らぬ。令德は一家共に俳に遊んだ。「誹諧作者名寄」（別項）に、令德の子に令富・令淸を擧げ、令淸母として妙仙を擧げてゐる。併しこの外に「鷹筑波」に見える鶴冠井淸右衞門良次があつて、これが長子で早世したものらしい。「鷹筑波」にはなほ鶴冠井善四郎良忠があつて、これも一家か一族であらう。令富（令富の貞享五年歲旦帳の柱書に「れうとみ」とある）・令淸は、共に天皇の御諱に憚つて改名した方の名らしいが、令富は「花見車」によると元祿十五年なほ八十餘歲で長命してゐるやうである。妙仙尼は令淸の母としての後妻らしいが、貞門の女六俳仙（別項）の一人である。【著作】崑山集（別項）（慶安四年刊）○土器集（明曆二年刊）○歸直集○親炙○誹諧四十餘年○良薬集（はいかい袋所載）。



【人物・作風】貞德に對する態度から考へると、實直な人であつたらしいが、その代り融通の利かぬ人であつたらしく、それが作風の方でも窺はれるやうである。「貞德永代記」（別項）の良德傳に、「一生貞德に隨つて古風をまなべり。誹體かすかにして、はじめおはりたしかならず」とあるが、大體こんな作風であつたらしく、長命であつたに拘らず、晚年は殆ど消息を絕ち、貞門の遺老として俳壇の落伍者となつたものらしい。「崑山集」の自敍に「眞句（連歌の句）のごときを好めるは、家に鼠のあるに異ならず」と云つてゐるのは、貞門の「をかしみ」を本道とする論として不思議はないが、「俳はこれ俳、俗はこれ俗、また能は能、狂言は狂言、其道〳〵に似合〳〵の言葉こそよろしかるべけれと、古傳宗鑑もしるせり」と云つて、珍らしく宗鑑の遺語を引用して、俳諧は俳諧に似合はしい言葉なるべきことを根據づけ、貞德の所謂「誹言」の說を肯定するものの如くであるが、宗鑑の意は恐らく連歌に對して俳諧が革新的であるべき意味に於て云つてゐるものであらうことを、令德はただ俳諧は俳言たるべきものとの固定的の意味にのみ解して、俳諧は俳諧として進化すべきものなる點を閑却するもののやうである。その俳歷も手傳つて、貞門の七俳仙（別項）の一人に選ばれてゐるが、畢竟令德は貞德の古風に因はれ過ぎた作者と云へよう。【參考】誹諧作者名寄朝江種寬○貞德永代記中島隨流○滑稽太平記北條團水○綾錦菊岡沾凉○誹諧家譜平川丈石○はいかい袋大伴大江丸○誹家大系圖生川春明○俳家奇人談竹内玄々一○俳諧人物便覽三浦若海○馬鹿集藤井紫影（藝文昭和七ノ七・八）○貞門俳諧史藤井乙男（俳句講座史的研究篇）　〔志田〕

兩巴巵言（りやうはしげん）　洒落本　一册　【作者】擊鉦先生　【名稱】色邑の事を敍し兩字共に巴に从ふ故、兩巴と命名したと劈頭に斷つてある。【刊行】享保十三年　【諸本】洒落本大系第一卷所收。【解說】伊勢伊達郡和氣邑の大人先生、好原に赴き千客萬來の繁昌を見、更に遊女の名をその類字に依つて集めてゐる。例へば千歲・千里・千代野・千代花・玉川・玉鳥・玉野・玉井・玉村・玉葛など。さて殘る限なく見物し終り、今是昨非を悟つて去らんとしたに終つてゐる。一種の吉原繁昌記で、全體の筆致が後世の寺門靜軒著「江戶繁昌記」（別項）に似た漢文である。本書は吉原細見（別項）の一篇として吉原圖・遊女名寄・揚屋名寄・茶屋名寄と併せ揭載された書があり、更に漢文のこの書だけ獨立した別本を成したのである。本書を洒落本と見做したのは、江戶時代からであつて、既に洒落本評判記たる「花折紙」（別項）に本書を頭取部に編入してある。併し本質は漢戲文の吉原繁昌記で本格の洒落本ではない。ただ本書から「百花評林」（寬延四年）の如き和文漢文を混同した書が出で、更に「異素六帖」「遊子方言」（各別項）と兩大純粹の本格洒落本に展開した痕を見る時、本書が洒落本の過渡時代の產物であり、洒落本が漢學者の餘戲より發達した事を證する一好資料である。なほ本書と「西都妓品」とを合册とし、吉原・島原の細見を併せ載せ「兩都妓品」と稱して刊行された。但し「兩都妓品」には「西都妓品」と「史林殘花」（別項）とを合刻した別本が存する。後者は享保十八年刊、前者は刊年未詳。　〔山崎〕

兩部習合神道（りやうぶしふがふしんたう）　神道　【別

名】御流神道・三輪神道【名義】兩部習合神道は、單に兩部神道とも云ふ。兩部とは、眞言教理の金胎兩部によつて得たる名である。源慶安曰く、「兩部習合の事、宗祇による。所謂金剛界・胎藏界に從つて建立する所の神道たるによる。金胎を以て兩部の名を得たり。傳敎弘法以來と雖も、本學聖德太子兼淨兼用の神道也」（兩部神道口訣鈔）と。【由來】慶安はかくの如く兩部神道を聖德太子に基づき、空海によつて建てられたものとするも、山王一實神道（別項）が、最澄によつて建てられたと云はるゝのが疑問であると同樣に、これも亦疑問である。併し空海の經歷を見ると、最澄の場合と同樣に彼が兩部神道の端緒を起したと見るのは、決して不當ではない。卽ち彼は弘仁七年奏し請うて高野山を開き、金剛峰寺を建つるや、同山鎭座の丹生津姫命、佛敎弘通を翼贊し、己れを守護せらるゝものとし、「地主山王聖護を約す」と云つてゐる。又彼は全國の靈社と目せらるゝ多くの神社の神祇を勸請し、毎日各々一社を別ち檀主となし、佛法を護し、伽藍を守らるゝものとした。かゝる彼の企圖は遂に彼の後繼をして兩部習合神道を完成せしめたのである。【敎義】眞言敎理では、體・相・用の三大を建立し、一切萬象を解決せんとするのである。所謂體大は地水火風空識の六大で、これを萬象の實體とし、前五大を胎藏界とし、識大を金剛界とし、前者を色法とし、物質的現象を統べ、後者を心法とし、精神的現象を統べ、前者を理とし、後者を智とし、以て六大無碍、金胎一致、理智も色心も二ならずとし、これを一元に歸し、毘盧舍那の法體とし、大日法身如來の本體としてゐる。この一元の差別界に現はるゝを相大とし、その活動を用大と云ふのである。この大日如來を國常立尊とし、以下の諸神を諸佛に習合したのである。殊に伊勢の兩宮を金胎兩部に習合せんとし、內宮の女神におはすは胎藏界に當るも、外宮も亦豐受毘賣神で、女神なるは金剛界に合しないので、その祭神を天御中主神と主張し、而して「天地麗氣記」の豐受大神宮鎭座次第に於て、豐受大神宮、金剛界とし、神號天御中主尊と號じ、更に進んで金胎一致、色心不二の敎理を兩宮に應用し、「天御中主尊亦ノ名豐受皇太神、天御中主尊、亦ノ名天照坐皇太神」と說き、更に兩宮兩部不二、三世常住の神に坐す也。理智の形に應じ、天照大神、豐受大神に座す。これ兩部の元祖、佛法の本源也」（豐受皇太神繼璽記）と說いてゐる。

【影響】兩部神道は、眞言宗の隆盛と共に、中古以後大に行はれ、天下の神社の大部分はその範圍に歸したのである。この神道は、又御流神道と稱せられた。そは高野山の輝潭の著「神道見聞集」によれば、嵯峨天皇が特に空海を召して、神代相傳の神道を傳授せられたので、御流と稱したと云はれてゐる。兩部神道は又三輪神道の名の下にも行はれた。これは大和の慶圓上人が、三輪明神から傳はつたと云ふのである。

【參考】天地麗氣記　○兩部神道立派口訣鈔○御流神道傳授聞書　（田中（義））

綠蓑談　政治小說【著者】須藤南翠【刊行】明治十九年十月（前編）。後編はそれから一年半ばかり後れた。なほ本書は最初「雨窻漫筆綠蓑談」と題したもので、表紙には"Political Novel"と記してある。そして明治二十一年六月に菊判二冊として再刊した分は、「雨窻漫筆」を「總世寶鑑」と改め、且つ發端として「雪の下萠」一章を書き加へ、挿畫も全部取替へてある。明治二十三年、第三版を出した時は合本一冊とした。

【梗概】毎朝新聞主筆山田文治と辯護士中島博智等は、「政社」なるものを設立し、中央集權の弊を矯め、地方自治制を振興しようと計つた。その趣旨に共鳴した越山卓一・齋藤孝等は故鄕越後に赴いて、地方自治の精神を鼓吹し、且つそこに婦人矯風會を設立するに至るといふのが一篇の骨子である。それを彩るに春川伯爵の娘艷子と、伯の政敵となつてゐる中島博智との戀を描き、艷子は父に許されず、失戀して修道院の尼となり、神に一身を捧げると云つて、單身イタリーに赴く決心をする。折柄山田・越山・齋藤・中島等は、いづれも代議士に當選して、議場で地方自治制の必要を叫んだが、偶々或る外交上の事件から、日・西兩國の交際にもつれを生じたので、國會では議論沸騰し、この問題について、春川伯の娘艷子に戀せられてゐる中島のみが、ひとり外交問題について伯の意見に贊成して同志に背くに至つた。それが緣で伯から二人の結婚は許された。同時に中島は次第に政治上に於て春川伯に接近したといふに終つてゐる。中に毎朝新聞の山田主筆が過激急進の說をなしたので、一部の市民が怒つて新聞社を襲擊した事件や、隅田川のボートレースなどを挿み、賑かな場面を作り出してゐる。

【批評】本篇の題材になつたものは、リイバアといふ人の「自治論」である。中に自治の原理を說き、地方の困難を救ふには、地方自治を旺んにするより外に道がないといふ事を書いてある。彼はリイバアの說を小說的に補修したものに過ぎぬ。ただ作者が中央集權の勢が強くなれば、地方勢力が衰弊するに至るから、地方自治を振興せねばならぬとし、率先農村問題に觸れたところに一つの意義がある。なほ中島と艷子の戀が、當時新しいと思はれた自由結婚などを點綴したので、一般の歡迎を受けたのであらう。　（高須）

綠野園隨筆　隨筆　一卷【著者】川口長孺【解說】水戶藩の儒者たる著者の國史・古俗・儒學史その他の事項に係る隨筆で、史談が最も多く、鎌倉合戰、小栗判官、太閤朝鮮征伐、太閤毛利征伐等の目があり、その他足利學校、程朱學傳來、儒者の東獎、茶獎・甘蔗・烟草・蕃薯、あみかさ・作りひげ、衣裳の錦襴標等の諸目についての考說凡て三十條。卷頭に卷之一として、その下に「文化八年辛未八月四日起筆、官事鞅掌無暇、同十月晦此卷稿記畢」とあるが、卷二以下は脫稿しないで止んだものか、今傳はる所はこの一卷のみである。序跋もない。

【著者小傳】川口長孺。字は嬰卿、綠野と號し、水戶藩の儒員であつた。「臺灣紀事」「征韓偉略」等の史籍を著はして有名である。天保六年歿す。享年六十三。　（和田）

呂旋　「調子」を見よ。

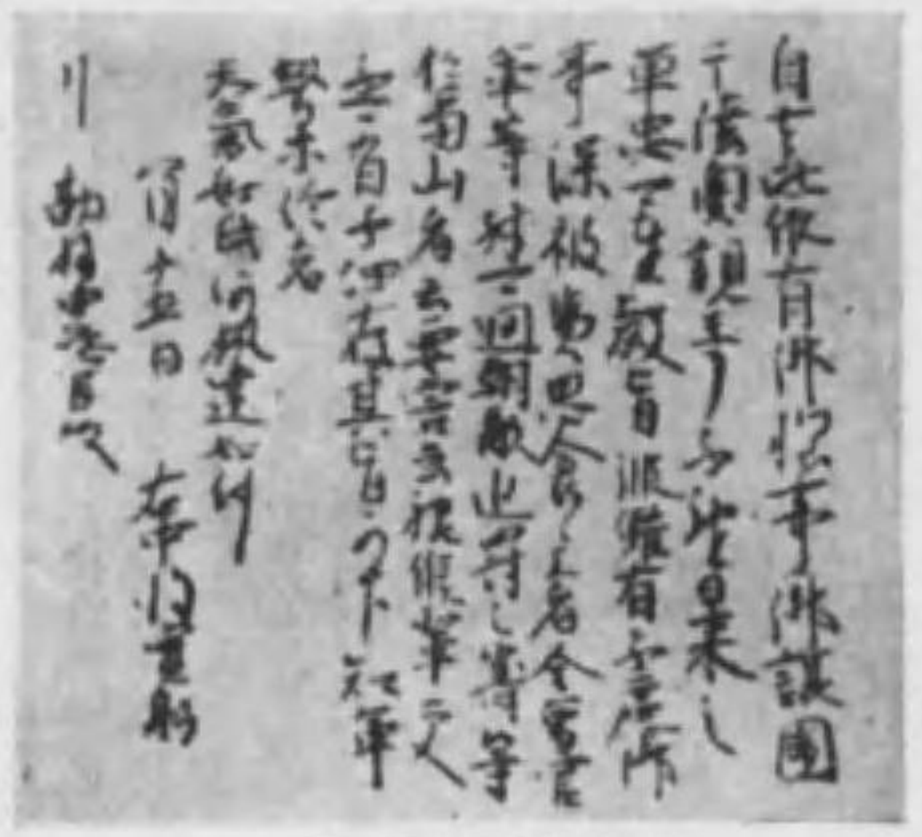
林歌　雅樂舞曲【名稱】林歌の字義未詳。大槻如電は林鐘調の歌の意かと言つてゐる。「臨河」とも書く。【性質】高麗樂。新樂、小曲。高麗平調曲に屬す。この曲は催馬樂（律）の老鼠の歌に合つてゐる。舞があり四人で舞ふ。舞者は特殊な紫袍に鼠の摸樣の附いたのを着、特別の甲をかぶる。答舞には「甘州」を用ひるが、又他の多くの左舞と組合はされることがある。【沿革】「樂家錄」には、高麗笛師下春が催馬樂の老鼠の歌を詠うた後にこの曲を作つたと記してあるが、「體源抄」には兵庫允玉手公頼が作つたとしてある。何れが是か不明。なほ「藝苑日渉」にはこれを印度樂とし、婆須密多といふ比丘が竹園間に遊行し、樹に緣つて上下し、獼猴の如く、或は三鈴を旋し、那羅戲を作つた。これは竹林間で歌つたのであるから林歌といふと述べてゐるが、印度樂でないことは、樂舞の態から見て直ぐに判る。本邦の製作であらう。　（田邊）

林下集　歌集　二卷【作者】藤原實定【名義】仲田顯忠の校訂本の附言の中に、「林下の語は毛詩周南の篇にはじめてみえて、その外唐文にはいとおほかめり。但し白氏文集閑居の意をいへる詩、林下幽閑氣味深などいへるをや思はれけむ。もしくは大將にていまそかりし比えらび給へるにや。さらば羽林のもとてふ意にや。さるは、はのはやし云々てふ歌にて卷をとぢめ給へるなど思ひあはすべし。さらずは古今集の序にいへる林にしげきこのはてふ語もて、林の下にかきつめたるこのはになづらへてやなつけ給ひけむ」とある。【諸本】仲田顯忠の校訂本奧書によれば、原本は應仁の亂に紛失した後、慈照院相國（足利義政）の所持の本を申し請うて寫し得たもの、不審多端であるが、これを更に法眼空實が傳寫したといふ。仲田氏校本にも「誤寫、脫文いとおほくて不審多端なるものから、又異本もなければ校正せむよしもなし」とあり、他に傳本もないやうである。刊本には仲田顯忠の「林下集標注」二冊がある。天保十一年十二月二十三日の自序があり、本集の尾に拾遺として、諸集に見えて家集に所見なきもの計百六首を收めてゐる。所々に頭註を加へ、歌の諸書に見えてゐるものには、一々その集名を附してある。日本歌學全書第八編所收本はこの刊本である。【內容】春部五十九首、夏部二十九首、秋部五十七首、冬部四十七首、哀傷部百首以上を上卷とし、雜部五十八首（この哀傷部の第四十四首目「沈むとも云々」の前書ある歌以後は雜部に入るべき由、仲田顯忠・佐佐木信綱氏が、共に言つてゐる）、雜部二十九首を下卷とする。計三百七十九首を載せてある。その編纂の仕方が、同じ時代の他の家集の如く、百首・五十首歌合などを中心としないで、多くの贈答を含む點は珍らしいものである。

【作風】作者實定卿の生涯は、平家の沒落を中心として、あの大動搖を具さに閱してゐる。故にその歌に、時勢の變を傳ふるものの多きは當然であり、又俊成・賴政等の歌人との交涉もこゝに見られる。本集に載せられた歌は、ほぼ「千載集」（別項）の風格を感ぜしめるが、又福原遷都と交涉をもつ故かとも見られるが、西海を歌つたものの多いことも、海洋歌の少い短歌にあつては珍らしい事である。語調を平明にし、よく纖細なる歌をなす點、作者の歌の特質である。　（松浦）

輪鼓褌脫　雅樂曲【名義】輪鼓を舞すよりこの名があるものかと思はれる。「臨胡揮脫」とも。【性質】唐樂。新樂の小曲。太食調曲又は平調曲に屬する。昔は舞があつたらしいが、我が國には傳はらないか、又は傳はつて後に間もなく舞が絕えたものか、今は樂のみ傳はつてゐる。拍子二十三（只拍子）。【沿革】起原未詳。白石の「樂考」には「源順の說に、雜藝の中に輪鼓を弄する者ありと見えたり。然らばこの曲唐の舞輪鼓の類にや」とあり、又「大日本史禮樂志」には、「按、揮脫當作二渾脫一、杜甫詩集・杜陽雜編、並作二渾脫一、敎坊記曲名有二醉渾脫一、樂府雜錄鼓架部、有二羊頭渾脫一、渾脫蓋言二舞容一也」とあるが、これに對して最も明かな說明を與へたものは、村瀨栲亭の「藝苑日渉」に、「平調曲有二臨胡渾脫一、或作二輪鼓渾脫一、倭名類聚鈔曰、輪鼓形如二細腰鼓一、輪二轉於繩上一、然按、輪鼓渾脫未レ詳レ所レ由、臨胡蓋是輪胡之誤、輪胡蓋胡旋之伎、樂府雜錄曰、舞有二骨鹿舞胡旋舞一、俱於二一小圓毬子上一舞、縱橫騰踏、兩足終不レ離二於毬子上一」とあるものである。要するに唐の散樂なる輪鼓の舞伎が我が國に傳へられて、その伎は散樂又は田樂（各別項）の中に入り、その樂のみが分離して雅樂の中に入つたものではないかと考へられる。　（田邊）

綸旨　古文書【解說】職事藏人（藏人頭或は五位藏人）が勅旨を奉じて書いて出す天皇文書。堂上・地下・社寺・武士等に、莊園所帶關係の事柄、勳功の賞等に用ひられ、室町時代頃には日常の小事にも濫りに出された。その樣式は私文書たる公卿の御敎書の式に據つたもので、一種の御敎書である。


後醍醐天皇綸旨

被　綸言偁、………………者、
綸旨如此、悉之以狀、
月　日　　官銜（名或は花押）奉
謹上　某官殿

書出の例文はこれなき場合多く、書留の例文も、「天氣如此、悉之以狀」、「依　天氣執達如件」、「綸言如此、悉之、謹狀、某頓首謹言」、「天氣所候也、仍言上如件、某誠恐謹言」、「天氣所候也、以此旨可令申入給、仍執達如件」などの如く、當事者の關係に依り、異同がある。また文體は普通往來體であるが、時に漢文或は假名交りの文體のこともある。なほ綸旨の料紙は宿紙（薄墨紙、紙屋紙、反魂紙などともいふ）が普通であるが、往々白紙の場合がある。その小形のものを小綸旨と云ふ。　（伊木）

隣女晤言　隨筆　二卷【著者】釋慈延【名稱】書名は開卷第一の顯昭の歌の意から出てゐる。【刊行】享和二年【解說】歌人として名ある慈延の隨筆で、「伊勢」「源氏」「桑華」等の古典及び「萬葉集」以下諸歌集等の中の難解の詞等を釋し、又歌話・古事談等を交へたもの。卷一に六百番歌合顯昭の寄衾戀の歌、杜、擢麥、擬死、鍛冶等八十七項、卷二になをらひ白酒、黑酒、佛名の野臥、愛のたは、禍は口より、渡宋天神等六十七項を收め、卷一の末には契沖の「河社」中の考說を批評した數十則がある。「河社」を讀む者の參見すべき書である。享和二年門人櫟見演の序がある。奧附に「後編嗣出」の豫告があるが、實行に及ばなかつたやうである。　（和田）

輪藏　「佛說物の謠曲」を見よ。

輪臺　雅樂舞曲【名義】輪臺國の樂の意。【性質】唐樂。新樂、中曲。盤涉調曲に

屬する。四帖（拍子十六）。舞があり二人で舞ふ。舞人は常裝束。「青海波」（別項）と組合はせて行ふ。即ち「輪臺」を序とし、「青海波」を破とする。その答舞には「敷手」を用ひ、時として「納蘇利」（別項）を用ひることがある。【沿革】輪臺國の樂が支那に傳へられたもので、唐代には輪臺の舞があつた。我が國への傳來は不明であるが、初め平調の曲として傳へられたのを、仁明天皇の時勅に依つて盤涉調に改め作つたのであるといふ。なほその時、大納言良岑安世朝臣が勅命によつてこの舞を作り、和邇部太田麻呂が樂を作ると「敎訓抄」にあるが、これは恐らく改作をしたことを稱したものらしい。（田邊）

輪廻 りんね　連歌・俳諧【解說】長篇の連歌俳諧に於て、相連接する三句の間に於ける掟としていふもので、即ち連接する三句中、その第一句と第二句との連接も、第二句と第三句との連接も、別に不可なる點はなくても、第一句と第三句との間に近似した所があるのを嫌ふのである。例へば、前句に雪を賦し、附句に「時しらぬ富士の嶺」などと置き、この句に氷室を附ける時は、雪と富士はよく附いてゐ、富士と氷室ともよく附いてゐても、氷室と雪とは指合（別項）になる。これを輪廻と稱して連歌俳諧に於て嫌ふのである。輪廻といふ語は佛語から出てゐることは云ふまでもないが、連歌の方では、「知連抄」「應安新式」（各別項）などに見えるのがその古いものであらう。良基の「大原野千句注文」にも、「今時の連歌は、あまりに輪廻して句體珍しからず。仍て應安新式目に唯少し記せり」と云つてある。

【遠輪廻】遠輪廻は、一度附けたのと相似寄つた附方は、數句を隔てても一つの病犯としてこれを避ける掟である。例へば、前句に花があり、これに「尾上の朝霞」などと附けた時は、後數句を隔てても、花の句に「霞の明け渡る」などと附けるのは、霞が重複するから、これを遠輪廻と名づけて避くべきものとするのである。（福井）

林邑樂 りんいふがく　雅樂舞曲【名義】林邑國の僧佛哲が我が國に傳へたもの故、この名がある。【性質】雅樂舞曲中の一部門、全部で八曲ある。即ち菩薩（沙陀調）・拔頭（道調、今は太食調）・迦陵頻（壹越調）・倍臚（平調）・安摩・二ノ舞（共に壹越調）・陵王（沙陀調、今は壹越調）・胡飲酒（壹越調）・萬秋樂（盤涉調）（以上各別項）、いづれも舞がある（但し菩薩舞は今滅びてしまつた）。これ等の舞は「萬秋樂」を除き、他はすべて特異なる裝束を用ひ、また「菩薩」「拔頭」「安摩」「二ノ舞」「陵王」「胡飲酒」（各別項）は、何れも異樣の假面を用ひる。その舞方も唐樂及び高麗樂とは大に異り、印度樂舞の趣を示してゐる。【沿革】これ等の曲は、いづれも印度の古い佛敎樂舞であつて、天平八年に林邑國の僧佛哲（Fattriet）が印度僧婆羅門僧正（Bodhisena）と共に來朝して後にこれを我が國に傳へ、天平勝寳元年、大佛慶讃會にこれを奏し、その後益々盛んに行はれ、朝廷の雅樂寮の中に、唐樂・三韓樂と相並んで、林邑樂師の制が定められるに至つた。仁明天皇の頃、樂制の改革が行はれるに及び、これ等の林邑樂は多少改作されて、唐樂と合して左方樂の中に納められるに至り、以て今日に及んでゐる。これ等の印度古樂舞は、既に今日印度に於て全く滅亡してしまつたが、これが我が國に殘存してゐることは、歴史上頗る貴重なる資料であると言ふべきである。（田邊）

林葉累塵集 りんえふるゐぢんしふ　歌集　五冊二十卷【編者】下河邊長流【刊行】寛文十年。契沖全集（朝日新聞社出版）中の長流全集に所載。【內容】當時の和歌一千三百餘首を春・夏・秋・冬・戀・雜・雜體の部門に分類して載せた私撰集で、長流自身の作百五十餘首を載錄してゐる。雜歌の中には、離別・羇旅・哀傷・釋敎・神祇・賀の部等に入れらるべき歌を含んでをり、雜體には、物名・長歌を載せてゐる。自序にも述べてゐる如く、堂上派歌人の詠を斥けて、民間の作を集めた彼の革新的態度がうかがはれる。而して當時すでに故人となつてゐた長嘯子の「擧白集」（別項）の歌を推重して、特にこの歌集に加へてゐる。この歌集を編むにあたり、同じ歌を載せないために「古今集」より以後十五六代の集、また古い物語や古い家集の類まで見渡したと言つてゐる。又自分等の死後、勅撰集の編まれる場合には、この集から一首でも撰んで貰ふことは、せめてもの慰みであるといふ意味の言葉を洩らしてゐる。この歌集に對する意氣込みと抱負とを知るべきである。【價値】彼には、歌集「晩花集」（別項）があるが、歌人としてよりも、彼の業績は近世の革新的な學者の魁として重んずべく、「萬葉集管見」（別項）その他の著書がある。古歌を編輯したものとして「續歌林良材集」があり、當時の和歌をあつめたものに、本書及び九年後に撰した「萍水和歌集」がある。堂上歌人等に滿足してゐられなかつた彼の革新的な歌觀は、歌論史上注意せらるべきである。又この撰集を魁として、この後民間に於て種々私撰集の編まれる傾向を誘致されたことも、忘るべからざる一事である。（藤川）

林葉和歌集 りんえふわかしふ　歌集　六卷二冊又は一冊【作者】俊惠【名義】俊惠は居宅を歌林苑と號した。依つて自他の歌を集めて「歌苑抄」と稱したのに對し、自らの歌を集めて「林葉」と稱したのであらう。【諸本】群書類從二六八所載本・內閣文庫所藏本（二冊寫）・圖書寮所藏本（一冊寫）等があるが、共に同系統のものである。殊に內閣文庫本は和學講談所舊藏本で、類從本の原本と推定される。奥書は治承二年のものと、常德院（未詳）本を以て書寫する旨のものとがあるが、前者は俊惠自ら記すところであらうと考へられ、召に依つて注進する旨が記されてゐるので、本集の成立は大略推定される。

【解說】部類を春・夏・秋・冬・戀・雜・別・羇旅の八に分ち、春以下戀までを五卷とし、雜以下を第六卷とし、內閣文庫本は卷三までを上冊としてゐる。歌の數は一卷一九〇首、二卷一五三首、三卷一七六首、四卷六六首、五卷二八三首、六卷五八首、合計九二六首。このうち左肩に點を附けたもの凡そ二五〇首、右肩のもの凡そ九〇首、點のないもの凡そ五六六首である。俊惠の奥書に依れば、左點は和歌會の當座に於て、又は後日に於て人々が聊か感心したもの、右點は撰集幷に打聞等に撰入されたもの、無點は沙汰に及ばないものであるが、本集を召されるに當つて、歌の多いことを忌まれたので注進したとある。但し點歌の計算に於て、本集の奥には左一五八、右七五、無四三七とあつて現存本とは一致しない。載せられた大部分の歌は、諸所の歌合で詠んだものであつて、平安朝中期以後の歌人の集に見る如く、作者の生活が反映することは少い。（西下）

る

類形美 るゐけいび　「美的模倣」を見よ。

類柑子文集 るゐかうじぶんしふ　文章俳諧集　上中下三卷三冊【著者・編者】寶井其角遺稿。貴志沾洲・大目秋色・稲津青流共編【名稱】略して「類柑文集」とも、又「類柑子」ともいふ。【名義】編者の跋中に、其角が「秋葉の五味を喩で類柑子と名づく」とあるが、柑子の味に五味ありと見、五味にも等しい本書の內容を柑子に類すると見たのであらうか。【刊行】寶永四年冬【諸本】蕉門十哲集（俳諧文庫）・名家俳文集（俳諧叢書）・元祿名家句選（俳諧大系）・其角全集（勝峰晋風編）所收【由來】編者の跋に依ると、其角が編輯を終へずして寶永四年二月に歿したので、嵐雪・秋風・沾洲・青流が集つて、彼此の反古を取集め、秋色が前後を纏合せ校合して一集となし、これに追悼の篇什を添へて上梓したのである。【解說】上中下三卷のうち、上中二卷は遺稿で、下卷は追悼の卷である。遺稿の部は、各種の題を置いた文章と發句連句で、文章は「あけぼの」以下二十七篇あつて、俳話と稱すべきもの、感想文と稱すべきものなど樣々であり、これに其角及び一派の發句が附せられてゐる。これ等文章の部を終つた後に、文章中の題を取つた十數篇の連句と外に發句があり、最後に「守武千句」（別項）の跋が附せられてゐる。この跋は、山田の反朱の許に守武の眞蹟のあるのを凉莵をして聊か違はず寫さしめたものであるとの後註がある。文章の類材は、古人に關する事や、知友に關する事や、一家及び自己に關する事や、俳諧に關する事や、種々樣々であつて、或は感興を以て讀まれ、或は貴重な資料となるものがあるなど、雜駁な中に其角の才人たることを想はせるものがある。これ等の中特に注意すべきものは、文章の部及び連句發句の部に跨つて見られる赤穗義士に關するものである。下卷の追悼の卷には、最初に百之の鷄合の句合開催の趣を述べた漢文の序があつて、鷄合の句合三十五合、次に青流記の「晉子終焉記」、嵐雪初め諸家の追悼句、追悼百韻等があり、最後に編者沾洲・秋色・青流連名の跋があつて終つてゐる。鷄合の句合は鷄合に關する句を合せ、其角が加點をし、判詞を書いたもので、上冊「待宵」の部三十五合と、下冊「をのが音」の部三十五合と都合七十合となるものであるが、追悼の卷には、上冊の「待宵」の部のみを載せたので、下冊の「をのが音」の部は、「五元集」（別項）の利の卷として見られる。百之の序には、單に「公甚」とあつてその人を記さないが、一番の「さびしをり」によると、安藤冠里公の館で其角を判者として催されたもので、句合を見ると、七十合のうち十一合の外は、凡て冠里公の句に誰かの句を合せたものである。本書は特に其角の晩年及びその門葉周圍を知るに貴重なもので、其角研究には重要な地位を占めるものの一つである。なほ本書は、享保四年其角十三回忌に當り、秋色の持ち傳へた版木によつて再刻されたが、これには下卷末に更に冠里公の追悼句、追悼の歌仙一卷、遺弟等の追悼句及び水間沾德の跋が加へられてゐる。（潁原）

類聚歌林 るゐじゆかりん　歌集【著者】山上憶良【名義】歌を部類に據つて聚めた歌集の意である。【別名】「萬葉集」には「類聚歌林」と記すが、平安朝の末頃には「おくらが歌林」とも云つた（正子內親王家の繪合）。なほ武田祐吉氏は大日本古文書卷五の四七五頁に在る寫私雜書帳（正倉院文書）の中に、「歌林七卷」とあるは「類聚歌林」の事だとしてゐる（上代國文學の研究）が、單に「歌林」と呼んだかどうか、確實な傍證の出ぬ限り躊躇されるが、本書に關する重要な記錄（既に學者なども解說してある故）として注意しておく價値がある。【卷數】不明。但し萬一、右の正倉院文書中の「歌林」を、「類聚歌林」の事とすれば七卷であり、その量は用紙百二十八張と云ふから、甚しく大部のものではなかつたこととなる。

【傳本】本書の實物は鎌倉時代以後失はれて見ることを得ない。今は「萬葉集」に九ケ所、「正子內親王繪合ノ詞」中に一ケ所、「袋草子」に一ケ所、「八雲御抄」に一ケ所、計十二ケ所にその名の見える事によつて、その存在した事を間接に知り得る。（殊に「萬葉集」には、本書の一部をそのまゝ引用したところがあつて、それによつてほぼ本書の內容がわかる）。「萬葉集」の九ケ所は、卷一「軍王の讃岐國で作つた長歌・反歌の左註の中に一ケ所、同卷額田王の宇治の都の歌の左註に一ケ所、額田王の熟田津の歌の左註に一ケ所、中皇命の「吾が欲りし野島は見せつ」の歌の左註に一ケ所、額田王の三輪山の歌の左註に一ケ所。卷二では、卷頭の磐姫皇后の「君が行き」の短歌の左註に一ケ所。卷頭から第六首目に右の「君が行き」の類歌を出すその左註の文の中に一ケ所、同卷挽歌部の半程にある「哭澤の神社」の歌（國歌大觀番號二〇二）の左註に一ケ所。卷九の卷頭から第十首目の歌の左註に一ケ所。總計九ケ所である。何故、左註にのみ用ひたかと云ふに、この書を、卷一・二・九の編者が編纂の參考書として用ひたのである。即ち、卷一・二・九を編纂する折、原本となつた本に作者名の記してない歌が「類聚歌林」に作者を記してあれば「類聚歌林」の文を左註にあげる（卷二の最後の例、卷九の例）。卷一・二・九の原本に記す作者と「類聚歌林」に記す作者と相違する時に「類聚歌林」の說を參考のため左註にあげる（卷一の大部分）。その歌の成立に就て卷一・二・九の原本と相違する說が「類聚歌林」に見える場合（卷一の第二例）等である。なほ本書を參考としてゐる卷一・二・九は大伴家持以外の編纂にかゝる。次に「萬葉」以後の文獻は、後冷泉天皇の永承五年「正子內親王繪合ノ詞」に、「おくらが歌林とかいふなるより古萬葉集まではこころもおよばず、古今後撰こそあをやぎのいとくりかへしみれどもあかず云云」とあるものである。「古萬葉集」とは今云ふ「萬葉集」のことで、この「繪合ノ詞」によつて「萬葉集」にも劣らず「類聚歌林」の尊重された樣子が知れる。次に、「袋草紙」卷一に「萬葉集昔ハ所レ在稀云々。而俊綱朝臣法成寺寳藏本ヲ申出ノ書ニ寫之。其後顯綱朝臣又書寫ス。自レ此以來多流布ノ至ニ于今ニ。在ニ諸家ニ云云。山上憶良類聚歌林一本書也。在ニ同寳藏ニ云々」。これによつて、源平時代迄はこの書は法成寺に確かに藏せられてゐたのである。次に、四十年足らず下つて「八雲御抄」卷一に「類聚歌林、山上憶良撰、有ニ平等院ニ云云。通憲說也」とある。これ以後本書の名が記錄にない。【成立】不明。併し「萬葉集」に引用されてゐるうち最も年次の新らしいものは、卷九雜歌部の大寳元年太上天皇（持統）・天皇（文武）が御一緒に紀伊に行

幸された折の歌十三首のうちの第七首の左註に、「右一首、山上臣憶良類聚歌林曰（下略）」とあるものである。憶良の死んだのは、聖武帝の天平五年だつたと推察されるから、「類聚歌林」は、文武天皇の大寶元年から天平五年までの足かけ三十五年の間に成立してゐなければならぬ（大寶元年は、憶良が遣唐小錄となつて入唐した年）。何の目的で、我が國最初（人麿歌集も一部分は類聚風であるが、全部ではない）と云ふべき類聚式の歌集を編んだものか、恐らくは支那の詩集に刺戟されたものであらう。而してこの書が人の見るのを豫想して作られたことは、「萬葉集」卷一に引く本書の文を見れば明かである。或は「日本紀」を引き、或は一書（今日よりは不明の書）を引き、作家や歌作の事情を考證してゐて、到底私の手控や覺え書きの類ではないやうである。「正子内親王繪合ノ詞」の中に、「萬葉集」の上に於て尊んであるのも、本書が完備した公的な著作だつた事を思はせる。

【組織・內容】全體の組織が同類同性質の歌を分類統一してゐた事は、書名によつて推察される。併し、實際に於てその全體の組織は「萬葉集」に引くものが、何れも斷片的であるために知る事を得ない。兎も角文武天皇頃から以前の歌謠を集め、これに作者や制作事情を記した文章を附帶させ、全體を歌の性質によつて分類したもののやうである。「萬葉集」に引く最も新らしいのは上記の文武帝の大寶元年であり、最も古いのは卷二の卷頭に引く磐姫皇后の「君が行き」の歌である。磐姫皇后は仁德帝の皇后だから、「類聚歌林」の歌の時代は、古いものは記・紀の歌謠の後半と相交はり、新しいものは「萬葉」の作品の古いものと出入したと斷定出來る。次に作者や歌作の事情を記した文章のあつた事は、卷一・二にこれを引用してゐるので明かであるが、これは可なり學者的考證的なものであつたと思はれる。それは、卷一・二に引用する「類聚歌林」の文章には「日本書紀」や一書（今日傳はらない當時の書物）を記し、又「書紀」や「萬葉集」の原本となつた本にはない天皇行幸や作者やに關する長い考證の文章が見える。かうした考證は當時及び後世から尊重せられたもので、「萬葉集」に本書の本文を長く引用するのもこの故であらう。卷二などでは「古事記」よりも重んじた扱ひ方をしてあるのも、この考證が正確で信用出來た爲めであらう。行幸の事情や作者等を文獻を以て證據立てようとしてゐる所は、著者憶良の人物を想見するに足りる。因みに、卷一に引く「類聚歌林」中の「日本紀」の內容が今傳はつてゐる「日本書紀」のそれと違つて居り、又歌の作者や歌作の事情が「萬葉集」の原本となつた本や「古事記」「日本書紀」等とは相違してゐる所から、古來學者中に「類聚歌林」を疑ふものがあり、契沖の如きは「山上憶良大夫は古の物知人とみゆるを此類聚歌林は總て誤多きを思ふに後の好事人憶良の名を僞り書し物なり」とまで極言してゐる。併しこれは、木村正辭博士その他、先人の論じた如く、「萬葉集」の原本の傳へとは、また別な說も當時あつたから、「類聚歌林」がそれを載せたのであつて、その「歌林」所載の說を「萬葉集」の編纂者も價値ありと認めたればこそ、その原文を引用までしたのである。本書に載する「日本紀」の事實が、今本の「日本書紀」と違ふ如きは、當時さうした「日本紀」の存在してゐたことを吾人に敎へて吳れる點で、卻つて貴重な資料ともなるのである。

【價値】「正子内親王繪合ノ詞」に、「萬葉」と併稱してあることや、又「萬葉集」中にこの歌林を引用してある部分の歌（卽ち「萬葉集」と「類聚歌林」とに重複して出てゐた歌）に額田王の熟田津の歌・三輪山の歌、中皇命の「小松が下の草を刈らさね」の歌等の優秀な作のある事などによつて、今日見るを得ない「類聚歌林」の作品には、藝術的に勝れた歌の多かつたことと思はれる。又卷一額田王の三輪山の長歌と反歌とは、「萬葉集」の原本では、ただ「額田王、下ニ近江國ニ歌。井上王卽和歌」としてあつて、額田王がいつ何のために近江に赴いたのか明かでないが、反歌の次に、類聚歌林曰として「遷ニ都近江國ニ時、御ニ覽三輪山ニ御歌焉」とあるから、近江遷都の時の御歌だと分り、歌の意味も趣も始めて了解出來るのである。卷二の編者（同時に卷一の編者であるらしいが）は、極めて「類聚歌林」を重く用ひてゐる。卽ち卷二の卷頭第一首「君が行き」の歌は「類聚歌林」の傳へた形を載せ、その作者も「歌林」によつて磐姫皇后としてゐる（此歌一所だけは、單に參考にしたのでなく、歌林を原本とし歌林からこの歌を採つたのでないかと思はれる）。而して五首あとに、參考のために「古事記」に載するこの歌の類歌と「古事記」の傳へるその類歌の作者（衣通王）とを記してゐる。これは官撰の「古事記」以上に、「類聚歌林」の重視されてゐた事を雄辯に物語るものである。

【參考】上代國文學の研究武田祐吉〇萬葉集書志同上　（森本）

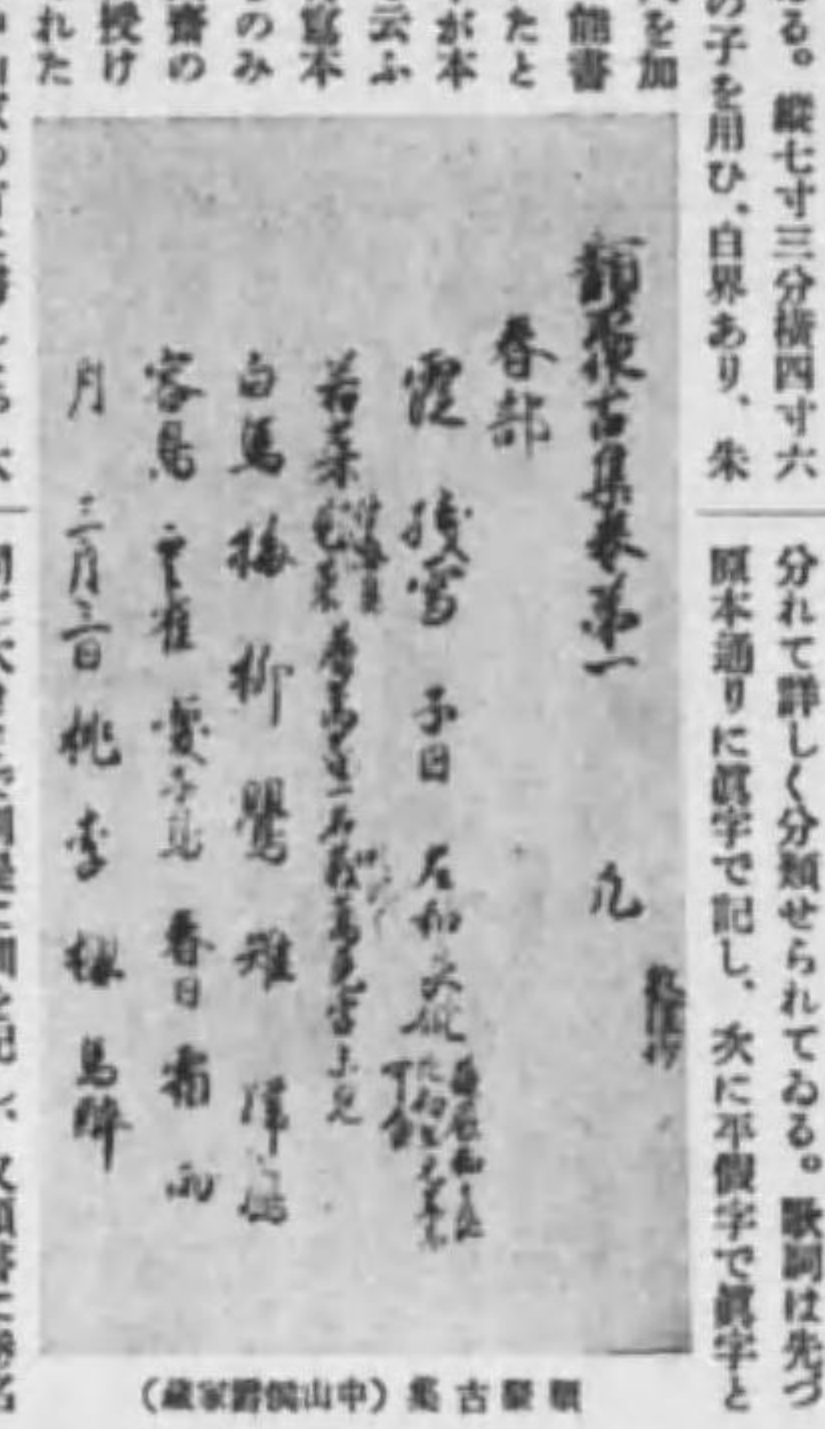
類聚近世風俗志　「守貞漫稿」を見よ。

類聚國史　歴史書　二百卷【編者】菅原道眞【成立】寛平四年五月【諸本】古寫本としては、石清水八幡宮・前田侯爵家・柳原伯爵家等の藏本が知られてゐるが、何れも完本ではない。文化十二年仙石政和が八種の寫本によつて校訂刊行した本も、集め得た卷數は六十一である。大正五年刊行の國史大系本は、その上に抄出本一卷を補つてゐる。

【內容】六國史（別項）の記事を分類彙集したものである。卽ち全篇は、神祇・帝王・後宮・人・歲時・音樂・賞宴・政理・刑法・職官・文・田地・祥瑞・災異・佛道・風俗・殊俗等の部に大別され、各部は又その中で數個の項目に分けられる。そして國史の記事はそれぞれの該當した項目に編年順に收載せられる。また同一の記事にして記事の性質上兩種の項目に載せられてゐる場合もある。さてこの分類の方法には、支那類書の體裁を參考としてはゐようが、我が國風を尊重し、これを根幹としてゐることも明かであつて、そこに編者道眞の識見を窺ふことができる。なほ「三代實錄」（別項）の完成は道眞の左遷後であつたので、本書中の「三代實錄」の部分のみは、後人の補入であると一般に考へられてゐる。【價値】本書は色々な意味に於て重要な價値を持つ。道眞の撰修の目的は恐らく政道の參考書とするにあつたものらしく、事實その後大に世に行はれて、「書紀」を除いた五國史は、それぞれの史よりは寧ろ本書を以て行はれた方が多かつたと考へられる。日記の世となつてからは、部類記が盛んに持てはやされるけれど、その淵源は恐らく本書にあらう。塙保己一の群書類從がその分類方法に本書の示唆を得てゐることも確かである。今日に於てもさうした本格的な意味に於て、六國史中事項の檢索に用ひられることは言ふまでもなく、更に六國史の缺文を補ひ、字句を校訂するためには、最も重要なる助力を仰ぐことができる。「日本逸史」（別項）が本書を材料の第一としてゐることは人の知る所である。

【參考】類聚國史考（寫）河村秀根〇類聚國史考佐藤誠實（史學雜誌二ノ五）　（坂本）

類聚古集　萬葉研究書　二十卷【著者】藤原敦隆（保安元年歿）【別名】「類聚萬葉集」「部類萬葉集」【諸本】中山侯爵家藏本は平安朝末の古寫本であるが、九・十・十八・二十の四卷を逸してゐる。縱七寸三分橫四寸六分の紙葉裝本で、烏の子を用ひ、白界あり、朱又は墨で、校合・書入を加へたところがある。能書四人の手で書寫されたと思はれる。この寫本が本書の唯一の傳本とも云ふべく、それよりの轉寫本が高松宮家に存するのみである。もと細川幽齋の所持本を烏丸光廣が授けられて同家に傳へられたのを、明治二十七年中山家の有に歸した。大正三年に帝國學士院の補助を得て全部玻璃版に印行せられた。【內容】「萬葉集」の長歌・短歌を題目上より分類したもの。卷一は春部で短歌二百八十一首、卷二は夏部で短歌二百十六首、卷三は秋部で短歌四百四十七首、卷四は冬部で短歌百十六首、卷五は天・地の部で短歌二百四十一首、卷六は山・水の部で短歌三百十三首、卷七は草・木・竹・葛・鳥・獸・魚・蟲の部で短歌三百十四首、卷八は財貨・衣服・器物・琴酒・居處・舟馬の部で短歌三百一首、卷九と十は雜部で上下であらう。卷十一は神仙・人倫の部で短歌二百三十六首、卷十二は慶賀・哀歌・餞別・寄物述別思の部で短歌二百五十九首、卷十三は羇旅部で短歌二百六十八首、卷十四は挽歌・寄物陳悲緒の部で短歌百九十二首、卷十五は有由緣歌・戯咲歌の部で短歌百二十一首、卷十六は東歌で短歌三百三十三首、卷十七は長歌の上で長歌百三首、卷十八は長歌の中であらう。卷十九は長歌の下で長歌九十六首、卷二十は旋頭歌の卷であらう。以上の如き組織より成つて居り、更に各部類の中が細目に分れて詳しく分類せられてゐる。歌詞は先づ原本通りに眞字で記し、次に平假字で眞字と同じ大きさで別提に訓を記し、又頭書に卷名を記した。歌詞の前に作者名があり、所々眞字書の歌詞の下に題を細字で記した。卷十二の終りの方だけは、訓を片假字で、眞字の次に小さく書き入れてゐる。【價値】原本が平安朝末の寫本なる點に於て、尊重すべきことは云ふまでもなく、歌數が豐富であるのも、「萬葉集」の校勘上大に有益である。本書によつて字句の誤脫の訂正される所が少くない。又その訓は、古點・次點（萬葉集參照）の古訓を傳へてゐるものとして注目すべきである。更にこの書は、萬葉學書として現存する最古の本であり、「萬葉集」を分類せる最初の書であるから、種々の點に於て、「萬葉集」研究史上最も重要なる地位を占める。



類聚古集（中山侯爵家藏）

【附記】本書の抄本に、「萬葉類聚」一名「萬葉緯抄」と題する一卷の本がある。「類聚古集」の短歌の眞字書を省き、假字書のみを抄出したもの。侍從長秀の奧書があつて相傳秘本と記してゐる。「古葉略類聚鈔」（別項）も同じ意味の書である。

【參考】類聚古集解說佐佐木信綱〇校本萬葉集首卷〇同諸本解說　（佐佐木）

類聚神祇本源　神道書　十五卷【撰者】度會家行【諸本】神宮文庫に寫本があり、續々群書類從には、井上賴圀氏の藏本を底本として收めてある。【解說】本書は、神道に關する和漢の諸書の樞要なものを抽出し、後學の規矩に備へんとしたものである。家行自身の思想としては、本書に特に現はれて居らないが、全篇を通じて「神道五部書」、或は「麗氣記」（各別項）等、伊勢神道に特殊の關係を有するものが多いので、本書は伊勢神道の寶典とも云ふべきものである。元應二年の序文があるから、當時に成つたもので、北畠親房の思想は、本書に負ふところが少くなかつたと思はれる。　（田中（義））

類聚雜要抄　有職　四卷【著者】未詳【諸本】群書類從雜部卷四七〇に收めてある。寛文十三年天和三年の奧書があり、新院御本（一卷は甘露寺親長筆、二卷は三條西實隆筆、三卷は實光（又は實定）筆、四卷は中御門宣胤筆）を中院家で寫したのを、更に菊亭家で再校した本であるとのことである。元祿年中、前關白一條兼輝、時の有職家御厨子所預紀宗恒に命じて第四卷の調度部を他の諸本によつて校訂して二卷とし、全部を六卷とし、兵部卿文仁親王が、元祿十七年四月十一日、これに跋文を賜はつたことがあつた。後、紀伊國新宮城主水野土佐守忠央が丹鶴叢書を刊行した時、この宗恒校訂の本の調度部二卷に、別に古代文樣一卷を併せて三册一帙とし、丹鶴圖譜としてその編外に收めた。圖樣大型の上に着色を施してあるので、斯道の研究家の間に尊重せられてゐる。國書刊行會本の丹鶴圖譜はこれを縮刷したものである。【解說】藤原時代に於ける公家の室內裝束・饗宴獻立・調度等に關して舊記を抄錄し、圖示したもので、藤原時代以降の公家生活を知るには最も必要な書である。卷一は齒固、行幸御帝御膳、聟取御前、母屋廂大饗、五節殿上饗等の指圖說明、饗座の獻立・調度の事を記し、卷二は寢殿室禮指圖、立ニ調度ニ例事、屏風室禮指圖、障子帳指圖、二階井厨子置物等事指說物次第香唐櫃所事、小野宮御裝束、同差圖事等を記し、卷三は五節雜事と題し、調度・理髮具・裝束よりその所用の調度類までを記し、卷四は母屋調度事、帳事、兩調度事、北廂具等を記し、二階厨子・香壺筥・櫛筥・染筥・造紙筥・枕筥・香爐・衣架・帳・犀角・鏡・鏡代・屏風・几帳・疊・茵・二階・火取母・泔坏・唾壺・打亂筥・脇息・硯筥・鏡筥・鏡臺・冠筥・香唐櫃・燈臺等の製作を說明し、これを圖示してゐる。　（石村）

類聚名義抄　語學書　十一卷【著者】菅原是善といふ說あるが疑しい。【別名】「三寶名義類聚抄」「三寶名義抄」「三寶字類抄」「三寶字類」「三寶字抄」「三寶類字抄」「三寶字類集」【成立】未詳。本書の內容に、「和名類聚抄」（別項）の影響を受けたと思はれる點があるから、平安朝の末期頃に出來たも

のかと思はれる。【諸本】古寫本四種ある。（一）觀智院本（京都市東寺觀智院所藏）は建長三年の書寫で、最も有名な本である。十一册（中一册は闕目）になつてゐる。近年貴重圖書複製會から複製された。（二）西念寺本（殘缺一册）。（三）蓮成院本（殘缺三册）。（四）嶋尾本。伴信友は觀智院本を寫して、これに西念寺本・蓮成院本を以て校合を加へて「校本類聚名義抄」（十一卷及び附錄一卷、文政三年成る）を作つた。その轉寫本が世に傳はつた。【內容】觀智院本によるに、全篇を佛法僧に分け（本書が三寶何々抄と三寶の名を冠されたのは、この分類用語から來たもの）、佛を上・中・下本・下末の四卷、法を上中下三卷、僧を上中下三卷に分ち、外に目次一卷を合せて十一卷になつてゐる。但し佛法僧の語は、內容には別に關係のないものである。本書は大體「玉篇」の組織に準じて、扁旁によつて漢字を類別し、人・イ・彡等百二十部に分けて漢字を出し、音は漢字の反切で、意義は所々漢文で、大部分は片假名で記してゐる（萬葉假名で示したものも少くない）。訓は特に力を注いだものらしく、多きものは十五六訓も列擧し、且つ點を附して清濁の別及び聲調（アクセント）を記してゐる。なほ漢字は、正字の外に俗字・別字・異體の字をも擧げてゐる。【價値】本書は平安朝に出來た古辭書のうち、最も注意すべきものの一つで、和訓のある漢和字書としては「新撰字鏡」（昌泰）に次ぐものである。その字書は、平安朝の字書研究には缺くべからざるものであり、その片假名は、假名の字體の研究に於て貴重な資料であることは云ふまでもない。が本書が古辭書としての特色は訓を多く集めたことで、古代の漢字辭書中この點で本書に及ぶものはない。これ本書が古代國語の研究に重要視せられる所以である。

【末書】類聚名義抄字訓索引一卷（寫）（伴信友編 文化十一年九月編成る。「類聚名義抄」の中から珍らしい訓や考證の參考になる注意すべき訓を拔き出して、五十音順に排列したもの）○類聚名義抄索語 九卷 小山田與清編。天保四年三月編成る。「類聚名義抄」の訓を凡て伊呂波順に排列し、その下に漢字及び扁旁を記したもの。自序の中に、觀智院本・西念寺本について考證し、製作年代を考へて「堀川鳥羽の御代より下れるものにはあらじ」と云ひ、本書の類書として「篆隸萬象名義」「字鏡集」（別本）「新撰字鏡」「平假名類抄」（別字）「倭玉篇」「悉曇要字記」などがあるが、そのうち「類聚名義抄」は最も大部なもので、且つ最古のものであると記してゐる）。　〔岡田〕

【參考】類聚名義抄について 岡田希雄（藝文一三ノ二・四・五・六・七・九・一〇・一一・一二・一四ノ一・二・三）○蓮成院本類聚名義抄考 岡田希雄（國文二〇ノ六・七ノ二）○觀智院本類聚名義抄の假名遣 [illegible]

類聚名物考 るいじゆうめいぶつかう　事彙【著者】山岡浚明（明阿）【成立】未詳【諸本】寫本で傳へられたが、近藤圭造が明治三十六年より三十八年にかけて刊行した[illegible]。【解說】和漢の書より事物の名目及び出典を抄出したもの。また自分の考をも附記してゐる。內容は天文・時令・神祇等に分類して擧げ、且つ卷首に[illegible]を附してゐる。　〔岡田〕

類集文字抄 るいじふもじせう　語彙書　現存一卷【著者】未詳【成立】室町時代の作であらう。本書卷末に「文明十八歲八月日寫畢 乙夜又丸」とある。【刊行】續群書類從卷八九〇所收。【內容】分類體の漢和字書である。現存のものは、下卷と思はれる零卷一卷である。（一）珍寶井農具部、（二）木類井竹部、（三）草部、（四）藤物井果部、（五）菜部、（六）舞樂器井雜部、（七）[illegible]部、（八）[illegible]、（九）巧工器井雜部、（一〇）文筆伏詞部、（一一）[illegible]、（一二）[illegible]、（一三）[illegible]、（一四）[illegible]、（一五）[illegible]物異名部、（一六）名字外氏姓部の十六部に分類し、漢字を擧げ、漢字の右に片假名で訓をつけてゐる。【價値】本書は室町時代に出來た古字書で、同時代に出來た「下學集」「撮壤集」（永祿頃）等と同じく分類體を用ひてゐるが、分類は本書が最も詳しい。その字訓は同時代の國語資料として見るに足る。　〔岡田〕

類書目錄 るゐしよもくろく　「羣書類從」を見よ。

類推 るゐすい　「音聲變化」を見よ。

類題發句集 るゐだいほつくしふ　句集　中本　五册【編者】五升庵蝶夢【刊行】安永三年三月京都橘屋治兵衞刊。【諸本】俳諧類題句集（俳諧文庫）所收。【內容】守武・貞德等の古人から當時の作家に至るまでの句を選び、十二ケ月の季題及び雜題別に類別したもので、題によつて句作しようとする初心者に取つては、最も重寶な座右の書といふべきである。凡例によれば季題の取捨及びその作例たる證句の選擇には、頗る意を用ひたものと思はれ、これより先、涼袋の「俳諧類題集」の如きものもあるが、なほこの種の書として句の選擇範圍汎く、體裁・內容共に完備したのは本書を以て嚆矢としてもよい。だから蕉門俳士必携の參考書として永く用ひられて來た。【影響】編者はその後、又「新類題發句集」五册（寛政五年七月刊）を撰び、當時の人々の句を類題別に收めて世に流布させたが、[illegible]

[illegible]（二段目切）、近江源氏先陣館（盛綱之段）、【卷之五】信州川中島合戰（輝虎配膳之段）、松風村雨束帶鑑（うつゝ物語之段）。　〔守隨〕

れ

靈異記 れいいき　「日本靈異記」を見よ。

靈化 れいくわ　〔英〕Spiritualization.「靈化」「擬人化」「人格化」を見よ。

靈氣記 れいきき　「天地靈氣記」を見よ。

禮儀類典 れいぎるいてん　有職　五百十卷・序目一卷・附圖三卷五百二十四冊【編者】徳川光圀【成立・由來】徳川光圀が「大日本史」編纂の傍ら安藤爲章を總裁とし、考勘十五人・書寫二十八人・校合十人・出納四人・檢索三人を置きて編纂せしめ、元祿三年秋に着手し二十年の歲月を費して成つたもので、右大臣今出川公規に依つて靈元上皇に奏進した所が、叡慮を悅ばせ給ひ、つて特に「禮儀類典」の題號を賜はり、且つ又朝廷の珍藏書千軼を御貸下げになつたので、光圀の孫綱條が更に增補し、寶永七年八月に至つて完成したものである。【解說】六國史（缺）以後の諸家の記錄二百五十六部の中から、朝廷の儀式・典禮に關した條項を拔出し類聚したもので、卷一から卷二百十五までは年中恒例の行事、卷二百十六から卷四百八十四までは臨時の行事・立后・改元・拜賀・即位・追討使・配流・御凶事その他の臨時の儀式、卷四百八十五から卷四百八十九までは詩・御會、卷四百九十から卷四百九十五までは歌・御賀、卷四[illegible]

許婚のお才は水右衞門を諫めたが聞かぬので自殺する。水右衞門袖助の立廻り。〔六幕〕（龜山家中大井屋敷）お松は愛に隱まはれる。袖助は岩淵萬五郎と稱して入り込み、わざと賴母の妻月の戸へ艷書。水右衞門も赤堀源吾となつて若黨に住み込む。（奥庭）賴母は源吾を水右衞門と見顯はし、殿へ推擧せんとて衣服を着替へさす。〔大詰〕（龜山城下）賴母の計らひで、源次郎・お松・袖助は首尾よく水右衞門を討ちとめる。

【脚色】惡の權化水右衞門を中心に、善人の亡んで行く順序を描き、その間に早替りや淨瑠璃の技巧も加へ、凄味あり滑稽あつて、しかも首尾一貫してゐる脚色振りは、他作者の同材曲と比べて高く傑出してゐる。惡型專門の幸四郎を水右衞門・八郎兵衞に扮せしめて、思ひ切り歌舞伎式の趣を發躍せしめた點が痛快である。部分としては燒場の凄味を一等とし、貞心尼は武士の後室らしき母性愛を巧みに描いてある。〔渥美〕

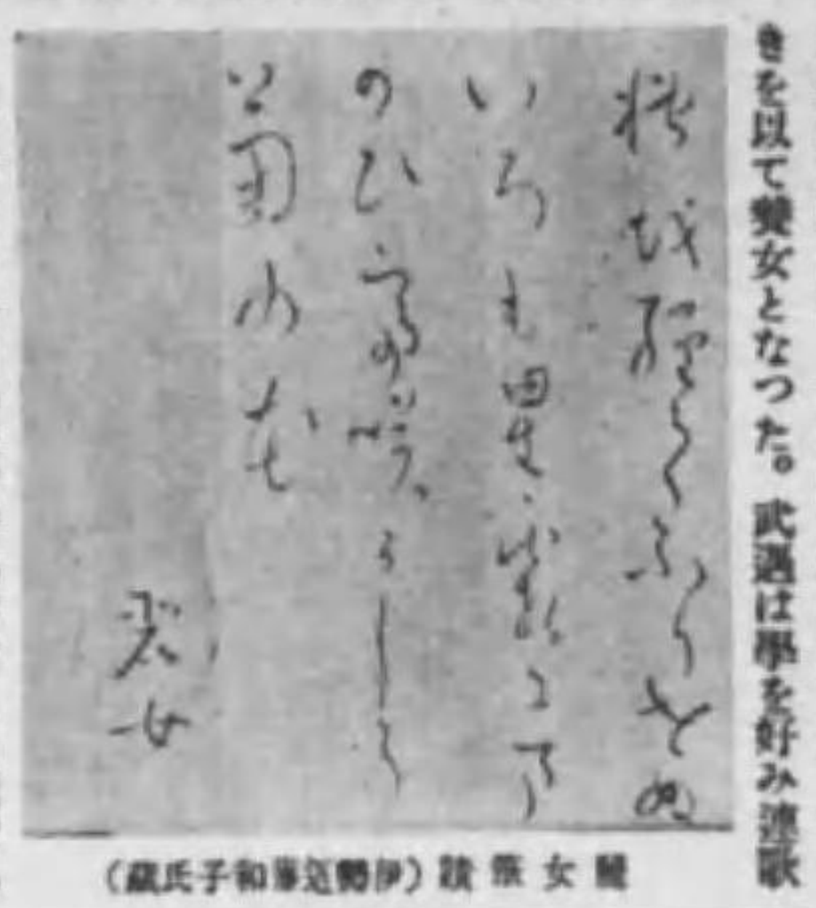
靈驗宮戸川 れいけんみやとがは　淨瑠璃 十一段 王代物 【作者】福内鬼外（平賀源內）【興行】安永九年三月三日初日、江戸肥前座。【脚本】江戸作者淨瑠璃集（續帝國文庫）所收。【題材】淺草寺本尊觀世音の緣起に關して、後の「江戸名所圖會」等の記すところに依れば、推古天皇の御宇、土師臣中知なる者が家臣檜熊濱成・武成兄弟を伴うてこの地に流浪し、漁獵を以て業としたが、同三十六年三月十八日、その網に觀音の像を獲、一堂を營んでこれを安置し、爾後長く祕佛として傳はつたと言ふのであるが、本曲はこれを主題として蘇我蝦夷と山背宮との爭ひに組み入れ、淺草寺に關するその他の俗說奇談、名物等を織り込んで脚色したものである。

【梗概】〔一段〕（內裡）武藏の淺草の地に觀音堂を建立せんとする聖德太子の御遺志を繼つて、王位を窺ふ蘇我蝦夷と忠臣秦の川勝とが論爭する。帝は太子の御子山背の宮に御讓位の御志があり、その贊否についても蝦夷方と川勝方とは相爭ふが、明日三輪明神社前に於て鬮を以て神慮を仰ぐことに決する。〔二段〕（三輪社頭）道中臣は聖德太子の姫君綾歌姫と許嫁の間柄であるが、太子より預りの閻浮提金の觀世音像を何者かに盜み取られたかどに依り、救勘の身となつて流浪中、圖らずも社頭に於てその臣檜熊友成と巡り逢ふ。友成の父檜熊郡領は佛像紛失の責を負うて切腹し、遺兒濱成・武成・友成の三人は佛像探索に努めてゐるのであつた。許嫁綾歌姫も中臣の身を案じて社參に來るが、それとは知らぬ中臣は通りがかりの田舍娘と戲れの契を結ぶ。兩者が現はれ綾歌姫を奪ひ、下向の山背宮を襲うて乳母を傷し、秦川勝に深傷を負はす。〔三段〕（山背宮館）川勝は重傷に屈せず、宮を護つて歸り、姉子妻勝、その妻丹橘に命じ一子久丸と共に宮を奉じて館を落ち延ばせる。蝦夷が現はれ己が企みを述べ、川勝等を斬る。武成・友成兄弟は惡人を相手に勇戰する。〔四段〕（高圓山）蝦夷の臣で秦川勝の娘を妻とする佐伯の國村は、二心なき證に觀音像を踏み、これを谷底に蹴込んだ上、蝦夷の意に從はぬ綾歌姫を預る事になる。谷底より光が發し佛像は東を指して飛び去る。〔五段〕（國村館）妻の曝は今洛中に流行する飴賣や與勘平音樂賣を招き、綾歌姫の徒然を慰めてゐる。國村歸館し、姫が蝦夷大臣の心に從はぬ時は首討つて渡さねばならぬと言ふ。忍び聞いた香賣實は露梼するが國村のために檜熊武成と見露はされて捕へられる。蝦夷の上使阿曇猿實を曝は色仕掛で醉はせ、國村は密通を言ひ立ててこれを追うた後、預りの姫を曝に與へて離緣し、飴賣に扮した蝦夷の間者を斬り捨て自刄して義を全うする。姫・曝は武成を從へて落ちる。〔六段〕（武相國境辻堂）「道行夢路新枕」姫は中臣との道行を夢見る。追手がかゝつて曝は斬り死にし、武成は姫を護つて逃れる。〔七段〕（播州斑鳩村秦勝住居・村境辻堂）山背宮は、乳不足のために病むので、秦勝夫妻は一子久丸を捨てる。〔八段〕（秦勝住居）土師連が山背宮の首受取に來る。暫しの猶豫を乞うた秦勝は、身替りにすべき久丸を捨てた事を悔む。近所のうどん屋惣兵衞は拾兒の久丸を賣りに來て若君と交換して行く。檜熊が來るので秦勝は身替りの久丸を討たうとすると、惣兵衞が現はれて眞若君であること暴露し、先に交換した若君の首を討つ。併しこれは苦肉の策で、惣兵衞はもと太子の臣久米平內兵衞と言ひ、不義の咎を秦川勝に救はれ浪々中であつたが、己が一子音吉を宮と僞り首討つたのである。女房は音吉を探ね來り、首なき亡骸を見て愁嘆する。〔九段〕（隅田川）濱成・武成・友成兄弟は連日河上に舟を浮べて夜光を發する佛像を引上げんとしてゐたが、遂に成功して追手と闘ひつつ像を守り歸る。兄弟の妹お藤に戀慕する秋九郎と若衆の夜鷹に變裝して色を賣る老爺との可笑味がある。〔十段〕（檜熊兄弟住家）綾歌姫を匿まうてゐるこの家の妹お藤は、曾て三輪社頭で道中臣と契つた娘であつた。偶々虛無僧姿の中臣が來て姫との關係が判るので、お藤は嫉妬の心を燃やす。佛像を奉じて歸つた武成は姫と中臣とに觀音の盃をさせ、妬心に狂ふ妹を諭すが肯んじないのでこれを縛し、濱成・友成の危急を救ふべく驅け出す。お藤を慕ふ秋九郎が來て中臣の首を討つが、觀音の像が身替りに立たせられ恙なきを得る。濱成兄弟が歸り今日三月十八日を以て御堂の新始めとせんと言ふ。〔十一段〕（觀音堂）御堂も落成したので、中臣等は蝦夷討伐に出發せんとする所へ、秦勝・久米平內が山背宮を護り、蝦夷に繩打つて來り會する。

【脚色】構成手法は、作者の初作「神靈矢口渡」（別項）と何等の變化もない。本曲の見せ場は五段の「國村館」と八段の「秦勝貧家」とであるが、後者に於ては、特に「菅原傳授手習鑑」（別項）の寺小屋の段の影響が大きい。「源藏戾り」から「いろは送り」までの重要な節々をそれぞれ匂はせながら、身替りの段取りを、若君・久丸・音吉の三重にして拾兒といふ技巧を加へた所が恐らく作者の味噌であつたらう。なほ例によつて鬼外の江戸趣作者らしい口吻が諸所に見られ、特に九段にそれが著しく、又與勘平音樂賣や數へ唄「一つ長屋の佐次兵衞殿」などの流行物を捉へ、久米平內の石像や揚枝屋のお藤、所謂「銀杏娘」（平日開帳番十二〇等の淺草名物を用ひて脚色の一趣向としてゐる。それ等の點には十分鬼外の特色が見えるが、全體として云へば、淨瑠璃構成の常道をたどつた平凡な作である。なほ本曲の後世への影響はない。〔近藤〕

麗女 れいぢよ　歷史物語作者【姓】生家、阪倉、又は蓑谷。養家、慶德。兩家共に荒木田氏。【名】本名隆子。後、麗と改め、麗子又は麗女と自署す。字は子奇。【號】紫山・淸渚（紫式部・淸少納言に因む）。【法號】淨光【生歿】享保十七年三月十日、伊勢國山田下中之郷町に

生れ、文化三年（二四六六）正月十二日歿す。享年七十五。〔辭世〕「消ゆる身や言の葉の露野邊の雪」【墓所】伊勢國山田浦口町虛空藏谷【家系】實父は伊勢大神宮內宮地下權禰宜阪倉權之助荒木田武遇。母は藤宗、羽根彥助秦英滿の女。養父は叔父で、外宮御師、正四位下慶德藤右衞門荒木田武遇。【閱歷】幼より俊敏、七歲にして兄武世の「大學」を讀むを聞いて諳誦した。長兄正富は、その才を賞して「古今集序」「伊勢物語」などを敎へ、九歲にして「論語」「孟子」を學んだ。十三歲叔父慶德武遇、子無きを以て養女となつた。武遇は學を好み連歌に通じ、獨吟千句「夏木集」の著がある程であつたから、麗女の好學心を十分に滿足させた。十五歲和歌に志し、十六歲連歌に入り、十七歲緣後の連歌師西山昌林に入門、昌林の死後、二十一歲の時、京都の花の本里村昌廸の門に入り、專ら連歌に精進した。二十三歲養父を失ひ、ついで師昌廸も歿し、且つ病弱となり、家計も困難であつた故、以後數年間は以前の如き激しい勉強はしなかつたが、それでも昌廸の子昌桂につき、又後には里村紹甫にも敎をうけた（三十一歲）。二十四歲（或は五か）の時に



麗女筆蹟（伊勢近藤和子氏藏）

慶德家雅（笠井氏、母の舊姓を冒す。字如松、號閑齋）を養子に迎へて結婚した。明和元年六月（三十三歲）、當時大阪勤番の播州三草の城主丹羽侯に貧困救濟を願ふために如松が上京したので、麗女は病後の夫の介添として同道した。當時すでに名聲があり、連歌會などに招待された。然るにこの年十二月には、故鄉の家が燒失するといふ不幸に遭つたが、幸に丹羽侯に救はれ、明和二年十一月歸鄉することが出來た。この間の事は自ら「須磨の寢覺」に記してゐる。彼女が落ちついて文筆生活に入つたのはこれ以後である。丹羽侯は御師慶德家の檀家（寺の檀家に同じ）であつたのである。その後は、專ら宮崎文庫・林崎文庫の書籍を借覽して勉學に努めた。如松筆「覺書目」を見ると、和漢書二千二百種一萬千餘冊の書名が記してある。かくて三十七歲（明和五年）に至つて「宇津保物語」を校訂し、また良人の勸めにより、「時につくの辭」「寥臣辨」「大江辨」を書いた。これが文筆生活の最初であり、作詩研究のために江村北海に入門したのもこの年である。爾來、國史・記錄・有職・故實の書を愛讀し、彼女の代表作、「池の藻屑」「月の行方」（各別項）が成つたのは明和八年四十歲の時で、引きつづき、物語「山の井」二十卷（安永四年、三十卷に增補）、歷史「笠の舍」五十五卷を書いた。これ等の著述は彼女の名聲を頓に高めた。彥根の龍草廬・野村公臺（東皐）その他諸名家と交り、漢詩や連歌を以て諸所に迎へられたのもこの頃である。これ等の事は自作「初午の日記」に詳しくあり、彼女の得意時代で、その五十の賀には諸國の名家から多くの詩歌を贈られた。小說「野中の淸水」の文章假名遣について本居宣長に難ぜられたが、却つてこれを反駁して從はなかつたといふこともある。彼女は多くの漢學者・詩人・高僧・俳人と親しくしたが、如何なる理由があつたか、宣長・久老等の國學者には近づかなかつた。天明二年（五十一歲）再び京都・播磨に遊歷した。連歌は初期より晚年に至るまで終始精進し、安永五年（四十五歲）には、久しく中絕してゐた宮崎文庫の連歌會を率先して再興した。寬政三年七月（六十歲）、東武柳營の御連歌師瀨川昌億の來訪を受け、文庫の會に詠じたことや、自宅に月次の連歌會を催したことが自傳に記してある。この年夫の死に遭ひ、その後は宮崎文庫の連歌會、自宅の月次連歌會などに餘生を送つた。養嗣子に佳包がある。

【人物・業績】著作は極めて多く、歷史類・物語類・紀行・雜錄を通じてほぼ四百卷に達する。その大部分は物語であるが、麗女の名聲は歷史物語の「池の藻屑」「月の行方」にあるので、純物語の創作家としてよりは、寧ろ史實の描寫に華麗なる才筆をふるつて詩趣を橫溢せしめた點に、彼女の特色があり、不朽の價値がある。「笠の舍」は今所在不明であるが、若しこれが「池の藻屑」「月の行方」に匹敵するものであるならば、彼女の文學史上に於ける地位と名聲とは更に高く大なるものであらう。小說は殆ど全部王朝貴族を材としたもので高雅尙古の彼女の趣味がよくうかがはれる。結局彼女は情熱に富んだ文學者といふよりは寧ろ冷靜な學者的性情の所有者で、その博覽強記は眞に驚くべきである。「山の井」の引用書目は百三十九部に達して居り、また小說にその引歌をまとめて一卷の附錄とし、更に系圖一卷を添へてある如きはその正確なる科學的態度をよく證してゐる。物語は多く長篇であるが、「ひをり」「怪世談」は短篇集で、しかも傑作である。また連歌・俳句・漢詩・和歌に見るべきものが多く、書にもすぐれ、また畫もかいた。平安朝の如く才媛の輩出した女流文學全盛時代でなく、いはば女子抑壓時代に生れて、これ程の才能を發揮したのは實に珍しい天才といふべきであり、且つ女性にして歷史に筆を染めたのは、前後にその比がないことも一異色である。

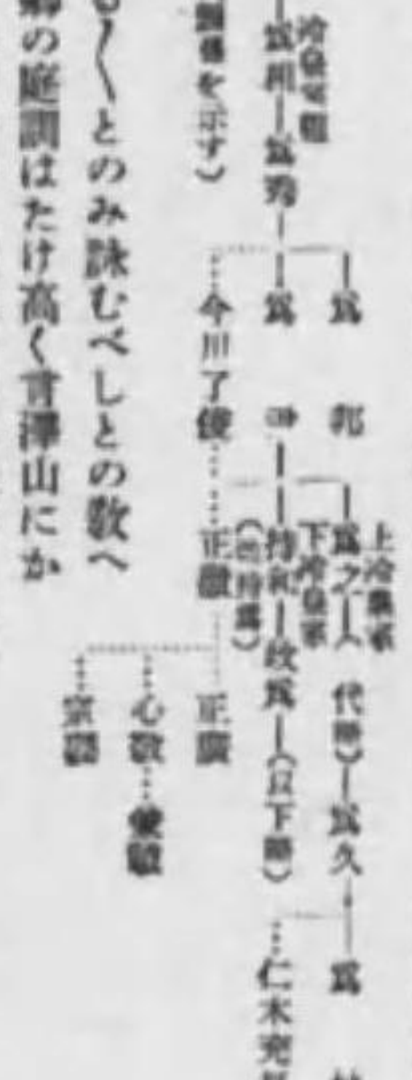
【參考】慶德麗女著書目錄（伊勢神宮文庫藏）○麗女遺書目錄（伊勢龜山中貴藏）○荒木田麗女著述書目（淸水濱臣著京遊錄下）（百家叢說・國學者傳記集成）○荒木田麗女著述目錄 藤波江所藏（日本隨筆全集）○荒木田麗女 深井鑑吉（歷史地理一八ノ二・三）○荒木田麗女著書考 高瀨綠子（國語と國文學一九）○麗女概觀（鈴木）伊勢、岩井藤三郎○國學者傳記集成○荒木田麗女小說集（小傳・著述目錄附）與謝野晶子校訂○女流文學全集 吉井知新校訂〔岩淵〕

冷笑 れいせう　小說【作者】永井荷風【發表】明治四十二年十二月より東京朝日新聞に連載され、翌年二月完結。【刊行】荷風全集第三卷・明治大正文學全集第三十一卷等に所收。【梗概】銀行頭取小山淸は、ハアバアド大學を出て父の遺業を嗣いだ現代紳士であるが、この頃になつて益々世の中を厭なもの、退屈なものと感じ出した。世間の事がつまらなく家庭生活が淋しいにつけても、せめて昔の江戸八笑人の如く笑つて見たいと、共に笑ふ相手を探し求めてゐたが、圖らずも逗子の濱邊で享樂主義者の小說家吉野紅雨と逢つて共鳴を得た。そして二人で同志を集めて一夕閑談笑語を交へようと約束した。紅雨がまづ會員の資格ありとして推薦したのは、その中學の同

鐵生たる中谷丁藏だつた。彼は狂言作者を職として專ら風流情癡に身を委ね、性格も嗜好もその理想も悉く江戸の洒落本にある色男そつくりで、頗る現代離れのした人物だつた。二十五の時洲崎の引手茶屋の娘に惚れられて一緒になり、十年にもなつて子供までありながら相變らず新しい戀の冒險を兼ねてゐるのだつた。それから京都へ旅をした小山は、商船の事務長德井勝之助を紅雨に紹介した。德井は某大實業家の長男だが、天文學を志して父に容れられなかつたことから反抗兒として遠く家を離れてゐて、乘船が母國に歸航すれば、只管出帆の日を待ち倦ねるといふ人物だつた。六七年前赤坂の藝者と深い仲になつたが、不德な親のために身を賣られた女の境遇に對する同情から、身請けして妻君にしようとしたことがあつた。併し理想家的な要求から親との係累を一切絕つて結婚してくれと云つても、女がそれをなし得なかつた爲め、つひ情熱も醒めて別れてしまつたといふ過去を持つてゐた。更に紅雨が推薦した人物は向島に住む南宗畫家の桑島青華だつた。畫に限らず風流韻事は凡て自ら味はつて自ら娛しむ所に眞意があると、展覽會で名を爭ふこともせず、父の遺した茅葺の家と庭の梅を守り、花を愛し樹を愛しては、頻りに漢詩の名句を誦んで幽居を樂しんでゐるのだつた。——とにかく五人だけはこの現代の事相に眩惑しない同志が揃つたので、德井の船が横濱に入港したのを機會に、小山の家で一會を催すことになつた。ところが當夜になると青華は子供の病氣で出られぬからと、代理として賓頭盧尊者の像を出席させた。西洋料理の御馳走と聞いて恐れをなしたか中谷も不參だつたので、西洋の道化人形を代理として空いた席へ据ゑた。小山と紅雨と德井は杯を擧げて同志の健康を祝し、醉がまはるにつれて三人は隱し藝さへ演ずる機嫌になつた。最後に小山は「兎に角、木像と人形にトウストを捧げるのが一番洒落てゐる。吾々の名論卓說を傾聽させる對手には、こんな適當したものはあるまい。反對もしない代り贊成もしないで柔順しくしてゐるから」と云つて、三人でまた新にシャンパンを拔いた。

【批評】氣韻沒趣味なる明治四十年代の東京生活の外形に向つて沈重なる批評を試み、その時代の空氣の中に安住することの困難なるを嘆息し、併せてわが純良なる日本的特色の那邊にあるかを考究摸索せんとしたものである。個々の挿話にそれ〴〵小說的興味はあつても、畢竟は全篇に溢るゝ作者の文明批評がその主體となつてゐる。五年餘の外遊を終へて歸朝匆々の作者の目に映じた日本が、新鮮な感觸を以て再吟味されてゐる。發表當時この作が享樂主義を歌ふものとして論評されたのに對して、作者は「寧ろ享樂主義の主人公が風土の空氣に餘儀なくせられて川御風のあきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたもの」と答へたことに依つても、よくこの作の意圖を知ることが出來よう。またそこから「冷笑」の題名も生れた。　（水木）

冷泉家（れいぜいけ）　和歌　【家系】藤原爲家（別項）の第四子で、阿佛尼（別項）の生んだ爲相（嘉曆三年歿、六十六歲）に始まる歌の家筋である。爲相の子爲秀（應安五年歿）、爲秀の子爲尹（應永二十四年歿、五十七歲）と相傳へ、爲尹の二子爲之（永享十一年歿）、持和（改持爲、享德三年歿、五十三歲）に至りて上冷泉・下冷泉に分れ、以後その血統は相續いで今日に及んでゐる。祖爲相は父爲家死後間もなく長兄二條爲氏との間に領地爭ひを起したが、その年齡は爲氏の子爲世（別項）、次兄京極爲敎の子爲兼（別項）よりも若く、爲世・爲兼の歌壇論爭の間も、その爭ひの外に立つて別に一流を傳へた。【歌論】その歌論上の立場は、二代目爲秀の門に出た今川了俊（別項）の諸著書によりて覗ふ事が出來る。「藤谷殿（爲相）の御敎へは必ずしも一體に止まれとは御敎へ候はで、歌のかはり目は昔も今も師の風體に弟子似ず、父の歌樣にその子似ずとも、歌讀み同じ物と承り候ひしりぬ」（和歌所へ不審條々）、また「爲世卿の風體は歌はやさしく〳〵とのみ詠むべしとの敎へなり。爲家卿の庭訓はたけ高く言澤山にかざらず、ことの用捨なく只思ふ樣に詠めとなり。爲相卿の敎へはいづれの體にてもその人の得たる姿に先づもとづきて後世のけりをも倒ぶべしとなり」（辨疑自見集）、また「爲相の御敎への如くに、十體の中いづれにても學び得べきを稽古せよとの敎へこそ、誠にひろき事と存じためれ」（了俊辨要抄）、これ等の言葉にて知らるゝ如く、極めて自由な立場に立ち、二條家よりも寧ろ京極家（各別項）の風に近いところがある。京極家絕家後は、自ら二條家と對立するやうになつたが、その勢力は到底これに及ばず、ただ門人の間から了俊や正徹（別項）の如き人々が出で、二條家歌學全盛の世にあつて別に一敵國を作り、冷泉家歌學のために氣を吐いた。



【門流】下冷泉持爲の子政爲（大永三年歿、七十九歲）に家集「碧玉集」（別項）あり、後柏原院の「柏玉集」、逍遙院實隆の「雪玉集」（各別項）と共に三玉集として並び稱せられた。次いで近世に入り、上冷泉家に爲久（別項）が出で、その歌學說は則榮の「詠歌金玉論」に見え、又門人仁木充長がある。爲久の子爲村（別項）また歌道の宗家として重んぜられ、門下よりは萩原宗固・宮部義正・中原廣通・慈延（別項）・澄月の如き人々を出し、小澤蘆庵（別項）も亦彼について歌學を修めた。　（中島）

【參考】日本歌學史 佐佐木信綱 ○大日本歌學史 福井久藏 ○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎

冷泉爲村卿和歌集（れいぜいためむらきやうわかしふ）　歌文　五卷一册　【編者】門人佐々木萬彥（?）・鷹見保具　【別名】冷泉爲村卿御詠　【諸本】刊本なし。鷹見保具の寫本の轉寫が圖書寮等に存するのみ。【內容】爲村の私家集を獲るに從ひて集成したものらしく、何れも部類分になつてはゐない。「他門の耳にしゐてふるゝ計りにてはなし。同門の人々の耳につたへむとなり」といふ編者の奧書がある。卷一の終りに明和六年冬とあるのみで、他卷の時代は不明。卷二には特に法樂歌が多い。卷三には、「東の口すさみ」と題した歌合、明和八年八月十五夜歌その他のものがある。詞書の短篇をなしたものが多い。卷四には、柿本社法樂和歌、越部

御祿記及び長歌、その他若い時代卽ち寶曆時代の奉納歌が目につく。卷五は玉井寺和歌井序一編を含む。歌數すべて一千數百首を越えてゐる。

【歌風】爲村と云へば、蘆庵・澄月・慈延その他多數の歌人の師なることを聯想するが、彼は新堂上派とも云ふべきそれ等の人々の師と云ふより、舊堂上派の掉尾の人であると云ふ方が當つてゐる。

音せしは風なりけりな人もこぬかきはは夜ふかき露の荻はら

たぐひやは有明の鏡のしろたへに霜ふりしきてはるゝ月かげ

しづかなるかげにむかへはをのづから心のくまもはるゝ夜の月

これ等は幾分前期の歌に屬するけれど、その新味はこの程度に止まり、一般に爲村まけの感がある。多作家ではあつたらしいが、古體の歌の本質に觸れるだけの素質に乏しかつた。

山遠き四方の中空雲はれてみなみに高くすめる月かげ

明和八年秋十五夜の詠の中から採つたもの。晩年のものだけに、やゝ落着きは出てきてゐる。彼の主張とする淡雅の特色は、或る點まで見えないではないが、未だ到底蘆庵や景樹の拓いて行つた境地に遠い憾みが少くない。彼から蘆庵その他の生れ出たことは、彼の指導の力と共に、時勢の投影と云ふものを否みがたい。　（齋藤（清））

麗澤社（れいたくしや）　漢文章家の結社　【解說】舊雨社（別項）は社友の多くなると共に、本來の目的を離れて讌飲の會合に墮するに至つたので、有志の士は質素にして眞摯なる文章研究會を組織しようと志し、重野成齋（別項）を主盟としてこの社を起した。席上必ず一文を課して成齋がこれを評した。明治三十四年の交、舊雨社を麗澤社に合併した。この社の社友の名あるものは、藤野海南・岡鹿門・巖谷一六・小山春山・龜谷省軒・蒲生絅亭・星野豐城・小牧櫻泉・日下勺水・植松果堂・秋葉樹堂・鷲谷青山・服部愛軒・中村櫻溪等である。　（佐久）

禮法（れいはふ）　風俗　【總記】禮儀作法を初めとして、冠婚葬祭等の吉凶諸禮に關して總記したものには、「古事類苑」禮式部、「禮儀類典」（別項）「大日本史」禮樂志、「貞丈雜記」（別項）の禮法・祝儀・書札・進物等の諸部がある。

【作法】公家には、「作法故實」（類從一〇〇）、藤原重隆の「蓬萊抄」（同一〇四）、一條內經の「弘安禮節」（同四二〇）等がある。武家には、「今川大双紙」「宗五大双紙」「三議一統大双紙」（以上各別項）「常照愚草」「道照愚草」、伊勢貞久の「大內問答」（類從四一二）「奉公覺悟之事」（同上）「了俊大草紙」（續類從六八二）「京極大草紙」（同六八三）「伊勢兵庫守貞宗記」（同六八六）「伊勢備後守貞明覺悟記」（同六八七）「伊勢六郎左衞門尉貞順記」（同上）「伊勢貞興返答書」（同六八八）、伊勢貞久の「武雜記」（同上）「伊勢貞助雜記」（同六八九）「中島攝津守宗次記」（同六九一）「河村譽誠聞書」（同上）「同雜々記」（同六九四）「故實聞書」（同六九三）「鳥板記」（同上）「魚板記」（同上）「人唐記」（同六九五）「人賢記」（同上）「諸大名出仕記」（同六九六）「諸家參會記」（同上）「風呂記」（同六九七）、伊勢貞順の「酌並記」（同六九八）「沙彌宗得記酌之次第」（同六九九）があり、女房には、「簾中舊記」（類從四一四）「女房故實」（續類從七〇〇）「女房進退」（同七〇一）がある。近世では、小笠原長時の「小笠原家禮書」「小笠原流躾方百ケ條」、石田玉山の「小笠原諸禮大全」、關義標の「小笠原流諸禮式」「禮容筆粹」等がある。

【冠禮】元服に關する禮法を見るには、「天皇冠禮部類記」（類從九七）「天皇御元服部類」（同九八）「主上御元服上壽作法抄」（同上）「東宮冠禮部類記」（續類從二九三）「親王御元服部類記」（同二九七）「鹿苑院殿御元服記」（類從四〇四）「普廣院殿御元服記」（同上）「光源院殿御元服記」（同上）等があり、その式に就いて記したものには、滋野井公麗の「御元服和抄」（改定史籍集覽第一七）、伊勢貞丈の「元服法式」がある。

【婚禮】公家のものでは、「婚記」（類從五二五）、武家のものでは、伊勢貞陸の「嫁入記」（類從四一四）「嫁迎の事」（同上）、小笠原長時の「嫁取故實」（續類從七〇〇）があり、「簾中舊記」（類從四一四）「宮參之次第」（續類從六九二）にも見えてゐる。近世には「當世民用婚禮仕用罌粟袋」（白木編）、「繪本婚禮手引草」（白井鳥醉）等の繪本が多いが、有住齋の「類聚婚禮式」は出色の書である。

【出產】公家には、「中宮御產部類記」（類從五二六）「后宮御產帶部類記」（同五二七）「御產御祈日錄」（續類從九九七）「御產部類記」（同九九八）「后宮御產當日次第」（同九九九）、武家には「御產所日記」（類從四二〇）「產所之記」（同上）「小笠原長時傳授姙者帶之事」（續類從六九二）「同宮參之次第」があり、近世のことは、「女重寶記」「女諸禮綾錦」等の書に記されてある。風俗研究六十六號は御產風俗號と題して、この方面の特殊の研究を載せてゐる。

【葬禮】葬禮の事を記したものには、「吉事次第」（類從五二二）「吉事略儀」（同上）、村士宗章の「祭儀略喪儀略」（三十幅所收）、栗田寬の「葬喪式考證」等があり、その類例を集めたものには、「類聚雜例」（類從五一五）「凶事部類」（續類從九九二）があり、皇室の御模樣を記したものには、「高倉院升遐記」（類從五一六）「四條院御葬禮記」（同上）「龜山院御葬禮記」（同上）「伏見上皇御中陰記」（同五一七）「後光嚴院御中陰以下御佛事記」（同上）「貞治四年諒闇終記」（續類從九九二）「後小松院崩御記」（類從五一八）「山の霞」（同上）「山賤記」（同上）「長享二年後御竹逮夜節同」（同上）「明應因事記」（同九九一）「後奈良院御拾骨之記」（類從五一八）等があり、諒闇に就いて記したものには、一條兼良の「諒闇記」（續類從九九二）、滋野井公麗の「亮闇和抄」（改定史籍集覽第一七）等がある。

【服忌】服忌の制は、「假寧令」「拾芥抄」（別項）「文保記」（類從五二三）「永正記」（同五二四）等に見え、江戸時代となつて元祿六年・元文元年の改定があつたが、伊勢大神宮に傳はる服忌令等を蒐錄し、令以下の古典に徵證したものに、度會正兌の「服忌令集成」三卷がある。江戸時代の服忌令に註を施したものに、長山庄右衞門の「服忌令明鑑集」一卷、「服忌令撰註」三卷、「同追補」三卷、加藤次章の「同分解」、遠山景晉の「同詳解」一卷がある。又服忌に關する諸般の慣例を記したものに、「服忌令公案集成」一卷、服忌令を簡略に記したものに、須知倘秀の「服忌令捷徑」一卷、「服忌便覽」一卷等がある。

【書札禮】公家の書札禮を記したものには、守覺法親王著「消息耳底祕抄」（類從一四七）、藤原伊行著「夜鶴庭訓抄」（同四九四）「玉章祕傳抄」（續類從九一七）曾我尙祐著「和簡禮經」（改定史籍集覽第二七）があり、なほ「桃花蘂葉」（別項）「三內口訣」（類從四七二）「門室有職抄」（同四九一）「海人藻芥」（同四九二）にも記載されてゐる。又その文例を集めたものには、「書札禮」（類從

一四四）「彈衝要集」（續類從二〇七）「儒林拾葉」（同九二〇）等がある。武家の書札禮を書いてゐるのは、今川了俊著「書札禮」（續類從七〇二）「書簡故實」（同七〇三）「書札作法抄」（類從一四五）「細川家書札抄」（同上）「大舘常興書札抄」（同一四五）「伊勢加賀守貞滿筆記」（續類從六八九）「曾我兵庫頭八十五箇條品々不好事」（同七〇二）、釣霽老人著「上杉問答」（同九三四）、曾我尙祐の「書札和節實聞書」及び「書札三百八十箇條」等があり、「三議一統大雙紙」「宗五大雙紙」（各別項）等の中にも記されてある。又女房の書札禮に就いては、「女房筆法」（續類從七〇一）があり、なほ「女房故實」（同七〇〇）「女房進退」（同七〇一）の中にも記されてある。　（石村）

零餘子（れいよし）　俳人　【姓名】長谷川諧三　【號】初號零村、別號畔木亭　【生歿】明治十九年五月二十三日生れ、昭和三年七月二十七日歿す。享年四十三　【閲歷】群馬縣多野郡鬼石町富田喜重郎の長男で、大正二年三月東京府淀橋町柏木長谷川家の養子となり、かな女と結婚した。明治三十六年十六歲の時、初めて俳句を作つた。丁度その頃上京して大澤館に入つてをり、同僚の井上啞々が巖谷小波の木曜會員であつたところから、その勸說で句作を始めた。次いで啞々等と七草會を作り、その句稿を內藤鳴雪の許に持參して示敎を受け、又碧梧桐選の「新聲」の俳壇に投句した。かくて明治三十九年の「ホトトギス」の新年號に初めて七草會の句を合格として載つた。四十二年松根東洋城と知り、虛子が國民新聞の俳壇を東洋城に讓つてから約四年間同俳壇に出句した。その後大學の模範藥局に勤務し、大學の藥學科選科に藥品製造學を研究するやうになつたので、句作の餘暇が乏しくなつたが、虛子が大正元年に小說から俳句に復活するや、大正三年虛子の命で「ホトトギス」の地方俳句界の選を擔當し、同十一年に及んだ。その間に大正三年から同六年まで東京日日新聞の俳壇の選をした。同十年十月自ら俳句雜誌「枯野」を創刊し、「俳句は自然觀照の文學である」との標語を以て立ち、翌年「ホトトギス」とも離れた。後、立體俳句なる提唱をなし、歿するまで「枯野」を育成したのであるが、腸チブスに冒されて壯年にして歿した。【著作】新註俳人の手紙（大正七年刊）〇俳句歲時記（同八年刊）〇新科俳句全集（同十年刊）〇近代俳句史論（同十一年刊）〇自然へ（避暑して（枯野第一句集、同年刊）〇月舟俳句集（同年刊）〇雜草（明治三十八年以來の年代順自選句集、大正十三年刊）〇芭蕉俳句全集（同十四年刊）〇枯野俳句選集（同十五年刊）以上の外に、俳句作法書三種、句選二種がある。【參考】俳人名鑑（俳書堂）〇現代俳句集（現代日本文學全集）改造社〇枯野（零餘子追悼號）　（志田）

玲瓏隨筆（れいろうずゐひつ）　隨筆　四卷　【著者】釋宗彭（澤庵）　【刊行】安政六年　【解說】撰者は近古浮屠界の一傑人で、本書は往々禪家の假名法語の如く見えるが、偏に佛道を說くにもあらず、儒家・道家の說をも取り入れて悟道を勸めると同時に、修身・齊家の法にも及ぶもので、前後數百則を擧げて丁寧懇到を極めてゐる。澤庵和尙の識見を窺ふに、これ程究竟の書はあるまい。卷一に成佛の義以下、卷二に松杉を植うる考以下、卷三に眞の出家見以下、卷四に佛法は風習の二體以下各數十條を收めてゐる。この書は二百餘年の久しき間寫本で行はれて、その間傳寫の誤が多くなつてゐたが、安政六年に刊本になつた。大德寺曾住の大綱和尙の序がある。【著者小傳】宗彭。澤庵の號を以て著はれてゐる。但馬出石の人、十歲の時出石の淨土宗唱念寺に入り、後、禪宗に轉じて大德寺の第一座に進んだ。元和五年同寺が德川氏の制法に違背の事あつて嚴責を蒙つた時、澤庵は月江等と共に宗法を固守して順はなかつたので、羽前に流され、數歲を經て赦されて大德寺に復歸した。寬永十四年江戶に來て品川に東海寺を開いて第一世となつた。後、春雨庵を立てて隱棲し、正保二年十二月十一日寂。世壽七十三。和歌を嗜み、また茶道に通じ、書畫を能くした。「鎌倉記」「澤庵紀行」「澤庵和尙歌集」等の著述がある。　（和田）

歷史小說（れきしせうせつ）　【解說】歷史小說とは、歷史上の事蹟や史上の人物を素材とした小說であり、着想及び材料等から見た小說の一分類をいふのである。人類及び國民の表面の行動經驗を、時間的に連續して記述した記錄の展開が歷史である。年代誌家や好古家の乾燥無味な素材や、無數の資源から搔き集めたであらうところの、斷片的な史實の材料の上に、想像力によつて具象的な過去の世界を創造し、再現し、現實化し、豐富な藝術の力によつて、それを生きた繪畫にまで發展するのが歷史小說である。

【歷史小說の樣相】歷史小說は、各作家の支持する世界觀・人生觀・哲學觀及び主義等によつて表現された樣相が、一つ一つに皆違ふ。その觀點から見れば、史實を重要視して、史實を「在つたやう」に假想せしめるのが歷史小說か、それとも史實を自由に想像化するのがその本質か。昔からの討論されたこの二條件の如きは、むしろ意義に乏しい小問題たるに過ぎない。要するに世界の歷史小說は、浪漫主義・理想主義・寫實主義・現實主義の四つの視角から製作され、また觀照さるべきものである。その對象物としては、時代性・時代の社會性・史的人物の三方面に分岐される。この三對象物のいづれかが、四主義のいづれかによつて、いかに取扱はれるか、それが歷史小說の全面である。まづ浪漫主義が、材料を最も多く歷史に依賴した理由は、浪漫主義の本質が、想像力の文學であると同時に、それが逃避、もしくは理想主義に基點を置くことから始まる。浪漫主義は、現實の人生から逃避する以上、その避難所を過去の人生に求めざるを得ない。過去は歷史である。次に浪漫主義は、現實の醜惡から逃避して、非現實な想像の上に、理想の樂土を作り上げる。想像力を自由に驅使し、現實の束縛を受けずに、どんなにでも美化し、神化し得る世界と現實は、歷史の領域の外にはあり得ない。現代において自由に自分の感情や主張を發表する自由を持たぬ場合、又は史上の人物に、その崇拜の理想を置く場合、史上の人物を借りて、そこに自分を表現するなどは、作家のよく採用する手である。武者小路實篤の小說・戲曲や、江原小彌太の「耶蘇」その他はその一面である。また人類には、より多く、過去の世界の人物に、超人性や偉大性を認める傾向がある。その過去の讚美が、歷史小說に所依を求めしめることにもなる。また愛國主義の小說のやうに、或る時代の國民精神や、國民性を抒情詩的に禮讚し啓示するものも、理想主義歷史小說である。第三の寫實主義は、歷史を忠實に考古的に再檢討しようとするものである。明治中期の歌舞伎劇に現はれた「活歷」などが卽ちそれである。時代の樣相・精神・社會相・社會の嗜味好尙・人物等を、當時の「あつたまゝ」の樣相において、眞實を捉へようとする行き方である。同じ歷史小說家でも、デュマが純粹浪漫主義者で、想像過剩と非難されたのに對して、スコットが歷史の解說者であり、より多く、史實に依賴したと禮讚されたのもそれ。そしてフロオベルや、ストリンドベリーの作物は、明かに後者に屬する。第四の現實主義にあつては、歷史の傳說的な非眞實を破壞して、「史實及び史的人間」を、「人間の史實」と「人間」とに引き下さうとする再認識運動である。こゝには、史實と時代精神の無慘な暴露と、現實思潮からの新解釋が行はれる。菊池寬・芥川龍之介等の史實物や、仇討の美しい浪漫主義を皮肉つた谷崎潤一郎の「お國と五平」や、プロレタリヤ文學の歷史小說の如きは、みなこの分類に屬する。近代世界の歷史小說は、大抵、この第三・第四の分類に入るものが多い。一九二七・八年以後、歐洲の出版界に起つた傳記物及び歷史小說の流行は、今日に至つてまだ衰へない。浪漫的主義の分子が、この風潮を作つた動機が、無論絕無とはいへないが、それですら、第三・第四の要素が意識して多分を占めてゐる事は爭へない。

【日本の歷史小說】我が國には、古くから歷史物語（別項）の一類が存在して國文學の中に大きな一系統をなしてて來る（歷史物語參照）。近世文學に入つては、世話物に對する謂はゆる時代物、讀本・合卷物の京傳・馬琴・種彥・京山（各別項）等、いづれかといへば、昭和時代の大衆小說家の先驅と見るべき作家群が出た。殊に曲亭馬琴は、史實と史的人物をしきりに取材としたが、脚色は雄大であり、且つ作的精力の逞ましさは、當時の群小作家を拔いたが、敎訓主義と道德觀があまりに狹く凝り固まつて、出て來る人物を悉く木偶人形化したのと、發展流動の姿において、歷史を攫み得なかつた彼の作物は、歷史小說としての幼稚さを齒痒ゆからしめる以上の何物でもない。その外「太閤記」「北條五代記」「將軍記」「鎌倉九代記」等の實錄物（別項）があるが、それは歷史小說の線上まで引上げる價値を持たない。明治に入つては、明治二十六年、讀賣新聞の懸賞小說に高山樗牛の「瀧口入道」（別項）の當選を見たが、作品としては云ふに足りない。かへつて尾崎紅葉の「伽羅枕」、幸田露伴の「髭男」（各別項）などこそ、相當の價値を認めらるべき作物である。村上浪六の「三日月」（別項）は撥鬢小說の始まりで、「魚屋助右衞門」「深見笠」「奴の小萬」以下、好んで遊俠物を取扱つたが、趣向も人物も單調で、間もなく飽かれた。塚原澁柿園は一番多く史題を書いた。明治の歷史小說家の少數の一人ではあるが、狹い主觀と小細工の多い脚色とが邪魔であり、殊にぎごちない外面的な技巧が、彼を一流の作家に押し上げなかつた。村井弦齋・山田美妙・渡邊霞亭・遲塚麗水・宮崎三昧・南新二等は、新聞小說程度に散漫で、場當り物の製作を殘しただけである。浪六の撥鬢小說が衰へた明治二十七年頃、文壇に歷史小說を要求する聲が高かつたが、期待は外れてしまつた。大正に入つては、森鷗外が、しきりに史實物を發表した。これは出來るだけ主觀を塗りつぶして、時代相と人間心理を如實に描出しようとした解釋的歷史小說型ともいふべき作風で、記實に興味を見出したその頃の彼が、當然產み出すべき現實主義だつた。そして作物の素材內容そのものに對する作家の、意とでもない興味と同情が、稀薄であるがほのかに裏付けられてゐた。新思潮派の菊池・芥川等の作物については前に既に書いた。大正末期からかけて昭和時代までの大衆小說は、いづれも史實を題材とする點だけでは、嘗て見ない歷史小說の繁盛期であるが、こんなに純文學としての現實性や自然性を無視した歷史小說も亦あり得ない。大衆小說は主義的には原始的浪漫主義を沿うてゐるが、作中人物の社會心理や行動において、極度に虛無主義的な捨鉢な殘忍性を帶びたり、又は封建制度組織の反逆的批判を試みさしたりする着想は、若干の現實主義の陰影を示すものとも云へる。　（千葉）

歷史讀本（れきしとくほん）　史傳　二十四册　【著者】落合直文・小中村（池邊）義象　【刊行】明治二十四年二月より逐次刊行。【內容】本書は少年子女に、興味中心に忠孝節義の風を鼓吹する目的で、忠臣孝子節婦義士の傳記を編述したもので、第一編は「能褒野の露」（日本武尊）「裾野の嵐」（曾我兄弟）といふ風に、雅味ある題目の下に第二編以下續刊された。【批評】在來の史傳の如き乾燥無味を避け、流麗な文章を以て敍述されたので、文學的香味が豐かに全篇に流れてゐる。さうして當時持て囃された新國文の大家の手に成つたといふ事が、本書を弘布する上に少からぬ力となつた。今その文の風趣を偲ぶために、藤原師賢のことを記した一節を引用すると、「憂ひあれば、月のかけゆくも、我身の上の心地し、草むらの蟲の音も歎きの聲と聞かるゝものなり。大丈夫の、君のため、國のためにと盡しゝ事、成らずして打ちながめけん月かげは、千載の下に空しくうらみの面影を殘し、草の枕に聞きわびけん蟲の音は、百載の後、なほおなじおもひなからむ」云々。　（高須）

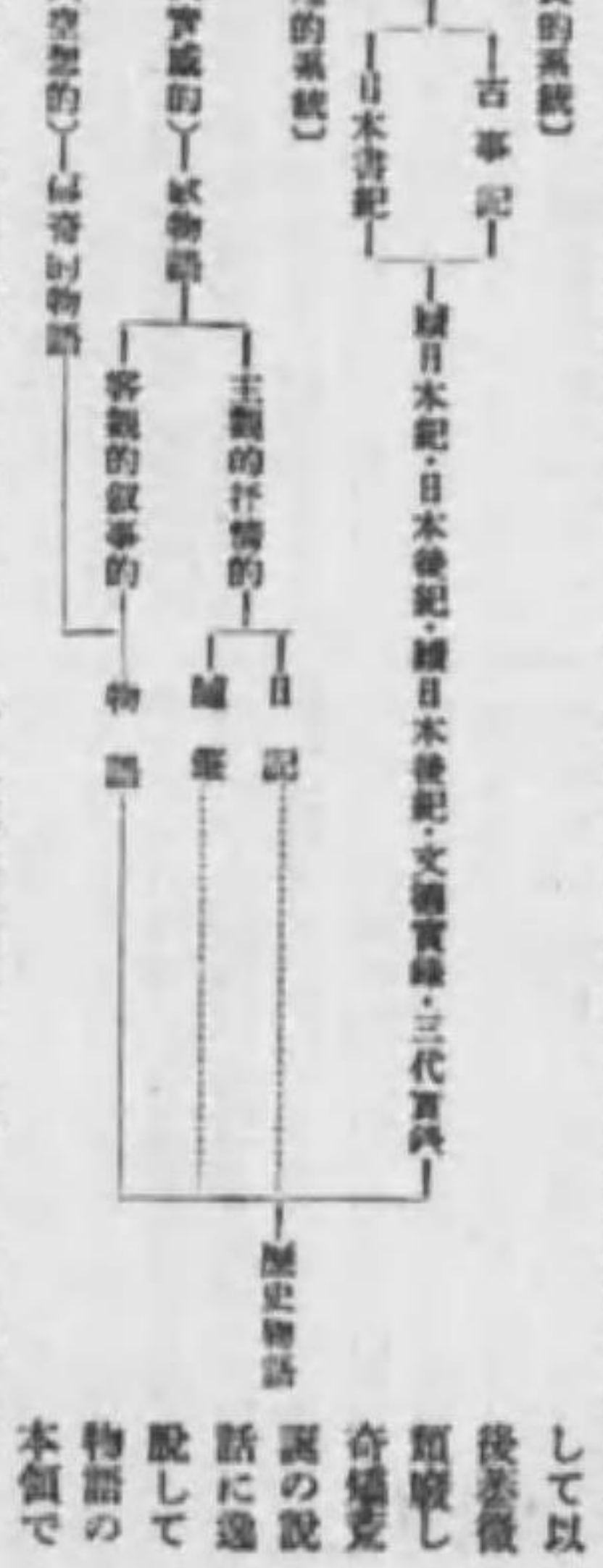
歷史美（れきしび）　美學　（獨）Das geschichtliche Schöne　【解說】人間の歷史自身のもつ美。歷史畫や敍事詩の美の如き藝術として表現された美とは異なる。ヘルトゥマン（Hartmann）によれば、意識はあるが意識的な美的計畫なくして作らるゝ美で、自然美と異なり理念の具體化の階段に屬するもので、精神的發達を知覺の對象とする。それは言語によつて傳へらるゝもので、歷史記錄は歷史美を傳へるが、記錄自身は美でも歷史美でもなく、また藝術美でもない。偶然的に想像假象を傳へるに過ぎぬ。隨つてそれは知覺假象ではない。併しこの歷史美と歷史の詩との實際上の區別は明かでないが、歷史美の方は、歷史の詩の如き美的製作に對する計畫をもつて作られてゐない。　（渡邊）

歷史物語（れきしものがたり）　文學の一種類　【名義】歷史的事實を主とした小說的作品の意である。【異稱】假名文の國史。漢文の六國史（別項）に對していふ。鏡物・鏡類。主なる作品が鏡の語を書名とするによる。支那の史書で「かゞみ」の稱を有するは、「通鑑」その他多くあるが、皆「大鏡」以後の作であるからその影響をうけた稱ではない。「大鏡」以前のものでは、後漢の荀悅の著に「申鑒」五篇があるが、「大鏡」以前に渡來した證跡もないから、鏡の稱は作者獨自の命名であらう。佛國十三世紀 Vincent de Beauvais の著 Speculum majus（大鏡）のうちに Miroir Historial（歷史鏡）があり、獨逸にも Spiegel（鏡）を書名としたものがある。けだし各民族共通の思想である。【範圍】「榮華物語」「大鏡」「增鏡」「今鏡」「水

鏡」「月の行方」「池の藻屑」「秋津島物語」（各別項）。以上の八種が嚴密の意味に於ける歷史物語である。「梅松論」は主として足利尊氏の事蹟、「豐鑑」は豐臣秀吉の事蹟を材料とし、「大鏡」「増鏡」等の結構に倣つて記してあり、「松蔭日記」は「榮華物語」にならつて柳澤吉保の榮達を描いてゐるが、これ等は史論又は傳記といふ方がより適當であつて、物語としての性質は稀薄である。恰も「義經記」「曾我物語」（各別項）が嚴密の意味に於ける戰記物語（別項）から除外されるに類してゐる。八種の作品の要項をあげると次の如くである。

書名	記敍時代	著者	著作順 同年時
秋津島物語 一卷	神代	未詳	第六 建保六年
水鏡 三卷	1神武―54仁明 紀元元―嘉祥三 （一五一〇年間）	中山忠親	第四
榮華物語 四〇卷	宇多―堀河	未詳	第一
大鏡 三卷 六卷 八卷	55文德―68後一條 嘉祥三―萬壽二 一五一〇―一六八五 （一七六年間）	未詳	第二
今鏡 十卷	68後一條―80高倉 萬壽二―嘉應二 一六八五―一八三〇 （一四六年間）	源通親	第三 嘉應二年
【彌世繼】 月の行方 二卷	80高倉―81安德 仁安三―壽永四 一八二八―一八四五 （一八年間）	（藤原爲信） 荒木田麗女	（第五） 第九 明和八年
増鏡 二十卷	82後鳥羽―96後醍醐 壽永二―元弘三 一八四三―一九九三 （一五一年間）	未詳	第七
池の藻屑 十四卷	96後醍醐―107後陽成 元弘三―慶長八 一九九三―二二六三 （二七一年間）	荒木田麗女	第八 明和八年

【性質】歷史物語は史實を主とした小說的作品であるが小說ではない。物語（別項）は多くの場合小說と同意語であるが、歷史物語は歷史小說（別項）と同意ではない。同じ歷史的事實を材料としたものでも小說的要素の多い秋成や馬琴の作は勿論歷史物語ではなく、歷史小說と呼ばれる樗牛の「瀧口入道」や塚原澁柿園・渡邊霞亭の諸作は、時代や人物やあら筋だけは史實によるが、半ば以上空想の所產であつて歷史としての價値は殆どない。これに反し、歷史物語はどこまでも歷史である。而して同時に文學である。八種の歷史物語は、取扱つた年代も著作の年代も異なるため、その間に可なり大きな相違があつて、一概にその性質を述べる事は困難であるが、大體次の六項が數へられる。（一）史實に忠實である。勿論多少の誤謬はあるが、それは故意の變改ではなく、戰記物語が興趣のために時に事實を枉げる事を辭せなかつたとは大に異なる。「大鏡」「榮華物語」を一名「世繼」「世繼物語」といひ、「續世繼」（今鏡）「彌世繼」の著もあるが、「世繼」の意は世代のつぎ〳〵の事實を記したものの意で、「五代帝王物語」にも「國史世繼家々の記」と用ひてあり、「大鏡」の話者「大宅世繼」は「朝家の歷史」の意を寓してゐる。（二）文學的表現に工夫を凝らしてゐる。純然たる歷史として莊嚴の筆を運ぶよりは物語風の筆致により興趣を豐かならしめようと努めてゐる。（三）具象的・立體的描寫。史實の列擧が乾燥無味に終る事に着眼した「大鏡」の作者は、史實を目擊した老人の對話によつて具象的に再現する描寫法を創案して大成功を示し、以後の作者皆これを摸した。（四）客觀的。物語的ではあるが結局史實の描寫が主眼であるから、作者の主觀を加へる餘地は殆どなく、他の物語に作者の主觀が織り込んであるのと大に異なる。たとひ批判を加へ褒貶の意を寓するにしても、それは極めて嚴正公平な態度で臨んでゐる。（五）文學として至上の地位を占め得ない。作者は文學的價値を高めようと努め、材料の取捨選擇に多大の苦心をしてゐるが、しかし史實に忠實といふ大方針なるが故に、小說的構想を恣にする自由がない。この點は「平家物語」が史實と空想とを適宜に混じて、文學としての價値を高めてゐるのに比して必然不可避の事情である。（六）對話體といふ特色を有する一群の史的文學である。神代から紀元二千二百餘年までの歷史が事實を目擊した古老の會話で語りつづけられたこの文學群は、たとひその二三を除いては高い價値をもたぬにしても、國文學中に異色ある存在として特異の性質を發揮してゐる。



【發生】歷史物語發生の事情は歷史・文學兩方面から考へられる。（一）歷史としての發生の事情。日本歷史は古く「古事記」があり、更に勅修の六國史が漢文體で編述された。その第六「三代實錄」が延喜元年に完成したのを最後として、第五十八代光孝天皇の御代までの記述で史書の筆がとゞめられた。歷史物語最初の作である「榮華物語」は即ち第五十九代宇多天皇から筆を起してゐる。いふまでもなく個人の作であり、道長の榮華を讚歎する事に敍述の中心を置いてはあるが、六國史のあとをつぐ意志のあつた事は疑ふ餘地がない。漢文を捨てて假名文で書いたのは、平安末期に於ては、漢文の衰へた事も一つの理由ではあるが、それよりも重要な理由は、平安朝の優雅艶麗な貴族生活を描寫するには流麗柔婉な假名文の方が、はるかに適當であるといふ點で、この作者の態度に對しては、何人も決して異議がない。（二）文學としての發生の事情。（イ）平安末期、物語の行詰りを打開して新様式を創始したこと。「竹取物語」を祖とする平安朝の物語は中期に於ける「源氏物語」を最高峰として以後衰微頽廢し奇矯荒誕の說話に逸脫して物語の本領である寫實的態度から遠ざかり、萎靡頽廢のものとなつてしまつた。こゝに於て史實を材料とし、これを物語化して新様式を創始しようと着眼した作者の出現は、史的展開の徑路から觀れば必然でもあるが、また正に作者の烱眼でもある。（ロ）現在の衰へをなげき、過去の榮華を讚歎する心の叫びから生れ出でた。平安朝貴族文化の代表者である御堂關白道長が萬壽四年に薨じて以來、京都中心の貴族の勢威は急速に衰へはじめ、地方に蟠居雌伏してゐた武家が漸く擡頭して來た。平忠常の叛亂は實に道長薨去の翌年である。日に月に衰へ行く貴族が古への權勢を懷想し、追慕し、讚歎するのは人間必然の至情で、こゝに過去の榮華――その代表者たる道長の限りなき榮華――を筆にしたもの、即ち「榮華物語」であり、「大鏡」である。以上の說明に省いた點を補つて、その發生の系統を圖示すれば別表の如くになる。

【參考】歷史物語　芳賀矢一〇歷史物語の本質[illegible]研究[illegible]上（改造社日本文學講座第三卷）〇歷史物語の[illegible]（國語と國文學昭和二ノ四）〔[illegible]〕

歷世女粧考（れきせいぢよしやうかう）風俗　四卷【著者】岩瀨百樹【成立・由來】卷初にある附言に據ると、友人北村信節から遊女の古畫について遊女か否かを聞かれたことから、女粧考を書く志を起し、爾來資料を蒐集すること二十九年、弘化四年に至つて成立したものである。【刊行】安政二年十一月【諸本】百家說林續編中卷所收。【解說】鏡・櫛・笄・油等に關して、上代から近代に至るまでの沿革を古書・古畫に徵したり、又は外國の例に參照したりして考證したもので、筆致頗る精細を極めてゐる。卷一には鏡の始原、鏡の種類、鏡臺、櫛の權輿、櫛の種類を說き、卷二には櫛の種類を說き續け、轉じて神代の髪飾、孝謙天皇の髻、釵子、花かんざし等に及び、卷三には剃刀、小兒の髪、寶髻、垂髪、兵庫、島田髷の起原等、卷四は勝山、丸髷、片外、たぼさし、びんさし、かもじ、びんみの、水油、元結、御齒黑の始原等を記してゐる。著者はこの四卷を以て前篇とし、更に後篇を刊行する志があつたもので、書中前篇と記すばかりでなく、後篇の目錄をも作つてこの書の後に載せてあるが、遂にその志を果さないで終つたと見える。〔石村〕

歷世服飾考（れきせいふくしよくかう）風俗史　八卷【著者】田中尙房【刊行】明治三十六年【成立・由來】著者公務の餘暇考證十餘年、未だ完成しない中に歿したので、その子尙久、牛井眞澄・水倉嶺と謀つて遺稿を校訂し、高山青峰に繪を畫かせ、近藤芳介・宮岡百錄の序、牛井眞澄の著者小傳を加へて、死後三年を經て明治二十六年稿全く成り、一本を宮內省に一本を北野神社に收めたもの。【諸本】故實叢書所收。【內容】上古より近世に至るまでの服飾の變遷を敍述したもので、一卷、服制沿革。二卷上、冠之部。二卷下、幘之部・頭巾。三・四・五卷、衣之部。六卷、袴之部・犢鼻・脚帶・脛巾・行纏・襪・沓・裳之部・手覆・帶之部・位袋・魚袋。七卷、笏・扇・履之部。八卷、服色之部にわかれてゐる。悉く古記古畫を引いて論證し、各卷の首に引用書畫の目次を揭げて出處を明かにしてゐる。【價値】從來の裝束抄が兎角實用方面に留意しがちで、徒らに零碎な記述をなしたに過ぎなかつたのに對し、この書が客觀的に、服制・服飾の變遷推移の跡を尋ね、史的見地から分類し記載して後の服飾史研究の道を開いた點に於て、從來の裝束抄に超越した位置を占めるもので、殊にその研究範圍が單に公家・武家の服制・服飾のみに止まらず、更に庶民階級の服裝にまで觸れてゐることは、服飾研究史上最も注意せらるべきものである。【著者小傳】幼名哲作。又哲郎。天保十年十一月二十二日名古屋江戶町に生る。夙に名古屋藩士植松茂岳に就いて國學を學び、又醫術を好み、二十六歲の時、皇國病名集二卷を藩主に獻じて嘉獎された。明治元年十二月國學敎授を命ぜられ、翌年管內神社改訂の命を受け、革正する所が尠くなかつた。同四年中學助敎試補となつたが、間もなく辭して尾張國愛知郡大高村に移住した。後、熱田神宮少宮司・伊賀國敢國神社宮司・八坂神社宮司を經て、九年一月北野神社宮司となり、爾來十五年、一時平野神社宮司を兼ねた事もあつたが、終始北野神社に奉仕した。その間、少敎正正七位に敍せられた。明治二十四年十二月七日歿す。享年五十三。著書は「歷世服飾考」の外に「[illegible]全書」三卷がある。〔石村〕

歷代滑稽傳（れきだいこつけいでん）俳諧史　一冊【著者】森川許六【名義】この滑稽とは俳諧の義で、歷代の俳諧の傳の義である。【成立】正德五年八月（[illegible]の月）【刊行】正德五年【諸本】許六全集（俳諧文庫）・俳諧系譜逸話集（俳書大系）所收。【內容】許六の最後の述作である。先づ俳諧の起原を一言し、守武・宗鑑・望一・貞德・立圃・重頼・西武・梅盛・貞室・貞恕・季吟・岡田將監・慶友・玄札・德元・宗因・松意・常矩・高政・弘氏・信德・素堂・芭蕉翁桃青までを簡單に評傳體に述べ、桃青の條下にはその門人及び俳諧集等を比較的精しく述べ、末に一枚起請及び俳諧指南の二篇を添へて終つてゐる。この後に、許六の辭世及び終焉の際の模樣を簡單に記した文と奧書とがあつて、奧書の末に正德五年九月書寫の年時書きと門人治天・就園・孟遠・雲鈴の連名がある。奧書は許六の遺言によつて追善集を作らない事を述べたもので、即ち卷末に辭世や終焉の小記を附したのは、本書を追善集代りとしたものであることを暗示したものである。【價値・批評】簡單なものながら又評傳體のものながら、俳諧史として書かれた最初のものである所に價値がある。一枚起請は蕉風についての重要事を五條に分つて說いたもの、俳諧指南は蕉風の指南として述べたものであるが、要は芭蕉の血脈を傳へたものは自己一人で芭蕉二代目を以て任じたものである。評傳の部は簡明にして參考となるものが多く、末の二篇も蕉風について益するものがあるが、芭蕉の門人について說く所には誤もあり、特に路通・荷兮・野水・越人・木因を勘當の門人といふは、事實を誣ひるものであり、又末の二篇も、物を誇大に云ふ許六の性癖の禍せるものとして斟酌を要する。〔志田〕

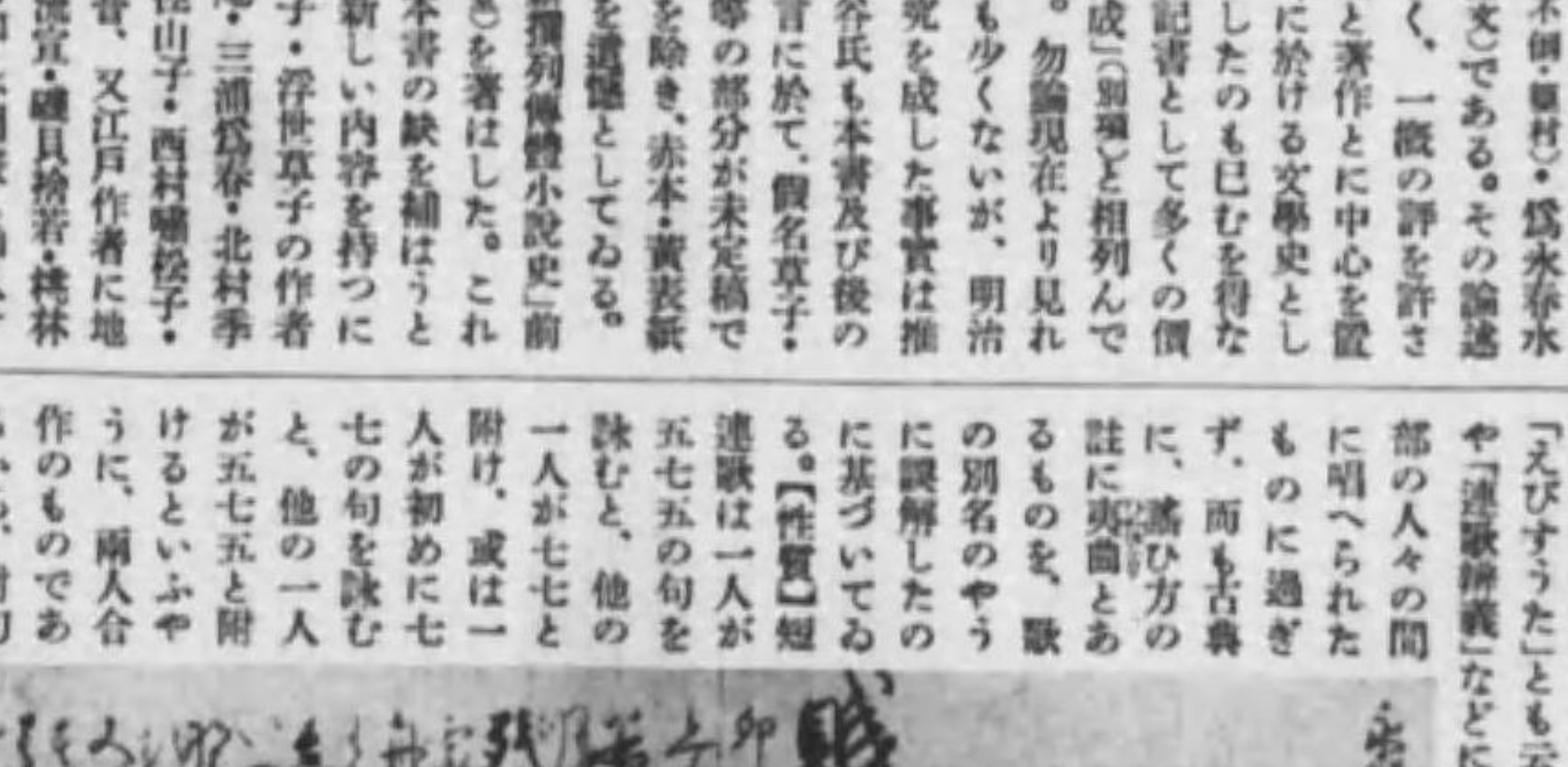
歷朝詔詞解（れきてうせうしかい）註釋書　六卷【著者】本居宣長【名稱】正しくは「續紀歷朝詔詞解」と云ふ。【成立・由來】本書は宣命研究の嚆矢である。宣長は「古事記傳」（別項）の著述に從事する中に明和四年（三十八歲）の頃、祝詞・宣命（各別項）を研究して古代の助辭を究明する必要を感じ、屢々師の眞淵に質疑を重ねたが、その質問と應答とを記したものに「續紀宣命問目」二卷（増補本居宣長全集第十所收）がある。その後天明八年五月には「續日本紀」中の宣命を抄出して宣命抄を作つた（本居宣長全集第二輯）。これ等は後年本書を著述する基礎となつた。本書は寬政十一年六月に起稿し、翌年四月七十一歲の時完成した（本居清造「鈴屋翁略年譜增正」）。即ちこの書は「古事記」の研究中、古代の助辭の用法・意義を明かにする必要上から着手せられたもので、古事記傳の準備事業の一であり、又副產物の一である。【刊行】享和三年三月大神安守の序を附し、同年九月刊行。【諸本】本居宣長全集所收。【解說】「續日本紀」中の宣命六十二篇を抄出し、訓方・解釋を施したもの。先づ卷頭に、宣命の總說として「まづとりすべていふ事ども」が揭げてある。この總說に於ては、先づ漢文の詔書と和文の宣命との區別及び宣命の意義を說

き、「續紀」所收の宣命を「延喜式」所收の祝詞と共に、古文中の最も勝れたものであることを論じ、次いで「續紀」以後の宣命が時代を下るに隨つて漢文の影響を受けて本來の面目を失ひ、ために文章は拙劣になつたことを說いて、「續紀」宣命の價値を明かにし、なほ宣命の起草者、宣命書の形式、宣讀の儀式などを說明して、最後にこの書の著述方針を簡單に記してゐる。註釋は第一詔文武天皇受禪の時の宣命に始まり、第六十二詔光仁天皇延曆八年九月の宣命に及んでゐる。註釋の方法は最初に各宣命を下された時の「續紀」の記事の一部を抄出して簡單な解說を施した後に、諸本を照合して校定した本文を掲げ、その右側に片假名の讀方を附し、脫字として補つた語句は○で圍んでゐる。その訓詁の態度は宣命の一々の語句を抄出して、記・紀・萬葉・祝詞及び宣命中の用例を引いて歸納的に解說し、他の古典に未だ用例を見出さない難語に對しては、類推によつて私見を述べてゐる。その他語學的見地から、宣命の文章・用語などの特徵を明かにし、特に動詞の用法に就いて觀察した點などは、本書の長所とする所である。古言・古意を尊重し、漢意・佛教思想を排斥した著者の平素の思想は、この書にも到る處に見えるのであつて、宣命中の漢文の部分に對しては攷證・註釋を省略してゐる。かくて讀方・釋意の態度が歸納的であり攷證的であるのは長所であるが、宣長が校合した寫本の範圍は、比較的狹いのであつて、本文の校訂には殘された點が少くない。又その誤字と認めたものや、脫字として假に補つたものや、試みに立てた私見の中には、なほ後の勘考に俟つべきものがある。例へば第七詔中の「刀比止賦彌毋」や「波刀比」の如きはそれである。併し本書は、宣長の殁する前年に成つたものであつて、彼の訓詁的研究の大成と見るべき代表的著述であり、而も宣命はこの研究によつて始めて廣く讀まれるやうになつたのであるから、その古典研究上の功績は不朽である。（次田）

列聖全集 れつせいぜんしふ　叢書　二十五冊【編者】列聖全集編纂會【刊行】大正四年より六年に至る。【解說】神武天皇より明治天皇に至るまでの聖天子の御製・御撰・御宸翰・御宸筆を最も信憑すべき諸資料から纂錄したもので、歷代の天皇が文化の方面にも國民と深い接觸を保ち給うた御威德を偲び奉るよき資料であるのみならず、文學史の上からも貴重な文獻をまとめたものと云へる。御撰集六卷、御製集十二卷、宸記集二卷、詔勅集三卷、皇室御撰解題一卷、宸筆集一卷（寫眞版）。（土井）

列傳體小說史 れつでんたいせうせつし　文學史　二卷一册【編者】坪內逍遙・水谷不倒【名稱】內題に「近世」の角書あり。【成立】「早稻田文學」に掲載された諸氏の近世作家評傳を集め、それに水谷氏が、寬文・元祿頃の作者を補つたもの。【刊行】明治三十年五月、春陽堂。【內容】上卷、第一章「德川文學の起原」は寬永より延寶に至る間の文運を槪說し、第二章より作家論に入り、先づ「假名草子」を採り、如儡子・鈴木正三・山岡元隣・淺井了意を論ずる。第三章は「浮世草子」に及び、井原西鶴・西澤一風・都の錦・錦文流を舉げ、「八文字屋もの丶作者」として江島屋其磧・八文字屋自笑・多田南嶺、「敎訓もの、怪談もの丶作者」として林文會堂・靑木鷺水・北條團水・月尋堂（第一章よりこゝ迄總て不倒氏執筆）・上田秋成（關笑門）・上田秋成（饗庭篁村）を論ずる。下卷、第一章は「浮世草子の衰運、江戶小說の發生期」を論じ、第二章に「江戶作者」を評して終る。卽ち山東京傳（不倒）・曲亭馬琴（[illegible]）・式亭三馬（不倒）・十返舍一九（同上）・柳亭種彥（不倒・篁村）・爲永春水（不倒）・假名垣魯文（野崎左文）である。その論述の方法は精粗の差甚だしく、一概の評を許さないが、大體に於て傳記と著作とに中心を置いてゐる。【價値】當時に於ける文學史としては、著者の解說を主としたのも已むを得ない。併し從つて本書は傳記書として多くの價値を持ち、「國學者傳記集成」（別項）と相列んで貢獻する所が大であつた。勿論現在より見れば誤りも多く、不備の點も少くないが、明治三十年代にこの困難な研究を成した事實は推稱さるべきであらう。水谷氏も本書及び後の「新撰列傳體小說史」の緖言に於て、假名草子・浮世草子・八文字屋もの等の部分が未定稿であつた事、又淨瑠璃作者を除き、赤本・黃表紙の作者に觸れなかつた事を遺憾としてゐる。【附記】後に不倒氏は、「新撰列傳體小說史」前編一册（昭和四年七月、春陽堂）を著はした。これは同氏一人の筆に依つて本書の缺を補はうとしたもので、結果は殆ど新しい內容を持つに至つた。卽ち前編假名草子・浮世草子の作者中に烏丸光廣・朝山意林庵・三浦爲春・北村季吟・中川喜雲・雛屋立圃・椋山子・西村嘯松子・西澤貞陸・森本東烏・紀海音、又江戶作者に地黃坊樽次・立羽不角・石川流宣・磯貝捨若・桃林堂・奧村政信等十七人を增加し、調査も挿入すること九十餘種に及んでゐる。（鶴見）

連音論 れんおんろん　「音聲學」を見よ。


毛利元就等賦何人連歌懷紙（毛利公爵家藏）

連歌 れんが　【名稱】源經賴の「左經記」などには聯歌と記してあるが、連の字を用ひるのが普通である。近古には「つらねうた」と記したものが「袋草紙」などにも見えてゐるが、「曾丹集」にあるつらねうたは、數首の短歌を文字鎖のやうにした連作で、これとは別である。又「えびすうた」とも云つたことが、「筑波問答」や「連歌辨義」などに載つてゐるが、これは一部の人々の間に唱へられたものに過ぎず、而も古典に、謠ひ方の註に夷曲とあるものを、歌の別名のやうに誤解したのに基づいてゐる。【性質】短連歌は一人が五七五の句を詠むと、他の一人が七七と附け、或は一人が初めに七七の句を詠むと、他の一人が五七五と附けるといふやうに、兩人合作のものであるから、附句は前句に引かれながらも新意を有し、前句と相俟つて渾然たる作とならねばならぬ。その初めには和歌の餘興として娛樂的に用ひられたものであつたが、後には獨立の文學となつた。附ける人の手腕により平凡なものも警拔に、眞面目なものも滑稽に、小さなことも大きく、大きなことも小さく轉成する場合が多いのである。長連歌は前句に後句を附け、次にはその後句を又前句と見做して後句を附け、かくて五十句とか百句とかの多きに及ぶのである。それ故句數が重疊しても、その中の二句づつが互に連繫するを要し、全篇を通じて一貫する意味はないのである。譬へば鎖の一節々々が切り放しても生命を持つてゐるが如くである。要するに變化を尙び、刹那々々に別々の情趣を味ひながら移つて行く特殊の文學である。この長連歌は多人數で共作するのが本來であるが、後には單獨でも試みるやうになつた。これを獨吟といふ。【種類】連歌には、時代により特質によつて、有心連歌・無心連歌・狂連歌（各別項）・俳諧連歌などの名目があり、連歌から派生したものに聯句連歌があり、その作られる場合や目的によつて法樂連歌・追善連歌・祈禱連歌・多和聞連歌・俵記連歌（各別項）などがあり、その興行される特殊な場所によつて北野奧白連歌・淸水連歌・幕府御嘉例連歌（各別項）などがある。又長連歌を作る式には本式・新式（各別項）があり、その形式には百韻・千句・萬句・四十四・歌仙（各別項）などがあり、これ等を懷紙（別項）に記す式の懷紙式や句々の按排の仕方の發式（別項）がある。その他連歌の規定の條目たる式目や會席（別項）などのことがある。【沿革】連歌は、普通には日本武尊が甲斐の酒折の宮で、火燒の翁に對して「新治筑波を過ぎて幾夜か寢つる」と問はれ、火燒の翁が「かゞなべて夜には九夜日には十日を」と答へたのに始まるとして、後世連歌道を「筑波の道」と呼ぶやうになつた。併し、これは片歌の問答であつて、この類ならば、これよりも早く、伊須氣余理比賣命と大久米命との唱和が、神武天皇の御代にあつたことが「古事記」に見えてゐる。一首の短歌を尼と大伴家持との兩人で詠んだものは、「萬葉集」卷八に一首載つてゐるが、これを短連歌の濫觴とも見得る。長連歌は院政時代に起つた。花園左大臣有仁家で行つた鎖連歌（別項）の斷片が、「今鏡」花のあるじの卷に載つてゐる。平安朝時代には、主として短連歌が行はれ、鎌倉時代の初めに至り長連歌が流行し、漸次和歌を壓倒して公家より地下にも普及した。かくて南北朝時代には名匠も多く、その道も確立し、室町時代に至つて最も隆昌を極めたが、江戶時代に入つて漸く衰へ始め、明治維新以後は殆ど絕滅の有樣となつた。救濟・二條良基・高山宗砌・飯尾宗祇（各別項）などは、南北朝室町時代に於ける最も代表的な名匠であり、總集としての「菟玖波集」「新撰菟玖波集」「竹林抄」や、個人の集としての宗祇の「萱草」「下草」「老葉」、兼載の「園塵」、宗長の「壁草」や、連歌論書としての良基の「筑波問答」、宗祇の「吾妻問答」（以上各別項）や、式目書の「應安新式」等は、何れも重要な位置を有つものである。【參考】連俳小史（佐々政一）〇連俳史（樋口功）〇連歌の史的研究（福井久藏）〇連歌及び連歌史（山田孝雄）（岩波講座日本文學）〇連歌から俳諧へ（志田義秀）（俳文學の考察）〇連歌史槪說（福井久藏）（俳句講座史的研究篇）（福井）

連歌合 れんがあはせ　連歌【解說】歌合に倣つて連歌を合せることもないではなかつたが、和歌や俳諧に於けるほど行はれず、極めて少かつた。心敬の「さゝめごと」に、「近き頃始めて連歌を歌合の儀式に少しき事もかはらず、句を左右につがひ、當座にさま〳〵の審議ありて、勝負を定め侍りしこと度々なるとかや云々」と見えるが、室町時代の初め頃位に起つたものらしく、一時流行したやうであるが、長くは續かなかつたらしい。現存してゐる最も古いものは、應永二十二年二月梵灯庵連歌十五番合である。これは自分で自作を合せ、仙洞の御點を受けたものである。外に永正中橋本殿連歌合三十番等がある。（福井）

連歌茶談 れんがさだん　連歌書　五卷【著者】僧無相。無相はもと泊瀨に居り、後、江戶に出て湯島の茱院に住し、白雲堂と號した。【刊行】前編は文政三年、後編は同五年、續編は同六年、殘編は同七年、別集は同八年。【內容】前編は連歌の式法、その他連歌に關する評論・雜說を雜錄したもので、終りに抄物作者のことを附錄としてある。大田覃（南畝）の序があつて、この序は後編・續編・殘編・別集にも載せてある。後編・續編共にその體裁・附錄とも前編に準じ、自跋の外に屋代弘賢の序があり、殘編もその體裁は前に同じく、權僧正實常の序があり、別集は前の續きで、龍玕法師の序がある。（福井）

連歌至寶抄 れんがしはうせう　連歌書　一卷【著者】里村紹巴【成立・由來】奧書によると、天正十年將軍になつた明智光秀のために撰して獻上したものと考へられる。古寫の一本の奧書には、元の奧書に「天つ正しき十とせ云々」とある所を、「天津正直云々」と改め、「慶長九年未春中旬」とあるが、或は德川氏を憚つてかく改めたものか。【諸本】內閣文庫本・帝國圖書館本があり、板本には大小二種あつて、大本は正保三年開版である。【內容】作意肝要なる事、去嫌も次第にむづかしくなつた事、歌と連歌との區別、歌道本意といふ事、本句切字の事、四季に於ける言葉等を說明したものである。（福井）

連歌執筆次第 れんがしゆひつしだい　連歌書　一卷【著者】不明【名稱】「連歌十三條」ともいふ。【成立】不詳。但し慶長頃の寫本があるから、それ以前のものであるが、執筆の作法は旣に良基の「筑波問答」（別項）の中に記され、一條兼良に「連歌執筆作法」の著もあつて、本書はその以後、室町時代末頃の著かと思はれる。【諸本】圖書寮本・神宮文庫本があり、續群書類從連歌部所收本がある。【內容】連歌の會席（別項）に於ける執筆（別項）の作法を述べたもので、作者の身分に對する心得、懷紙に於ける記し方、文臺の捌き方、文字遣の用意等十三條に分つて述べたものである。（福井）

連歌初學抄 れんがしよがくせう　連歌式目書　一卷【著者】一條兼良【成立】享德元年十一月【諸本】寫本として傳はるものの外、延寶中の刊本、群書類從連歌部所收本がある。【解說】本書は兼良が「應安新式」（[illegible]）に新式今案（別項）を加へた時、別に初學のためのものとして簡略に記した連歌式目書で、三項から成つてゐる。卽ち賦物（別項）に關すること五條を說いた一項、發句・脇句の同字並に物名は表八句のうち五句を隔てても嫌ふべきことが一項、戀・述懷・名所等は、一の懷紙の引違の節二句までは表の如く附けてはならぬことが一項、以上三項を記したものである。（福井）

連歌新式 れんがしんしき　「新式」を見よ。

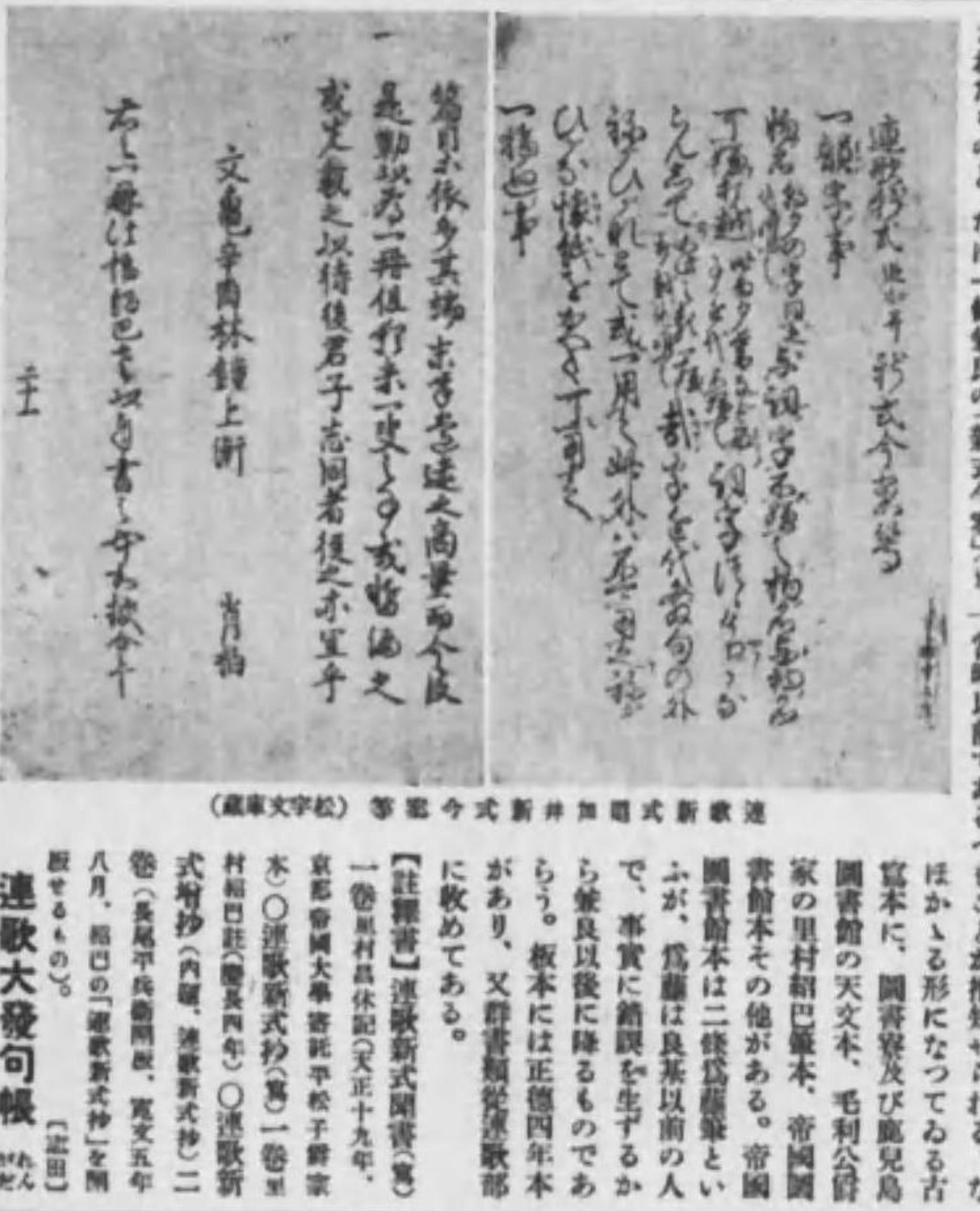
連歌新式 れんがしんしき　連歌式目　一卷【著者】二條良基【名稱】著作時の年號によつて「應安新式」とも呼ばれる。【成立】應安五年【解說】應安五年十二月の良基の奧書に、「右

大概准二建治式一作レ之、但當世好士所二用來一多不レ及二取捨一只爲レ止二當座之評論一粗所レ定如レ件」とあつて、これによつて建治式に准じた事と制定の事情とが知られるが、同著の「筑波問答」（別項）の方に「當時もちゐる新式は、大納言爲世卿作られ侍にや。しかあれども、地下のともがらおほく當座の了見によりてふるき式をそむく事侍り、爺（實は良基）が存處の式目を出し侍るなり」とあり、なほ同著の「連理秘抄」（別項）には「建治の新式」とあるので、これ等によつて、制定の事情が傍證されると共に、建治式は爲世の制定で、且つ新式であつたらう事が知られ、良基の制定はこれに準據した新式であつた事が知られる。然るに建治式は傳はらぬのであるから、如何なるものであつたか知られぬのであるが、良基は應安の新式制定以前に著はした「連理秘抄」の後半に、既に連歌式目と擬して式目を記してゐて、これも建治の新式を基として會釋を加へたとあり、これが應安の新式の前身である事は確かであると共に、建治式により近いものであらう事が推せられるので、これによつて建治式の大要を想像し得るのみである。一條冬良の「撰和法式」（別項）の奥書によると、良基は應安の新式の追加をもした事が知られるのであるが、良基の「新式并に追加」は單獨には傳はらず、一條兼良の「新式今案」（別項）をも合入した「連歌新式追加并新式今案等」（別項）として傳はるのみであるから「連歌新式并に追加」は、「連歌新式追加并新式今案等」から「新式今案」の合入と推せられる多少のものを除いて考へる外、「連理秘抄」の連歌式目との比較によつて、或る點まで想像し得るのみである。それによれば「連歌新式并に追加」は、「連理秘抄」の連歌式目とは出入があり、なほ精しくされたものと考へられる。該式條目の內容は別項「新式」參照。

【參考】連歌の史的研究前編（福井久藏）○連歌及び連歌史（山田孝雄）（岩波講座日本文學）　（峯田）

連歌新式追加并新式今案等（れんがしんしきつゐかならびにしんしきこんあんとう）　連歌式目　一卷　【解說】二條良基の「連歌新式」（別項）に、その追加の合入されたものと、なほ一條兼良の「新式今案」（別項）の合入されて一部となつたものである。これには良基の「連歌新式」の應安五年十二月の奥書及び兼良の「新式今案」の享德元年十一月の奥書が附いてゐて、良基の追加の奥書のない點から考へると、良基の追加は初めから合入追加されたものかと考へられるが、兼良の「新式今案」は元來別冊のものであつたかと推せられ、それがいつ頃か誰かによつて合入されたものであらうと考へられる。その時期は確かには知られぬが、文龜元年五月上旬冷泉爲豐の奥書ある岩瀨文庫本があるといふから當時以前であるべきことが推知せられる。なほかゝる形になつてゐる古寫本に、圖書寮及び鹿兒島圖書館の天文本、毛利公爵家の里村紹巴筆本、帝國圖書館本その他がある。帝國圖書館本は二條爲藤筆といふが、爲藤は良基以前の人で、事實に錯誤を生ずるから兼良以後に降るものであらう。板本には正德四年本があり、又群書類從連歌部に收めてある。

【註釋書】連歌新式聞書（寫）一卷（里村昌休記（天正十九年、京都帝國大學寄託平松子爵家本））○連歌新式抄（寫）一卷（里村紹巴註（慶長四年））○連歌新式增抄（內題、連歌新式抄）二卷（長尾平兵衞開板、寛文五年八月、紹巴の「連歌新式抄」を開板せるもの）。　（峯田）


連歌新式追加并新式今案等（松宇文庫藏）

連歌大發句帳（れんがだいほつくちやう）　連歌書　十卷　【編者】未詳　【刊行】寛文六年仲秋　【諸本】刊本の外、圖書寮本は四卷に合綴してある。【解說】春・夏・秋・冬・雜の部立を設け、南北朝時代から室町時代末までの優れた連歌作者の發句を類聚したもので、作者には救濟から宗砌・心敬・宗祇・宗長・兼載・肖柏・宗牧・宗養・周桂・昌休・昌叱・紹巴等がある。　（綿井）

連歌提要（れんがていえう）　連歌書　二卷　【著者】水間沾德　【成立】享保六年　【解說】連歌の式法・發句・切字以下百餘條に分けて說示したもので、その中のてにはに關するものは、牡丹花肖柏の「てにをは口傳抄」を基とし、古來秘抄の品々に就いてその要を提し、故人・賢才の說々のその妄を刪し、且つ師說（飛鳥井雅章であらう）を加へ、「連歌辨疑」（別項）を補つて上下となし、提要と名づけた由が自跋に明かである。　（綿井）

連歌比況集（れんがひきやうしふ）　連歌書　一卷　【著者】宗長說と兼載說とがある。前者は、宗長が壬生下總守の問に對して答へたといふ說である。【諸本】「廣益書籍目錄」には、「宗長連歌比興抄二卷」とある。また弘治二年十月六日金阿彌の奥書のある內閣文庫本には、序文があつて、「爰に宗祇法師といへる人ありき。予不敏なりといへども、より〳〵此道をなげき、卿公の水をうつし敬公の風を仰ぎ云々。しば〳〵庭訓を受け侍り云々。この道を殘して末の世に傳へ侍らむ例し、曉の淚と共に浮び侍るごとに、燈を挑げ筆にあらはし、一卷となして云々」とある。宗祇をたゝへて庭訓を受けたといふ所は兼載とは思はれず、宗長と考へられる。然るに京大久原本並に平松子爵家本には、兼載の作で關東公方へ進上した由の奥書がある。久原本は天文二十二年九月二十六日、德大寺公維卿の自筆本で、內閣本の弘治二年よりは四年程古いけれども、內閣本の序文の趣によれば宗長の著と見る方が妥當で

あらう。【解說】連歌の附樣、連歌の仕立、前句の取樣、會席に交る心持、稽古の心持、花實いづれを先とすべきか、句數をすること等四十四條を、蓮の葉、五尺の菖蒲、夜の柱、淀川、乞食袋、逆茂木の如き譬喩とすべき題目を掲げて、面白く譬を假りて說いたものである。例へば蓮の葉に於ては、「連歌の附樣は蓮の葉の如し。前句を離れずして離れ、はなれて然も離れぬやうにあるべし」と說き起して說いてあるが如くである。本書の卑近なこれ等の譬喩は、後の俳諧にも屢々取られてゐるものである。　（綿井）

連歌毘沙門（れんがびしやもん）　能狂言　【格式】三番目相傳濟の部（和泉流）。

【梗概】この邊りに住ひする某が、いつも同道する者と一緒に、大晦日の夜、鞍馬の多聞天へ年籠に參る。通夜が明けて下向の途、一人が夜前夜半の頃、多聞天から御福のありのみ（梨）を下さつたと言ふと、一人はそれは兩人の內へ下さつたのだと言ひ爭ふ。遂に多聞天の御前で連歌をして、句柄によつてそれを取ることに折合が附き、一人が、「毘沙門の福ありのみと聞くからに」とすると、一人は、「くらまぎれよりむかでくひけり」と附ける。すると、毘沙門が汝等の常々信仰する多聞天だと示現する。さうして兩人を富貴にしてやらうと託宣をし、先刻兩人の爭つたありの實を、持つてゐる鉾で割つて取らせ、矛や兜を兩人に取らせる。

【構想】毘沙門天信仰を脚色したのには、別に「夷毘沙門」といふ狂言もある位で、こゝにも當時の世態の一部が反映されてゐる。それから連歌を用ひた狂言は「盗人連歌」「八句連歌」「箕かづき」等があるが、これは連歌が兩人を和合せしめた機緣となり、又それが毘沙門天を感動せしめたといふ筋で、全く「古今集」の序文に見える和歌の德の思想に基いたものである。この種の脇狂言は、能のやうに嚴重一方に偏せず、嚴重なやうで所々をかしみが籠つてゐるのが面白い。併し喜劇としては極めて單純なものである。　（野村）

連歌辨義（れんがべんぎ）　連歌書　三卷　【著者】阪昌周　【成立】明和六年　【刊行】明和七年　【解說】連歌の由來・沿革、前句附の濫觴、五十韻・百韻の事、和漢・漢和聯句の起、連歌本式、百韻の法、附合の事等を說いたもので、菅原家長の序、里村法眼昌桂の跋がある。連歌の諸方面を歷史的に考へたもので、その說には聽くべきものが多い。

【著者小傳】昌周は里村昌迪の子で、阪家を立て、幕府の連歌師となり、邸を江戸八丁堀坂本町に賜はつたが、楊柳園と號した。天明四年に歿し、深川本誓寺に葬つた。爾後子孫は御連歌師となつた。　（綿井）

連歌本式（れんがほんしき）　「本式」を見よ。

連歌本式（れんがほんしき）　連歌式目　一卷　【著者】猪苗代兼載　【成立】明應元年十二月　【諸本】群書類從連歌部所收。【解說】奥書に、「明應元年十二月　兼載作之」とあつて、「面十句。每句發句の賦物に合せてすべし」に始まつて、「名殘の裏、六句なるべし」に至る十三ケ條から成つて居り、その末尾に「此外應安之新式の如し」と記してある。宗祇は、明應二年に清水寺で花下（はなのもと）會本式百韻を作つたと言はれ、同三年三月九日には本式何人百韻を作り、同五年正月九日に清水寺で本式何人百韻を作つてゐて、これは清水寺に傳はつた本式の式目に據つたのであると言はれ（淸水連歌參照）、且つこれ等兩百韻に窺はれる法式は、兼載のこの「連歌本式」の法式に合致するから、兼載の該式も清水寺所傳の本式式目に據つたものかも知れない。該式には「此外應安之新式の如し」と記してゐるけれども、該式に記した十三ケ條は主要な條々と思はれ、それが應安の新式（連歌新式參照）とは異なり、「此外」といふ主要でない條々が應安の新式とは一致するといふことになるやうである。該式の條目の內容は別項「本式」參照。　（峯田）

連歌問答（れんがもんだふ）　「天水抄」を見よ。

聯句（れんく）　漢詩　【名義】聯詩とも稱し、多人數が寄り合つて作る詩をいふ。【性質】聯句はこれを形式上から見て四種に分類することが出來る。第一は一人一句づつを作つて、每句に韻（別項）を押したもので、所謂柏梁體といふのがそれである。漢の武帝の柏梁臺の聯句、梁の武帝の清暑殿の聯句などと稱せられてゐるものは皆これに屬する。第二は一人二句づつを作るもので、これには一人一聯、卽ち第一句・第二句を作り、以下順次に進んで行くものと、句を跨いで第二句・第三句といふやうに連作するものとの二種がある。第三は一人四句を作るもの、第四は句數の長短不定のものである。就中、第四の形式の聯句は、六朝時代の詩人が好んで慣用した手段であり、第三の形式は唐以後の聯句の常用の格式となつてゐる。次に聯句の押韻法は、一韻到底を常格とする。卽ち第一句の韻字に由つて、同韻中の文字を押すのである。併しながら、先づ韻字を分與して各自にその得るところに據つて賦すること、又分韻、卽ち各自の韻字を分與した譯ではないが、先づ韻目を定めて作者をして各自に自由に文字を探らしめて賦することなども行はれた。

【沿革】「書經」の元首股肱の歌を以て、聯句の起原とする人もあるが、「續文章緣起」には、「柏舟篇」を引いて、式微の篇がその初めであると云つてゐる。それは劉向の「列女傳」に、黎の莊公の夫人が莊の意を得なかつた。その傅女は「夫婦の道は義あれば合ひ、義なければ去るものである。意を得ずんば胡んぞ去らざるや」とて、「式微式微、胡不レ歸」といふ詩を作つた。すると夫人はこれを聞いて、「夫人の道は一のみ、何ぞ婦道を離れんや」とて、「微二君之故一、胡爲乎中路」といふ詩を賦けたといふ。降つて漢武の柏梁臺と稱せらるゝものがあり、柏梁の下には、顧愷之・桓玄・殷仲堪・陶淵明など、皆この作があつたと云はれてゐる。又「古詩源」には、梁帝の光華殿の聯句がある。唐に及んでは、李白は五言の律詩（別項）を以て「改二九子山一爲二九華山一」といふ聯句を作つた。宋之問は靈隱寺に到つて、「鷲嶺鬱岩嶢、龍宮鎖寂寥」の句を作り、その篇吟に非常に苦んでゐた時に、一老僧ありて、「樓觀滄海日、門對浙江潮」と續成したといふ。これが排律（絕句參照）の聯句である。その他五言絕句（律詩參照）・七言律（律詩參照）・七言絕句などの聯句がある。又異代聯句といふものがある。唐の文宗の「人皆苦二炎熱一、我愛二夏日長一」の句に、柳公權は聯ねて、「薰風自レ南來、殿閣生二微涼一」といひ、蘇東坡は改めて、「一爲レ居所レ移、苦樂永相忘、願言均二此施一、淸陰分二四方一」といつてゐる。又倍字聯句と稱して、唐人は一字より、九字に至る聯句を作つたものもある。奇は則ち最も奇を極めてゐるけれども、要するにそれは一時の遊戲に過ぎないもので

ある。

【本邦に於ける聯句】大津皇子の「天紙風筆畫雲鶴、山機霜杼織葉錦」の句に、後人がこれを續成して、「赤雀含書時不至、潛龍勿用未安寢」といつた「懷風藻」（別項）に見えるものが、聯句の初めになつてゐる。けれども我が國にて古來一般に用ひられた聯句は、和製であつて漢法ではなかつた。蓋し我が國の聯句は連歌（別項）から出たものらしい。韻法に限りがあつて、多くは隔句對で起してゐる。隔句對をなさざるものを獨句といふ。先づ唱ふるものを唱句、これに續くものを對句と呼ぶのであるが、その法頗る詩と異なつてゐる。慶長の頃上皇甚だ聯句を好み給ひ、侍臣僧徒を集めて綴らしめたまうた聯句集、卽ち「鳳城聯句」と稱せられてゐるものがあるが、その序にも、本朝の格式は殊域と異なるありと見えてゐる。我が國の聯句は、恐らく長連歌によつて、支那の聯句と和讃へて作つたものであらう。又後には漢句と和句とを並べて綴り合せ、和先きにして、漢後なれば、これを和漢聯句（別項）といひ、漢先きにして和後なれば、これを漢和聯句（別項）といふものが出來た。例へば「忍ぶ夜は雨もなか〳〵たよりにて、沙濕履無聲」の類は和漢聯句である。これもその淵源を尋ねれば、清少納言に、白樂天の「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中」といふ一聯の上の句のみを書信中に書いて、末は如何にと急がせた時、清少納言が「草の庵を誰か尋ねん」と書いて返したものなどにあらう。

【參考】詩格集成長山貫○詩轍三浦安貞○初學詩法貝原篤信　〔内藤〕

連句 れんく　俳諧【名義・名稱】もと漢詩の聯句（別項）に出づる名稱で、漢詩の方では聯句の文字を用ひられるが、俳諧の方では專ら連句の文字を用ひる（稀に聯句の文字を用ひることもある）。俳諧に於て長篇の俳諧を稱するやうになつた語で、その用例は既に元祿の俳書に見えるが、その後稀れに用ひられ來り、一般的用語となつたのは明治時代からである。

【性質】連句の形式に、百韻・五十韻・千句・歌仙・源氏・米字・四十四・短歌行・長歌行・首尾・表合・裏白・表白・三ツ物等があつて、この中連歌以來の形式もあるが、百韻が連歌以來の基本的形式であつた（卷式參照）。俳諧に於ては初め百韻・千句が專ら行はれたが、蕉風（別項）からは歌仙が專ら行はれるやうになつた。連句は、時代と流派によつて性質を異にしてゐる。貞門では物附、談林では心附、蕉風では句・響・移りの附方が主となり、芭蕉によつて連句は最も發達し、藝術的價値あるものとなつた。連句には、連歌の式目に基いた式目があつて詞の去嫌（別項）、一卷の式、附句の心得等に就いて種々論ぜられてゐるが、要するに連句の眼目は一卷の變化にあつて、それは思想・情緒の上に抑揚あり、緩急ある統一のある變化であつた。畢竟去嫌の制は變化の不足を調節するためであつて、芭蕉が歌仙は三十六歩である。一歩も後へかへる心はないと論じたのも、句々の變化の停滯を戒めたのである。支考も一卷を連ぬる事強ち一句の上を論ぜずと云つてゐる。次に連句は一座の空氣を定めることを要とする。一座の氣分が荒かつたり離れ〳〵になると、變化の調子が壞れて來る。芭蕉の捌いた連句の面白いのは、芭蕉の氣分が一座の空氣を統一したからで、その意味で連句には宗匠を必要とする。宗匠は一座の指合（別項）を見るばかりではなく、一座の空氣を定める上に必要である。連句は流派を共にする人或は調子の合ひ得る人々のやるものであるが、これ等の人々は座に宗匠がゐなくても、自然同樣の氣分になるので、それによつて連句が統一される。例へば蕉風の連句は寂びといふ情調で統一され、蕪村派の連句は典雅な情調で統一されてゐる如きである。情調の統一は連句に於ける重大事である。

【種類】連句に連歌以來の種類があつて、和漢聯句・漢和聯句（別項）・法樂・追善・祈禱・夢想・脇起し等や、形式・場合・作法等による種類がある。その中法樂の連句は神佛の法樂のために奉る連句、追善の連句は死者の追福のためのもの、祈禱の連句は神佛に祈願を籠める場合のもの、夢想の連句は神佛から夢想に句を授かつた時それに附け起すもの、脇起しの連句は古人の發句、又は舊作の發句を立句として脇句から附け起すもので、古人の發句を立句とするものは多く追善の場合に行はれる。

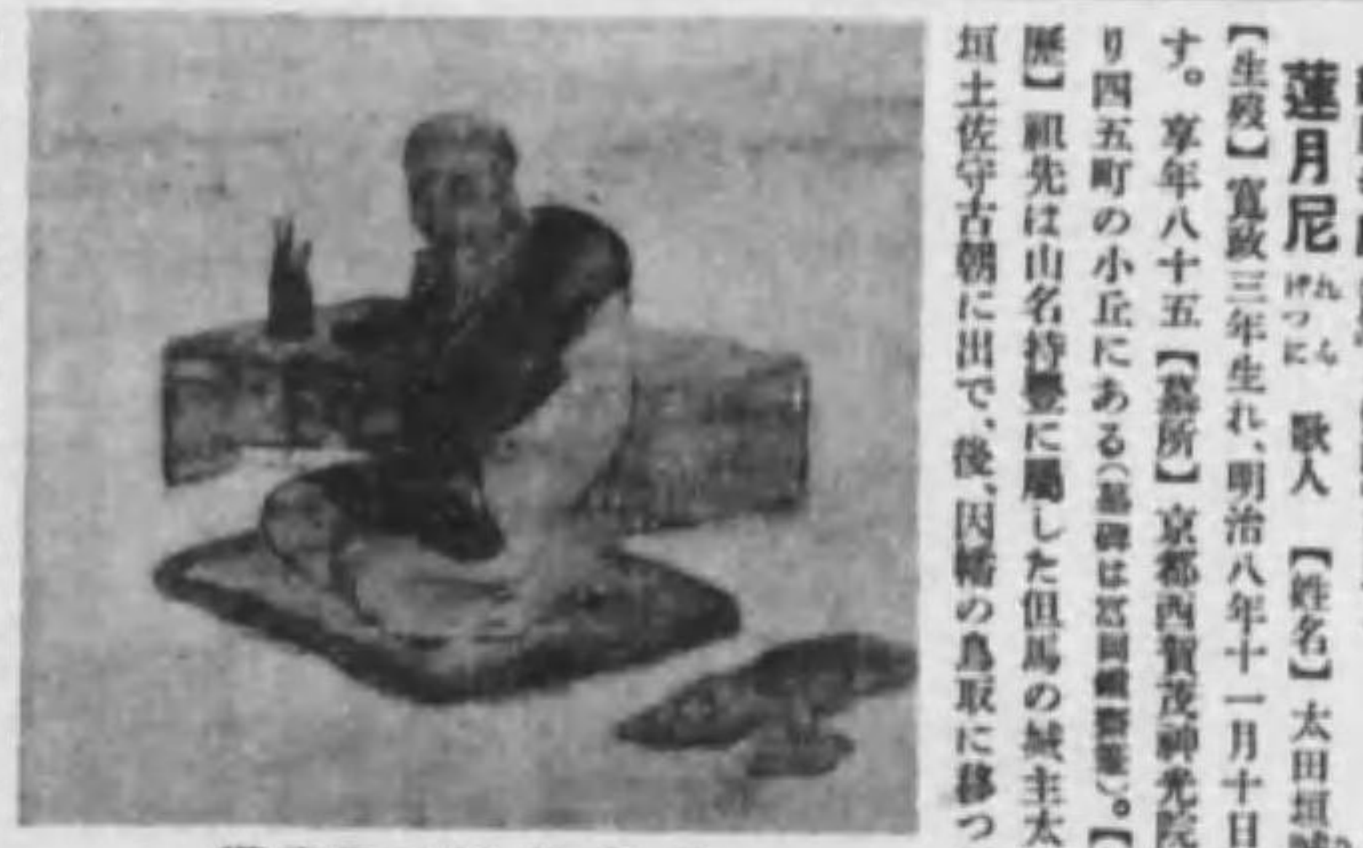
【沿革】貞門・談林（各別項）では連句の勢力が盛んであつたが、蕉風以後は世の降るに從ひ連句よりも發句の方が優勢となつた。附方も貞門の詞附、談林の心附から、蕉風の匂附に移り、それ以後は大體蕉風を趁ふものであつたが、時代によつて變化もあつた。調も貞門では優しき想を通俗な詞で滑稽的に表はさうとし、談林では同じく滑稽ではあるが輕口・もぢりの道化といふ如きものとなり、蕉風では寂を基調とするものとなり、安永・天明の復興俳諧では典雅な調子のものとなり、天保頃からは「炭俵」（別項）の輕みの皮相的模倣となつて俗了したのである。（俳諧卷式・式目參照）

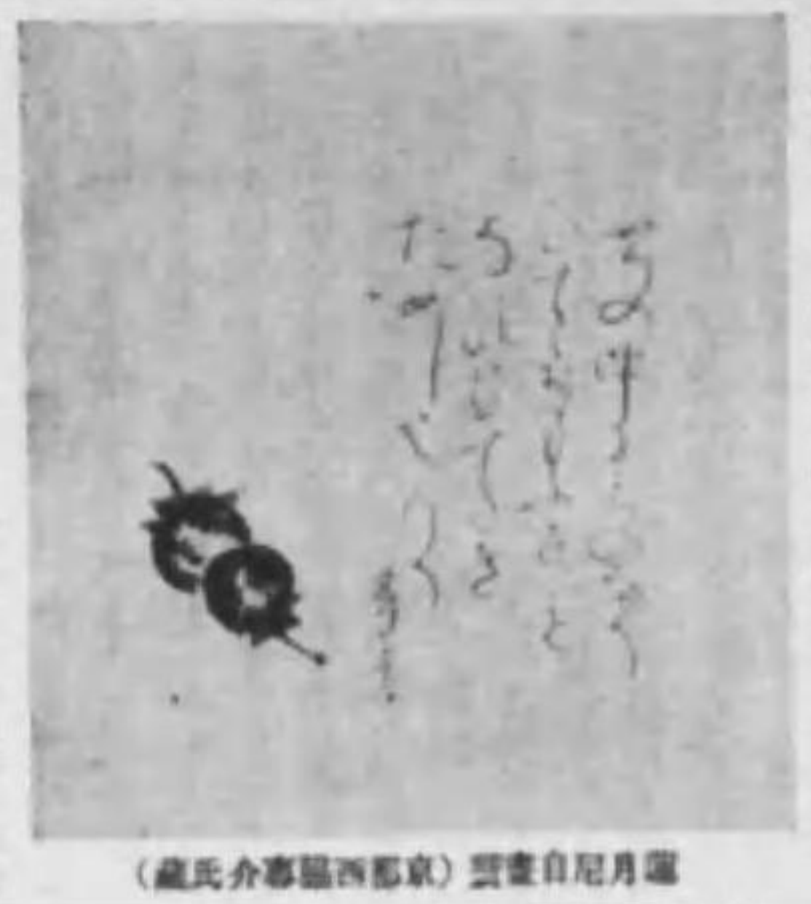
【參考】付合作法全集伊藤松宇（俳諧文庫）○連句入門沼山魁優○連句作法荻原蘿月（大日本俳諧講習會講義錄）○連句研究同上（日本文學講座）○俳句と連句の作り方小泉迂外○連句入門寒川鼠骨（俳句講座作法篇）○連句作法増田龍雨（同上）　〔穎原〕

連句連歌 れんくれんが　「和漢聯句・漢和聯句」を見よ。

蓮華寺殿 れんげじどの　「顯政」を見よ。

蓮月尼 れんげつに　歌人【姓名】太田垣誠。【生歿】寛政三年生れ、明治八年十一月十日歿す。享年八十五【墓所】京都西賀茂神光院より四五町の小丘にある。【閲歷】祖先は山名持豐に屬した但馬の城主太田垣土佐守古朝に出で、後因幡の鳥取に移つて農となり、伴左衛門光古の時に至つて、妻名和と共に都に來り、東山の知恩院に仕へた。これが蓮月尼の父母である。尼は幼より和歌をよくし、武技にも通じた。家に男子がないので、彦根藩士古川重二郎を養つて婿とした。文政二年に夫に死別し、子にも別れたので、同藩士の風見某の子を養つて古敎と名付け、父と共に剃髮し、蓮月と稱した（父は西心と云ふ）。尼は自分の容貌が美しいために挑む者があつたので、自ら釘拔で齒を拔いて誘惑を退けたといふ。生活のため陶器を製してこれに和歌を彫りつけて鬻ぎ、世に賞美された。後、東山の荒れた寺院に身を寄せて一鍋一椀の外は貧しき者に施して一錢も蓄へず、淸く高く淋しい一生を送つた。そのすぐれた性格と境涯とは、種々の美しい逸話を殘してゐるが、勤王の志厚く、三河の勤王學者村上忠順とも親しく交り、歌をも贈答してゐる。西賀茂神光院境内の御茶所なる草庵で世を去つた。【著書】海士の苅藻（別項）○蓮月歌集。


蓮月尼（富岡鐵齋筆）


蓮月尼自畫讚（京都西脇專介氏藏）

【歌風】その歌は、陶器の如く、その人格の自然の發露されたもので、歌としての技巧よりも、その自然な點に心をひかれる。香川景樹の門下ではなかつたが、京都に住した爲めもあつて桂園派の影響をうけ、流麗な歌風であり、優美な叙景歌が多い。その歌集にも景樹の門人の渡忠秋が序を書いてゐる。「宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし」は最も世に知られ、その風流な性格の反映を見る。「手すさびのはかなき物をもちいでてうるまの市に立つぞわびしき」は、陶器を鬻ぐさまを自ら歌つたのであらう。「願ばかり心にかゝる雲もなしいつのゆふべか限りなるらむ」に、尼の超脫した人生觀が見られる。「山里は松の聲のみ聞きなれて風ふかぬ日は寂しかりけり」は、その淸澄な自然觀照の見られる歌である。要するに蓮月尼の歌は、その淸き人格と相俟つて光彩を有するものであり、近世女歌人の中の注目すべき一人であることを失はない。　〔佐佐木〕

【參考】近世和歌史佐佐木信綱○人及歌人としての蓮月石山但信（月刊日本文學昭和六ノ一二）

連語 れんご　文法【解說】廣狹二義がある。（一）廣義の連語。二個以上の單語が連結して一つの纏まつた意義をなすもの。獨逸語 Wortgefüge に當る。この中には文法上の句又は文（獨 Satz）をも含む。（二）狹義の連語。二個以上の單語が連結して文の成分を成すもの。英語 phrase にあたる。句（英 Clause）及び文（英 Sentence）を含まない。例へば、（1）猿が（2）落ちた（3）猿も木も（4）小さい猿（5）木から落ちた（6）木から落ちた猿。いづれも片々たる單語の臚列ではなく、何等かの必要に應じて文の成分を成すものである。卽ち連語は、一語を以て文の單位をなす單語に對し、或る單語が連結して文の單位を成す場合の稱である。もし單語の連結が「猿が木から落ちた」の如く、或る主題について或る敍述をなす關係に立てば、文若しくは句と稱して連語と分たれる。卽ち連語は單語の連結が、（1）の「猿」「が」（2）の「落ち」「た」の如き從屬的關係である場合、（3）の「猿も」「木も」の如き並列的關係にある場合、若しくは（4）の「小さい」「猿」（5）の「木から」「落ちた」（6）の「木から落ちた」「猿」の如き修飾的關係にある場合を云ふのである。連語のうち、特に用言と助動詞の連結したものを活用連語と云ふ。活用する連語の義である。（例）「咎めらる」「咎められず」「咎められざるべし」。指定の助動詞「なり」「たり」、比況の助動詞「ごとし」は、用言と同じく敍述の力がある故、用言に準じて、それ等と助動詞の連結も活用連語に數へる。用言を二つ以上含むもの、助詞を含むもの等、複雜なものもある。（例）「臣たるべし」「悲しむが如し」「備へてあるべし」「治めしめ難し」。　〔小林・橋本〕

連語形式 れんごけいしき　文法〔英〕syntactic form.【解說】例へば英語で have seen, have written, have taken 等は、單語が have + 過去分詞といふ同樣なる連結をなし、意義から見て「現在完了」といふと同樣なる意義を表はす。又 boys see, you know, people hear 等の代名詞（又は名詞）と動詞とが、この順序に連結する時、「誰が何する」といふ意義を表はし、I see boys, we know you, I hear people の如く、同じ語でもこの順序に連結する時は「少年を見る」「汝を知る」等の如く「を」の意義を表はす。かくの如く單語の一定連結が一定の意義を表はすものを連語形式といふ。（單語形式參照）

【參考】Jespersen: *Philosophy of Grammar*. 1924.　〔神保〕

連語論 れんごろん　文法【名稱】連語法・文章法・文章論・措辭法ともいふ。〔英〕syntax.〔獨〕die Syntax.〔佛〕la syntaxe.【解說】文法（別項）の中の一研究部門。或る國語又は方言に於ける單語連結上の諸事實を研究するもの。リース（John Ries: Was ist Syntax? 2. Aufl. 1927）は單語の結合（Wortgefüge）を研究するものを Syntax と名づけてゐる。個々の音が連結して一つの語を作り、或る意義を表はす如く、二個以上の單語が連結して一つの結合をなし、一つの纏まつた意義をなすものを單語結合（Wortgefüge）となす。必ずしも所謂「文」の形をなさないでも、單語結合となる。我が國では Syntax を文章法と名づけ、「文」を構成する法則を論ずるものと解するのが普通であるが、右の如く解するのが理論上正當であると考へられる。【連語形式】例へば英語の have seen, have taken, have written 等は同じ have と過去分詞との連結であつて同じ連語形式である。日本語の「人に」「家に」「鳥に」などは、同じ「に」の連結を有する同一連語形式である。連語形式に對する單語形式は、例へば名詞の複數形 boys, days, names の如きをいひ、多數の例に通じ、一定の外形が一定の意義を表はすといふ點に於ては連語形式も單語形式も同樣である（have seen, have taken 等は「完了時」といふ一定の意義を表はす）。【語序】word-order も連語形式の一種である。例へば文の述語動詞が英語に於ては主語の直後に來り、日本語に於ては文の最後に來る。日本語では「青い鳥」の如く修飾語が被修飾語の前にのみ附く。フランス語に於ては l'oiseau bleu の如く後に附く等。又英語に於て People know it. I know people の如く主格と目的格とが語序といふ連語形式によつて區別されるのもこの類である（格參照）。【修飾關係】形容詞は名詞を修飾する。副詞は動詞・形容詞を修飾する等の關係は、やはり連語

法中の一事實である。イエスペルセンの所謂「三階位」(three ranks) はこの方面の研究である(O. Jespersen : Philosophy of Grammar. 1924.)。【單語形の呼應】 concord or agreement 英語の I am, you are, he is, my father comes 等、又は日本語の「人こそ多かれ」の如き係結等をいふ。

【附記】所謂品詞(別項)の區別は連語法上の事實によつて定まることが多い。（以上神保）

【我が國に於ける文章法の研究】 我が國の文法研究の中で、文章法（即ち連語法）の研究は最も遲く開けた分野である。江戸時代に於て文章法に關する研究と見るべきものは、係結の問題ぐらゐなものである。橘守部に「文章撥格」の著があるが、文法上の著述といふよりも、寧ろ修辭上の論である。文章法の名の初めて見えたのは、明治八年文部省から出た田中義廉の「小學日本文典」(別項)であつて、その總論に、文法論を字學・詞學・文章學に分つべきことを敍へてゐるが、文章論に就いての實際の記述は見えてゐない。翌年出た中根淑の「日本文典」にも、文字論・言語論・文章論・音調論等の部門があり、文章論の目はあるが、その名の下に說かれてゐるものは、僅に係結のこと乃至文中の符號に關する如きことで、所謂文章法としての體裁をなしてゐない。明治二十年に出たチェムブレンの「日本小文典」(別項) に至つて初めて文章法をやゝ詳しく說いてゐるが、今日諸々の文法の著述に一般に說いてゐるやうな文成分の組立などを論じたものと云へば、明治二十三年に出た手島春治の「日本文法教科書」をその嚆矢として推さざるを得ないであらう。その文章法は、起結三轉論、文章の分解、言葉の關繫、文章の正誤等の目があり、文章の關繫に於て主語・確定語・擴張語の三を分ち、言葉の關繫に於て主語・關係語・確定語・客語に就いて說いてゐる。大槻文彥博士の「廣日本文典」(別項) の文章篇に至つて、主語・說明語・客語・修飾語を說き、聯構文・挿入文・倒置句・呼應・略語・略句等を說いてゐることは、比較的新しいことだから人の知るところであらう。その後、我が國語に特有なる語法として所謂總主と云ふことを論じた草野淸民氏がある。岡田正美氏には、「日本文章法大要」(明治三十三年刊)の著述がある。岡澤鉦次郎氏の「日本文典原理」(明治四十年刊)、山田孝雄氏の「日本文法論」(明治四十一年刊)、或は松下大三郎氏の「標準日本文法」(大正十三年刊)等にも、それ〴〵聽くべき論議を藏してゐるが、今日までの文法研究史上、品詞論の比較的整然たる內容を持つてゐるのに比べれば、文章法の研究は、歷史が新しいだけに、まだ幼稚の域を脫してゐない。（以上小林）

【參考】 J. Ries : *Was ist Syntax.* Marburg 1894 (2. Aufl. 1927) ‖ —— : *Zur Wortgruppenlehre.* Prag 1928. ‖ R. Blümel : *Einführung in die Syntax* Heidelberg 1914.

連鎖劇 れんさげき 演劇 【解說】 活動連鎖劇の略稱。一篇の映畫劇の眼目的場面に實演の舞臺劇を挿入し、或は一篇の舞臺劇の適宜の場面を映畫で連鎖した目先の變化本位の通俗劇の一形態である。明治四十年代より淺草公園等の民衆娛樂場に現はれ、やがて大正初年には新派の山崎長之輔によつて關西の劇壇に流行し、東京でも井上正夫等がこれを試みたが、結局興行的にも藝術的にも發展を見ず、既に大正中頃には、僅に旅廻りの劇壇にその名殘りを止めるに過ぎなくなつた。大衆劇としての映畫劇が、舞臺劇を漸次に壓倒して行くその過渡期の姿が連鎖劇といふ形で現はれたと見られる。これを我が演劇史上の例に見るに、操芝居の全盛期、それが歌舞伎を壓倒せんとする過渡期の演劇形態に、首振り芝居(別項)とて、俳優に人形振を摸倣せしめたものと同樣な現象である。映畫劇の舞臺劇への影響は連鎖劇といふ形では發展しなかつたが、全然別の手法に於て頗る多分に消化されつつあることは贅言を要しない。（飯塚）

連獅子 れんじし 「石橋(しやくきやう)」を見よ。

連集良材 れんしふりやうざい 連歌書 二卷 【著者】未詳。天和の「書籍目錄」に林道春作とあるが恐らく誤りであらう。【成立】足利季世の著であらう。【刊行】寬永八年【諸本】彰考館本、續々群書類從所收本がある。【內容】連歌の好材料となるべき漢土の故事、佛典中の事項などを說明し、その證句として、心敬・專順・行助・宗伊・宗祇等の句を引いたものである。（福井）

連珠合璧集 れんしゆがふへきしふ 連歌書 二卷 【著者】奧書に南華老人とあるは、飛鳥井雅親(榮雅)の號であるから、雅親の著なることが知られる。「梅春古筆傳」に一條兼良の著としてゐるのは誤である。【成立・由來】成立年代は不明。但し文明八年の奧書本があるといふが、兎に角榮雅晚年の著作であらう。自序及び奧書によると、幼童が連歌の寄合(よりあひ)(配合の意である)を書いてほしいと乞うたので、見聞のはし〴〵を書きつらねて「連珠合璧集」と名づけたとあつて、連珠合璧は寄合の意であることも知られる。一本上卷の末に黃門羽林の奧書があり、下卷の末に南華老人の奧書があるので、この二つによると、この一本は黃門羽林(誰であるかは詳かでない)が書寫して、榮雅に奧書を乞ひ、榮雅が奧書したものであることが知られる。【諸本】帝國圖書館藏古寫本があり、神宮文庫本には連珠合璧と題してある由である。續群書類從連歌部にも收めてある。【解說】寄合となるべき詞を、天象・光物(ひかりもの)・聳物・降物・吹物・時節・時分・山類・海邊・水邊・地儀・國郡・居所・草類・木類・鳥類・獸類・蟲類・魚類・貝類(以上上卷)、人倫・人體・麥類・人態・述懷・懷舊・釋敎・神祇・羇旅・戀部・衣類・食物・火類・雜物・管絃・色類・夢中・人名・雜類・數字・重詞・引合(以上下卷)の四十二項に分ち、或る詞を擧げてそれの寄合となるべき幾つかの詞を擧げたものである。その中には、伊勢・源氏等の物語、「萬葉」「古今」以下「新古今」等の歌集、その他の古典、漢土の古典故事の詞なることを註したものもあり、又證歌を擧げ、或は說明を附したものもあり、又稀に體用その他式目上の注意を註したものもある。（金田）

連聲 れんじやう 國語學 【解說】 或る音が、その前又は後に來る音と連結するために變化するものをいふ。普通に連聲として認められるものは、「えんいん」(緣引)をエンニン、「いんえん」(因緣)をインネン、「さんよう」(算用)をサンニョウ、「しんわう」(親王)をシンノウ、「さんゐ」(三位)をサンミ、「せついん」(雪隱)をセッチン、「くつわく」(屈惑)をクッタクと發音する如く、漢語の複合語に於て、上の成分がン又は入聲のツで終り、下の成分がア行ヤ行又はワ行の音で始まる時、下の成分の初めがナ行音・マ行音又はタ行音(又はそれ等のヤ行拗音)となり、入聲のツが同時に促音となるものをいふ。右の場合には、前の音の影響によつて下の成分の最初にn・m又はt の子音が加はつたものである。これ等の場合に於ては、假名はもとの假名を用ひ、ただ讀み方に於てのみ右の如く發音するものである(但し、現今では、發音の通り書き改める事もある)。右の現象は、現代に於ては、少數の慣用ある語にのみあらはれるのであつて、一般の規則としては行はれない。【異說】連聲の名は、もつと廣い意味にも用ひられた。すなはち上記のものの外に、ガッカウ(學校)・ヒッパル(引張)の如く、入聲のクがカ行音の前で促音になるものをも含ませたもの(大槻文彥「廣日本文典」)、カンパ(看破)・イッパ(一派)の如く、撥音及び入聲音の次に來るハ行音が半濁音になるものや(貝原益軒「點例」)、フウフ(夫婦)・シイトク(至德)の如く長音になるものをも含ませたもの(日尾荊山「訓點復古」)、撥音の次に來る音の濁音化を含ませたもの(文雄「和字大觀鈔」)等がある。

【國語史上の連聲】 連聲が何時から行はれたかは詳かでないが、「和名類聚鈔」に「浸淫瘡」を「心美佐宇(シンミサウ)」と記し、嘉保二年書寫本「反音作法」(明覺著)の紙背に「任意」をシムミ、「濫惡」をラムマク、「嗔恚」をシンニ、「變緣」をヘンネンと讀む例を擧げ、三卷本色葉字類抄に「任意」をジミと訓してゐるのによれば、既に平安朝に存したことが知られる。この時代は漢字音の終りの撥音にmとnとの區別が存してゐたので、從つてmの次ではマ行音に、nの次ではナ行音に發音された。また入聲音の連聲も既にこの時代に存したと思はれる。而して後世までも傳へられた佛典や漢籍の讀み方から觀れば、連聲は漢語の複合詞にあつては、規則的に行はれたものと思はれる。その後、撥音m・nの區別が失はれるに及んで、撥音の次には常にナ行音に發音されるやうになつたが、オムミヤウジ(陰陽師)・サムミ(三位)の如き少數の語には、前代の發音が讀癖として後世まで傳はつた。又鎌倉室町時代に於ては、漢語の複合詞だけに限らず、ン又は入聲のツで終る語が助詞の「は」(ワと發音された)「を」に連る場合にも、「は」「を」を「ナ」「ノ」又は「タ」「ト」と發音し、その外「大音あげ」「御有樣」の如き場合にもこの連聲の法則が適用された。江戸時代に入つては、その適用される範圍は限定されたが、なほ中期頃までは幾分殘つてゐた。現在では、少數の漢語の複合詞に於て讀癖として傳へられてゐるだけで、一般には連聲は行はれない。但し方言の中には、撥音につゞく助詞「は」「を」を、ナ・ノと發音する習慣が、今なほ殘つてゐるものがある。

【參考】 廣日本文典大槻文彥○訓點復古日尾荊山○點例貝原益軒○音曲玉淵集三浦庚妥○諸聞合假名遣○名目抄中院實熙○和字正濫通妨抄契沖(契沖全集第七卷)○文祿元年天草版吉利支丹教義の研究橋本進吉○音韻變化作用の消長新村出（橋本）

聯想美學說 れんさうびがくせつ 「美的聯想」「美意識」を見よ。

連濁 れんだく 「濁音」「連聲」を見よ。

連俳史 れんぱいし 文學史 一册 【著者】樋口功 【刊行】昭和三年四月、麻田文明堂。【內容】前篇を「連歌」とし、史實に依り、史的展開の跡を敍してあつて、序說、創始時代の連歌、勃興時代の連歌、獨立時代の連歌(良基・梵灯庵・救濟・周阿等)、成熟時代の連歌(宗祇)、繼承及び衰頽時代の連歌の六章。後篇を「俳諧」とし、前篇と同樣の方法に依り、序說、勃興時代の俳諧(宗鑑・守武等)、貞風の連句(主に貞德)、談林風の連句(宗因・伊丹風等)、純蕉風の意義(主に芭蕉)、蕉風の影響、天明期の連句、化政時代の連句、天保以後の連句(明治以後をも說く)の九章。【批評】連俳史としては、早く佐々醒雪の「連俳小史」(別項)があるが、同書は概觀的のものであるのに對し、本書は作者を本位として纏めたもので、こゝに兩書それぞれの特色がある。「連俳小史」も連歌の方に精しいものであるが、本書も同樣である。俳諧に於て、蕉風の連句の味は、「匂ひ」「響」にありとし、つまり象徵の藝術だといふ點を力說してある。（荻原）

連俳小史 れんぱいせうし 文學史 一册 【著者】佐々政一 【成立】著者が大學在學中の明治二十七年の冬に稿を起して、同二十九年の冬まで「帝國文學」に連載したものを翌年刊行したのである。【刊行】明治三十年七月、大日本圖書株式會社。【內容】連俳、卽ち連歌俳諧の時代的變遷の大體を述べたもので、先づ和歌が形式に束縛せられて萎靡した王朝の末葉に當つて、連歌といふ新形式が起つたその動因から說き始めて、上代の連歌、中古の連歌、俳諧調の連歌(卽ち俳諧)に及び、近古の連歌として、貞門・談林・蕉風の起伏を觀察し、この三派の特色及びその衝突を論述し、特に蕉風の俳諧としては「ひゞき」「にほひ」等を細敍し、芭蕉以後、江戸風と上方風との差異、安永・天明の復興期、文政・天保の墮落期にまで說き進めてある。【批評】連俳の歷史を書いて纏まつたものの最初の著述として特記せらるべきものである。連俳といふものが室町江戸時代に於て如何に流行し、その當時の文學に如何に大きな影響を與へたか、文學史としての連俳の研究が重要であるといふ事を力說して、當時、あはや非文學といふ惡名を以て一掃せられんとしてゐた連俳といふものの位置を確定した著者の功も特筆すべきである。【附記】昭和三年四月に、天來書房から本書の附錄として、鑑賞眼より見たる俳句新釋、俳諧入門の二章を附し、「連俳史論」といふ書名で刊行されてゐる。（荻原）

れんぽ 歌謠 【名義】戀慕の意と云ふは誤で、恐らく尺八の曲の鈴慕より出た歌であるから、鈴慕を訛つて戀慕と稱したものであらう。【解說】尺八の鈴慕の曲節を取り入れたものと思はれる「吉原流行小唄惣まくり」には、「れんぽのかはり」(一首)、「れんぽのきぬた」(長唄一首)と云ふ歌が出で、前者は、

君はさみだれ思はせぶりや、いとゞ焦る・身は浮舟の、波にゆられて鳥籠十島、れんぽれ・れつれ。

ゆふべ〳〵に身は淺草の、露を踏み分けあの吉原に、しどろもどろで君ゆゑたどる、れんぽれ・れつれ。

と云ふ歌で、最後の句は、尺八の譜を取り入れたものである。これは、吉原の流行唄であるが、上方でも、尺八が箏・三味線と提携したので、上方唄の中に、これを取り入れたものがある。「松の葉」卷二の長歌「狹衣」と云ふ歌に、「レンボ」と云ふ合の手が入り、「吟曲古今大全」等の書に、「六段れんぽ」と云ふ歌があつて、これにも、中に「れんぽ」が入つてゐる。れんぽの手は「紙鳶」の如き一節切の譜本にも「大怒佐」のやうな三味線の譜本にも記してゐる。「大怒佐」には「れんぽながし」と題す。その他、長唄の「虛無僧」にも、れんぽながし、れんぽをとりの如き節付が見えて、この曲風を取り入れたものは多い。なほ「吉原流行小唄惣

まくり」に出た一節切と題する歌（大和錦參照）、「御船歌留」に見える一節切節の歌などは、一節切に合せて歌つた諸種の流行歌を收めたもので、この一節切のれんぼとは別個の種類に屬する。〔藤田〕

戀慕ながし　れんぼながし　小說　【作者】小栗風葉【刊行】明治三十一年九月より讀賣新聞連載。後、春陽堂刊。明治大正文學全集所收。

【梗概】築地女學校の圖書館擴張資金を作るため、音樂會がその講堂で開かれた時、三百餘の來會者の注目の焦點になつたのは、ヴァイオリンの五十嵐葉子と尺八の奏純之助であつた。純之助は琴古流の第一人者立花設洞の高弟で、天才と言はるゝ靑年、葉子は美貌と藝道とに於て紈中の花と呼ばるゝ才媛である。この二人はいつか深い戀に落ち、そのため學校を退學させられ、純之助も亦師の門を逐はれた。お葉はただ純之助と暮したい一念から、深川相生町の家をぬけ出る。父の賢道は毎日お葉を探し歩いたが、手がかりがなく、やかましい女房に顔を合せられぬため、賭博と淫賣宿の親方をしてゐる銀次の家に寄食した。一方純之助は、彼の同情者東山子爵夫妻から、早く師の設洞へ詫びを入れ、お葉を思ひ切れといふ忠告を聽かず、お葉と合奏しながら、毎日市中を流し歩いて貧しい日を送る身となり下つた。或る夜、陶山といふ壯士と洲崎を流し歩いた時、その勸める酒に大醉して、知らぬ間に妓樓へ搬ばれたが、遊興費が不足して家に歸れない。陶山は金策に一足先に歸り、その旨を木賃宿に病臥してゐるお葉に告げて一夜の春を賣らせようとした。お葉は應じなかつたが、純之助の上を案じ、夜半洲崎へ行く途中、なつかしい相生町の家を訪ふと、兩親は他に移つてゐる。失望の餘り、大川端で投身したのを警官に救はれ、坂本の警察で銀次のため一八の運盤をしたかどで引致された父に逢つた。その緣からお葉は銀次に引取られ、一夜酒を飲まされて前後不覺になつた時、彼に操を破られて了つた。その後お葉は銀次の持物となつて小石川上宮坂の小さな寄席宮坂亭にゐることとなつた。純之助は失踪したお葉を尋ね廻つて、漸く寄席にゐることを突き留め、陶山を通じて取戻さうとしたが成功しない。お葉も純之助の許へ歸りたいのだが、銀次に遮られてどうにもならない。そのうち、お葉の母は夫には離れ、子には背かれて悲嘆の極、病を得て死んだ。次いでお葉に心のあつた俠客熊五郎は、兄弟分純之助との手切れと稱して金を銀次から強要しようとする。お葉は身の薄命をはかなんで自殺したので、銀次は破れかぶれになり、自分に楯をつく熊五郎・陶山等を殺し、自分も死んだ。この悲劇を後で知つた純之助は、閉された宮坂亭の門前へ來て、毎日戀慕流しを吹奏した。それは正に斷腸のおもひを人々に與へた。

「戀慕ながし」口繪（年方畫）

【批評】風葉が二十四歳でこの長篇を書いたといふことは、たとへ紅葉の輔導があつたにもせよ、彼の才能の非凡を示す證左である。その華麗な文字、周到な描寫、初めから終りまで新聞の讀者を引付けようと力めた構想や場面の變化など、靑年作家とは到底思へぬほどしつかりしてゐる。それに、ともすると甘くなり勝ちで、抒情的傾向に偏し、單調になりやすい題材に、あまり弱點を見せてをらぬ。殊に下層社會の描寫に於て、當時この位の手腕を持つたものは少かつた。併し田山花袋が「今から見れば、形式と内容が伴はず、缺點だらけの作」と言つたやうに、初めから純之助とお葉との運命を定めて置いて、機械的にそれを操つた氣味があり、矛盾と不自然とが補綴されてゐる觀がある。〔以上高須〕

【上演】明治三十五年二月、淺草宮戸座に中野一座によつて初演され、同八月には東京眞砂座に、伊井蓉峰・河合武雄等によつて上演された。五幕十七場、脚色者は岩崎舜花であつた。その後も小劇場の舞臺には屢々上つた。蓋し明治中葉の下層階級の醜陋な人情風俗を殊更深刻に描寫して謂ふところの「汚い芝居」であることが、大劇場への上演の機會をもたせなかつたのであらう。〔以上久保田〕

戀慕水鏡　れんぼみづかがみ　浮世草子　五卷　【作者】山八と署名がある。【刊行】天和二年板【諸本】江戸時代文藝資料第四所收。

【解說】「錦木」（別項）や「諸分店颪」に倣つたもの。廓を舞臺とした近世風の遊蕩趣味が簡單に書き綴つてある。卷一は傾城くるひ水の評判、同心中爪印の事、同起請文の事の三項に別れてゐる。卷二と卷三とは、「諸分店颪」が會話體であつたのを、全然地の文で行つたものである。卷四上の戀雲にかけはしに於ける金彈と、かつこの前との艶書問答は「錦木」に倣つたものである。なほこの卷の終りには「ふみにそへ物の事」といふ表題の許に、〇ふみにくずの葉をそへ候はばうらむる心とし可し〇夕顔の花をそへ候はば訪はずは明日はいのちあらじといふこととなり〇つつじをそへ候はば戀しき心と知るべし以下、杉・紅葉・芹・梅・蟬・たきもの・あやめ草・松の葉・白雲等の意味が述べてある。卷五は中の戀、下の戀、紅葉のにしきにつつむくみてしる、色々の外に戀の詞初心抄、戀の和歌、翻林抄の二項が添へてあり、翻林抄の中には、初戀・忍戀・不被知人戀・待戀・初逢戀・後朝戀・逢不逢戀・旅戀・思・片思・恨・雜戀等の題の下に、それぞれその說明と古歌とが載せてある。これは「錦木」を摸したものであらう。〔小島〕

戀慕物の謠曲　れんぼもののえうきよく　【曲目】男女戀慕の妄執を描いた謠曲に、「松風」「采女」「求塚」「定家」「戀重荷」「綾鼓」「三山」「松蟲」などがある（夫婦物・狂女物參照）。【諸本】謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【松風】三番目〔作者〕世阿彌の改作。〔古名〕松風村雨。「能作書」に「松風村雨、昔しほくみ也」とある。〔內容〕諸國一見の僧（ワキ）が西國行脚の途次、攝津國須磨に立ち寄り、松風村雨の舊跡を弔つて、海士の鹽屋に一夜の宿を求めたところ、宿の主は松風（シテ）・村雨（ツレ）の亡靈で、行平がこゝに流されてゐた三年の間、その寵を受けた姉妹の海女であつた。二人は行平の都に歸つた後の戀しさを語つたが、そのうちに、松風は心も狂ほしくなり、舞を舞つて行平の幻影を追ふ、と見るうちに僧の夢はさめて、あたりにはただ松風が吹くばかりであつたといふ曲。「源氏物語」須磨の卷に、在原行平の侘住居のことを記してゐるのに基いて、新に松風・村雨の二女を假作したのである。單式夢幻能。五流現行。

【采女】三番目【作者】世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕諸國一見の僧（ワキ）が奈良春日の社に參詣すると、折柄來合せた里女（前ジテ）が春日明神の緣起を語つて聞かせた後、僧を猿澤池に導き、昔天の帝の御時、采女が御寵の衰へたことを歎いて、この池に身を投げたことを話し、私はその采女の幽靈ですと回向を乞うて池に入る。それで僧が佛事をしてゐると、采女の靈（後ジテ）が現はれ、葛城王の心を和らげた采女の昔物語をして舞を舞ひ、なほも回向を乞うて、また池の底に入るといふ曲。「大和物語」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【求塚】四番目〔作者〕世阿彌（二百十番謠目錄）とも觀阿彌（能本作者註文）ともいふ。〔內容〕西國方の僧（ワキ）が都に上る途次、攝津國生田に立ち寄り、若菜を摘んでゐる女達（シテ・ツレ）に求塚を尋ねると、餘の女は敎へなかつたが、後に殘つた一人（前ジテ）が案內して、昔この所にゐた菟名日處女は小竹田男と血沼の大丈夫と二人の男に戀せられて、生田川に身を投げると、二人の男は又その處女を埋めた塚を探し求めて、刺し違へて亡くなつたと語り、回向を乞うて塚に入る。僧が回向してゐると、菟名日處女の靈（後ジテ）が現はれ、地獄の苦しい樣を語つて消え失せるといふ曲。「大和物語」處女塚の傳說を採つた。複式夢幻能。寶生・金剛・喜多現行。

【定家】三番目〔作者〕金春禪竹（能本作者註文）とも世阿彌（二百十番謠目錄）ともいふ。〔古名〕定家葛〔內容〕北國僧（ワキ）が都に上り、千本のあたりで時雨に遭ひ、傍の亭に立ち寄ると、一人の女（前ジテ）が來て、これは藤原定家の時雨亭であると敎へ、式子內親王の御墓に連れて行き、內親王と忍ぶ契りを結んだ定家の執心が葛となつて、このやうに纏ひまとつたと語り、自分が內親王であるといつて消え失せる。僧が御跡を弔つてゐると、內親王の靈（後ジテ）が現はれて、讀經の功力によつて成佛したと喜び、報謝の舞を舞はれる。「謠曲拾葉抄」に、この曲は「雜文集」から出てゐるといふ。複式夢幻能。五流現行。

【戀重荷】四番目〔作者〕世阿彌改作。〔古名〕「能作書」に「戀重荷、昔綾の太鼓也」といふ。〔內容〕白河院の御時、菊作りの老人山科荘司（前シテ）が女御の御姿を見て戀に惱んでゐたので、官人（ワキ）に命じて、荘司に重荷を持たせ、これを持つて百度千度廻つたならば、御姿を拜ませようと傳へられた。それは戀を諦めさせようとの思召であつたのであるが、老人はただ戀の一念で重荷を持ち廻り、遂に力盡きて死んでしまつた。女御（ツレ）もこれを憐れんで、その姿を一目御覽にならうとすると、心が亂れてしまはれた。そしてかの老人の怨靈（後ジテ）が現はれてお恨み申したが、御回向を賜はらば、御守りの神になりませうといつて消えたといふ曲。出典はない。二段劇能。觀世現行。

【綾鼓】四番目〔解說〕前曲と同系のものであるが、これには所を筑前國木丸の皇居とし、老人を御庭掃きの者とし、名は出してゐない。重荷の代りに綾で包んだ鼓を打たせられるのである。二段劇能。

【三山】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）。〔內容〕大原の良忍上人（ワキ）が大和國耳成山へ行くと、一人の里女（前ジテ）が來て、香久山の男かしはでの公成が耳成山の桂子と畝傍山の櫻子と二道かけて通つたが、櫻子に心を移したので、桂子は恨んで耳成の池に入水したと物語り、池の底に沈む。やがて櫻子の靈（後ツレ）が現はれて懺悔の樣を示すと、桂子の靈（後ジテ）が現はれてうはなり打をしたが、やがて恨みを晴らして、共に成佛した。「萬葉集」卷一の三山歌に卷十六の有由緣歌を織り交ぜて作つた。複式夢幻能。寶生現行。

【松蟲】四番目〔作者〕不明〔內容〕攝津國阿部野で、市人（ワキ）が酒を賣つてゐると、毎日のやうに若い男（前ジテ・ツレ）が數多酒を飲みに來る。市人が不審に思つて尋ねると、その一人（前ジテ）が、昔この松原を歩いてゐた二人の友のうち、一人が松蟲の音に聞き惚れて、草露に臥して死んでしまつた。自分はその亡靈であるといつて歸り去つた。市人が回向してゐると、その亡靈（後ジテ）が現はれ、友を戀ふる心持を述べるといふ曲。「古今集」序に、「富士の煙によそへて、松蟲の音に友を忍び」とあるのに想を得たものであらう。複式夢幻能。五流現行。

【構想】以上五曲のうち、「松風」と「采女」とは女の戀慕を描いたもので、世阿彌が「五番曲條々」に、「戀慕といふは、これも柔和なる內にあはれを添へたり、何とやらん感ありて、あはれに凄き曲聞也」といつてゐる所に該當する曲柄である。殊に「松風」はこの趣をよく寫してゐる。「求塚」「定家」は男に戀慕せられる女の苦しみを描いたもので、「定家」の方は男性の執心が烈しいだけ、悽慘な趣が前者よりは強い。「戀重荷」「綾鼓」は男性の戀慕を、殊に全く及びもない戀を、而も劇能に脚色した爲めに、悽慘といはうより醜惡に近いものとなつた。「三山」は戀慕といはうより嫉妬を描いたものであるが、鬼女物（別項）の「鐵輪」とは違つて、寧ろ優雅な感を與へる。「松蟲」は謠曲には珍らしい男色を取扱つたものであるが、これを極めておぼろに描いたのである。〔佐成〕

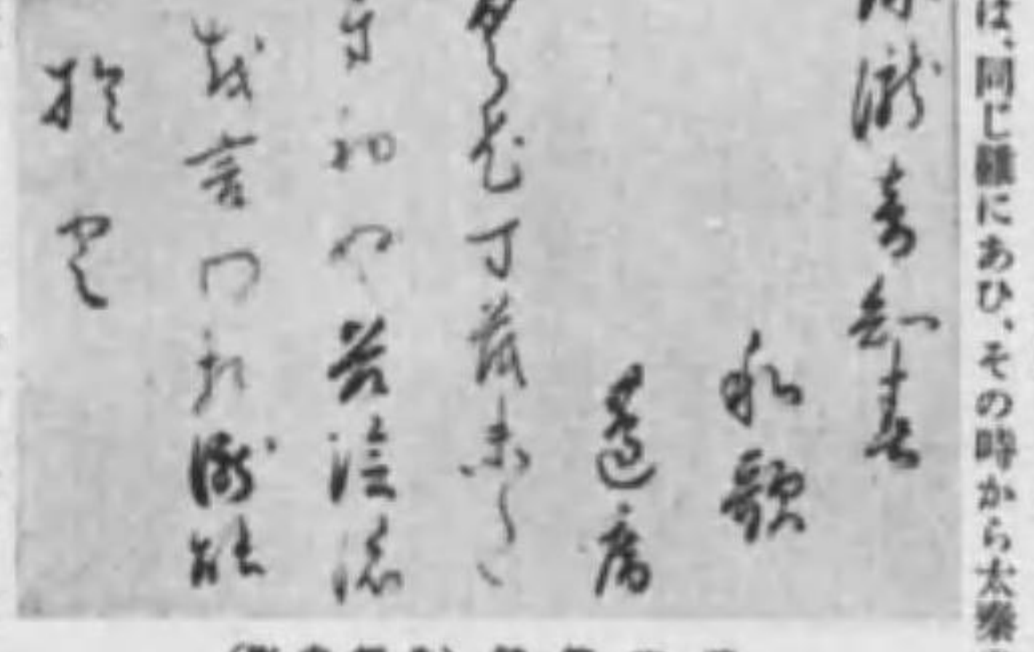
【參考】謠曲評釋大和田建樹〇謠曲大觀佐成謙太郎

連理秘抄　れんりひせう　連歌書　一卷　【著者】二條良基【成立】救濟の貞和五年七月十七日の跋があるから、その頃の著作であらう。【諸本】京都市猪隈信男氏の藏本は、表紙胡蝶裝の册子本で、表紙本四十二葉あり、紙質・書風室町時代の中期を下らざるものといふ。末に北小路玄慧の小序、救濟の跋が附いてゐる。京大平松子爵家寄託本中の「僻連歌抄」一卷はこの書の異本とも見られるが、玄慧・救濟の序跋は存してゐない。昭和三年十二月古典保存會より出版された。【解說】二つの部分に分れ、前半には連歌の沿革より作句の心法・附樣・賦物・餘物、連歌の風體・會・點等を說き、後半には連歌式目を韻字・輪廻、本歌・一座一句物以下、四句物・數度可レ用物・可レ嫌二打越一物以下、可レ隔二七句一物、可レ分別一事、雜物體用事、可レ定二時節一事、體用事

に分け、一々具體的の例を擧げてある。前半は著者の『歌家句法』『筑波問答』『知連抄』（各別項）以前の著者の學說を見るべく、後半は「應安新式」（新式參照）の粉本と見るべく、連歌の學書として現存するものの最古のもの、斯道研究上貴き資料である。漢文の小序があり、救濟の跋文の次に、「此抄以小序（玄惠法印）奥書（救濟法師）等爲規模、更不可有外見而已。關路鬼木御判」と誌した奥書があり、その次に「後普光園攝政良基公御作也、可秘之」とある。關路鬼木は關白大臣の官名を文字をかへて別號と見えるやうにしたものであらう。〔細井〕

ろ

蘆庵（ろあん）　歌人・歌學者【姓名】小澤玄仲、通稱帶刀。【別號】觀荷堂【生歿】享保八年生れ、享和元年（二四六一）七月十二日歿す。享年七十九【法名】寂照院月江蘆庵居士【墓所】京都北白川心性寺【閲歴】蘆庵は、尾張の徳川家の主席家老で、犬山の城主成瀬家の家臣の家に生る。成瀬家の京都屋敷は西洞院にあつたが、蘆庵はその留守役として早くより京都に住んでゐた。屋敷内には借家が多くあり、その家賃が留守居役の收入となつてゐたので、身分は低いが、蘆庵の所得は少くなかつた。文武二つの道に自信を持つてゐた蘆庵は、御目見え以上の格になりたいと願つたが、聽き入れられなかつたので、致仕して難波に移り、後再び京都に戻つた。劍術に秀でてゐた蘆庵は、武を以て立たんと志し、諸國を修業して廻り、江戸に於て、さる武藝者に敗を蒙つたので、この道を斷念したといふのは、この難波・京都の間の流浪時代のことであらう。京都に戻つてから某公に仕へたが、これは三十五歳の時であつたと言はれてゐる。冷泉爲村に和歌を學び出したのは、その頃のやうである。幾許もなく仕を辭し、鄕里から母を迎へて和歌の師匠となつて生活した。いつの頃からか、蘆庵は居を洛東の岡崎村に移してゐた。かの皇居をも類燒させた天明八年の大火には、同じ難にあひ、その時から太秦の地藏堂に住むこととなつた。「今は世のうづまさ人になりはてて都は雲のよそにこそ見れ」、これはその時の思ひを述べたものである。歿したのはこの太秦の地藏堂で、死の前日横臥しながら部屋を掃され、「波の上を行く心地して磯近くなりにけらしな松の音聞ゆ」と詠んだのが辭世となつてゐる。蘆庵は爲村に、「あなたの百年の後には、最早私はあなたの弟子となつてをりますまい」と言つたと傳へられてゐる。間もなく蘆庵は師匠の譴責をするといふ理由で爲村から破門された。これは爲村の晩年のことで、入門後十數年を經てゐたから蘆庵は五十歳近くであつたらう。その後、眞淵等の擬古派の有する弊所を除き、爲村等の堂上派の持つ缺點を退け、新しい歌風「ただこと歌」を立てた。歌論が初めて纏められて「塵ひぢ」（別項）の稿の成つたのは、寛政二年蘆庵が六十八歳になつた年である。これは太秦に轉居した翌々年で、この後矢繼ぎ早やに多くの著述をしてゐる。蘆庵の歌が、到るべき處に到つたのも、太秦に移つてからのことであると言はれてゐる。賴山陽は「太秦歌稿」の後に、「杜詩以夔州爲上乘。蘆庵翁和歌爲當代第一、而其避喧太秦、稱最深妙。故太秦者蘆庵之夔州也」と記してゐる。伴蒿蹊・澄月・慈延と共に、平安の四天王と稱され、名聲が一代に高くなつたのも、矢張り太秦に移つてからのことであらう。蘆庵の太秦生活は十四年間續いた。深く國學を究めた彼は、漢學にも通曉してゐた。彼の家で歴史の講會が開かれてゐた時、黄葉陽などと共に通つてゐた菅茶山が、國史のみならず、漢土の史にも至つて博學の人であつたと言つてゐる。交遊としては上田秋成・伴蒿蹊などと親しく、香川景樹とは早くから交つてゐた。或る夜、景樹が蘆庵を訪れると、蘆庵は景樹の歌の、才が勝つてゐるのを攻撃した。翌日景樹が、「千里をもかけれと鞭はうちながらあはれと見らむ駒のおそ馬」の一首を送ると、蘆庵は「鞭うつは海を超えよと思ひきやあなあな危ふ駒の早馬」と詠んで返した。景樹は後に至るまで、蘆庵のこの教へを忘れなかつたといふ。晩年になつてからは、橘千蔭・本居宣長などとも親しくなつた。寛政五年七十一歳の時、上洛のついでに蘆庵を訪れた宣長は、「おもはずもみやこながらに若浦のけだかき松をけふみつるかも」と詠んでゐる。その宣長は「都に歌人蘆庵あり、あづまに文人春海あり。わがくはだて及ぶべきにあらず」と言つて蘆庵をほめたたへてゐた。門弟に田山敬義・前場默軒・小川萍流・小野勝義・吉田元長・羽倉信美・小野重賢・羽倉信興・羽倉信愛・三鍼・四方田長淳・矢部正子等がある。【著書】塵ひぢ○蘆かび○或問（各別項）○ふりわけ髪○ふりわけ髪自註○袖中和歌六帖○千首部類○萬首部類○古今六義諸說○觀荷堂一家言○觀荷堂隨筆○鯉鹹山集○玉藻譜○六帖詠草（別項）。〔以上稻田〕



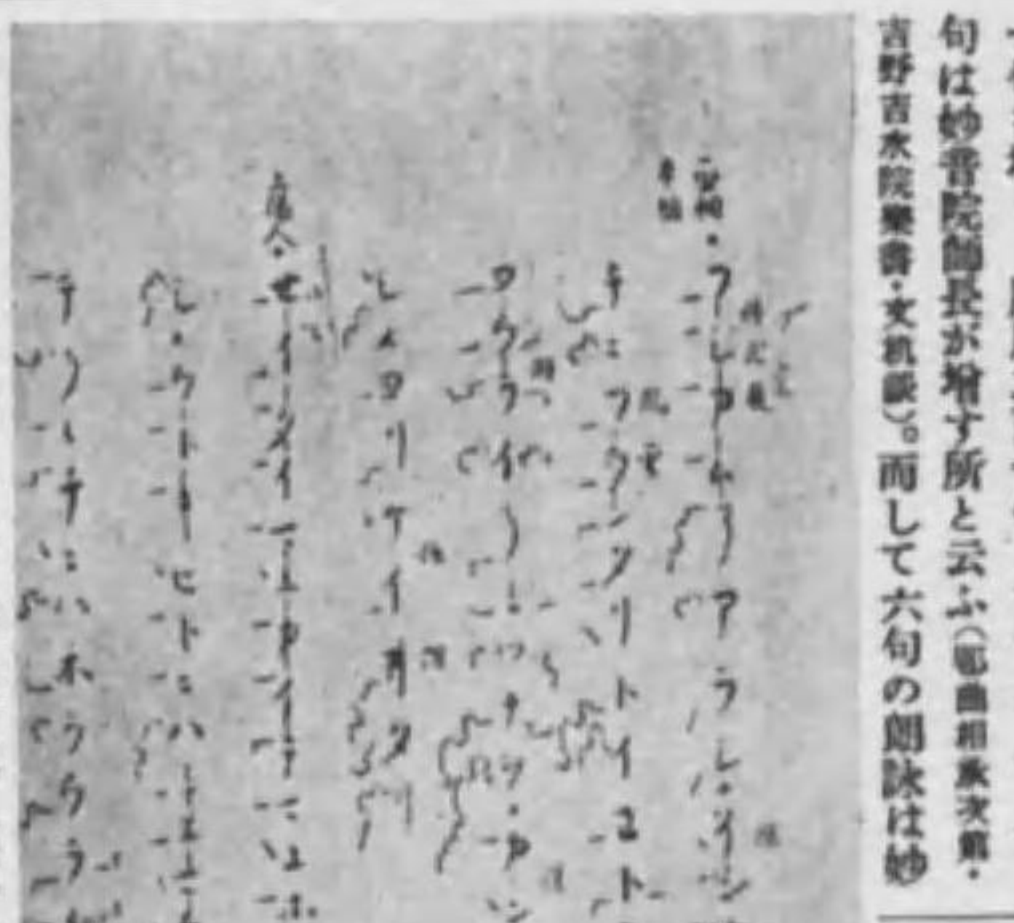
蘆庵筆蹟（先哲書影）

【業績】蘆庵の歌論は「たゞこととうた」を主張して、深い心を平淡にうたふことを重んじた。この「たゞこととうた」は「古今集」の序の見解から得てゐるのであつて、「古今集」を古歌集の中で最も重んじた。この「たゞこととうた」に於ける心の深さは純粹感情を重んずる立場となつてゐるが、蘆庵は同情論と新情論とによつて、純粹なる感情は何人にも普遍的であるから人を動かすのであり、同時に純粹感情は念々に新しいから清新であるとした。歌の內容としての情の意義をといた點は卓見である。ただ歌の作品は「たゞこととうた」を重んじて平淡ではあるがやゝ陳套であつて、歌論に比して劣つてゐる。而して蘆庵の歌論は誠實切調をといた景樹によつて更に發展してゐる點に歴史的價値も大きい。〔以上久松〕

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱

朗詠（らうえい）　歌謠【名稱】この語はもと支那で用ひられたもので、その初見は「文選」の孫綽の「遊天台山賦」に「凝思幽巖、朗詠長川」である。註に、朗は高の意とも、清徹の意とも云ふ。詩をホガラカに誦詠するの義である。「白氏文集」卷二十八にも醉吟の詩に「臨風朗詠從人聽」と見えてゐる。【別名】郢曲と云ふ。狹義の郢曲とは朗詠の事である。「抑謂郢曲者以歌朗詠之詩云爾」（體源鈔）とある。【起原】支那の詩の朗詠を眞似て、本邦でも唐人・邦人の作を朗詠する事は、漢詩文の輸入以來あつた事と思はれる。併し文博士が學生に詩文を授けるに當り、これを棒讀にせずに、國語に譯し讀むと共に、朗吟して暗誦させたがために、詩文を學ぶ者の間に朗詠の風が行はれるに至つたものと考へられる。「文机談」にも「朗詠の曲はおこり儒家より出づべし。その故は博士詩を講ずる時の聲の聲と云ふより事おこれり」と見えてゐる。今日でも學生の間に詩の朗吟が行はれて、一種の曲節を保つ一體をなしてゐるのは、古昔の朗詠吟誦と事情を同じうしてゐる。併し今こゝに朗詠と云ふのは、さうした原始的吟誦より進んで、音樂の一體となり、獨自の曲風を有する歌謠の稱である。

【沿革】朗詠は根本七首と云つて、嘉樂章、第一第二、緑綺素衣、八月九月、春過夏闌、傅氏巖之嵐（以上「和漢朗詠集」所出）、徳是北辰（「新撰朗詠集」所出）の七首である（郢曲相承次第・朗詠九十首抄）。而してこのうち、傅氏巖之嵐及び春過夏闌の二句は、左大臣一條雅信（別項）が辭表を出した時、菅三品文時の代作した辭表の中の名句であり、雅信が詠吟したものであるから、源家に於てはこれを朗詠秘曲としてゐる（郢曲相承次第）。これによれば、雅信が朗詠の元祖であり、根本七首の一部はその節付したものに係ると思はれる。かくて朗詠は、醍醐・朱雀の頃に起り、その後次第に句の數が增加して九十首となつた。因つて九十首の朗詠が撰定せられたが、撰者は、知足院忠實・中御門右大臣宗能の二人で、いづれも藤家の名手であるから、この撰ばれた九十首には藤家の譜が用ひられてゐる（「吉野吉水院樂書」・「古今著聞集」卷十六）。而してこの朗詠九十首抄」（別項）と稱する（郢曲相承次第・文机談・郢曲家）。その後藤家では益々增加して遂に百二十句を稱し、所用二百十句となつた。百二十句は妙音院師長が増す所と云ふ（郢曲相承次第・吉野吉水院樂書・文机談）。而して六句の朗詠は妙音院の始めた所であり（吉野吉水院樂書）、北院御室守覺法親王の御作で、木工入道孝道の節付したものもある（吉野吉水院樂書・郢曲相承次第）。何れも藤家の傳である。朗詠の最も盛んに行はれたのは、圓融・花山・一條帝時代で、物語草子類にもその例が多く見えてゐる。この趨勢によつて、藤原公任が「和漢朗詠集」（別項）を撰集した事は、朗詠を盛んならしめたのであらう。但し一條帝以前には朗詠なる語は多く用ひられなかつたらしく、物に見えてゐない。ただ詩を誦すを口吟むとか記してゐる。公任の朗詠集編纂後、この名が公布したものであらうか。而して公任は朗詠集なる名を當時最も愛賞せられた「白氏文集」の句に取つたのでもあらう。公任以後、藤家の人々が多く節付して、遂に二百十首に達した。その材料は、「和漢朗詠集」・「新撰朗詠集」（各別項）の二集を初め、多くの書より詩句を取つたものであらう。上記の二百十首のうち、遂に節付をされずに終つたものも少くないことであらう。かくて平安朝末より鎌倉時代にかけても盛んに行はれた。[illegible]ふ所二百十句に對し、源家で傳へる所は百八十首である（體源鈔）。「朗詠九十首抄」は藤家の節付したものであるが、源家でも同じく「九十首抄」は源家に節付したものであつて、今日傳へる「九十首抄」は源家の傳に係り、その中「源家不此句」などと註した句もあつて、源藤兩家でその歌ふ詩句に異なるものもある事を示してゐる。その中、譜を附せざるもの十八首、これは既に源藤兩家に譜を缺いてゐるのである。



文永本書寫本朗詠譜

載してゐる。かくの如く源藤兩家とも既に譜を忘れ曲節の亡びたものがあつて、衰頽の跡を示しつつあるのである。然るに藤家は既に妙音院師長の頃より、郢曲を以て源家の本體としたと云ふから（郢曲相承次第）、早く源家に屈伏したので、遂に源家の譜を採用するに至つたものである。鎌倉時代に至つては、藤家は次第に衰へて中絶し、一時再興した事もあつたが、遂に室町時代に至り郢曲は衰微した（郢曲相承次第）。源家は六代目、刑部卿敦長が綾小路家となり、綾小路家からは庭田家が分れ、別に持明院家があり、綾小路・持明院兩家が郢曲を以て家を保つたのである。「綾小路家譜」に記すところによれば、庭田・五辻・大原・四辻・東園・石野・慈光寺の諸家があつて、兩家より郢曲を相承せられて來た。かく家は多かつたが、樂家に傳へる曲は益々少く、「樂家錄」には、近代傳ふる曲を傳へるに過ぎぬ由を記し、江戸時代では、嘉辰令月、東岸西岸、新豐ノ酒、松根ニ、池涼シク、二星、一聲ノ鳳管、嶋王、徳ハ是、九夏三伏の十首が行はれたに過ぎず、平調・黄鐘・盤涉の三調に分類し、各調の五調に譜を附して傳へられた「郢曲」「郢曲殘譜」「朗詠要抄」などと題し、皆譜を添へてゐる（寛政十二年の如きは寛本あり）。明治以後再興せられて、現今も用ひられる曲目は、明治九年撰定の分七曲、明治二十一年撰定の分七曲、合計十四曲を數ふ。

【漢詩朗詠】漢詩の朗詠には、譜譜するものと

棒讀にするものと二種ある。前者が大部分で平安朝時代の朗詠は大概訓讀であるが、今日も歌はれる嘉辰令月の如きは、全部音讀で棒讀にせられる（朗詠九十首抄・五節郢曲。今日も然り）。

【和歌朗詠】和歌を誦し或は吟じた事は、物語草子にも見える所で、和歌披講式の誦詠の如きも、和歌朗詠に關係があるかも知れぬ。「朗詠九十首抄」の流布本には、和歌披講式案譜を附して墨譜も存してゐるのは、古くより和歌朗詠のあつた事を示してゐる。何れにしてもこの當時漢詩の吟誦と並んで、和歌を誦した事は否定の出來ぬ事實で、早く「萬葉集」の中にも、和歌を吟誦したことが散見してゐるから、奈良朝の昔から行はれてゐたのである。而して平安朝の末に行はれた長歌と云ふ謠藝は、和歌朗詠を受け繼いだ郢曲の一體と思はれる。なほ和歌披講譜は、冷泉家・二條家などの諸家にも傳はつたが、現今は綾小路家所傳の謠ひ方が殘つてゐるだけで、二種の曲調を存してゐる。

【朗詠書】早く大江維時編の「千載佳句」の如き、詩句を撰んだ書が出てゐるが、朗詠の用に供する目的で撰集したのは、藤原公任の「和漢朗詠集」が嚆矢であり、次いで藤原基俊の「新撰朗詠集」が編纂せられた。また法性寺大臣藤原忠通も朗詠の用に供する詩三卷を撰んで白川院に奉つた。それ以後、「拾遺朗詠」二卷、「和漢拾遺朗詠」二卷、「和漢兼作集」二十卷等の書が出た。前二書は、和漢朗詠集に倣つて編まれた朗詠の書である事は明かであるが、共に今日に傳はらず、編者も審かにしない。「和漢兼作集」は前半の十卷だけが寫本として傳存してゐるが、これは朗詠の書ではあるまい。また「和漢朗詠題詩歌」（尊圓親王筆）の如き書も編まれた。江戸時代に和漢朗詠集を摸して編纂刊行せられた書を擧げると、赤城懸直撰「和漢連珠朗詠」二卷は文政八年に成り、玉河靜庵藏版であるが、但稿は朗詠集と全く異なり、仁部禮部等に分ち、一々漢詩の題名を擧げてゐる。次いで撰者未詳の「和漢新朗詠集」（天保十五年刊、大阪河內屋版）、若林快熙著の「續撰和漢朗詠集」（嘉永五年成、江戸南風軒藏梓）、和氣是藤撰の「續新撰朗詠集」（文久元年刊、京都、安政七年の六人部是香の序文あり）等が續出して、何れも二卷で、朗詠集を摸したもの、詩和歌をも並び收めてゐる。その他「似我究歌詩」二卷（天文二十二年成、寫本）、森敬典編・宇多良直補の「和漢等情集」（文政六年成）等の朗詠集の體裁に倣つた書はあるが、朗詠そのものとは關係がない。實際に詠じられた朗詠を集錄し、又墨譜も附した本には「朗詠九十首抄」（増補流布本は「朗詠要抄」とも題す）、「朗詠要抄」（朗詠九十首抄の一本の外、同名異書の本、二本あり）、「朗詠要集」（各別項）等の書があり、並に一卷より成る。江戸時代に編纂せられた現存曲を集錄し、墨譜を附した書には「郢曲髓譜」五册がある。何れも寫本で傳はる。この外にもなほある事であらう。「朗詠九十首抄」に附せる「朗詠由來」は寶德三年に成り、簡明に朗詠の沿革を記してゐる。

【曲節】發聲が喚頭一句を歌ひ、次に二句目より助音の人々が同音に附けて歌ふ。二遍或は三遍繰り返す。その度毎に發聲の人が交替する。これは漢詩の朗詠も和歌の披講も同一の謠ひ方である。管絃の附物には、笙・箏・篳篥・笛を用ひ、古くは琵琶も用ひたが後世は用ひない。和琴は用ひない（樂家錄）。曲節は、一首毎に異なつてゐる。但し神樂・催馬樂に、一新機軸を作つた源家の祖源雅信が節付したのであるから、その曲節もそれ等に似通つてゐたらしい。故に朗詠は催馬樂風俗の一變したものと言はれてゐる（和漢朗詠集註）。「郢曲抄」によれば、朗詠は催馬樂の曲風で、より強く歌ひ、ゆる〳〵と節調くのどかに、附物の音も消ゆる程に歌ふのがよく、餘り聲を長く使はずに、ただ一息で聲の助なく、さら〳〵と常の詞を云ふやうに歌ふべしとある。これが平安朝時代の歌ひ方で、今日の如く抑揚屈折の多い言葉の分らぬ歌ひ方は非である。今日では朗詠一句を三句に分ち、各句毎に喚頭が歌ひ出し、付所から助音が付ける仕組となつてゐる（郢曲の樂譜に關しては神樂の項參照）。

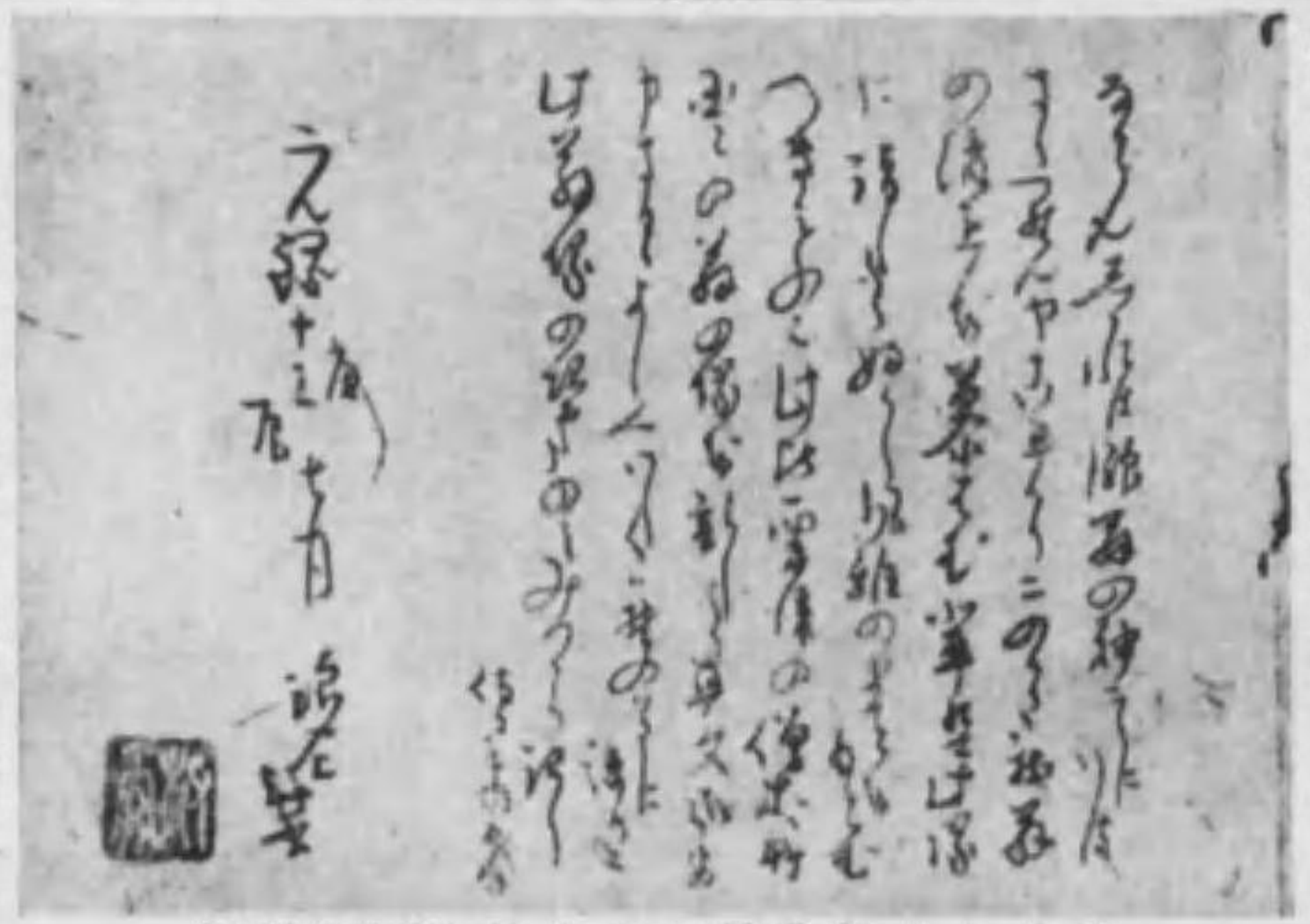
【參考】朗詠由來（朗詠九十首抄に附載す）○郢曲相承次第（續群書類從管絃部所收）○朗詠考（岡本保孝）○古事類苑樂舞部○和漢朗詠集鑑考（和漢朗詠集新釋附錄）○古曲保存會レコード（藤田）

朗詠九十首抄（らうえいくじつしゆせう）　朗詠譜本　一軸【撰者】藤原忠實【別名】朗詠要抄【解說】本書の奧書及び「郢曲相承次第」（別項）によれば、源家では、根本の朗詠七首であつたのが、後次第に增加して九十首となつた。こゝに於て「朗詠抄」を「九十首抄」と呼ぶのである。「文机談」「吉野吉水院樂書」「古今著聞集」（各別項）等の記事によると、九十首に撰定した人は知足院藤原忠實（應保二年薨ず、八十五歳）及び中御門右大臣藤原宗能（嘉應二年薨ず、八十七歳）であるらしい。何れも藤家の傳である。この「九十首抄」に、更に別本を以て三首を書き入れて、計九十三首とした本が、大原來迎院に藏せられ、「朗詠要抄」と題して弘安十年五月より六月に亙り、圓珠が書寫した旨の奧書がある。又右の「九十首抄」に三十五首を增加して百二十五首とした本がある。岡本保孝は、九十首の正員數の外、增加の三十五首は引下げて書いた由が跋文に見えるが、今數へて見るに、正員數九十七首、引下げて書いたのは二十四首である」と記してゐる。左樣な本もあつたのであらう。この本は、卷首に「朗詠由來」（寶德三年成）及び案譜法を載せ、終りに今樣五首を節博士を附して載せた。文安五年に書寫した由の源有俊の奧書があり、又享保十年の奧書ある卷子本が帝國圖書館に所藏せられてゐる。「九十首抄」のうち、節博士を附けたもの八十四首、增加した百二十五首のうち、節博士を附けたもの百七首、節博士のなきもの十八首、これは既に節博士が斷絕してゐたものであらう。而して終りの二首には、「不レ載二源藤兩家譜一朗詠」と註してゐる。詞句は片假名交りに書き下し、左傍に曲線の譜を附した。朗詠題によつて部類分してあるが、必ずしも朗詠集の順序によらず、題名も勝手に附けたものがある。又所々に朗詠の際の注意などが註してある。「九十首抄」の撰者は藤家の人であるが、今傳へられる流布本の增補せる「九十首抄」の譜は源家の流のやうで、藤家との相異などが註せられてゐる。この種の譜本の中では最も數が多く、傳來も古く信憑すべき本であらう。日本歌謠集成第三卷に入つた。又岡本保孝は朗詠考（說書叢書第三十卷）で、この書を「朗詠由來」と題し、前田夏蔭所藏本によつて解說紹介を試みてゐる。（藤田）

朗詠要集（らうえいえうしふ）　朗詠譜本　一軸【撰者】舉玄【成立】正應五年【諸本】原本は卷子本で、もと法隆寺東院の所藏であつたが、獻納して今は御物となり、法隆寺には影寫本を藏してゐる。又寬政四年に藤貞幹が東院の藏本で影寫した和學講談所本がある。珍書同好會で複製本が出て、また日本歌謠集成第三卷に入つた。岡本保孝の「朗詠考」（說書叢書第三十卷）にも前田夏蔭の藏本によつて解題紹介をしてゐる。【解說】正應五年三月に舉玄が琳弘（法師）に口傳した譜で、當時二十三歳の琳弘がこれを書き記したもの。春部より佛寺に至るまで朗詠題によつて分けてゐるが、順序は和漢・新撰の二朗詠集と同じでない。初め六十七首の節博士を授け、また三首を授けたので、合計七十首となつた。岡本保孝の說に、この三首は、和漢・新撰の兩朗詠集に入つてゐない「擧聲積紛タリ」「尺壤在世ノ昔」「功德林ヲナス」（紛音院讀）の三首であらうと云ふ。本書の詞句は殆ど片假名で書き下し、左傍に曲線の譜を附けた。片假名は古體の字が用ひられてゐる。譜は藤家の流であると云ふ。（藤田）

朗詠要抄（らうえいえうせう）　朗詠譜本　一軸【撰者】榮賢・心空【成立】文永二年【諸本】內閣文庫所藏本が最も古い。神宮文庫及び京都帝國大學文學部研究室にも所藏せられ、又安政二年に源武智良の寫せしめた旨の奧書ある寫本が帝國圖書館にある。神宮文庫本は册子で、他は何れも卷子本である。日本歌謠集成第三卷所收。【異本】岡本保孝は「朗詠考」（說書叢書第三十卷）の中に、「昔正平甲午歲六二合詠之音歲次辛卯、同初六日西宋晶共付二博士一畢」とある小牧春庵所藏の寫本に就いて、解說紹介を試みてゐる。これは下卷のみで上卷を缺き、南北朝頃に行はれた朗詠に譜を附けたものであらうと云ふ。かやうな本も傳へられてゐた。又「朗詠九十首抄」（別項）をも別名「朗詠要抄」と云ふ。かく同名の本が種々あつた。【解說】初め、寬喜四年四月二十七日、筑波山麓に於て榮賢が弟子心空に三十五首の朗詠の郢曲を授けた。次いで文永二年十一月十一日に心空がこの三十五首に六首を增して、四十一首の曲を門弟豪愉（法要房）に授けた。それがこの本である。かやうにしてこの本は、もと榮賢が撰し、後、心空が四十一首としたのである。更に因空は、この抄の曲を全部門弟の普一に授けたといふ奧書がある。頭註及び細註があつて、詞句は殆ど全部片假名で記され、左傍に曲線の譜を附けた。片假名には古體の字が用ひられてゐる。頭註には、朗詠題や、「和漢朗詠集」及び「新撰朗詠集」の所出の由を記し、又初めて節博士を附けた人の名が、頭註や細註に記され、更に細註には、その詩句に關する逸話などを記してゐる。排列は雜然としてゐるが、三十五首のうち、帝王と曉の二首及び終りの六首だけは題を記した。卷末には藤家の系圖を附してゐる。卽ちこの譜は藤家の流である。（吉野吉水院樂書參照）（藤田）

浪化（らうくわ）　俳人【名】晴寬。幼名正丸（一に政丸）【法名】常照上人【別號】應々山人・休々山人・自遺堂【生歿】寬文十一年十二月十七日生れ、元祿十六年（二三五九）十月九日歿す。享年三十三（三十二歲說・三十四歲說は共に誤である）。【院號】應眞院【閱歷】大谷派本願寺十四世の門主琢如上人（俳號自賢、季吟門）の季子（七男）で、長兄常如上人（俳號桃山）・中兄琢惠上人（俳號古雲）・一如上人（俳號萬疎）等の連枝である。七歲の時、越中井波町瑞泉寺に入り、十一世の住職となつた。本山との關係上、上洛する事屢々であつた。俳諧は十九歲の頃の作から見られるが、本山內に季吟流の俳諧が行はれてゐたので、かゝる家庭的關係から俳諧に入つたのであらう。早く去來によつて益する所が多く、去來の歿するまでも益を乞ひ助力を仰いだ。芭蕉とは元祿三年（二十歲）に會つたらしい資料があるが確實性がなく、確實に知られるのは、元祿七年閏五月、去來の落柿舍で去來の紹介によつて芭蕉と對顏した時で、これが芭蕉との最初の且つ最後の對顏であつたらしい。芭蕉が元祿二年「奧の細道」の行脚の時、越中で「早稻の香や分入る右は有磯海」の吟のあつた時知らずに過ぎたので、元祿六年頃から去來の助力によつて「浪化集」（有磯海・となみ山）の撰集を企て、芭蕉歿後は、去來から聞いた芭蕉の言に基いて朗詠集の部立による「續有磯海」の編を思ひ立ち、又元祿十三年義仲寺芭蕉塚前の小石三片を拾ひ來り、これを同町の淨蓮舍（淨土宗）の傍に埋めて翁塚を築き（新翁塚之銘文）、翌年支考は、無縫塔を建立したが（浪化の翁塚記）、翌十五年伊賀の土芳等が芭蕉の肉親也多法師の厚意で芭蕉の黑髮を讓り越したので、これを翁塚に納めた（同年追補の新翁塚之銘文）。當時支考は北陸に勢力扶植を謀つてゐたが、浪化は支考とも親密となり、浪化の歿した時、支考は「浪化公終焉記」を書いた。浪化は去來・支考の外、許六・丈草とも可なり親しかつたが、金澤に瑞泉寺の別院があつた關係にもよつて、金澤俳人と風交深く、特に萬子（別項）とは姻戚關係があつたので一層深交があつた。井波には浪化の侍者林紅を初め浪化を周る俳人が少くなく、又浪化の嗣子桃化（應現院眞照、延享二年歿、享年五十）も父に繼いで俳に遊んだ。


浪化上人遺墨探記の末尾（松宇文庫藏）

【著作】有磯海 浪化集上（別項）（元祿八年刊）○となみ山 浪化集下（別項）（同年刊）○續有磯海（別項）（元祿十一年刊）○そこの花 支考と共撰（元祿十四年刊）○浪化上人發句集 中塚野園編（寶曆元年刊）○浪化句集（元祿俳家々集第一篇の中）河中雲裕編○蕉門名家句集 浪化の部 ○浪化評句集 岩谷山櫻子編〔日記〕元祿五年壬申日誌・丙子丁丑風月藻・風雅戊寅集・屠維單閼。〔句帖〕甲戌帖。〔俳諧〕獨吟百韻○連吟百韻。

【人物・作風】「續有磯海」の自序に、「當時みだりに蕉門の徒と名乘るやから、國々にあまねく所々にみてり。されども正しく其直示（續）

を得たるものすくなし」と云つてゐるやうに、浪化自身は芭蕉の遺風を違へず、末弟でありながら芭蕉を慕ふことの深かつた點から、その人物も俳諧の如何も窺はれよう。なほ支考は「浪化公終焉記」に、「此君の此道にかたうなる、萬にいちはやき所おはして」と云つてゐるが、俳諧の悟入にも早く、明敏な素質の人であつたらしい。その作風に於ける特色は客觀的諷詠に優れてゐることで、從つて地方色の著しい作があり、方言をも驅使して憚らない。又句法にも獨自なものがあつて、すべて研究的な態度がある。若くして歿したので、未來を持つ作家であつたと云へるが、併しなほ芭蕉の高弟の優れた人に多く遜色を見ない作を殘してゐる。

【附說】浪化の著と稱する「俳諧正語抄」（文政十二年刊）は、羽黑の圖司呂丸の家に傳へられたものといふが、僞書であらう。浪化の著と稱する「疑問集」といふものも僞書であらう。「白雉夜話」に、「とくさとみぐさの事（浪化撰去來校合）」と見えるが、不明である。

【參考】霜の光（一周忌追善集）各務支考編○白扇集（七周忌追善集）同上○麻頭巾集（百五十回忌追善集）瑞泉寺晢行院編○去來文 向井去來○風俗文選（作者列傳）森川許六○和漢文操 各務支考○誹諧世說 高桑闌更○俳家奇人談 竹內玄々一○浪化と涼菟 河東碧梧桐（俳句の研究）○浪化上人と俳諧 當夜編（句佛上人）○浪化上人と越中の鄕土色 木津蒼雪（藝術大正九ノ一一）○浪化上人と當時の越中俳人 同上（俳諧雜誌大正一〇ノ一〇）○浪化俳考 藤峰青風（同一〇ノ一二）○浪化上人の事ども 木津蒼雪（同一一ノ二）○浪化上人と萬子 志田素琴（藝術昭和四ノ四）○浪化年譜 岩谷山梔子編（浪化發句集）○浪化の元祿五年壬申日誌について 石原暁水（實俳昭和七ノ一二）○浪化の芭蕉入門 同上（同昭和八ノ二）○浪化上人筆「甲戌帖」に就て 殿田良作（同昭和八ノ三）○翁塚と黒髪庵の沿革 宇野柏里（同昭和八ノ一〇・一一）〔志田〕

撈海一得 らうかいいつとく 「漫書閑筆」を見よ。

弄花抄 ろうくわせう 註釋書 【作者】牡丹花肖柏が、宗祇の說を基礎として作つた聞書に、實隆が補正したもの。「群書一覽」に、「此書は逍遙院實隆公より牡丹花老人の聞書云々」とあるが、意味不明。「岷江入楚」に「弄花、肖柏老人聞書、逍遙院潤色歟」とあるが正しい。又「實隆公記」永正八年九月十一日の條に、「予所書之弄花抄七冊（源氏聞書也）」とあるところから、實隆の著であるといふ說（山脇毅氏）がある。【名稱】單に「弄花」（內閣文庫・京都帝大所藏本）とも、「源氏物語抄」（神宮文庫所藏本）とも、「源氏物語聞書」（國學院大學所藏本）とも、「源氏聞書逍遙院御抄」（東京帝大所藏寫本）とも稱す。「弄」の字は、一に「哢」の字を當てる。弄花軒肖柏の抄した聞書の意であらう。この名は、「實隆公記」永正七年十月の記に見えてゐるから、書寫と同時に實隆の命名するところであらうと思はれる。この名が一般に流布したのは、天文十九年に成つた「休聞抄」の頃からであらう。【卷冊數】奥書に「七冊調之」とある。七冊になつたのは三條西實隆の書寫した本からで、それ以前は何冊であつたかわからない。「湖月抄」や、「一時隨筆」に八卷とあるのは、「萬水一露」に「弄花」八冊とあるのによつたのかも知れない。「群書一覽」には七卷十三本とある。現存せる本では、十三冊のもの、十冊のもの、八冊のもの、七冊のもの、三冊のもの等がある。【成立】文明八年五月九日に成り、翌九年二月この書を讀みなほして訂正した（奥書）。これが即ち第一次の「弄花抄」で、この成立に、肖柏の師宗祇が關係してゐたことは、「一葉抄」の奥書及びその內容を、この書に比較することによつても、又本書の奥書に、初めて宗祇の說を聞いてから十四年目、長享三年三月十八日に、再度師說を種玉庵で聞いて訂正したといふことが見えてゐるのによつて見ても明かである。さてこの第一次の「弄花抄」、即ち「肖柏老人聞書」は、實隆に貸與され、永正七年六月から八月までの間約二ケ月の間に急いで書寫された。その時、實隆は肖柏の再度の聞書の部分も、宗祇が一條兼良に質した不審の條々、同じく肖柏が尋ねた不審の條々も、悉くならべて相當の箇所に書寫し、終りに「終二其功一、七冊調レ之、暫加二一見一可二清書一之抄物也」と書いて珍重した。後、實隆は、その寫本に對して修正改訂を試み、自ら原作以上の面目を添へしめた。「弄花抄」は、實隆の加筆によつて益々有名となり、近衞前關白は肖柏を通じて、實隆にその所持本の貸與方を懇請し（實隆公記）、玄清法師は、辭を低うしてその所持本の借覽を乞うた（實隆公記）。かくして第二次の「弄花抄」は完全に成立した。その第二次本の成立は、何時であるか明かでないが、肖柏が陽明前關白の懇請を實隆に傳へたのが、永正七年十月十五日で、肖柏の源氏講義が、近衞家で續けられてゐた最中のことである。その頃、已に實隆の修補訂正は、少くとも一部分は成つてゐたと想像される。「實隆公記」（永正七年八月十九日）に「源氏與抄企之、今日先立筆者也」とある。この「與抄」が「弄花抄」であらうといふ說（山脇毅氏）もある。即ち「肖柏老人聞書」を中心にして、修正加除した第二次の「弄花抄」であらうとするのであるが、これは自然な考へ方ではあるけれど、その實隆の抄といふものは、たとひ今傳はらずとも、むしろ「細流抄」の根本になつたと思はれる公條の三條西家秘抄（岷江入楚に引く）に近い或る抄ではなかつたらうか。【諸本】前記成立事情に關聯して、二種の本が存するわけである。一は、實隆の補修前の「肖柏聞書」であり、二はその後の修正本である。前者は東京帝國大學所藏「源氏物語聞書逍遙院御抄」及び國學院大學所藏の殘缺一冊等であり、後者は流布諸本である。この二種の本には、內容に相違がある。前者よりも後者の方が、內容が增加してゐるが、彼我互に出入がある。前者には、所々に近衞家で源氏の講義をしたことや、合點を加へたことなどが、年號と共に記入してあつて、肖柏を中心とする當時の源氏研究の一端を察知することが出來る。この本のことは山脇毅氏が、「藝文」（大正十三年一・二月）誌上に發表された。後者には、宮內省圖書寮・內閣文庫等の藏本があり、多少の字句の相違がある。內閣文庫本は、一華堂乘阿の自筆本を寫せるもので、卷頭及び文中に、講義に要する日數を記入したので、以て講義進行の狀態を推察することが出來る。神宮文庫所藏本は、これ等の諸本に、更に增補を加へたもので、內容は一層增加してゐる。【內容】卷頭に光源氏年次といふものがあり、各卷の年立を略記し、次に「桑華物語」に見えた光源氏に關する事項を引き、次に作者・作意・大意・時代・諸本不同・准據・古來稱美等の條々を述べ、後の註釋書の形式に重大な影響を與へた。各卷の註釋は、先づ卷名の由來を說き、次に註釋に移つてゐる。語釋は「源氏物語」中の主要なる語を摘出し、これに簡單な註釋を加へ、「河海」「花鳥」に見えた說は改めて釋せず、ただ「見レ河」「評レ花」とのみあげてゐる。但しこれ等の部分は、或は實隆によつて增補された部分かも知れない。また所々に「一答」「一勘」の說をあげ、「私云」といふ說もある。「私」とは、實隆をさすのではないかと思はれる。末摘花の卷、「ずゐしんからこそはかばかしき事もあるべけれ」とある條に、「永正七八月日私注之」とあるは、實隆でなければならないことを證明してゐる。この書は「實隆抄」又は肖柏の「一葉抄」と、ほぼ內容形式に類似したところがあり、これ等が、兼良・宗祇を中心として互に關係し合つた事實を示してゐる。【價値】「河海抄」「花鳥餘情」（各別項）についであらはれた註釋書として、重要なるものの一つであり、青表紙系統本の註釋書としては最初のものであつて、後世の源氏註釋書に、內容上、形式上、決定的な影響を與へた。又宗祇の說を知る上に「種玉篇次抄」「一葉抄」等と共に、重要なる資料であり、河內本から青表紙本へと推移して行く過渡期の著述として、註釋史上に種々なる資料を提供する。即ち註そのものとしては勿論、史料としての價値をも有するのである。

【參考】國文學研究史 野村八良○源氏物語聞書と弄花抄 山脇毅（藝文一五ノ一・二）○源氏物語弄花抄と細流抄 同上（藝文一五ノ四）〔池田〕

老牛餘喘 らうぎうよぜん 隨筆 初編三卷 【著者】小寺淸之 【刊行】天保年間 【解說】備中の國學者として聞えた著者の神道・言語・國史・制度・古俗等に關する考說で、殊に古言に係る解釋に見どころが多い。まゝ自己見聞の奇事談もある。上卷に八幡宮所祭以下三十七條、中卷に君子國以下五十一條、下卷に征韓以下三十九條を收め、二三の圖畫を挿んでゐる。初編と標してゐるが、第二編以下は未出に了つたらしい。天保八年著者のはしがき、同十一年藤野守克の跋がある。門人小野包高・上月則壽が相謀つて上梓するところと云ふ。河村元重の所校である。

【著者小傳】小寺淸之は、備中國笠岡稻荷神社の祠官小寺淸先（「本教提綱」の著者）の男で、父の職を繼いで常陸介と稱した。椿園と號し、家塾を萬年青舍と云つた。父の後を承けて鄕國に國學を弘めたが、天保の末年に歿した。享年不詳。著述に、「備中名所考」「神職考」「日本書紀校點」等がある。〔和田〕

弄齋節 ろうさいぶし 歌謠 【名義】癆瘵と云ふ字を宛て、勞病・氣病みの事で、この病氣が流行した頃、この流行唄も世に行はれたので、この名を持つに至つたのだと云ふ。また朗細と書くのは、朗らかな聲で節細かく歌ふ意かとも云ふが、これ等は何れも信ぜられぬ。弄齋坊といふ浮世坊主が歌ひ出したからの名であらう。又、籠濟とも記してゐる（昔々物語）。「ろさい」と約めて云ふ事もある。【解說】慶長を限とする隆達節（別項）の後を承けて、元和・寬永頃世に行はれた流行唄。もと京都に發生したものらしく、六條の遊里で行はれた。「色道大鏡」に「六條に於て對馬が癆瘵」「傾城の歌はらうさい片撥を最上とす」と記してゐるのがこれである。ついで江戶でも既に寬永頃には流行したらしく、「吾妻物語」に見えてゐる。江戶に行はれた歌を江戶弄齋と云ひ、上方のと區別するのは、曲節に可なり變化があつたからであらう。江戶弄齋から投節（別項）が出た。歌詞は初め、

山鳥何を歎ひて儚ゐの、淺ぎにあらであたら此の世を

と云ふ短歌形式の歌であつた（昔々物語）。これは早く「閑吟集」、又「吉原流行小唄總まくり」の「有節歌づくし」にも類歌の見える歌であるが、この歌を弄齋の原形とする說は疑はしい。現在殘る歌詞は、大方三四四・三三四五の形式である。この歌に至つて近世調の歌謠形態が完成せられた。隆達節には未だ三味線を伴はなかつたが、弄齋節に至つて三味線を用ひた。歌の形式が一定し、近世調の形態を取るに至つたのも、三味線を用ひたがためであらう。後には、次第に長歌形式の歌も現はれた。「當世小歌揃」の弄齋、

山の端に西へ東へ落りし里も、月の光は一人ものかは

憎や憎しと思へはいとし、我にひとしき人しなけれは

「傾城淺間嶽」に見える江戶弄齋の歌に、の如き歌が見えるのは、その崩れた形式である。弄齋は箏によつても奏せられた。三味線・箏・一節切の三器が提携したのも、弄齋が最初であるらしい。三味線の組歌にも取られてゐる。弄齋節は明暦・萬治・寬文頃まで四五十年間流行して、元和・貞享頃には次第に衰へた。八橋檢校は、これを箏曲に取り入れ、雲井調子と云ふ調絃法を作つて、その歌を奏したから、これを雲井弄齋と云ひ、現在も諸流の許し物、秘曲として傳へられてゐる。雲井の弄齋は、また吉原の流行唄として、明暦・萬治頃に行はれた。雲井と云ふ調絃の名は、「聲を張りあぐるにとれる名と聞ゆ」（嬉遊笑覽）とある。更にこの箏歌を取り入れ、佐山檢校が長唄として作曲した。「好色一代男」卷三に、「我振捨てとらうさい一拍子あげて」、同卷四に「らうさいその聲の美しさ彈手は上手」とある「らうさい」は、この長歌の弄齋の事で、古い流行唄の弄齋が貞享頃まで行はれてゐた譯ではあるまい。天和二年の「新撰咄揃」に「山のはと云ふらうさい」とあるのもこれであらう。なほ箏の雲井弄齋からは、更に生田流の新雲井弄齋や三つ物許の雲井弄齋の如きものが二種生じたが、何れも古い歌でない事は勿論である。【歌詞】「當世小歌揃」十四首（弄齋八首、江戶弄齋六首）。「異本洞房語園」八首。「淋敷座之慰」數首（弄齋片撥十四首の中）、「ぬればとけ」十八首。三味線組歌三首。「御船歌枕」七首。雲井弄齋は「吉原流行小唄總まくり」に十三首。箏組歌に三首と斷片一、「松の葉」の長唄に三首ある。但し諸書で重出した歌も多い。

住めば浮世に／＼、戀みの端すに、月さへ入ろやれ／＼、山の端に。（三味線組歌中許弄齋・「異本洞房語園」朝顏の草歌・「淋敷座之慰」弄齋片撥宿音百々にも同歌出づ）

忘草がな／＼、一本ほしや、折りて／＼育てて、見て忘りよ。（「當世小歌揃」江戶弄齋、三味線組歌中許雲井弄齋にも同歌見ゆ）

文はやりたしわが身は書かず、物を云へかし白紙が。（「吉原流行小歌總まくり」雲井の弄齋）

【參考】嬉遊笑覽○日本歌謠史〔藤田〕

勞作歌 らうさくか 「歌謠」を見よ。

老子 らうし 子書 二卷 【名義】「史記」の老子列傳には、「老子廼ち書上下篇を著し、道德の意を言ふこと五千餘言云云」とあるのみで、書名は擧げてゐないが、同書儒林傳には、「老子書」と云ひ、「韓非子」喩老篇に「道德經」の本文を引いて、「書曰」と云ふ點から想像すれば、漢初頃までは「老子書」と呼んでゐたらしい。「漢書」（卷三十）には「老子」とあり、又

同書藝文志には老子の書そのものは擧げてゐないが、老子鄰氏經傳四篇、老子傅氏經說三十七篇、老子徐氏經說六篇、劉向說老子四篇の四を載せてゐる。これを經と稱したのは、漢の景帝の時に始まると云ふ（焦竑老子翼附錄）。老子の書を一に「老子道德經」又は單に「道德經」と稱するのは、揚雄の「蜀王本紀」（太平御覽卷一九一、太平寰宇記卷七二引）、邊韶の「老子銘」に始まる。後世上篇を道經、下篇を德經とするのは、夫々の冒頭の語に依るのであるが、かく分つて名付けるのは、約そ六朝の頃に始まる（老子廢語）。或は「老子通玄道德經」「道德眞經」「玄言新記道德」「新記玄言道德」などと云ひ、又その字數から「老子五千言」とも呼ぶ。【著者・成立】「史記」の老子列傳に據れば、老聃が晩年周の守藏室の史を辭して隱遁しようとした時に、關（函谷關とも云ひ、或は散關とも云ふ）の令尹喜のために書き與へた遺訓であると云ふが、老子の書の中には、前後の重複もあり、また文體の統一を闕き、思想的にも諸家の言を雜へて、多くの矛盾と不統一とを含み、「史記」に云ふが如き事情の下に著作せられたものとは信じ難い。その幾許が老子の手に出で、何時、如何なる人々の手に依つて完成せられたかは、なほ明かでないが、韓非子の「解老」及び「喩老」以前、即ち戰國末期には已に成立して居つたらしい。又老聃の年代も「史記」の老子傳に從へば、ほぼ孔子と同時で、やゝその先輩の如く思はれるが、崔東壁、我が伊藤蘭嵎・齋藤拙堂の如きは、その時代を下さんとし、或はその實在を否定せんとする學者もあるが、大體戰國の初頭乃至中期に至る頃の人と考へられる。【讀本】老子の書は、道家の學者によつて轉々傳寫翻刻せられた間に、誤脫竄入も少からず加へられ、現存する本文には頗る異同がある。（一）王弼本。現存する老子の完備したテキストとしては最も古い。現行本は、南宋の晁說之が政和五年に跋寫し、熊克が乾道六年に印行したもので、原形には遠い。宇佐美灊水の考訂本（享保十七年刊・大正十三年文求堂覆刻本）は、王註の後に陸德明の老子音義を散入し、上欄に焦竑の老子翼の考異、孫鑛の古今本攷正と自家の校語とを揭げて諸種の王弼本の中で最も便利である。（二）河上公本。河上に棲む無名の神人が、漢の文帝のために著したものと傳へられてゐるが、實は六朝の僞撰に過ぎぬ（唐會要卷七十七）。兩本共に譌誤が少くないが、河上公本は主として王弼本に基づいたものらしい。何れも魏晉時代の代表的著作で、後世の註解は殆これに基づいてゐる。（三）傅奕本。唐の道士傅奕の校定したもの。これに據つて異本を對照したものに、畢沅の「老子道德經攷異」がある。（四）開元本。唐の開元年間に玄宗が註した老子の本文を云ふ。開元二十一年正月制して士庶の家に各々老子一本を藏せしめ、同二十三年天下の大觀に石臺を建てて御註老子を刻せしめ（舊唐書玄宗紀）、今その一が易州の龍興觀に殘つて居り、道藏本はこれと多少の出入がある。【由來】老子の學系に就いては多くの說がある。一、史官說（漢書藝文志）、二、黃帝說（老子の文を列子には黃帝書の文とし、司馬遷も亦然か云ふ）、三、商容說（淮南子繆稱）、四、容成（列仙傳）、五、婆羅門說（ラフィット、ラクーペリー等、西歐人の所說）、六、周易說（程大昌易老通言）、七、地勢說（藤田豐八等）等を擧げ得るが、要するに古本の敎を大成したものとするのが最も穩當である。これを黃帝に託するのは、儒家が堯舜に、墨家が禹に託する如く、支那人の尙古癖に過ぎぬが、一面その託するところの人物が、學派興起の先後を稽へる一指針ともなる。

【內容】〔本體論〕彼は道を以て宇宙の本體とするが、道德的秩序としての人道を意味する儒敎の道とは全くその內容を異にする。彼は無名と有名とを以て本體と現象との區別を示し、その本體たる道は名稱もなく形體もないので、これを玄或は玄の又玄と云ひ、宇宙萬象の本源としてこれを衆妙の門と云ふ（第一章）。この道は時空を超越し、天地に先だつて獨生獨立して、ただ自然に法るのみである。自然とは畢竟至極の謂ひで、道の外に別に自然があるのではない。故に道は相對的差別相を附して言說することは不可能であるが、假にこれに字して道と云ひ、强ひて名づけて大と云ふ（第二十五章）。かくの如き不生不滅の道は凡ゆる相對的認識を超越した永遠の存在で、これを夷・希・微と云ふ（第十四章）。宇宙の萬物は皆道の一元から發生して道に支配せられ、又終に道に復歸するものであるが、彼は本體と現象との關係を「無名は天地の始、有名は萬物の母」（第一章）、「衆妙の門」（同上）、「谷神」「玄牝」「天地の根」（第六章）等と云ふ。彼の現象論は、道は無の中から沖虛の一氣を生じ、これが分れて陰陽の二氣となり、この二氣が交感和合して、沖和の氣と三者相具はつて萬物を生ずるとする（第四十二章）。これは易（繫辭上傳）の一太極から陰陽の兩儀を生じ、四象・八卦を生じ、更に六十四卦と分れて一切萬象を盡す生成論と、その發展の形式に於て興味ある對照をなしてゐる。〔倫理說〕老子の倫理思想は本體たる道の主要なる屬性である自然を根柢とし、一言にして蔽せば自然主義に歸する。その目的とする所は、智慧や技巧を脫して淳朴自然の狀態に復る。換言すれば有限の現象界を離れて無限なる本體と合一するに在る。故に彼は無心の嬰兒に復歸する（第十・二十八・五十五章等）ことを理想とし、凡ゆる經驗的知識を罪惡の本として文化を否定する。その嬰兒を至善とする根本假定は、儒家の性善論に近い。而してこの目的達成の方法は凡そ三項を擧げ得る。その第一は淸靜恬淡であり、第二は無爲自然であり、第三は謙下不爭である。〔政治說〕老子は云ふ「之を身に修むれば其の德乃ち眞、之を家に修むれば其の德乃ち餘あり、之を鄕に修むれば其の德乃ち長し、之を邦に修むれば其の德乃ち豐なり、之を天下に修むれば其の德乃ち普し」（第五十四章）と。一身の修爲を以て治國の根源とするのは、儒敎の政治思想と異らぬ。ただ彼は政治上にも亦無爲自然を主張し、治者被治者共に無爲無能なるに至つて、初めて人類の幸福が齎されると云ふ。故にその理想鄕は、原始部落の社會である（第八十章）。　（宇野・木村）

【參考】韓非子（解老及び喩老）○老子道德經攷異（畢沅）○老子覈詁（馬敍倫）○老子考（王重民）○春秋倫理思想史（鶴島學一郎）○老莊哲學（高瀨武次郎）○老莊哲學（小柳司氣太）○老子原始（武內義雄）○老子の研究（同上）○老子と莊子（同上）

老子隨筆（らうしずゐひつ）

隨筆　二卷　【著者】新井祐登【解說】本書撰述の趣旨は、「老莊の大意を拾ひ、物を借りて言を寓し、當世卑俗の風をうつすのみ。讀むことは讀む人の身にあり」と著者の自序にある。卷一に大道の事、無學人師匠をたづねし事、貧乏神福神出合の事、嫁ひは知らぬ疾名といふ事等八條、卷二に神に祈る事、管城子石虛中學論の事、本を定めて末を知るべき事、馬子發明の事附儒佛神の論等七條を收めてゐる。凡て寓言的の談で、著者自ら戯著と題して居り、無年紀の自序がある。

【著者小傳】新井祐登。字は謙吉、通稱織部、號白蛾。號を黃州・龍山・古易館等と云つた。菅野兼山に儒學を受け、後易學を以て一家を成し、初め江戶に在り、後故國金澤藩に徵せられた。寬政四年五月十四日歿す。享年六十八。「古易精義」「易學小筌」「古易一家言」「古文孝經發」「牛馬問」「聖學自在」「老子形氣」等二十餘部の著作がある。　（和田）

老女物の謠曲（らうぢよもののえうきよく）

【曲目】世阿彌が「聲習條々」に、最高の能として說いてゐる「さび〳〵としたるうちに、何とやらん感心のある」「冷えたる曲」に該當するもの、現在實演に至難の曲として取扱はれてゐるものに、「檜垣」「姨捨」及び小町物（別項）の「關寺小町」など、老女を主人公とした謠曲がある。

【讀本】謠曲叢書・日本文學大系・有朋堂文庫・謠曲全集・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【檜垣】三番目〔作者〕世阿彌（申樂談儀）〔古名〕檜垣の女〔內容〕或る僧（ワキ）が肥後國岩戶に住んでゐたところ、百歲ばかりの老女（前ジテ）が、毎日閼伽の水を汲んで來るので、不審に思ひ、その名を尋ねると、かの「後撰集」に「年ふればわが黑髮も白川のみつはくむまで老いにけるかな」と詠んだ女で、昔筑前の太宰府で庵に檜垣をしつらへて住み、老い衰へた後、この白川の邊に住んだ白拍子、それが私だと回向を乞うて去る。僧がその白川の邊に行くと、かの檜垣の老女（後ジテ）が現はれて釣瓶の水を汲み、水に映る老の姿を見ては歎き、昔をなつかしんで、老の足どりで白拍子の舞を舞ふといふ曲。上揭の「後撰集」の歌を主材としたのである。複式夢幻能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【姨捨】三番目〔作者〕世阿彌（音曲作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕都方の男（ワキ）が信濃國姨捨山に行つて月を眺めてゐると、一人の女性（前ジテ）が出て來て、こゝは山に捨てられた人が、「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠んだ所と敎へ、今宵旅人の夜遊を慰めよう、私がその捨てられた女だといつて消え去る。やがて白衣の老女（後ジテ）が現はれ出て、月の曲舞を謠ひ、舞を舞ふといふ曲。「大和物語」に據つたもの。複式夢幻能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【構想】兩曲とも和歌・歌物語を主材としたもので、しを〳〵と老の歎きを洩らす間に、もの靜かな舞を舞ふといふ、華麗に流れず、陰鬱に陷らず、ただ閑寂を旨として作られたものである。

【參考】謠曲評釋（大和田建樹）○謠曲大觀（佐成謙太郎）　（佐成）

老人雜話（らうじんざつわ）

隨筆　二卷　【著者】江村宗具【讀本】隨筆文學選集第十一所收。

【解說】著者の談話を、孫伊藤宗恕が筆記したもので、著者は戰國時代に生れ、織豐時代を壯歲で過し、江戶期の寬文四年に百歲の高齡を以て歿した人であるが、その長い生活中に親しく見聞した雜事を述べてゐる。多少の覺え違ひはあるにしても、信長・秀吉・家康及びその部下の猛將・勇士を譏り評した邊りには、聽くべきものが多い。單に隨筆と云ふよりも史傳の雜談集といふべきものであらう。秀吉時代の事を述べることが最も詳かである。惺窩・道春・近衞前久（龍山）・千利休等諸名家に係る逸事もあり、猿樂の名手、鼓笛の達者等の記事もあつて通常武邊談ばかりではない。正德三年武陽滄洲の序がある。滄洲は向井氏か。

【著者小傳】江村宗具。號は專齋、又伯松庵、初め加藤清正に、後、森家に仕へ、京都に出て儒醫で終つた。永祿八年生れ、寬文四年に歿す。享年百歲。　（和田）

朗讀法（らうどくほふ）

【名義】朗讀法とは、口語體又は文語體の文章を正しく且つ趣味あるやうに讀みあげる方法である。聽者が文章の意味を十分に理解するのみならず、文章の美質をも美く感ずるやうに讀みあげる術。

【練習法】朗讀をするに必要な事は、朗讀すべき文章の思想及び感情を前以て精確に會得して置くこと、さうして朗讀の方法を心得てこれを自由に運用することである。さて朗讀は一の術であるから、その妙境に達するまでには、易より難に進み、簡より繁に入つて、その練習を積まねばならぬ。朗讀法の細目は發音法と表出法とに別けられる。（一）發音法は文章における音聲を明確に發する方法。（二）表出法は文章における思想及び感情を適當に表出する方法。以上の方法を實際に適用する練習は、便宜上次の三類に大別される。

（一）發音練習は、單音や熟音を初めとして語句文章の音聲を明確に發するための練習。

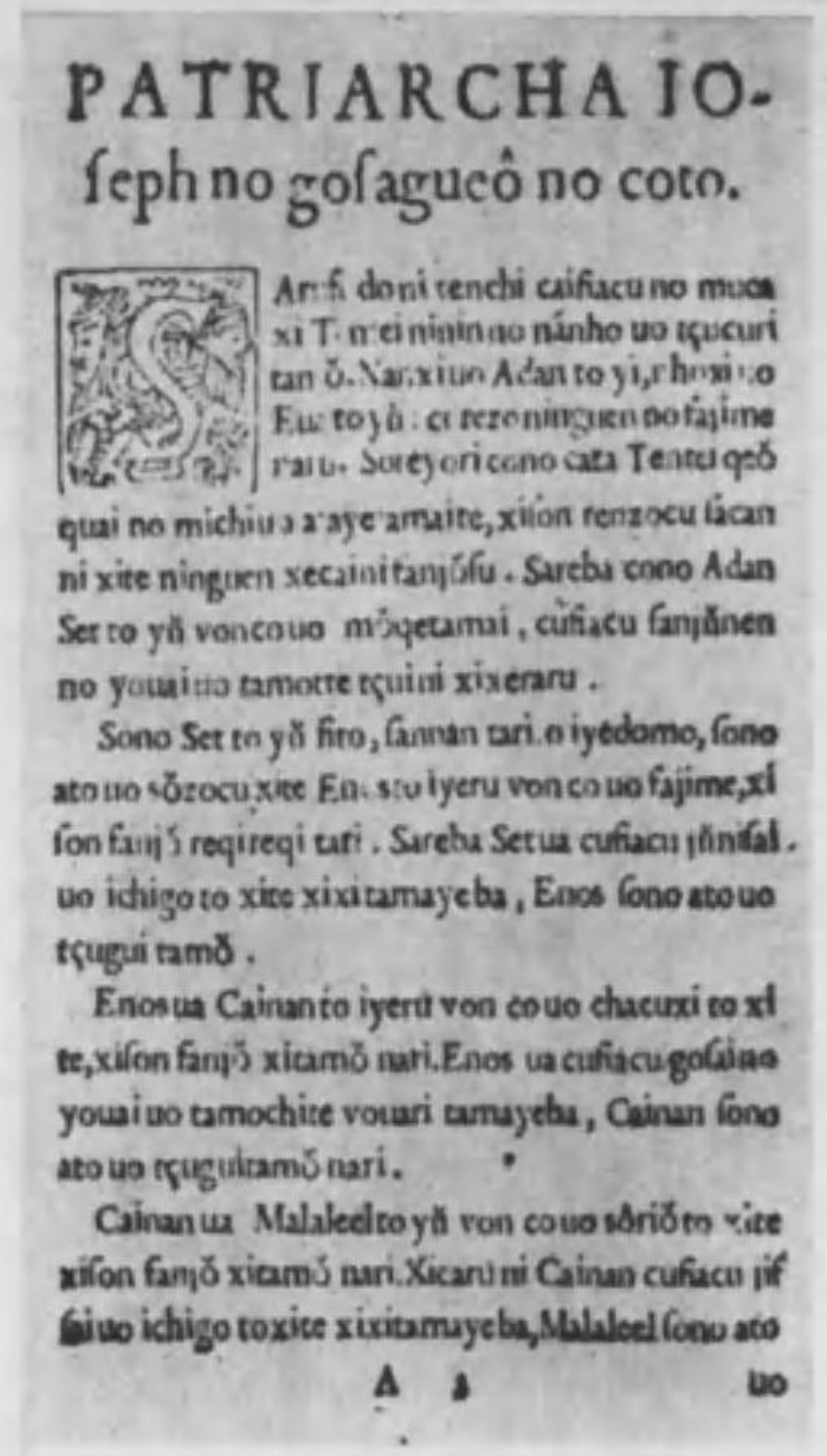
（二）正讀練習は、文章の思想を正しく讀み表はすための練習で、これには、明確なる發音と、理解を正しくするに足る表出とを要し、主として理智的文章を朗讀するに適したもの。

（三）美讀練習は、文章の思想及び感情を正しく且つ趣味あるやうに讀み表はすための練習で、これには、明確なる發音と、理解を正しくして趣味を感ぜしめるに足る表出とを要し、主として感情的文章を朗讀するのに適當するもの。

【發音法】標準語における母音や長母音や二重母音や父音（子音）や拗音（音節）や撥音や促音や連聲やアクセントを練習することを要する。發音の不正確を矯正するのには、特に小聲發音法や徐々發音法や、父音ぬき發音法や母音ぬき發音法や早口發音法等を用ひることがある。【表出法】朗讀を正しくし、且つ趣味あるやうにするため、左の諸項の表出法を善く練習することを要する。（イ）句讀（一名をポーズといひ、文章中の所々で讀み聲を少しづつ休止すること）。一、語法的句讀。二、美辭的句讀。（ロ）重念（一名をエンファシスといひ、文章中の或る語又は或る文句を特に強めること）。一、理解的重念（これに、一般的と特殊的とある）。二、情調的重念（これに、かさね・ひきのばし・さけび・とぎれの四種がある）。（ハ）昇降（言葉の音調のあげさげで、昇調と降調との類がある）。一、昇調の場合（意味未完結、疑問の語を入れない問、歎喜や仁愛や有望、絕叫や號令、稱讚や崇拜、驚愕、斷固などの場合）。二、降調の場合（意味完結、疑問の語を入れた問、假に設けた問、命令や哀求や宣告、憤怒や憎惡、威嚴や低氣などの場合）。（ニ）高低と強弱と緩急（喜怒哀樂その他種々の心情により、讀み聲の高低と強弱と緩急との度合を異にする。左に若干の例を示す）。

心情	莊重	歡喜	悲哀	激怒	滑稽	憧憬	煩悶	優美	勇武	確信
高低	低	高	低	高	高	低	中 低	中	高	中 高
強弱	中	中	混 合	強	弱	混 合	弱	弱	強	強
緩急	緩	中 急	緩	急	中 急	中 緩	緩	中	中 緩	中

ローマ字一



PATRIARCHA IO-
ſeph no goſagueô no coto.

S[illegible] doni tenchi caiſiacu no muca xi T[illegible] ninin no nánho uo tçucuri tan ŏ. Nanxi uo Adan to yi, [illegible] Eua to yŭ : [illegible] ninguen no fajime nari. Soreyori cono cata Tentei qeŏ quai no michi [illegible] aye amaite, xiſon renzocu ſacan ni xite ninguen xecaini tanjŏſu. Sareba cono Adan Set to yŭ voncouo mŏqetamai, cuſiacu ſanjŭnen no youai uo tamotte tçuini xixeraru.

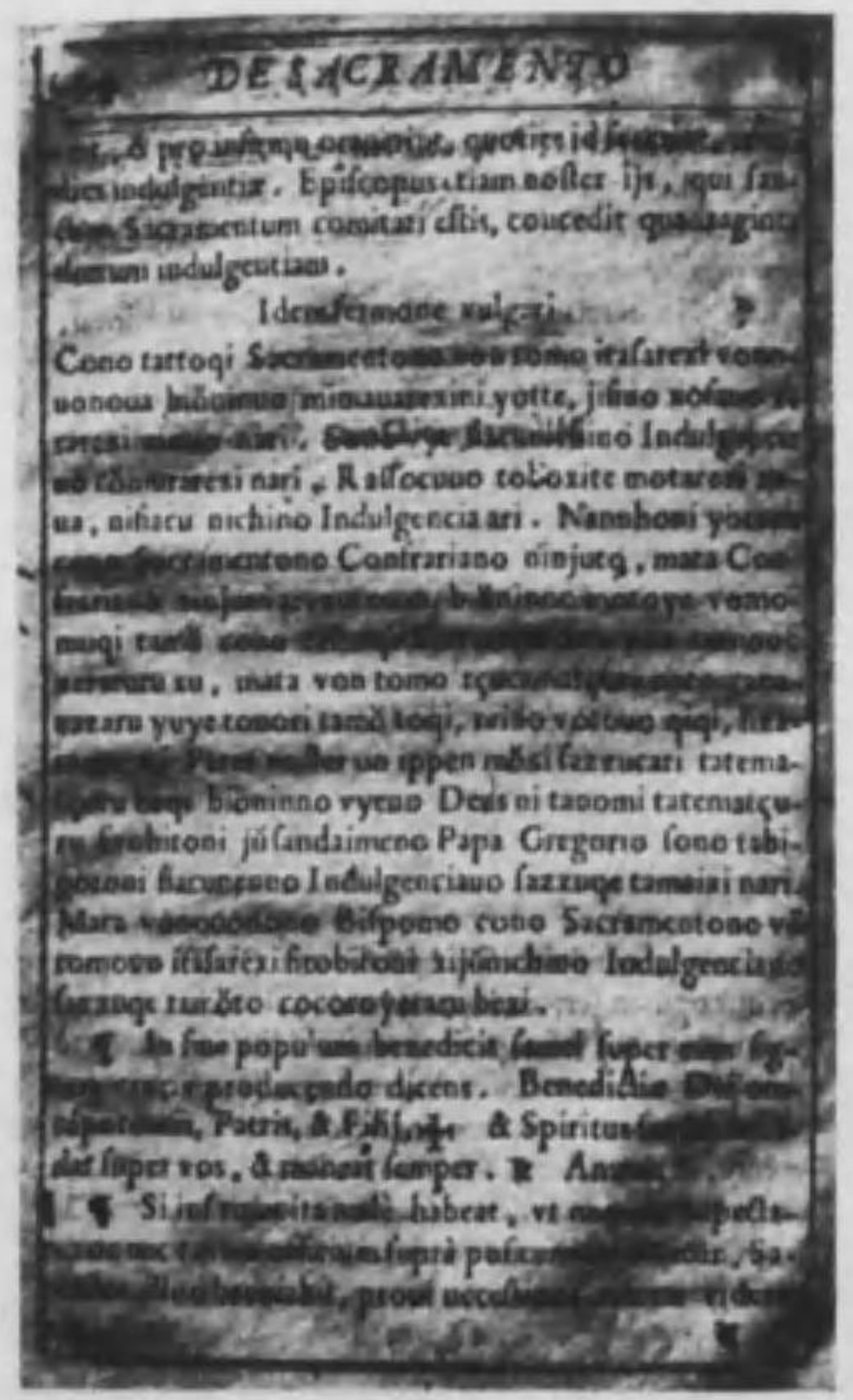
Sono Set to yŭ fito, ſannan tari[illegible] iyedomo, ſono ato uo sŏzocu xite Enos to iyeru von co uo fajime, xiſon fanjŏ reqireqi tari. Sareba Set ua cuſiacu jŭniſai uo ichigo to xite xixitamayeba, Enos ſono ato uo tçugui tamŏ.

Enos ua Cainan to iyeru von co uo chacuxi to xite, xiſon fanjŏ xitamŏ nari. Enos ua cuſiacu goſaino youai uo tamochite vouari tamayeba, Cainan ſono ato uo tçuguitamŏ nari.

Cainan ua Malaleel to yŭ von co uo sŏriŏ to xite xiſon fanjŏ xitamŏ nari. Xicaru ni Cainan cuſiacu jiſſai uo ichigo to xite xixitamayeba, Malaleel ſono ato

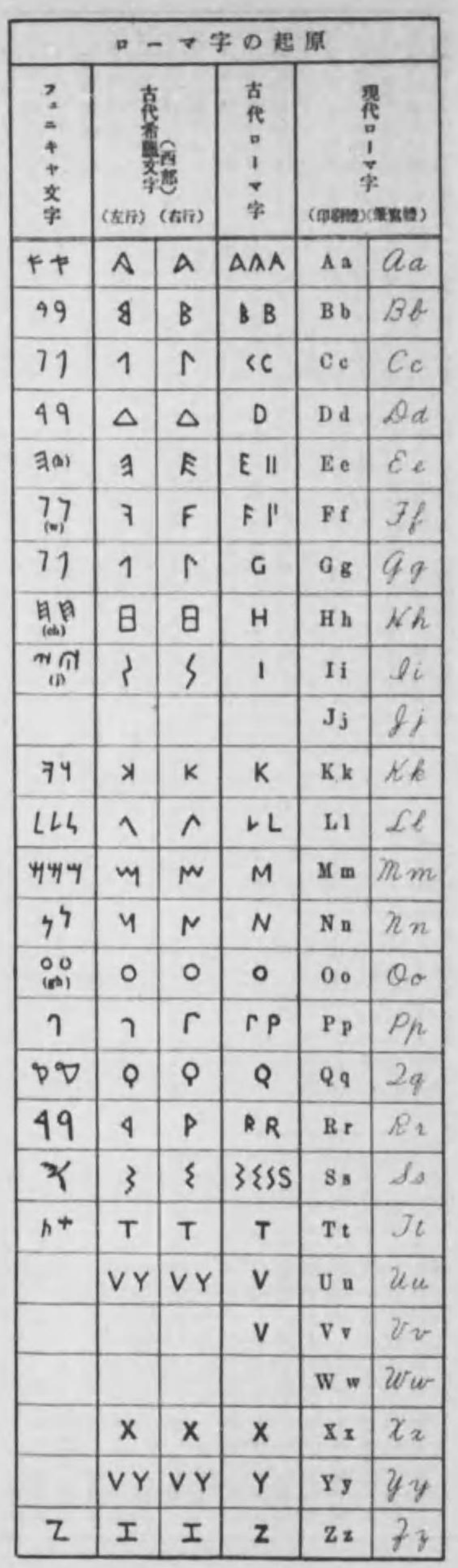
A 3　uo

サントスの御作業　1591年加津佐版
（羅語式）



DE SACRAMENTO

サカラメンタ提要　1605年長崎版
（羅語式）



ローマ字の起原					
フェニキヤ文字	古代希臘文字（西部）（左行）	（右行）	古代ローマ字	現代ローマ字（印刷體）	（筆寫體）
𐤀 𐤀	A	A	ΔΛA	Aa	*Aa*
𐤁 𐤁	B	B	B B	Bb	*Bb*
𐤂 𐤂	⅂	Γ	‹C	Cc	*Cc*
𐤃 𐤃	Δ	Δ	D	Dd	*Dd*
𐤄 (a)	Ǝ	E	E II	Ee	*Ee*
𐤅 𐤅 (w)	ꟻ	F	F I'	Ff	*Ff*
𐤂 𐤂	⅂	Γ	G	Gg	*Gg*
𐤇 𐤇 (ch)	⊟	⊟	H	Hh	*Hh*
𐤉 𐤉 (j)	ʅ	ʃ	I	Ii	*Ii*
				Jj	*Jj*
𐤊 𐤊	ꓘ	K	K	Kk	*Kk*
𐤋 𐤋 𐤋	⋌	Λ	⊢L	Ll	*Ll*
𐤌 𐤌 𐤌	ꟽ	M	M	Mm	*Mm*
𐤍 𐤍	И	N	N	Nn	*Nn*
𐤏 𐤏 (gh)	O	O	O	Oo	*Oo*
𐤐	ꓶ	Γ	ΓP	Pp	*Pp*
𐤒 𐤒	Ϙ	Ϙ	Q	Qq	*Qq*
𐤓 𐤓	ꟼ	P	R R	Rr	*Rr*
𐤔	Ƹ	Σ	ƸΣʃS	Ss	*Ss*
𐤕 𐤕	T	T	T	Tt	*Tt*
	V Y	V Y	V	Uu	*Uu*
			V	Vv	*Vv*
				Ww	*Ww*
	X	X	X	Xx	*Xx*
	V Y	V Y	Y	Yy	*Yy*
𐤆	I	I	Z	Zz	*Zz*

【朗讀者の心得】（一）朗讀する前に、善くその文章を讀み味ひ、發音と表出とを十分に會得し、練習しておく事。（二）朗讀を一人讀みとしないで、掛合讀み又は一齊讀みとする場合には、善くその準備の練習をしておく事。（三）樂に立ち又は坐し、胸を開き、頭を柔かに起し、讀む物を眼前の程よい距離に持つ事。（四）朗讀前に靜かに深呼吸を行つて腹力を豐かにし、朗讀中も鼻の孔から呼吸し、發音する時の口の開閉を自由自在にする事。（五）音調は室の大いさに適當にし、讀み聲が明かに室內に聞えわたるやう、おちついて讀む事。（六）凡そ話すやうに讀むことを基調とし、日常の談話よりはやゝ緩に讀み、發音を明瞭に、表出を確實に流暢にする事。

【參考】國語音聲學（神保格）○國語教育の爲の音聲學（石黑魯平）○日本音聲學（佐久間鼎）○國語の發音（大西雅雄）○話言葉の研究と實際（神保格）○國語發音アクセント辭典（神保格・常深千里）○朗讀法精說（日下部重太郎）　（日下部）

老梅居雜著　俳論俳話書　【著者】內藤鳴雪【刊行】明治四十年五月、俳書堂【內容】雜誌「ホトトギス」に載せられた鳴雪の論說・談話等を集めたもので、老梅居は鳴雪の別號である。その「獺祭書屋俳句帖抄」は子規の俳句に就いての批評であり、「追懷雜記」「言志集」「我俳句と日本新聞との關係」は、子規との關係を述べたもので、當時の俳界を知るに最もよい資料である。「中川氏の俳諧審美學」は、中川四明の著書の批評で、ハルトマンの美學から誘導された鳴雪獨特の俳論であり、「俳句の俳の字」「芭蕉と能樂」「歷史の俳句」等は、俳句に關する考證隨筆である。その他劇評があり、小說論があつて、翁の趣味の廣汎で、且つその學識の深さを窺ふに足る著書である。　（石井）

浪漫主義　藝術論（獨）Romantik.（英）Romanticism.【解說】十八世紀末から十九世紀初めにかけて歐洲全般にわたつた文藝運動であるが、その最初の主唱者指導者が多くドイツの哲學者、思想家達であつたがために、深い世界觀的背景を持つと共に、他面この言葉は多岐にわたつた思想上、文藝上の主義運動に冠せられる。十八世紀中葉から起つた悟性萬能の思想即ち啓蒙主義に對して、同じく理想を求むる思想家達は感情の優位を信じ、美的理性を尊重する傾向を持ち初めたことがこの運動の初源である。シュレーゲル兄弟、ノヴァリス、シェリング、シュライエルマッヘル等から、フィヒテ、ヘーゲルに至る人々は、その運動中の主要な思想家であり、フランスに於てはルッソーの思想に運動の發源があるとされる。而して哲學思想上シェリング哲學はその代表的組織である。文藝上の概念としては浪漫的といふ概念によつて說明される。これは中世紀のラテン語の方言、プロヴァンス地方語などで書かれた物語（それは、空想・冒險・戀愛・怪奇を內容とする）から引き出された觀念であるが、ゲーテのウィルヘルム・マイステルに見出される如く、自由な物語形式、主觀的な現實把握、理想主義的傾向、詩・空想の世界と哲學との混合等の特色は、浪漫的といふ概念を作り出したのである。浪漫的文學としてゲーテの作は代表とされた。しかし後になつてフィヒテの哲學に見られるが如く、自我個性尊重といふ觀念が增大するにつれて、浪漫的といふことも種々な解釋が下され、又それぞれの個性的作品が國々特有の感情思想をも含めて作られるやうになつた結果、この概念は極めて多面的な發展をなし、最後に、アウグスト、ウイルヘルム・シュレーゲルの考になると、總括的に古典的といふ概念に對立するものと解され、一般文藝上の精神或は傾向として自然尊重・形式主義・寫實主義的傾向のものに對立するものを浪漫的といひ、浪漫主義と云ふやうになつたのである。かくの如き廣義の浪漫主義文藝の特色としては（一）主觀的世界把握、（二）夢想的であり感情的であること、（三）個性的であり、自由を尊重することのために、所謂傳統的形式破壞が行はれること、（四）即ち表現の形式的明朗よりも、感情の横溢、（五）象徵的であり、神秘的であること、（六）好奇的であり、異國情緒を好むこと、（七）無窮志的憧憬等。文學者としては英のバイロン、シェレー、キーツ、獨逸のゲーテ、ノヴァリス、ティーク、ハイネ、シュレーゲル等。佛蘭西のシャトウブリアン、後にユーゴー等。繪畫方面ではおくれて現はれたが、ローマン派としての畫家にはゼリコー、ドラクロア、ドラロッシュ等がある。音樂の方面では、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ワグナー等。（古典主義參照）

【參考】I. Babbitt : *Rousseau and Romanticism.* (1919). | G. Brandes : *Main currents in 19th Century Literature.* ‖ R. Haym : *Die romantische Schule.* ‖ R. Huch : *Die Romantik.* ‖ O. Walzel : *Deutsche Romantik.* | G. Mehlis : *Die deutsche Romantik.* ‖ G. Stefansky : *Das Wesen d. deutschen Romantik.* 1923. ‖ F. Strich : *Deutsche Klassik u. Romantik.* 1922.　（村田）

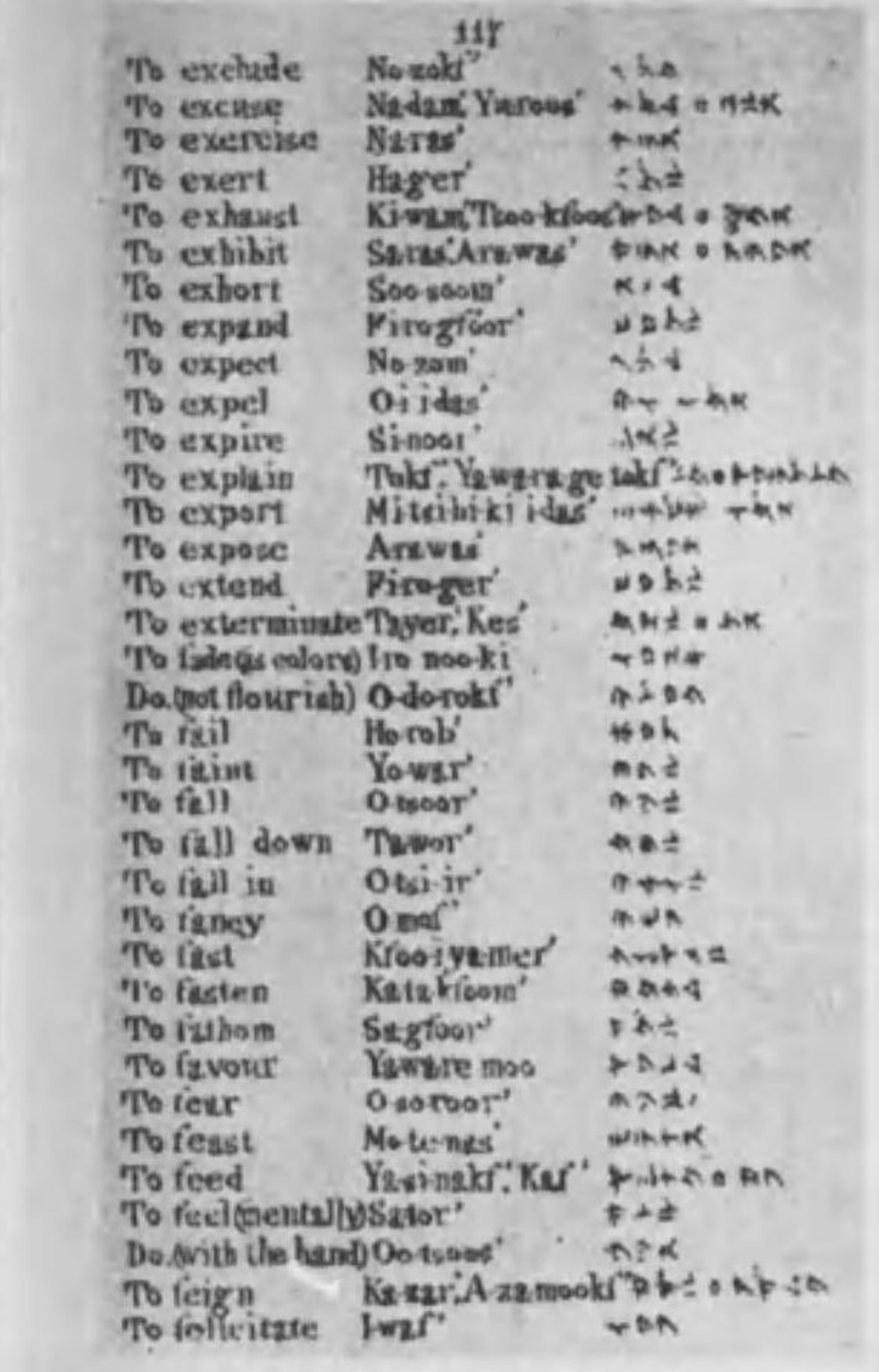
牢破　「破牢」を見よ。

老葉集　「老葉」を見よ。

朗廬　儒者【姓名】阪谷素。字は子絢、通稱素三郎、後、希八郎と改む。【歿年】明治十四年一月十五日東京に歿す。享年六十。【誕所】備中國川上村の人。【閱歷】初め父良哉に從つて大阪に寓し、奧野小山・大鹽中齋に學び、良哉が移つて江戶に寓するに及び、昌谷精溪・古賀侗庵に學び、文名大に顯はれた。後、備中寺戶村の興讓館に主となり、天下に名聲を馳せた。その學は程朱を宗とし、性命に拘れず、訓詁に泥まなかつた。明治元年廣島侯の賓師となり、俸米三百苞を給せられた。廢藩の後、陸軍・文部・司法の三省に歷任し、正七位に敍せらる。男爵阪谷芳郎はその四男である。【著作】文詩各千餘篇○左說詩鈔○田舍話○評註東萊博議六卷○朗廬全集一册。　（佐久）

ローマ字　文字の一種【解說】歐洲及び亞米利加の大部分に於て、その國語を書くために用ひられてゐる文字であつて、單音文字（文字參照）に屬する。印刷體と筆寫體との區別があり、印刷體にも筆寫體にも亦種々の字體がある。また印刷體にも筆寫體にも頭文字と小文字とがあつて、その用處を異にする。ローマ字は、西洋との交通が開けてから我が國に傳はり、これを以て日本語を寫したことがあつたが、現今では、西洋人に對する場合には、日本語をローマ字で書くことが一般の習慣となつてゐる。また明治以後、ローマ字を我が國日常の文字として、これを以て日本語を書くべしと主張するローマ字國字論が起つて、一派の人々は、現今に至るまで、その實現に努力してゐる。

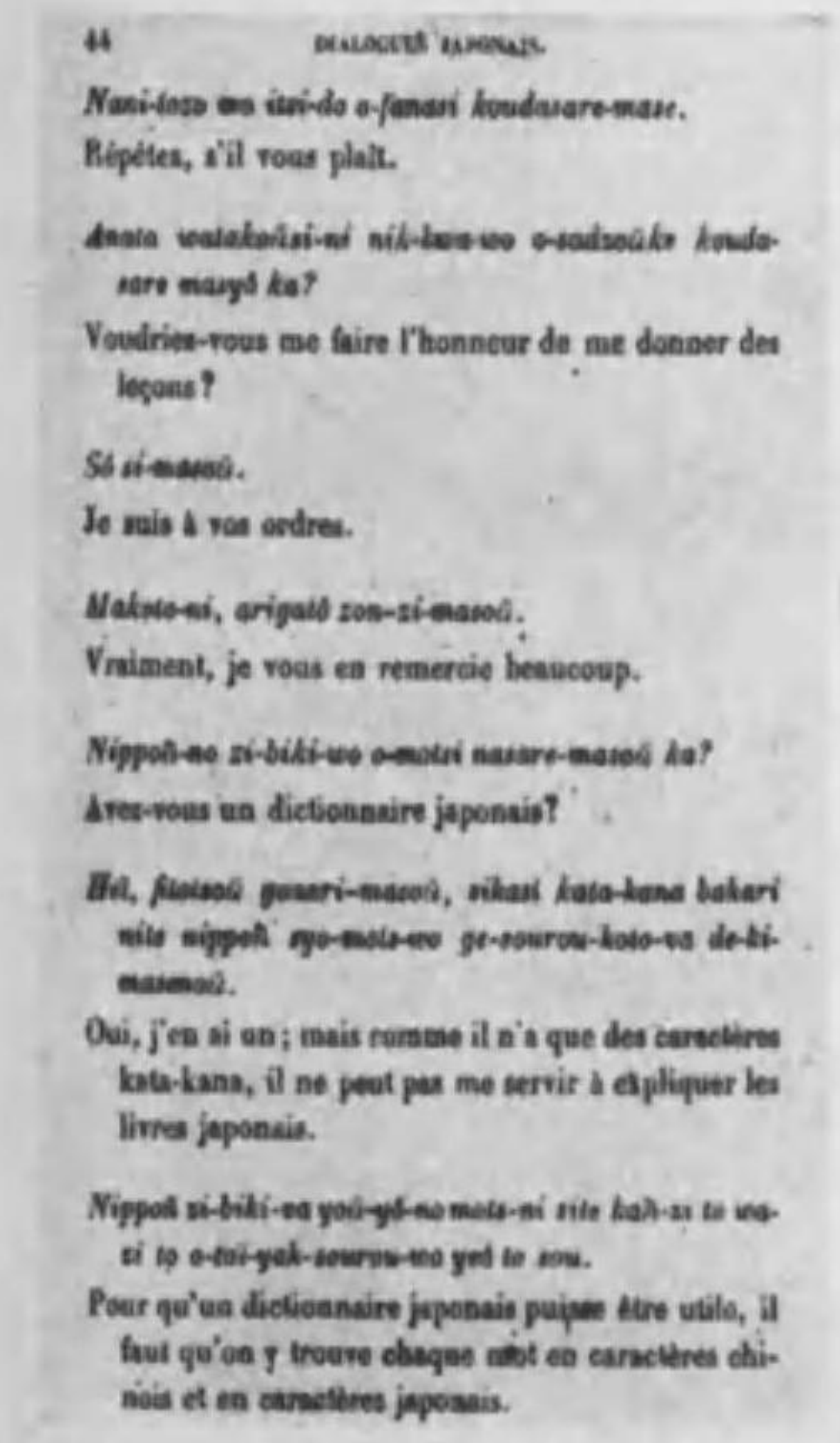
ローマ字 二



117

To exclude	No-zoki"	[illegible]
To excuse	Nadam' Yuroos'	[illegible]
To exercise	Naras'	[illegible]
To exert	Hager'	[illegible]
To exhaust	Ki-wam' Tsoo-kfoos'	[illegible]
To exhibit	Saras' Arawas'	[illegible]
To exhort	Soo-soom'	[illegible]
To expand	Pirogfoor'	[illegible]
To expect	No-zom'	[illegible]
To expel	Oi idas'	[illegible]
To expire	Si-noor'	[illegible]
To explain	Toki" Yawaragé taki"	[illegible]
To export	Mitsibiki idas'	[illegible]
To expose	Arawas'	[illegible]
To extend	Piroger'	[illegible]
To exterminate	Tayer' Kes'	[illegible]
To fade (as colors)	Iro noo-ki	[illegible]
Do. (not flourish)	O-do-roki"	[illegible]
To fail	Horob'	[illegible]
To faint	Yowar'	[illegible]
To fall	O-tsoor'	[illegible]
To fall down	Tawor'	[illegible]
To fall in	Otsi-ir'	[illegible]
To fancy	O mof"	[illegible]
To fast	Kfoo-iyamer'	[illegible]
To fasten	Kata-kfoom'	[illegible]
To fathom	Sagfoor'	[illegible]
To favour	Yawaré moo	[illegible]
To fear	O-sotoor'	[illegible]
To feast	Motenas'	[illegible]
To feed	Yasinaki" Kaf"	[illegible]
To feel (mentally)	Sator'	[illegible]
Do. (with the hand)	Oo-tsoos'	[illegible]
To feign	Kazar' A-za-mooki"	[illegible]
To sollicitate	Iwaf"	[illegible]

W. H. Medhurst 編　英和和英辭書
1830年 Batavia 版　（英語式）



44　DIALOGUES JAPONAIS.

Nani-tozo wo itsi-do o-fanasi koudasare-mase.

Répétez, s'il vous plaît.

Anata watakousi-ni nik-kwa-wo o-sadzoukè koudasare masyô ka?

Voudriez-vous me faire l'honneur de me donner des leçons?

Sô si-masoû.

Je suis à vos ordres.

Makoto-ni, arigatô zon-zi-masoû.

Vraiment, je vous en remercie beaucoup.

Nippon-no zi-biki-wo o-motsi nasare-masoû ka?

Avez-vous un dictionnaire japonais?

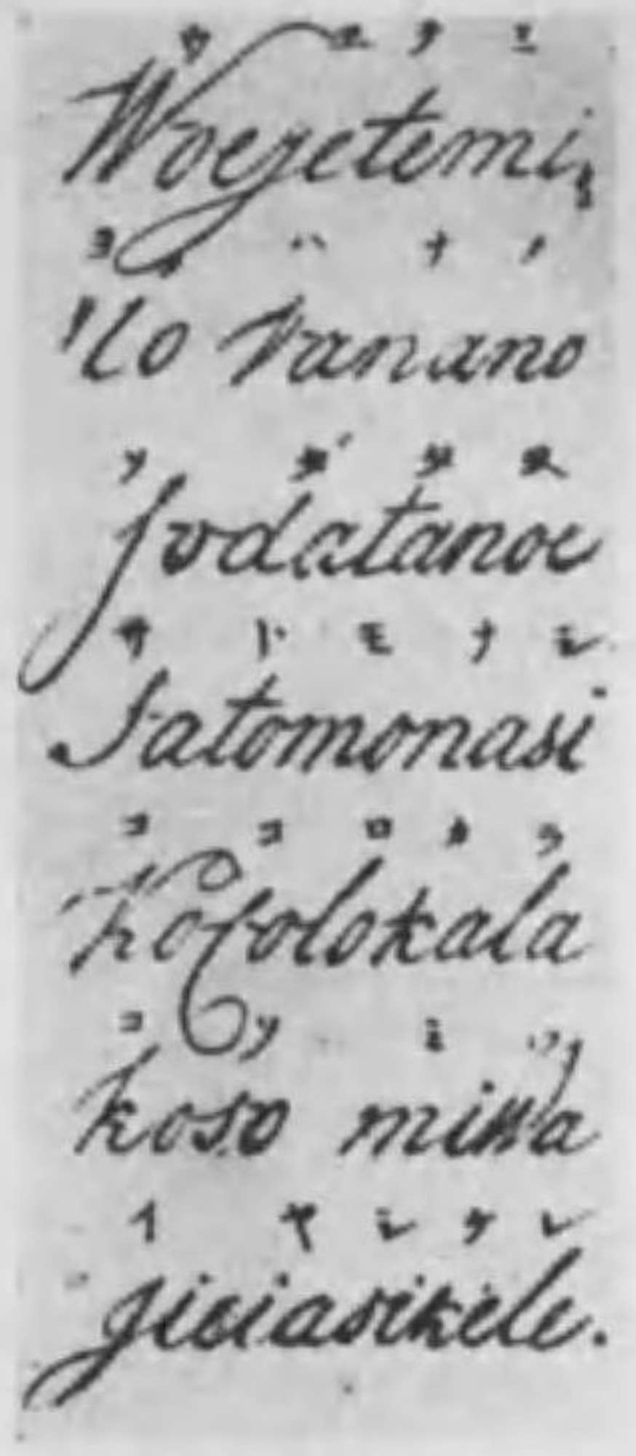
Hei, fitotsoû gozari-masoû, sikasi kata-kana bakari nite nippon syo-motsu-wo ge-sourou-koto-wa de-ki-masenoû.

Oui, j'en ai un; mais comme il n'a que des caractères kata-kana, il ne peut pas me servir à expliquer les livres japonais.

Nippon zi-biki-wa yoû-yô-no mots-ni site kan-zi to wa-zi to o-tsoi-yak-sourou-wo yei to sou.

Pour qu'un dictionnaire japonais puisse être utile, il faut qu'on y trouve chaque mot en caractères chinois et en caractères japonais.

L. D. Rosny 著　日本語會話
1867年 Paris 版　（佛語式）



ウ エ テ ミ
Woejetemi,
ヨ ハ ナ ノ
Io Vanano
ソ ダ タ ヌ
Sodatanoe
サ ト モ ナ シ
Satomonasi
コ コ ロ カ ラ
Kokolokala
コ ソ ミ ハ
koso miwa
イ ヤ シ ケ レ
iiasikele.

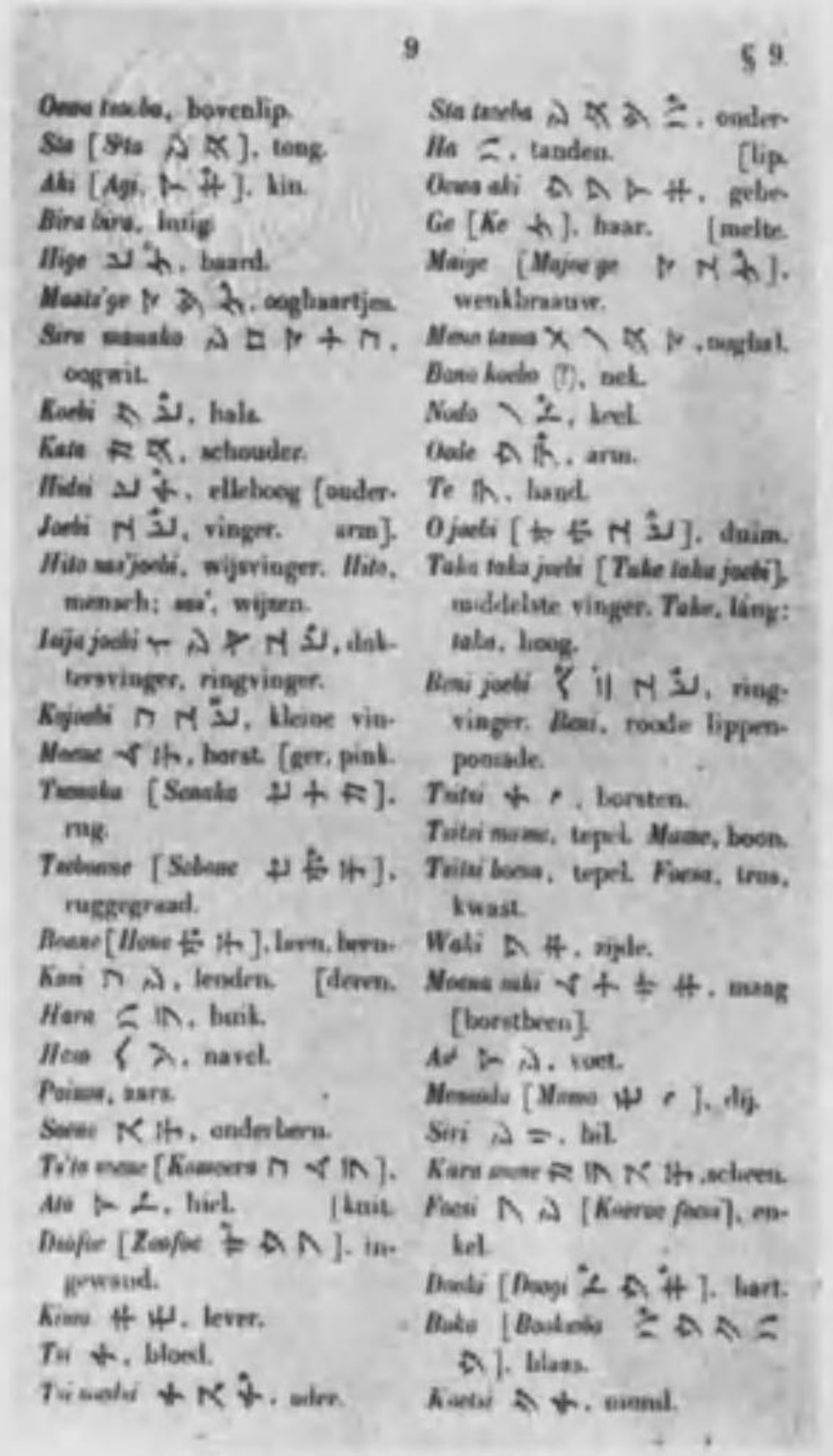
大槻茂質著　蘭學階梯
天明八年刊　（蘭語式）

Simeon Iosui

黒田如水の印

tadanoqui

細川忠興の印

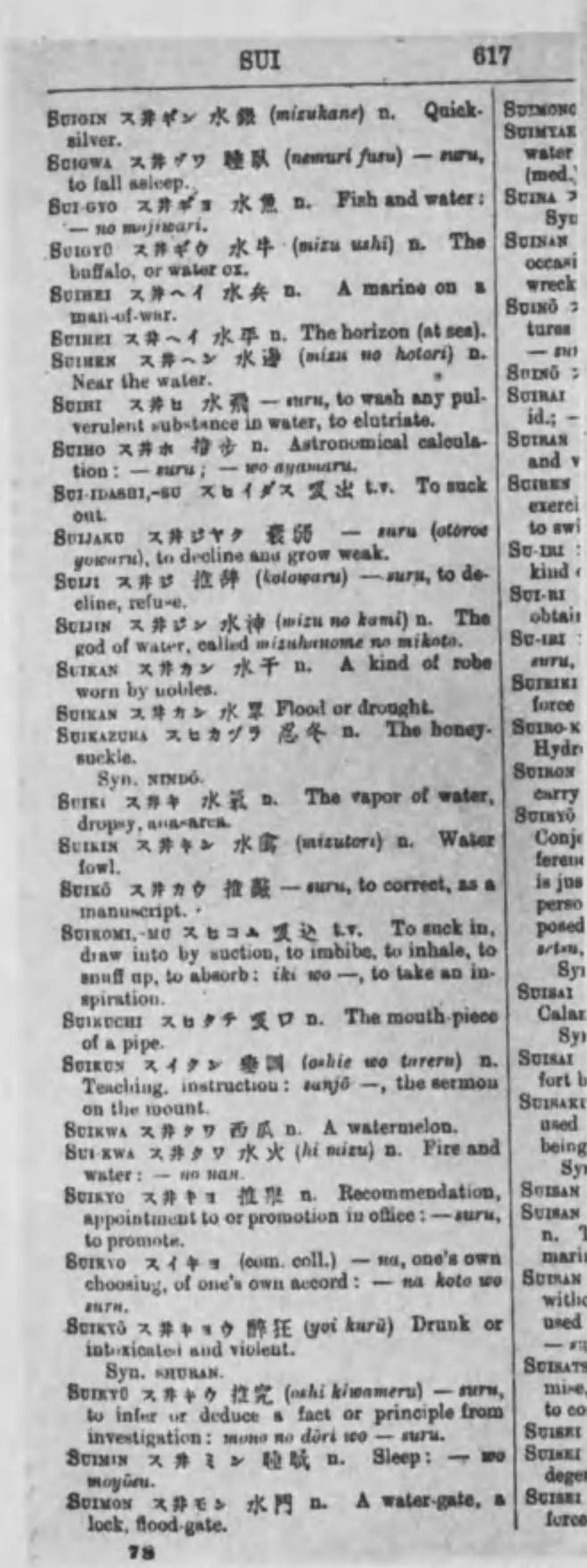


9　§ 9.

Oewa tsoeba, bovenlip.
Sia [*Sita*], tong.
Aki [*Agi*], kin.
Bira bira, lurig.
Hige, baard.
Maats'ge, ooghaartjes.
Siro manako, oogwit.
Koebi, hals.
Kata, schouder.
Hidsi, elleboog [onderarm].
Joebi, vinger.
Hito sas'joebi, wijsvinger. *Hito*, mensch; *sas'*, wijzen.
Iaija joebi, doktersvinger, ringvinger.
Kojoebi, kleine vinger, pink.
Moene, borst.
Tsenaka [*Senaka*], rug.
Tsebone [*Sebone*], ruggegraad.
Boane [*Hone*], been, beenderen.
Kosi, lenden.
Hara, buik.
Heso, navel.
Poimu, aars.
Sune, onderbeen.
Te'to mene [*Komoera*], knie.
Ato, hiel.
Dsofie [*Zoofoe*], ingewand.
Kimo, lever.
Tsi, bloed.
Tsi mitsi, ader.
Sita tsoeba, onderlip.
Ha, tanden.
Oewa aki, gehemelte.
Ge [*Ke*], haar.
Maige [*Majoe ge*], wenkbrauw.
Meno tama, oogbal.
Bono koebo (?), nek.
Nodo, keel.
Oede, arm.
Te, hand.
O joebi [[illegible]], duim.
Taka taka joebi [*Take taka joebi*], middelste vinger. *Take*, lang; *taka*, hoog.
Beni joebi, ringvinger. *Beni*, roode lippenpomade.
Tsitsi, borsten.
Tsitsi mame, tepel. *Mame*, boon.
Tsitsi boesa, tepel. *Foesa*, tros, kwast.
Waki, zijde.
Moene saki, maag [borstbeen].
Asi, voet.
Momodo [*Momo*], dij.
Siri, bil.
Kara mene, scheen.
Foesi [*Koeroe foesi*], enkel.
Donki [*Dsogi*], hart.
Buku [*Bookoeko*], blaas.
Koetsi, mond.

J. H. Donker Curtius 著　日本文典
1857年 Leyden 版　（蘭語式）

ローマ字 三



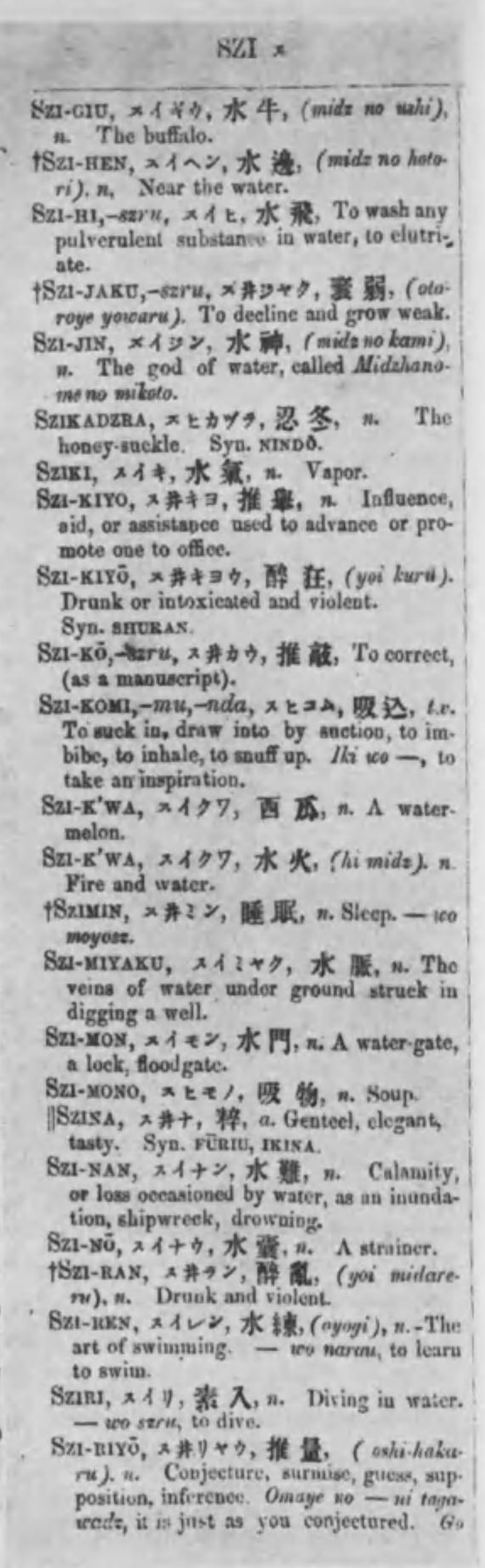
SUI　617

Suigin ス井ギン 水銀 (*mizukane*) n. Quicksilver.
Suigwa ス井グワ 睡臥 (*nemuri fusu*) — *suru*, to fall asleep.
Sui-gyo ス井ギヨ 水魚 n. Fish and water: — *no majiwari*.
Suigyū ス井ギウ 水牛 (*mizu ushi*) n. The buffalo, or water ox.
Suihei ス井ヘイ 水兵 n. A marine on a man-of-war.
Suihei ス井ヘイ 水平 n. The horizon (at sea).
Suihen ス井ヘン 水邊 (*mizu no hotori*) n. Near the water.
Suihi ス井ヒ 水飛 — *suru*, to wash any pulverulent substance in water, to elutriate.
Suiho ス井ホ 推步 n. Astronomical calculation: — *suru*; — *wo ayamaru*.
Sui-idashi,-su スヒイダス 吸出 t.v. To suck out.
Suijaku ス井ジヤク 衰弱 — *suru* (*otoroe yowaru*), to decline and grow weak.
Suiji ス井ジ 推辭 (*kotowaru*) — *suru*, to decline, refuse.
Suijin ス井ジン 水神 (*mizu no kami*) n. The god of water, called *mizuhanome no mikoto*.
Suikan ス井カン 水干 n. A kind of robe worn by nobles.
Suikan ス井カン 水旱 Flood or drought.
Suikazura スヒカヅラ 忍冬 n. The honeysuckle.
Syn. NINDŌ.
Suiki ス井キ 水氣 n. The vapor of water, dropsy, anasarca.
Suikin ス井キン 水禽 (*mizutori*) n. Water fowl.
Suikō ス井カウ 推敲 — *suru*, to correct, as a manuscript.
Suikomi,-mu スヒコム 吸込 t.v. To suck in, draw into by suction, to imbibe, to inhale, to snuff up, to absorb: *iki wo* —, to take an inspiration.
Suikuchi スヒクチ 吸口 n. The mouth-piece of a pipe.
Suikun スイクン 垂訓 (*oshie wo tareru*) n. Teaching, instruction: *sanjō* —, the sermon on the mount.
Suikwa ス井クワ 西瓜 n. A watermelon.
Sui-kwa ス井クワ 水火 (*hi mizu*) n. Fire and water: — *no nan*.
Suikyo ス井キヨ 推擧 n. Recommendation, appointment to or promotion in office: — *suru*, to promote.
Suikyo スイキヨ (com. coll.) — *na*, one's own choosing, of one's own accord: — *na koto wo suru*.
Suikyō ス井キヤウ 醉狂 (*yoi kurū*) Drunk or intoxicated and violent.
Syn. SHURAN.
Suikyū ス井キウ 推究 (*oshi kiwameru*) — *suru*, to infer or deduce a fact or principle from investigation: *mono no dōri wo — suru*.
Suimin ス井ミン 睡眠 n. Sleep: — *wo moyōsu*.
Suimon ス井モン 水門 n. A water-gate, a lock, flood-gate.

Suimono
Suimyak
water
(med.)
Suina ス
Syn
Suinan
occasi
wreck
Suinō ス
tures
— su
Suinō ス
Suirai
id.; —
Suiran
and w
Suiren
exerci
to swi
Su-iri
kind
Sui-ri
obtai
Su-iri
suru,
Suiriki
force
Suiro-k
Hydr
Suiron
carry
Suiryō
Conje
feren
is jus
perso
posed
ateu,
Syn
Suisai
Calar
Syn
Suisai
fort b
Suisaki
used
being
Syn
Suisan
Suisan
n. T
mari
Suisan
withc
used
— su
Suisats
mise,
to co
Suisei
Suisei
degen
Suisei
force

78

J.C. Hepburn 編　和英英和語林集成　第三版　1886年
（羅馬字會式）



SZI ス

Szi-giu, スイギウ, 水牛, (*midz no ushi*), *n.* The buffalo.
†**Szi-hen**, スイヘン, 水邊, (*midz no hotori*). *n.* Near the water.
Szi-hi,-*szru*, スイヒ, 水飛, To wash any pulverulent substance in water, to elutriate.
†**Szi-jaku**,-*szru*, ス井ジヤク, 衰弱, (*otoroye yowaru*). To decline and grow weak.
Szi-jin, スイジン, 水神, (*midz no kami*), *n.* The god of water, called *Midzhanome no mikoto*.
Szikadzra, スヒカヅラ, 忍冬, *n.* The honey-suckle. Syn. NINDŌ.
Sziki, スイキ, 水氣, *n.* Vapor.
Szi-kiyo, ス井キヨ, 推擧, *n.* Influence, aid, or assistance used to advance or promote one to office.
Szi-kiyō, ス井キヨウ, 醉狂, (*yoi kurū*). Drunk or intoxicated and violent.
Syn. SHURAN.
Szi-kō,-*szru*, ス井カウ, 推敲, To correct, (as a manuscript).
Szi-komi,-*mu*,-*nda*, スヒコム, 吸込, *t.v.* To suck in, draw into by suction, to imbibe, to inhale, to snuff up. *Iki wo* —, to take an inspiration.
Szi-k'wa, スイクワ, 西瓜, *n.* A water-melon.
Szi-k'wa, スイクワ, 水火, (*hi midz*). *n.* Fire and water.
†**Szimin**, ス井ミン, 睡眠, *n.* Sleep. — *wo moyosz*.
Szi-miyaku, スイミヤク, 水脈, *n.* The veins of water under ground struck in digging a well.
Szi-mon, スイモン, 水門, *n.* A water-gate, a lock, floodgate.
Szi-mono, スヒモノ, 吸物, *n.* Soup.
‖**Szina**, ス井ナ, 粹, *a.* Genteel, elegant, tasty. Syn. FŪRIU, IKINA.
Szi-nan, スイナン, 水難, *n.* Calamity, or loss occasioned by water, as an inundation, shipwreck, drowning.
Szi-nō, スイナウ, 水嚢, *n.* A strainer.
†**Szi-ran**, ス井ラン, 醉亂, (*yoi midareru*), *n.* Drunk and violent.
Szi-ren, スイレン, 水練, (*oyogi*), *n.* The art of swimming. — *wo narau*, to learn to swim.
Sziri, スイリ, 素入, *n.* Diving in water. — *wo szru*, to dive.
Szi-riyō, ス井リヤウ, 推量, (*oshi-hakaru*). *n.* Conjecture, surmise, guess, supposition, inference. *Omaye no* — *ni tagawadz*, it is just as you conjectured. *Go*

J.C. Hepburn 編　和英語林集成　第一版　1867年

【起原】ローマ字は古く伊太利に行はれ、そこから諸國に弘まつたのであるが、これは希臘文字から出たもので、希臘文字はまたフェニキヤ文字（Phoenicia）から轉化したものである。さうしてフェニキヤ文字は埃及文字から出たのであらうと云はれてゐる。埃及文字は埃及で發生した意字であつて、事物の形を畫いた繪文字から發達し、それ〴〵意味を有するものであるが、後にはその形を簡略にした略體文字も出來、單に音を表はすためにも用ひられたのである。この略體文字が、古く埃及と交通したフェニキヤに傳はつて、その言語を寫すために用ひられ、こゝで全く音字に變化したが、フェニキヤの言語はヘブリュー語と同じくセミト語族に屬するもので、語の子音は變化せず、母音だけが變化して種々の附屬的の意味の違ひを表はしたので、文字は、いつも子音をあらはし、或る時は單獨で、或る時はこれにいろ〳〵の母音を附して讀まれた。さうして文字は、右から左へ横に書かれた（卽ち左行文字である）このフェニキヤ文字が希臘民族の植民地から希臘本土にまでも傳はり、希臘人はその中から自國語の音に相當するものを取り、又フェニキヤ文字にない音は他の文字を流用して自國語を寫した。これが卽ち希臘文字で、これは純然たる單音文字である。さうして初めの内はやはり右から左へ書いたが、後には左から右へ書くやうになつた（卽ち右行文字となつた）。希臘でも東部に行はれたものと西部に行はれたものとの間に小異があつたが、西部に行はれた文字が後に伊太利に傳はつて、その國語たるラテン語を寫すために用ひられ、その際多少の取捨と變形とが行はれてローマ字になつたのである。古代のローマ字は、今日の頭文字（ABC等）の形であつたが、それから今日の小文字（abc等）が發達し、近世に至つて印刷體と筆寫體との區別が出來た。

【日本に於けるローマ字】ローマ字は室町末期に西洋人と共に我が國に渡來した。當時最も勢力のあつたのは葡萄牙人であつて、中にも耶蘇會の宣敎師は、布敎のために熱心に日本語を學んで、日本語の敎義書や語學敎科書や辭書や文典を作り且つ刊行したが、これ等の中には、ローマ字で日本語を書いたものが多い。また敎習所や學林を開いて日本人に西洋の學問を敎へたので、日本人の中にもローマ字の知識あるものが出來、信徒の中にはローマ字の印章を用ひるものもあつた。江戸時代に入つては、基督敎を禁じ、ついで和蘭以外の西洋諸國との交通を禁じ、西洋の文字を讀む事を許さなかつた爲めに、日本人はローマ字に接する機會がなくなつたが、享保以後、その禁が漸く弛んで和蘭語を學び、蘭書を讀むものが次第に多くなり、蘭學者の間にローマ字で日本語を書くことが起つた。併しこれは和蘭語を學ぶ階梯とするのが主であつて、日常の用には供せられなかつた。明治以後、廣く西洋と交通するに及んで、西洋人に對する場合には、日本語をローマ字で書くのが例になつて今日に及んでゐる。さうして西洋の言語、殊に英語を學ぶものが多くなつて、ローマ字の知識は次第に國民の間に弘まつたが、當時盛んであつた國語國字改良問題の一つとして、漢字や假名を廢してローマ字を以て日本語を書くべしといふ謂はゆるローマ字國字論が起り、爾後、今日に至るまで一派の人々は、種々の方策を以て熱心に宣傳し、その實現を期してゐる。

【ローマ字による日本語の書き方】室町時代に日本に來た西洋人は、初めのうちは種々の書き方をしたけれども、後には耶蘇會の宣敎師の間に一定の方式が出來た。それは主として葡萄牙語に於けるローマ字の發音に基づいて、當時の日本語の標準的發音を寫したもので、葡萄牙語にない音は、特別の工夫を加へてこれを寫してゐる。カ ca キ qi ク cu ケ qe コ co ガ ga ギ gui グ gu ゲ gue ゴ go サ sa シ xi ス su セ xe ソ so ザ za ジ ji ズ zu ゼ je ゾ zo タ ta チ chi ツ tçu テ te ト to ダ da ヂ gi ヅ zzu デ de ド do キヤ qia シヤ xa ニヤ nha クワ qua など。これ等は、當時耶蘇會の刊行書（吉利支丹版）に用ひられてゐる。葡萄牙以外の西洋人は、本國のローマ字の發音に準じて日本語を寫してゐる。江戸時代の和蘭人及び和蘭語を學んだ日本人は、和蘭語流のローマ字の發音によつて日本語を書いてゐるが、中には實際の日本語の發音と一致しないものもあつたやうである。カ ka キ ki ク koe ケ ke コ ko サ sa シ si ス soe セ se ソ so タ ta チ tsi ツ tsoe テ te ト to ハ fa ヒ fi フ fu ヘ fe ホ fo ヤ ja ユ joe ヨ jo など。十九世紀の初めから西洋で日本語研究が興つたが、佛蘭西・英吉利等、國によつてそれ〴〵自國語式のローマ字綴りを以て日本語を寫したのである。又明治維新前、米人ヘボン（Hepburn）が編纂した英和語林集成（English Japanese dictionary）には日本の假名の書き方を參照した一種の綴り方を用ひた。かやうにローマ字による日本語の書き方は統一がなかつたのであるが、明治十七年、主として西洋で學んだ日本の學者に、日本語に通じた西洋人が參加して設立せられた羅馬字會に於て、翌十八年、ローマ字による日本語の書き方を定めて發表した。それは假名書きに據らず實際の發音により、子音は英語の發音を取り、母音は伊太利・獨逸、又はラテン語の發音を取つたものである。この羅馬字會のローマ字綴り方は、前述のヘボンの辭書の改訂第三版（明治十九年刊）に採用せられて廣く世に行はれ、爾後、今日に至るまで政府の文書のみならず、外國でも日本語を書く場合には、この式を用ひるのが習慣となつてゐる。然るにローマ字國字論者の一派に、右の羅馬字會式の綴り方（これはヘボンの辭書に採用せられたから、ヘボン式とも呼ばれる）は、外國人の書き方を主としたものであつて、日本人には不適當であるとし、これと異なる書き方を主張するものがあつたが、後に至つて、これを日本式羅馬字と稱した。これは五十音圖の同じ行には、その發音にかゝはらず、皆同じ子音の文字を用ひ、同じ段には同じ母音の文字を用ひるものであつて、實際の發音と一致しないところがあるものである。この日本式羅馬字は、これを主張する人々の熱心な努力によつて、近來かなり廣く行はるゝに至つた。これに對して羅馬字會の系統を引くものに、ローマ字ひろめ會があつて、これは羅馬字會式に二三の改訂を加へた綴り方を主張してゐる。（文字・ローマ字說・國字問題參照）

【參考】T. Taylor: *The Alphabet*. London. 1883. ‖ T. W. Danzel: *Die Anfänge der Schrift*. Leipzig. 1912. ‖ H. Jensen: *Geschichte der Schrift*. Hannover. 1925. ‖ J. Vendryes: *Le Language*. Paris 1921 ‖ P. Berger. *Histoire de l'écriture dans l'antiquité*. Paris. 1891 ○日本ローマ字史 川副佳一

ローマ字 四

日本式ローマ字綴り方								標準式ローマ字綴り方							
ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o				ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o			
カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キャ kya	キュ kyu	キョ kyo	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キャ kya	キュ kyu	キョ kyo
サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so	シャ sya	シュ syu	ショ syo	サ sa	シ shi	ス su	セ se	ソ so	シャ sha	シュ shu	ショ sho
タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to	チャ tya	チュ tyu	チョ tyo	タ ta	チ chi	ツ tsu	テ te	ト to	チャ cha	チュ chu	チョ cho
ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo	ナ na	ニ ni*	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニャ nya	ニュ nyu	ニョ nyo
ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo	ハ ha	ヒ hi	フ fu	ヘ he	ホ ho	ヒャ hya	ヒュ hyu	ヒョ hyo
マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミャ mya	ミュ myu	ミョ myo
ヤ ya	イ —	ユ yu	エ —	ヨ yo				ヤ ya	イ —	ユ yu	エ —	ヨ yo			
ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya	リュ ryu	リョ ryo	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リャ rya	リュ ryu	リョ ryo
ワ wa	ヰ wi	ウ —	ヱ we	ヲ wo				ワ wa	ヰ —	ウ —	ヱ —	ヲ —			
ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya	ギュ gyu	ギョ gyo	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギャ gya	ギュ gyu	ギョ gyo
ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジャ zya	ジュ zyu	ジョ zyo	ザ za	ジ ji	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジャ ja	ジュ ju	ジョ jo
ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do	ヂャ dya	ヂュ dyu	ヂョ dyo	ダ da	ヂ ji	ヅ zu	デ de	ド do	ヂャ ja	ヂュ ju	ヂョ jo
バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビャ bya	ビュ byu	ビョ byo
パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピャ pya	ピュ pyu	ピョ pyo
					クヮ kwa										
					グヮ gwa										
1. はねる音には凡て n を使ふ、例 Anna, Kanban. 2. つまる音には次に來る k s t p を二ツ重ねて書く、例 Sekkei, Ressya, Teppô, Ittyôme, sappari. 3. 引く音には母音 a i u e o に ＾ をつけ又は（特に大文字の時は）母字を二ツ重ねて書く、例 Kôbe, Oosaka, Tôkyô 大文字のみならば TOOKYOO. 4. ヤ行のイエ、ワ行のウはア行のイエウと同じこと。								1. isha 醫者 ishiya 石屋。 2. hon'ya 本屋 Kin'yô 金曜。 3. matchi マツチ（cha 行音前の促音だけ t をつける）zasshi 雜誌 rappa ラツパ gakkô 學校（其後の綴の初の字を重ねる）。 4. sâsâ サーサー gûzen 偶然 gôtô 强盜 ii tomo イートモ。 5. sannin 三人（但 m, p, b, の前のンは m でもよい）shimbun 新聞 sampo 散步 amma 按摩。							

郎○國字問題の研究 菊澤季生○ローマ字日本語の文獻 土岐善麿○同別册日本式になるまで 同上　〔橋本〕

ローマ字説　國字問題【名稱】洋字説、又はローマ字採用説ともいふ。【解説】ローマ字を國語を表記する文字として一般に行はうとする主張。その要旨は、（一）單音文字として最も實用的に發達したローマ字を採用すれば、我が國語の發達に便することが出來、（二）これによつて我が國語の上に横たはる文字の障壁を撤去して、國語の通用に便にすると共に、外國人にも日本語を學び易からしめて、日本語の勢力を擴張する事が出來るといふに在る。ローマ字を以て日本語を寫す場合には、次の如き問題が起る。（一）ローマ字には大小二種の字體がある。これを如何なる場合に用ひるか（例へば、大字は固有名詞の最初にのみ用ひるとか、又はすべての名詞の初めに用ひるとかの如き）。（二）ローマ字は、一語毎に分つて書くのであるが、助詞・助動詞の如きは、前の語に合すべきか、又は離して書くべきか（分割書方參照）。（三）日本語の音を、如何なる文字を如何に綴り合はせて表はすべきか。又國語中に現はれる西洋語は、本國の綴字のまゝ入れるべきか、又は日本の發音に隨つて改め書くべきか（綴字法の問題）。（四）ローマ字の句讀法を如何に日本語に適用すべきか（句讀法參照）。以上の諸問題を如何に解決するかによつて、ローマ字説の中にも説の異同が生ずる。

【ローマ字説の由來】　室町末期に日本へ來た西洋人は日本語をローマ字で綴り、又江戸時代の蘭學者はローマ字を學んで、その便利を認めたが、これを以て日本で國語を寫す普通の文字にしようと主張するものはなかつた。然るに明治維新開國進取の御代となり、二年五月、南部義籌は文政の當局者大學頭山内豐信（容堂）に「修國語論」を建白し、洋字を採用して國字とし、國語の獨立と發達とを圖るべき事を説いた。四年八月、再び「修國語論」を、五年四月更に「文字ヲ改換スルノ議」を文部卿に建白した。その頃、米國在留大辨務使森有禮は、國語一變英語採用説を考へて、彼の國の識者達に教を乞うた。これに對して同年六月ホイットネー博士（W. D. Whitney）はこれに答へて、國語一變の不可にして自國語の尊重すべきを説き、ただ最も大切な改良と考へ得るのは、ローマ字を採用して日本國民の實用のために、表音法で日本語を書く事だと論した。その時ロンドンにゐた馬場辰猪も國語一變説を著書の中で非難した。その頃岩倉大使一行が歐米を巡歴した時、參議木戸孝允は西洋の學者と相語つてローマ字採用を可とした。六年九月、西周は「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」を「明六雜誌」（第一號）に載せて洋字を國字とする十利三害を擧げた。又同年に百人一首をローマ字書きにして公にした黒川眞頼は、八年六月「言語文字改革ノ説ノ辨」を「洋々社談」（第二號）に載せて、國語の變革は不可であるが、文字は漢字でもローマ字でも便利な方を用ひるがよいと説いた。七年九月廣島師範學校長久保田譲は、小學校の下級からローマ字の讀み書きを教授すべきことを文部省に建議した。九年六月、文部省に於て「羅馬頭字圖・羅馬小字圖・書寫頭字圖・書寫小字圖・西字成音圖」等の掛圖を發行した。十五年四・五月矢田部良吉は、「羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説」を「東洋學藝雜誌」（七・八號）に載せて、全國の小學生にローマ字の用法を三四ヶ月教授するの制を設けられる必要を論じた。同年七月、英人イビー（C. S. Eby）も「六合雜誌」（二五號）に、日本國民の發達のためのローマ字説を載せた。十七年四月、三宅雄二郎は「東洋學藝雜誌」（三二號）に持論を載せ、終に己はローマ字説であるが、早速行ひ難いから暫く漢字・假名併用説に從ふと説いた。

【羅馬字會】　かやうに段々とローマ字説の思潮が高まり、十七年七月、外山正一は「東洋學藝雜誌」（三四號）に「羅馬字ヲ主張スル者ニ告グ」と題して羅馬字會を起すべきことを唱へ、同年十二月二日、同志七十餘名が集まつて羅馬字會の發起會を開き、十八年一月十七日、創立會を開き、その規則第一條に「本會は日本語を書くに、これまで用ひ來れる文字を廢し、羅馬字を以てこれに換へんことを目的とす」と定めた。會の事務委員に選ばれたのは、チャムブレン（B. H. Chamberlain）・後藤牧太・鳩山和夫・穗積陳重・神田乃武・松井直吉・狩島六一郎・箕作佳吉・櫻井錠二・高松豐吉・テヒョー（H. Techow）・寺尾壽・外山正一・山川健次郎・矢田部良吉の十五人であつた。さて羅馬字會以前の日本語のローマ字綴には、ヘボン式綴方が有力であつた。この式は日本語に通じた米人ヘボン（J. C. Hepburn）が、慶應三年以來發行した「和英語林集成」といふ和英辭書の日本語綴によつて世に知られてゐた。尤もヘボンは以前に行はれたローマ字綴を整理して辭書を編纂したのであるが、假名書きに拘泥した所が多かつた。それで、羅馬字會は、新たに日本語に適當したローマ字綴方を調査議定する必要を認め、十八年一月、書方取調委員四十人を選び、その中から外山正一を委員長に、寺尾壽を副委員長に、六人を原案起草委員に選び、原案に就いて委員總會を五回開いて議定し、四月に發表したのが「羅馬字にて日本語の書き方」即ち羅馬字會式綴方である。その要領は、（一）假名書きに拘らないで發音に從ふ事、（二）普通教育を受けた東京人の間の發音を標準とする事、（三）子字（コンソナント）は英語に通常用ひる音を採り、母字は伊太利語・獨逸語、又は拉丁語の音を採ることとした。羅馬字會式の綴方は、これを英譯にして諸外國にも弘めた。同年十二月發行市川義夫の「英和和英字彙」は「羅馬字會式」を用ひ、翌年發行ヘボンの「和英英和辭書」の改訂第三版も從前の式を棄てて羅馬字會式に改めた。羅馬字會は十八年六月、月刊の機關雜誌 Rōmaji Zasshi を創刊し、又ローマ字學習書等を發行した。なほ田中館愛橘等の人々は、假名の五十音圖のサ行・タ行等の子字を畫一に綴る方法（後にいふ日本式）を國語に適するとして羅馬字新誌社を起し、十九年五月、月刊の機關雜誌 Rōmazi Sinsi を創刊して二十一年三月に至つた。さて羅馬字會の盛りは明治二十年前後で、同年三月には東京の本部の外、地方に二十九箇所の研究會又は講習會が出來、會員は總計六千八百七十六人とある。この會が國字問題の大局から「かなのくわい」と相扶けて進まうとした事は、十九年一月の總會に於ける幹事の挨拶（ローマ字雜誌第九號）に明かである。併し兩會共に短い年月では大目的が果されないので會は衰へ、明治二十五年十二月 Rōmaji Zasshi も廢刊した。羅馬字會の功績は、國語のローマ字書きを弘め、羅馬字會式を我が國の官民と内外とを通じて最も普通のものたらしめた事である。

【ローマ字の調査】　明治三十年以後に國字論また興り、朝比奈知泉（明治三十一年三月東京日日新聞）・上田萬年（同三十三年二月教育報知）その他多くの人の論説が出た。帝國教育會では三十二年十月、國字改良部を設け、羅馬字調査部委員八名を擧げた。文部省では羅馬字書方調査委員十一名を擧げて行つた調査報告を、三十三年十一月五日の官報で發表した。それは發音主義ではあるが、普通の綴方と違ふ所が幾分かあるので、非難が大に起つた。同年遞信省は省令第四十六號を以て、國語の電報文字としてローマ字を公許した。三十五年七月、文部省の國語調査委員會は、調査方針の第一に、「文字ハ音韻文字ヲ採用スルコトトシ假名羅馬字等ノ得失ヲ調査スルコト」を發表した（「國語調査」參照）。〔ローマ字ひろめ會〕 明治三十八年以後のローマ字運動は、「ローマ字ひろめ會」を中心として行はれてゐる。この會の創立は三十八年十月で、月刊の機關雜誌 Rōmaji を創刊した。會の初期（大正の初めまで）の維持會員三百餘人の中に、安藤和風・江原素六・藤岡勝二・福岡秀猪・後藤牧太・波木井九十郎・林董・平井金三・澁谷季雄・鎌田榮吉・嘉納治五郎・神田乃武・川副佳一郎・小西信八・前島密・丸山通一・松本君平・三土忠造・森村市左衛門・向軍治・中川謙二郎・南條文雄・成瀬隆藏・根本正・新渡戸稻造・大橋新太郎・岡田良平・大藏平三・阪谷芳郎・櫻井義肇・櫻井錠二・櫻根孝之進・澤柳政太郎・新村出・白鳥庫吉・高楠順次郎・高島圓・高田早苗・田丸卓郎・田中館愛橘・徳富猪一郎・上田萬年・内田定槌・渡邊國武・渡部董之介・山縣五十雄・山川健次郎・山口鋭之助・山本有成・柳澤保惠・頭本元貞等の人々がある。三十九年十二月から伯爵林董副會頭に推され、四十年一月から侯爵西園寺公望（時に首相）會頭に推され、東京の本部の外に大阪・仙臺・京都その他の地方に支部を置き、五十餘名の評議員と十名の調査委員等を設けて講演會や講習會を開き、種々のローマ字本を發行した。大正二年林董逝き、四年十月鎌田榮吉副會頭に推され、その外會內に幾多の變遷があり、昭和二年十月、西園寺公高齡を以て會頭を辭し、鎌田副會頭が會頭に推され、その後嘉納治五郎・公爵近衞文麿・新渡戸稻造・男爵阪谷芳郎・櫻井錠二・高田早苗・内田定槌・上田萬年顧問となり、又前から設けた常務評議員を増して藤岡勝二・子爵福岡秀猪・後藤牧太・前田武四郎・正木義太・櫻根孝之進・山口鋭之助がこれに當つた。この會は「日本語をローマ字で書くことを擴める」のを目的とし、綴方については取調委員が特に研究したが、大勢は羅馬字會式に僅少の修正を加へるのを適當と決し、四十一年評議員會及び總會はこれを可決した。これが標準式と呼ぶものである。〔日本のローマ字社〕 綴方について豫て主張のある田中館愛橘・田丸卓郎等は、四十二年七月、東京に「日本のローマ字社」を設け、翌年六月、月刊の機關雜誌 Rōmazi Sinbun を創刊し、四十四年七月からこれを Rōmazi Sekai と改題した。その綴方は前の羅馬字新誌社の系統で、日本式と呼ぶものである。大正四年五月「日本のローマ字社」は財團法人となり、ローマ字に關する出版その他の事業を營み、田中館愛橘・芳賀矢一・子爵大河内正敏・田丸卓郎がその理事となつた。さうして日本式でローマ字を國字とする目的で講演・講習・寄合等を行ふのは、別に設けた「日本ローマ字會」が行ふことになり、田中館愛橘會長となり、田丸卓郎副會長となり、土岐善麿・福永恭助・寺田寅彦・佐伯功介・菊澤季生等の人々がこれを助けてゐる。〔帝國ローマ字クラブ等〕 又大阪の櫻根孝之進は、大正十年五月、財團法人「帝國ローマ字クラブ」を設けて、標準式に據るローマ字ひろめを目的とし、同氏その頭領となり、加茂正一・間宮不二雄がその理事となつた。「夏のローマ字學校」の如き、「われらの主張」叢書やローマ字本の出版の如きは、その事業である。大正十年八月、臺灣ローマ字會は、月刊雜誌 Taiwan Rōmazi を創刊し、十三年十月から奥中孝三は、嘉納治五郎を會長として四ヶ月一期のローマ字講習錄を發行した。昭和三年一月、廣島の正木義太、月刊雜誌 Sakigake を創刊し、四月宮崎靜二、ローマ字同志社を起し、月刊雜誌 Rōmaji Dōshi を創刊し、六年六月、米國ロスアンゼルスの境澤英雄は、月刊雜誌 Kodomo no Rōmaji を創刊した。

【ローマ字と官民】　ローマ字の主張者及び團體の共に願望してゐるのは小學校でローマ字を課する事である。「ローマ字ひろめ會」は三十九年十一月、文部大臣にこれを建白し、四十年二月・同年三月の兩度、その請願が衆議院に採納された。衆議院は、根本正・松本君平の提案を通過してこれを政府に建議した。大正三年三月櫻根孝之進外百二十二名は同じ請願書を貴衆兩院に提出した。これより先、明治四十年五月津市で開いた全國聯合教育會も、小學校でローマ字を課する事を可決して文部省に建議した。大正十年大審院は上告中の北海道旭川區選出衆議院議員大久保虎吉にローマ字投票の有效を申渡した。同十三年五月、衆議院議員總選擧に際し、内務省はローマ字投票の有效を告示した。大正十五年十二月、「ローマ字ひろめ會」は鐵道驛名の從來のローマ字綴りが適當便利である事を鐵道大臣に建白した。海軍省に於て從來に異なる式のローマ字綴を用ひる事につき、昭和三年七月、嘉納治五郎外朝野の二十七名士は、從來のローマ字綴を妄に變更すべからざる事、若し變更を加へようとする時は、權威あるローマ字調査會を設けて審議の後に決定すべき事を政府の各大臣に建白した。文部省はローマ字綴方を調査するため、昭和五年十一月、臨時ローマ字調査會を設置し、文部大臣を會長とし、官民の中から三十餘名の委員と數名の臨時委員とを任命した。　〔日下部〕

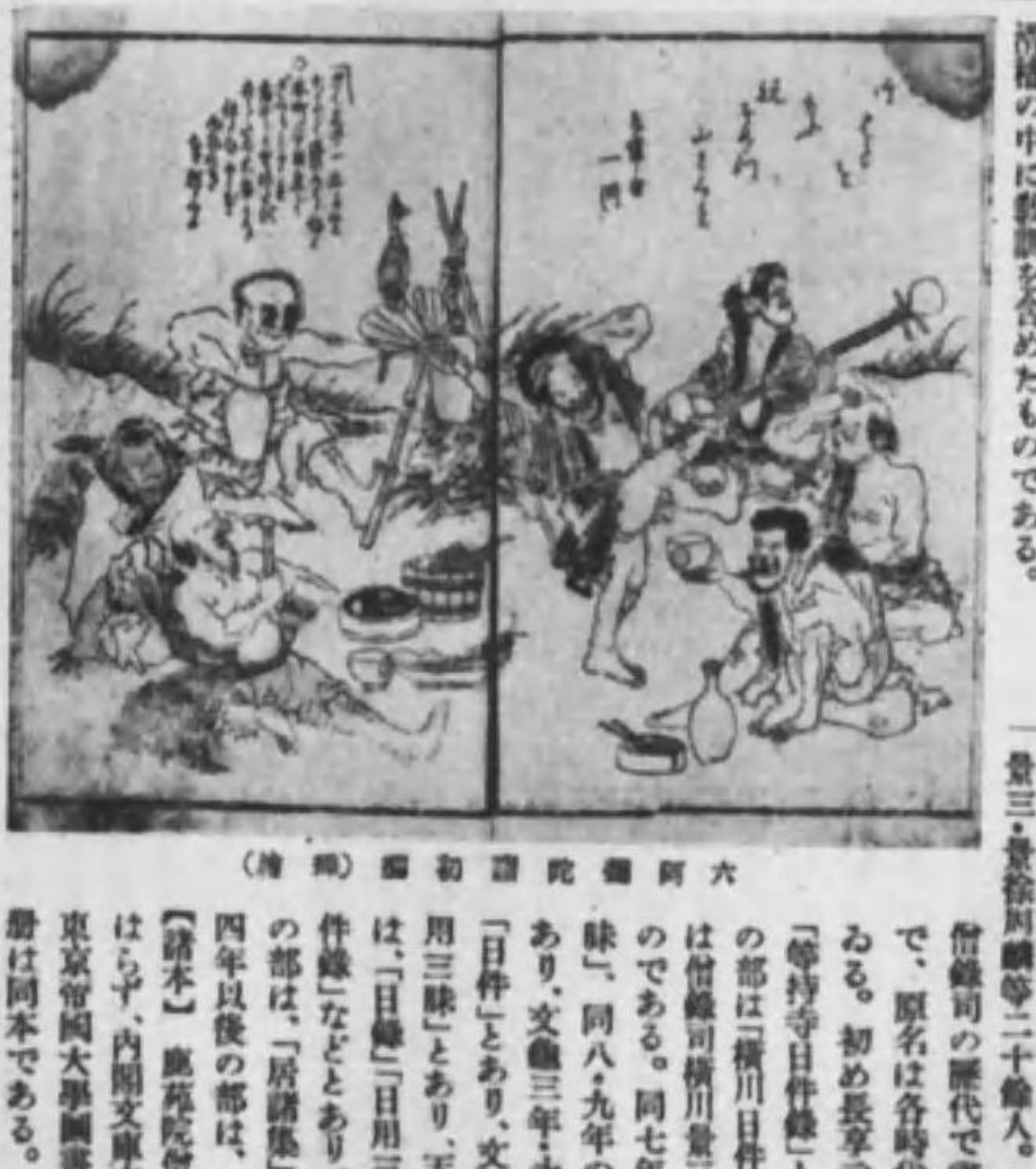
【參考】日本ローマ字史 川副佳一郎○ローマ字日本語の文獻 土岐善麿（日本文學講座）○ローマ字主張百個條 ローマ字ひろめ會○ローマ字の反對論を破る 同會○ローマ字のすすめ 丸山通一○ローマ字びき國語辭典 上田萬年○ローマ字國字論 田丸卓郎○ローマ字文の研究 同上○國を亡す教育 向軍治○ローマ字教授法の研究 高島直一○標準ローマ字文法 日下部重太郎○Pocket Handbook of Colloquial Japanese. 日本のローマ字社○ローマ字綴りの目標 櫻根孝之進○The Japanese Language and the Roman Alphabet. ローマ字ひろめ會○標準ローマ字綴り方解説 日下部重太郎○ローマ字綴り方の進化 田中館愛橘・バーマ・菊澤季生○ローマ字綴り方について 佐伯功介○眞に祖國を愛する同胞に訴ふ 宮崎靜二○日本語をローマ字で書く上の綴り方に關する意見 東京帝國大學內言語學會

露休はなし（ろきうばなし）　噺本 五册【作者】露五郎兵衛【名稱】露休は露五郎兵衛晩年の

讀・恐らく「一休ばなし」（別項）などの刺戟を受け、「一休」に倣つて附けた題號であらう。【刊行】書中の文により、元祿十五年の刊行かと思はれる。寶永二年再版（輕口あられ酒と改題）。正德二年三版（舊名に復す）。【諸本】近世文藝叢書第六笑話所收【内容】全篇八十一の笑話から成る。際物を扱つたものが多い。元祿十二年大阪阿彌陀池の善光寺如來開帳、元祿十三年丹波國の雨乞、たつの四月（元祿十三年庚辰）鴨河出水の事などが採り入れられてゐる。又前に世に出た咄本の中に見えてゐるものから出たものも含まれてゐる。卷一「親子共に足らぬ」は、醒睡笑卷一「鈍副子」中にある話をそのまゝ採つたのであり、卷四「こしやくな子供」は、「昨日は今日の物語」及び「鹿の卷筆」卷五「見さまの料簡」に出た話である。卷一「四條石がけ町大文字やの事」は、「露がはなし」卷三「加茂川の大水」「露新輕口ばなし」卷一「川ながれ」「川ながれはひらひがち」等と重複してゐる。卷二「小歌すきな人」は、同じく「露新輕口ばなし」卷三「親仁のとんさく」の改作である。卷五「子に自慢すぎた」は、「初音草噺大鑑」（別項）（元祿十一年）卷二「世にあやかりもの」をそのまゝ採つたのである。【價値】露五郎兵衞は元祿十六年に歿したのであるから、本書が彼の生前の作品の最後のものと推測される。右の如く多少の重複、他よりの取材はあるにもせよ、彼の笑話に對する豐かな創作力が本書に依つて推測出來るのである。書中の題材を分類して見るに、最も多いのは、低能な人を材料にした話十一である。次に際物の善光寺開帳を取材した六話、佛教僧侶に關する七話、下男五話、粗忽者四話、親仁氣質四話等である。これでほゞ作者の晩年に於ける笑話の傾向が分らう。

【影響】本書中の笑話で、現存落語の小咄として活きてゐるものが可なり多い。卷一「今なり平の事」は、眉細く作つた洒落者を「なり」と蝙蝠にかけて言つたのを、當人は業平を洒落れて言つたと喜ぶ話で、現今では業平でなく成田屋と自惚れる筋にしてある。卷二「正月うたひぞめの事」は、謠曲を知らぬ人が高砂を謠つても、後のつけ手がなく助け舟と言ふ下げであるが、現今では「豆腐屋の仲人する話」として演じられてゐる。卷四「あたらしき事たくむ」は、雛祭に葬禮道具を作つて賣れなかつた話であるが、現今では「與太郎の商賣」の話中に挿入し、お雛様の棺桶を賣る事にしてある。卷四「あちらこちら」は、按摩が提灯をつけて歩いて眼明きが突き當らぬやうにと云ふ話で、現今でも盲人の話中に挿入する。卷五「けんくわどう切」は胴を切られた人が、上半は火見櫓の遠見、下半は麩屋に奉公して麩を踏むと云ふ話、現今ではこんにやく屋に雇はれると云ふ小咄になつてゐる。卷四「馬にのりつけぬ醫者」は、現今では落語「妾馬」で大名の妾の兄八五郎が、馬に乘つて出かける下げに用ひてある。卷四「不性な下人」は、下男が雪を見にやられ、厚さは五分位であるが幅は知れませぬと言ふ話で、權助の出る現今の落語によく挿入されてゐる。卷一「一杯きげんでやる旦那」は、自分許り酒を飲み、相手に飲ませず、好い機嫌になる話で、先代三遊亭圓左の得意の小咄であつた。（山崎）

六あみだ詣（ろくあみだまうで）　滑稽本　三編　五册【作者】十返舍一九【角書】（串戯教訓）【刊行】初編二册文化八年（但し見返に、文化七年未來春。東武田所町書林鶴屋金助版とあるが、未來の年は文化八年であるから文化七年は誤である）。二編二册文化九年、三編一册文化十年。【諸本】滑稽名作集上卷（帝國文庫）所收。【題材】當時一種の流行となつてゐた俗間信仰の六阿彌陀詣（豐島村西福寺、下沼田村延命寺、西ケ原村無量寺、田端村與樂寺、下谷長福寺、龜井戸常光寺）に材を取り、滑稽の中に敎訓を含めたものである。



六阿彌陀詣初編（挿繪）

【梗概】大屋が、長屋衆をつれて六阿彌陀詣に出掛け、途々嫁いびりの姑を說いたり、子供の奉公は嚴しい家庭が善いとか、女房は始末な方が善いとか、侍の出世には私心が邪魔だとか、或は醫者・町人・利いた風・己惚れ男等に對して一流の敎訓をし、終りに一日中に六阿彌陀全部に詣でる。【構想】六阿彌陀詣は形を借りたまでで、作の眞意と興味とは、大屋のみちみちに於ける道說的言說中の敎理と、道說そのものの中の滑稽に在る。

六還國略并辨（ろくをんこくりやくならびにべん）（小喜）「六還國略并辨」を見よ。

鹿苑日錄（ろくをんにちろく）　日記【著者】横川景三・景徐周麟等二十餘人。【名稱】鹿苑院の僧錄司の歷代で書き續がれたもので、原名は各時代に據つて異つてゐる。初め長享元・二・三年の部は「等持寺日件錄」とあり、明應二年の部は「横川日件錄」とある。これは僧錄司横川景三の名に依つたものである。同七年の部は「日用三昧」、同八・九年の部は「日渉記」とあり、文龜三年・永正十四年の部は「日件錄」とあり、文龜四年の部は「日用三昧」とあり、天文五年以後の部は「日錄」「日用三昧」「日渉記」「日件錄」などとあり、慶長十六年以後の部は、「居諸集」とあり、寬永十四年以後の部は、「雜記」とある。【諸本】鹿苑院僧錄司の原本は傳はらず、内閣文庫本寫本七十五册、東京帝國大學圖書館本寫本三十五册は同本である。【解說】相國寺塔頭鹿苑院は、康曆二年に將軍足利義滿が建立して夢窓疎石を勸請開山とし、春屋妙葩を第一世となした。當時相國寺は未だ建立せられなかつた。後、義滿が相國寺を建立するに至り、初めて鹿苑院を同寺の塔頭としたのである。康曆元年に春屋妙葩が僧錄司となり、禪宗の宗務僧事を掌り、後、絕海中津・無求周伸・空谷明應等相次いで、その職に就いたが、

永享七年五月に鹿苑院の南坊蔭涼軒の建營が成つて、六月季瓊眞蘂が蔭涼軒に入り、當時の鹿苑院主寶山乾珍に代つて僧錄司の職に當つた。これより鹿苑院僧錄司の事務は蔭涼軒に移つたのである。蔭涼軒は季瓊眞蘂の後、益之集箴・龜泉集證が相次いで入り、鹿苑院僧錄司の事務を執つたものであるが、これを蔭涼職と稱した（蔭涼軒日錄參照）。長享元年二月、鹿苑院に千僧供等の大法會があり、横川景三等大法會に參會し、當時の一大盛事とせられた。この時鹿苑院僧錄司の事務は、蔭涼軒主龜泉集證が執つてゐたが、後に鹿苑院主に横川景三が推された。この前後より舊の如く鹿苑院主が僧錄司の事務を總ることとなつたのである。卽ち「鹿苑院日錄」は、當時より以後の僧錄司の事務の日記である。長享・明應より始まり、中間所々缺けてゐるが、正保・慶安に終つてゐる。各册に就いて年月を表示すれば次の如くである。

（一）長享元年十一月、（二）明應二年正・二、同七年正・二、同八年三・夏、（三）明應八年秋・冬、同九年正、（四）文龜三年秋、永正十四年正、文龜四年二・三・四、天文五年二・三・四・五、（五）天文五年六・秋・冬、同六年、（六）天文七年、（七）天文八年、（八）天文九年、（九）天文十年春・夏・七・八、同十一年十二、同十二年春・夏・七・八、（十）天文十三年春・四・五・秋・閏十一・十二、同十八年、同十九年春・夏・秋・十、（十一）天文十九年三・夏・秋・冬、同二十年春・四、（十二）文祿元年五・六・秋・十・十二、同二年、（十三）文祿三年、同四年正、同五年正・八、年未詳六・七、（十四）慶長四年八・九・冬、（十五）慶長五年春・夏、（十六）慶長六年、（十七）慶長七年、（十八）慶長八年、（十九）慶長九年、（二十）慶長十年、（二十一）慶長十一年、（二十二）慶長十二年、（二十三）慶長十二年閏四・五・六・秋・十、同十四年九・冬、同十五年春・四・五、同十六年、同十七年、（二十四）慶長十七年十二、同十八年春・夏・秋、同十九年五・六・秋・冬、同二十年春・夏・七、（二十五）元和元年秋・冬、同二年四・五・夏・秋・冬、同三年春・夏・秋・十・十一、（二十六）元和三年十二、同四年、同五年、同六年、（二十七）元和七年、同八年、同九年春・夏・秋・十・十一、（二十八）元和九年十一・十二、同十年、（二十九）寬永三年八・九・冬、同四年、同五年、同六年春・夏・秋・十・十一、同七年正・三・夏・秋・冬、同八年春・夏・秋・十・閏十・十一、（三十）寬永八年十一・十二、同九年、同十年、同十一年春・夏、（三十一）寬永十一年十一・十二、同十二年、同十三年、同十四年春・夏・七・八、（三十二）寬永十四年八・九・冬、同十五年春・夏・七、同十四年八・九・十・十一、同十六年九・十・十一、同十七年春・四、同十四年八・九・十、（三十三）寬永十五年秋・冬、同十六年、同十七年春・夏・秋、（三十四）寬永十七年冬、同十八年、同十九年、同二十年、同二十一年正、（三十五）正保二年春・夏・秋・十・十一、慶安元年三、同四年夏・秋、年未詳、東雲庵主還鄕說記、詩章斷簡。

【附記】十三册の年未詳六・七は慶長二・三年なるべく、三十五册の年未詳は、天文・弘治・永祿・元龜の頃である。（鷲尾）

六下り（ろくさがり）「三味線」「調子」を見よ。

六樹園（ろくじゆゑん）「雅望」を見よ。

六帖詠草（ろくでふえいさう）　歌集　六册【作者】小澤蘆庵【編者】小川萍流・前波默軒【名稱】「古今六帖」にならつて名づけたもの（萍流の識文）【成立】文化元年、平信遇が蘆庵の作歌の三分の一を請ひ受けて、萍流・默軒等に校合させたもの（序文）。【刊行】文化八年【諸本】小澤蘆庵翁全書（續日本歌學全書）・校註國歌大系・近代諸家集第三卷・有朋堂文庫第四十五編等所收。文化四年の寫本に七册となせる本もある。【内容】短歌は四季・戀・雜に分ち、次に長歌・旋頭歌・物名・折句歌・沓冠折句・雙六歌・俳諧歌、詩經題歌四十首、周易卦名歌二十首等雜體の歌があり、撰出せる歌數は二千首で、大なる家集となつてゐる。【歌風】蘆庵の歌は、その主張のただこと歌の長所短所を併有してゐる。ただこと歌とは、歌は自然の感情をそのまゝに、技巧を用ひずに平言で言ひ現はしたものである。卽ち堂上歌學の拘束より離れて、想に詞に、大膽に自由・自然を說いた。併し彼の歌は、必ずしもその主張が十分に實行せられてはゐない。感情の自然素朴と云ふ長所はあるが、同時に無味平板に陷つた弊がある。併し從前の歌人に見られない清新の感じのあることは明かに看取せられる。殊に用語の自由と云ふ點より俗語を使用した如き然りである。又大體に於て叙景にすぐれ、抒情に劣つてゐる事も認められる。雜體の歌の中には、阿彌陀佛に奉る折句歌三十二首を圓形に書き、藥師佛に奉る沓冠折句の旋頭歌十六首、短歌二十四首を縱橫に記し、雙六歌十五首を盤面の形の如く記してゐるなど遊戲的ではあるが、又その歌才を見るに足るものがある。作例を次に擧げる。

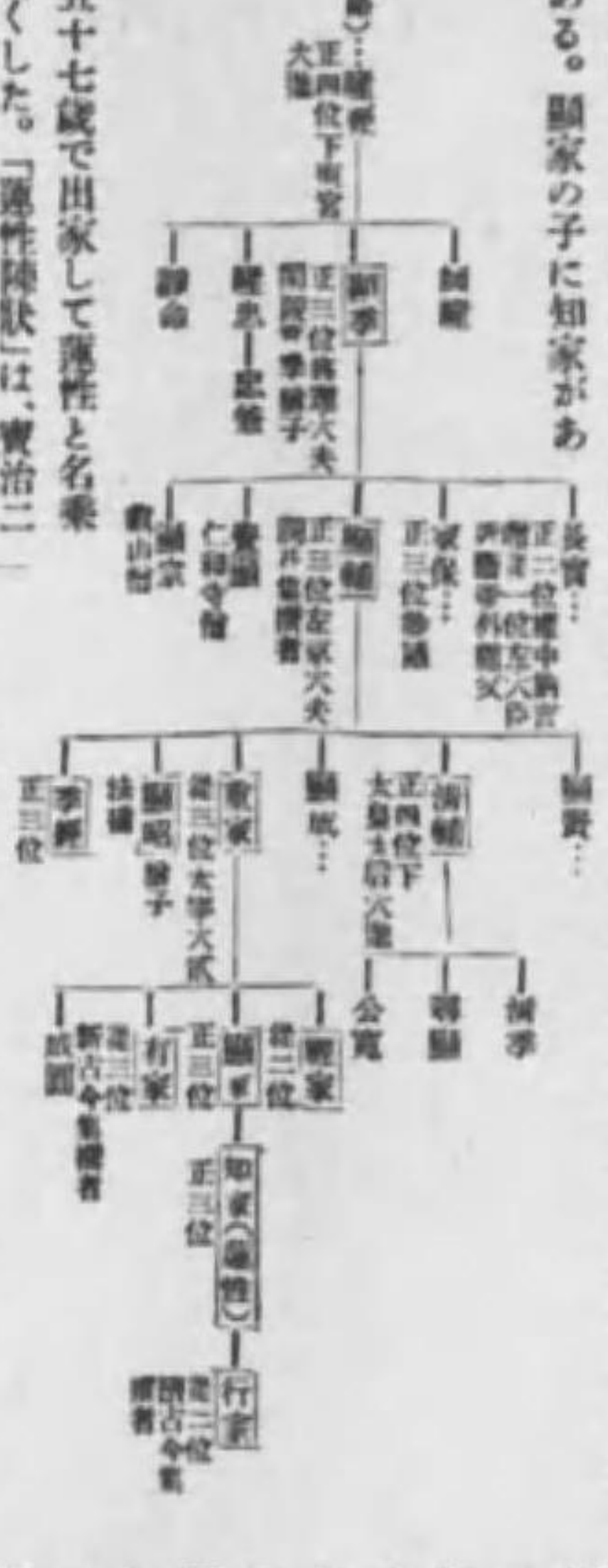
山かげの青水無月の江の水に納する小舟涼しげに見ゆ

鳴く鹿は戀ふる妻だにあるものを老いて友なき秋の夕暮

【附記】「六帖詠草拾遺」二卷は、本書に洩れた歌を小川萍流が集めておいたもので、嘉永元年、萍流の子雙鶴が上木した。本集と同じ體裁である。續日本歌學全書の小澤蘆庵翁全集及び校註國歌大系の近代諸家集第三卷に收めてある。（蘆庵參照）（佐佐木）

六條家（ろくでうけ）　和歌【解說】平安朝末より鎌倉時代初めにかけて榮えた歌の家筋である。【沿革】東宮大進藤原隆經の第二子修理大夫顯季（別項）に始まる。彼は六條烏丸に住み、世に六條修理大夫と稱せられ（尊卑分脈）、六條家の名はこれより起つたのである。和歌をよくし、屢々歌合の判者を務めた。元永元年六月には、自邸に俊頼・顯仲等の歌人を招いて有名なる人麿影供を催し（柿本影供記）、歌壇に重んぜられた。その第三子顯輔（別項）も亦和歌を善くして、父より人麿畫像を傳へられ（古今著聞集）、また崇德院の院宣を受けて「詞花集」（別項）を撰した。かくして六條家は漸く歌の家筋として世に認められて來た。次いで顯輔の子清輔（別項）・顯昭（別項）に至りて、大に學才を發揮し、玆に六條家家學は大成された。當時御子左家（別項）には巨匠俊成（別項）があり、幽玄（別項）の歌風を開いて一世を風靡したが、六條家はこれに對して考證訓詁の學的方面に力を注ぎ、殊に顯昭は兄清輔に讓らざる博學に加ふるに明徹精緻の頭腦を以てし、和歌に對して亦一隻眼があり、自由新奇の旗幟を揭げて優艷典雅を尙ぶ俊成の牙城に迫つた（六百番歌合・六百番陳狀參照）。清輔弟重家（治承四年歿、五十三歲）は、「萬葉集」を書寫して六條家本を傳へたが、その弟季經（承久三年歿、九十一歲）も、清輔より和歌の文書を讓られた（古今著聞集）ほどの歌人で、建仁元年の「千五百番歌合」（別項）にも判者の一人を勤めた。而して顯昭が俊成と相拮抗した如く、彼も亦定家（別項）と對峙して爭つた。季經は土御門通親の家人で、通親及びその子通具の保護を受けたが、後、法性寺兼實は俊成の歌才に推服し、兼實及びその子良經は定家をも庇護したので、歌壇兩派の爭ひは通親對兼實の政權上の

争ひに結びつき、歌論上の争ひはやがて權勢上の争ひとなつて漸く露骨を極めた。正治二年四月の歌合には季經が判者となつた爲め、定家は作者を辭して季經を誹謗し、同年八月後鳥羽院の百首に際しては、季經に阻まれて定家は人數の中に加へられず、父俊成、「正治二年和字奏狀」（別項）を奉つて漸く入るを得たといふことなどがあつた（明月記正治二年・和字奏狀）。重家の子に經家・顯家・有家があり、經家は祖父清輔より人麿畫像を傳へられた（古今著聞集）。有家（建保四年歿、六十二歳）は「新古今集」撰者の一人である。顯家の子に知家があり、暦仁元年五十七歳で出家して蓮性と名乘り、又和歌を善くした。「蓮性陳狀」は、寶治二年仙洞歌合に定家の子爲家（別項）の判を不服として奉つたものである。その子行家（文應元年歿、五十三歳）、「續古今集」（別項）撰者の一人となつたが、彼を最後として六條家の家學は全く衰微し果てた。（中島）



【參考】日本歌學史（佐佐木信綱）○國文學全史（平安朝篇）（藤岡作太郎）○六條家の歌人とその歌學思想（簗瀬一雄（國語國文の研究一八・二五））

六條修理大夫 ろくでうしゆりだいぶ　「顯季」を見よ。

六代御前物語 ろくだいごぜんものがたり　物語　一卷　【作者】未詳　【諸本】播州赤穗郡中村見島松之助氏の藏本で、卷頭に、延慶二年六月日の語があり、東大史料編纂所に、その影寫本（附跋文）を藏してゐる。【成立】この本は、所々脱落と認められる箇所があり、「六代御前物語」の原本ではなく、傳寫本と考へられる。また中村本の上包に、「六代御前物語、一冊、延慶二年六月之書也」とあるらしく、「延慶二年」の文字は、成立時を示すものでなく、書寫の期日を指すと考へられる。すると、この物語の成立は延慶二年ではなく、それ以前に遡らなければならない。

【梗概】觀音を讃仰する言葉に始まり、源平二氏の鬪爭のため、都は荒れ果てて、靜かな家もない。平維盛は二人の子供のために、忠實な齋藤五・齋藤六をとどめて、都を落ちて行く。その子の六代御前は、いとけない姫君と共に、母上に伴はれて大覺寺の邊りに隱れてゐたが、或る時密告するものがあつて、北條時政の武士達に圍まれ、嘆きのうちに捕へられる。文覺上人は六代を哀れんで、命乞ひのために鎌倉に下るが、中々歸つて來ない。約束の日限も迫つて來るので、時政は六代御前を連れて、鎌倉へ下つて行く。齋藤五・六の二人は最後の御供と思つて從ふ。途中、千本松原で愈々斬らうとする時、文覺は助命の許可を得て駈け付け、危い所を助けられる。母・北の方は、この折、長谷觀音に祈請したが、かゝる喜びも觀音の利生であつた。【構想】諸家の言葉の如く、この物語は、「平家物語」（別項）と甚だ類似してゐる。「平家」の六代は最後に殺されるが、この物語では助命された喜びに終つてゐる。物語の前後の文章に見えるやうに、觀音の利生靈驗談とするためには、この方が效果的である。その點では「源平盛衰記」（別項）に等しい。ただこの物語の成立は、延慶からどの位遡り得るか不明であり、「平家」諸本のうち如何なる傳本に最も近いかも研究の餘地があるので、直に「平家」との前後關係を云々することは出來ないが、文中、文覺を門學と記し、大覺寺を大學寺、中將を中淨と記すなど、又文章の調子等、恐らく「平家」同樣に語られたものではないかと思はれ、「平家」から可憐な六代の物語を取り出し、同じ「平家」によつて、その前後を補つたものと考へ、平出氏說の「平家によりて記せしものゝ如し」に從ひたい。なほこの物語は、當期の擬古物語に入るべきものではなく、「保元」「平治」を初めとする一聯の「語り物」としての新興文學に參加し、注目さるべき作品たるを失はないものである。

【參考】近古小說解題（平出鏗二郎）○諸書に引かれたる平家物語につきて（後藤丹治（藝文大正一四））○日蓮の遺文其他より觀たる平家物語（同上（同大正一五））（永積）

六代勝事記 ろくだいしようじき　歴史書　一冊　【作者】未詳　【成立】貞應年間　【諸本】群書類從帝王部第三十六所收　【内容】高倉・安德・後鳥羽・土御門・順德・仲恭・後堀河の七代の天皇の御踐祚に會つた作者が、出家の晩年に至り世を戒しめるために、これ等七代帝王の年間に行はれた著名な歴史的事件を、作者の見聞にまかせて簡單に列記したものである。保元・平治兩亂以來、世の治亂盛衰交替して承久の動亂に至るまでの記事は肯綮に中つた書き方である。漢土の說話を傍引し、治亂の起る理由を論じて歴史を說き、平清盛・重盛・源頼朝等の人物評も交へてあるが、何れも正鵠を得てゐる。【價値】文學的方面から見ても、相當效果を收めた所が多く、四六駢儷體の簡潔華麗の文章が流暢に綴られて興味掬すべきものがある。又文學史的方面から見ても佛教的な因果應報の人生觀を披瀝し、懷古の悲劇に力を注いだ跡の見えるのは、明かに鎌倉時代の文學の傾向を示すものである。殊に鎌倉時代文學の傑作「平家物語」（別項）の前驅をなしてゐるのは、注意すべき點である。（高島）

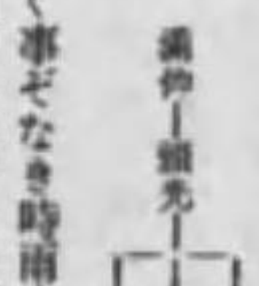
六調子 ろくてうし　「調子」を見よ。

六人黨 ろくにんたう　和歌　【解說】藤原時代に於て、六人の歌人が團體を作つてゐた。「袋草紙」三には、「江記云往年有六人黨、範永・棟仲・頼實・兼長・經衡・頼家等也」とあり、「八雲御抄」には「六人がたうとて其の比のゝしりけるは範永・棟仲・兼長・經衡・頼家・頼實、これ範永がほかは歌よみとも見えず」と記させ給うてゐる。「續古事談」には一說として棟仲・經衡・義清・頼家・重成・頼實の六人をあげてゐる。然るに後年爲仲は陸奥から歌を頼家に送つて、生き殘る者は君と我とのみであるとの旨を述べたところ、頼家は怒つて爲仲は曾てこの六人の内に加はつてゐないのに、今生き殘る者は君と我といふのは怪しからぬ事であるといつた（袋草紙三）。これに依れば爲仲も六人の内に加はりたい意志があつたこと、六人黨には排外的なものがあつたこと、この黨は彼等自ら任じてゐたこと等がわかる。何故にかゝる黨が成立したかは不明であるが、恐らくは「古今集」の六歌仙に擬する所があつたであらう。團體としての事業又は運動といふ程のものはなく、頼通の邸に出入し、權勢を謳歌する歌人として、社會的地位をほぼ等しくする彼等が、自ら趣味團體を形成したのであらう。隨つて六人の間にも十分なる融和があるとも考へられず、暗鬪や誹謗があつた事と考へられる。永承五年禖子内親王家歌合に於て作者は男女各々六人であつたが、男が一人不足したので、經衡と兼長とが競ひ望んだ。依つて水邊山吹といふ題で二人に歌をよませ、その優劣に依つて定めようとしたが、判者頼宗は女房に加賀左衞門を吹擧しようと思つたので、男方も七人とする必要上、持と判じて兩人とも加へようとした。但し滿座のものは兼長の歌を勝としてゐたが、兼長が服になつたので遂に經衡が加へられた。範永は兼長の力量を認めたらしいが、經衡はそれが不平であつたらしい。一般に頼家は五人のものからあまり快く思はれなかつたらしい。

【列傳】〔範永〕（別項）。

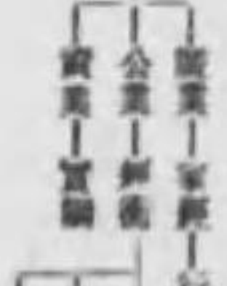
〔棟仲〕 桓武平氏で平重義の子、周防内侍の父ともいはれる。周防・因幡等の守に任じ、從五位上に敍した。歌は「後拾遺集」に二首あり、長久二年四月九日師房の家の歌合の作者である。又同じ家の歌合に「露つゝまる」とよんで相手方から難ぜられ、即座に「萬葉」に證歌ありとて僞作の歌を作つたといふ（袋草紙二）。

〔頼實〕 源頼國の子で、頼家の甥に當る。左衞門尉に任じ從五位下に敍した。歌に執心の餘り、住吉神社に參詣して秀歌が一首よむことができるならば命を召されてもよいと祈願した。その後西宮に於て、「木の葉ちる宿は聞きわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬよも」と讀んだが、誰も氣づかなかつたので、再び住吉に參詣して同樣の祈願を籠めた。夢に彼の落葉の歌は秀歌ではないかと示現され、人々もこの歌を賞歎するに至り、その身は六位の時夭死したといふ（袋草紙二）。歌は「後拾遺集」に五首、「風雅集」に一首あり、家集に「故侍中左金吾家集」（群書類從二五三）がある。長久二年四月、長暦二年九月源大納言師房の家の歌合の作者で、家集には各十題十首が見える。その他師房の家にてよんだ歌が多く、長久三年その他右大弁の家にてよんだ歌も多い。この時の右大弁は資通であらう。



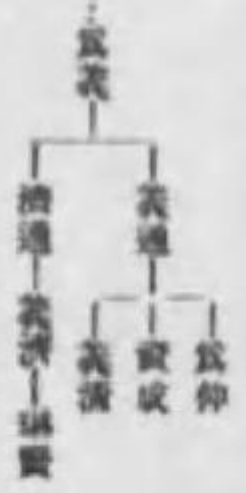
〔兼長〕 醍醐帝の後、源道成の子、備前・讃岐等の守に任じ、正五位下に敍した。歌は「後拾遺集」に五首あり、長久二年弘徽殿女御の歌合によんだもの、能因法師が伊豫に再び下るのを送つた歌がある。

〔經衡〕 藤原公業の子、大和・筑前等の守に任じ正五位下に敍した。道雅の八條の山莊の障子の歌は、當時の歌人の歌を選んで書いたが、經衡は年少の故にその歌が採用されぬであらうと考へ、竊に道雅の邸に行つて伺ふと、家經が經衡の歌「雪ふかき道にぞしるき山里は我よりさきに人こざりけり」（後拾遺集）を賞したので悦んで歸つたといふ（袋草紙二）。歌は「後拾遺集」以下、勅撰集に十六首あり、家集に「經衡集」がある。國書寮所藏本「經衡集」は一卷一冊で表紙に家隆筆臨寫とあり、部類はなくて短歌二百三十九首を收めてゐる。一面十一行にて一首を二行書にしてゐるが、二行目はやゝ低く書いてゐる。「八雲御抄」に「經衡十卷抄」とあるが現存しない。長暦二年、長久二年源大納言師房の家の歌合、永承五年禖子内親王家の歌合の作者で、天喜二年太宰大貳資通が任果てゝ上る時、筑前守にて資通と歌を贈答してゐる。家集には治暦三年後三條天皇の大嘗會によんだ主基・神樂・屏風等の歌二十八首、延久二年頼通八十賀によんだ杖歌一首、同四年三月、後三條天皇の祇園行幸によんだ東遊の歌一首等が見え、同年六月六十八歳にて卒した。「後拾遺集」に、「相模公資に忘られて後かれが家にまかれりけるに云々」とあり、家集にも同女との贈答歌が二三ある。



〔頼家〕 源頼光の子、筑前守に任じ、從四位下に敍した。歌は「後拾遺集」以下九首あり、長久二年、源大納言師房の家の歌合の作者であり、住吉に詣でて國基と贈答してゐる。

〔爲仲〕 橘義通の子、太皇太后宮亮、淡路・越後・陸奥等の守に任じ、正四位下に敍した。歌は「後拾遺集」以下に七首、家集に「橘爲仲朝臣集」（群書類從二五三）があり、能因と同舟して淡路に下る時の歌、淡路にて雨乞をするの歌、越後・陸奥に下る道中の歌、字佐の使にて下る歌などがある。「頼實集」には長久三年九月頼通が有馬に行つた留守に宮にて歌を作つたとあり、「作者部類」には應德二年卒とある。



〔義清〕 爲仲の弟にて長元六年藏人に補し、春宮大進肥後守を經て正五位下に敍した。長暦二年、長久二年、源大納言師房の家の歌合の作者にて、自らの家でも歌合を催し、頼實・頼家が會してゐる。

〔重成〕 長久二年源大納言師房の家の歌合の作者にて、同三年宮にて歌を作つてゐる。

【參考】大日本史（二百二十）○袋草紙○尊卑分脈　（西下）

六要六長 ろくえうろくちやう　畫論　【解說】宋の劉道醇の言つた言葉で、「氣韻に力を兼ぬる、一要なり。格制俱に老ゆる、二要なり。變異の理に合へる、三要なり。彩繪に澤ある、四要なり。去來の自然なる、五要なり。師學に短を捨つる、六要なり」となし、畫學上の注意、技巧上の要點を示したものである。六長とは、「麤鹵にして筆を求むる、一長なり。僻澁にして才を求むる、二長なり。細巧にして力を求むる、三長なり。狂怪にして理を求むる、四長なり。無墨にして染を求むる、五長なり。平畫にして長を求むる、六長なり」の六つであつて、積學累功の要諦を說いたものである。（藤懸）

露月 ろげつ　俳人　【本名】石井祐治　【生歿】明治六年五月十七日、秋田縣河邊郡戸米川村に生れ、昭和三年九月十八日歿す。享年五十六。【法名】玄龍院超雲露月居士　【墓所】玉龍寺　【閲歷】父を常吉といひ、露月はその次男である。明治二十四年秋田中學を中途退學し、二十六年文學を志して出京、翌年四月子規の知遇を得て、紅綠等と新聞「小日本」の記者となり、次いで新聞「日本」に轉じたが、脚氣を病んで歸郷した。二十九年再び出京して、醫師の前期試驗に及第し、三十年實地試驗にも及第した。三十一年に歸郷し、島田五空

と共に日本派の俳句を縣內に唱道した。三十二年京都の東山病院に在勤すると二箇月、十月歸鄕して居村に開業した。三十三年五空と共に「俳星」を發行し、翌年結婚した。大正十五年には、俳誌「雲蹤」を發行し、昭和元年「俳星」を再興した。【著書】「親獅子鍋」「桑弧」「永靜集」、外に殁後に出た「露月句集」（昭和六年刊）がある。

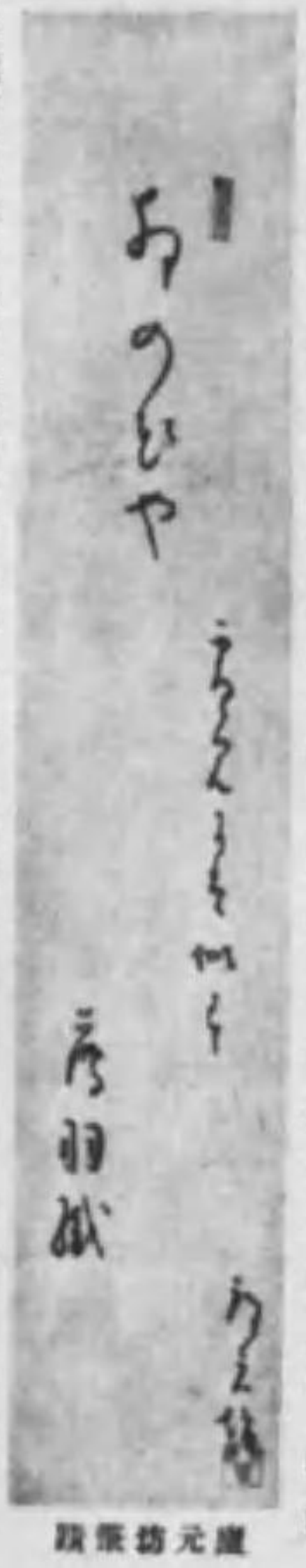
【作風】初期の作には、好んで漢語を取入れる風があつた。子規は評して、「露月は壯大を好み、奇警を好み、理想を好み、而して他を知らざるが如き不具にあらず。時に柔軟なる雅語を用ひ、時に微妙なる情味を說く。或は脫兎の如く、或は處女の如く、或は鬼神を囁し、或は赤子を愛するが如き者、これ露月の露月たる所以なり」と述べてゐる。晩年の作も依然雄勁の趣を失はず、奧羽の山村に居して、なほ俳壇の一重鎭であつた。　（水原）

【參考】露月先生追悼號（俳星）

盧元坊（ろげんばう）　俳人【姓】仙石【別號】里紅・賁鵝園・茶話仙・獅子庵三世（蓍藁を初世、支考を二世とする）【生殁】延享四年五月十日（二四〇七）殁す。享年五十六。【閱歷】美濃北方の人で、その鄕地の因緣から支考に敎を受ける事になつた。始めて支考に入門した時は明かでないが、享保初年頃の支考系俳書から里紅の名を見る事が出來る。かくて享保十二年の春には、師に勸められて三越地方の行脚を思ひ立ち、その年冬、歸鄕して「桃の首途（かどで）」三冊を撰んだ。素より支考の後援による所が多いのではあるが、その最初の撰集としては頗る堂々たるものであつた。蓋しこの頃漸く頽齡稍稍に傾いた支考は、彼を選んで自分の代表とし、美濃派宣傳のために各地を行脚させる志があつたのであらう。即ち獅子門第二世としての素地は、かうして既に里紅に與へられたのである。續いて享保十五年の春、蓮老人から烏藤杖を授かつて筑紫行脚を思ひ立ち、近江から京都・大阪を經、中國・四國の風人を訪ねて九月の末九州に渡り、長崎に年を迎へて歸途に就いた。處が途中小倉で偶々老師の訃音に驚き、十六年九月初めに歸鄕した。當時獅子門に於ける盧元坊の地位は十分に確立し、筑紫に出發の前には「三物拾遺」三冊を大成し、又行脚中の唱和名鈔・發句等は集められて「藤の首途（かどで）」三冊となつた。支考殁後一年餘を經て出版された追善集「文星觀」も亦、盧元坊の名に依つて編まれた。即ち茲に支考の後繼者たる事は明かに認められたのである。この「文星觀」が梓行された時、彼は四十一歲であつた。爾來右純・京平・有擧等と心を合はせて美濃風（別項）の興隆に力を盡し、又屢々各地に杖を曳き、特に北陸地方には再三行脚を試みたので、その門人は益々多きを加へた。【編著】桃の首途三冊（享保十三年）〇三物拾遺（別項）〇藤の首途三冊（享保十六年）〇文星觀三冊（享保十七年）〇涓江話四冊（元文二年。支考の七回忌に當り東山雙林寺に碑をたてた時の追善集）等。

【史的地位】盧元坊は、單に一個の俳人としてこれを許すれば、決して俳諧史上に特記すべき程の人物ではない。その作は極めて平易なものが多いのは、美濃派として當然の傾向ながら、而も支考だけの才氣もなかつたから、ただ平板といふに過ぎなかつた。併しそれだけ比較的小理窟を弄つた厭味は少い。かの名高い「鶯のいくつも捨てて初音哉」の如きは、素より多分に美濃派の惡傾向を持つた句ではあるが、同門並に五竹坊以後の人々の作に比すれば、なほ俗臭が少いと言はねばならぬ。又連句に於ては、人々との唱和に多くの場數を踏んでゐるだけ、流石に老練な所があつた。ただ彼が支考に依つて開拓された美濃派の後繼者として、最も能く宣傳に力を盡した事は、後世その傳統を長く全國的に維持する上に、何よりも大きな功績であつたと言はねばならぬ。特に三越地方に於ける美濃派の勢力は、支考の殁後、若し彼がゐなかつたならば、忽ち失墜してゐたであらう。兎に角彼は美濃派といふ傳統の上に於て眺めた時、始めて俳諧史上に語るべき人物となるのである。

【門人】全國に亙つて門人は多いが、特に優れた者はない。同じく美濃北方の人田中氏五竹坊は本名市次郎、又歸仙菴と號し、その高足であつた。延享四年師の殁後、獅子庵四世を繼ぎ、道統を保つ事三十餘年、安永九年七月二十六日、八十一歲で殁した。北方西運寺に墓がある。　（潁原）



盧元坊筆蹟

露語 ろご　「インド・ヨーロッパ語族」を見よ。

ロココ　美術【佛】Rococo【獨】Rokoko【解說】十七世紀のルネッサンス樣式及びバロック（別項）樣式に次いで、フランスを中心として發展した建築及び工藝方面の裝飾的效果の著しい樣式を云ふ。ロココの語義は、元來粗野又は不知則なといふ意味で、ルネッサンス以前の所謂端正典雅の樣式に反する樣式といふ意味で用ひられたらしい。フランスのルイ十四世の宮殿建築は特にルイ樣式と呼ばれるが、ルイ十五世時代の建築は全くロココ樣式と呼ばれ、主として建築內部の裝飾又は工藝美術品の裝飾的模樣の上に行はれたところの曲線過多な濃厚複雜な形式上の變化が、自ら建築自體の內部を大に異色あらしめるやうになつたのである。故に本來の建築の構成の美は裝飾のために掩ひ隱されて了つた。渦卷・花飾・貝殼・唐草等の軟い變化極まりない曲線模樣に、淡彩と金色とを併用することにより、獨特な輕快優美な趣味が現はされた。ロココ式圖案のいゝものは、闘爭葛藤のない美として優美（別項）の表現の代表とされる。代表的建築物は、ベルニーニ（一五九九―一六八〇）によるルーブル宮殿、マンサールによるベルサイユ宮殿等。　（村田）

【參考】Hausenstein: *Rokoko.* etc.

ロシヤ文學の影響【解說】明治大正を通じて日本文學に影響を與へた外國文學中に於て、その最も顯著なるものは、イギリス文學とロシヤ文學とであつた。前者が主に明治初期の文學に影響を與へ、新日本文學の基礎を作つたのに對して、後者は明治の中期以後により廣汎な影響を及ぼしてゐることが注意される。明治・大正・昭和に亙つてその甚だ長期に及んでゐること、殊にトルストイの文藝思想方面に及ぼした影響は、北歐のイプセンと共に特記すべきものがある。

【沿革】【明治期】明治初期に於ける最初のロシヤ文學の邦譯としては、明治十六年高須治助の「露國奇聞花心蝶心錄」（プーシキン）、同十九年、同譯者の「露國稗史スミス・マリー之傳」（同上）等があるが、眞に正統なロシヤ文學の移植されたのは、二葉亭四迷（別項）によつてである。二葉亭は早くベリンスキーに傾倒して坪內逍遙の「小說神髓」（別項）の出版された當時、すでに「ベリンスキーの藝術論」なる一文を草して、「小說神髓」の寫實主義論よりも、もつと深くもつと精確な寫實主義を述べてゐる。その一部分が「中央學術雜誌」に揭載されたが、當時にあつては餘りに高尙に過ぎて殆ど認められずにしまつた（後、大正十五年六月、その全文が雜誌「反響」に連載され、又明治文化全集文學藝術篇に收められた）。而も坪內逍遙は、評論に於ては、寫實主義を主張しながら、その實驗小說ともいふべき「當世書生氣質」（別項）にはまだ多分の舊文學の殘滓を殘してゐた。然るに二葉亭四迷は、明治二十一年十月に發表した「浮雲」（別項）で、すでに完全に、その理想とする寫實主義で貫いてゐる。寫實主義は、明治文學の主潮として流れた思潮であり、「浮雲」が、その源流として大きな力を持つてゐたとすれば、明治文學に於けるロシヤ文學の業績は、まづこゝに第一の力點が置かれねばならない。併しそれは、單に「浮雲」に止まらない。彼の生涯の創作は、數こそ割合に少いにかゝはらず、どの作物を見ても、すべて直接にロシヤ文學の正統であるところの、寫實派と現實主義を承け繼いでゐる。一方、彼は明治期の文壇にあつては、ひとりで隔離した惑星の地位にゐた作家であり、彼自身もまた、當時の文壇の空氣に、强ひて接觸する興味もなかつたらしい。それだけ、一層ロシヤ文學の浸潤を傷けられずに承け繼いでゐた。その點では、明治の時代を通じて、ロシヤ文學の最も深い影響下にあつた唯一の作家であるといへる。「浮雲」「其面影」「平凡」（各別項）等を通じて、弱氣で、イゴイスチックで、自嘲的で、自己虐待的な諸人物の氣分や、心理の過程などでも、やはり當時のロシヤ文學を浸したところの、世紀末的、絕望的な、十九世紀末の人生的思潮を反映する。中でもチエホフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、コロレンコ、ゴンチャロフ等は、殊に彼の人生觀・世界觀に高度に影響した諸作家と云ふべきであらう。次に二葉亭は、明治二十一年に、ツルゲーネフの作物の飜譯、「あひゞき」（別項）を「國民之友」に發表した。この邦譯は、我が國の文學史及び文章史に、空前の光輝を投げたもので、同時に、ロシヤ文學の輝いた存在を、一般に知らしめた業績として、「浮雲」の發表といづれが偉大であつたかわからない。魯庵が、獨步一派の自然主義運動は、實にこの「あひゞき」と、「都の花」の五號に亙つて連載された「めぐりあひ」とに發途されたといふのも誤まつてはゐないであらう。その後二葉亭は、同二十九年にツルゲーネフの「片戀」を邦譯してから、明治四十一年の「うき草」まで、ゴルキー、アンドレーエフ、ガルシン、ポタペンコ、コロレンコ、その他の作物を飜譯して、ロシヤ文學の紹介と體得のために心血をそゝいだ。彼の「余が飜譯の標準」なる短文でもほぼわかるやうに、その忠實を極めた飜譯ぶりと、練熟された技巧は、譯文界の異彩たるべきものであつた。なほ彼の飜譯生活の末期には、可なり多くゴルキーを手掛けたが、しかしゴルキーの作風は、おそらく二葉亭と對蹠の地位に在るものだつたらう。

內田魯庵（別項）も、ロシヤ文學の紹介には、有力なる一人である。彼の年譜によれば、『ドストエフスキーの「罪と罰」を讀みて、露西亞小說の偉大なるに甚深の感動を與へられ、初めて小說に對して、敬虔の情を與へられた』のが、明治二十二年であり、その十一月に、二葉亭と初對面をした。これによつて、「更に文學の中に、人生と交涉する嚴肅なる意味を認めた」と云ふ。彼の「罪と罰」は、丸善に始めて舶來された英譯三部の中の一部を買つたもので（魯庵が、ドストエフスキーの名を始めて聞かされたのは、尾崎紅葉によつてであつた）、他の二部は、逍遙と森田思軒とが買つた。その頃紅葉は、佛蘭西の寫實派に興味を持つてゐて人生本位のロシヤ文學を好まず、それを評してじめ〳〵してゐて陰氣だとくさし、ツルゲーネフを好む魯庵達を外道と呼び、また「ロシヤ文學は血の出るビフテキ、日本のは洗ひだ」と批評してゐた。魯庵はその頃、不知庵の名で、「罪と罰」第一卷を出版したのが明治二十五年で、「文學界」一派の文學者その他、少數の人々の間には深刻の極だとして極度に禮讚され、始めてドストエフキーの偉大さが認められたが、一般人に廣く理解されるには至らなかつた。不知庵は、明治二十六年、「罪と罰」第二卷を出版し、その九月にトルストイの「藤淚」を「國民之友」に譯載し、翌二十七年には、トルストイの「めをと」、ドストエフスキーの「損害と侮辱」を、共に「國民之友」に發表したが、彼は何れかといへば、殊にトルストイの人物、思想傾向及び作物に傾倒すること最も深く、三十九年にトルストイの「イワンの馬鹿」を、四十一年に「復活」前編を、四十三年に同後編を、共に單行本として發表した。文壇人及び思想人としても、最も進步的であり、自由主義的であつた彼は、トルストイの人道主義と鬪爭精神に共鳴するところが殊に强かつたらしい。而してトルストイに關して隨時に發表した感想及び論文の數にも富んでゐる。なほロシヤ文學に關しては、我が國に於ける最初のイプセン劇紹介者たる高安月郊（別項）も亦、早くから知つてゐた。その頃いち早くドストエフスキーの「罪と罰」「損害と侮辱」「白痴」「賭博者」「伯父の夢」などを讀み、「損害と侮辱」の邦譯を企てたりした。矢崎嵯峨の屋（別項）は、早くから、ロシヤ文學には親しんでゐたらしい。彼は今日では、二葉亭と共に、當時のロシヤ文學通として並稱されるが、明治時代には寧ろ作家としてのみ知られてゐた。その作物にも、ロシヤ文學から影響されたと見られる分子は、極めて稀薄で、反對に、浪漫的な常識的な作物が多い。ただ二葉亭の「平凡」が、ゴンチャロフの「オブローモフ」から拔け出たやうに、嵯峨の屋の明治三十年の「通例人の一生」も、ゴンチャロフの「通常人の一生」、もしくはツルゲーネフから筆胎したと見られる程度に過ぎず、純粹な飜譯では、明治二十九年のツルゲーネフの「啞の戀」などもあるが、これと云ふほどのものでもなかつた。明治二十五年十月、「しがらみ草紙」（別項）に發表された小金井きみ子譯のレルモントフの「浴泉記」は、原作が、さすがに世界的傑作たる「現代の英雄」だからでもあるが、そのすがすがしい抒情味の中に、さびしい哀愁をふくめた浪漫的な脚色が、譯者の清澄な譯文と相俟つて、讀書界に異常なセンセーションを起した。また同じ年十二月の、同じ作家の「ぬけうり」が、きみ子の令兄鷗外によつて發表され

た。二十七年四月には、探美生なる匿名で、ゴンチャロフの「オブロモフの幼時」が出たが、この頃から、雜誌「裏錦」などを初めとして、諸方面に、ロシヤ文學の紹介が盛んになり出した。トルストイ、ツルゲーネフ、プーシキン、それにゴーゴリの「タリス・ブルバ」なども、「老武者」の名で、國民新聞に德富蘆花によつて譯載されたりした。そして明治二十八年八月には、小西増太郎・尾崎紅葉共譯として、トルストイの「クレーツェロワ」が「國民之友」に發表された。それは紅葉の名で、讀書界の注意を惹いた。言ふまでもなく、原作はテーマ小說であり、トルストイの性慾觀を盛つたところに、この作物の價値はあるのだが、當時この方面に對する批判は、この譯述に關して何ものも與へられなかつた。德富蘆花は明治二十三年に、「露國文學の泰斗、トルストイ」を「國民之友」に載せ、三十年四月には、「十二文豪」の第十卷として、「トルストイ」を民友社から出版したほどに、トルストイに傾倒した人であつたが、三十九年には、エレサレム順禮の途に就き、歸途ヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねた。蘆花は藝術家としてのトルストイから與へられたものは、多くなかつた代り、生活人として、宗教人としてのトルストイからは、投影された力が少くなかつたらしい。明治四十年、東京府下千歲村粕谷に彼が百姓生活を營んだのも、大正九年世界の旅から歸つた彼が、「日本から日本へ」や「富士」に、懺悔の記錄と、一種の宗教觀を盛らうとしたのも、みなそれである。

國木田獨步の「空知川の岸邊」は、書いた年代が不詳となつてゐるが、露國詩人が、「人類の最後の一人が、この地球上より消滅する時、木の葉の一片も、その爲めにそよがざるなり」と歌つた深林の空想を引いて、人生の微力と自然の悠久とを悲しみ、人間の一千年は、刹那に飛びゆくと歌つてゐるあたり、確かにツルゲーネフからの引力を反映してゐる。明治三十一年の「武藏野」（別項）になると、明かに二葉亭の「あひゞき」を引用して、落葉林の自然美觀を、パノラマのやうに展開してゐる。彼の運命的虛無感は、殊にツルゲーネフを知つてから、一層深化した跡がある。それが明治三十一年である。明治二十六年にトルストイの「コサックス」を飜譯した田山花袋が、小說「重右衞門の最後」（別項）を發表したのが、明治三十五年である。「重右衞門の最後」は、ドイツのズゥデルマンの「猫橋」から影響されたといふ說もあるが、あれは主人公が少女である。寧ろツルゲーネフの「曠野のリヤ」を、より近く想ひ起させる作物で、花袋も殊にツルゲーネフを愛讀した。一體、ロシヤ文學が大きな主流として日本に入つて來たのは何時頃だつたらう。明治三十一二年頃から三十四五年に掛けて、ます〳〵一般的になり、日露戰爭以後、多少の曲折を作りながら、大正・昭和に進んだのではなからうか。それをかく有らしめた因子の一つは、大正期までのロシヤ文學が、八割程度まで英譯によつて讀まれたからである。といふのは、ロシヤ文學が、英米に廣く讀まれ出し、しきりに飜譯されるやうになつたのは、十九世紀も餘ほど末期になつて來てからのことである。ベアリングに從へば、何んでも時間的にはツルゲーネフが、まづ第一期に露國作家の王者に置かれ、第二がトルストイ、第三がドストエフスキーといふ順序で、飜譯書の讀まれる數量もそれと比例したが、その後の十年內外には、全くその順序を換へて、ドストエフスキーが斷然第一位を占めるやうになつた。次にチエホフ、ゴルキー、その他で、日本への英譯者の輸入も、日本の讀書界の評判も、大抵この趨勢に從つたものらしい。而してこの期に、我が國に輸入されたロシヤ作家は、レルモントフ、プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、メレヂコフスキー、トルストイ、コロレンコ、ガルシン、チエホフ、ソログーブ、クープリン、アンドレイエフ、アルチバーシェフ等がある。そして中澤臨川が、「トルストイ論」を發表し、また近松秋江の「生ひ立ちの記」（明治四十一年）の飜譯などが一部に愛讀されたに拘はらず、明治三十四五年から四十年頃までは、ツルゲーネフが、佛作家マウパッサンと共に、壓倒的に最も廣く讀まれ、第二位をチエホフが占め、ドストエフスキーの如きは、未だ大した認識を得なかつたのは、自然主義が強化した文壇の必然性でもあつたらう。何んにしても、海外文學の王者として、ロシヤ文學が當時に贏ち得た地位は、或る海外の批評家をして、「日本は戰爭ではロシヤに勝つた。文藝では、ロシヤに完全に征服された」と皮肉つた事實に見ても、大抵うなづかれ得よう。なほ明治の末期になると、露語からの直接邦譯者がぼつ〳〵と現はれた。小西増太郎もさうであつたが、尾崎紅葉門下の瀨沼夏葉が、チエホフの作物を絶えず飜譯したし、昇曙夢がプーシキン、クープリン、ザイツエフその他に手をつけ始めるし、英文からの馬場孤蝶、獨文からの森鷗外のそれ等と並んで、ロシヤ文學の輸入は、いよ〳〵しゆんに入つた。元來この頃まで紹介されたロシヤの作家層は、大抵一八五・六〇年代生れに止まつたが、昇曙夢をはじめ、中村白葉・松永信・米川正夫等の、露文專門家が頻出するやうになつて、その後の新作家群がしきりに紹介されて來た。アンドレーエフ、アルチバーシェフ、チリコフ、ジモフ、カーメンスキー、クープリン、ソログーフ、殊にアルチバーシェフの「サアニン」、アンドレーエフの「血笑記」「七死刑人」、クープリンの「生活の河」「ヤーマ」、ガルシンの「四日間」等は、絶對に我が國に求められない文學の新聲として、讀書界を騷がした記錄的作物群である。かくて明治三十四・五年頃の文壇に於けるロシヤ文學の飜譯は、量から見ても壓倒的であつた。

〔大正・昭和期〕大正期に入ると、ロシヤ文學の迫力は、變つた面貌を以て、力強く文壇・思潮界を支配して來た。まづ世界大戰後の、世界共通の現實苦を救ひ探るべき方向として、唯心的には人道主義が採り上げられた。弱くて甘いツルゲーネフや、溜息と逃避のチエホフが、本箱の隅に押し込められてしまつて、トルストイとドストエフスキーが、ショウやロオラン達と手を連ねて進出して來た。白樺派の武者小路實篤や長與善郎等が、トルストイズムや、ドストエフスキーズムを中心として、人道主義の使徒として人間愛を說教し出したのはこの頃のことである。また「新らしき村」もその影響である。大正五・六年には、「トルストイ研究」なる月刊雜誌が現はれ、トルストイズムが、宗教・社會の各方面を風靡した時代であり、倉田百三は「出家とその弟子」から雜誌「生活者」まで、その思想生活を延長し、江渡狄嶺・西田天香等が、土の謳歌や社會の奉仕を提唱し、行者の體驗に入つた時代でもある。また新劇の勃興につれて、チエホフの「櫻の園」「鷗」、ゴルキーの「どん底」と共に、トルストイの「闇の力」がしきりに脚光を浴びた。雜誌「露西亞評論」が生れて、ロプシン、ブーニン、ソログーフ、チエリコフ、クスミン、レミーゾフ、その他の新作家の新しい作物がしきりに紹介された。同時にロシヤ文學の歷史的研究も體系がとゝのひ、雜誌に新聞に、眞摯な、整理された、ロシヤ文學や、作品に關する清新な論文・解說を見ることも多くなつて來た。片上伸・昇曙夢等がその指導をつとめた人々であつた。然るに大正十年頃から、社會情勢の變化に伴つて、我が文學界に捲き起された無產文學運動は、大正十四・五年頃になると、ロシヤ帝政期の優秀な作家及び作物をすら、十把一からげに、ブルジョア文學として葬り去り、全く新生面な新興國の詩人小說家達を、前面に押し出して來た。「ソログーブ、ブーリューノフ、バリモント、イワーノフ、ビエールイ、ブロック、ギッピユウス、その他の現代の詩人は、何人もデカダンの匂を嗅ぐシムボリズムに似て非な、デカダンスの藝術だ」ときめつける。レオノフ、ゾシチンコ、フェヂン、ファデイフ、リベデンスキー、リデン、セメノフ、カテーフ、シクロフスキー、セラフィモヴイチ、パンヨロフ、その他の若いソヴェート・ロシヤの作家達が、ゴルキーと共に、そして幾多の卓越した文學理論の指導者達と共に、完全に、我が昭和四・五年までの無產文學を引きずつてゐた至上權力を發揮した。リベデンスキーの「一週間」、ゴルキーの舊作「母」、セラフィモヴイチの「鐵の流れ」、パンヨロフの「ブルスキ」、グラトコフの「セメント」、レオノーフの「穴熊」、ショロホフの「靜かなドン」「ひらかれた處女地」、プリボイの「ツシマ」等は、ピリニャークや、エレンブルクの諸作と共に、我が國で最も多く讀まれた勞農ロシヤ統治下の作物であつた。しかしそれ等の諸制作も、この國の純粹文學の圏內で讀まれたものではなかつた。さればとて、帝政時代の作家達が、純粹文壇にまた魅力を盛り返したわけでもない。尤もトルストイ、ツルゲーネフ、チエホフの三作家は、殆ど全集ともいふべきものが邦譯されてゐるが、今日はツルゲーネフやチエホフが、まだいくらかづつ、忘れられない迫力を持ちつゞけてゐるだけである。ブーニンは、ノーベル賞を受けたが顧みられない。次にトルストイだけは、「戰爭と平和」や「アンナ・カレニナ」や「復活」が、正統的な現實主義の偉大な作品であるか、或は人道的なテーマを巧みに盛り込んだ創作としてか、なほ依然、その勢力を持ちつゞけてゐる。彼の生活や、宗教觀・戀愛觀を、もう一度檢討するやうな興味は永遠に引き起されようとも思へぬ。ただドストエフスキーはこれと違ふ。それは、ジイドの「ドストエフスキー論」が、今ごろ新しく紹介されたのを機緣として、ドストエフスキーの再認識が、若い年代の人々の間に、再び素晴らしい問題として立ち上つて來た。そして全集の出版が二書店から同時に發表された。これでドストエフスキー熱は、二度目の復活であり、中でも「カラマゾフ兄弟」が、最も強烈な賞讃を集めてゐる。ただ大正期のそれと根本的に違ふのは、前期のそれの目標は、人道主義の使徒であり、犧牲の教義の宣傳者としての彼であつたが、現時のそれは、世界觀の上のそれではない。徹底的に、現實主義の手法で觀照する、手法と態度を彼に仰ぎ見ようといふのである。それほどにも、享受する側の文壇の狀態が違つて來たのである。（千葉）

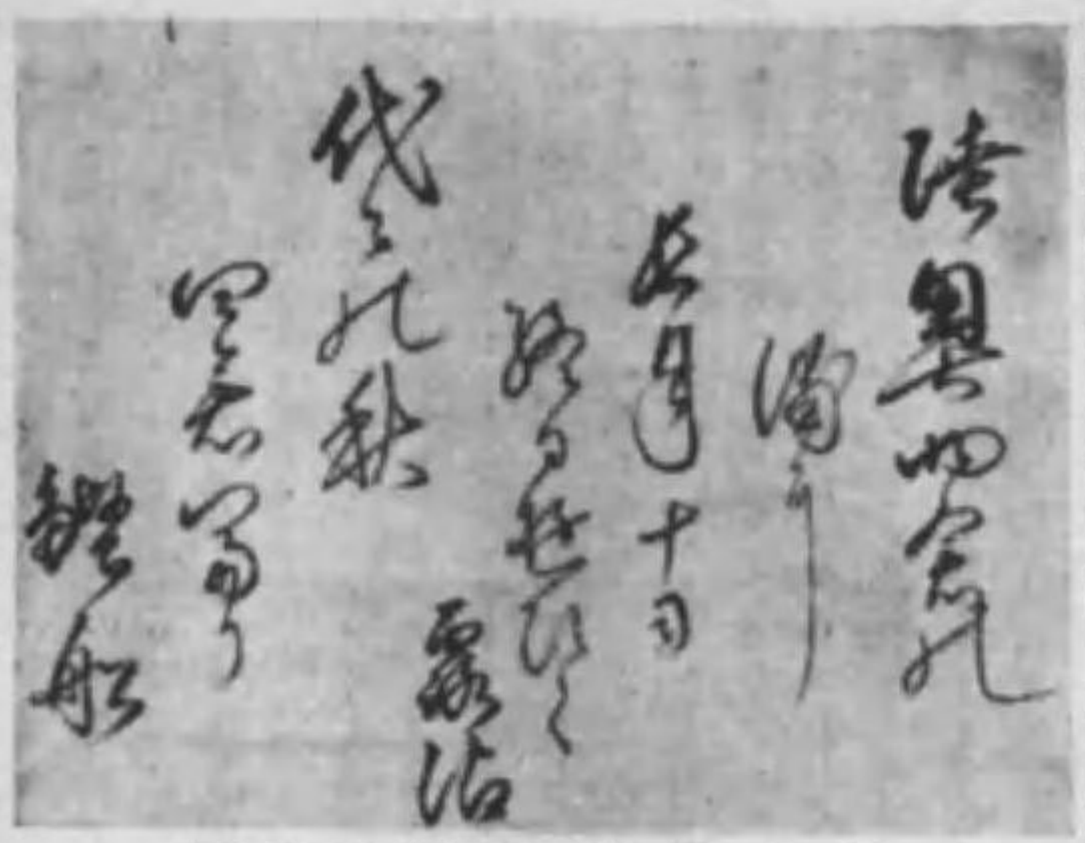
鷺水 ろすゐ　浮世草子作者・俳人【姓名】青木五省。通稱次右衞門。【別號】白梅園・歌仙堂・三省軒【生歿】享保十八年（二三九三）三月歿。享年七十六【解說】彼はもと野々口立圓門の俳人であつた。その編著にかゝる俳書に、「春のもの」（元祿五年）、「新玉櫛笥」（元祿六年）、「俳諧寄垣諸抄大成」（元祿八年）、「俳諧良材集」（元祿十年）、「俳諧新式」（元祿十一年）、「俳諧若ゑびす」（元祿十五年）等がある。浮世草子の作は「御伽百物語」（六卷、寶永三年）、「近代因果物語」（御伽百物語次編、六卷、同四年）、「本朝新堪忍記」（六卷、同五年）（各別項）の三部がある。「近代因果物語」の卷末に、「御伽百物語」「近代因果物語」に次ぎて、續編共に十八冊完結の意あつて果さない旨を記してあるが、この續編は終に世に出なかつたらしい。なほ「芭蕉翁諸國物語」「風流吉日鏡曾我」等の名は聞えてゐるが、未刻のまゝであつたとも傳へる。（藤村）

鷺水閑談 ろすゐかんだん　隨筆　四卷【著者】青木鷺水【刊行】寶曆六年洛下梓竹の序がある。所見の本の奧に、「安永九庚子年八月求板書肆參香軒開板」とあるのに因ると、同年以前寶曆・明和頃の原刊であらう。【解說】文武雅俗の尙古的雜件を考證し、又俗諺・通言などの解說をも交へた隨筆。卷一に樂笛の息づかひの事以下十項、卷二に源氏補無の鍛白旗の事以下九項、卷三に佛法といふ物の起りの事以下九項、卷四に親子は一世夫婦は二世師は三世といふ事以下十四項を收めてゐる。概ね俗說であるが、中にまた採るべき節がないでもない。（和田）

露石 ろせき　俳人【姓名】水落義弌【別號】石田（初號）・聽蛙亭。【生歿】明治五年三月十一日生れ、大正八年四月十日[illegible]行中歿す。享年四十八【閱歷】家は大阪市東區南久寶寺町の[illegible]。幼時から漢學・英語・繪[illegible]の史的研究に[illegible]注いだ。明治[illegible]よつて子規に[illegible]鼠骨等と共に[illegible]には業務上の[illegible]「日本」に出し[illegible]同三十三年に[illegible]年には、松瀨[illegible]刊した。初め[illegible]新傾向（別項）[illegible]の俳壇の選者[illegible]した。天明俳[illegible]て記憶さるべ[illegible]よつて窺はれ[illegible]る露石文庫は[illegible]青々・月斗（別項）[illegible]大阪俳壇の重[illegible]（明治三十三年[illegible]大正九年刊）○[illegible]二編、大正十年[illegible]下俳句集。

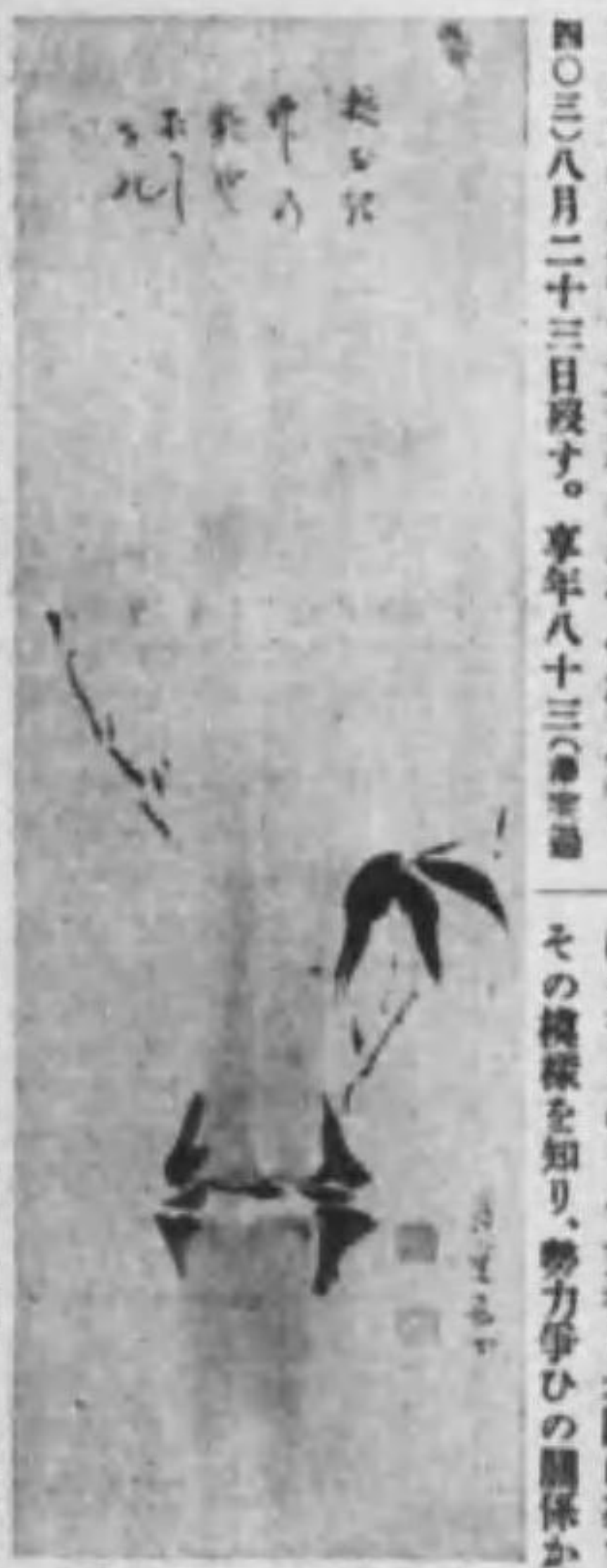
露沾 ろせん　俳人【姓名】內藤義英。後、政榮。幼名五郎四郎[illegible]【生歿】明曆[illegible]（二三三[illegible]）九[illegible]光顯院殿天[illegible]城平善昌寺[illegible]山宗因門【家系】[illegible]

城平の城主で、俳號を風虎といひ、風鈴軒・白龍子・紫蕊等の別號があつた。宗因門で、俳諧集の撰に「櫻川」（寛文十年刊）、「夜の錦」（延寳四年刊）、「信田の浮島」（刊年不明）と題する三十餘卷があり、「六百番誹諧發句合」（延寳五年刊）があつた。和歌連歌をも能くし、共に遺作が多い。貞享三年五月二十九日歿す。享年六十七（一說に貞享元年歿、六十九歲）。法名泰鈴院殿風山大居士、鎌倉光明寺に墓がある。【閱歷】義泰の二男として江戶櫻田の邸に生れ、兄義邦が夭折したので、寛文十年十六歲の時に將軍に謁見、從五位下に敍せられ、下野守に任ぜられ、家督を繼いだ。然るに義泰に讒する者があつて、延寳六年幽閉の身となり、遁世の念がきざして、天和二年二十八歲にして家督を辭し、麻布六本木の別邸に入つて風月を友としたが、元祿八年（四十一歲）磐城に下り、高月に退隱した。然るに享保三年露沾の息豐松（後正樹）が封を嗣ぎ、封一萬石を越ゆるに至つたが、時の家老松賀伊大夫、その父伊織の兩人が豐松の幼弱に乘じて横暴を極め、藩士がこれを露沾に訴へて裁決を仰いだので、露沾は伊織父子等を處斷して士民を安堵せしめ、士民露沾に悅服して恩を謝した。俳談に於ては父風虎の「櫻川」に既に多數の作がある由であるから、早く青年期から父の感化で俳諧に入つたらしく、延寳五年の「六百番誹諧發句合」の作者六十人の中にも加はつて、二十句の句數を見せてゐる。若くして風月を友とする身となつたからでもあらうが、俳諧に於ける態度も他の大名俳人とは趣を異にし、單なる遊俳に止まらないで、加點もすれば入門も許すなど、普通俳人と變る所がなく、露門といふべき一俳系を形作るに至つた。從つて俳人の保護をもすれば、諸派の俳人をも歡び迎へ、その風交の範圍も廣かつた。門人も少くはなく、特に自號の一字を免すことをしたが、その中にも沾德・沾涼（各別項）・露言の如きは傑出した方であり、沾德は特に愛顧を蒙つた。かくて沾德をして父君の「櫻川」等の三集に基づいて「談林一字幽蘭集」（別項）を作らしめ、沾德は又この前及び後に共に磐城に下りもした。露沾の作の談林の諸集に見えることは云ふまでもないが、蕉門の集に於ても、「虛栗」（別項）以下の撰集にその作が見られ、七部集（別項）に於ても、「猿蓑」以下に六句見られ、芭蕉・其角・路通とは特に交渉が深かつた。從つてその作風も、著しく蕉風の感化を受けた樣子が見られるが、併しその俳生涯は寛文から享保に亙る永年のものであるので、時代と共に變化し來つてゐる。なほ風虎以來、俳書を蒐集し、古俳書中、圓の中に讀畢の二字ある印影の捺してあるものは、風虎の藏書印であるといふ。かくて八十に垂んとする長壽を保つて、數奇の一生を終つたのである。【著作】「純鉢」の系譜の露沾の條には、「御集有ㇾ之」とあつて、その名目を記さないが、これは稿本のまゝで板行されてゐないことを意味するのであらうか。「俳諧史上の人々」には、「著書にのぼりつる其他數種ありといふ」とあり、「諸侯と俳諧」には「佐々木文山の寫した露沾句抄がある」とある。以上の外詳かにし得ない。


露沾筆蹟（松宇文庫藏）

【參考】純鉢（葛飾玖瑤）〇誹諧世說（嵐雪編）〇續落穗集（湖中編）〇名家五重塔〇寛政重修諸家譜（堀田正敦）〇詩家大系圖（生川春明）〇俳人小傳（中村光久）〇俳諧人物便覽（三浦若海）〇名人忌辰錄（關根只誠）〇俳諧史上の人々（高木蒼梧）〇諸侯と俳諧（櫻井久藏）（寳雲昭和七ノ一〇・八ノ一）　（志田）

露川 ろせん　俳人【姓名】澤氏。通稱藤屋市郎右衞門【別號】茅山軒・鱸山窩・月空庵月空居士【生歿】寛文元年に生れ、寛保三年（二四〇三）八月二十三日歿す。享年八十三（寧宝論夫婦寄に歸る）【墓所】名古屋白川町荏薩寺【辭世】一たきの灰掃きながせ秋の水。【俳系】初め季吟門。後、芭蕉門【閱歷】伊賀山田郡友生村の澤源內の子で、名古屋本町の渡邊家の聟養子となり、故あつて渡邊姓を改め澤姓を名乘つた。同家は代々藤屋市郎右衞門を稱し、珠數商であつた。俳諧は初め季吟に師事し、元祿二年その處女撰集「花の雲木」を出した頃は、まだ芭蕉に歸してゐなかつたらしく、芭蕉に師事したのは元祿四年の頃らしい。かく芭蕉晚年の門人で、芭蕉との交渉も比較的薄く、露川の活動期は芭蕉歿後に屬するが、長壽を保つたので、蕉門の耆宿として勢力を張つた。寳永三年四十六歲の時、同地の林光山乘空和尚によつて剃髮し、月空の遺號を與へられ、小庵を結んで月空庵と號し、記念集「庵の記」が成つた。これより東西に行脚を試み、各地に門人を得、一勢力をなすに至つたが、露川は門人に折本の名目傳なるものを傳授して入門誓狀の書を入れしめたので、支考に攻擊の材料を與へ、後世からも問題にされてゐる。正德五年には山陰に行脚し、その他南海・東國・西國・北國の行脚には、各々その集があつたが、そのうち享保六年の北國行脚の際には（「北國曲」成る）、支考も北國に來てゐたので、その機樣を知り、勢力爭ひの關係から、支考は享保八年に、露川に「口狀」（露川責）を送つてこれを辭詬し、露川側は翌年、これに對して「相撲」を返して歸服するなどの事件が起つた。支考は露川に先だつて歿し、露川は支考に後るゝこと十三年、病疾を患ひて月空庵裡に歿した。歿するに臨み、高足燕州に誹書點印を讓つて


露川自畫贊（松宇文庫藏）

俳統を繼がしめた。【著作】花の雲木（元祿二年刊）〇流川集（元祿六年刊）〇やはぎ堤（元祿八年刊）〇記念題（元祿十一年刊）〇枕かけ（元祿十四年刊）〇峯納集（元祿十五年刊）〇庵の記（寳永四年刊）〇菊の宴（寳永七年刊）〇船庫集（同年刊）〇檜木笠（正德五年刊）〇西國曲（享保二年刊）〇北國曲（別項）（享保七年刊）〇水鷄塚（享保二十年刊）〇蕉門名家句集（露川の部）。以上の外「歲且帳」があり、なほ澤家その他に稿本として傳はるものが少くないと云ふ。

【人物・作風】元祿十五年の「花見車」には、「ものだのもしき人にて、ぼうばいしゆの事といへば、珠數（珠數やと別號がある）を片手にかけ廻らんす」とあつて、元來物賴もしい所のある人であつたらしく、句碑（一周忌に門人英鼠馬州が名古屋御門前町正覺院に建てたもの、今は荏薩寺內にある）に誌す行狀には、「性質温順柔和にして」とあるが、これは門人の記す所である。然るに後になる程、時代の趨勢にもよつたのではあらうが、入道の身となつたに拘らず、勢力擴張に慾はされ、「既に六十餘ケ國を巡り、其徒にあそぶ者貳千餘人」（北國曲跋）といふ如き勢力は得たものの、誹傳を持した芭蕉の精神に悖る行爲を敢へてした點から見ると、元來小野心を藏した性格で、支考の亞流と云はざるを得ない人である。作風に就いては、許六の同門評判（元祿十一年）に、「露川、師の國よりいでたる人にて、風雅の手筋もよし。しかれども、なし置たる功德も少なし。花實のすがたたしかならず」（俳諧問答）とあつて、風雅の手筋がよいとあるけれども、必ずしもさうは認められず、特に芭蕉の指導を十分受けなかつたためにもよるであらうが、初めから卑俗低調の傾きを免れず、特に後に至る程亂作と短歌の風が進んでゐるやうである。

【參考】秋の水（追善集）燕木烏朔編（延享二年刊）〇和須連奈草（七回忌追善集）同編（寛延二年刊）〇月の前（十三回忌追善集）同編（寳暦五年刊）〇花見車高島轍士〇俳諧問答（許六）〇風俗文選（作者列傳）〇不猫蛇越智越人〇俳家奇人談竹內玄々一〇蕉門諸生全傳遠藤日人〇俳林小傳中村光久〇俳諧人物便覽三浦若海〇花虛木關題野田別天樓（蕉門珍書百種第三十五）〇露川のこと一二同上（ひむろ昭和四ノ八）　（志田）

露太鼓 ろだいこ　「狂女物の謠曲」を見よ。

露團々 ろだんだん　小說【作者】幸田露伴【發表】明治二十二年二月、「都の花」第九號より第二十號まで連載。【刊行】露伴全集第四卷所收。

【梗概】貧家に生れて船乘となり、捕鯨事業に着手して成功したニューヨークの富豪グランド・ブンセイムは、淑美の令名ある一女ルビナのために求婚の新聞廣告をする。條件はただ一つ、決して不快の感を起さず常に愉快な生活をなすこと、他は敎育・職業・容貌・財產・人種・宗敎を問はないといふのである。つまりこれは娘とその戀人モルン・シンジアに對する試鍊であつて、ブンセイム及びその心事を知つてゐる家宰シンプルは、應募者を故意に怒らせて拒絕させる。ところが多くの應募者の中に支那南京の田亢龍といふ男があるが、これは實は替玉で、亢龍に恩を受けた吟蜩子といふ日本人であつた。怒らせようとして盛んに支那人を罵倒するが、替玉だから平氣でゐる。流石のブンセイムも我を折つて吟蜩子を婿にしようとするが、卻つて彼の方が支那へ逃げ歸る。かくてルビナは、男子の誇りを持して應募しなかつた戀人シンジアと結婚する。一方吟蜩子は、亢龍に捕へられて詰問され、困つてゐるところへ縣知事が通りかゝり、事情を聽いて亢龍の非瞞に明斷を下す。こゝに吟蜩子は改めてブンセイムの賓客として迎へられ、世界漫遊の途にのぼる。

【解說】舞臺はアメリカ、人物もアメリカ人が多く、文章會話も飜譯調なので、飜案めいた點があるが、作者も「都の花」で斷つてゐる通り、支那小說「今古奇觀」（錢秀才錯占鳳凰儔）から出てゐる。またブンセイム（文世武）のモデルは紀國屋文左衞門であることも、作者自身述べてゐる。併しルビナとシンジアの戀、田亢龍と賣卜翁の問答など、人物場面ともに作者の創作に成るものも素より多い。趣向が趣向であるから隨分無理があり、不自然な點も多く、人物性格描寫も朦朧としてゐるが、亢龍が賣卜翁にかつがれて、吟蜩子に替玉になつてくれとせがむあたり、相當面白く讀まれる。無論露伴の作としては傑れたものではないが、處女作であり、彼の文名が始めて知られた作品として意味がある。　（柳田（泉））

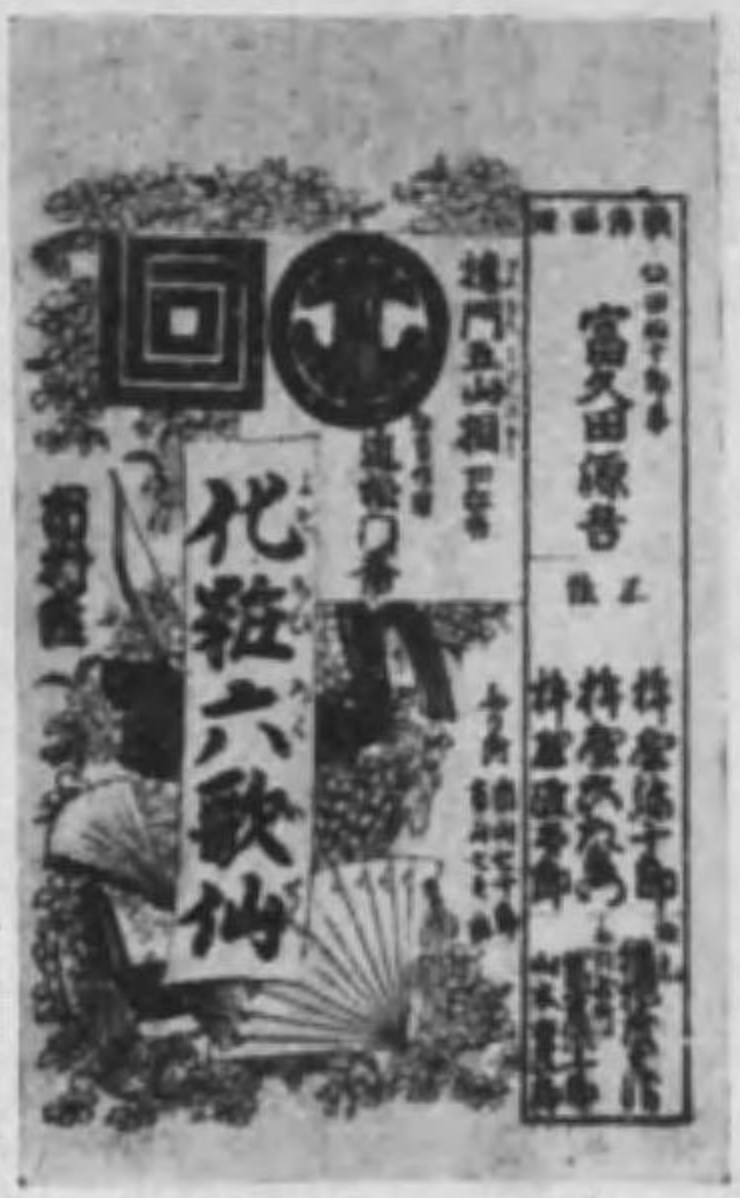
路通 ろつう　俳人【姓】八十村氏。「海音集」に齋部とあり、「芭蕉句選拾遺」に忌部とあり、「猿蓑逆志抄」に八十村氏とあるので、問題になつてゐたが、勝峰晋風氏により（實際所載）、沾涼の「諸國里人談」に「八十村路通」とある事が發見され、齋部・忌部は姓であらうと考へられた。【名】不詳【號】露通。呂通とも書く。【生歿】不詳。素丸の「說叢大全」に、大阪龍慶橋大屋氏何某方に寄居し、享保の初め頃とかに病死したとあるが、享保十七年の「被錦」に「大阪路通」として出てゐて、當時までは存命した事が知られ、且つ晚年大阪にゐたことだけは確かである。【俳系】芭蕉門【閱歷】芭蕉に師事する迄の事は、路通の「勸進文」その他によつて僅かに知られるのであるが、路通傳書の跋に、「予自童之時志和歌加茂之今源上人爲師」とある由であり、元祿元年の芭蕉庵十三夜の月見の素堂の序（笈日記・曠野集）に、「越の人あり、つくしの僧あり」とある越の人は越人（別項）で、つくしの僧は路通と考へられるので、路通は筑紫の出身と考へられる。どんな事情でか剃髮して延寳七年の頃から乞食をして歩いたのであるが（勸進文・芭蕉書簡）、その間も風雅に魂が動いたと云つて居り、素養も相當にあり、姓もある身分であるから、筋目ある家の出自と想像される。かくて芭蕉の行脚中（貞享元・二年「野ざらし紀行」の時と考へられる）に假初の緣を結び、元祿元年の春江戶に尋ね來り、情ある者が長屋を借りてくれたので、こゝに翌年春まで留まつたのであるが、その間に「笈の小文」（別項）の旅で留守中であつた芭蕉が、元祿元年八月江戶に歸つたので、對顏の願が叶つたのである。その翌月素堂亭で觀菊の俳筵が催され、これに路通が芭蕉等と共に一座してゐるのが路通の名の見える初めで、同月の芭蕉庵十三夜の月見の會にも、前述の如く一座してゐるのである。翌年芭蕉が「奧の細道」（別項）の行脚に出た時、路通も店を返して行脚に出で、芭蕉の行脚の果てを敦賀に迎へたのであるが、翌三年芭蕉の行脚の跡を踏むべく東北行脚に出で、同年霜月俳諧の勸進を弘めよとの觀音の靈夢を蒙つて俳諧勸進を始め、かくして成つたのが「俳諧勸進牒」（別項）である。然るにこの頃からその行跡によつて同門の人々から憎まれ（勸進牒）、名古屋の越人・野水などは、元祿四年路通を芭蕉に惡し樣に云ひ（闇かけの返事、可參考）、のみならず

路通は後述するやうな芭蕉の感情を損する事をもしたので、自然芭蕉に近づき得なくなつたのである。許六は「歴代滑稽傳」に路通その他を勘當の門人と云つてゐるが、實は勘當ではなく、勘當を云ひ觸らしたのは多分支考で、許六はそれを信じたものと考へられる。芭蕉に近づき得なくなつたのは路通が芭蕉の書き捨てたものを盗用して、元祿四年以來蕉門の附句十七體の教といふものを各地で傳授した事と（[illegible]）、元祿五年頃宗門の罪たる還俗をした事とである。特に一時後指をさす身分にもなつたのである（芭蕉書簡）。然るに芭蕉は、曲水への度々の書簡で見ると、早くから路通の世話を芭蕉の信ずる曲水に託してその非を戒めさせようとしたやうで、而も芭蕉は不通はしないと云つてゐるのである。かくて路通は元祿五年頃から芭蕉に近づき得なくなり、俳壇とも縁の薄いものになつたが、同年から翌六年まで筑紫を行脚してゐたことが知られる。然るに翌七年芭蕉の最後の旅の時、三井寺定光坊の實永阿闍梨の取成しで芭蕉に詫を入れて罪を許され、芭蕉は遺言の序でに門人に對して路通の罪を許す事と必ず親しくせよとの事を云つた（芭蕉翁行狀記）。路通はかくて一七日の法事にも參り合ひ、追善集をも編んだのであるが、芭蕉の生前か歿後かに俳に復歸もしたので、元祿七年冬三井寺で書いた「芭蕉翁行狀記」の末には、小沙彌と記してゐる。翌八年越中で書いた[illegible]八景の文末に、「三井山下俳諧勸進路通」と自署してゐるやうに（俳人異談全集）、この後も俳諧勸進を名乘つて各地を行脚し、再び奧州へ下つて北陸へ廻つたりし、相變らず一所不住の生活を續けてゐたのであるが、芭蕉歿後は過失に懲りて性癖も矯正されたらしく、各地で勸進子路通として歡迎され、厚遇されたやうである。この間に於て注意すべき事は、許六が「本朝文選」を出した時、路通がその路通傳に對して怒つて絶板せしめた事實である（鵜の早太）。この外特段な事實はなく、晩年は大阪にゐたと云ふ事の外は多く知られない。逸話的事實は種々傳へられるが、遽かに信じ難い。【著作】俳諧勸進牒（月山發句合）（別項）（元祿四年刊）○芭蕉翁行狀記（芭蕉追善集）（別項）（元祿八年刊）○彼岸の月雪丸共撰（元祿十二年刊）○桃紙集（元祿九年刊）○蕉門名家句集（路通の部）。【人物・作風】許六は元祿十一年に「路通一生の行跡の事は、予少しも心にかけず」といひ、「俳諧も風雅なり、行跡も風雅なり。一ツとしてとる所なし」（俳諧問答）といひ、寶永に至つてなほ「其性不實輕薄」（風俗文選作者列傳）と云つてゐるが、行跡について云ふ所は路通の元來の性癖として認め得る事のやうであり、又事實がこれを證してゐる。併しこの性癖は乞食といふ境遇に馴染してのものらしく、本來の性情は矯め難い程のものではなかつたらしい。元祿十五年の「花見車」には、「陸奧路通」として、「いまは心もなおりまして、なこそといふ人もなし」とあつて、この方が當時の實際であらうと思はれ、許六の方は早期の事を後にもなほ云つてゐるものと思はれる。なほ同書に、「松尾屋にても二三番ぎりの太夫なれども」とあつて、これは芭蕉生前頃には作者としてこれ程の地位に置かれ、又芭蕉生前の作には、その境涯の放浪性の能く表はれた獨自の特色があつて、それが價値以上にも買はれたものと思はれる。芭蕉が「この句細みあり」（花實集）と許したといふ「鳥どもも寢入て居るか余吾の海」（猿蓑）の句の如きは、路通の境涯の放浪性が細みの形を取つて表はれたものである。然るに芭蕉歿後は各地で厚遇されて放浪性が出なくなつたのと、素質や時代の關係にもよつて、作調がいよ〳〵平凡化し、特色のないものになつた。一體路通の作風は、元來が平明な傾向のもので深みがなく、それが特殊な放浪性の表はれるために歎稱を呼んだ迄で、特殊性が出なくなると、價値のないものになるのは當然である。要するに路通は或る時期に特殊な閃光を見せただけの作家で、後人がそれを全體的なものの如く解して高く評價し過ぎてゐた作家であると云へる。【參考】返店文路通（本朝文選）○花見車高島軫士○風俗文選（作者列傳）○俳諧問答森川許六○諸國里人談菊岡沾涼○蕉門頭陀物語建部涼袋○說叢大全湖口紫丸○誹諧世說高桑闌更○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳人百家撰水谷川錦○路通の研究鈴木重雅（國語と國文學昭和三ノ九・一一）○俳人眞蹟全集（元祿時代下）勝峰晋風○路通の幼時殿田良作（ひむろ昭和六ノ三）○路通は八十村氏でよい勝峰晋風（黄燈昭和六ノ九）（赤田）

路通筆蹟（松宇文庫藏）

六歌仙 ろくかせん 「歌仙」を見よ。

六歌仙 ろくかせん 所作事【解說】和歌の六歌仙（歌仙參照）を當世風の洒落者にして舞踊化したものであるが、この趣向は佐渡島長五郎の家に傳はる「七小町」の所作事から暗示を得たといはれてゐる。この所作を演じたのでは明和七年十二月大阪中の芝居二の替り狂言「桑名屋徳藏入船物語」大切「面影六歌仙」が古く、中村粂太郎が、最初白拍子の男舞姿で出て、六役を演じて大當りであつた。次いで寛政元年十一月大阪中の芝居の「けいせい稚見淵」大切に、初代嵐雛助が演じた「化粧六歌仙」が後の「六歌仙」所作事の基準となり、これを改訂したのが二代中村芝翫（四代歌右衛門）所演の「六歌仙容彩」（後出）で、現行の原作をなし、更にこれが波及して種々の六歌仙物が生れた。【六歌仙容彩】【初演】天保二年三月二十五日初日、江戸中村座「[illegible]白浪」第二番目大切【作詞】松本幸二【曲節】大薩摩節・清元節・長唄【作曲】大薩摩節と長唄は、十代杵屋六左衛門・清元節は初代清元齋兵衛【振附】四代西川扇藏・二代藤間勘十郎・中村勝五郎【傳來】何れも、曲・振ともに傳存してゐるが、最後の「黑主」だけは、曲だけが殘つて、振は廢滅し、今日上演の場合は、曲・振とも新作されるのが例である。【題材】「化粧六歌仙」（寛政十二年四月江戸市村座、二代嵐雛助所演）を改訂して舞踊本位としたもの。【內容】小野の小町（二代岩井粂三郎）が一室に籠つて詠歌の所へ、僧正遍照（二代中村芝翫）が來つて思ひを語り、局達に妨げられて歸る。次に文屋康秀（二役芝翫）は御所の渡殿で官女達を相手に砕けた戀物語りの振あつて、のち香頭風の手踊りになる。次に在原業平（三役芝翫）は、十二單衣姿の小町と共に現はれ、小町を挑む振あつて、のち扇づくしの雲上な踊となり、小町は斥けて入り、業平は悄然と歸る。次に喜撰法師（四役芝翫）は祇園の櫻の下に、茶汲女（岩井粂三郎）を捕へて、可笑味の交る戀慕の振から、チョボクレの賑かな踊になり、迎ひに來た同宿と共に住吉踊を踊り、後、同宿を捨てて歸る。最後に大伴黑主（五役芝翫）は小町に、「まかなくに」の歌は古歌なりといひかけ、小町は草紙を洗つてその寃を雪ぎ、且つ黑主の陰謀を見露はすので、黑主は取卷く仕丁を相手に立廻る―凡て五景に分れ、各々獨立した五變化とも見られる。【備考】舞踊の地は、遍照が大薩摩節であつたが、今日では義太夫を使ふのが通例である。尤も初演の大薩摩節は、長唄として曲は傳存してゐる。康秀は清元節、業平が長唄、喜撰が清元節と長唄との掛合、黑主は長唄である。なほ時によつては、文屋及び喜撰の清元節を常磐津節、又は富本節で代用した例もある。【譜本】日本歌謠集成・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。【參考】近世演劇考說黒木勘藏○舞踊愛好者の手帳町田博三（六歌仙）（新演藝五ノ四）○歌舞伎圖說○清元研究 [illegible]（秋葉）



化粧六歌仙（寛政十二年）

六句歌體辨 ろくくかたいべん 歌論書 寫一冊【著者】野々口隆正【成立】安政四年九月、隆正が草鹿砥宣隆を訪れて、その著「旋頭歌四體」を讀み、それに暗示をうけて自己の見解を述べたもの。【諸本】竹柏園藏の寫本がある。【解說】本書は、歌體の中で六句體のものをすべて集めて、旋頭歌體・混本歌體・佛足石歌體・六句小長歌體等に分け、その性質の異同を明かにしてゐる。彼によれば混本歌體といふのは六句の歌で、五句の短歌體に一句を混へたものとし、これにもその一句の位置の相違により、初句混本・末句混本・腰句混本と分けてゐる。次に旋頭歌體は、五七七・五七七の形式であるが、これにも內容の表現の相違から旋頭復言・旋頭三句禁止・旋頭三句乞頭・旋頭三句發頭・旋頭本末體に分けてゐる。又小長歌體といふのは五七・五七・五七の形式をさすのであつて、五七連續の偶數體のうち、三回反復されてゐるのを指してゐる。佛足石歌體は、五七五七七・七の形式をさすのである。【價値】本書の價値は、六句形式を弘く集めて、それを類別吟味した所にある。混本歌體と旋頭歌體とを共に六句として、その間に異同を認めたのは一の着眼點ではあるが、なほ容易に從ひがたい。ともあれ六句體の形式の可能の場合を集めて、更に細く分析したのは明快である。近世歌格研究書の中で創見に富んだものとして注意される。（久松）【參考】日本歌學史佐佐木信綱

六百番歌合 ろつぴやくばんうたあはせ 歌合【名稱】建久四年に、藤原良經の家に行はれた歌合で、「左大將家百首歌合」と呼ばれ、合せて六百番ある故に、この名がある。【諸本】承應元年京都村上平樂寺開板本十冊、その他、「群書類從」などに收む。【內容】作者は、左方、後京極良經・藤原季經・同兼宗・同有家・同定家・阿闍梨顯昭。右方、藤原家房・同經家・同隆信・同家隆・源信定（大僧正慈圓）・沙彌寂蓮等の十二人で、各人百題百首（春十五首、夏十首、秋十五首、冬十首、戀五十首）を詠じ、判者は藤原俊成である。判詞に特色がある。即ち左右の歌を番へた次に右方・左方から、それ〳〵相手の歌に對する批評を述べた言葉が記され、次に判者俊成の詞が示されてゐる。作品中、「新古今集」に入れるもの數多あり、卷尾には次の二首の歌を記してある。

すみよしの松はあはれもかけやせむやそぢ過ぎぬるわかのうらなみ　判者（俊成）
和歌のうらのしるべとなれる老の教けにすみよしの松もしるらむ　女房（良經）

以て當時の歌壇に於ける俊成の地位を想見することが出來よう。この俊成の判に對し、作者の一人なる阿闍梨顯昭は、「六百番陳狀」（別項）一卷を草して、彼の歌論の立場より論難した。また「[illegible]」に、顯昭が「歌はやすきものなりけるよ、寂蓮程無才學なれども歌をよくよむ」と云つたのに對して、寂蓮は、「あれほどの大才なれども、歌は下手なりけり」と嘲答した由を傳へ、また兩者歌論となれば、寂蓮は鎌首を立て、顯昭は獨鈷を持つて爭うたとも傳へられてゐるが、これ等の形勢も六百番歌合、春第二十二番の「かびや」の條などに、よく窺はれる。【價値】鎌倉初期歌合の盛んなる間にあつて、「千五百番歌合」に次ぐ大規模のものであり、殊に判記「陳狀」を中心として、當時の歌壇の動きを如實に示す貴重なる資料であると思ふ。【備考】「六百番作例」寫一卷、靈元天皇御撰、「六百番歌合」により歌詞に就いて注意すべき諸點を錄したまゝのものである。（松浦）

六百番陳狀 ろつぴやくばんちんじやう 歌論書 一卷【著者】顯昭【別名】顯昭陳狀（けんしやうちんじやう）【諸本】（一）圖書寮藏寫本一卷。「六百番陳狀」と題す。四季の部及び戀部十のうち戀一より五までを缺くが、この部は脫落したものか、初めよりなかつたものか明かでない。奧に顯昭の自跋があり、なほ次の如き奧書を記し、その後に書中所引歌の數を舉げてある。「建久九年戊午林鐘三五之候以顯昭闍梨眞筆書畢　正應三年十二月三日於新宮禪房爲小童等書寫了　權大僧都」「正安四年六月二十三日於關東若宮別當坊令書寫了」。（二）群書類從二二七所收本は「顯昭陳狀」と題し、宮[illegible]一淸藏本を、橫田茂語本を以て校合したもので、奧書に「右借請參議藤原元長筆跡本于時永正五年九月上旬之比令書寫之訖城南男山隱士宗勝在判」とあるが、冬部下までしかない。右兩書ともまゝ脫文があり、四季部のみについて見れば類從本の方によい所もあり、兩者相補つて讀むべきである。【解說】建久四年秋、左大將藤原良經家に行はれた六百番の雜陳歌合に作者の一人として參加した顯昭が、判者藤原俊成の下した判詞に對して異議を陳述したものである。圖書寮本につき見るに、自歌百首中三十五首と他に信定歌一

首につき判者の說を駁してゐる。所論中最も注意すべきは、(一)着想用語は自由なるべく先例を墨守すべからず。(二)風情を第一として事實に拘泥すべからず。(三)取材を廣く求めて新境地を開くべし等の主張である。【價値】顯昭が該博な學殖を以て故事・舊例を縱横に引用して論を立て、理路整然として辨鋒の鋭き點に彼の頭腦の明敏なりしを知ることが出來る。そが菊、椎のこやて、あまのまくかた、河社等に關する考證的論辯は、論敵の膽を寒からしむるものがあり、寄眞戀に敵方隆信朝臣の三方野の歌の攻撃等に於ける論理の冴えは恐しい程である。但し俊成の判詞にも、いくらか偏したところ、强ひて異を立てようとしたところ、用意の周到でないところが見えるにしても、顯昭の辯駁にも亦强辯附會の傾きがないでもない。穩健典雅を尙ぶ俊成の立場と自由新奇を唱ふる顯昭の立場とは到底兩立し難いのであつて、二條派對六條派の論爭の最も尖鋭化した一面を、この歌合及び陳狀に見ることが出來、歌論史上逸すべからざる資料である。

【參考】和歌史の研究 佐佐木信綱　（中島）

六法（ろつぽふ）　畫論【解說】東洋畫の描法、(一)氣韻生動、(二)骨法用筆、(三)應物象形、(四)隨類賦彩、(五)經營位置、(六)傳移摸寫の六をいふ。この六法を初めて唱へたのは支那六朝時代南齊の謝赫である。謝赫はこの六法をその著「古畫品錄」の中に述べてゐるが、彼の創倡以後、支那並に日本の論畫家、多くはこれを論じて作品の高下を評價するに至つた。この六法の意義に關しては時代に依り論者に依つて多少の相異もあるが、試みにその大略を舉げれば、氣韻生動は精神表現の意、骨法用筆は筆法の意、應物象形は寫實の意、隨類賦彩は彩色法の意、經營位置は構圖の意、傳移摸寫は古法傳習の意と見て宜しからう。この六法のうち、古來、繪畫の製作に際し、最も重要な骨子とされてゐるのは氣韻生動である。これに就いては所論頗る多いが、唐以前まではこれを以て畫かるゝ對象物の精神を畫面に表現する意味としてゐたらしい。然るに唐以後、殊に宋朝以來は專ら畫家自身の精神を畫面に發露せしむる意味に變化せしむるに至つた。即ち氣韻生動は客觀的の意味より主觀的の意味に轉じたのであつて、これがまた東洋畫の發達系路を貫く著しき主觀主義的傾向の一徴證ともなるであらう。骨法用筆以下は氣韻生動に次いで必要な製作上の心得であるが、その重要さの程度は蓋し順を追うて低下するものと見られる。　（田中（一））

六法（ろつぽふ）　演劇【名義】室町末期に見える「らつぱふ」の轉と見る說が正しからう。歌舞伎特有の、花道に於ける揚幕へ入る迄の引つ込み方をいふ。【種類】方法に多少の相違があり、役者によつて手法の工夫もある。特殊な類を舉げると、(一)飛び六法。「車引の梅王」「勸進帳の辨慶」「和藤內の樓門」の引つ込みの片手六法、その後の「紅流し」の橋の六法の四種である。梅王の場合は、身體を丸くして、兩手を刀にかけ、足を互ひちがひに片足づつあげて、飛ぶやうに花道を入る。辨慶の場合は片手に杖を持ち、一方の手のみあげて、同じく足を互ひちがひにあげて、飛ぶやうに入る。和藤內の「樓門」の時も、片手は刀にかけた儘である。これは渾身に力をこめぬとやれぬ六法で、揚幕へ飛び込む時、後見がその肩を突き戻さぬと、揚幕の羽目板を突き破る位の逸話がある。(二)なんばん六法。普通の六法の逆の順に手と足を出す。「だんまり」の所謂「菊畑」の時に使ふ。(三)狐六法。「鳥居前の忠信」などに使ふところの、狐の氣分を兼ねて現はす。(四)たこ手、或はくも手。「矢口渡」の頓兵衞の引つ込みのやうに、ツケを入れ、なりつぱの刀を使ひ、極めて賑かに人形風にやる。(五)傾城六法。「宮島だんまり」に使ふ。傾城姿で花道を入るので、この六法に限つて、足のみ傾城の心で、八文字をふんで入り、上半身は男の心で、普通の六法の手の動かし方をやる。極めて珍しいもの。大正二年三月東京座で名女形故市川門之助がこれを本格に演じた。外に名優苦心の創案に成る六法がある。　（三宅）

魯敏孫漂流記（ろびんそんへうりうき）　飜譯小說【譯者】井上勤【原作】英國小說家ダニエル・デフォーの「ロビンソン・クルーソー」【刊行】恐らく無刊記。明治十六年末か、十七年初。【解說】內容は正確な逐字譯であり、井上氏譯書中の傑作であらう。本書の外に明治初期には「ロビンソン」の譯が數種出てゐる。併し古い譯としては安政四年刊、横山由清「魯敏孫漂行紀略」がある。それより古い譯では、嘉永の初年頃出た「漂流記事」の第一卷がロビンソンの記事である。明治に入つては同五年齋藤了庵の「魯敏孫全傳」（前記「漂流記事」の第一卷と同じものといふ）があり、更に同二十年に牛山氏の「魯敏孫漂流記」が出てゐる。　（藤田（德））

ロマネスク　美術（佛）Romanesque. Styleroman.【解說】西紀八〇〇年神聖ローマ法王が帝位について以來、法王の權力增大し、敎會建築は壯大になつたが、この時期に現はれた建築の樣式をロマネスクといふのであるが、一定の確乎たる樣式があるわけでない。即ちギリシヤ、ローマの所謂古典の樣式と、ゴシック（別項）樣式との中間過渡の樣式で、大體、九世紀から十二世紀頃までのものである。元來ローマ風の建築といふ意味である。樣式上の特色とも云ふべきは、(一)外部が比較的素朴であるに對して內部は極めて崇嚴豪華であること。(二)アーチが半圓形をなし、ドーム（丸天井）は半圓筒の空洞であること。(三)丸天井迫持の窓は、建物の外部に並列されてゐること。(四)丸天井を支へる柱及び壁が極めて厚く强大であること。(五)從つて窓の數が比較的少いこと。代表的な建築として、イタリーのタスカニーのピサの大寺（西紀一〇六二―一〇九二）（鐘塔は一一一七年完成）、マインツのヴォルムスの本寺がある。ロマネスク繪畫と呼ばれるものは、大體に於て寺院の裝飾畫、寫本の挿畫、細密畫に見出されるものにすぎない。ビザンチン風の繪畫の延長ともいふべきもので、今に殘されたものは少いが、フランスのサン・サヴァン本寺の壁畫は舊約聖書の創生記物語が約三十の構圖を以て畫かれてゐる。ビザンチン風であるが、奔放な手法の中に生々とした北方民族特有な宗教的感情がうかがはれ、自然模寫の傾向はない。なほ繪畫的手法による當時の玻璃繪の遺品は、シャトル本寺、サン・ドリ本寺にある。

【參考】Michel : *Histoire de l'art. Tom I.*　（村田）

ロマンス語　「インド・ヨーロッパ語族」を見よ。

論語（ろんご）　經書　二十卷【編者】「漢書」藝文志には、編者の名を舉げず、「經典釋文」には鄭玄の說を引いて、「仲弓、子夏等の撰定」と云ひ、邢昺の「正義」にも亦鄭玄の說を引いて、「仲弓、子游、子夏等の撰定」とあるが、確乎たる憑據はない。朱子の「集註」には程子の說を舉げて、「有子曾子の門人に成る。故に二子のみ子を以て稱す」とあるが、未だ妥當でない。荻生徂徠は、「上論は琴張、下論は原思に成る。故に二子のみ名を稱す」（論語徵甲）と云つたが、亦臆說に過ぎぬ。要するに皇侃が「孔子の沒後、七十弟子の共に撰錄せる所」（論語義疏）と云つたのが大體の妥當であり、又必ずしも一時に成つたものではない。【別名】「尺度權衡」「圓珠經」「輪轄」「六藝喉衿」【名義】「漢書」藝文志に、「論語は孔子が弟子時人に應答し、及び弟子相與に言ひて、夫子に接聞せるの語なり。當時弟子各々記する所ありしが、夫子既に卒して、門人相與に輯めて論纂す。故に之を論語と謂ふ」と云ふ。「孟子」「荀子」（各別項）等に、論語の句を引用したものも少くないが、未だ嘗て「論語」と云はず、「史記」に至つて初めてその名稱が見えてゐるので、編者の命じたものではないらしい。王充が、漢初には單に論と云つて語の字を添へず、孔安國に至つて、初めて論語と名づけたと云ふのも、亦この間の事情を指摘したものであらう。【成立】戰國時代【傳來】漢に入つて魯論・齊論・古論の三種の異本を生じた。魯論は魯人の傳へたもので、二十篇あり。「經典釋文」には、「即ち今行はるゝ篇次なり」と云ふ。龔奮・夏侯勝・韋賢、及び子玄成・夏侯建・蕭望之等が傳へた（經典釋文、下同）。齊論は齊人の傳へたもの、魯論よりも問王・知道の二篇が多く、凡て二十二篇、且つその二十篇中も章句が頗る魯論より多かつた。王吉・宋畸・貢禹・庸生等がこれを傳へた。古論は武帝の時、孔子の舊宅の壁中から得たもの、その字體が蝌蚪の古文であつたのでこれを古論と云ふ。魯論の堯曰篇の「子張問」以下を割いて子張篇（經典釋文及び邢昺の正義には如淳の言を引いて從政篇と云ふ）と名づけ、前後兩子張篇があり、凡て二十一篇。而して文字の異るもの四百餘字（桓譚新論）と云ふ。孔安國・馬融等が傳へた。漢末安昌侯張禹は、魯論を夏侯建に受け、後齊論を王吉・庸生に學び、その善者に從つて定本を作つた。これを「張侯論」と云ふ、後漢の包咸及び周氏の「章句」はこれに由つた。而して鄭玄は更に「張侯論」及び包・周の「章句」に據り、これを齊・古二論に考へて註を作り、玆に於て三論が合せられた。その後陳群・王肅・周生烈等が義說を爲つたが、魏の何晏に至つて、孔安國・包咸・周氏・馬融・鄭玄・陳群・王肅・周生烈等諸家の說を參酌して「論語集解」を著はした。今の註疏本は即ちこれで、張侯論とも鄭玄本とも異る。又梁の皇侃は「論語義疏」十卷を作つて「集解」と並び行はれ、宋の眞宗の時、邢昺が「義疏」を校定して「論語正義」を作つて以來、一時亡佚したが、我が寬延三年根本伯修が、足利學校藏本を校刊して後、再び世に流布し、四庫にも著錄せられ、又鮑廷博によつて飜刻せられた。南北朝時代は亂離の世にも拘らず、「論語」は頗る流行し、殊にこれを百濟に傳へたのはこの際で、「論語」の發展史上注意すべき時期である。唐代に及んで論語は初學必讀の書とせられたが、佛老尊崇の風潮は、動もすれば經書を輕んじ、從つて「論語」の註釋書も前代に比して少かつた。然るに宋代文運の復興と共に、「論語」の研究も勃興し、就中後世に至大の影響を與へたのは、朱子の「論語集註」である。而して「大學」「孟子」「中庸」（各別項）と合せて四書と名づけてこれを崇敬し、又政治の實際に應用する者もある等、思想界を支配した「論語」の力は、極めて大なるものがある。

【外國への流傳】東洋に於ては先づ朝鮮に傳はつたが、高麗時代にはその研究も振はず、李朝に至つて科擧に四書を用ひたので、その書の飜刻・註釋も往々あるが、その學風は朱子一派を出ない。安南に於ても亦科試に四書を用ひたが、解釋評論の書は多くない。その歐米諸國に傳はつたのは、極めて近世の事に屬し、明末淸初に宣教師に依つて傳へられたのに初まるが、近時漸くその譯述も盛んとなり、歐米の飜譯に、英・米・佛・獨・露・伊・瑞・蘭・諾・羅等の諸國語を數へる。

【我が國に於ける傳來】應神天皇の十六年に、百濟の王仁が「千字文」一卷と共に「論語」十卷を獻納したのを初めとする（古事記・日本書紀）。それは、或は鄭玄の註本と云ひ、或は何晏の集解本とも云ひ、判然し難いが、十卷とあれば、恐らく附註本であらう。この「論語」貢獻の一事は、我が國に於ける漢學の傳來及び考究の濫觴で、我が思想界に一新時期を劃したものと言ひ得る。早く聖德太子の憲法十七條には、「論語」に基づかせられたものが多く、大寶令の學令には、學生の一經若しくは二經を修める者も、「孝經」「論語」は必ず兼ねることとし、「論語」は鄭玄・何晏注を用ひ、考課令には、「論語」「孝經」に全く通ぜざるものは不第と規定した（令義解）。「日本國見在書目」には、論語十卷鄭玄注、論語十卷（何晏集解）、論語六卷（陸善經註）、論語義疏十卷（皇侃撰）、論語十卷（褚仲都撰）、論語六卷等の名が見える。降つて「花園院御記」の後醍醐天皇の元亨三年の條に、當時の朝臣に、四書に依つて義を立てる者が多く、近時理學を先とする傾向があると云へば、朱子の新註の傳來は、これより程遠からぬ前のことであらう（或は正安元年、元の歸化僧寧一山が齎したとも云ふ）。爾來主として新註が行はれ、江戶時代には、文之點・道春點・後藤點等の諸家の訓點本が行はれた。その初期に藤原肅（惺窩）・林信勝（羅山）の徒が宋學を主として唯を乘れ、降つて天明年間宋學以外のものを異學と稱し、これを禁じて以來、益々世に行はれたが、別に伊藤維楨（仁齋）は古學を唱へ、荻生雙松（徂徠）は古文辭の學を主張し、その學風を紹述するものも少くなかつた。

【諸本】漢の靈帝の時、蔡邕に書かせて大學門外に建てた熹平石經は、今僅かに爲政篇七十餘字と堯曰篇三十餘字とを傳へるのみであるが、唐の文宗の開成二年の石經は、今なほ長安の碑林中に存する。鄭玄注の「論語」の中、下論は亡佚して傳はらぬが、佛人ペリオの燉煌石室から發見した龍紀二年（唐の昭宗の大順元年）の識語のある、述而篇の中から鄕黨篇の終りに至るまでの鈔本（現に巴里國民圖書館藏、羅振玉影印）及び大谷光瑞氏が新疆吐峪溝から將來した子路篇の尾と憲問篇の首との唐（？）鈔本等は注意すべきものである。完本としては、何晏の集解本、何晏注、皇侃義疏の義疏本、何晏注、邢昺疏の正義本、朱子の集註本の四があるが、正義本の經文は義疏本と少しく異り、集註本の經文は正義本と同じである。

【內容】現在の「論語」は、

（學而○爲政○八佾○里仁○公冶長○雍也○述而○泰伯○子罕○鄕黨○先進○顏淵○子路○憲問○衞靈公○季氏○陽貨○微子○子張○堯曰）

の二十篇で、その內容は、孔子の個人の人格修養並びに國家、社會的倫理に關する敎訓、政治論、或は時弊民救策、古人及び時人の評論、自述の語、日常の行事、或は門人の孔子觀等、多方面に亙つてゐるが、要するに天命を自覺しつゝ、不斷に道を追求し、その實現に努力した孔子の生涯の記錄であつて、既に根述・伊藤維楨・荻生雙松等の論じた如く、その中には孔子の言として解し難いものもあり、又斷片的な記錄ではあるが、これを通じて可なり明瞭に孔子の人格及び思想を察知することが出來る。【註釋書】前述以外の主なものを擧げる。論語鄭注十卷（後漢鄭玄）、（[illegible]）○論語集註補正述疏十卷（簡朝亮）○論語正義二十四卷（淸劉寶楠）○論語探案二十卷（淸黄式三）○論語古義十卷（伊藤維楨）○論語徵十卷（荻生雙松）○論語古訓十卷（太宰純）○論語古訓外傳二十卷（同上）○論語大疏二十卷（太田元貞）。（四書彙書）　〔宇野・本多〕

【參考】孔子及孔子敎（服部宇之吉）○東洋倫理綱要（同上）○孔子研究（蟹江義丸）○支那倫理思想史（鬼島榮一郎）○儒學史上卷（宇野哲人）○論語について（服部宇之吉（斯文XI・1））○論語研究の方法に就いて（狩野直喜（支那學文藪））○梁皇侃論語義疏に就いて（武內義雄（支那學III・2・3・4））

倫敦塔（ろんどんたふ）　短篇物語【作者】夏目漱石【發表】明治三十八年一月、雜誌「帝國文學」所載。【刊行】後他の六篇と共に「漾虛集」（別項）の中に收む。漱石全集第二卷所收。【內容】作者がロンドン滯在中に見物した Tower of London の印象を骨子として組立てられた浪漫的な小品で、寫實的な敍述と空想的な描寫とが巧みに交錯して、作者と共に塔橋の上から塔を眺めたり、テムズを見下したりしてゐた讀者は、いつしか血塔（Bloody Tower）の一室で、二人の子供に逢ひに來て會はされぬ母后エリザベスの傷ましい姿を見たり、ボーシャン塔（Beauchamp Tower）の地下室で斧を研いでゐる二人の首斬人の唄を聞いたりする。其處に子供をつれて見物に來てゐる一人の怪しげな婦人と、五羽の鴉が配されて奇怪の調子を助けてゐる。下宿に歸つて亭主の話を聞くまで、塔の夢はつゞく。【批評】これは「吾輩は猫である」（別項）と同時に發表されたものであるが、「猫」の散文的なのに較べて甚だしく韻文的であり、後の「幻影の盾」（別項）や「薤露行」等の浪漫的作品の先驅をなすもので、「猫」と共に當時作者の文名を高からしめた小品である。　〔野上〕

わ

和庵（わあん）　心學者【姓名】手島建【生歿】延享四年二月十五日京都に生れ、寛政三年（二四五一）十月二十四日歿す。享年四十五。【閱歷】和庵は堵庵（別項）の長子、上河淇水（別項）の實兄である。幼時より家庭に於て薫陶を受け、長ずるに及んで、好學の念が益々熾んであつた。父の歿後、その遺業を繼承して、心學布敎のために盡すところが多かつた。その室は周防氏、蘭女といひ、夫を扶けてまた斯道のために盡力した。【著述】和庵遺稿二卷（上河淇水編）。

【參考】石門心學の研究（白石正邦）　〔森〕

和韻（わゐん）　漢詩【名義】他人の作つた詩に對して、その詩と同じ韻（別項）を用ひてこれに和して作ることをいふ。【性質】和韻にはその種類が種々ある。「詩體明辨」には、これを分類して依韻・次韻・用韻の三體としてゐる。（一）依韻とは、同一の韻目の中に在る文字を用ひ、その文字が必ずしも原詩の韻と同一の文字を用ひないものをいふ。例へば原詩の韻字が中・通・風といふやうな文字を用ひてゐるときには、中・通・風は上平一東（韻參照）の韻であるから、一東の韻の中に在りさへすれば、工・豐・楓などの文字を以て韻を押して和するものである。（二）次韻とは、その原詩の韻に和して、原詩に用ひてある韻字を前後次第も皆これに因るものをいふ。例へば、原詩に中・通・風の字を以て韻を押してあれば、原詩に用ひられてゐる次第順序で中・通・風を韻字に用ひ、決して通・中・風、又は風・中・通などの順序に改めないものである。（三）用韻とは、原詩の韻字を用ひて、その先後は必ずしも原詩の順序に從はぬものをいふ。例へば原詩に、中・通・風の字を順次に韻に押してあれば、その順序は改めても、中・通・風の文字を以て韻を押しさへすればよいのである。なほこの外に、追和と稱する一種の和韻があるが、これは古人の詩の韻に追和するものをいふのである。

【沿革】唱和聯句の起原は、非常に遠い古代に萌してゐる。蓋し舜が歌を作つて、皐陶が颺言賡載したのに始まつてゐる。けれども古来ただ和詩といふものはあつたが、和韻はなかつた。即ちその來意に答へるといふだけで、別に韻字のために束縛されるといふことはなかつた。それが唐代に至つて和韻が行はれ、特に白樂天に至つて次韻が行はれるやうになつた。和韻・次韻の起原、これも必ずしも唐に在つたといふことは出來ない。梁武が王筠と同じく太子懺悔の詩に和するの作及び魏の王肅が妻の詩を、繼室がその韻に次いだ作を見ても分る。かくの如く久しく古からあつたので、それが元稹・白樂天に至つて特に盛んになつたといふに過ぎない。又我が國に於ては、林道春の「本朝一人一首」に大津首の藤原大政の吉野川に遊ぶ詩の韻に和したものがある。これは、元稹・白樂天等の唱和よりも以前のことである。宋の蘇東坡に至つて追和が始まつた。古の詩人には擬古の詩はあつたが、追和はなかつた。李白の潯陽紫極宮感秋の詩に、「何處聞㆓秋聲㆒、翛々此窗竹、回薄萬古心、攬㆑之不㆑盈㆑掬」といふ詩があるが、東坡はこれに追和して、「寄臥虛寂堂、月明浸㆓疎竹㆒、冷然洗㆓我心㆒、欲㆑飮不㆑可㆑掬」といふ詩を作つた。

【參考】詩律初學鈔（梅室雲洞）○初學詩法（貝原篤信）○斥非（太宰純）○詩轍（三浦安貞）○夜航詩話（津阪孝綽）○詩格集成（長山貫）　〔西澤〕

和音（わおん）「字音」を見よ。

和歌（わか）　詩歌の一種【名義】和歌とは、もと和ふる歌といふ意味であるが、後には日本の歌といふ意味になつた。【異稱】日本の歌といふ意味にとつた和歌と同性質の意味を表はす語は多い。歌・うた・やまとうた・國歌（異なる意味にとる場合もある）、短歌も殆ど同意味に用ひられる場合がある。【性質】和歌は日本の歌の意味であるとしても、その性質は日本詩歌といふよりは限定されてゐる。即ち三十一音の短歌形式を主として、それ以前に起つた長歌・旋頭歌・片歌（各別項）等は含んでゐるが、短歌形式が勢力を占めて後に起つた連歌・俳諧・狂歌・川柳・新體詩（各別項）等は和歌の範圍から除いてゐる。故に一面からいふと近代的詩歌を除いた古典的詩歌の形態をさしてゐるとも言はれよう。これ等の主なる形態の性質を見ると、短歌は三十一音形式であつて更に五七五七七の五句に分れる。短歌形式の成立に對しては五七五七の四句に第五句の七音が加はつたと見る說と、五七七五七七の旋頭歌形式の第三句が脫して成つたと見る說と、長歌形式の終りの部分が獨立して成つた反歌から成立したと見る說とがある。而して短歌形式は、日本人の有する感情を表現するには最も適當した形態であつて、それが抒情詩的形態として最も長い生命を有する理由であらう。

【沿革】和歌の歷史は長い。がこれを普通の歷史的區分に從ひ、各時代に就いて概說する。

〔大和時代〕創始期から「萬葉集」（別項）の完成するまでであるが、これを前期と後期とに分つ。（前期）記・紀の歌謠（別項）を中心とする時代であつて詩歌が謠はれた時代であり、從つて記載文學としての和歌ではない。この期の歌謠の記載されてゐる文獻は、「古事記」「日本書紀」（各別項）を主なる材料として、常陸・播磨・丹後・肥前の各風土記、「古語拾遺」「萬葉集」「續日本紀」「上宮聖德法王帝說」（以上各別項）「皇太神宮儀式帳」「日本靈異記」（別項）「熱田大神宮緣起」「本朝月令」「聖德太子傳曆」（別項）「琴歌譜」（別項）等である。この時代の歌は謠はれた歌が主であり、傳誦的な性質を有する。從つてその內容から見ても單純な詠嘆から出發して、次に純粹抒情的・敍景的・敍事的に進んでゐるが、敍景的にしても纖細な自然の觀照には至つてゐない。これは謠はれた題材からいつても戀愛と戰爭の歌が主であるのと相俟つて、未だ自己本位であつて、自然の景象に注意するに至らなかつたのである。また形態の方面から見ると、五七音も一定せず、長歌形式も完成しないが、短長音の連續は見られ、また長形式の中から反歌の現はれる經過も見えてゐる。旋頭歌形式も僅少ながら見え、短歌形式は既に多く見られるのである。（後期）「萬葉集」を中心とする時代である。この時代に於て和歌に於ける抒情詩的性質が完成した。さうして「萬葉集」に於てはこの抒情詩的性質の展開を四期に分けられる。第一期は素樸時代であつて、記・紀の歌謠から接續する時代である。未だ專門的歌人も現はれず、東國の詩人や防人や無名歌人の歌の時代である。第二期は藤原朝時代であつて、人麿（別項）を中心に抒情詩として完成した。傳統的思想感情を完成した技巧を以て表現してゐる。長歌・短歌・旋頭歌といふ歌體も確立した。人麿の綜合的な傾向は抒情のみならず、敍景的・敍事的・思想的の各方面に、すぐれた作を殘したのである。第三期は奈良時代前期であつて、赤人・憶良・旅人（各別項）等を代表歌人とする。この時代は人麿のやうなすべての歌態と、すべての傾向とをよむ態度から、それ〳〵分裂して、一の傾向を沈潛せしめるとともに、新しい思想感情を盛るに至つた。即ち山邊赤人は自然を主としてうたひ、山上憶良は儒敎的思想、大伴旅人は老莊思想を根柢として人生をうたつた。さうして赤人と旅人とは短歌を主とし、憶良は長歌を主とするに至つた。第四期は爛熟期といふべく、第三期までに發展した歌が漸く行きつまつて來た時代である。家持（別項）の歌は、この傾向を代表するものである。抒情詩的性質はこゝに分裂するに至つたのである。

〔平安時代〕「古今集」から「千載集」（各別項）に至る時代である。「古今集」に於て、「萬葉」の素樸的傾向から反省的傾向となり、從つて直觀の率直な表現から、直觀を反省するやうな傾向が生じたのである。そこに自然の景象を見ても、これに解釋を加へようとする。「古今集」の三時期として讀人不知時代、六歌仙時代、貫之時代を擧げ得るが、時代の下るに從つて以上の傾向が甚しくなるのである。この「古今集」の傾向は、「後撰集」「拾遺集」（各別項）に於て、その歌風を繼承して次第に精彩を失つた。さうして「拾遺集」時代には、好忠（別項）の如きも現はれたが、時代の傾向は公任（別項）を中心とする保守的傾向であつた。然るに「後拾遺集」（別項）の時代に至つて、漸く新機運が表面に現はれてきた。藤原通俊（別項）が保守派として撰者になつたことに對して、新派の源經信（別項）が「難後拾遺」（別項）を著はして非難したことによつても知られる。さうして「金葉集」（別項）に至ると新傾向の源俊頼（別項）が撰者となつた所に新傾向が中心となつてきた事を感ずる。それは顯輔（別項）の撰した「詞花集」（別項）に於ても同樣である。この「金葉」「詞花」の兩集に於て見られるものは、詞の自由と客觀的景象をうたふこととである。そこに清新な感傷が存する。この刹那的な清新の美に、更に保守派の雅正な詞と、沈靜した情趣とを加へて調和的な境地を開いたのが、藤原俊成（別項）の「千載集」（別項）であつたのである。この「千載集」の基調が幽玄體であつた。

〔鎌倉・室町時代〕「新古今集」（別項）の成立以後勅撰集が中止され、東常緣や宗祇を經て細川幽齋（各別項）に至るまでをいふ。「新古今集」は藤原定家（別項）の理想とする有心體の歌が主となつてゐるが、併し「千載集」以來の幽玄體も、その中に加はつてゐるのである。定家・慈鎭（別項）の如きは有心體であるが、西行・俊成及び後鳥羽上皇（各別項）の御歌は、後者に屬する。定家は終始有心體に一貫したが、その子爲家（別項）に至り、平淡美を主とするに至つた。さうして爲家の子が二條・冷泉・京極（各別項）の三家に分裂するに至り、二條家の流れはこの平淡美を主張し、京極・冷泉兩家はこれに對して素樸美を重んじ、又その間に定家の有心美の特殊性としての妖艷美を尊重した。爲兼（別項）の「玉葉集」「風雅集」（各別項）、正徹（別項）の如きそれであつたのである。その間に種々の論爭も行はれ、二條派の平淡味の傾向は、却つて傳統的な「古今傳授」（別項）と結びついて勢力を得た。併し「新續古今集」（別項）に至つて勅撰集の撰定も中止され、和歌の勢力は連歌によつて壓せられるに至つた。さうして宗祇以後細川幽齋に至る流れは、この傳統的傾向を示すものであつたのである。

〔江戶時代〕この時代に於ては、因襲的に陷つた傳統的歌風も存したが、これに對する新しき傾向が、戶田茂睡・契沖・下河邊長流・荷田春滿（各別項）等によつて起された。しかしこれ等は、未だ歌風としては新古今風・古今風を無自覺に詠まれたに過ぎなかつたが、賀茂眞淵（別項）に至つて自覺的に萬葉歌風が詠まれた。この傾向は未だ「萬葉集」の形體を摸倣して自由な點が尠かつたが、田安宗武・伊能魚彥（各別項）等とともに、有力なる一派を成した。これに對して「新古今集」を重んずる派は、荷田在滿・本居宣長（各別項）に於て見られる。この派は歌の作品よりもその歌論的見解の方に注意すべきものがある。更に眞淵門人の村田春海や橘千蔭、京都派の小澤蘆庵・香川景樹（以上

各別項）によつて「古今集」を發揚する一派が見られる。ただ澄月・景樹はその見解は古今派といふよりも現代派に近いが、その歌風より見れば、春海や千蔭と同樣であり、優雅な調を主としてゐる。これ等の三派は何れも古典そのものを重んじてゐるのであるが、近世末期に現はれた橘曙覽・僧良寬・平賀元義・大隈言道（各別項）に至ると、古典の形から離れて內容精神にまで進んでゐる。（以上久松）

【明治・大正時代】明治の歌は江戸時代の傾向を繼承した八田知紀・井上文雄・太田垣蓮月尼（各別項）等に初まつて、中期には景樹の桂園派の流れを汲む高崎正風・税所敦子・小出粲・黑田清綱・間島冬道（各別項）等の所謂宮內省派が歌壇の主權を握つてゐた。この派の人々は「古今集」の歌風を宗として、單調平板に陷ること久しく（海上胤平は、この派の歌を非難攻擊することによつて知られた）、新機運の興るべき時に際會するや、落合直文（別項）が所謂新派の運動を起した。その温雅な中に一脈清新の趣をたたへた歌風は、この時代に大なる反響を喚んだ。特にその門から與謝野鐵幹・尾上柴舟・金子薫園（各別項）等を出し、短歌革新の實を擧ぐるに至つたことは著しい業績と言はねばならぬ。鐵幹の主宰する明星派（別項）は、與謝野晶子を出して戀愛至上の作風を鳴らし、柴舟・薫園等の自然を愛慕する所謂叙景派、折衷的態度で新風を鼓吹する佐佐木信綱の竹柏會（別項）、「萬葉集」を基礎とし寫生主義中心の正岡子規の所謂根岸派（根岸短歌會參照）等と對立して、新歌壇の陣容は漸く明かになつて來た。その後、自然主義の起るに及んで、明星派は衰運に向つたが、その派から石川啄木（別項）が出て生活主義を唱へ、その現實的な痛切な作風は歌壇に大なる波動を與へた。薫園門から出た土岐哀果（善麿）（別項）は啄木と步調を共にし、多く身邊の事に材を取り、近代風の情調を出した。これと同時に柴舟門の若山牧水・前田夕暮（各別項）は、自然主義の傾向を多分に持つて新鮮な作を示した。子規門から伊藤左千夫・長塚節・岡麓（各別項）等が出て、子規歿後の歌壇に寫生主義中心の特色を濃厚ならしめた。左千夫からは、島木赤彦・齋藤茂吉（各別項）等が出て、その主宰する「アララギ」（別項）は、大正の歌壇の主流となるに至つた。窪田空穂（別項）は、初め與謝野鐵幹の新詩社（別項）に入り、その作を「明星」に載せたが、後一派を成した。太田水穗（別項）は夙くから作を出したが、歌壇の主流に入らなかつた。その他、北原白秋・吉井勇・古泉千樫・釋迢空・川田順・木下利玄・吉植庄亮・松村英一・尾山篤二郎・橋田東聲等、各自の立場に於て活躍した。なほこの大正期の末年に新短歌協會が起り、口語歌（別項）を唱道したが、特に稱すべきものはなかつた。（この項金子）

【研究史】和歌に關する研究は、既に平安時代から發生して現在にまで至つてゐる。これを平安時代・鎌倉室町時代・江戸時代・明治大正時代に分けて觀察する方法と、和歌の研究の方面に分けて觀察する方法とがある。研究の方面から見ると、第一に歌書の書史學的研究、本文批評的研究、註釋的研究、批評的研究、文化史的研究に分けられる。かういふ古典に卽した研究で中心となつたものは、「萬葉集」「古今集」「新古今集」、記・紀歌謠等を主なるものとして「金槐集」「山家集」等の私家集、八代集・勅撰和歌集の全體としての研究、枕詞・歌合等の事項の研究も行はれてゐる。時代的に見れば、平安時代に於ては歌論書による歌病・分類の研究や、歌合の判詞等に見られる批評的研究等注意すべく、鎌倉・室町時代には歌論書・歌合の外に「古今集」研究を中心として「萬葉」研究にも見るべきものがある。江戸時代に於ては「萬葉」研究を中心として「古今」「新古今」の研究も行はれ、それ等を標準とする歌論が互に相對立してゐる。明治大正時代には同じく「萬葉」「古今」「新古今」を中心とし、殊に「萬葉」研究は、實にその中心たるの觀を呈してゐるが、同時にひろく和歌全體にわたつての研究が進んで來た。和歌史の研究が進められたことも、歌書のすべてを網羅しようとする書目解題書の作られたことも、それを示すものである。（歌學・歌論參照）（久松）

【參考】和歌現在書目錄○歌書綜覽○國歌大觀○續國歌大觀○日本歌學全書○續日本歌學全書○和歌叢書○歌學文庫○國歌大系○日本短歌史山內素行○和歌史の研究佐佐木信綱○近世和歌史同上○歌謠字數考中根淑○英詩より見た和歌形式論八木又三○國歌の胎生及發達五十嵐力○明治の歌土岐善麿（日本文學講座）○明治大正短歌史概觀齋藤茂吉（現代日本文學全集三八附錄）○新講和歌史見山信一

和解（わかい）

小說【作者】志賀直哉【發表】大正六年十月、「黑潮」【刊行】大正七年一月、短篇集「夜の光」、新潮社。代表的名作選集・志賀直哉集（現代日本文學全集）所收。

【梗概】順吉はすでに十一年前、父が「これからは如何なことがあつても彼奴のためには淚は溢れない」と云つた事を聞き、自分の父に對する態度を顧る時、それも無理ではないと思つて、自分も孤獨を感じた。永い間の父子の不和は、順吉の自分を枉げない性格故に益々深まり行くばかりだつた。一昨年彼が京都に住んでゐた時、或る和ぎを作る目的で父が上洛しても、彼は氣持を偽ることが出來ず、正直に逢ふのを拒んで父を激怒させた。それから我孫子に移り住んでから繼母の計らひで父と會つても、それは反つて父の家へ出入する事を禁ぜられる結果を見た。併し順吉は愛する祖母との關係を別物として、その部屋は訪れてゐるのだつた。去年長女が生れると、父も好意を見せ、周圍の者も赤兒が和解の緣になることを願つたが、間もなく急死した上に、その時父の執つた處置がひどく順吉を不快にした。やがて妻はまた懷姙した。その頃から順吉は少しづつ調和的な氣分になりつつある事を感じ、父の不幸な氣持に心から同情を持つ事もあつた。今年の夏の或る朝、次女が生れた。產褥に立ち會つて感じた快い而して淚ぐましい亢奮が、胸の中で後まで尾を曳いてゐた。そのうちに生母の佛事で父の家へ行つて穩かな父の顏を見た。順吉はこれまでに父に隨分氣の毒な事をし、或る事では自分が惡い事をしたとも思ふが、二人の今の義絕をこの儘續けて行くのは無意味だと思ふと云つた。「お前の云ふ意味は、お祖母さんが御丈夫な內だけの話か、それとも永久にの心算で云つてゐるのか」の問に、順吉は永久にと叫んだ。「實は俺も段々年を取つて來るし、貴樣とこれまでのやうな關係を續けて行く事は實に苦しかつたのだ」と云つてゐるうちに、父も泣き、順吉も泣いた。溫い淚で感情の糊が溶され、遂に和解の時が來た。これまで苦しい板挾みになつてゐた繼母も嬉し泣きに泣いた。その翌日、父は妹達を連れて我孫子の順吉の家を訪れた。自然に父の目に快い自由さで、愛情の

光りの湧くのを見て、順吉は和解の安定をもう疑はなかつた。

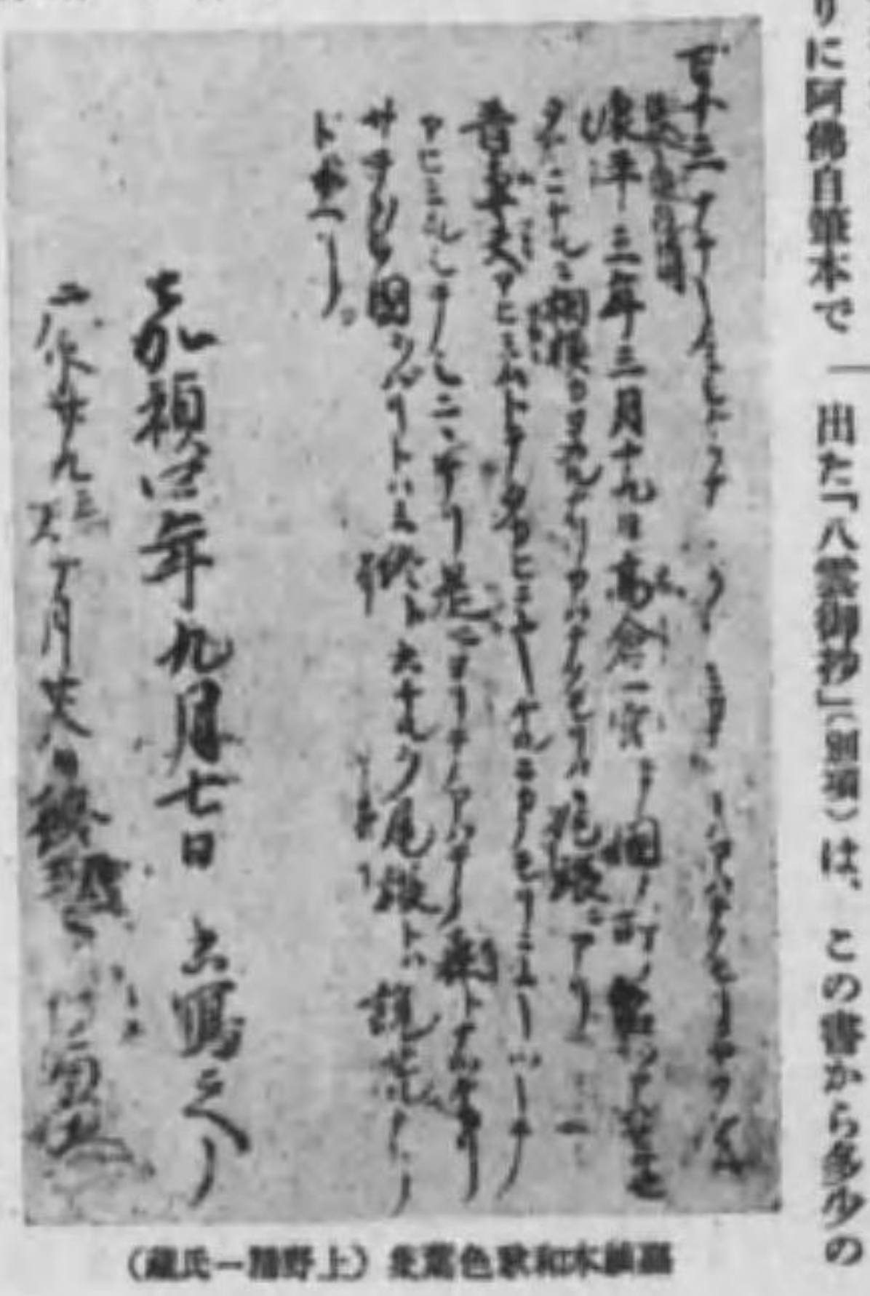
【批評】作者には父子の不和を根幹とした作品が多いが、これは自註するやうに、「大津順吉」「或る男、其姉の死」と共に、材料の點から云つて一つの木から生えた三つの枝を成すものである。順吉の自叙傳で事實を描いた自傳小說であるが、一時筆を收めて以後の力作として評家の推重を擅にした名作である。肉親といふ事から來る免れ難い複雜な感情の葛藤に、人間性に徹する洞察を以て對し、極度に簡勁的確な手法に依つて描破してゐる。一度この作が世に出づるに及んで、新現實主義文壇の第一人者と目せらるゝまでになつた。この前篇とも稱すべき「大津順吉」に比する時、激動の奔騰を感ずる代りに、より深き諦觀と落着きを見るが、當時漸く調和を欲求するに至つた作者の心境が、如實に作品に反映してゐる。而もその描寫は益々精到的確を盡し、長女の死亡、次女の出生の章等、寔にその老手に讃歎を禁じ得ない。（水木）

和歌爲隣抄（わかゐりんせう）

歌論書　二卷二冊【著者】澄月【名義】慈延の序に、門人隣といへる人のもとめに應じて書き記したとある。【成立・刊行】寛政五年成る、同九年刊行。【內容】二條家歌學を繼承し唱導して、獨自な確實な道を歩いた著者が、自己の立場を闡明し、作歌の要道・作法を說いたもの。本歌取やうのこと、戀歌をよむを排するのいはれなきこと、「古今集」の序文のこと、「古今集」の註釋書のこと、「源氏物語」のこと、戀歌のよみやう、雜・羇旅・述懷・神祇の歌のこと、贈答の歌のこと、雜に季をよむこと、紀行の文や歌のこと等細部の問題にも及んでゐるが、最も注意される特色は神儒佛の三道を包含した立場から歌道を說いてゐる點、歌學よりも詠作のつとむべきことを書中に屢々繰り返して說いてゐること、「草庵集」（別項）を特に推奬し、三十三首の歌を抄出して批評し、「草庵は和歌中道の龜鑑なり。中道とは過不及なきの謂なり」などと說いてゐること等である。また「萬葉」の歌の今時に通じ難い用語、つゞけがらの多いことを指摘し、契沖の「餘材抄」を貶し、ひいて契沖の假名づかひを難じ、二條家歌學に反對した契沖の態度等を難詰し、折衷的な所謂中正穩健な說を吐いてゐる。【價値】蘆庵・蒿蹊・慈延（各別項）と相並び、當時京の四天王の一人と稱された澄月の歌論は、この一書に明かに知ることが出來る。堂上歌學の系統に屬するとはいへ、さすがに巨匠の名を得た人だけあつて、作歌の用意を說いて肯綮にあたつてゐるものが多い。又新風の影響をうけ、その說をとり入れたことに於ても、新意が見える。神儒佛道の混淆たる思想を折衷し、歌に於ける守舊派と進歩主義とを統合して、獨自の立場に立つものと稱すべく、澄月研究には勿論のこと、當時の歌界を檢討するものの一讀を要すべきもので、歌論書としても比較的まとまつた好著である。（藤川）

和歌色葉集（わかいろはしふ）

歌學書　三卷【著者】上覺【成立】圖書寮本奧書によれば建久五年仲夏の作となるが、佐佐木信綱博士はその以後の事が記載されてゐるので、五年は七年の誤であらうかと疑つてゐる。【諸本】寛文五年の刊本九冊があり、卷末に顯昭の奧書、右中辨長房、その弟刑部權大輔宣房との往復文書が載つてゐる。歌學文庫第五編所收。內閣文庫本（舊林羅山藏本）・品田太吉氏藏本（舊東山文庫藏本）はこれと同種のもので、刊本の原書と見られるが、刊本の誤を正すべき點が多い。圖書寮本（和歌色葉と題す。舊桂宮御本）は刊本に見る如き奧書なく、別に「于時建久五年仲夏上旬西山隱士上覺抄記」なる奧書があり、又、刊本奧書にも見える顯昭の「なにはつのそこのくもりも云々」の歌が載つてゐて、本文にも所々異同がある。その他、嘉禎四年書寫の零本一卷を上野精一氏が藏してゐる。帝國圖書館本は榊原氏舊藏本で寛文刊本であるが、朱を以て書き入れあり、終りに阿佛自筆本で校合した由の奧書がある。【內容】全篇の綱目を「大鏡」（別項）に倣つて、雲林院の菩提講に詣でて導師を待つ間に、或る入道が舊知の老翁の同伴した少年のために歌がたりして聞かせたのを、著者西山隱士（圖書寮本如是。刊本・內閣文庫本等作北山隱士）が筆記した體になつてゐる。本文は上卷、和歌緣起・種々名體・詠病次第・詠作旨趣・撰集時代・名譽歌仙・適用名言付所名・萬葉集所名。中・下卷、難歌會釋。以上の各部より成る。右のうち純粹の歌論として見るべきは詠作旨趣の條である。そのいふ所は技巧をこらした巧緻な歌よりも、平易暢達の歌をとる立場である。長明の「無明抄」（別項）等の主張と相通ずる所ある說であるが、當時にあつては、最も穩健中正の言である。【價値】內容は大體に於て、清輔の「奧義抄」「袋草紙」（各別項）等の先行歌學書を襲つてゐて、全體として從前の歌學說の集成と見るべきものであるが、また著者自身の歌論も見られて歌論史的に興味深く、撰集時代の項では、多くの歌書・物語の類を掲げ、書史的研究として注意すべきものである。著者は顯昭（別項）の學識を深く尊敬し、下卷の中にも「六百番歌合」（別項）に於ける彼の立場に同意辯護したところがあるが、一方俊成（別項）の歌論をも理解して、詠作旨趣の部にその言を引用してゐる。これ等の、又その他の先人達の說が如何にこの書に影響してゐるかも興味ある事項であるが、又後に出た「八雲御抄」（別項）は、この書から多少の影響を受けてゐると見られてゐて、その關係も研究すべき問題である。【參考】和歌色葉集について　佐佐木信綱（和歌史の研究）（中島）



嘉禎鈔本和歌色葉集（上野精一氏藏）

稚枝鳩（わかえばと）

「復讐奇談稚枝鳩」を見よ。

若えびす（わかえびす）

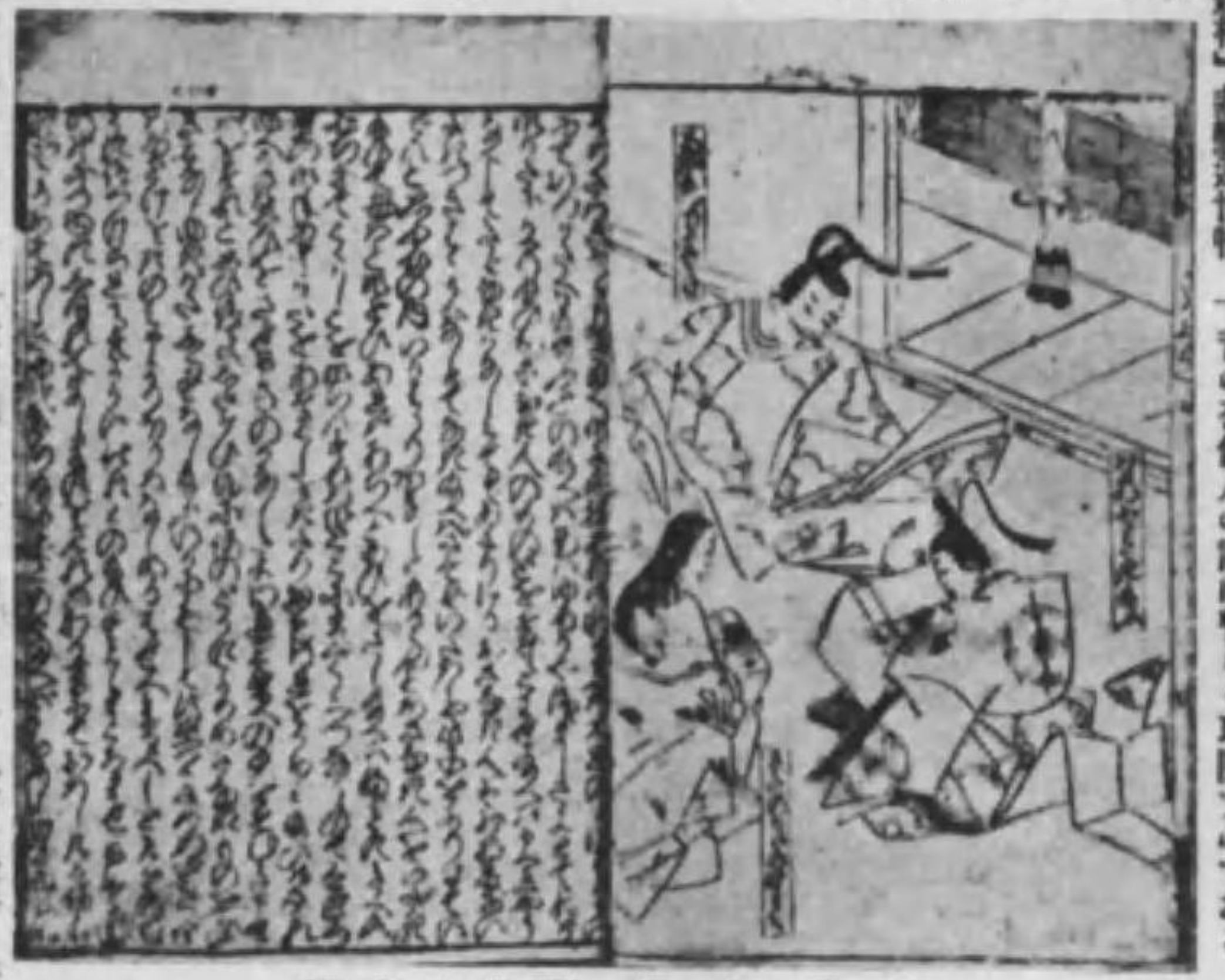
雜俳集　一冊【編者】自悔園覺水【刊行】元祿十五年【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一卷所收。【解說】冠附・沓附・前句附（各別項）等の高點句を收錄したものである。（西原）

若木佚名草（わかぎのなぐさ）

「臘梅」を見よ。

和學（わがく）「國學」を見よ。

若草物語（わかくさものがたり）　御伽草子　三卷【作者】不詳【成立】室町季世【諸本】古板本は寛文年間板、天和三年板（鶴屋版）、元祿六年板、寶永八年板（鶴屋版）、享保六年板。新編御伽草子上卷所收。【類材】悲戀遁世物。繼父物。鎌倉時代小說の系型を承け、佛教色が著しい。「忍音物語」「樺の中將」「しぐれの緣」（各別項）等と類した構想を有し、若草の入水は「源氏物語」の浮舟に、宇治の老女は「住吉物語」の尼等に倣つたものであらう。【梗概】中昔、按察の大納言は御家族の兄君前の關白の遺見なる姫若草を引取り、實子少將・朝日の前と共に育ててゐた。少將はいつしかこの姫に心を寄せ、推參した妹の計らひで近づく事を得、遂に一女を擧げたが、父大納言は悅ばずして、少將を世に有る人の婿にと望み、一人の姫を持つ三條西の洞院左近の宰相の請に任せて婚約を結び、若草を不憫がる北方の反對を斥け、少將を呼び寄せて三條への文を認めさせた。打明けられた若草は少將との誓はありながら北方や朝日の前からの慰めの文を見るにつけても涙に暮るゝばかりである。少將の婿入の日は明日に迫る。宰相方では下にも置かず、姫も美しいのに、少將は夜明けを持ち受けて歸宅したので、親に恥を與へる者といつて大納言は激怒し、且つ擯して又逐り出し、翌朝は言ひ含めて供の者共を殘らず引上げさせたので、少將はその儘留まるより外なかつた。大納言は若草に大佛詣を勸めた。宇治に住む昔の召使人の許に暫らく取隱す心である。若草は朝日の前に暇乞して、乳母の淡路と共に立ち出でた。軈て宇治の小家に到着し、大佛詣とは僞りであつたと今更心細い涙にくれたが、六十ばかりの主の女房は、一部始終を問ひ聞いて同情し、御徒然のすさびにと奈良へ案内した。大佛へ赴き上人に對面して剃髮を願ひ、止められて戒ばかりを受け、年頃手馴れた鏡と琵琶とを佛に奉つて下向し、乳母の油斷に宇治川の早瀨に身を投じた。淡路の悲しみ人々の驚き、三條へも世間へも祕したが、夢見が惡いと急に立ち戾つた少將は、事の樣子の訝しさに佛に願つて探し出さうと長谷へ籠り、觀音の示現によつて今は世に亡き事を知り、且つ大佛へ廻つてかの鏡と琵琶とを見、宇治を通つて淡路に邂逅し、始めてすべてを明かにした。都へ引返して姫を朝日に託すると自ら髻を切つて奈良の上人の戒を請ひ、高野に登り吉野へ分け入つた。熊野參籠の夢枕に、我が供養の甲斐あつて變成男子と成佛した若草を仰ぎ、なほ勤行怠りなく三年を過して往生した。吉野の奧に尋ね當てた我が子に再び姿を隱された大納言並に北方も、墨染に衣を更へ、やがて他界され、朝日の前は三位の中將の北方となり、若草の遺見の姫君は十一の時攝政の孫侍從に迎へられ、言ひ置かれた通り、父母の文反古を漉き返させて五部の大乘經を寫したが、夢に母上が現はれて往生の悅びを告げたといふ。　（島津）



若草物語（享保六年版）

若草山（わかくさやま）　連歌書　一卷【著者】猪苗代兼載【名義・由來】卷頭の序の詞によると、奈良の某院の或る翁の問に對して、連歌一般のことについて說いたので、書名は「若草山のわかき心になびき」とある如く、翁に因んで名づけたのである。從つて又問答體にもなつてゐる。參議姉小路基綱の明應六年晩春の奧書によると、兼載が卑下して見せなかつたのを、基綱が強ひてこれを得、後土御門天皇の叡覽に供し奉つたものである。【諸本】群書類從連歌部所收。又「連歌の心得」と題した寫本がある。【解說】連歌の古樣新樣、連歌の本とすべき趣、心詞の關係、卑近な句と高尙な句との可否、堪能の人の句に覺束なき手爾葉或は指合の見える所以、強き句と美しき句との可否、百韻の行き樣、附けにくき句、自己の惡しき句の正さるべき事、心づかひといふ事、初心の時句數の多きが宜しきか如何、心の持ち樣たしなみといふ事、速吟遲吟の是非、會席の作法、執すべきか否かの事等十五項について說き示したものである。　（福井）

和歌口傳（わかくでん）「源承」を見よ。

和學辨（わがくべん）　隨筆　二卷【著者】篠崎維章【名稱】和學辨と云ふは、上卷の第一條に「和國にて和學の名目はすまぬ事也。かやうの拙き名目も五百年來といひながら、和學の名目は夫より近代の事也。かゝる訛のあることは、よく國體を知らねば氣がつかぬ者也」との論旨に基いたのである。【諸本】大田南畝の「補三十幅」に收められ、國書刊行會によつて複刊された。【解說】俗間に流傳してゐる漢語の調法の誤を訂し、又國書について一般に知り置くべき事項を擧げ、牽强附會なる神道家を痛斥し、すべて初學者のために學問の指針を授けようとしたもので、上下二卷合せて百三十一條に亙つてゐる。「本朝通鑑」「大日本史」のまだ容易に見られなかつた時代に於て、完備した國史の版行を望んだ一章の如き、著者の識見の尋常ならざることが知られ、且つ學問に忠實な趣が見え、又その和學の辨の如き、和魂漢才の著者の風丰が歷々として現はれてゐる。卷首に井上通熙（蘭臺）の東海先生傳がある。　（和田）

和歌九品（わかくほん）　歌論書　一卷【著者】藤原公任【名稱】又「九品和歌」（群書類從本）。「八雲御抄」學書部、「本朝書籍目錄」外篇に「和歌九品論義」とあるは同書か。【諸本】「奧義抄」卷一に載す。群書類從卷二九三所收。【解說】和歌の品等を上々以下下々に至る九等に分ち、短歌二首づつを擧げて例示したものである。鍾嶸の詩品の類に倣つたものか。或は佛說九品淨土の思想に據つたものか。その說明は左の如くである。

上々　これはことばたへにしてあまりのこゝろさへあるなり。
上中　ほどうるはしくしてあまりの心あるなり。
上下　心ふかゝらねどおもしろきところあるなり。
中上　心ことばとゞこほらずしておもしろきなり。
中々　すくれたるところもなくわろきところもなくてあるへきさまをしれるなり。
中下　すこし思ひたるところあるなり。
下上　わつかに一ふしある也。
下中　ことの心むけにしらぬにもあらす。
なき（當世）
下々　ことばとゞこほりておかしき所あるなり。

あまりの心即ち餘情を第一に重んじてゐる。全文僅か數十行に過ぎないが、同著者の「新撰髓腦」と共に、平安中期の歌論を代表するものである。　（中島）

和歌形式論（わかけいしきろん）　歌論書　一冊【著者】八木又三【名稱】詳しくは「英詩から見た和歌形式論」【刊行】大正九年、東華房。【解說】自序に「語學の科學的研究の立脚地から、三十一字詩の形式の考究を試みるのが本書の目的である」とある。本文を六章に分ち、第一章、律奏（RHYTHM）、第二章、句切（CAESURA OR BREAK）、第三章、體言止、第四章、弖爾乎波省略、第五章、字餘り（ELISION OR SHORTENING）第六章、音韻の技巧として短歌の形式的研究を述べてゐる。主として「萬葉」「古今」「新古今」について研究したものであつて、例證としても多くそれ等の歌を引いてゐるが、江戶時代・明治時代の諸歌人の作をも引例してをり、又著者の尊重してゐたと思はれる實朝等の歌も引いてゐる。先人の研究に基づき、而も英詩の形式的研究を應用して成れるものであるが、「總敍」の條に、以上の六要素を性質の方面から考へて見ると、その中でも律奏、特に律奏を構成すべき音律單位と弖爾乎波とは、語法學上、純日本的要素と言はなければならないものであるが、これに反して句切、字餘り、音韻の技巧は、廣く東西古今の韻文にも現はれてゐるところの世界的現象であつて、世界韻文學と我が韻文學、就中和歌との形式上の交涉、若しくは契合は實にこれ等の點に存すると言つてゐるに徵しても、英詩研究を直ちに和歌研究にあてはめたものではなく、相當な國歌の基礎的研究を經てゐることを思はしめる。【價値】近世以來、和歌の形式的研究は相當見るべきものを出してはゐたが、本書に於ては英詩學の立場によつて、その研究が學問的體系のもとに精細になされ、新味を加へられてゐるところに意義がある。この種の研究として補正され、また一步を進むべき點のあることは言ふまでもない。　（藤川）

和歌現在書目錄（わかげんざいしょもくろく）　一卷【撰者】不明【成立】仁安元年【諸本】續群書類從卷四七〇所收。帝國圖書館所藏。【内容】最初に眞名、次に假名の序文がある。眞名序は仁安元年七月、假名序は同十月に記したとある。「眞名序土代?誰之。猜書時可破却歟」とあるが、假名序を主としたのであらう。「一切經見在書各有目錄。和歌?逈我國詩、何無目錄」（眞名序）として、八家―撰集家（二十二部）（十・抄集家（八部）・類聚家（八部）・髓腦家・歌合家・會集家・百首家（十七度）・家集家（本二十六人其外可尋時）―物語家（部類無定今ニ可尋決哉也）の目にわけ、書目については、卷數・歌數・撰者等を漢文體であげてゐるのであるが、髓腦家の「和歌初學抄」（清輔）のところで闕本になつてゐて、半分程は見あたらない。【價値】歌書目錄では最古のもので、書史學上貴重な材料である。仁安當時にあつた歌書が、その後散佚して傳はつてゐないものの少くないこと、或は「悅目抄」は、「私集歟」（眞名序）とあり、抄集家の部類に入れてあることは、それが歌論といふよりも、和歌を抄出したものでないかを確かめさせるが如き、「八雲御抄」（別項）の一節はこの書の拔抄であることなど、歌學史上參考とすべき點が多い。書目及び眞名・假名兩樣の序文は、文學史料としても注意すべきで、闕本であるのが甚だ遺憾である。　（藤川）

我衣（わがころも）　隨筆　一卷【著者】加藤玄悅【諸本】この一卷本は、書賈で好事家の名ある活東子岩本左七がその所輯の「燕石十種」に收めた抄錄本である。別に二十卷ばかりの全本や十二三卷の略本もあるやに聞く。燕石十種第一卷所收。【解說】江戶期、別して天和・貞享頃から寶曆頃に至る市中の流行物及び風俗一般に係る雜記で、殊に男女の頭髮の樣、頭巾・笠・草履・下駄等に就いて圖畫を加へてやゝ詳細の說明をしてゐる。牛王箱より平家物語評判作者に至る六十六項を收む。【著者小傳】加藤玄悅は江戶の醫師、俳句を以て聞え、曳尾菴南竹と號し、一に召水とも云つた。歿年不詳。　（和田）

和歌三神（わかさんじん）　和歌【解說】和歌を崇尙する餘り、古代の歌聖を神とした思想から生じたもの。種々の說があつて一定しないが、「和訓栞」には柿本人麿・山部赤人・衣通姬をさして居り、一說として住吉神社に祀つてある底筒男命・中筒男命・表筒男命を擧げてゐる。「和歌三神考」には住吉神社・玉津島社・柿本人丸を擧げてゐる。また住吉社・天滿宮・玉津島社を擧げる說もある。　（久松）

和歌四式（わかししき）　歌學書【別名】四家式【解說】「歌經標式」「喜撰式」「孫姬式」「石見女式」（各別項）の四書を併せいふ。「和歌四式」と題簽のある合册寫本がある。「四家式」の呼稱は「八雲御抄」學書部に出たものが最古の例か。　（中島）

和歌十體（わかじつたい）　和歌【名義】和歌の分類に就いて、十體に分けたものをいふ。【解說】十體に分けることは支那の詩論にも見え「文鏡秘府論」に見られる所であるが、日本では「歌經標式」（別項）に先づ見られ、道濟十體・忠岑十體を經て定家の十體に至つてほぼ完成した。以上の中、道濟十體は「奧義抄」（別項）に擧げてあるのによつて知られる。次に歌經標式・道濟十體・忠岑十體等の名目を擧げる。

（歌經標式）	（道濟十體）	（定家十體）	（忠岑十體）
聚蝶	古體	見樣	古歌體
譴警	神妙	濃樣	神妙體
雙本	直體	拉鬼體	直體
短歌	餘情	面白樣	餘情體
長歌	寫思	有一節樣	寫思體
頭古腰新	高情	麗樣	高情體
頭新腰古	器量	長高樣	器量體
頭古腰古	比興	幽玄體	比興體
古事意	花體	事可然體	＊華艶體
＊新意體	兩方	有心體	兩方體

（＊安田氏藏の古寫本にかけてゐる。＊今昔兩方といふのであらう）

【參考】定家の和歌十體に就いて　久松潛一（心の花三〇ノ八）　（久松）

和歌四天王（わかしてんわう）　和歌【解說】南北朝時代に於ける優れた四人の歌人として、頓阿（別項）・慶運・淨辨・兼好（別項）を指していふ。また近世に於ても京都に於けるすぐれた歌人として澄月・慈延・蘆庵・蒿蹊（各別項）を平安の四天王といふ。　（久松）

和歌史の研究（わかしのけんきう）　研究書　一册【著者】佐佐木信綱【刊行】大日本學術叢書の第三編として大正四年十二月發行。昭和二年增訂。【內容】上世・中世・近世の三編に分ち、上世編は、上世の歌謠・萬葉集・風土記の歌の三章に、中世編は、神樂催馬樂・古今集時代・中世歌學・今樣及び雜謠・新古今時代・中世の新派の六章に、近世編は、近世の歌風・元祿前後・賀茂眞淵及び其門下・香川景樹及び幕末歌人の四章に分ち、更にこの大部分には、いくつかの章を設けて、和歌史・歌學史上の諸般の問題を取扱つてある。初めから一篇の成書としてまとめたものでないから、重複する部分もあり、全然觸れてゐない部分も多いが、大體の歌風の變遷については、よく要點を摑んで論じてゐ、和歌史・歌學史上の特殊研究として貴重な研究に充ちてゐる。增訂版には著者の序文があり、各節の終りには本文を補ふべき附言があり、「悅目抄の原本和歌大綱に就いて」の一節が新に加へられ、「歌謠史の研究とその新資料」中の「山王社權現船謠」の部分について訂正し、或は「上世の和歌の概觀」の節等にも、餘程書き加へられたところがある。【價值】著者の和歌史觀は、穩健周到な見解の下に諸說を消化し、自己の創意を出してゐるものともいふべく、その見識の優れてゐる點も尠くないが、この書の主たる價値は和歌史歌論史上の新資料、新史實を提供してゐる點にある。元曆校本萬葉集第十四卷を初めとして、天治本萬葉集第十三卷・萬葉集抄二卷・仙覺奏覽狀一卷・西本願寺舊藏本萬葉集二十卷・類聚抄一卷・歌經標式異本一卷、その他著者が新に發見した古典籍を紹介し、又高橋蟲麿が「萬葉集」の叙事詩人としてすぐれてゐることを新しく論證し、「石上私淑言」の第三卷の內容を紹介してゐる如き、その他殆ど著者の發見になるものといふべきものがある。和歌や歌學の歷史的研究の上に確實な基礎的研究を加へたものであつて、特に第二章の「萬葉集」の研究は、この意味に於て最も價値あるものである。「日本歌學史」（別項）が統一された史的叙述に於ける價値ある研究とするならば、この書は部分的に新發見に富んでゐる貴重な文獻である。　（藤川）

若衆歌舞伎歌（わかしゆかぶきうた）「歌舞伎歌」を見よ。

和歌初學抄（わかしよがくせう）　歌學書　一卷【著者】藤原清輔【諸本】帝國圖書館藏本は藤原芳野舊藏本で、「嘉應元年七月日依殿下仰抄出之　右大臣御判　清輔朝臣依蒙政命所抄出也即彼朝臣自筆本也此書於和哥之道尤爲要須深祕蔵中莫出閫外努云々」の如き奥書があり、次に建長七年書寫校點、正嘉元年正本を以て校合の奥書、次に應安五年、應永三十三年、文明二年の異本奥書、最後に古筆を以て終讀、その後伏見殿親王御直翰本を以て校合の由の正保五年の奥書がある。圖書寮本には右の如き奥書なく、別に「初學抄清輔朝臣撰　弘長二年六月求書更校合年來證本猶依失——仍以或本所書寫也六旬餘比丘（花押）」の如き奥書ある古寫本があり、帝國圖書館本の不備を正すべき點が所々ある。【解說】卷頭に序文があつて、歌を詠むには先づ題をよく思ひとき心得て、これを古き詞のやさしからむを選んでなびやかに續くべきだと說いてゐる。本文は、古謌詞・由緒詞・秀句・諷詞・似物・必次詞・喩來物・物名・所名・萬葉集所名・讀習所名・兩所名の各項より成る。「萬葉」「古今」以下諸歌集、「伊勢」「大和物語」等から短句を抄出してこれにまゝ短註を施し、或は證歌を擧げたもので、初學のために歌詞を集めた所謂詞よせの類である。序文に、「ふるき詞のやさしからむをえらひてなひやかにつゝくへき也」と言ひ、又秀句の條に「僞かなはねとその物にかかりたることをいひつれは、をのつから秀句にてあるなり。たゝしあなかちにもとめたるはわろし」など言つた詞があつて、斷片的ながら著者の歌論を覗ふ事が出來る。【參考】日本歌學史　佐佐木信綱〇大日本歌書綜覽　福井久藏〇國文學研究史　野村八良　（中島）

和歌心操抄（わかしんそうせう）「悅目抄」を見よ。

和歌禪話（わかぜんわ）　歌論書　一卷【著者】伊達千廣【成立】明治九年【內容】禪話を引いて和歌を論じ、和歌は他を譏り、他と爭ふ道ではなく、人情を和し風俗を優にし、品行を正し、風流を盡すところの、幾ばくの實際的利益のあるものであるから、徒にこれを狂言綺語といつて貶しめることは不可であるとしてゐる。この見地から、基俊・俊賴の和歌に基づく不和、西行の歌に對する伴信友の非難、弘法大師の歌に對する伊勢貞丈の非難等を擧げて、和歌の爭論を導く器にあらざる由を述べ、よくその道をたゝへるならば、風化を助ける淸歡ともなるべきに、小器小量の偏執から爭を損し、道を破るに至ると慨嘆し、進んでこの敷島の道を扶け起し、鄙人の一助としようとて、その抱負を洩らしてゐる。【價值】和歌を以て修養の具としようとしてゐるところに本書の特徵があるが、その說の當否はしばらく措くとして、なほ著者の識見を窺ふに足るものがある。　（相原）

和歌叢書（わかそうしよ）　叢書　七册【編者】佐佐木信綱・芳賀矢一【刊行】大正元年から同四年に至る。博文館。【內容】第一・二卷は千蔭の萬葉集略解、第三・四卷は八代集、第五卷は三十六人歌集を收め、第六卷は近代名歌歌選と題し、賀茂翁歌集・天降言・桂園一枝・桂園一枝拾遺・貧窮百首・志濃夫廼舍歌集・草徑集・向陵集の諸家集を收め（貧窮百首は嵩々讀翁にある木下幸文の代表的な歌である）、第七卷は和歌作法集と題し、言葉の直路・八雲のしをり・歌の大意・詠のしるべ・ふりわけ髮・桂園大人詠草奧書・歌學提要・歌道案・にひまなび・新學異見・歌ぶくろ・歌がたり・初學考鑑・筵の河上・八雲御抄・無名抄・異本悅目抄の諸書を收錄してゐる（八雲御抄は第一編正義部と第六編用意部だけを收めてある）。而してその各卷の初めに一々解說を施し、又簡單な頭註を附してゐる。【價值】「萬葉集略解」はすでに國民文庫刊行會から出たものもあつたが、この書は岡本保孝の略解書入本（岩野亭言律士所藏）を取捨し、同じく「萬葉集略解札記」（帝國圖書館藏）を以てこれを補ひ、雅澄の「古義」の說をも多くとつて、鼇頭に記してある點に特色がある。「八代集」は主に季吟の說をとり、更に他の學者の說及び私見により、これを補正した頭註をつけ、「三十六人集」は流布本をもととし、諸本について校合し、頭註には契沖の「河社」中の意見、景樹の「三十六人歌仙考」の參考とすべきもの、その他諸章・歌意の註をも交へ、校訂上の注意などを記してゐる。第六・七卷所收の歌集・歌論書の大部分は、「歌學全書」「續歌學全書」等に、かつて收めたものではあるが、はじめて版行されたものもあつて、便利且つ有益なものである。　（藤川）

わが袖の記（わがそでのき）　感想文【作者】高山樗牛【發表】明治三十年六月「中央公論」。【刊行】代表的名作選集・樗牛全集第五所收。【內容】「世をうきものとは誰が言ひそめし。想へば袖ふたつに包みかねしわがこゝろ、うたてや年をへし長きねざめの友となりぬ」と書き起し、國府津の夜に、病んで昔の戀人の面影を偲び、熱海の磯にハイネ詩集を友として大島の煙を眺めてゐた彼は、「サツフォオ」の一卷を携へて姉崎嘲風が來り訪ふに會ひ、情熱の子サツフォオを悲しみ、死の暗影をさへ思つた。併し嘲風が歸つた後、隣室の少女から水仙花を贈られたので、それに對して僅かに朝夕の鬱憂を慰めてゐた。彼は或る日、清見が關の古跡を訪ひ、更に三保に遊んで羽衣の松に天女の昔を偲び、月の一夜を泣き明かしたが、偶々嘲風・芥舟（畔柳）が訪ねて來たので、ハイネの外に友を得たのを喜び、夕暮の海上に舟を泛べた。半歲の漂浪に病は癒えたが、心の傷みは新しい痛みを感じた。その後、嘲風は新に妻を迎へたが、彼は燈に對し、ひとりハイネを讀んでゐる。【批評】病んで人生の虛無に絕望しようとしながら、自然と藝術と友情とに慰安を求めて、そこに多感な詩人としての自分を見出さうとした樗牛の散文詩、その磨きぬかれた幽婉な詞藻と、その美しい感傷性が、當時の若い人々をどんなに憧れしめたか知れない。今から觀ると響き方に氣取つたところはあるが、これは當時に在つて免れがたい行き方であつた。「平家雜感」（別項）「月夜の美感」などと共に、樗牛の詩人的半面を窺ふべきものである。　（高須）

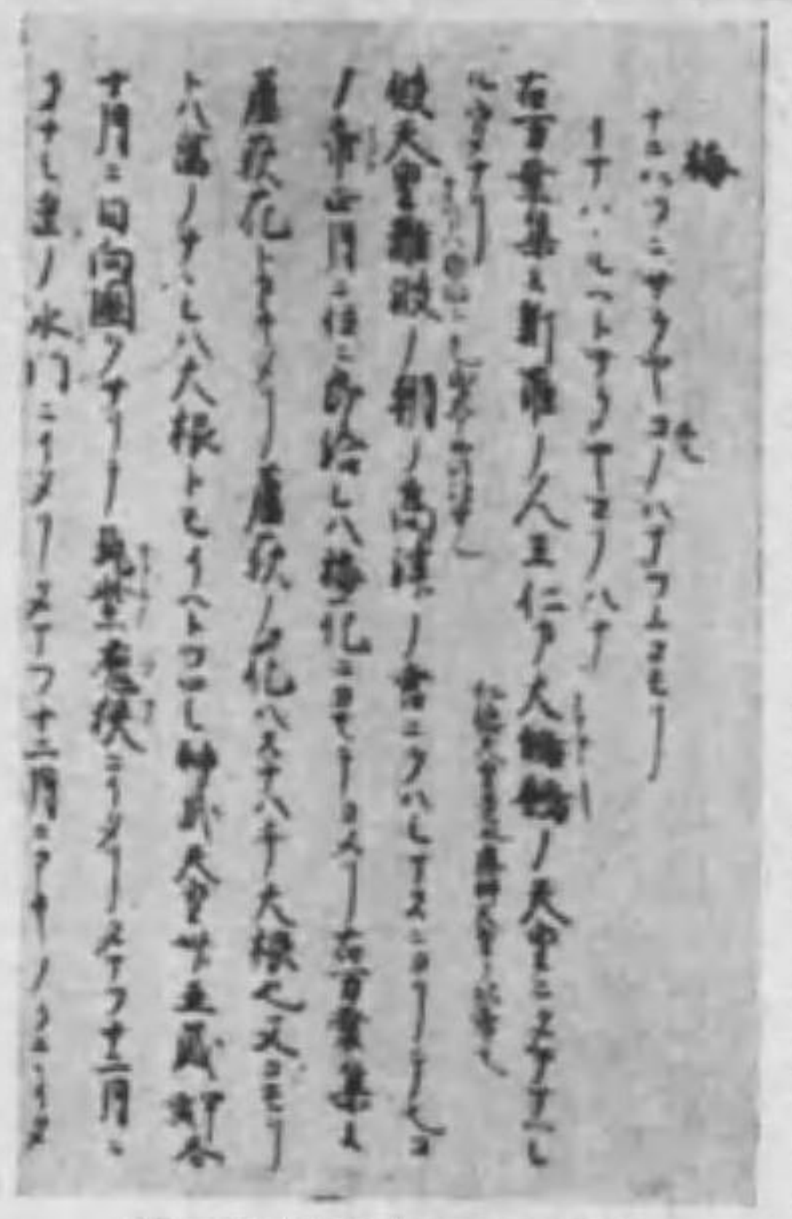
若竹東九郎（わかたけとうくらう）　人形遣【本名】未詳【別名】東工郎とも書く。【生歿】未詳【閱歷】藤井小三郎よりも後輩で、正德の初め頃から、豐竹座に出勤してゐたらしい。延享二年十一月、三度目の「北條時賴記」が、越前の一世一代で出た時に、東九郎が時賴を遣つてゐるから、この頃から立役座頭になつたのかと思はれる。そして延享四年七月、「惡源太平治合戰」の四段目で、操師を工夫して看客に認められた。操師とは、おやま師・雀師などであるといふ。又この時東九郎は、立役人形にも、屏風手とて五本の指を皮にて繋ぎ働かす工夫を施した。或は又竹本座の人形頭を眞似て、少しづつ違ひ寫させるなど、東九郎の工夫が、豐竹座の人形に加へられた。また寶曆七年十二月の「祇園祭禮信長記」で東九郎は、小田信長と木下東吉とを遣つてゐるが、彼は人形細工人島屋利助と相談して、木下東吉の頭を京都高臺寺の豐太閤の木像に摸して造らしめ、且つ眼に玉眼を入れたと傳へられる。恐らく東九郎の人形は、後世にいふ「活歷」の傾向を帶びてゐたらうと思はれる。されば東九郎の一代の當り藝として、寶曆元年十二月「一谷嫩軍記」の熊谷直實の物語及び明和元年十月「嬢景淸八島日記」の景淸の如きが數へられてゐるに見て、その藝風、藝の傾向がほぼ察知される。そして「嫩軍記」は、古今の當りを取り、年を越えてなほ興行を續け、七月十五日盆に入り、大切には延享四年に彼の創案に成れる操師を追加して更に興行を續けたといふから、この頃が東九郎一代の全盛期であらう。寶曆十一年九月には「人丸鳥讀古」で、豐竹座新築の祝儀として「式三番」が初めて出遣ひになつたのも東九郎の工夫であつて、この時初めて操に「式三番叟」が完成された。かくて東九郎は一代の傑作「景淸」を明和元年十月に見せ、同十一月には、この大切に「心中二つ腹帶」の八百屋の段を追加して、千代喜兵衞を遣ひ、これを最後として舞臺を引き、老年に及んで歿した。主なる門弟は、若竹伊三郎・同友五郎・同滿五郎・同武十郎・同新三郎・同林三郎・同鬼市・同三十郎・同八十郎・同淸治郎・同東藏・同新九郎・同菊藏・同才市・同喜十郎などである。　（石割）

我津衞（わがつゑ）　心學書　三卷三册【著者】手島堵庵【成立】寬政九年正月の自序がある。【刊行】初版は明和末年か（明和七年八月の布施矩道の序に、著者に謂うて梓に上すことを記してゐる）。後「安永四年五月、稽古堂藏」と奥附に記した版のものがあり、寬政の初年に上河正揚上梓の書もある。【諸本】日本敎育文庫心學篇所收。【解說】上卷には、「主人心得の話」以下十一條、中卷には、「富貴貧賤に交る心得の話」以下二十條、下卷には、「世間に仕合にて家を貰ふを羨む話」以下十四條、すべて中產階級の町家を對象として道を說いたもの。各條すべて「老人曰」として書き起し、跋文に、「宿老の物語聞傳ふるまゝを書あつむるは、全く貨殖の爲にあらず。先祖の家業を守るべき渡世の便りとなさん爲なり云々」といつてゐる。說くところ平易にして何人にも解し易い。堵庵の著書中最も廣く行はれたものの一である。　（森）

和歌庭訓（わかていきん）「每月抄」を見よ。

和歌童蒙抄（わかどうもうせう）　歌學書　十卷【著者】藤原範兼【諸本】國文註釋全書所收本は木村正辭博士の校訂で、屋代輪池舊藏本を底本とし、狩谷棭齋本を古鈔本を以て對校した岡本保孝本及び紀州家本を以て校合したものである。卷二の終りに、「元久三年四月十六日於長尾房以證本令校合畢云々」、卷四の終りに、「元久三年十二月七日於喜多院御所屯僵聽雜畢、同三年四月十日於長尾房以證本一校畢、正應三年九月十九日以著本一校訖、寬延二年己巳夏五月十四日照高山主親阿自書、同四未秋九月十五日、得生院主松阿自書之」（寬延二年以下は紀州家本の奥書無）、卷十の終に「此和歌童蒙抄十册は中原道廣家藏の本をもて寶曆六丙子年十一月廿二日燈下に筆を染畢穆積世美」なる奥書がある。この穆積世美の寫した本は今內閣文庫に藏してゐるが、卷四末の奥書を缺く。內閣文庫には、なほ卷十の終に「本記云此抄者範兼所作也以彼本書寫校異了、辨觀門本書寫了云々」の奥書ある本があるが、卷四の奥書の日附は木村本に一致する（寬延云云の奥書なし）。前田家本は卷四の奥書のうち、正應三年以下なく、又卷十奥書中元久三年云云の下に印雅の二字があるが、右の本と同系統の古本と思はれる。圖書寮には文明十四年の奥附ある本がある。【內容】全十卷のうち、卷一より九までは、「萬葉」以下諸歌集の歌を、天・時節・地・人等二十二部に分ち、これを更に天部は日・月等、時節部は春・夏等に細別して類聚し、これが語釋・出典等を記したものであ

る。引歌は「萬葉集」最も多く、「古今集」「古今六帖」以下、「後拾遺」「朗詠」「堀川百首」等に及び「類聚抄」や逸書の「四條大納言和歌論義」等の歌をも舉げてゐる。又その解釋中の引用書は和漢の書數十種に及び、「日本紀」最も多く、「疑開抄」「日本紀問答抄」「四條大納言抄」「古萬葉集」等の佚書の名も見える。「古萬葉集」は引例により所謂「萬葉集」とは別の本なることが知られる。次に卷十は雜體・歌病・歌合判の三部より成る。雜體の部は、長歌・短歌・旋頭・混本・誹諧・相聞・折句・廻文・隱題・連歌・返歌の十一項、歌病部は七病・四病・八病の三項より成り、歌合判部は勝劣難決之例、御製勝例、御心輕例、所名輕例の八項に分れ、天德・亭子院等諸歌合の例を舉げて說いてゐる。著者範兼は清輔の先輩で、その博引旁證的な態度は清輔・顯昭等の六條派（別項）歌學に相當の影響があつたものと考へられる。又「萬葉集」の歌の數多き引例は、平安朝末期に於ける萬葉訓釋學の狀態を知る上に參考となる。【參考】大日本歌書綜覽（福井久藏）○日本歌學史（佐佐木信綱）○國文學研究史（野村八良）○校本萬葉集（諸本解題）（中島）


和歌童蒙抄（前田侯爵家藏）

和歌所（わかどころ）「御歌所」を見よ。

和歌所へ不審條々（わかどころへふしんでうでう）歌論書 一卷【著者】今川了俊【別名】「二言抄」「和謌二言集」、又「今川了俊和歌所へ不審條々」。【成立】奧書に、「應永拾年正月日了俊在判」とある。【諸本】「古語深秘抄」及び群書類從所收の刊本がある。深秘抄本は、「和謌二言集」と書名があり、奧書はない。群書類從本には「今川了俊和歌所え不審條々（今傳二言抄）」と書名があり、又寛永十年その他の奧書がある。且つ本文にも部分的の小異の外、群書類從の終りの項である「一、家隆卿の歌云々」の次に「一、此草子和歌所遣置一帖案也云々」とある項の外四項目がある。全體として古語深秘抄本の方が善本である。【内容】了俊が當時勢力を占めてゐた二條家（別項）の歌風に對して非難した書である。即ち二條家が三代集を尊重し、古歌の詞を重んじてそれから一歩も出ないのを難じ、同じ詞でも天性口のこはき人とやさしき人とでは黑白の相違が生ずるとて、詞を自由にすべきを說いてゐる。さうして伏見院や爲兼の歌は、詞をも自由にはゞからずよまれてゐるとして居り、次に自由に詞を用ひた古歌の例を舉げ、自由な詞の例を舉げてある。次に斷片的に種々の事項があげてあるが、頓阿は十首に七八首は古歌を多く用ひたとし、西行や俊賴の歌をたゝへ、爲世と爲兼との歌風の相違を論じ、歌をよく心得べき敎は、定家から實朝に送つた書札に過ぎたるはないとして、「近代秀歌」を重んじた如き注意すべき言說である。【價値】了俊は中世に於ける二條派の歌風に反對して、爲兼等の立場をついで自由な素樸な歌を主張した所にその特質があるが、本書は彼の著書の中でも所說を大膽に主張して彼の立場を示してゐる所に注意せらるべき價値がある。（久松）

若菜集（わかなしふ）詩集【著者】島崎藤村【刊行】明治三十年八月、春陽堂。藤村詩集・藤村全集等に收む。【内容】明治二十九年頃、藤村が仙臺の客舍にゐて作つた詩を、雜誌「文學界」に發表し、翌年一册に取り纏めたものである。「おえふ」「おきぬ」「おさよ」など六人の女性を主題とした戀愛詩、「秋風の歌」「深林の逍遙」「晴者」「蓮花舟」等が汎く世に傳誦された。收むるところ五十一篇、中村不折の挿畫も詩の感興に伴ふものであつた。【批評】我が國現代の抒情詩は、民友社一派の「抒情詩」（別項）にその形がつくられ、更に透谷（別項）に依つて内部生命に情熱を有つべきことが高唱され、それ等の血脈を繼承して藤村は一家の抒情詩を完成した。新しい詩とは即ち新しい言葉であり、且つ又言葉そのものを本質的に更生せしめることであると彼自らも聲明してゐる如く、「若菜集」一卷は青春の情感を歌つて氣韻生動、うたふところは平明單純であつても東方的藝術の高い香氣を含んでゐる。【影響】單行の詩集として當時反響のあつたことはいふまでもないが、年代を經るに從つて益々その聲價を普及し、大なる感化を一般詩壇界に與へてゐる。作風としては有明・泣菫（各別項）の諸家でさへ、その初期には「若菜集」の詩風を追從した痕があり、況やその他の詩人諸家の間に影響を蒙らない者はないと云つてよからう。現代の自由詩（別項）時代に入つても、なほ一部の間に行はれてゐる定型の抒情詩には、その遺風の存することが認められる。（河井）

若菜貞爾（わかなていじ）「孤蝶園若菜」を見よ。

和歌の糸（わかのいと）歌謠書 半紙本五卷【編者】松川勾當・安永勾當【書名】正しくは「琴線和歌の糸」。【成立】寛延三年秋【刊行】寛延四年仲春の序があり、その頃の刊行か。皇都書林吉田善五郎・河南四郎右衞門・野田治兵衞・永田調兵衞梓。【諸本】日本歌謠集成卷七所收。【解說】初めに自序及び「三味線濫觴」を揭げてゐる。この三味線の傳來說は、奇說ではあるが一說に備へる事が出來よう。卷一は本手新組（又十二ヶ月の新組と云ふ。深草撿校の新作）。卷二新長歌四十二篇、市川撿校・野川撿校以下の新作のみ、作者傳あり。卷三本調子端歌廿一篇、卷四三下り端歌六十八篇、卷五二上り端歌四十四篇。この中には、當代の地唄の代表歌が網羅せられてゐて、同じ端歌と云つても、「松の葉」等の端歌が、純粹の流行唄を集めてゐるのに比すると、甚だ趣を異にし、内容に地唄の特色を明瞭に現はしてゐる。版式や分類など、「松の葉」等の書を摸したものであることは明かであるが、内容の趣は、それ等と餘程異つて元祿期の特色は最早見られず、後代の地唄歌謠の特色を完成せしめてゐる。從つて外形は「松の葉」類に似てゐるが、内容から云ふと「糸の調」類の書に甚だ近い。爾後「糸の調」の如き枕本の形式の書が、地唄本を代表することとなつた。この意味で、本書は「松の葉」類の殿りとして出で、

「糸の調」類に移る時代の書として注意せらるべきである。（藤田）

和歌の病（わかのやまひ）「歌の病」を見よ。

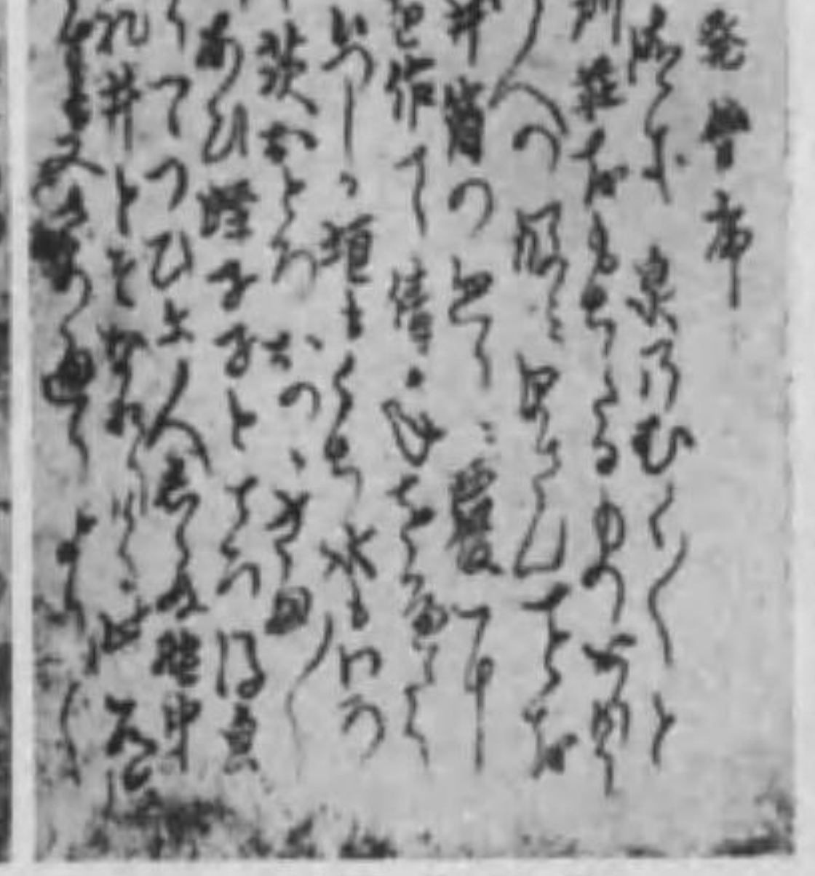
吾輩は猫である（わがはいはねこである）小說 三卷【作者】夏目漱石【挿畫】上卷中村不折、中卷・下卷淺井默語。【發表】明治三十八年一月から同三十九年四月まで、十一回に分けて「ホトトギス」に連載。【刊行】明治三十八年十月上卷、同三十九年十一月中卷、同四十年五月下卷、大倉・服部兩書店。後合本縮刷版を刊行。漱石全集第一卷所收。【内容】自ら吾輩と稱する一匹の猫の第一人稱的叙述に依つて、その飼主なる一教師苦沙彌先生と彼の家庭と彼の家庭に關係する若干の人物とを描き、隨所に猫の觀察に假託して作者の社會觀、文明批評を加へたもので、作者自ら「此書は趣向もなく、構造もなく、尾頭の心もとなき海鼠の樣な文章である」と云つてゐる如く、特に構想として舉ぐべきものを持たない。作者は第一回を書く時、それだけで完結したものとして書いたのであつた。それ故に、後であれだけ活動する迷亭も寒月も東風も獨仙も姿を現はしてゐない。苦沙彌夫人さへも出てゐない。苦沙彌先生でさへまだ名前が紹介されてゐない。人間は猫から見ると甚だ非難すべきものだといふ意味に於ての一代表者として描かれてゐるに過ぎない。この作中に多少なりとも事件らしき事件が發生するやうになるのは第三回以後であり、細君・寒月・東風・迷亭が顏を出すのは第二回からである。作者は當時大學教授として、又俳壇の大家として知られてゐたが、小說に筆を染めようとは誰にも期待されてゐなかつた。この期待を破つたのと、一つには題名が奇拔であつたのと、又一つには清新な表現が類例を絶してゐたのとで、忽ちにして文壇の視聽を集めた。それで「ホトトギス」の主幹高濱虛子は續篇を執筆することを奬め、作者も乘氣になつて、第二・第三と次第に書き足して第十一回に達したのである。嚴密な意味に於てこれを小說と呼び得るか否かは問題であるが、さりとて當時「ホトトギス」同人の主唱してゐた寫生文としては餘りに小說らしく、また單なる隨筆の圈内に收まるべきものでもなく、最も小說らしくない一種の小說と見做す外はない。事件としては寒月と金田令孃との縁談、盜難の事、落雲館中學生徒の闖入の事等が主なるもので、描寫としては苦沙彌先生の家庭の外に、近所の錢湯の光景、猫の運動法等が代表的である。【批評】素より纏まつた話の筋を讀ませる普通の小說ではないと、作者が斷つてゐるだけに、描寫が主であるか議論が主であるか、議論に力を入れたものか感懷を洩らすためのものか、ちよつと見當がつきかねる程である。しかし、意見を述べ、それだけ自由に奔放に作者の情熱をさらけ出し、社會の不正に對する反抗、人生の矛盾に對する厭惡の念が烈しく感じられるものではあるが、さういつた種類の物の陷りがちな皮相な感傷的な表現から免かれたのは、作全體を蔽ふゆたかなhumour（ヒユウマ）のためでなければならぬ。そのヒユウマの底から、併し一味の憂鬱な厭世的な氣分が滲透してゐるのが、この作品の一つの特質である。作者の出世作である。（野上）

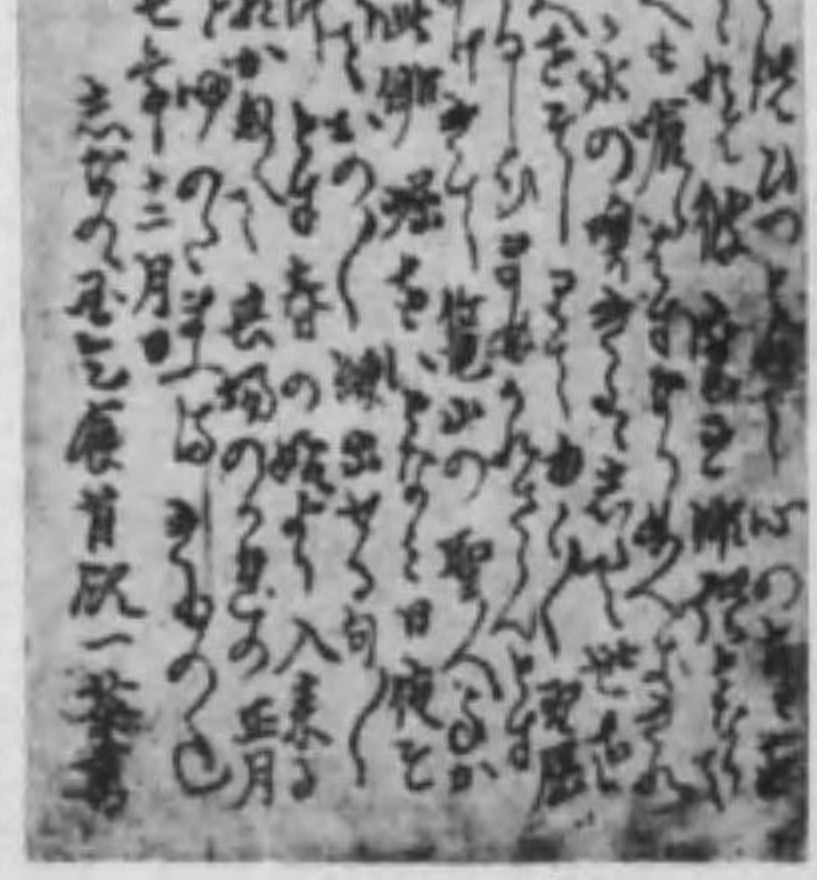
若葉集（わかばしふ）狂歌集 二册【編者】唐衣橘洲【刊行】天明三年【解說】天明調狂歌の撰集として最初の刊本で、卷首に橘洲及び置來の序がある。蜀山人の「奴凧」に、「萬載集よりさきに唐衣橘洲若葉集を撰ぶ。其のち朱樂菅江が故混馬鹿集あり。是を狂歌集のはじめとして其後の集ども數を知らず。若葉集の序は内山先生の長子の匿名にて置來とあり。實は先生の文なり。集の中に椿軒とあるは内山先生淳時の歌なり」とある。この集は類題に據らず作者別として編成したもので、卷中主なる作者及び作歌は、

狡歸九首、綿軒五十六首、朱樂菅江二十四首、濱邊黒人十一首、紀の定丸十六首、一文字白根六首、馬蹄十首、樋口關月五十二首、出來秋萬作十七首、蛙面坊二十四首、平秩東作五十七首、元の木網五十一首、四方赤良四十五首、智恵内子三十一首、物事明輔二十首、草屋師鰺十二首、鹿都部の眞顏十二首、喜木有政十六首、物事らとき十九首、古瀬見多男十二首、手柄岡持二首、古瀬勝雄三十首、唐衣橘洲百七首。

その他、錦江・北仙・風車・常閑・太木等、以下二十餘名の若干首づつを收めてあり、天明調發育時代の歌風を窺ふに足るべき好個の集册である。（野崎）

我春集（わがはるしふ）俳文俳句集 一卷【著者】小林一茶【成立】文化八年【名稱】本書は、もと題號のない稿本であるが、その卷頭句「我春も」の發句によつて、後人が假に命名したものである。體裁が「おらが春」（別項）に比べて雜駁ではあるが似てゐるので、「我春集」といふ名もよく相對する。【傳本】自筆稿本は信濃國湯田中の湯本五郎治（一茶門人希杖の後裔）の所藏である。【諸本】所藏者が大正十五年「一茶遺稿株番その他」に編入して刊行し、信濃教育會發行の「一茶叢書」第七編として「株番」と共に昭和三年に刊行され、その他「一茶新集」「一茶一代集」、岩波文庫等に收錄されてゐる。【内容】最初に、一茶の「我春も上々吉ぞ梅の


我春集序文


同上

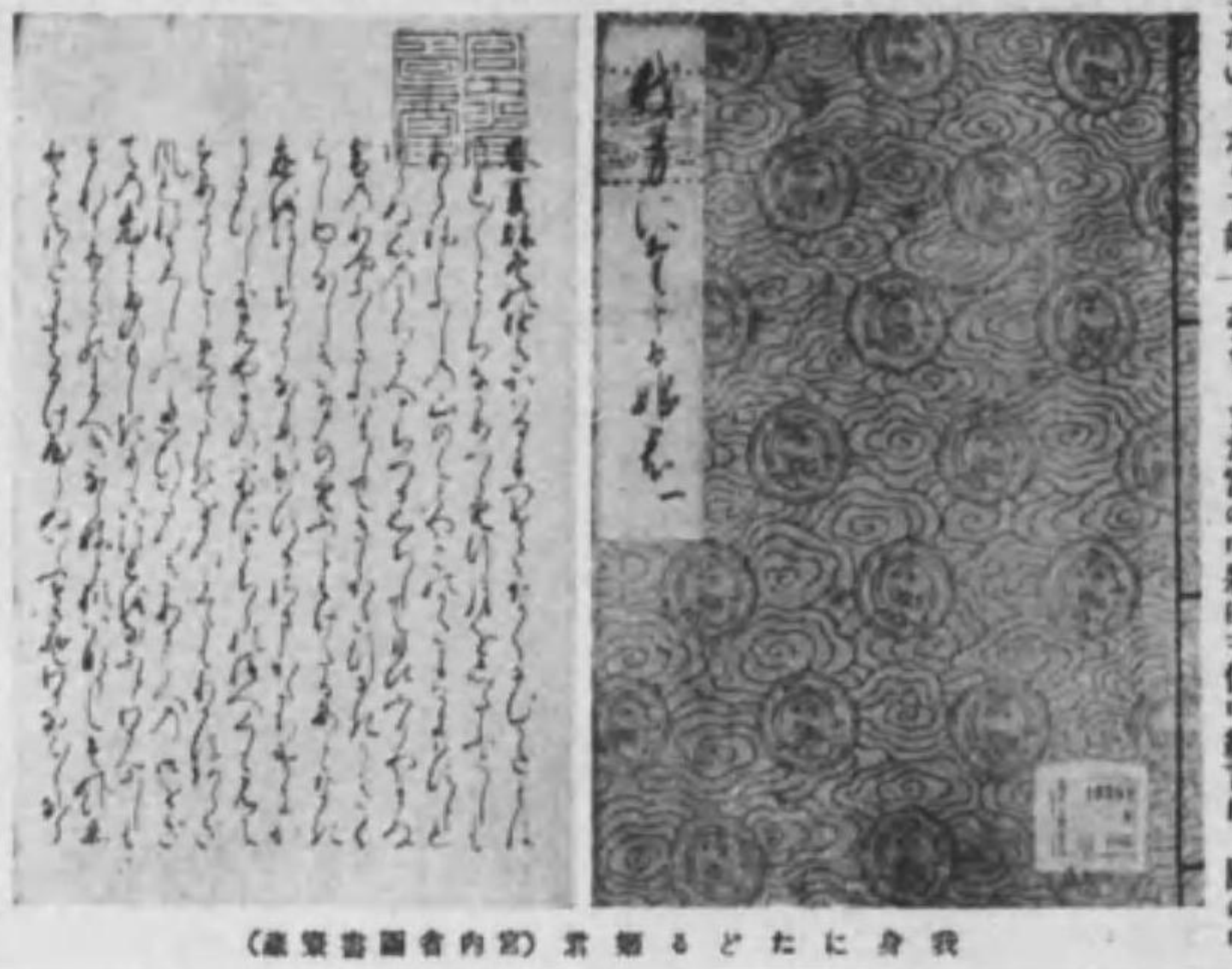
花」の一句があり、次に文化七年十二月の三卷の連句があるのみで、その他は文化八年正月一日より同八年十二月までの一ケ年間、一茶の下總及び江戸に於ける連句・發句、幷に隨筆的文章を編次したもので、中に乙因及び立砂に對する追懷の記事があり、交友の人々の發句も採錄されてある。發會序と題する自序があつて、その記名に「しなのゝ國乞食首領一茶書」と記してゐるのは、當時の一茶の心持を知るべき好資料である。（荻田）

若松賤子 わかまつしづこ　翻譯家　【本名】巖本嘉志子【生歿】元治元年二月岩代若松に生れ、明治二十九年二月十日歿す。享年三十三。【閱歷】岩代若松の士島田勝次郎の女で、生れた年が丁度甲子の年であつたので、幼名を甲子と呼ばれたが、後に自ら嘉志と改めた。雅號の若松賤子（初めはしづ子）は生地の名に因んだものである。生れて數歲戊辰の戰禍に逢つて父と別れ、母の愛によつて僅に身を全うしたが、間もなくその母も歿したので、東京の人大川甚兵衞に養はれ、次いで米人ミス・ミラアに倚つた。それは明治二年のことである。翌三年橫濱のフェリス女學校に入り、同十年十四歲で卒業するや直ちに同校の助敎となり、勵精數年、女敎師として令名があつた。同二十年二十四歲の時、女學雜誌社長で明治女學校長であつた巖本善治と結婚した。だが双棲十年に滿たず、宿痾の肺患で逝いた。【著作】賤子の作物・翻譯その他は「女學雜誌」の外、主として「少年園」「國民之友」「少年世界」などに寄稿されたものであり、これ等は有名な「小公子」「祝ひ歌」の二冊の外、遺文集「忘れがたみ」に收められてゐる。又「ジャパン・エヴァンゼリスト」の婦人欄記者として英文を數十篇起草したが、これは別に英文集「巖本嘉志子」の一卷に集められてゐる。【批評】賤子は早くから英語・英文に親しみ、英文學の素養が深かつたばかりでなく、文筆にも長じてゐた。だが多年敎師として敎化的方面に沒頭して來ただけ、その理想は家庭改良、社會の改善、より良い人生を作り出さうとする努力にあつた。文學の筆を執り始めたのも、この理想の實現に幾分でも貢獻したいといふ考からだつたといふ方が當つてゐる。だが女史の異常な文學的天分は、その意識無意識に拘はらず、いつの間にかその名を明治時代第一流の閨秀文學家のうちに伍させてしまつたのである。さうして最もこれに與つて力があつたのは、「小公子」（別項）の翻譯であつた。（梅田（泉））

若綠 わかみどり　歌謠書　半紙本五卷【編者】靜雲閑主人【名義】「松の葉」「落葉集」以後の新作を集めたので、松の葉の綠により、かく題した。【刊行】寶永三年刊か。京、姉小路堀川東へ入る町井筒屋茂兵衞版。【諸本】新群書類從第六・近代歌謠集（有朋堂文庫）・日本歌謠集成卷七所收。【解說】寶永三年四月の北條團水の序文あり。それによると、歌詞は編者自身の手に成るもの多く、作曲は野川檢校がしたらしい。第一・二卷長歌四十七篇、第三卷端歌三十五篇、第四卷二上り二十四篇、三下り七篇、騷ぎ十三篇。この兩卷は一種の歌に數首の歌詞を揭げたものが多いので、歌數はもつと數が多い。第五卷半太夫節十一篇。靜雲閑主人の自跋あり、歌詞は「松の葉」「落葉集」に出た歌の重出したものもあり、それ等の本に出た歌の替歌に至つては、一層多數を算する。この後「松の落葉」には、「若綠」に出た歌を取り入れてゐるものが多い。また正德三年刊「續松の葉」は本書の改題で、ただ第五卷の半太夫節に「通ひ路」が一曲增補せられたのみである。（藤田）

我身にたどる姫君 わがみにたどるひめぎみ　物語　八卷八冊又は四冊【作者】未詳【書名】卷一の初めに、音羽の里の姫君が、「いかにして有し行方をさぞとだに我身にたどる契なりけむ」と詠じ、その他所々に「我身にたどると詠め給ひし姫君」などとあるによる。【成立】「風葉集」には、「わが身にたどる」として、七首の歌が抄出されてゐる（何れも物語の卷四までである）。歌に異同なく、詞書も矛盾を來さないから、少くとも卷四までの現存本は、文永以前の形を具へてゐると思はれる。又「無名草子」や「色葉集」にも見えないから、文永を去ること遠からぬ時代の作であらう。その構想も亦當時の作品たることを推定せしめる。【諸本】宮內省圖書寮・前田侯爵家及び金子元臣氏（九條家舊藏本）に各一本藏されてゐる。前二者共に近世初期の寫本と認められ、本文も殆ど同樣である。なほ卷六の卷五に對する關係（後述）は諸本一致する。【梗概】〔卷一〕音羽山の麓に、尼君に養はれてゐる美しい姫君があつた。物心つくにつれて、父母もなく、心を打ちあけ頼る人もない心細い身の上を、日每に嘆くやうになつた。この尼は故宮の中納言の北の方で、その妹は麗景殿の女御、卽今の皇后宮の御母である。宮の中納言の妹は今の關白北の方で、その子に三位中將と、春宮に參つてゐる內侍の督がある。帝には數多の御子があり、皇后宮の御腹に春宮・女三の宮・二の皇子、中宮の御腹に三の皇子（兵部卿宮）・女四の宮があり、承香殿の女御の御腹に、女一の宮・女二の宮がある。數多の中で、二の皇子と女三の宮は世になく美しい。又臣下では三位中將がうるはしい人の第一に數へられた。この中將は女三の宮をこがれ慕ふ。さて音羽の姫君は關白と今の皇后宮との間の子であるが、深く祕して彼の尼に託したのであつた。或る雪の夜、三位中將は尼君の所で雪の霽れ間を待つと假宿りをして姫君を見染める。中將はその頃中納言に進む。二の皇子もこれを知つて通ふ。この事は尼君から后の耳に入り、姫はせんしの里に移される。やがて皇后がなくなられて、關白は終に里住の姫を引取つた。〔卷二〕中納言は、引取られた姫君のゐる對に山里で見覺えのある女房達がゐるので不審に思ふ。二の皇子は又音羽の里を訪れるが、何の消息も得られない。帝は中納言を女三の宮の後見にと思はれるが、それより先、中宮から女四の宮をと言ひ出されて、終にその事と定まつた。中納言の嘆きはいふばかりなく、度々三條宮に在す女三の宮を訪れ、終には會ふ事も出來たが、既に事は定まつてゐるので、何の御返事もなく、つれない御樣子である。婚儀の直前、中納言は病の床に臥し、儀式は延期される。〔卷三〕中納言は、なほ一度三條宮に參つたが、その甲斐なく、心やりに內侍督・對の方などを訪れ、殊に對の君の何人であるかを怪む。やがて期日が來て、中納言は嫉妬深い女四の宮と結婚する。八月帝の御讓位があり、春宮は兵部卿宮と定まり、女三の宮は終に關白に嫁はる。中納言は對の方の、女三の宮に似た姫を搔きくどく。この頃中納言は左大將を兼ね、院は出家される。女三の宮に會つた對の姫君は、母を見附けた心持で懷しみ親しむ。一方

左大將は堪へ難い思ひを對の姫君に晴らさうとする。姫は次第におぼつかなかつた身の上がわかるが、やがて春宮に參る事に定まる。二の皇子はかの山里の君がこの姫であつたと知り、盜み出さうとして果さない。かくて姫は春宮の御息所となり、內侍督立后、この頃、女三の宮、女四の宮、やがて春宮御息所も引つゞいてめでたい御氣色となられる。〔卷四〕十數年後帝は御讓位になり、姫宮と嵯峨においでになる。今上は先の兵部卿宮、中宮は「我身にたどる」姫君（音羽の姫君）である。左大將は關白となり、女四の宮との間に中將と姫君とがある。二の皇子は今の式部卿宮といひ、前齋宮との間に、中將と既に春宮に參つてゐる姫宮がある。前女三の宮は入道し、三條宮にあつて、一人の姫君をかしづき、關白は父の遺言を違へず、御母の宮（女三の宮）を疎かにはせぬが、北の方の物言ひのため、その姫君を春宮にすゝめることが出來ない。關白の中將と式部卿宮の中將は、共に父上達の若い時代その儘、優美の聞え高く、夫々院の宮の姫君、入道宮の姫君等に思ひをよせてゐる。この頃、皇居炎上、中宮は御子達と共に三條宮においでになる。この時春宮はひそかにこの宮の姫君にあはれる。明年、內裏新造、一回遷御され、やがて御讓位がある。承香殿に院の女御、藤壺に殿の女御、後凉殿に三條の女御、麗景殿に式部卿宮の女御と定まり、宮の中は限りなく華かである。また宮の中將は三位中納言に、殿の中將は二位宰相に進む。中納言は後凉殿を忘れかねて文を送るが、それは帝の御手に入る。帝は併し女御の知らない事といふので、知らず顏にもてなされる。物思ひに堪へかねた中納言は熊野詣に出立つた。その頃、藤壺・中宮（後凉殿）・麗景殿、相ついで懷姙される。やがて先帝崩御、女院は出家された。帝は嵯峨院の御末のないのもいとほしい、先例もないではないからとて承香殿に位を讓られ、一の皇子を春宮に立てられた。中納言は右大將を兼ね、左大將（二位宰相）も中納言となり、愈々時めくが、何れも獨住みの佗しさに悶々する。〔卷五〕新院は御讓位の後も、折々は女帝の事を思ひ出されて御使りがある。帝は嵯峨に行幸、院及び新院に御對面あり、御讓位の志もおありになるが、果されない。入道宮・中宮（後凉殿）・女院（我身にたどる）などの滿ち足りた御有樣を、皇后宮の母宮、卽ち關白北の方などは思ひの外に嫉み、關白を恨むのであつた。女院は殿の左大將に女二の宮を許される。左大將の喜びに引かへて、右大將の惱みは益々深かつた。嵯峨の女院が俄かに逝かれ、院も今の女院も世をそむかれる。式部卿宮さへ失せられたので、右大將は愈々淋しい姿であつた。やがて嵯峨の女院の御忌も果て、淸涼殿で八講が行はれる。帝は御精進の日が積り、少し面瘦せて物心細く御ながめ勝ちである。皇后宮は附添つて聽聞の座においでになつたが、ふとまどろまれると、氣高い人が帝に、なほ三年間御在位あるべきを歌で申上げたが、帝は聽き入れられないと見て目が覺めると、帝はただもとのまゝで眺め入つておいでになる。その後八月十五夜、帝は月光に催されて琴の祕曲を彈奏され、左右大臣は共にそのあはれを感じ入るのであつた。院も帝の夢を御覽になり、御心騷いで御使りされるうち、二十日頃院に行幸があるが、如何にも物淋しげに涙もろい御樣子である。やがて帝は俄かに御讓位、もとの承香殿に入御される。人々は今は專ら御勤行の生活に入られたものと思つたが、皇后宮が怪しんでまゐられると、經を誦してゐられたのに、卒かにお崩れになる。かくて新帝御卽位、御年十一、御弟十歲で春宮にお立ちになつた。〔卷六〕（「悲びの卷」）、物語の時代は發展せず、卷五と同樣、女帝の治世から崩御に至るまでを傍系的に述べてゐる）。新しい御代（女帝の御代）となつて交替した前齋宮は、育んでくれた御匣殿も失せ、その妹の大納言君と云つたのが尼になつてゐる許に身を寄せる。この姫宮は物狂はしい人で、尼君もこれを避け、後見もしないで佛前にのみ籠つてゐる。側近の事は御匣殿の時から仕へる老人に打ち任すが、なほ伊勢から來た中將といふ人、又小宰相などいふ人がゐた。兵衞佐が妹の宰相を尋ね、手箱に紙・香などを入れて贈つたのを姫が聞きつけて、宰相より先に箱を開き散らしたりした。尼君が院の三位の許に行き、その言により參內するのを姫は羨しがる。帝は尼君に姫の樣子を御尋ねになるが、物狂ひの事は申上げない。尼君は歸つて帝が心苦しげに思召されてゐるなど傳へ云ふと、姫は喜んで御文を上るので、帝は愈々怪しいと思はれた。姫の物狂ひは時經てもをさまる事なく、嵯峨女院の崩御があつて世間は一般に靜かであるのに、この宮の內ばかりは物騷がしい。五月雨の頃、御前の勾欄の下に、尋常でないしみ深い扇が落ちてゐるのを、誰のかと詮議をうるさくされる。新大夫といふ若人が、姫の心に叶はうとして、南門を守る仕丁に尋ね、夜出て行つた上﨟の事を聞き、その上﨟が落したのであらうと云ふ。尼君は物騷しさに堪へかねて、故女院に仕へた按察の君が襟かへてゐる所に移る。その折、姫君に傳はるべき



我身にたどる姫君（宮內省圖書寮藏）

ものを初め、總て持ち去つて後には何物も殘らない有樣を女房達が發見して憤る。中にも大貳といふのは、その叔母の聟姻、今、新宰相典侍として時めく人を尋ねて、この有樣を告げ、帝への奏上を賴むが典侍は心に掛けない。三位の乳母がこれを知つて奏上する。一方、新大夫は、如何にかして姫の心に叶ひたいものと、やがて源中將といふ若い君達を語らふ。內では女房達が姫の事を語り笑ふのを、帝は聞召してたしなめられる。前齋宮方の大貳は內に參り、宮の有樣をやかましく訴へるので、三位の計ひで、故女院の御莊の內を下される事となる。翌日藏人の少納言勅使として宮に行き、前讃岐守が宮仕する由を申上げる。かくて宮の內安らかに姫は心に任せて遊び戲れる。その後、帝を初め、女房達やその他の人々も行末事もなく、めでたく極樂往生を遂げられたといふ。〔卷七〕院は女帝の崩御を悲しみ、世をはかなまれ、政治も母后に任される。十月初め、三條院に渡られ、昔を偲び女院や中宮などに御對面がある。攝政は太政大臣となり、明年正月、帝の御元服があるが、攝政にも大將にも女君がないので、右大臣の姫君が女御となる。四月、太政大臣が辭して右大臣これに代り、右大將は右、左大將は左の大臣となる。帝は美はしく生ひ立たれ、ひたすら一品宮（皇太后宮）に睦まれる。宮も帝をなつかしく思はれ、女院の御喪があつて消息をかはされるが、さして深いものとも御考へにはならなかつた。所がこの頃、夜毎の夢に帝の御心の思ひの外であるのを見て惱み臥せられる。帝もかくて思ひはいやまさり、ひそかに一品宮のもとにお出でになつた。宮は夢の事を思ひ合せて、愈々深く歎かれるが、僅かに胸の痛みに苦しまれ、院中は大騷ぎとなり、祈禱などがあつて、やがて出家される。これを聞き、帝もお病みになつたので、人々は歎き悲しむ。その仔細がわかつて御二人の會見を計るが、既に宮は出家の後であつた。やがて宮は失せ給ひ、帝も打續きはかなくなられる。〔卷八〕新しい御代、當代は藤壺（大宮）の御腹なる二の皇子である。大宮は片時も立ち離れず、ただ民安かれと善政を布かれるが、帝はふと病にかゝられる。八月十五夜、大宮の夢に先の女帝が、ありし夜の御姿でお見えになる。さて帝の方にお渡りになると、帝も御涙であつたが、御惱みは忘れたやうに御快くなられた。帝も夢を御覽になり、夢に女帝が今より後聊かでも御惡あらばと殘し置かれた花の一房は現に寶の御箱の上に在る。さて九月頃左大臣が春日に詣ると、神託があつて、式部卿宮の女御（麗景殿）の姫宮今度の齋宮と定まり、母女御と共に注連の內に移り住まれる。左大臣はその留守を訪れると、なほ人々が姫をかしづく樣子がある。これは故齋宮（式部卿宮北の方）の叔母の遺子である。左大臣はこれを引取る。前齋宮は女御となり、父宮は式部卿となられ、左大臣の姫君も幼いながら女御に參る。今の政治は少しのたゆみもなく、諸殿を修理し、一方、院宮など多きため御封地の多いのを半ば省き止められ、國々の疲弊をいたはり、上達部の缺員も補はず、奢侈を禁じ、學問を興し、嘆き事のない世となつた。冬、嵯峨院崩御、太政大臣も薨じ、左大臣は大將兼內覽となる。右大臣は泊瀨に詣で旅宿の垣間見に心とまる女を妻とした。その人は前關白の家の女房に生ませた子である。さてこの度の春宮は大宮の三の皇子十歲許になられる。院、大皇太后宮、皇后宮など皆四十賀をされる時が近づくが、折しも女院が逝かれ、翌年は院の崩御があつて、皇后宮は出家される。新年春宮御元服、右大臣の姫君はその御息所となられた。皇后宮の姫宮といつて、はかなくなられた方は、この女御に少しも違はないので、帝は宮に見せたいと思召す。宮は小野に移り住まれ、參る人も稀れな寂しい御有樣であつた。

【構想】卷三までを前篇、以下を後篇と分ち見るべきであるが、內容は共に中心的な二人の男性と數人の女性を出して見ての戀は男性にとつて失敗に終り、女性はそれ〴〵女御・后となつて榮える。題名をとられた姫君も別に著しく活躍することなく、他の女性とその消長に變りはない。上述の二人の男性も主人公と云ふには餘りに姿が稀薄であり、他のすべての人物と同樣、個性的・內省的な描寫は殆どない。事件は王朝時代であるが、個性の動きよりも各家族の消長を推移に從つて記したものである。敍述も安易であつて高く評價出來ないが、かゝる個々の人物を輕視した集團的な構想に、よかれあしかれ、時代を反映する所は多い。なほ卷八の終りは文理の通じない所があり、並びの卷とした卷六は、卷五に並立し、人物も事件も傍系的であり、他の卷と異り著しく宗敎的である。その終りは如何にも物語の最後を示し、その次に事件的にも卷五に直接續く卷七の來るのは不自然である。それ故この卷は同一人の同時の手に成つたかどうか多少の疑ひを存する。

【參考】國文學解說藤田德太郎○鎌倉時代書目解說山岸德平（岩波講座日本文學）○「わが身にたどる姫君」の文學史地位 金子武雄（文學一ノ七）〔永積〕

若和布 わかめ 能狂言【格式】小習（和泉流）。

【梗概】丹波の或る山寺の僧が、寺普請の振舞をしようとあつて、弟子に伊勢若和布の新しい鹽のほろりとこぼれるやうなのを買つて來いと命ずる。弟子は若和布を見たことがないが、言ひ付け通り京へ出て、町中を呼び步いてゐると、人商人が來て話しかけ、事情を聞いて愚者もあるものだと合點し、內の女を賣らうとて女を呼び出して見せる。弟子は驚いて註文の數々を擧げると人商人は、食ふ物ばかりが肴ではない、女に酌をさせるのも肴であるし、伊勢女に京男とて、伊勢の女が最上で、その上これは上々の若女（わかめ）だと答へ、色も櫻色で目元まで鹽がこぼれさうではないかと說くので、買ひ求めて寺へつれ歸り、住持に叱られる。弟子は途方に暮れ、この上は還俗して女夫にならうと酒盛を始める。この騷ぎに住持が來て、色々に言ひがかるのを打ち倒して二人は逃げる。

【解說】寬正の糺河原勸進能の折にも演ぜられた古い狂言である。番組には「若メ」と見えてゐる。人商ひの事は、「磁石」（別項）にも見えてゐるが、當時はまだ〳〵行はれてゐたものであらう。「閑吟集」に見える「人買船」の歌も思ひ合はされて興味深い。若和布は古くは丹後の名產であつたものらしく、「新猿樂記」には「丹後若布」と見えてゐるが、「國姓爺後日合戰」に「お土產召せ〳〵二見せゝ貝・伊勢若布」とあるところを見ると、後には伊勢の物が有名になつたものらしい。この狂言は若和布と若女との間違ひが種になつてゐるが、伊勢女は伊勢若和布に掛けたものなるべく、古來京女とか上總女などは聞えてゐるが、伊勢女の事は所見がない。〔藤田〕

和歌ものあらがひ わかものあらがひ 「四十二の物爭」を見よ。

和歌八重垣 わかやへがき 歌論書 七冊

【著者】有賀長伯【刊行】元祿十三年。享和元年改板【內容】序文に、「和歌稽古の始めより五句の次第、會席の作法、禁制用捨、病の沙汰、題のよみかた、てにをは等に至るまで盡く是を記し又もろもろの詞を部類して註釋を加ふ。猶物語等の言葉は數多けれど和歌に詠じなれぬ言の葉ののするなし云々」とあるによつてこの書の內容を窺知する事が出來よう。創見のあるものでなく、ただ集成の功をみるべきもの。今左に目次をあげると、卷一は、（一）和歌稽古の事、（二）歌可讀心持の事、（三）歌案じやうの事、（四）歌の去嫌の事、（五）歌の詞の事、（六）題の歌の事、（七）詞書の歌の事、（八）五句の事。卷二は、（九）歌のとまりの事、（十）歌の文字の事、（十一）てにをはの事、（十二）切字幷切どころ聞えぬ歌の事、（十三）會席用意幷法度行跡、（十四）懷紙兼題竝當座の題心つかひの事。卷三は、（十五）卽興の事、（十六）挨拶の歌の事、（十七）返歌の事、（十八）四季戀雜の結び題にあまたいであふ熟字の事幷讀方、卷四から卷七迄は、いろは順に詞を分類して註釋讀みざまを附してゐる。初心の手引としては當時便利なものの一つであつたらう。【價値】長雅の門に出で、和歌の普及に功のあつた長伯には、この書出版前にも「和歌世々の栞」（貞享三年）、「初學和歌式」（元祿九年）、「歌林雜木集」（同九年）、「濱の眞砂」（同十年）、「和歌分類」（同十一年）、その他の啓蒙的の述作があるが、この書はその代表的なものである。〔藤川〕

若柳流 わかやぎりう 舞踊の流派

【名稱】流祖の姓による。【解說】花柳流（別項）の元祖初代壽輔の門から出た花柳芳松が、一派を開いて若柳壽童と名乘つた。先年高齡を以て歿したが、明治年間の名手の一人であつた。門弟吉藏が二代目を嗣いで今に及んでゐる。若柳流の特色が未だ一般に知られてをらぬのは、歷史の淺い故もあらうが、家元の努力の不十分にも由るであらう。〔小寺〕

我宿草 わがやどぐさ 隨筆 三卷一冊

【著者】古來傳へて太田持資（道灌）の作として、本書刊本の卷頭にも「太田道灌自撰」と揭げてあるが疑しい。【別名】太田道灌隨筆【刊行】未詳。享和三年の跋がある。【諸本】刊本の外に數部の寫本があつて、文句及び文段に多少の出入がある。中に「太田道灌隨筆」と題した一部もある。これは武藏國荏原郡大崎村安樂寺の所藏を林道春が閱してこの題名を附したものと云ふ。【解說】卷一に天照大神の德、我皇室の尊嚴、佛法の害毒、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の義等數條を收め、卷二・三に亙つて藤原藤房・楠木正成・赤松圓心・僧文觀の會談、又正成・新田義貞・足利直義・名和長年等の會談、正成常に平重盛を景仰した事、正成の節義純評、吾妻鏡の正本に據る八島の戰談、正成・藤房の會議、兩人の主張等を收め、最後に兼好と徒然草の短評を載せてある。畢竟治國の要道と史的人物の評論とを寓話的に述べたものと言へようが、書中の所說が事實に基いたものとは思はれぬ。數箇の插圖は俗受けのためであらう。享和三年浪速住學與齋の跋がある。與齋は上田秋成の事か。卷末に道灌の小傳及び後裔の記事が附錄されてゐる。〔和田〕

若山牧水 わかやまぼくすい 歌人

【本名】繁。

若山牧水

【生涯】明治十八年八月二十四日宮崎縣東臼杵郡東鄕村坪谷に生れ、昭和三年九月十七日沼津千本濱の自宅で病歿。享年四十五【閱歷】延岡中學校卒業、明治三十七年四月上京、早稻田大學に入る。鄕黨の間には早くその文才歌才を認められてゐたが、尾上柴舟（別項）の門に入つて忽ち前田夕暮等と共に歌壇に進出し、浪漫的の聲調に靑春の心を捉へた。四十四年創作社を起して、雜誌「創作」を主宰し、經營の困難と闘ひつつ、後進の誘導に努めた。早大卒業後、一時新聞記者生活に入つたこともあるが永續せず、家庭生活を營んだ後も飄然旅程に上ること多く、遍ねく各地を歷遊して自然に親しみ、その歸與に徵した作品がおびただしい數に上つてゐる。それと共に、淸新な紀行をつづり、文情融合、紀行文學の一異彩をなしてゐる。大正十五年、詩歌綜合の雜誌「詩歌時代」を發行したが半歲にして廢刊した。頗る酒を愛し、醉へば、愛誦の詩を吟じ、會心の歌を誦じて、夜を徹することさへ多かつた。夫人喜志子も歌人として認められ、またよく內助の功を盡して、良人の死後もなほ創作社の經營を繼いでゐる。四年八月、有志によつて沼津千本濱公園に、「幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく」の一首を刻した歌碑が建立された。【著作】牧水全集十二卷（改造社）がある。單行本としては、「路上」「死か藝術か」「秋風の歌」「溪谷集」「くろ土」「山櫻の歌」等の歌集の外に紀行・歌話の書が多い。【歌風】純情感傷の作風は彼の初期の歌集「海の聲」「獨り歌へる」に依つて現はされたが、「別離」（別項）に至つて佳境に入つた。そして「死か藝術か」あたりには、人生と藝術に對する觀照に深みを見せたが、要するに彼の歌の本色は、その聲調の如く明朗で、自然に親しみ深い點にあつて、これが晚年に及んで圓熟渾成した。〔土岐〕

和歌六體 わかりくたい 和歌

【解說】和歌の分類の一種であつて、詩の分類である六義卽ち風・雅・頌・賦・比・興を、和歌の分類に適用したもの。「古今集」假名序に見える分類である。そへうた（風）・なぞらへうた（比）・たとへうた（興）・ただことうた（雅）・かぞへうた（賦）・いはひうた（頌）をいふ。但し「奧義抄」では、六體として長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・折句歌・沓冠折句歌の六を擧げてゐるが、古今集序の和歌六體を普通にさすと見るべきである。この和歌六體は詩の六義から來てゐるが、そのまゝをとつたのではない。卽ち「なぞらへうた」が比であり、「たとへうた」が興であり、「かぞへうた」が賦であり、「いはひうた」が頌であることは大體一致するが、風を「そへうた」とし、雅を「ただことうた」とした事は一方は民謠と宮廷詩との區別であるに對し、文體では譬喩的表現と直接的表現との區別になつて一致しない。これは六義をとりながら、日本化しようとする意識がかくの如き變化を與へたものであらう。六體は必ずしも精細なる分類ではなく、全體も統一的ではないが、直接的表現と間接的表現とを大體の區分として和歌を分類したのは、分類として注意さるべきである。

【參考】奥義抄（藤原清輔）○古今六義諸說（小澤蘆庵）〔久松〕

和歌六體考（わかりくたいかう）　歌學書　一卷　【著者】高橋殘夢【成立】未詳【諸本】寫本として行はれ、靜嘉堂文庫に自筆本を所藏。【内容】古今序に、そへうた、かぞへうた、なずらへうた、たゞことうた、いはひうたの六種の歌のあることをのべてゐるが、今流布本の本文にある例歌は貫之のかいたものでない事は先達のすでに論じてゐることで問題ではない。が、先哲が皆詩の六體（風・賦・比・興・雅・頌）に對へて說かうとしてゐるのは誤謬で、貫之の「からの歌にもかくぞあるべき」と言つたのは、謙退辭讓の詞で、唐歌の六體が和歌の上に傳はつたといふ義ではない。「强ひて詩の六體に合せて說かむとなづむ」から、遂に說き明かすことが出來ないのであると論じ、貫之の六種の歌を國語學的に分解して說明し、各項に例歌をあげ、終りに師說を祖述した自然說の歌論を述べてゐる。【價値】和歌の六體を述べたものとして比較的まとまつたもので、參考にすべき點が多い。詩の六義と切り離して考へようとした態度にも特色を見る。彼が貫之を尙び、「古今集」を崇拜してゐた立場も自らあらはれてゐる。語學者としてすぐれてゐた彼の說だけに、たとへば、いはふはいふあふの義で、ふあの二音を「は」と約めていはふと言つたのであるといふやうに分析的に說明してゐるところにも聞くべきものがある。而も彼が歌の感情を尙び、文法的には誤があつても、感ある歌がいゝと說いたのは、桂園の流をくんでゐたものとしては當然だとするも、古今序中の六種の歌について述べたものとしては、必ず一讀すべき良書である。〔藤川〕

別れた妻（わかれたつま）　小說　【作者】近松秋江【發表】明治四十三年九・十月の「早稻田文學」に「別れた妻に送る手紙」といふ題で連載。【刊行】後に「別れた妻」と改題單行。現代日本文學全集・明治大正文學全集等所收。【梗概】女に去られた後の淋しさを傳へる一部分と、男の眞情を吐露する部分とを除けば、大半は男の遊蕩生活の報告である。男は妻と別れてから、よく待合に行つた。そのうちに一人の馴染藝者が出來た。彼は女の眞實らしくもあり、僞りらしくもある言葉や素振にも拘らず、段々その女に引摺られて行つた。彼はその女との關係を友人や知人にも話して得意がつた。するとその中の一人が、彼女を買ひに行つて、その後でさん〳〵彼を弄つた。彼は怒ることも出來ず、殘念ではあつたが、表面は陽氣に面白可笑しく、友人たちの前で女からしごきを貰つた夜の樣を、女の身振や聲色まで眞似て話した。【批評】これは彼の出世作であり、代表作である。手紙らしい形式は、冒頭數頁と、ほんのところ〳〵の部分だけで、全體としては物語小說であるから、改題された方が妥當だ。去つて行つた女に對する未練執着が如何にも力強く赤裸々に描かれてゐるので、讀者は男の泣言だと思ひながらも、強く引附けられてしまふ。特に女に對して取殘された淋しい氣持を縷々と訴へ、自分の孤獨な慘めな姿を描き出す邊りは、文章も割合に素直で、男に對する同感をそゝるものがあるが、しかも後半、藝者との交渉を知らせる邊りからは、男の報道する氣持に不純な分子がはひつて來て、それが作品をも妙に不純なものにしてゐる。どうにもならない遣る瀨なさから、出た遊びではなく、見せつけるやうな邪心があり、それが作品をも濁つたものにしてゐる。〔宮島〕

わかれ道（わかれみち）　小說　【作者】樋口一葉【發表・刊行】明治二十九年一月、「國民之友」附錄。一葉全集・現代日本文學全集第九編・明治大正文學全集第十卷等に所收。【梗概】町内の仕立物などをして獨り淋しく裏屋住居してゐるお京の許へ、明暮れ話しに來る傘屋の吉三といふ男があつた。彼は不幸な孤兒で、仕事にかけては腕きゝのしつかり者だが、並はづれて矮身のため人から馬鹿にされるので自暴氣味になつてゐる。併し若い小粋なお京へ眼をつけて出入りする者の多い中で、親身に近づいて來るのは吉三だけだつた。自然お京も彼を弟のやうに可愛がつた。緣邊のない二人は夜更けまでもよく互の不運をかこち合つた。その中にお京を妾にしようとするものがあつた。吉三は前から、そんな事はするなと止めてゐた。お京も進まぬ儘に兎や角と迷つたが、味氣ない今の身を考へては、いつそ腐れた縮緬着物で世を過さうと決心する。年も押し詰つた最後の夜、再び別れて行かなければならない二人は、それ〳〵の淋しい思ひを感じて眼の中を熱くした。【批評】極く短かいもので、際立つた處もないが、のけ者の吉三がお京に手頼らうとする氣持、親身に吉三をいたはるお京の氣持、それ等の交渉のうちに、か弱い女の身故に周圍の誘惑に負けて身を墮してゆく、その生活の岐路に立つお京の姿が、こま〳〵と述べ盡されてゐる。〔福島〕

和漢混淆文（わかんこんかうぶん）　國語學　【解說】我が國の文語の一種。正式の漢文や變體の漢文（別項）の如き漢文系統のものと、中古の歌詞や假名文の如き和文系統のものとを適宜にまじへ用ひ、後世の口語に用ひる語や語法をも隨所に加へた通俗的の文語であつて、保元・平治・平家・太平記の如き軍記物語の文がその代表的なものである。漢字に片假名を交へて書くのがその本來の形と思はれ、古くは漢文の如く倒讀の書法も混へたが、後には片假名の代りに平假名を用ひたものも多い。明治の普通文も大體の性質から見れば、この種のものと謂つてよい。【起原及び沿革】平安朝の初め、萬葉假名の略草體から平假名が發生して、主として女子の間に歌や消息を書くために用ひられたに對して、專ら漢字漢文を用ひた男子の間には、漢文の訓讀法を示すために、漢字の傍に書き加へた萬葉假名の略體から片假名が發生したが（片假名參照）、これ等の假名と共に、漢文の行間又は欄外に書き入れた註釋等の文の中に、純粹の漢文の法式に依らず、漢字の下に片假名を小書きして添加し、漢字と假名とを併せ讀むべき書法を用ひたものが生じたのである。この一種の假名交り文ともいふべきものの最古の例の一つとしては、平安朝初期書寫の金光明最勝王經註釋の書き入れの文がある（「日本文學論纂」所收春日政治氏の同書に關する論文參照）。かやうなものは、實用上便利であるために、僧侶など漢文を講ずる人々の間に次第に行はれて、遂に「今昔物語」「打聞集」、又は「江談抄」「古事談」（各別項）など院政時代の說話集に見るやうな、漢字の間に活用語尾や助詞・助動詞などを片假名で小書きした文を成すにいたつたものと考へられる。この種の文の用語は、大體に於て當時の口語に近かつたであらうが、しかし、漢文に親しんだ人々の書いた

ものであるから、漢文訓讀の外には用ひられない語や語法も混じてゐたであらうし、その書法にも、漢文式の倒讀するものも混じてゐたであらう。かやうな用語及び書法に於ける漢文的要素は、人によつて、又場合によつて、多いのもあり、少いのもあつて、或るものは變體漢文に近く、或るものは純粹の假名文に近かつたであらうが、後には、漢字の代りに片假名をも用ひ、小書きした假名も、必ずしも常に小書きしないものも出來たことと思はれる。

鎌倉時代以後、口語が次第に變化して、中古語との差異が多くなつて行き、文語と口語とが次第に分離して行つた時代に於て、新に興つた文學、殊に軍記物語の文は、漢文・和文兩系統の文語を巧みに綜合し、當時の口語をも混へて特徴ある文語の一體を成した。これを明治時代に和漢混淆文と名づけたが、大體に於て、從來の假名交り文の系統に屬するもので、その原形は漢字に片假名をまじへ、所々倒讀の書法を用ひたものであらう。この種の文が世に行はれて、その後江戸時代に至る間にあらはれた諸種の新興の文學、例へば、謠曲・淨瑠璃・假名草子・浮世草子・讀本及び俳文などや、江戸時代の漢學者の論著（漢文のものを除く）や、隨筆雜記などの多くには、この種の文が用ひられた。もつとも時代の下ると共に、その用語にも變遷があり、この種の文の中にも、漢文と和文との要素の多少や後世の俗語の語彙や語法の混加の程度や、その取り入れ方など樣々であつて、その中に類を分つべきであり、書法上に於ても、漢文式の倒讀もなくなり、假名も平假名を用ひるものが多くなつて、その特徴は稀薄になつたけれども、なほ用語の上に於ても、書法の上に於ても、他の系統の文語に對して區別さるべき特質をもつてゐる。明治以後、漢文直譯體の假名交り文が盛んに行はれた時も、小說などには、やはりこの系統の文が用ひられた。明治二十年代に國文學の研究が復興するに及んで、和文系統の文も行はれたが、國民一般に通用すべき雅に偏せず、俗に墮せざる文語の必要が唱へらるゝに及んで、江戸時代の學者の書いた和漢混淆文が、これに近いものとして教科書などに採用せられ、現代の普通文（別項）を生む一要因となつたのである。【備考】「古事類苑」文學部には、和漢混淆文を三種とし、前述のものの外に、假名のまだ出來なかつた時代に漢文と邦語とを混へて作つた一種の文體（奈良朝の續文等に用ひられたもの）と變體の漢文とをこれに含めたが、現今ではこれ等を除外するのが普通である。（文語參照）【參考】「文語」の參考を見よ。〔橋本〕

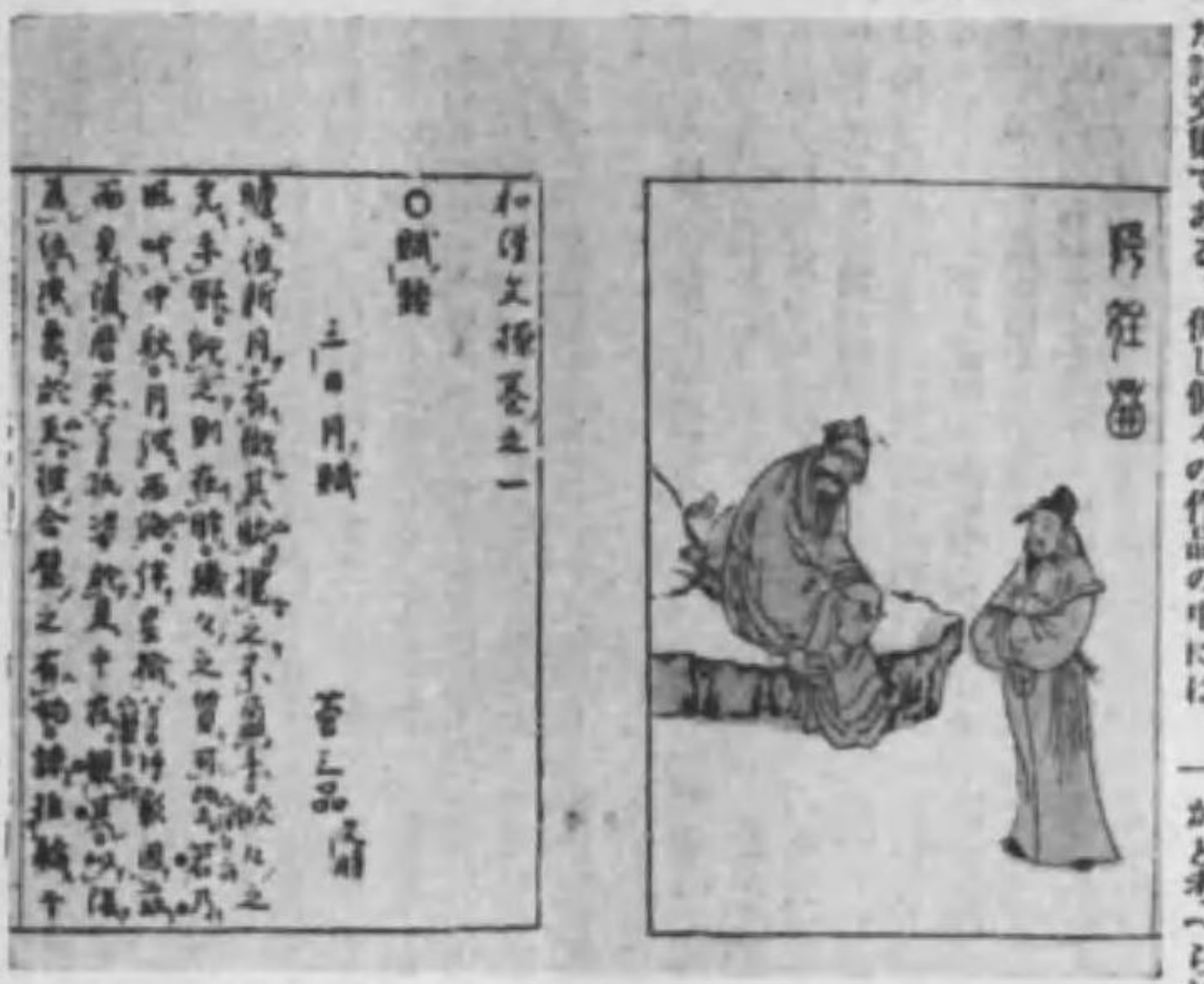
和漢雜笈或問（わかんざつきふわくもん）　隨筆　寫一卷　【著者】鵜飼信興（錬未詳、水戸の人）【名稱】一名「水戸史館珍事考」【解說】人の質問に答へて謠曲文中の雜句、事物の異樣なる稱謂、俗諺・故事等を解釋したもので、何れも出典を舉げてある。内容凡て七十七條、蟬丸の謠ニゲニヤカウクワンモトヒヲキリナカバダンニ杖スト云事に起り、二十ヲ念ト云事に終る。卷首に引用書目九十三部を揭げてある。序跋はない。〔和田〕

和漢禪刹次第（わかんぜんさつしだい）　禪史籍　一冊　【著者】未詳【解說】初めに南禪寺の境致諸塔頭を舉げ、次に天龍寺・相國寺・東福寺・萬壽寺・建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺の境致諸塔頭住持歷代等を舉ぐる所に精粗がある。次に十刹位次・關東十刹・諸山を列舉し、妙心寺の塔頭を舉げ、卷末に大唐禪刹位次とあつて、宋の五山即ち徑山の興聖萬壽寺等の境致十刹即ち中竺天寧萬壽永祚寺等の境致甲刹即ち雪竇顯報寺等の境致を列舉した。卷尾に、「右記日者閑庭田大納言家證寫永祿八年乙丑暮春吉日現鹿苑集在印」とある。この本續群書類從に收む。同種の本に、「支竺桑名山諸寺記錄」「和漢禪刹及次第」等がある。〔鷲尾〕

和漢太平廣記（わかんたいへいくわうき）「閑際筆記」を見よ。

和漢文操（わかんぶんさう）　俳文集　七卷七冊（外に別錄として和漢百花賦一卷一冊がある）【編者】各務支考【成立】享保八年秋【刊行】同十二年九月【諸本】俳諧文集（俳諧文庫）・風俗文選・和漢文操・鶉衣（有朋堂文庫）所收。【由來】門弟蓮二房（編者の變名）の序によると、本書は編者の遺稿といふことになつてゐる。即ち正德元年に著者が亡命した時既に本書の稿があつたもので、編者の遺命を繼いで蓮二房等が上梓することになり、享保八年秋編者の墓前（美濃山縣北野）で序を認めたとある。墓は亡命後自ら既に設けて置いたものであるが、遺稿云々は編者の術策で、實際には編者自ら梓行したのである。なほ本書は享保二年同じ編者によつて「本朝文鑑」（別項）の編まれた當時既に計畫されてゐたものの如く、文鑑の渡部吾仲の後序、本書の同人の假名序にその事が記されてゐる。本書には吾仲の享保八年三月の假名序と蓮二房の同年秋の眞名序とがある。【内容】編者とその門下・俳友を主とし、蕉門の作者その他を從として詩文の小品を輯め、これに詳細なる評註を加へ、以て我が國詩文の新規格を示さうとしたもの。賦・詩・歌・辭・行・賦・序・奏表・敎令・書狀・贊・頌・辭・論・解・箴・記・銘・傳・弔祭の二十一類に分つて類聚してあり、文は凡そ百六十篇ある。作者は大凡九十名で、菅原文時・兼好法師・林道春・正親町公通・宇治通園・澤庵和尚・阿佛尼・寶取（宋）・源義經・左衞門ノ尉・楠正成・熊谷入道・荒木山城守・板倉内膳ノ正等の如き俳人以外の各種の古人もあれば、宗鑑・芭蕉・丈艸・浪化・秋之坊・乙由等の如き名ある俳家もあるが、最も活躍してゐるのは編者とその門下俳友で、渡部吾仲・各務右範・岡東羽・仙石廬元坊（里紅）・林有牽・井上素平その他約五十名に及んでゐる。殊に編者は盧乙子・東花坊（東華坊）・西花坊・蓮二房（丹名の連）・渡白狂（渡部ノ狂）・桃花仙・野盤子・華表人・羊頭叟・椿尾子・是佛房・獅子老人の名を以て多數の作を收め、且つ自ら傍冢司・鳥有仙の名に隱れて、本集中の詩文に詳密な評註を加へたのである。編者が本書に試みた新機軸としては、第一に眞名のみで書く和文の體を定めて、漢土の文章に見難い助辭を多く用ひ、見たところは漢字の連續でこれを讀めば和文の調を失はぬ如き一體たらしめた。例、「文ノ賦」（東花坊）。第二に眞名の和詩を創めた。例、「贊秋風像ニ」（蓮二房）。第三に假名の詩に萬葉體の韻を用ひた。例、「假名用ノ眞名韻ノ序」（烏安道）。第四に熟語に二字韻を用ひた。例、「田家ノ賦」（蓮二房）。第五に連歌・俳諧を漢和の如く交會せしめた。例、「連俳互照ノ序」「連俳歌仙行」（蓮二房等）。第六に俳諧聯句に換韵の法を案じた。例、「俳諧求韵ノ序說幷短歌行」（土方駝齋）。第七に大和聯句の格を定めた。例、「大和聯句ノ序幷短歌行」（渡白狂）。第八に聯の一體を設けた。例、「大小ノ聯ノ序」（蓮巳翁）。以上の八體は、編者が本書に於て發

表した新機軸の主なもので、編者の自負するところであつた。かくの如く本書は單に詩文を集成しようとするよりも、我が詩文に新體を創始しようとしたもので、從つて俳文集としては蝶穀な惱みがあり、寧ろ問題を提供した詩文集である。併し個々の作品の中には、誦すべきものも少くはない。なほ本書の別錄として「和漢百花賦」一卷が梓行せられた。所謂假名の和文を以て梅以下餅花に至る和漢の百花を賦したもので、編者の作である。編者は橘尼子・白狂の名に隱れて自ら註し、獅子房蓮二の名で評してゐる。（各務）


和漢文操（松宇文庫藏）

和漢篇 わかんへん

連歌式目【作者】一條兼良。但し本篇の後に附する文龜元年五月の肖柏の奥書及び「漢和法式」（別項）の冬良の明應七年三月の奥書によると、現存の本篇には、肖柏の商量が多少加はつてゐるかと思はれ、又後土御門天皇の和漢連加が加はつてゐるものかと考へられる。【諸本】寫本として傳はるものの外、群書類從連歌部に所收。【解說】兼良が和漢聯句（別項）の法式を七條に分つて定めたもので、漢文で書いてあるが、第一條に大概の法連歌の式目を用ひるべき事と規定してゐるやうに、大體連歌の式目（應安新式）に依つてゐて、ただこれを聊か緩くする方針になつてゐる。これは漢句がまざり、從つて漢句中漢語が現はれる關係上、詞の扱ひに窮屈な法を立て難いからである。そのうち、和句・漢句の連ねらるべき句數を規定する事は、聯句・連歌に於ける特殊の事項であるが、和句・漢句各々の連ねらるべき限度を五句迄と定め、而も漢句の場合は對句を要とすることがあるので、特に六句までを許してある。去嫌（別項）に於ては、例へば連歌に於て七句隔つべきものを五句に、五句隔つべきものを三句にするが如く緩め、山類・水邊・居所等に體用の別を立てる要なしとしてあるのは、窮屈な法を立て難いことに基くのである。又漢語が多く出る關係上漢語の扱ひを特に規定してあつて、金烏（日）・銀竹（雨）・鯨（鯢）の如き異名を用ひる場合は、本體（日・雨・鯨）に就いてその季を定むべき事とし、異名でない漢語で、季乃至所屬の問題となるべきものに就いては、例へば曖芳や紅は花ある意があるから春とするとし、淑氣・蟾魄・踏青の如きも春とするとし、錦字・私語の如きは戀、名利塵・浮跡の如きは述懷とするといふやうに定めてある。本篇は基本となるべき大綱を定めたものであるが、後世に對して規範となつたものである。（潁原）

和漢遊女容氣 わかんいうぢよかたぎ

浮世草子五卷【作者】無署名であるが、江島屋其磧。【刊行】無刊期。但し末尾の一節「今年の冬は父世之介の卅三回忌、并にその作者二萬翁西鶴法師が廿五年忌、一所に都にて弔ふべし云云」より推定して、享保二年の出版と見るべきか。【諸本】安永二年に、「一代男後日咄榮花世續男」と改題して再刊された。江戶時代文藝資料第五所收。【由來】本書を享保二年出版、其磧作とすることに依つて、自笑・其磧確執中の製作となる。なほ同年に、八文字屋より「傾城野群談」（別項）、江島屋より「國姓爺明朝太平記」が出版され、ともに近松の「國姓爺合戰」（別項）の影響を受けてゐるが、本書も亦同樣である。これも專ら自笑との競爭心の然らしめたものと考へられる。【梗概】（卷一）天和二年臘月半ば、大船好色丸が女護島に着いた。末社七人を引連れた好色修行の世之介が、日本國を總つて更に今こゝへ島渡りしたのである。かくて世之介は島の女王玉夫人の配となつたが、後また女王の妹淵底女と契つて、或る夜島を脫出せんとする所を追手に捕はれ、こゝに落命する。淵底女は獨り舟に身を潜めて何處ともなく漂流する。（卷二）日本國平戶に漂着した淵底女は、かねて世之介の胤を宿してゐたので、男子を安產してその身は空しくなる。その孤兒は長崎一官と稱する奇妙の半平と云ふ者に養育されて成人し、敏き若者となつた。かくて自ら飴をねる工夫をなし、これを長崎三官飴と名づけて賣り歩いたが、評判よく後加藤內三官飴と名を更へ、津々浦々にその名が高くなつた。その內加藤內三官は養父が歿して大阪に出で、遊山舟の大盡、京の立寶の鑄六が彼を見かけて、我が一家の故人二代男世傳に酷似してゐるとて、彼を世傳の跡目にするため都へ同道する。（卷三）加藤內は思ひも寄らぬ長者の跡取となつて名を世繼之助と改め、嵯峨の下屋敷に若隱居して榮華な生活を始める。二十人の美妾から意外な話が發展する。即ちその一人に小るいと云ふ女があり、更にその情人山本花之丞と云ふ旅芝居の太夫も女裝して共々勤めてゐる。花之丞は同じく奉公してゐる宮井と云ふ女から、その情人の武兵衞に正宗の寶刀を託せられ、これを渡してやる。そのため武兵衞は親の勘當が許されて宮井を連れて國への歸參かなひ、花之丞と小るいも夫婦となることが出來た。（卷四）世繼之助は嵯峨の生活にも飽き、二十餘人の妾に暇を取らせ、島原の遊興に出かける。又大阪新町などにも遊び、立派な大盡となる。（卷五）世繼之助は江戶へ行つて吉原へ通ふ。新町で根引した難波も伴うて來たが、後手代惣兵衞に與へてその女房とさせる。併し惣兵衞には先妻の遺兒ねなると云ふ娘があつて、後妻が傾城の果なるため、折角良緣があつても破談になる。難波は義理を立て、出家して鎌倉の尼寺に去る。世繼之助は江戶に遊び暮すうち、父世之介の卅三回忌、并にその作者西鶴の廿五年忌も近づいたので京へ歸る。さてその後の世繼之助は、歷々の息女を妻に迎へて家は富み榮えた。【解說】構想上、近松の「國姓爺合戰」と西鶴の「好色一代男」（各別項）の影響は著しい。即ち、卷一の發端、世之介が女護島に着くと云ふのは「好色一代男」の最後をそのまゝ受け繼いでゐる。而して淵底女が一人舟に乘つて平戶に到着するのは「國姓爺合戰」の「もろこしぶね」をもぢり、主人公の前名加藤內三官は和唐內と父老一官の名をもぢつたものである。その後の筋は、加藤內三官改めて世繼之助の大盡生活の描寫であるが、次第に複雜な趣向を凝らすやうになつて來てゐる。小るい・花之丞、及び宮井・武兵衞の事件は、本筋と重要な關係はないが、傾城難波の件と共に、可なり多く筆を費してゐる。（吉田）

和漢聯句・漢和聯句 わかんれんく かんなれんく

連歌・俳諧【名義・名稱】連歌・俳諧の一體として、和句と漢句とを雜へる形式のものをいふので、發句が和句で始まるものを和漢聯句といひ、發句が漢句で始まるものを漢和聯句といひ、この兩者を總稱して聯句連歌といふ。【性質】和漢・漢和に用ひる漢句は凡て五言の句である。連歌の方に於て、和漢聯句の式目として「和漢篇」（別項）が成り、漢和聯句の式目として「漢和法式」（別項）が成つてゐて、連歌の方の和漢・漢和は大體それぞれこの二つの式目に從つて居り、俳諧の方の和漢・漢和も大體この二つの式目に準據するのであるが、或る點は變改され、或る點は細かく規定されるなど多少の變革も行はれてゐる。なほ式目は凡て百韻に就いて規定したものである。【連歌の和漢・漢和】和漢聯句に於ては擧句は漢句とし、八句目を漢句とする。漢和聯句に於ては擧句は和句とし、八句目を和句とする。さて和漢聯句に於ては、和句なり漢句なりを附け連ねる限度を五句までとするが、漢句は對句を取る要もあるので、六句に及ぶも差支ない。また和句も漢句も各々五十句宛とするが、多少の出入を許す。景物・草木等に關する規定は大體「應安新式」（新式今案）に據つてゐるが、和句漢句が雜るので同じ物が重なつても、さまで目立たないのと、和句漢句を雜へ作る困難との關係から、去嫌（別項）も幾分寬大にされてゐて、即ち同季は七句を隔て、同字并に戀・述懷等は、五句を隔てる規定は連歌の式目と同樣であるが、その他は七句を隔つべき物は五句に、五句を隔つべき物は三句に、三句を隔つべき物は二句に緩められてゐる。次に漢句の季を定める事が困難であるので、例を擧げて範を立ててある。例へば紅とか踏青とかの如きは春、金氣とか冷爽とかの類は秋とする如くである。又漢句に用ひる物の異名、例へば日を金烏、雨を銀竹といふ如きは、その本體に就いて季を定める事としてある。精しくは「和漢篇」に就いて知られる。なほ「無言抄」（別項）の和漢篇には細かい點をも規定してある。漢和聯句に於ては、鑄作（詳細）を漢和聯句と四字に書く。發句を節唱句と呼び、脇句を入韻と呼ぶ。これは押韻する關係からの稱で、漢和に於ては全篇に押韻するのである。その押韻の法は、唱句の中の韻脚の字を除いた殘りの字の中の平字の一を選び、その韻を以て入韻の韻として通韻を定めるのである。（尤も唱句から入韻を定めない異例も見られる）。和句に韻を持たしめるには、その句の句末を漢に直せば、韻に該當する如く句作するので、從つて漢に直すにも韻に該當するやうに直して韻に當てるのである。例へば、

（唱句）歲時△衣裕舊（時は入韻の字として選ばれた四支の韻）　賢盛
（入韻）かつ咲初る花の蕾が枝△　愚
客衣猶帶霜　金
時雨をしのぐ山につかれぬ（疲）△　理
暮かゝる霧間の月の影惑み　宗養
鳴つゝ鳥やねんかたをしる（知）△　同
歷人は春の夜ふかく打出でて　玄哉
征鞍猶雪吹△　江心

の如くである。和句・漢句の附け連ねる句數の限度や去嫌の規定は、和漢に於けると同樣であるが、花・月・雪の景物に就いては特に細かく規定してある。即ち花は四本のうち、和漢二句宛とし、同番とする。月は和漢共に三句までとし、但し五句續いても差支なく、雪は四つとも和漢何れとしてもよい。一座二句物は和漢兩方に一つ宛とする。又表八句には漢四句、和四句、その中に漢の對句が一所あるべしとする。なほ十句內の禁制の物も定めてある。精しくは「漢和法式」に就いて知られる。なほ江戶時代の初めに成つた「漢和菟合」（著者不詳）によれば、細かい點の規定に多少變遷し來つてゐる事が知られる。【俳諧の和漢・漢和】如泉の「番匠童」には、和漢・漢和の法共に記してあつて、和漢の法に於ては、百韻に一つの物は和漢共に出次第とし、和の方から早く出たらば漢に又異名に用ひることもあらうとの新規定が加はり、又入韻の字は連歌の法度に變らず。如何やうの事をも、漢に韻字を用ひるとの規定になつてゐて、これだけでは十分判然しないけれども、兎に角和漢に押韻するといふ事は、連歌の和漢にはなかつたことで、全くの新制である。漢和の法に於ては、大體連歌の漢和の法に變つて居らぬが、甚だしく異なる點は、修唱句の中の平字韻を除いて入韻の字を定める（即ち唱句の中の平字の韻以外の韻を脇句の韻とする）としてゐることである。これは連歌の漢和に於ける規定とほぼ反對になるもので、誤解に基くものか或は異例に據つたものかとより考へられないものである。然るに牛佐の「入船」にある漢和式によると、その漢和一座法式之事の規定は、大體連歌の漢和の法と變らない中、「番匠童」にはなほ雪四つとあつたものが、これでは雪五つとなつてゐる事が異なる點である。又連歌の漢和では十句內禁制の物であつたものが、これでは表八句のうち朱引（人名・所名・書物名・年號・官位等を云ふとある）の句を禁ずるとなつてゐるが、これは俳諧一般の變遷から見て、さまで不思議ではなく、又別に立ててゐる修唱句之事に於て、唱句の中の平字を除いて脇句の韻を定めるとしてゐる事も、「番匠童」に云つてゐた事と同樣の事である。然るに和漢の事をも述べてあつて、それでは和の發句の中の平字を除いて脇句の韻字を定める。尤も漢句の方には押韻するが、和句の方には押韻しないとあつて、これから「番匠童」に云つてゐた事を振返つて見ると、「番匠童」のいふところもこの意味であつたものらしく、即ち和漢の方に於ても、發句と脇句との韻の關係が漢和と異ならぬと云ふ事になる譯で、漢和・和漢共に同樣にかくなり來つてゐる事が知られる譯である。この外、漢詩の法に參酌した規定、その他細かい規定が設けられてゐる。竹亭の「をだまき綱目」の漢和并和漢指掌圖に述

べる所も大要は同様であるが、連歌以來月のみの事としてあつた摘錄を月秋として和漢共に出がちにするとし、雪を出がちに三句としてゐる點が異なつて居り、又脇句を韻句、付句を對句と名づけてゐる。その他細かい點の規定には出入がある。この後も多少の變改が見られぬではないが、大幹はこの邊で定まつてゐると云つてよい。

【沿革】 藤原齊信が、白樂天の「蘭省花時錦帳下」の句を書き、末は如何にと書いて清少納言に送り、清少納言が「草の庵を誰か尋ねん」と書き添へて返したといふ「枕草子」の事實を濫觴とする說（連歌明義）があるが、淵源を辿れば玆にあるとする事も出來るが、和漢・漢和が行はれるに至つたのは、大凡鎌倉後期頃からのやうである。「菟玖波集」（別項）には後宇多院の頃からのものが見え、良基の「筑波問答」や「擊蒙句法」（各別項）には、その心得が說かれてゐる。五山の僧徒の間には引續き可なり行はれたやうであるが、一般には多く行はれるものではなかつた。かくて「和漢篇」や「漢和法式」が成つて準據が定まり、爾來これに據ることとなつたのである。俳諧の方に於ても特殊の技能を持つ人が作つた位で、一般には行はれなかつた。元祿頃の貞門系の季佐が漢和を善くした。併し「花見車」に、「[illegible]（漢和句の事）をすいてひかれける、それも下手で容もなし」とあつて、あまり同好者も集まらなかつたらしい。その「誹諧入船」には、定之・季佐兩吟の和漢四十四一卷、季佐・只丸兩吟の漢和四十四一卷がある。定之は令德門、只丸は才麿門である。その和漢は、

何雅か聲役せし秋の蛇　定之
風荒黑盡原　季佐

の如く始まり、漢和は、

漣漪帶三月夜
沱澤鶴子酒　季佐
振ひて膝に露ねぶる猫　只丸
さす枝の松雪石蘭の葉に落て

の如く始まつてゐる。季佐と同時に梅盛門の如泉があつて、漢和に達し、「漢和千句」の著があつた。その頃又松堅門の爪木晩山も斯道に知られ、晩山の子梅丸が十二歲で作つた漢句が「入船」に見えてゐる。如泉歿後、獨り漢和に名のあつたのは松堅門の其諺で、漢和は如泉に學び、如泉の漢句はこの人の手によつて益々興つたと傳へられ、獨吟漢和千句の「金衣鳥」がある。驪石門の知石も、これに次いで知られてゐる。以上殆ど見て貞門系の人々である。併し宗匠によつては漢和の點を斷るものも多かつたといふ。蕉門關係では芭蕉の俳友素堂（別項）が漢學者だけに漢句に趣味を持ち、素堂・知足の「俳諧五十韻」があるが、芭蕉との和漢歌仙一卷（三日月日記所載）もあつて、貞享三年のものと推定されてゐる。

納涼の折々いひ捨たる和漢、月
の前にしてみたしむ
破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉
[illegible]　素堂
合歡醒馬上ニ　同

の如く始まるもので、納涼がてらに附けて月の頃までかゝつたのであるから、全くの餘興に過ぎなかつたであらう。支考は聯句歌仙行（和漢文操）や假名詩など種々の摸倣を試み、支考一派はこれを眞似てゐるが、蕉門に熱心な作者の出なかつたのは當然であらう。降つて明和三年頃、也有が門人六林と和漢一卷・漢和七卷を作つて「峨洋篇」の一書を成してゐる。なほ也有の「退養集」「俳諧夢之際」に漢和之歌仙と題して、六林・文樵・寸長等十八人の作つた一篇があるから、これから見ると、也有の門人には漢和の法を心得た者があつたと見える。安永三年には素丸の「漢和俳吟」が出てゐる。白雄は漢和・和漢の法を述べて「孫翁生前わづかに一卷ゆへに、我黨一座の興に云ひ出さんは苦しからずといへども、需めて席を立つるに及ばず」と論じてゐる（白雄夜話）。かくて天明以後は、一般俳壇の衰頽と共に和漢・漢和も自然廢れて行つたのである。

【參考】 筑波問答（二條良基）○擊蒙句法（同上）○若葉問答（飯尾宗祇）○詩轍三述（[illegible]）○連歌辨義（[illegible]）○誹諧[illegible]○誹諧入船（高田幸佐）○誹諧をだまき綱目大成（溝口竹亭）○誹諧曉山集（榎芳山）○誹諧[illegible]○誹諧通俗志（見島員九）○擊蒙子備其譜○白雄夜話（加舍白雄）○俳諧歲時記栞草○和漢漢和連歌佐々枕一（速伴小史）

和漢朗詠集　わかんらうえいしふ　詩歌　二卷

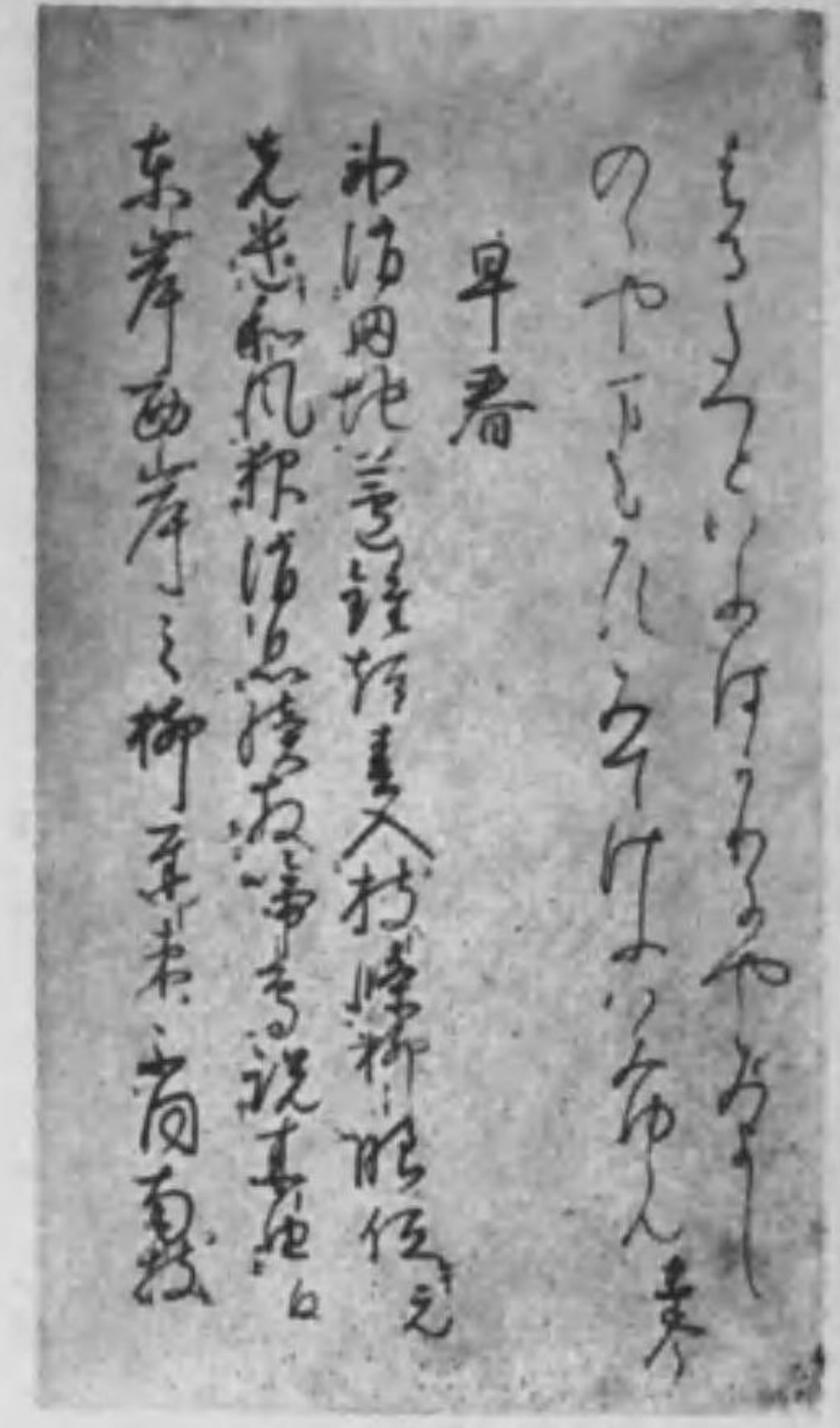
（[illegible]）

【撰者】 藤原公任 **【名稱】** 「和漢朗詠抄」（八雲御抄）、「和漢朗詠」（本朝書籍目錄）、「倭漢抄」（行成筆本）、「朗詠集」（江談抄）、「朗詠」（十訓抄）などとも略稱す。**【由來】** 「十訓抄」に、公任が小野宮右大臣實資を聟に取つた引出物として、本書を編纂したと云ふ說を揭げてゐるが、實資は公任より九歲の年長であるから、信用が出來ない。「玄惠抄」「集註」その他の註釋書には、公任が關白教通を聟とした引出物であると記してゐる。教通は道長の二男で、公任の長女と結婚した事は事實であるから、この時に編纂せられたものとすれば、長和二年に成つた事となる。本書にはもと序文があつたのを、教通が餘りに賞翫したので、夫人が怒つて序文を破り捨てたから、それ以後序が缺失したと云ひ（和漢朗詠集註）、京都長谷と朽倉との間に朗詠谷と云ふ所があり、一條帝の時、こゝで公任が本書を編纂したと云ふ說（京都區覽集・雍州府志）があるが信ずるに足らぬ。一說に紀淑望作と云ふのは（[illegible]）、私註の序文に古今和歌集序とある所の傍註を見誤つて誤り傳へた說である（朗詠集私註作者考）。

【目錄】 （卷上）（春）立春・早春・春興・春夜・子日（附若菜）・三月三日（附桃）・暮春・三月盡・閏三月・鶯・霞・雨・梅（附紅梅）・柳・花（附落花）・躑躅・款冬・藤。（夏）更衣・首夏・夏夜・端午・納涼・晚夏・花橘・蓮・郭公・螢・蟬・扇。（秋）立秋・早秋・七夕・秋興・秋晚・秋夜・八月十五日（附月）・九月九日（附菊）・九月盡・女郎花・萩・蘭・槿・前栽・紅葉（附落葉）・雁（附歸雁）・蟲・鹿・露・霧・擣衣。（冬）初冬・冬夜・歲暮・爐火・霜・雪・氷（附春氷）・霰・佛名。○（卷下）風・雲・晴・曉・松・竹・草・鶴・猿・管絃（附舞妓）・文詞（附遺文）・酒・山（附山水）・水（附漁父）・禁中・古京・古宮（附故宅）・仙家（附道士隱倫）・山家・田家・鄰家・山寺・佛寺・僧・閑居・眺望・餞別・行旅・庚申・帝王（附法皇）・親王（附王孫）・丞相（附執政）・將軍・刺史・詠史・王昭君・妓女・遊女・老人・交友・懷舊・述懷・慶賀・祝・戀・無常・白。

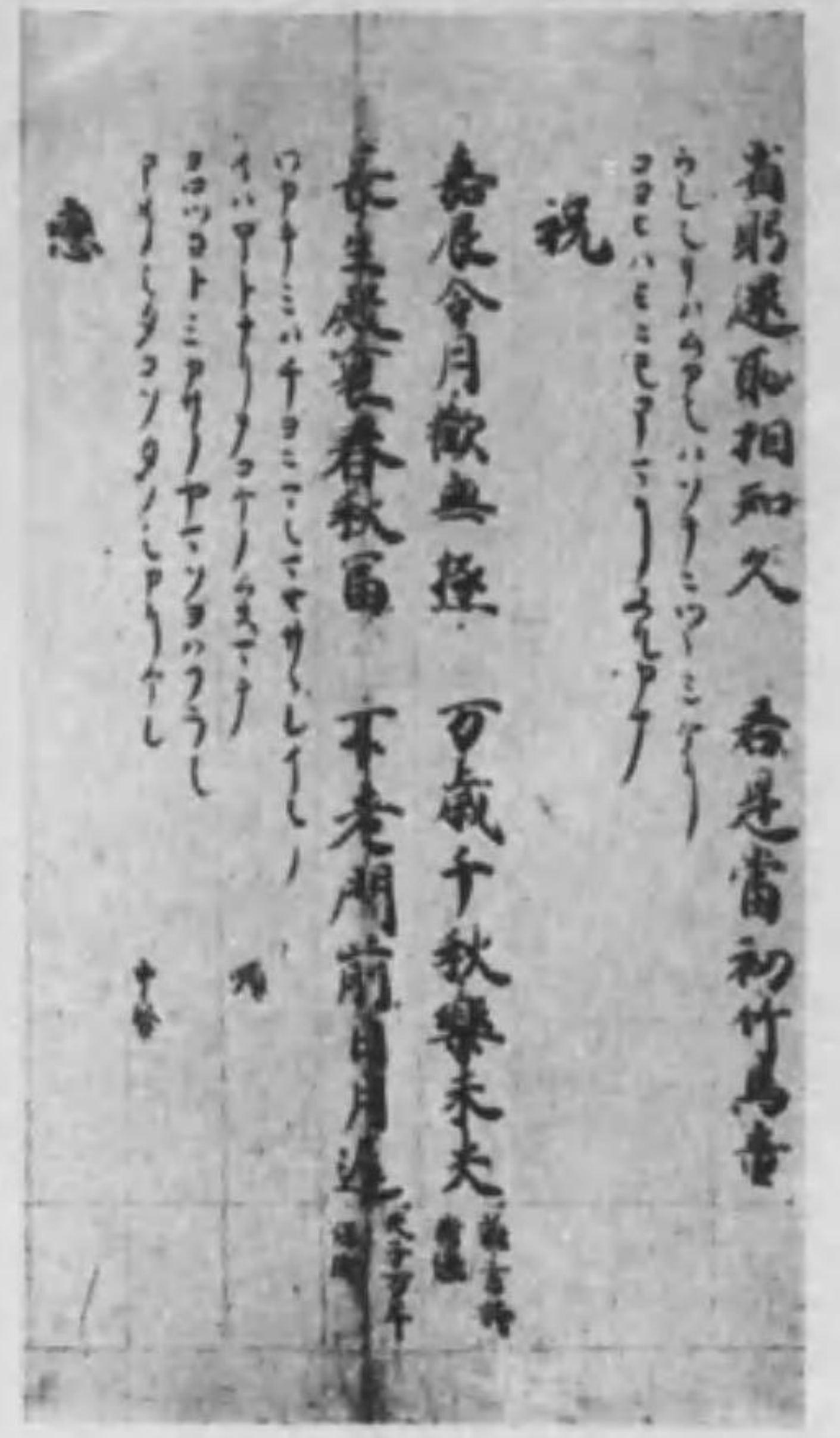
【解說】 本書は大江維時の編纂になる「千載佳句」と密接なる關係がある。「千載佳句」は、漢人の詩の中より七言二句のみを集めたものであるが、本書中の漢人の作は二百三十餘首あり、その中、七言二句なるものは百九十餘首で、「千載佳句」と同一の句は、百五十餘首に達する。又「扶桑集」（紀齊名編）や「本朝麗藻」（高階積善編）や「類聚句題抄」（一名類聚古詩）等より

和漢朗詠集



早春

傳行成筆本（伊豫切）

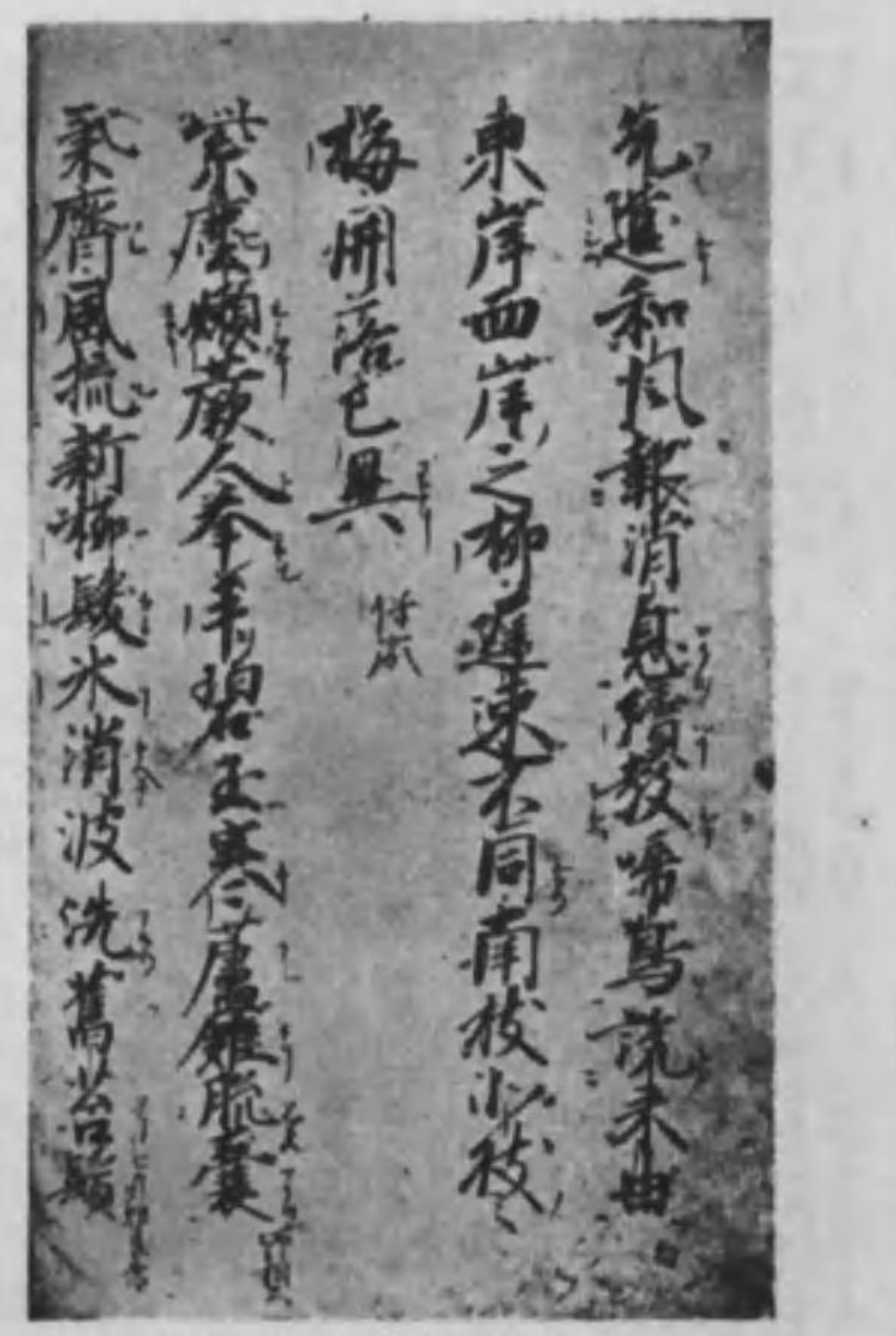


祝

嘉辰令月歡無極　萬歳千秋樂未央

長生殿裏春秋富　不老門前日月遲

傳行尹筆本（高野辰之氏藏）



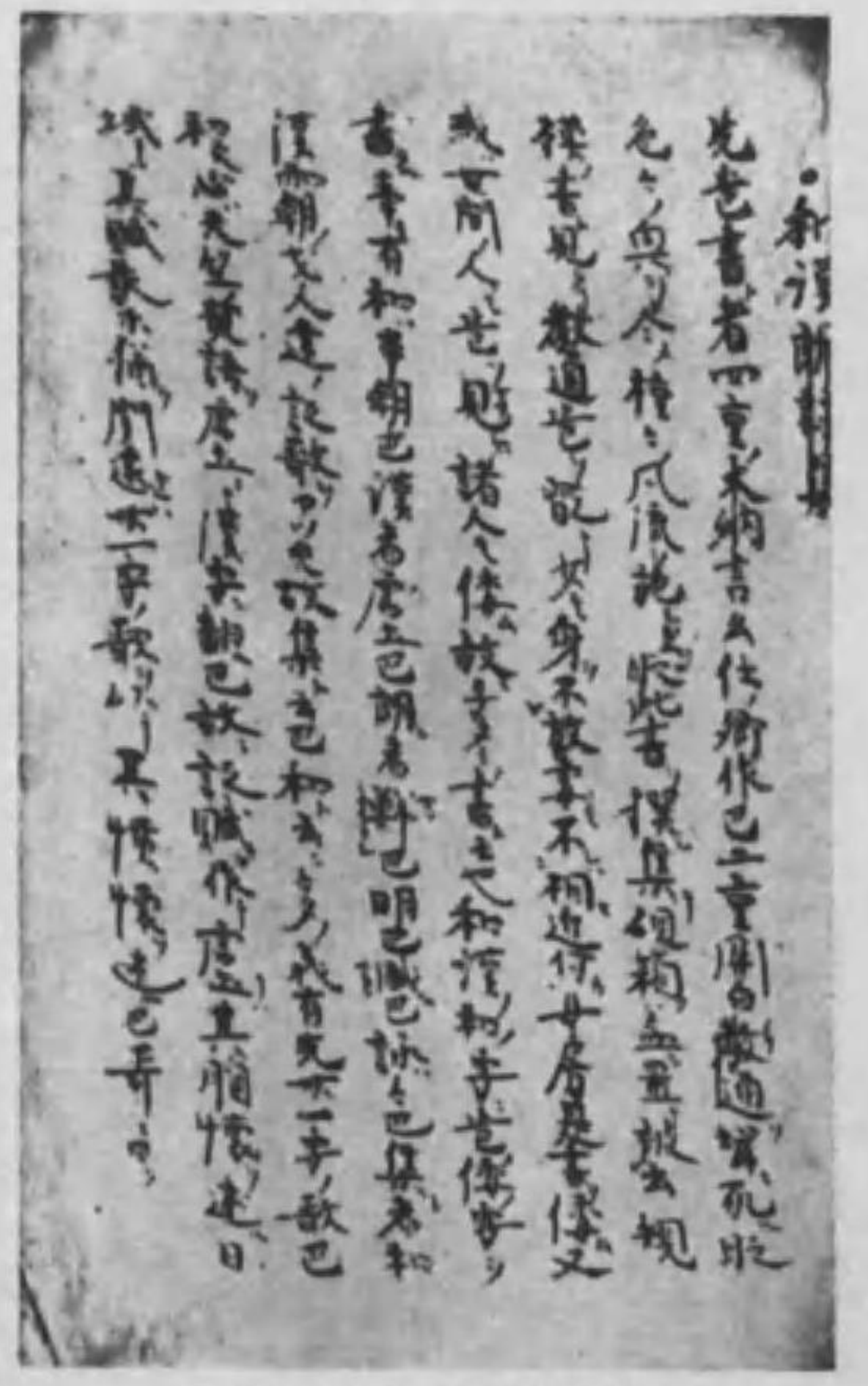
先遣和風報消息　續教啼鳥說來由

東岸西岸之柳　遲速不同　南枝北枝之梅　開落已異

紫塵嫩蕨人拳手　碧玉寒蘆錐脫囊

氣霽風梳新柳髮　氷消波洗舊苔鬚

寛正再修補本（高野辰之氏藏）



和漢朗詠集私註（高野辰之氏藏）

その材料を得たる[illegible]て「本朝文粹」にその句の出でたるものは九十餘首に達する。その他、「天德三年闘詩行事略記」「菅家文草」等の現存書や、今日傳存せざる諸書より何れも材料を取り入れたのである。次に本書收載の和歌は、「古今集」六十四首、「後撰集」十四首、「拾遺集」七十首で、他の集は云ふに足らない。これを以て觀れば、本書の詩歌は、「千載佳句」及び三代集より得たものが頗る多いのである。漢詩の作者は唐人四十、邦人五十餘、そのうち唐人では白樂天の句が百四十に達し、次いで元稹・許渾・趙嘏等が十首を算し、他は更に數が少い。又「史記」「漢書」「後漢書」「文選」「止觀」「遊仙窟」等の諸書より取つたものが若干ある。邦人では菅原文時四十餘首、菅原道眞・大江朝綱・源順三十餘首、紀長谷雄二十餘首、慶滋保胤・大江以言・橘直幹・都良香・小野篁等が十餘首で、何れもその數が名聲に伴つてゐる。「江談抄」に編者公任は高相如の弟子であるから、その句が多く秀作でなくとも入つてゐると記してゐるが、高丘相如の作は僅に五首に過ぎない。和歌の方では、貫之が二十餘首で最多數を占め、躬恒・人麿の十餘首がこれに次ぐ。本集に記せる詩文の作者名は「千載佳句」と異なる者が若干ある。殊に後世の流布版本にはその誤が多くなつてゐる。故に「千載佳句」によつて訂さるべきである。又詩歌が諸本によつて若干出入してゐる。傳行成筆の古寫本になくして「私註」「集註」等に增加せる詩句が九首、「集註」以下の和歌に增加せるもの三首、行成本にあつて「集註」以下にない和歌が一首、行成本にあつて「新撰朗詠集」に入つた唐人の詩句一首、「集註」以下の書と「新撰朗詠集」と重出せる[illegible]一首に及び、何れ[illegible]ない。これによつて、後世に加筆增補改訂のあつた事が知られる。その中には、「新撰朗詠集」（別項）より取り入れたものもあると見える。本集の詩歌は、必ずしも全部實際に朗詠せられたものではなくて、ただ朗詠の用に供せんために編纂せられたのである。最後の白と題する部分にある一首の歌は、作者名がないが、編者公任の自作と言ひ傳へる。【組織】部類分・組織は當時の詩文集に普通行はれる名稱により、普通の分類の方法を取つてゐるが、中には編者の獨創と思はれる所がある。但し當時の詩文集に必要な部となつてゐる贈答部が、本集では缺けてゐるが如きは、朗詠の性質によるものであらう。漢詩文約五百九十句、和歌約二百二十首（本によつて若干の增減がある）。なほ本書の和歌は原書にはなく、後に補つたものと云ふ說があるが、信じられない。

【影響】平安時代の諸書に、本集中の詩文の朗詠せられた事が多く散見し、特に「枕草子」や「源氏物語」等、公任と同時代の書にも屢々見るところである。又唐土に傳へ、彼地で感嘆せられた趣が「古事談」卷三に見え、「平家勘文錄」にも、東大寺の親隆僧正が入唐の時、これを携へた由を傳へてゐる。後代の文章和歌には、本集の詩歌を引用し、題材としたものが少くなく、又漢冠を和げて用ひたものもある。「梁塵秘抄」中の謠ひ物や「海道記」「東關紀行」等の日記・軍記物・宴曲・舞曲・謠曲・淨瑠璃等より、洒落本・讀本等の戲作戲文類に至るまで、これが用ひられた。又本集の項目を後に朗詠題と稱して多く和歌の題詠に供せられ、「朗詠百首」の如き書が出てゐる。

【諸本】公任自筆と云ふ「朗詠集」が傳へられ（御物）、又行成筆と云ふ本も數種あり（御物本は、明治四十一年・大正八年に複製版で擴大せられ習字用として出で、昭和二年に原寸で「秋萩帖書」の中に刊行された。近衞家本も複製書で、伊達松平家本も大正十三年に複製刊行、又關戸家本・原家本等がある）。「好古小錄」には朗詠集全篇を記せるものの五種を見た旨を記す。行成筆と云ふ古筆の「朗詠集」の斷片に至つては、手鑑や軸物に散在して多數存してゐる。かく王朝の古筆の多く傳へられた所以は、「朗詠集」が詩文を學ぶ教科書として、これに訓點を加へて用ひられたるにより、又歌曲の實用にも供せられると共に、習字の手本として用ひられた事が最も大なる原因と思はれる。降つては藤原伊行筆、菅源信郷筆、尊圓法親王筆、尊朝法親王筆等と稱するものが多い。「老人雜話」によれば、佐理筆、伊賴（佐理六代の孫）筆などと云ふ傳もあつた。鎌倉室町時代には附訓のある本が澤山あるが、就中宮内省圖書寮所藏の安貞二年の古寫本や、久原文庫の嘉曆元年の古寫本を初め、圖書寮には附訓本三種を藏し、久原文庫・帝國圖書館・京都帝國大學、或は朝吹英二氏や高野辰之博士等の藏本に信憑すべき古寫本がある。それ等によつて、詩文の古訓を見るべきである。又本書の和歌を眞名で書いた本があつたらしく、青蓮院家藏本と云ふ宗圓眞行の本を以て、「萬葉緯」卷十五に收めてゐる。

【刊本】日本耶蘇會刊行一六〇〇年版 ○寬永五年版 ○寬永十九年版 ○正保五年版（書肆法藏王堂）○寬文十三年版 ○天和三年版 ○貞享元年版○貞享三年版○元祿五年版○元祿十二年版 ○享保六年版（寺澤政辰書）○享保十年版 ○明和三年版 ○天明二年版（澤井鶴山書）○文化元年版○文政二年版○文政六年版○天保十年版○天保十四年版○弘化五年版○嘉永六年版（正保五年刊の翻刻）○元治元年版○慶應二年版（西京書林藏版）○刊年不詳版（書肆法藏王堂、延文元年七月廿日の奧書あり）○刊年不詳版（吉野屋翻刻行）○刊年不詳版（[illegible]書等）。以上の中には、頭註頭解を附せるものもあり、習字の手本として刊行せられたものもあり、文政六年版の如く三世相模風の書もあり、[illegible]本の如きは「和漢朗詠集畫帖」と題してゐる。

【註釋書】「和漢朗詠註」と云ふ書の總論に「堀河院ノ御時信阿ノ佐某僧ニ仰テ註ヲ作ラシメ給ヘリ、其ノ後大江ノ匡房ノ卿モ被レ作ヌ、南都ノ信教大夫發心モ作ケリ」とあるのによれば、「新撰朗詠集」の編者藤原基俊も註書を物し、次いで匡房の「江註」が出でた。「江註」は「江談抄」と關係深く、同じ文章の箇所が見えるが、今これ等の古註は傳はつてゐない。但し「江註」は「袋草紙」に三ヶ所引用せられ、「顯宿問答」にも、この書を見た由を記してゐる。これは詩歌兩方の註釋書らしい。次に信救父は信阿の著と云ふ「私註」が出で、鎌倉時代には、「私註」を平易に說いた「鈔」と云ふ註釋書もあつたらしい。この鈔は「玄惠抄」に引用せられてゐる。「玄惠抄」に次いで、日說の「抄」があり、永濟の「註」がある。「和漢朗詠集講釋記」は妙音院（藤原師長）の著で、天正十六年に成る。「和漢朗詠註略抄」は桑門の著で、「教隆曰」などと記してゐるが、王朝の藤原敎隆の說ではあるまい。これと同樣の書に、「朗詠註祕抄」や、「朗詠註抄」と題する書が鎌倉時代以後に出で、「私註」をも引いてゐる。その他「和漢朗詠和談抄」（二卷）や「和漢朗詠集聞書」と云ふ古抄もあり、「和漢朗詠集拔書」と題する書は、

詩文を主として和歌の註釋もあるが、他は「江註」を除いて何れも詩文のみの註釋書である。江戶時代の刊本には「集註」が寬文十一年に刊行せられ、詩歌闡繹の註あるを初め、岡西惟中の「諺解」は甲村昌倍の序文を持つて元祿六年刊。高井蘭山の「國字抄」は享和三年に成つた（明治四十三年に「和漢朗詠集註解」と題して再版印行す）。また上記の刊本の中には、註解を頭書とした書や圖解を挿入した繪入本もある。即ち天和三年版・貞享三年版・文化元年版等がそれで、享保十年版は頭書圖解と角書し、元治元年版は頭書講釋と角書した。天保十四年版は平がな附講釋入と附記して、頭註を附したが、これは山崎美成の所作である。また西川祐信等の繪本「寢覺種」（元文元年刊）の如き、朗詠の詩句を繪解した繪本も出てゐる（名著文庫所收）。明治以後では、金子元臣・江見清風二氏の「新釋」（別項）・柿村重松氏の「考證」（別項）が卓越せる註釋書である。和歌の註釋には井上通泰博士の「和漢朗詠集和歌評釋」一卷があり、明治三十七年に刊行せられた。又訓讀では、山田孝雄博士の附訓本（日本歌謠集成及び岩波文庫に入る）が最も信據せられる。〔藤田〕

倭漢朗詠集考證（わかんらうえいしふかうしよう）

註釋書　一冊【著者】柿村重松【刊行】大正十五年【內容】詩歌の本文は、諸本諸註釋書を校訂して定め、訓は「朗詠九十首抄」（別項）に入れるものはそれにより、然らざるものは新に訓を下した。註は資考・證說に分ち、資考は出典、後代文學のその詞句を取れるもの等を擧げた。證說は諸本の異同と句解大意を記してある。初めに序說を附して解題し、終りに詳細なる索引を附した。本書はもと日本漢文要覽の前四篇として編纂せられたものと云ふ。【價値】本書の價値は資考にある。即ち「和漢朗詠集」の後代の影響文學が網羅せられて、古典より俗文學のあらゆるものに及んでゐるのは、頗る便利である。證說の註も亦簡明である。要するに、「和漢朗詠集新釋」（別項）の詳細なる註解と、本書の資考とを併せ見れば完全に近い。〔藤田〕

和漢朗詠集國字抄（わかんらうえいしふこくじせう）

註釋書　八卷四冊【著者】高井蘭山【刊行】享和三年【諸本】「和漢朗詠集註解」と題して、明治四十三年に單行本として刊行せられた。【解說】「和漢朗詠集」（別項）の註釋書で、高井伴寬の著を男伴恭が上梓した。初めに品題として目錄あり、次に作者略傳があり、本文は平易な解釋を加へ、上欄に詩文を假名交りに書き下して記し、全體に振假名を施した。出典等も殆ど記さず、分り易いが幼稚な註釋書である。〔藤田〕

和漢朗詠集私註（わかんらうえいしふしちゆう）

註釋書　六卷【著者】北村季吟の「和漢朗詠集註」「群書一覽」、岡本保孝の「朗詠考」等には何れも大夫房覺明作と云ふ。その傳は「吾妻鏡」（建久六年十月十三日條）「源平盛衰記」（卷廿九）「平家物語」（卷七）等に見えて、もと勸學院の文章博士進士藏人通廣と云ひ、出家して西乘房信救と名告り、南都に在つた人である。而して「沙石集」（卷九）には東大寺法師の信救得業が朗詠の註を記した由を記してゐるので、本書を信救即ち大夫房覺明の著とした。又本書の奧書に信阿貧道の著の由が見え、傍註の書入に教坊阿闍梨と記したものがあるのは、信教坊阿闍梨の意で、「沙石集」の一本には、信救得業を信教得業と書した本があるのによつて、信阿を信教と同人たらしめようと云ふ說である。併し、これ等の諸說は何れも信用が置けない。屋代弘賢は奧書にその名の見える信阿の著とした。併し本書の註に、信阿の著書が引用せられてゐる所を見ると、これも疑はしいが、信阿の著に後人の書入があるものとすれば、奧書の如く出羽國最上郡龍山寺で信阿の著はしたものと見て差支あるまい。寫本には釋信阿と著者名を記した書が往々ある。【成立】應保元年十月五日の奧書がある。【諸本】信阿の奧書ある古寫本が內閣文庫・宮內省圖書寮・久原文庫等に藏せられる。古刊本は一冊となり、寬永六年の刊本は、その再刊本と見えて、體裁は同一であるが、三冊本とした。刊本には清水濱臣等の書入本も多く存する。【內容】漢詩文のみの註である。初めに題名の解說があり、次に目錄を記してゐる。一寫本及び刊本では解題を序文とし、目錄の次に、日本作者・唐之作者を擧げてある。信阿の奧書はない。又目錄の題名の各項に和歌を書き入れた寫本もあり、目錄なき寫本もあり、卷首の「和漢朗詠集註卷序」の下に、「釋信阿」と著者名を加へた寫本もあり、多く行はれただけに種々の本が存する。【價値】本書以後の註釋書は凡て本書の註によつて敷衍したものである。北村季吟の「和漢朗詠集註」（別項）も、その漢詩文の部は永濟註により、且つその永濟註の奧には、信阿の奧書の冒頭の句を出してゐる所を見ると、矢張りこの私註によつて記したものである。かやうに後世に最も行はれて多くの影響を殘してゐると共に、故事出典を擧げること豐富で、後世の朗詠研究の基礎をなし、傳說その他の研究上に多くの材料を供給してゐるところが、本書の價値高き所以である。【參考】朗詠集私註作者考　屋代弘賢（不忍叢書第九冊）○朗詠考　岡本保孝（說春叢書第三十冊）○和漢朗詠集類考　金子元臣・江見清風（和漢朗詠集新釋附錄）〔藤田〕

和漢朗詠集抄（わかんらうえいしふせう）

註釋書　六卷二冊【著者】玄惠【成立】未詳【刊行】未詳【解說】「玄惠抄」とも云ひ、「和漢朗詠集」（別項）の註釋書である。片假名活字本で本文を載せず、ただ詩文中の難解の句を註釋しただけで、和歌の註解はない。又その註釋は「和漢朗詠集私註」（別項）によつたと見えて、同書に載せた故事などは、その旨を記して略し、又この書は、私註の外、「鈔」と云ふものをも引用してゐる。註解には牽强附會の說が多く誤謬も少くないが、また間々取るべき說も見える。「和漢朗詠集註」（別項）の序文に北村季吟が「今也有覺明之註有玄惠之抄俱行於諸世」と記した。覺明之註は、所謂私註の事であるが、玄惠之抄は、この書であらうか。世にその傳本は多くない。【別本】「和漢朗詠集之抄」とも云ふ。六卷四冊本、又三冊本もある。山光院日詮の講談したものを、岡海房日嚴の筆錄したもの。前書とは同名異書であるが、同様に漢詩文の註釋だけで、和歌は歌詞を載せてゐるが、註解は全然ない。初めに題號・撰者等の總論を述べ、和漢作者の略傳を記し、また書中載するところの詩・賦・序・表等の分類をなして、上卷・下卷各々の目錄を添へてゐる。私註に似て一層註釋書として具はつてゐる事は、前書の不備なるに似ない。但しその註釋は主として「私註」により、且つ私見を交へて說いたが、佛說に附會したところ多く、言ふ事は詳密であるが、その說は多く信ずるに足らない。この書は刊本はなく、寫本のみ傳はつてゐる。〔藤田〕

和漢朗詠集新釋（わかんらうえいしふしんしやく）

註釋書　一冊【著者】金子元臣・江見清風【刊行】明治四十三年【內容】詞句は「和漢朗詠集註」（別項）によつて出し、諸本と校合して異同を上欄に記した。註解は出典・語釋・大意に分つて記してある。初めに詩だけの漢字畫引索引を附し、附錄として作者略傳・和漢朗詠集雜考を附した。【價値】註解は明快であるが、又考證をも忽せにせず、諸書を引いてゐる。而してその分量に至つては、舊註の倍蓰以上もあつて、甚だ詳しき書と云ふべきである。舊註を集大成した上に、新說を加へ、舊註の誤れるを捨てたもので、本書の價値はこゝにある。されば本書出でて舊註を一掃した觀がある。殊に雜考は最も有益で、著作由來・公任傳・書名・朗詠の起原由來・異本註釋書等に就いて、遍く古書を引用して考證し解說してゐる。この雜考は、「和漢朗詠集」の解題として最も具はつたものである。〔藤田〕

和漢朗詠集註（わかんらうえいしふちゆう）

註釋書　十卷五冊【著者】西生永濟・北村季吟【刊行】寬文十一年【諸本】「國漢文叢書」の中に入つて翻刻せられ（明治四十三年刊）、又「日本歌謠集成」第三卷にも收めてある。【內容】「和漢朗詠集」（別項）の註釋書で、寬文十年の季吟の序があり、それによると永濟の註を得てこれを見るに、覺明の註を祖述して和文に書き改められ甚だ良書であるが、詩文の註だけで和歌の註を闕いてゐるから、季吟が和歌の註を補つて十卷としたと云ふ。下卷の末に信阿註。即ち「和漢朗詠集私註」（別項）（覺明の註と云ふも同じ）の應保元年十月の跋文の句、及び永濟註の天文十七年三月十六日に書寫し了へたと云ふ奧書を轉載してゐる。即ち永濟の註は、天文十七年以前に成つたのである。永濟註は、「和漢朗詠註」と云ふ書名にて七卷から成つてゐる。各卷の初めに註の故事出典を列擧して簡略書きに記し、目錄に代へて內容を示した。寬永七年及び同二十一年の奧書ある寫本がある。季吟は、この永濟註に筆を加へて、目錄を除き繁を去り、整理して餘程簡明にし、別に和歌の註を加へたのである。註は出典・句解・作者略傳を記し、「茂明云」や、「或說」などを引いてゐる。【價値】詩の部分は「和漢朗詠集私註」を敷衍したものであるが、舊註としては最も具はつてゐる。また和歌の註を加へたのはこれが最初であつて、名の如く註の集大成である。この名は永濟の「和漢朗詠註」を大きくした意味で名づけたのであらう。近く「和漢朗詠集新釋」「和漢朗詠集考證」（各別項）の出づるまで、本書の價値は保たれてゐた。

【備考】西生永濟の傳は不明であるが、「近世畸人傳」にその逸話が見えてゐる。〔藤田〕

ワキ

「能樂」を見よ。

脇踊（わきをどり）

歌舞伎【名義】能樂にいふ脇能の義の轉かと思はれる。【別名】脇狂言、略して脇ともいふ。【發生】女歌舞伎時代末期から若衆歌舞伎時代初期にかけて生じた樣式と思はれ、組踊より劇的に一歩進んだ時代の產物である。上方に於て、科白劇的樣式への展開期に際して一日の興行の最初に据ゑられた式三番に次いで、離れ狂言の前に脇狂言として配置され、殆ど常に踊りであつたので、脇踊とも呼ばれた。歌舞伎劇が上方を中心に諸國に傳播した爲め、多少樣式に變化を示しつつ江戶を初め諸地方に傳はつたのである。【性質・沿革】若女方、若衆方等が花笠を被りなどして踊るものであるが、年代の降るにつれ、地方色をも帶びて踊以上に劇化した樣式さへも生んだ。清本から見て左の如き三種に分けることが出來る。（一）脇踊。「歌舞妓事始」卷之一、古流中興脇踊歌之部に歌詞のみ四種見られる。四季踊・京鹿子踊・君から踊・春曾踊とあつて、それぞれ組歌であるが、初めを「さし」、最後を「ちらし」と區別して、「踊」が本體を成してゐる。脇踊の名稱の發生以來のものであらうが、元祿末年には上方には既に滅び、江戶とか伊勢とかにのみ傳へられてゐたらしい。（二）江戶の脇狂言。江戶では右の類を大踊と呼んでゐたらしいが、又、壽大踊（中村座）・梅ケ枝大踊（市村座）・花踊（森田座）等と呼ばれて區別されたものもあつた。更に、後に劇的要素を含めて能狂言がかつた踊向のものをも脇狂言の地位に据ゑて、これを呼んだのであつた。酒呑童子・熊坂實（中村座。中村傳右衞門作と傳へる）・七福神・竹生島（市村座。津打治兵衞作と傳へる）・福神遊・七人猩々・しやでん（森田座。津打九平次作と傳へる）等がある。元祿年代を降るにつれ、古來の脇踊は漸次に廢されて專らこれ等が演ぜられるやうになり、從つて脇踊の名稱に代つて脇狂言の語が行はれた。（三）上方の脇狂言。元祿後、脇踊が止んで後は、能狂言の「萩大名」や「薩摩守」等を以て代へて脇狂言と稱へた。寬政の頃に至つてこれも全く廢されるや、次に据ゑられた二番目の離れ狂言を脇狂言と誤りいふやうになつたと傳へる。これには壬生念佛の額等が用ひられた。花盜人・かつこ熔蜂・井戶掘・俵盜人・智恵ぬけ・師匠釣り等があつた。（脇狂言系圖）【參考】南水漫遊（濱松歌國）○戲場問答國綺（山東京山）〔守隨〕

脇方（わきかた）

能樂【流派】ワキはもとシテ方が臨時これを勤めたものであるが、後これを主とするものが出で、父子相續いで、遂にワキ方の家を作るやうになつた。それ等のうち、江戶時代一流として認められたものに、福王・進藤・春藤・高安・寶生の五流があり、寶生はシテ寶生と區別して、脇寶生又は下掛寶生といふ。

〔福王流〕橘諸兄の末で室町末期、盛忠といふ人が播磨國三木の福王神社の神職をしてゐたのが、織田信長の命により斯道に入り、後觀世座の脇方となり、福王神右衞門といつた。これが流祖であるといふ。

福王神右衞門—盛充—盛次—盛厚—盛親（觀世元尚の孫。後宗巴と號し京都で家職を務めた）—盛初—盛信—盛有—盛脈（茂右衞門。號寺・自然軒と號し寶を興した）—茂之丞—茂十郎（寬元斷絕えた）…野島信（[illegible]實の異父により家を受けた。現存）

〔進藤流〕流祖進藤權右衞門は、近江國山科の農民で、慶長年間觀世黑雪等に取立てられて同座の脇方となつたといふ。

進藤權右衞門—權三郎—十郎右衞門—久右衞門—權右衞門—權之丞（維新後、家職は絕えた）

〔春藤流〕祖先は、京都本願寺の坊官であつたといふ。流祖源七は金春源右衞門に學んで、同流の脇方となつたのである。

春藤源七（友高）—源七（[illegible]）—六次郎—六右衞門（[illegible]）—六郎次郎（[illegible]）—六右衞門（[illegible]）—源七郎（[illegible]）—六右衞門（[illegible]）—源七郎（[illegible]）—源七郎（[illegible]）—六右衞門（[illegible]）—源七郎（[illegible]）—諸四郎（[illegible]）[illegible]絕えた）

〔高安流〕河內國玉祖大明神の神職から出た

大鼓方の名手高安與左衛門道喜の孫與八郎が金剛又兵衛の子伊右衛門に學んで、同座の脇方となつたのに始まり、師伊右衛門を流祖としてゐる。

高安伊右衛門（金剛又兵衛の子）―太郎右衛門（與八郎。高安道喜の孫）―太郎右衛門（寄間。[illegible]）―太郎右衛門（不休）―彌太郎（養子）―彌太夫（養之）―彌九郎（五代彌太郎の子）―彌太郎―彌太夫―彌太郎―彌十郎（廢絶の際家職絶えた。但し名古屋の西村との流を汲む）

〔寶生流〕春藤六郎次郎の養子新之丞が、一流の樹立を許されて寶生座の座附となつたのである。

寶生新之丞―新開（新之丞孫）―孝五郎（新開養子）―新（寶子、見習）　（佐成）

脇狂言 わきやうげん　演劇【別稱】前狂言【名義】脇能を初番の能といふ意味に用ひると同じく、序幕の前の狂言をいふ。【解說】江戸時代の東西の歌舞伎芝居で、明六つに開場の柝太鼓を打切つて、先づ三番叟を舞ひ納め、それから一番目序幕を開けるまでのつなぎに演ずる狂言で、三番叟と同樣、歌舞伎芝居に於ては儀式化したものである。「傾奇作書」に京阪の脇狂言の有樣を記して、「囃子鳴物は太鼓・鉦・甲太鼓のみにて、二の替りには花盗人、前に圖を出す通り盗人・大書・酢口三人にて各無言仕方ばかりにて、京都壬生地藏堂の狂言の通りなり」とある。早くは、下級俳優が客の追々と集まるまで形式的に演じたものであつたが、後には僅に顏見世興行の儀式としてのみ保存され、更に顏見世の衰亡と共に脇狂言も全くその跡を絶つに至つた。壽狂言（別項）と言ひ、脇狂言といひ、何れも能の間狂言の古格を傳へてゐるやうに推測されるが、それが歌舞伎に流入した經路は詳かでない。特に京阪の脇狂言には、その曲目も演出法も、今日京都の壬生寺に保存される壬生狂言（別項）と頗る似通つてゐる點に注目すべきである。【曲目】各座によつて、それ〴〵特有の曲がある。江戸では中村座は「酒呑童子」「はうろく聟」、市村座は「七福神」「竹生島」、森田座は「長者びらき」、都座は「壽大社」、桐座は「那須與一馬揃」「老松」、河原崎座は「壽二人猩々」などである。京阪では二の替りの「花盗人」、三の替りの「はうろく割」、盆替りの「地藏祭り」、その他、「川渡り」「寺小屋」「聟入り」「米盗人」「萩大名」などの名目を傳へてゐる。【詞章】「賀久屋壽々免」「傳奇作書」等に傳へた江戸三座の脇狂言文句のうち、中村座の「酒呑童子」を一例に示す。

外記書へ召よする、暫くあつて奥よりも、大路子の鐵物に紅の袴を着、鐵棒杖に突き、あたりをにらんで立たりしは、身の毛もよだつはかりなり。踏れ聞んと申ける。（此間せりふ）酒と聞しを悦び、まづ客達こなたへと縁の上にぞ請じける。（此間せりふ）童子盃取上げて、一つ受けてはさらりと干し、頼光にさしにける。肴はなきかとありければ、今切つたると思しくて殿と腕と々板にのせ座敷へこそは出しける。某節へ申さんと膝より[illegible]すらりと抜き、しゝむら四五寸おし切て舌打してぞ參られける。（此間せりふ）童子も起て頼光へ[illegible]するこそ嬉しけれ。（此間せりふ）鐵棒を杖に突きはつたとにらんで立たりける。（此間せりふ）誠しやかにのたまへは、（此間せりふ）我等も御身の酒に醉たかくり言と思召し、我等も御身の美姿うち見ては恐しけなれど、別て臆かは山伏と嘲ひかなで・心付見をきしてぞ。三重　（佐成）

脇能 わきのう　「能樂」を見よ。

和句解 わくかい　語學書　五卷【著者】松永貞德【刊行】寛文二年五月刊、加藤盤齋の序あり。元祿九年「和語のしるべ」と改題し、序文を改めて再刷。【內容】國語の語源を說いたものである。單語をいろは順に辭書體に排列して一々その語源を註してゐる。著者の序に「未再治の本なり。あやまりも、謂はぬ所もあるべし」と記してゐるから、未定稿であつたらしい。【價値】本書は、專ら國語の語源を考究した書としては最初のものである。而して江戸初期に出た貝原益軒の「日本釋名」（別項）に頗る大きな影響を與へてゐる。この二點に於て注意すべきものである。但しその內容は牽強附會で用ひ難いものである。蓋し何れの國に於ても最初の語源研究の書は、この種の弊に陷つてゐるが普通であるから、深くとがむべきではないであらう。（濱田）

和國稽 わくけい　「三國噺高座、新作」を見よ。

或問 わくもん　歌論書　一卷【著者】小澤蘆庵【成立・刊行】寛政十二年「ふるの中道」三卷が出版されたが、上卷は「ちりひぢ」（別項）、中卷は「あしかび」（別項）、下卷がこの「或問」である。前二卷は寛政二年に書いたとあるが、これは著作年月を明記してはないが、前二者と殆ど同時に書かれたものであらう。續日本歌學全書第六編所收。【內容】「ちりひぢ」中の誤られ易いもの、說明の足らぬ個所を問答體で補足して、彼の主張をより明かにしてゐるのである。特に「一句の歌ありや、二句、三句、四句、五句以上の歌もありや」の問に對して「歌は百萬言ありとても、詠ずる處一句のものなり云々」といひ、記・紀の歌等を引例して、種々の歌體を說明した個所、或は「毛詩」と「萬葉」を引用比較して同情說を詳說し、「百川流れて海に入り、海うけてあふれざるは天地わかれてより此かた、今にいたりて變る事なし云々」と譬喩をとりて同情の說をとき、「同一の人情を以て同題を詠じては、同じ歌が出來て新しい歌のうまれない場合があらう」といふに對しては、情は眞實なる限り常に新しいとして新情をといてゐる。かくて一切歌學は最初は不必要であると說き、「萬葉」になづめる人の歌のあしく、後世風の歌のあしき點等を再び詳論して、たゞごと歌の理を說明して、「一ふし面白かるべき心を、此たゞ言にてよまんはいかゞ」などいふに對しては、その誤れることをいひ、「今思へる處を、たゞ言につゞけならひ、讀きゝても聞ゆるやうに、修錬つもりて後は、いかなる事も、心詞にまかせて自在なるべし」などと言つてゐる。【價值】同じく自然眞情を尊びながら、眞淵の古典主義・萬葉主義に反し、現代主義・古今主義に立つた彼の歌論は、近世歌學に於て重要な一分野を形成するもので、彼の歌論をあとづけるためには、この書も必讀すべきものの一つである。「ふるの中道」に對して清水濱臣門の小林歌城が文政五年に「ふるの中道辨」をあらはして、蘆庵の記・紀より引用せる歌句の杜撰や、解釋の誤謬等を指摘し、彼が「萬葉」の古語を用ひるのを非難してゐるのは、眞淵の皮相を見て眞意を解せざるためであるなどと、眞淵派の立場から駁論を書いてゐるなどは注意さるべきである。（藤川）

或問珍 わくもんちん　俳書　一册【著者】櫻井吏登【成立】享保十七年二月【刊行】同年三月【由來】自序（享保十七年二月）に依ると、一日或る師弟が著者の茅屋に入り來つて俳諧に關する問答をしたのを、著者が傍にあつて問答のまゝに筆記し、これを梓行すべきことを

その成る師に請うて許され、書林に渡したのが本書であるといふ。併しこれは恐らく假託で、著者が或る師弟の問答に擬して自己の意見を書き連ねたのであらう。【諸本】「雪中集」に收めて再刻されたものは、吏登の自序と出版肆萬屋清兵衞の奥付とが省かれてゐる。同集の四世雪中庵完來の序（寛政三年十月）によると、「或問珍」の印板が往年の火災（明和九年の江戸大火であらう）のために烏有に歸し、その題號をすら聞き得ぬ人が多くなつたので、島田の阿人・千布兩人が、原本を携へ來つて再刻を勸めたので、蓼太の「朝起集」と合綴して板行したのであるといふ。俳諧文庫の「嵐雪全集」所收のものは、雪中庵雀志が原本によつて刊行したものである。【解說】問答體を假りて蕉風俳諧の式法を述べたものである。卽ち發句の切字、脇の五種の附方、脇のてには留、第三の韻字留のことを初めとして、四句目・五句目・心附・理附・てにをは・定座・月花の句・十識・揚句・奉納の句・正親句・親句・疎句・夢想開の句・眞行草・三ッ物・俳諧に入る法・俳の字の言篇人篇・芭蕉流・俳諧は何のためにするか等連句の附句に關する作法上の意見や俳諧上の概論等を述べたのである。叙述不明瞭穩健で、初心者に便の多いものである。師風を祖述したのであるから、別に創意は見られないが、著者は嵐雪の直弟で雪中庵二世の宗師であるから、本書に述べられた所說は、雪中庵草創の俳風乃至嵐雪が芭蕉に得た手法精神を見るに好適の書の一である。（各務）

老葉 わくらば　連歌集　十卷【作者】飯尾宗祇【名義】「愚句老葉」の奥書に、「老木の朽葉色なるふしも侍らねば、もとの名をあらためずして老葉といへる事しか也」とあるによれば、晩年の作にて趣も乏しいとの謙遜の意より名づけたものであらう。【傳本】宗祇自筆本、長門厚狹郡某家所藏。【諸本】內閣文庫本（寶永八年寫）一本・彰考館本二卷・神宮文庫本・續群書類從所收。【解說】附句の部は、春・夏・秋・冬・旅・戀上・戀下・雜上・雜下の七つの部立によつて九卷までに集め、發句の部は十卷目一卷で、部立を設けず、四季の順に集めてある。宗祇の連句集に「下草」「萱草（わすれぐさ）」（各別項）と本集との三集あるうち、本集は最後の撰集らしく、宗祇最晩年の附句發句を窺ひ得るものである。なほ「愚句老葉」の奥書によれば、初めに編める老葉には、餘載の句なども入れ加へてあつたのを、餘載が心に合はぬといふので編み直したのであるといふ。【註釋書】愚句老葉。宗祇の自註である。宗祇が第十卷の首に記す小引によると、大內政弘の懇望により自註を加へたものである。○老葉註。宗長が三河の水野藤九郎近守の懇望によつて、「老葉」中の寄合の面白きものを抄出して註を加へたもので、その由を記した自序がある。三條西實隆の奥書があつて、「註上下兩冊加一見、誠是把流尋源問青銅根、須爲初學之要津哉、追而可書之」とあり、その後に永正十七林鐘五日、本書を餘純へ遣る由の宗長の尺牘が載せてある。上述の兩本の書寫の一本がある。內閣文庫に天文十五年五月書寫の一本がある。○老葉（宗祇註・宗長註）連歌師觀明軒能順が上梓を乞ふ人に與へて板行せしめたもので、その由を記した元祿十七年三月の能順の序があり、これを書寫して北野社の類本を以て校合して板行した由の門人霜梅堂の同年初夏の跋がある。本書は兩註を組合はせて並べてあつて、宗長註本にないものはその由が記してある。京都天王寺屋市郎兵衞板。○老葉抄。宗牧が「老葉」に註を加へたもので、續類從本にない句が大分ある。これは宗祇が初めに編んだ方の「老葉」に據つたものか、或は後人の書き加へ本があつたのかに因るのであらう（[illegible]）。（福井・森田）

和訓栞 わくんのしをり　語學書　九十三卷八十二册【著者】谷川士清【刊行】首卷並に卷一から卷十三まで十四册は安永六年刊。卷十四から卷二十八まで十册は文化二年刊。卷二十九から卷四十五まで十册は文政十三年刊（以上前編）。卷四十六から卷七十五まで三十册は文久二年刊（以上中編）。卷七十六から卷九十三まで十八册は明治十六年刊（以上後編）。この外に增補訂正して活版に附したものが二種ある（後出）。【諸本】原本は上記安永六年九月から明治十六年迄に刊行した八十二册であるが、その刊行は何れも士清の歿後である。初めの十四册は、著者の歿した翌年に刊行されたものであるから、著者の稿のまゝと認められるが、卷十四から卷四十五までは著者の子の士逸及び著者の友賀茂季鷹が增訂したものであり、卷四十六以下も亦後人の手が加はつてゐる。次に明治三十一年に活版で刊行せられた「增補語林和訓栞」（三册）は井上頼圀と小杉榲邨が增補訂正したものであるが、その本文は「和訓栞」の首卷から七十五卷まで（前編と中編）をとり、排列の順序を整理してある。その本文は、伴信友が加筆したものを用ひ（原著者の說とは區別してある）、井上・小杉兩氏の增補は上欄に收めて本文と區別してある。七十六卷以下（後編）は版權の都合で收められなかつたが、その所說は大抵上欄の增補の中に收められてゐる。依つて實用的價値に於ては原書よりも遙に勝つてゐるが、原本とはやゝ趣を異にしたものになつてゐる。なほこの書には「撥韻集」「林逸節用集」「桑家漢語抄」の三古辭書を附錄として添へてある。明治三十二年出版の「和訓栞」（三册）は野村秋足が增補したものであるが、この方は前中後三編とも收められてゐるから、實用的價値に於ては「增補語林和訓栞」に及ばないが、原本の面影を傳へる點に於てはこの方が勝つてゐる。【內容】國語の辭書で、語を五十音順に排列して解釋を附してある。全部を三編に分ち（前編四十五卷・中編三十卷・下編十八卷）、每編アからヲに至つてゐる（因に本書はヲオの所屬を誤つてゐるから、ヲは五十音の最後である）。而してその排列は五十音順とは云へ、語の初め二字だけに依つて次第してあるから完全な五十音順ではない。この排列の不備や三編が各々アからヲに至つてゐる點等から見て、本書は未定稿であつたかと思はれる。本書所收の語は名詞に限らず各品詞に亙り、又古言雅語のみではなく、口語をも多く收めてゐる。なほ本書の目頭の凡例には音韻・漢字・假名・手爾波等に關する先人の說を集めてゐる。自己の所見と稱すべきものはないが、相當注意すべきものである。【價值】本書は國語の辭書としては語の排列が不十分であり、語彙語釋に於ても今日から見れば不備誤謬必ずしも少くない。併しながら本書を本書以前の辭書に比較すると、同日に談じ難いほど本書は勝れてゐる。本書以前の國語辭書は、單に和訓を類聚したもの、或は語源を註したもの、或は作歌の參考書として古言雅語を類聚し、これに簡單な解釋を施したものがあつたに過ぎない。然るに本書は前記の如く、廣く語を蒐集して語釋

を附したものであり、その語釋も穩健であり、正當であるものが多い。而して組織に於て、國語辭書としての必要條件を具備してはゐないが、大體辭書としての體裁を備へてゐる點に於て、本書は國語の辭書らしい辭書として最初のものと云つてもよく、「雅言集覽」「俚言集覽」（各別項）と共に、江戸時代の國語辭書の代表的なものである。（福田）

和合人 わがふじん　滑稽本　初編三冊・二編二冊・同追加二冊・三編三冊・四編三冊　【作者】初編より三編まで瀧亭鯉丈、四編は爲永春水。【名稱】角書に（滑稽）とある。和合人は和合神を擬つて、仲のよい連中の意を表はしてゐる。【刊行】初編は文政六年正月發刊、二編は三編の自序に「筆を假事五六年」とあるから天保五六年頃と推定される。三編は天保十二年、四編は鯉丈の歿後、爲永春水が弘化元年に出してゐる。【諸本】滑稽名作集上（帝國文庫）・滑稽文學全集第五・繪本稗史小說第十五・有朋堂文庫等所收。【題材】「花暦八笑人」（別項）と同じく、遊民の遊戲生活を書いたもので、和次郎を中心に、矢場七・蛋吉・茶見藏・土場六・掃次郎の六人を取扱つてゐる。これ等人物には鯉丈自身や交友の中にモデルを取つたらしい。【梗概】〔初編〕和次郎の不在に訪ねて來た矢場七・蛋吉・茶見藏の三人が、和次郎を驚かさうと惡戲を企み、梯子・鍋蓋・炭取など、そこに在り合せた品物を三社縛で見えぬやうに疊に結び付けて置き、三人は佛壇や押入に隱れて待つてゐるうちに、いつの間にか眠つてしまふ。和次郎・掃次郎・土場六がこれを知つて、三人の眠つてゐるのに乘じて、仕返しをしようと、酒宴を開いて狐の尾や、蕎麥と見せた蚯蚓や、小便と見せた惡酒や、餅と見せた馬糞で、眠つてゐる三人に、自分等が狐に化されてゐるものと思はせて驚かさうとしたが、實行に際して、意外の故障やら失敗やらで、滅茶になる。〔二編〕土場六・掃次郎の主催で、他の四人並に愚慢といふ利いた風の男を呼んで、月見の宴をひねつて日見の宴を六月の炎天下の物干で開いて遊び、兼ねて愚慢を愚弄しようといふ惡戲を企み、實行に當つて客は冬仕度で行き、主人側は火鉢の火を盛んにして迎へ、皆汗だくだくで痩我慢をする。物干に上つて、一首の歌を詠むといふことになつて、愚慢は歌の詠めないために炎熱の下に大苦しみに苦しみ、假病して逃げ出す。〔三編〕秋雨の夕、土場六と矢場七は和次郎の宅に惡戲をしかけようと、竹の先に茄子を附け、これを和次郎の戸口に取附け、遠方から曳いてトン〳〵といはせ、又ヅウフラ（メガホンの類）で和次郎の名を遠方から呼んで驚かさうと、夫々準備をして實行する。折柄和次郎の宅には掃次郎・蛋吉・茶見藏も來てゐた。戸をトン〳〵と叩いて和次郎さんと呼ぶので、出て見ると誰もゐない。引込むと又同樣の聲と音がするので、一同氣味惡がる。棕櫚箒を構へてゐる所に、樂右衞門が來合せて突き飛ばされる。漸く事情がわかつて、樂右衞門は惡戲の次第を發見する。一同惡戲の裏を搔かうとしてゐる所に愚慢が來合せて散々な目に逢ひ氣絕する。漸く息を吹きかへしたところに、土場六が惡戲の樣子を見に來たので、愚慢は相手と思うて大喧嘩をしかける。矢場七も駈けつけて三人の組打となる。內の連中が出て仲裁し、後は酒宴となり、一夜を飲み明かし、翌朝日歸りの旅をすることになつて出掛け、品川を過ぎて或る茶店に憩ふ。〔四編〕一行の先に、德利酒を飲みながら行く二人の旅人を見かけて、矢場七が話をしかけ、一杯を所望する。飲むと水である。反對に二人に煙草を喫まれて損をする。大森で茶見藏・蛋吉が、麥藁細工屋をひやかしてゐるうちに、他の四人は料理屋に上り、後から來る二人は酒癖が惡いから酒を飲ませるなといつて置く。和次郎が通り合せた知合ひの女房と娘とに馳走をしようと料理を取つたが、早く去られて折角の料理を無益にする。後から來た茶見藏・蛋吉は、料理を疑つて食べない。漸く事情がわかつて共に大に飲み、六郷を渡り、生麥の立場に休む。【構想】「八笑人」の茶番の世界を、惡戲の世界にかへたものであるが、遊戲に終始してゐる點に於ては同一である。太平時代の遊民の遊戲生活に依つて、遊戲的生活氣分を表はしたものとしては、極限に達した作品である。不自然と誇張の馬鹿らしさに讀者を釣つて行くだけのもので、鯉丈の傑作ではあらうが、一九・三馬が名作には比すべくもない。【參考】「七偏人」「和合人」及び「八笑人」にあらはれたる滑稽趣味　高須梅溪（滑稽趣味の研究）（小寺）

和合人初編（首卷）

和語說略圖 わごせつりやくづ　語學書　一鋪　【著者】東條義門　【刊行】天保四年。天保十三年に增補して、表題も「玉霰補正和語說略圖」としたが、後、內容は天保十三年に增補したものを用ひ、表題は單に「和語說略圖」とした。今一般に行はれてゐるのはこれである。【內容】著者が文政六年に刊行した「友鏡」（「てにをは紐鏡」の條參照）を更に整理して簡約にし、詞の活用と手爾乎波の呼應とを圖示したものである。先づ活用形を、將然言・連用言・截斷言・連體言・已然言・希求言の六段に分ち、これ等の活用言に係る手爾波として、截斷言には「は・も・たゞ」等、連體言には「ぞ・の・や・何」、已然言には「こそ」とし、これ等の活用言を受ける手爾波として、將然言は「ず・で・め・ん・まし」等、連用言は「ぞ・こそ・や・し・つつ」等、截斷言は「や・と・とも・べし・まじ・なり」等、連體言は「哉・こそ・ぞ・や・か・まで・如し」等、已然言は「ば・ど・共」などであると記してゐる。次に活用の種類を十數種に分けてゐる。第一に「現在」として「無し」と「正し」（形容詞の志語とある語に當る）。次に過去として「キ・シ」。次に「不」（打消の助動詞）。次に「有り」（ラ行變格）。次に「變格活」として加行・佐行・奈行の變格を擧げ、次に下二段活・中二段活（現今の上二段活）・一段の活（現今の上一段活に當る）・四段の活を擧げ、次に「ん・め」「まく・まし・ましか」「んず・んずる・んずれ」の三種（助動詞）を擧げ、而して以上の諸活用を「詞八衢」（別項）及び「友鏡」と對照してゐる。最後に「因又略示」と記して「無し・正し・將む・有り」の四つについて、前記のものとは少しく異なつた圖を擧げてゐる。以上が天保四年に刊行した部分である。而して天保十三年に增補した部分は、初めに「和語說略圖」と云ふ圖譜の謂はれを記し、次に五十音圖を記して、四段・下二段・中二段・一段等の語の意味、活用の形を說明してゐる。【價値】本圖は片々たる美濃版一枚大の圖であるが、義門の一生に於ける活用及び呼應の研究の精髓であつて、その活用及び呼應に關する多くの著述は、本圖に至る過程を示したもの、乃至本圖の所說を裏付けたものである。而して本圖は活用呼應の研究が始まつて以來、明治初年に至る迄の間に出來たこの種の著述中、簡明なる點、確實なる點に於て、一頭地を拔くものである。勿論「てにをは紐鏡」「詞八衢」（各別項）の類が、本圖の基礎になつてゐるのであるが、義門はこれ等の書を考究して、その足らざるを補ひ、誤れるを正して本圖を作つたのである。併し本圖にもなほ缺點がないではない。その最も大なるものは動詞・形容詞・助動詞等の區別をしてゐないために、動詞に於ては「詞八衢」の說を踏襲して、變格活・下二段活等の名稱を附してゐるが、形容詞・助動詞等で動詞とは活用を異にするものには、何等名稱を附してゐない事、又下一段活用を逸した事、又「無し」「正し」等に希求言（命令形）として「かれ」「しかれ」を附けた事（但し「無し、無き」の活用と「無かれ」の活用、「正し」と「正しかれ」の活用が異つてゐる事は、義門は知つてゐたのであるが、これを同一行に置いた）などである。【末書】「活語指南」（別項）は義門が平井重民と共に、「和語說略圖」について、條を逐うて講義したもので、略圖を見る者の必ず參照すべきものである。「和語說略圖聞書」（寫本、義門述）。これに二部ある。一は天保九年六月六日に始めたもので（六日と七日に講ぜしものと思ふ）、活用の三轉五轉、活用の種類を述べたもの。一は同年同月八日から講義したもので（八日一日、或は翌日にも亙つたかと思ふ）、體言用言の區別、用言の活用等について記したものである。この他、義門の講義したものでは、「和語說略圖演說」二部、「語辭林香記」一部一卷等は、本圖と多少づつ關係がある。「和語活用略圖」（一鋪、嘉永元年刊）、義門の弟子法雲（別項）が著はしたもので、「和語說略圖」を若干改めたものである。「和語活用略圖解」（一卷一冊、寫本。嘉永元年成る。法雲著）。上記の「和語活用略圖」の講義を筆記したものである。但し法雲は、初め義門の教を受けたのであるが、後、音義に傾いた爲め、その說は義門とは餘程縁遠いものになつてゐる。（福田）

和事 わごと　演劇　【名義】武張つた狂言に對して和い狂言の意。【解說】男女の戀愛・情痴を歌舞伎劇の上で總稱して和事といふが、主として院本物の世話物にのみいふので、「濡れ事」のやうに、特に情事のみとはいへぬ。廣い意味にも使ふ。かく曖昧な定義しかつけられぬが、「和事師」といふと、はつきりいへる。「濡れ事師」であると共に、戀愛劇の主役を總稱する。「紙治」「梅忠」は、狂言は「和事」であるが、「和事師」といふと更に明白に治兵衞や、忠兵衞を指する役者になる。（三宅）

和琴 わごん　「倭琴」を見よ。

童謠 わざうた　歌謠　【名稱】「日本書紀」に、童謠・謠歌などと記したのを、ワザウタと訓ずる。ワザは神態の意で、神が時の異變を諷はしめるを云ふといふ（稜威言別）。或は、勞作歌の意であらうか。或る作業をなしつつ歌ふ歌を云ふ。兎に角、時人の口にのぼる流行歌・俗謠の類である。【出典】「日本書紀」崇神の卷に、童女歌一首。時人歌一首。同景行の卷に、時人歌一首。同舒明の卷に時人歌一首。同皇極の卷に童謠一首。猿の歌一首。諷歌三首。時人歌一首。齊明の卷に童謠一首、天智の卷に童謠五首。「續日本紀」光仁の卷に童謠一首（同歌「日本靈異記」下卷及び催馬樂呂歌に出づ）。「日本後紀」桓武の卷に童謠一首（同歌「日本靈異記」下卷に出づ）。「續日本後紀」仁明の卷に童謠一首。「三代實錄」清和の卷に童謠一首。「日本靈異記」中卷に、聖武天皇時代の妖謠一首。同下卷に孝謙天皇時代の妖謠一首。同じく稱德天皇時代の妖謠三首。「聖德太子傳曆」に皇極天皇時代の童謠二首（一首は「日本書紀」に出でし童謠と同じ）。この外、「肥前風土記」に杵島曲一首を載せたのを初め、古風土記にも妖謠多く見ゆ。平安時代後期にも、「後拾遺往生傳」卷下に出でた長治元年の兒童歌や、「平家物語」卷十の中宮御產事の條に見える童謠などがある。【解說】これ等の歌は、殆ど全部社會的事件の諷諭として揭載せられたものである。皇極紀に出た童謠

岩の上に　小猿米燒く　米だにも　食げて通らせ　山羊の小父

を同書に解して、岩の上とは上宮に喩へ、小猿は大臣入鹿に喩へ、米燒くと云ふのは、入鹿が上宮を燒く事に喩へ、山羊の小父とは、山背王の頭髮が山羊に似てゐるのに喩へ、一首の意は、入鹿が古人王を擁立するために、上宮を圍んで燒いたので、上宮に居られた山背王は、宮を棄てて深山に隱れ給うたその前兆を諷つたものであると云ふ。併しこの歌は、山野の情景を歌つた民謠として見る時に眞の味がある。童謠は多く寓意性を持つ歌と解せられ、上代の童謠悲歌の保存せられたのも、この意味に於て記載せられたのであるが、何れも、左樣な寓意性のなき純粹の民謠流行唄として味ふ事の出來る歌である。歌の形式は殆ど全部が短歌形式であるが、皇極紀に出た童謠「はろ〳〵に　琴ぞ聞ゆる　島の藪原」の如く、片歌形式のものもあり、長歌形式の歌もある。又「日本書紀」の童謠は多く三首位連續して、一團の流行唄として記されてゐる。「書紀」の童謠が一音一字の表記法によることは、記・紀の歌謠の記載法と同一であるが、「續日本紀」以下の國史や、「日本靈異記」に出でた童謠は何れも宣命體で記され、古風土記の謠歌の記載法は、又記・紀のそれと同樣で、奈良時代以前と以後との歌謠の記載法の全く異なれる特徵を有する事を見る。齊明紀童謠の一歌と、「日本靈異記」下卷の妖謠、古風土記の歌の一部には、全く解釋不明の歌がある。

【齊明紀童謠】齊明紀六年、新羅征伐のために新造せられた船が、夜中故なく艫舳が違とな

り、敗北する事の前兆なるを知つた時に行はれた童謠は、古來難解の歌として、「萬葉集」卷一の莫囂圓隣之の歌と共に名高い。多分三音位に分たれるのであらう。字を置き代へるべきだとか、歌中に「甲子」の二字のあるのが問題であるとか、種々の説がある。殊に荷田春滿の解説と云ふのが名高い。

【註釋書】 釋日本紀所引承平日本紀私記（國史大系所收）○厚顏抄中卷 契沖（契沖全集第五卷所收）○齊明紀童謠考 村田春海（荷田春滿の解説を賀茂眞淵に傳へ、その説を眞淵より春海に示した書簡を初めに載す。次に「齊明紀童謠考後按」（小書簡）とて、清水濱臣の考にあづいて、春海の説を揚ぐ。又本居宣長説を引き、別にこの歌の荷田大人の秘説なりとて云ひし偶木ありとて、その説をあげて辨じた。享和元年の春海の自序、清水濱臣の跋文がある。享和二年刊）○齊明紀童謠 荷田春滿（天明七年の藤井高尚の識語ある本がある。春滿より賀茂眞淵に傳へられたものと云ふ。但し、この書は「齊明紀童謠考」に僞書ありとて辨じたその僞書である。上田秋成の「荷田子訓讀齊明紀童謠存疑」の卷首に收載した）○齊明紀なる童謠 本居宣長（玉勝間卷三所收）○日本紀歌解槻乃落葉下卷 荒木田久老（文政二年刊）○日本紀類聚解卷八 內山眞龍（寫本）○荷田子訓讀齊明紀童謠存疑 上田秋成（荻原元克が荷田春滿の訓解の書を得て、上田秋成に見せたので、秋成がその註解を書き記し、終りにその僞書なる事を辨じたもの。寛政四年の荒木田久老の跋書がある。上田秋成全集卷二所收）○齊明紀童謠の考 村上眞澄（寫本）○齊明紀童謠考のさだ 高田與清（村田春海の「齊明紀童謠考後按」の説を駁し、村上眞澄の説に自説を加ふ。擁書漫筆卷一所收）○齊明紀童謠推釋 伴信友（文政元年五月十六日揚々集に記す。比古婆衣卷十五所收）○童謠辨説補論 高田與清（文政二年成る。村上眞澄の説に自説を加ふ。高田與清の「齊明記童謠考のさだ」の誤を辨ず。寫本）○齊明紀童謠辨 松岡御調（安政二年の序文がある。舊來の諸説をあげ自説を述ぶ。江割恒久の書入本もある。明治六年刊）○齊明紀童謠 鹿持雅澄（萬葉集古義「厚顏抄」「玉勝間」、荷田氏秘説、春海「後按」等の説を批評し、自説を述ぶ。「稜威言別」にも同説出づ。山齊叢子卷二所收）○齊明紀童謠解 淺野貞顯（高田與清の説に自説を加ふ。「不盡舟」は安政五年刊。不盡舟上卷所收）○童謠考集説 伴直方（荷田氏秘説・「私記」「厚顏抄」、春海「童謠考」、與清「攝齋詩稿」「日本紀歌解槻乃落葉」「史徵」「春丸（松納晴之釋寫）」「二記國詩集註」（鵜野眞實）卷五の説等の諸註を翻刻集成するもの。文政十年成る。天保九年の石原兼明の跋文のある本がある。寫本）○日本歌謠選 佐佐木信綱（以上の諸説の訓を大概併せ揭げた）○弘仁紀童謠に關しては次の如き註解の書がある。○南京遺文 狩谷棭齋 ○光仁紀童謠解義 高田眞（皇典講究所講演集第一五九號）

【參考】 萬葉緯 今井似閑 ○日本歌謠 佐佐木信綱 〔藤田〕

和讃 わさん

佛教歌謠 **【名義】** 漢讃に對して、和語を以て綴られた七五句連形の佛教讃歌。和讃の意を廣義に解すると、「百石讃歎」「法華讃歎」の如き短歌形式、又「佛足石歌體」「調御陀」（各別項）の如き今樣形式・朗詠形式の如き讃歌も和讃と云ふべきであるが、普通七五句を連次に重ね、大體四句を基本とする歌體にのみ名づけてゐる。**【部類】** 內容の上から分つと、神明・佛・菩薩・天部の讃、祖師碩德の讃、教義經典の讃、寺社靈驗の讃等になり、世俗人情のことを謠つたもの、假に云へば世俗讃の如きものが加へられる。**【沿革】**〔平安時代〕和讃の發生期を現存のものから見ると、時代的に最古と稱せられてゐるものに「舍利讃歎」がある。この作者は慈覺大師圓仁（別項）とされてゐる。圓仁は唐から歸朝して貞觀二年舍利會を始修したが、さすれば「舍利讃歎」は、この會のために作られたかとも考へられるが確證はない。考究の餘地は十分ある。至極古體であることは用語並に形式から認められる。この「舍利讃歎」は所謂「法華」「百石」等の讃歎歌の類に考へられもするが、普通和讃として扱ふ。形式は七五・八六・八五・七四の句が相交つて純然たる和讃の體をなしてゐないが、やがて整形七五調和讃の出づべきことを豫々と示してゐる。この讃歎は、かく一方和讃の形式を豫測するものであり、又一方には「佛足石歌體」の形式をほのかに殘してゐるものとして注意すべきものである。全體七十二句より成り、內容は舍利讃讃で、不空三藏の舍利讃文の意を敷衍したものと云はれてをる。この曲節は絶えてゐて良忍（長承元年寂）の時代、「百石讃歎」の曲節によつて諷唱されてゐたが、後、多武峯顯證の傳ふる古曲に依つて良忍が再興したといはれてゐる（聲明源流記）。高野辰之博士は、曲は必ず外來の曲節で、極めて簡單であつたらうと述べてゐる（日本歌謠史）。次に古いとされてゐるものに「註本覺讃」がある。慈慧大師良源（延喜十二年—寛和元年）作と傳へられてゐるが、もつと後のものではあるまいか。內容は天台の中道思想を讃詠した六十句に近いものである。慈慧大師の弟子千觀（延喜十八年—永觀元年）作と云はれるものに「極樂國彌陀和讃」がある。古く慶保胤の「日本往生極樂記」に千觀作とあり、今六十八句三十四行のものが傳はつてゐるが、これは「極樂記」に二十餘行とあるに合はぬ。或は二十餘行は三十餘行の誤りであるやも知れず、又或は和讃の補句脫句は常のこと故、二十餘行であつたかも知れぬ。ただ古本の出現を俟たねば何とも云へぬ問題である。今日傳はるものに七五句に五音の首句と七音の尾句を附加して、和歌體にしたものがある。勿論後世のさかしらである。內容は阿彌陀讃の節約とも云ふべきものである。なほほぼ千觀と時代を同じうしてゐる惠心僧都（源信）の作と稱せられてゐるものが五六ある。「天台大師和讃」はその一つで、二百數十句より成り、今日台宗天台會に諷詠される。これは「智者大師別傳」や顏魯公の「天台大師畫讃」等を參考にして作られたものである。「極樂六時讃」も源信作と云はれてゐる。晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜の六時に分つて、極樂世界の莊嚴を讃歎したもの、八百句より成る大作で、「榮華物語」音樂卷、「梁塵秘抄」佛歌、「長秋詠藻」詞書に、この讃の一部が摘採されてゐる。「來迎和讃」「二十五菩薩和讃」「山王和讃」等は、同じく惠心作と傳へられてはゐるが、作者については大に考究されねばならぬ。なほ彼の作として、「八塔讃」があることを傳へてゐる（本朝法華驗記）が、詞章は現存しない。凡そ以上の傳へによれば、和讃が盛行したのは平安朝中期頃と見るべきであらう。而して以後末期に至る迄の、詞章現存のもので有名なものに、覺超僧都（長元年中寂）作と傳ふる「彌陀如來和讃」、永觀律師（寛平二年—天永二年）作と傳ふる「迎接讃」「舍利講式和讃」、藤原通憲作と傳へる「智證大師和讃」、榊町中納言作と云はれる「弘法大師和讃」があるが、作者について確證があるわけではない。なほ當代製作年次の明かなものに珍海已講（仁平二年寂）の「菩提心讃」（文治三年八月成る）なるものがある。〔鎌倉時代〕證眞作と傳へられる「慈覺大師和讃」があるが、これも眞僞不明である。明慧上人（貞應元年寂）の作と云はれるものに、「涅槃」「遺讃」「羅漢」の三和讃がある。和讃中注目すべき作である。西大寺睿尊（正應三年寂）に、「眞言安心」「光明眞言」の二和讃があり、法然上人（別項）に「涅槃和讃」の作があるが、彼の作なるや否やは大に疑問とすべきである。特記すべきものに時宗の諸和讃がある。本宗は踊和讃を以て布教の唯一の武器とした爲めに多數製作され、概ね感傷的に柔かく、文藻的に美しいものである。初祖一遍上人（別項）に「別願和讃」（弘安十年作）、「百利口語」があり、二世他阿上人（別項）に「往生讃」。三世中務上人（元應二年寂）に「弘願」「六道」の讃、七世託阿上人（元德元年寂）に「寶藏」「莊嚴」「光陰」「大利」の四讃がある。「三帖和讃」は、親鸞上人（別項）作と云はれてゐる。その製作年次は、一説に建長六年（八十二歳）より翌年に亙つての作と云はれ、また一説には、建長六年より七年に亙つて作られ、その後三年を經て「正像末和讃」が製作されたとある。又編纂に就いても、三帖共に上人自らの編とする説、門人編纂説の兩樣がある。又上人自編と云ふ點にも、悉く上人の手に成るものとの説、一部は後人が追加したとなす説があつて決定を見ない。而して又、これ等和讃が果して上人作か否かについても論がある。「三帖」が南北朝以前の作であることは、「慕歸繪詞」（別項）の記事などから云へるのであつて、これに依つて南北朝以前の製作、而して上人の時より時代は少しく下るべしと説をなす者もある。併し「末燈鈔」に慶信房が上人に上つた消息があり、その中に「淨土和讃にも云々」として諸經讃中の句を引用してゐる故、「末燈鈔」を信ずれば、「淨土和讃」は、既に上人存生中に存してゐたことが分る。又存覺の「淨土見聞集」に、「淨土」「正像末和讃」の名を擧げてゐるところから、本書を存覺の作であるとすれば、親鸞上人の和讃製作と云ふこともや、信ずるに足るのである。さらば全部が全部上人作にあらずと斷ずることも出來ない。併しながら「現世利益讃」「善光寺讃」の如き疑ひ得るものがあり、後世附加説も存在し得るのである。「三帖和讃」の次第は、次の如くなつてゐる。（一）「淨土和讃」讃阿彌陀佛偈讃四十八首、大經讃二十二首、觀經讃九首、小經讃五首、諸經讃九首、現世利益讃十五首、勢至讃八首。（二）「高僧和讃」龍樹讃十首、天親讃十首、曇鸞讃三十四首、道綽讃七首、善導讃二十六首、源信讃十首、源空讃二十首、卷尾二首。（三）「正像末淨土和讃」同章一首、正像末法讃五十八首、疑惑讃二十三首、太子讃十一首、誡疑讃十六首、善光寺讃五首。「淨土和讃」は、淨土教典たる三部經の讃歎、「高僧和讃」は、眞宗所依の初祖龍樹より法然に至るまでの、淨土教關係の祖師の行化を讃歎せるもの、「正像末和讃」は佛滅後三時代を具さに説いて、彌陀本願は三時代を亙つて弘通してゐると説いたものである。

〔江戸時代〕この時代に入つての製作は、實に多數に上るが、概ね卑俗で、前代の摸倣作が多く、取るに足るものがない。この時代で注意すべきは、世俗の事件を扱つたもので、例へば苅萱・中將姫・教盛・熊谷入道・葛の葉・梅若丸・安珍清姫・阿波鳴戸・松蟲鈴蟲・八百屋お七等の和讃で、教團文學が世俗藝能者の手にも移つて行つたことを示すものである。

【所收本】 天台宗聖典所載（大日本佛教全書）○佛教和讃全書○日本歌謠集成卷四○惠心僧都全集○國文東方佛教叢書歌頌部。

【註釋書】 天台大師和讃抹原鈔一卷 豐原（日本歌謠集成卷四所收）○別願和讃直談鈔一卷 賞山（正德四年序）○別願和讃新註一卷 一祛（享保元年刊）○百利口語註 俊鳳（一遍上人語錄諺釋所收）。〔三帖和讃〕和讃私記六卷 慶海（慶長十一年）○和讃首書三卷 空譽（寛治二年作、元文元年刊）○和讃註解十九卷 空譽（寛文十年）○和讃報恩鈔六卷 高空 ○略註一卷 高空 ○科本四卷 高空 ○和讃私褒廿二卷 圓澄 ○和讃聞信鈔六卷 義圓 ○和讃本義十三卷 玄貞（元祿十一年）○和讃供養方軌 僧鋒（明治十五年赤松兵校正排行）○三帖和讃講義 柏原祐義。〔淨土和讃〕思齊記三卷 知空（寛治二年）○管窺十卷 義教（享保十二年）○三帖和讃略解六卷 句誓（安永九年作）○三帖和讃會留漢記九卷 法霖 ○現世利益和讃鈔五卷 慧貫 ○四十八首光壽訣三卷 實雲 ○精義三卷 龍敬（明和四年）。〔正像末淨土和讃〕報恩解十八卷 義教 ○速疑解六卷 香嚴（安永五年刊）○齊豐記三卷 實雲 ○私考一卷 純譽〔高僧和讃〕思齊記十卷 知空 ○聖漢記一卷 法霖 ○興宗四卷 實雲 ○講林六卷 知洞

【附記】 佛教讃歎の一たる和讃が、何故に七五句調なるを要したかについては諸家諸説がある。伴信友が弘法大師のいろは讃が四知の漢讃・梵讃の句調を摸したものであると云つてゐる説には、合點できぬ言ひ過ぎがあるが、幾分の眞理を含んでゐる。信友の如く四知讃のみから考へる必要はないが、漢讃の七言音讃は七五句調に近くなる。多くの音讃頌は諷誦された。音讃諷詠が和讃の口調に近いことは諷詠してみて知れる。この點から信友の説を無下に斥けることは出來ぬ。高野博士は「日本歌謠史」に於て、七五調の發生は外來音曲の曲節に依つたのであらうと云はれてゐる。これにも眞理はあらうが、我々は日本長歌が平安朝初頭に已に七五調になりつつあつたことも考慮に入れねばなるまい。和讃はまた今樣（別項）と密接な關係にある。源信作なる「天台大師和讃」の一部が「梁塵秘抄」（別項）

四座講法則中の涅槃和讃（寛永二年刊）

の四句紳歌に、「極樂六時讃」の一部が佛歌に、永觀作といふ「舍利講式和讃」の一部が法文歌に轉用されてゐる。又大報恩寺佛體內所現の歌讃は、和讃と見る人と、法文歌と見る人とがあるが、區別すべきものではあるまい。今樣の七五四句を基本とすることは和讃と近いことを思はせる。又念佛讃詠歌と歌念佛（別項）との關係も注意すべきであらう。

【參考】日本歌謠史高野辰之〇宗敎讃歌の研究 志田義秀（日本文學講座）〇源信僧都の作と傳へられる和讃の眞僞 多屋賴俊（大谷學報九ノ二）〇和讃の形式 多屋賴俊（國語と國文學昭和六ノ二）　（筑土）

和詩 わし　俳諧【名稱】日本の詩といふ義で、假名ノ詩とも云ふ。【性質】漢詩の諸體の名目を踏襲し、その韻法に倣つて假名の詩に詩格を定め、俳諧的な情趣を歌つたものである。韻法は五十音の横列を以て假名の韻を定めてゐるから、ウクの韵・エケの韵・イキの韵などの名目がある。詩體には五言・七言・五言律・七言律・三五七言等の體がある。即ち五言とは、四句一章で一句十音より成り、第一句・第二句・第四句の末で韻を合せ、七言とは四句一章で一句十四音より成り、第一句・第二句・第四句の末で韻を合せ、五言律とは八句一章で一句十音より成り、第二句・第四句・第六句・第八句の末で韻を合せ、七言律とは八句一章で一句十四音より成り、第二句・第四句・第六句・第八句の末で韻を合せるものである。又三五七言とは十二句を一章とし、第一句三音・第二句五音・第三句七音といふ順序で、韻は第三句・第六句・第十二句の末で合せる事になつてゐる。これは李白の三五七言の詩に倣つたのであるとある。

【沿革】支考は本朝詠ノ詩序（本朝文鑑）に於て、護郎ノ狂の變名で、芭蕉庵で「白氏文集」を見て芭蕉と和漢の詩歌を論じた時に、芭蕉から假名ノ詩の製作を頻りに勸められたのであると云つてゐるけれども、これは因より僞說で、實は支考の創意に成つたものである。從つて支考には多くの作があつた。即ち獅子庵ノ三詠・和漢賞ノ花・和漢賞ノ月・逍遙遊・落柿舍先生挽歌・祭ノ猫文等である。其角の鉢扣ノ歌も和詩の體であるけれども、和詩は專ら美濃派の製作したものである。降つて也有もこれを作り、「鶉衣拾遺」にその作十三章が見られる。安永頃秋田の益戸巴鈎が和詩を善くし、論作があつた。吉川五明も亦和詩に巧みで、特にその門の工藤野松が多く製作し、一派の和詩を集めて「和詩夢帋」を成してゐる。蕪村にも和詩に類する作があつて、春風馬堤ノ曲及び澱河歌や（夜半樂）、晋我追善の「いそのはな」に載せる北壽老仙をいたむと題する作などがある。又天明頃の美濃派系統の人阿梨耶庵素緑は、眞名ノ詩や假名ノ詩に巧みであつた。その後は和詩に名を得た者もなかつたらしく、漸次跡を斷つに至つた。

【硏究】創始者支考の論は「本朝文鑑」（別項）に見えてゐるが、支考は特に「文鑑」の詩類の文を抄出し、「本朝詩格」と題して出版してゐる。美濃派では、支考の論を繼承した。巴鈎の「俳諧さるすべり」には假名ノ詩の論があつて、即ち巴鈎は假名ノ詩製作を以て支考の功とし、その五七の句法、押韵の論は大體承認してゐるが、三五七言は五言・七言の則に倣つて、三々・五々・七々とすべきであると云ひ、五十音の横列の假名で韵を定めるもよいが、十字の數に限られて長律には用ひ難いから、長律には眞名ノ韵を押す方がよいと論じてゐる。野松は巴鈎が涼帒の始めた片歌も一體に備へてほしいと云つた論を是認して、その著「和詩夢帋」に涼帒その他の片歌をも收めてゐる。又三浦梅園の「詩轍」にも和詩の論が見える。

【參考】本朝詩格各務支考〇本朝文鑑同上〇和漢文操同上〇俳諧さるすべり 益戸巴鈎〇詩轍 三浦梅園　（潁原）

和爾雅 わじが　語學書　八卷九册【著者】貝原好古【刊行】元祿七年。野宮郁の序（元祿二年）、貝原篤信の序（元祿七年）、松下見林の跋（元祿元年）がある。【解說】支那の「爾雅」に準じて作つた辭書であるから、名づけて「和爾雅」と云ふ。類に從つて二十四門を分つてある。（一）天文、（二）地理（附、火水土石類・日本國郡名・日本國名所・外國名）、（三）歲時、（四）居處、（五）神祇、（六）人倫、（七）身體（疾病附）、（八）親屬、（九）官職、（一〇）姓名、（一一）衣服（布帛綵色附）、（一二）寶貨、（一三）器用、（一四）畜獸、（一五）禽鳥、（一六）鱗魚、（一七）蟲介、（一八）米穀、（一九）飲食、（二〇）菓蓏、（二一）菜蔬、（二二）草木、（二三）鮮茸、（二四）言語（人事附）附、雜類と分ちて單語を擧げ、漢文で註解し、本文には假名を附し、註には訓點を附してゐる。　（龜田）

和字解 わじかい　語學書　一卷一册【著者】貝原篤信（益軒）【刊行】元祿十二年の自序がある。同年出版か。なほ元文二年版・延享五年版・天保十三年版・明治年間版等がある。明治版は表題を「貝原益軒かなつかひ」と改稱してゐる。又「三十輻」「益軒全集」（明治四十三年刊）等にも收めてある。【內容】假名遣について說いたもので、初めに假名遣の三要訣を擧げてゐる。即ち「一」にはわいうゑお五字の同音の字を、和音五十字の相通によりて、各よろしき所に用ること」（例へば「さらへ」「たくはへ」は「さらふ」「たくはふ」と通ふ故に、への字を用ふべし）、これ假名遣の基本であると云ひ、「二」には五音の內、こゑの輕重によりて用る字かはること」（例へば端のいは輕く細き音に用ひ、中のゐは重く太き音に用ふ）。「三」には開合のかなをかきわくるにあり」（同じくオの長音に發音するもののうち、上にあ列の假名のある開音と、え列又はお列の假名のある合音とを區別する事）と云ひ、次に、い・ゐ・ひ・は・を・お・へ・え・ゑ・う・ふ・は・わ等の假名について、端・中・奧・前・後の五類を立てて（端・奧・前・後等はいろはの順序に依つて云ふ）、實例を擧げて說明してゐる。併し延享五年版のみは全く組織を變へ、問題になる語をイロハ順に排列してゐる。【價値・影響】本書の假名遣法は、自序の中に「採二舊說之可一用者一、且考二於日本紀萬葉集和名抄古今和歌集等之古書一、訂二之以二和音五十字一、間加二臆說一云云」と云つてゐるが、舊說の用ふべきものを採るとは、所謂定家假名遣であり、「萬葉」「日本紀」等の古書を考へるとは、契沖等の歷史的假名遣の主義であつて、この兩者を折衷したもののやうに見えるが、併し歷史的假名遣主義の精神をどれだけ理解してゐたかは疑問である。本書の假名遣法は當時に於ては穩當なものと認められ、廣く行はれたやうである。同時に本書に批判を加へたものも出た。即ち服部闇笑の「假名遣問答抄」（寬保元年刊）は、本書（この書では「或書」として書名を明示してゐない）は當時の假名遣書中、最も秀でたものであるから、世人のためにその書の非のあるところを指摘するものであるとして、所々に本書の說を引いてこれに反駁を加へてゐる。本書は又、文雄の「和字大觀抄」（別項）にも相當影響を與へてゐることが認められる。　（龜田）

倭字古今通例全書 わじここんつうれいぜんしよ　語學書　八卷四册【著者】橘成員【刊行】元祿九年八月。元祿八年秋自序、同九年三月梅保春の序、同九年春伴益敏の跋がある。【內容】假名遣の法を記した書で、同じ著者の「假名字例」（四卷、延寶六年刊）を增補訂正したもの。初めに「假名凡例」として、五音五位の圖、七音總括略圖、空海師無同字長歌、諸歸釋以呂波本字等を記し、次に、端い・中ゐ・奧ひ・端へ・中え・奧ゑ・端ほ・中を・奧お・わの字・はの字・うの字・ふの字・むの字等の用法を概說し、次に假名體用、通用の假名、志知須都の濁音、叙音訓、爲持をモタセ、閑寂をオキナサビと訓むの類、變通等について述べ、次に總論とも云ふべきものがある。漢字及び悉曇の起源、以呂波歌は弘法大師の作である事、假名遣の書としては行阿假名遣が濫觴であるが、これは誤りが少くない事、記紀・萬葉・古今集等古書の假名遣は混亂してゐて假名遣の證據とは爲し難い事。言語は風土に依つて異るもので、日本語は印度や支那とは音韻組織が同じくないことを說いてゐる。次に本文に入り、假名の誤り易い語を、いろは順に列擧し、その下に漢字を擧げ、解釋を加へてゐる。なほいろは毎の各項毎に所收の語彙を、（一）乾坤（天象・地形・家屋・名所）、（二）氣形（鳥獸・人倫・支體・獸・蟲・魚）、（三）生植（木・草・果・菌）、（四）服器（衣類・食物・藥品・用具）、（五）雜事（言語・數事・官位・兵器）の五種に類別してゐる。所收の單語數約三千に及んでゐる。

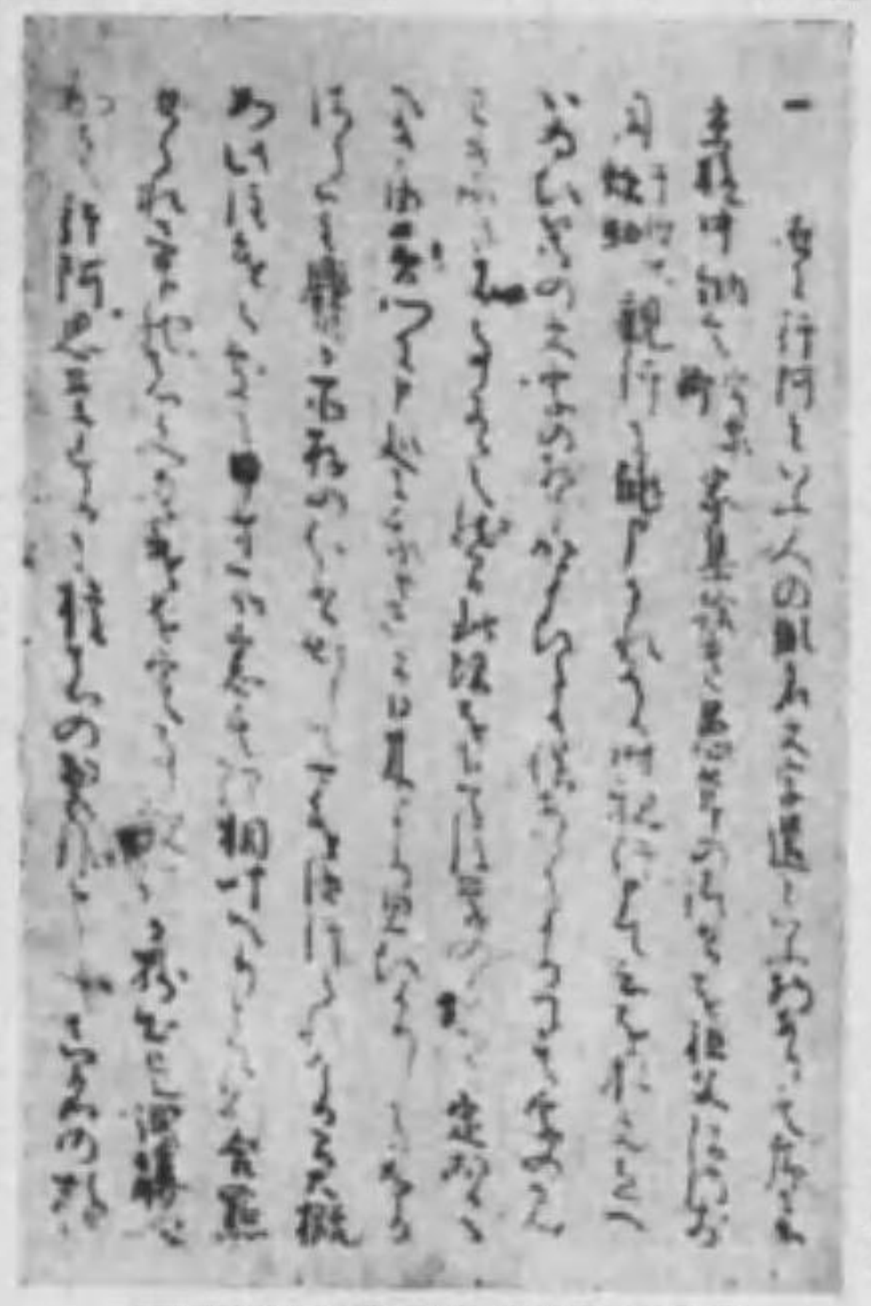
【價値・影響】本書は、書名こそ明記してはゐないが、本書より一年前に刊行された契沖の「和字正濫鈔」（別項）に對して、その古書に基づく假名遣主義に反駁を加へたものとして名高い。即ちその總論の中に、「かなづかひの法往古いまだ不定、日本紀より三代實錄までの國史・萬葉集・新撰萬葉・古語拾遺・舊事紀・古事記・延喜式・和名抄・古今和歌集其外家々の集のかなよみこゑとりまじへ、又はをおえゑ等亂てあり、今かやうの書を假名の證據とさだめがたし」と云ひ、又「近年かな遣の書あまた出たり、或は雜濫し、或は古書を證據にたて、曖昧のたしかにおもふやうにしなせり、微とするにたれりとおもふらめ、一向かなを不知ゆへなり」と云つてゐる。契沖は、この書を見て「和字正濫鈔」を反駁したものと認め、本書に對して猛烈な反駁を加へた。「和字正濫通妨抄」（五卷、契沖全集卷七所收）がこれである。後、「通妨抄」の駁擊の程度を緩めて「和字正濫鈔」の說を訂正したのが「和字正濫要略」（二卷、契沖全集卷七所收）である。然らば、本書の主義は何かといふに、總論のところで、「假名文字遣」にも混亂紕繆少くないことを指摘した後に、「畢竟かなつかひの法往昔いまだ不定」と述べてゐるので、本書の所說は先行假名遣書の影響を離れて、著者獨自の見解より出たもののやうにも解せられるが、實例から見ると、所謂定家假名遣と一致するところが少くない。而してその根本主義を說明した言としては、「假名の法は平上去入の四聲にしたがひてさだまりぬ中國にては經傳詩韻にして沉約神珙唐元和の陽寿公南陽釋處忠等四聲字法を專とす經傳の叶韻といへども今の法則としがたきものありなんぞ舊記になづまんや只理の正遣にしたがひて可也」といふのを見ることが出來るが、その意味するところは明かでない。內容を檢して見ても何を根據としたものであるか不明であり、また所々に「口傳」又は「傳」等と記したものがあつて、秘傳を重んじたことが知られるが、この秘傳なるものがどんな內容を持つてゐたかは、今に至つては知るよすがもない。併し後世の人々は、多く上記の一文に據り、本書は四聲によつて假名遣を定めることを主張するもの（所謂音韻的假名遣）と認めたやうである。（「和字正濫鈔」參照）　（龜田）

和字正濫鈔 わじしやうらんせう　語學書　五卷五册【著者】契沖。殿村氏所藏の稿本には契沖の名があるが、刊本には著者の名は明記してない。【成立・刊行】元祿六年成る。元祿八年九月、京都の中河喜兵衞と江戶の中河五郎兵衞がはじめて刊行した。同じく契沖の著「和字正濫通妨抄」（元祿十年成）に、十餘年許り前から、和書を讀む際、假名遣の證ともなるべきものを見るに任せて寫し集め、所々註など加へ、これを「和字正濫鈔」と名付けて置いたところ、或る機會から僧覺彥の見るところとなり、覺彥から出版を勸められ、遂に刊行したのであるといふ事が記されてゐる。【諸本】稿本が、佐佐木信綱博士と大阪の殿村氏とに各一部所藏されてゐる。佐佐木博士所藏の稿本は契沖の自筆であるが、總論の部分のみであり、殿村氏所藏の稿本は、本文は他筆で朱及び墨の加筆が契沖自筆である。併しこれ等は刊本とは相當の懸隔があるのであつて、刊本の原稿に當るやうなものはまだ見出されない。刊本としては、原刊本の外に元文四年正月大阪柏原屋淸右衞門版、文政十一年冬大阪加賀屋善藏版及び版元・刊年不明の版本があるが、これ等は何れも元祿八年版と同一版木を用ひた後刷本である。元祿八年版には間々文字の拔けたところなどがあるのであるが、後刷本はこれ等を後に入木して補つた爲め、誤つたところがある。元祿八年版が美濃版であるのに對して、後刷本はすべて半紙本である。また活版本としては、語學叢書（別項）所收のものと、契沖全集第七卷（昭和二年刊）所收のものとがある。語學叢書本は、元祿八年版と和四年版とに據つたといふが、どちらにも一致しない點がある。契沖全集本は元祿八年版に據り、疑はしい箇所は、殿村氏所藏の稿本及び後刷本を參照して按を加へてゐる。【解說】中古以來、源親行の著でその孫行阿の增補した「假名文字遣」が、定家假名遣と稱せられて專ら行はれてゐたが、これは何に據つて定めたか不明であつた。契沖は「萬葉集」研究のため、「古事記」「日本書紀」以下の國史、「和名類聚鈔」「延喜式」をはじめ、奈良朝及び平安朝の諸書を涉獵してゐるうちに、平安朝初期以前の文獻に於ては、後世同音に發音する「い」「ゐ」「え」「ゑ」「お」「を」、語中語尾の波行の假名と和行の假名などの用法が常に一定し、これ等の假名の區別が儼然として存する事を見出して、この時代のものを標準として假名遣を定め、「萬葉代匠記」精撰本以後の自著にこれを實行してゐるが、この假名遣に關する研究を纏めて一書としたのが、即ち本書である。

【內容】第一卷は總論又は序說の部であつて、ひろく日本の言語・文字・音韻等について概說し、第二卷以下は本文で、「い」「中下のい」「ゐ」「中下のゐ」「ひ」（以上第二卷）、「を」「中下のを」「お」「中下のお」「中下のほ」（以上第三卷）、「え」「中下のえ」「ゑ」「中下のゑ」「中下のへ」「中下のわ」「中下のは」「中下のう」（以上第四卷）、「中

下のふ」「むとうとまきるゝ詞」「うとむとかよふ類」「うとぬとかよふ類」「むとぬとかよふ類」「むともとかよふ類」「むとふとかよふ類」「ふともとかよふ類」「へとめとかよふ類」「めと聞ゆるへもし」「むにまかふふ」「みにまかふひ」「をと聞ゆるふ」「みをうといふ類少々」「みをむといふ類少々」「假名にたかひていふ類」「中下に濁るち」「中下に濁るし」「中下に濁るつ」「中下に濁るす」「何ろふといふ言の類」（以上第五巻）などの條目を設けて、各々その假名を用ひる語を伊呂波順に標出し、各語の下に出典又は考説を附し、間々語源をも説いてゐる。又第五巻の終りには、文字音韻に關する雜説が散見してゐる。

【附記】契沖は既に、貞享の末か、遲くとも元祿元年に成つたらうといはれる「萬葉集代匠記」（別項）初稿本の總釋のところに假名遣に關する考を述べてゐるが、併しそれは未だ甚だ粗なものであつた。精撰本（元祿三年成）になると、「集中假名ノ事」といふ題目の中にずつと詳細に説いてゐる。而して「和字正濫鈔」が出版された翌年、橘成員の「倭字古今通例全書」（別項）が出たが、契沖はこれを以て「和字正濫鈔」を誹謗するものであると認め、元祿十年八月「倭字正濫通妨抄」五巻を著はして、これを論駁した。この書は「通例全書」の序文から始めて文字や引用文の誤謬に至るまで、通例全書の順に從つて逐一指摘し、その志淺杜撰にして前後矛盾せる所があるのを詰り、多くの例證を擧げて自説の據ある事を論じた。この「通妨抄」は意の赴くまゝに文を行つたものと見えて、その論難の口調は相當過激であるが、契沖もこれを公けにする積りは無かつたらしく、他に傳本なく、京都北野神社に藏する契沖の自筆稿本が唯一の傳本である。而して最近契沖全集（第七巻）に收めて初めて印行された。「通妨抄」を著はした翌十一年に、契沖は「和字正濫要略」を著はした。この書は「通妨抄」を改


和字正濫鈔序自筆稿本（竹柏園藏）

細し、普通に假名遣の誤り易い語のみを選び、古書に於ける實例を擧げて從來の説の誤りである事を詳しく説明したもので、又「正濫鈔」中訂正を要する諸條の正誤をも附記した。最初に序があつて假名遣一般について概説し、次に「正濫鈔」の正誤を掲げ、本文に入つては、「正濫鈔」と同じく「い」「中下のい」「ゐ」以下の諸項にわかつて語を擧げてゐる。この書は稿本はまだ見出されないが、寫本は所々に存する。それ等のうち、明石市安井正氏の藏本は、契沖の自筆本を臨摹したものかと思はれるが前半を缺いてゐる。圓珠庵の藏本は誤字や不審の點もあるが、大體に於て善本といふべきであらう。上加茂神社藏本は、契沖の弟子今井似閑の舊藏本であるが、これは似閑が人に寫させ、自ら筆を執つて校訂を加へ、句讀を施し、漢字に假名を附し、間々自己の私按をも添へたものであつて、契沖の奥書の外に、寶永四年校了の奥書及びこの書撰述の由來を述べた寶永六年正月の似閑自筆の跋がある。外にこれ等と少し系統を異にすると思はれるものに、竹柏園所藏の古香齋舊藏本・東京帝國大學國語研究室所藏の一本などがある。この「要略」は、語學叢書によつて初めて印行され、次いで契沖全集第七巻に收められた。兩者ともに上加茂神社所藏の似閑手校本を底本としてゐるが、後者は更に他本によつて補訂又は校異を註してゐる。

【價値・影響】所謂定家假名遣の所説と、古代の文獻の假名遣との間に差異の存することを認めたものとしては、すでに南北朝時代の僧成俊があり、假名遣の根據を古書の實例に求めた點では、定家の「下官集」などと揆を同じうする。從つて「正濫鈔」の根本的思想に於ては全く新しいものとはいへないが、成俊の説は「萬葉集」に止まつて他の古代の文獻に及ばず、定家の根據とした古書は、すでに假名遣の上に變化を來した後世のものである。然るに契沖は、科學的な態度の下に、一定の條理のある假名遣の行はれてゐた時代の範圍を明かにし、規範的假名遣の標準をこゝに求めたのであつて、この點は大きな功績といはなければならない。併し「正濫鈔」は古書に基くといひながら、語例の下には單に書名を記したのみで、一々その實例を擧げて引證する事をしなかつたので、これが「倭字古今通例全書」の著者をして契沖の假名遣説の根本を理解せし得なかつた原因となつたらしい。「通妨抄」や「要略」になると、出典を一々引用して説いてゐるのである。殊に「通妨抄」では、諸語の假名遣を考定した根據と方法を明かにして居り、音韻・文字・言語等に關する契沖の知識と見解とを窺ふ事が出來る。しかし「通妨抄」は全く公にされなかつたらしく、「要略」も寫本で傳へられたので、後世に影響を與へたのは主として「正濫鈔」であつた。而して當時は、「倭字古今通例全書」の如く、契沖の説を根本的に否定したものが出たばかりでなく、所謂定家假名遣を根幹とし、これを當時の主知的な時代風潮の影響の下に、多少理論的に説かうとしたやうなものが多く行はれてゐて、契沖の説は未だ顧みられなかつた。併し荷田春滿や賀茂眞淵等の國學者にその價値を認められ、國學の興隆弘布と共に、多少の修補を加へられて、廣く行はれるやうになつた（その間、田安宗武や上田秋成の反對説もあつたが、大勢には關係しなかつた）。而して明治維新以後、この歴史的假名遣が一般に實行されたのである。契沖は、實にこの歴史的假名遣の開祖であつて、國學者の假名遣研究は、一に契沖の説に導かれたものであつて、「正濫鈔」等は、假名遣史上に一時期を劃する名著と云ふべきである。（假名遣參照）

【參考】契沖全集第七巻凡例○契沖傳久松潜一（契沖全集第九巻）○契沖の文獻學の發展と假名遣説の成長及びその交渉について時枝誠記（日本文學論纂）○假名遣の歴史山田孝雄○語學叢書第一編赤堀又次郎　（岩淵）

和字大觀抄（わじたいくわんせう）　語學書　二巻二

冊【著者】文雄【刊行】寶暦四年八月刊行。明和四年十一月、「再刻和字大觀抄」と標して刊行。寛政七年春補刻。菅原長胤の序（寶暦三年四月）、龍公美の序（寶暦四年秋）及び原助の跋がある。【内容】主として假名遣に關して説いたもので、假名遣の法を知らうと思ふなら、片假字五十字と、いろは四十七字の理をよくよくわきまへしるべきであるとし、片假名は吉備眞備の作である事、片假名の本字、直音拗音、假字反切等を説き、次に五十音に就いて、ア行カ行以下各行の相通、あかさたな以下各段の相通を擧げ、次に「いろはの題目」「いろはの作者」（空海）、「いろはの文言」を記してゐる（以上上巻）。次に、「假名使の大事は、わゐうゑをの音にあり。其式、前のは、後のわ。端のい。中のゐ。奥のひ。前のう。後のふ。はしのへ。中のえ。奥のゑ。はしのほ。なかのを。おくのおと云。是を五類の假字と云」と説いて、以下それ等の假名の一々について實例を擧げ、次に音の輕重開合・反音・四聲・轉音・清濁・圏點・をこと點・和製の漢字・略字等について記してゐる。附錄に「かな合字」と題して假名は自由に諸種の音を寫すことが出來るけれど、四聲及び二合三合等の法がないから、假名のみで書いた文は、その意味を誤ることがあると云つて、片假名のみで文を書く一種の綴字法を工夫し（例へば、四盤有、諸有、弘用、護等を假名のみで書き分ける法）、この法を用ひて「古今集」の序文を書いてその實例を示してゐる（以上下巻）。【價値】上巻に於て五十音の橫竪の相通を説いてゐるが、轉音・音便・活用等をすべて相通と稱してゐる。而して相通を其礎として説いた假名遣法と、下巻の五類の假名遣法との間に統一を缺いてゐる。五類の假名遣法は貝原益軒の「和字解」（別項）の説を殆どそのまゝに用ひたものである。從つて本書の説は、その大綱に於ては多くの價値を認め難いものである。が、細部に於ては見るべき點も少くない。著者は音韻の學には深い造詣があるので（磨光韻鏡等著）、その方面の知識に基づく拗音の假名（例へば蘯氏、觀元、月且等）、假名反切・反音（韻約）等の説明は注意すべきものである。又附錄の「かな合字」は、明治初年から國語學界の中心問題になつた國字改良論・分別書方（各別項）の先驅とも見ることの出來るもので、注目に値する。（龜田）

和習（わしふ）　漢文作法

【名義】我が邦人が漢文・漢詩を作る時に生ずる誤謬。【解説】漢文作法上の用語。山本北山が「作詩志彀」（別項）の和習を指摘した例を擧げて、その一斑を示さう。『徂徠集題引に「余五十也、五城左寄翁寄贈詩、倚以二三物一、仙臺地寶、故實レ有二此風流人一矣」この題の意は、徠翁五十の賀を寄翁が詩と三物とを贈つて賀したることと見ゆ。もとこれ元美（明の王世貞の字）が「予閱二拙詩一偏二諸物一、作以二新詩一」といふ題より襲りて却つて謬る。華人の題例を推すに幾物と物の字の上に數目の字を下すときは、必ず其物の名目を擧ぐることなり。一二を擧げてこれを證せん。杜子美集の題引に、「領二酒饌三物見一レ贈」、又徐文長集の題引に、「許口北道以二綾帛錦三物一」とあるにて見るべし。若し物數多ければ某某等の物と書くことなり。列朝詩集于愼行が詩題に「端午賜二黃金・艾葉・銀背・彩符等物一、徒以紀レ常」とあり。元美が題は、諸物と謂つて幾物と數目の字なきゆゑ、上に其物の名目なくとも可なり。徠翁、率爾に元美が題を模擬すれども、所謂其一を知りて其二を知らざるなり。又「侑む」とは酒宴に幣を出して酒を勸むることなり。元美が意は詩を以て物を侑むるなり。徂徠の意は物を以て詩を侑むるなり。詩は物をすゝむべし。物は奈ぞ詩をすゝむべき。亦謬ならずや。五十也の也の字誤用なり。矣の字も亦誤用なり。焉の字に換ふべし云々』と。又和習の一種に倒錯といふのがある。これは上に置くべき字を下に置き、下に置くべき字を上に置く誤で、これも我が邦人の漢文には往々ある例である。例へば「孟子」離婁篇に「齊人有二一妻一妾一而處レ室者一」とあるが、これなどを我が邦人に書かせると、或は「齊人一妻一妾而有レ處レ室者一」と書いたり、或は「有二齊人一妻一妾而處レ室者一」と書いたりする。この類の誤を倒錯といふ。なほ他に文字の誤用もある。例へば「南郭集、早春陪二侍余時遊一江東一不レ在、晴上見レ留二一詩一和以寄謝」の詩に「賴使君來達二嘉觀一、諸侯四壁草堂寒、留別但是陽春調、轉但合レ杯相和難」、題引の譯は含いて論ぜず。含杯の含は銜に作るべし。含銜同じく「ふくむ」と訓ずれども、銜は「くはへる」と譯すべし。含は「くはへる」と譯すべからず。故に用處各異なり。華人銜杯と用ふれども、未だ含杯と用ひたる例なし。杯は銜すべし、含すべからざればなり。さればこそ含レ情、含レ笑といふことあり。銜レ情、銜レ笑といふ例なし』の如きこれである。

【參考】作文率山本北山○作詩志彀上○作文志彀上○同增評篇松村九山○藝園鉏莠松村九山○辨藝園鉏莠松井君鳳○討作詩志彀佐久間熊水○詩訣漸講服部南郭　（佐久）

萱草（わすれぐさ）　連歌集　六巻一冊

【撰者】文明十五年の奥書ある寫本に、「此一帖者、連歌好士宗祇以二自句一編二集之一」とあり、宗祇の「老葉」（別項）の自註本の奥書に、「愚句の殘草に、萱草・老葉とて書留侍る物二冊有き」とあれば、宗祇の自作自撰である。【名稱】梅庵古筆傳に「忘草」とあり、「忘れ草」と外題した寫本があるから、「わすれぐさ」と訓むべきである。【成立】右寫本の奥書によつて、文明十五年、或はそれまでに成つたことが知られる。【諸本】續群書類從連歌部所收のものは、戀・雜の二巻のみの闕本である。高野辰之氏藏の文化十一年迦葉校合の奥書ある寫本は完本である。【內容】部立は春・夏・秋・冬・戀・雜の六巻から成り、發句と附句（前句附句二句立ちのもので、これに專連歌の如く連歌と題目してある）との撰集で、發句は春から冬までの四巻に、附句の前に置かれてゐる。本集に於て注意すべき點は、第一に發句を四季に配置してゐることで、宗鑑の「新撰犬筑波」（別項）は本集と同じ部立から成り、發句を四季に配置してゐるから（ただ發句を附句の後に置いた點のみが異なる）、この點からも[illegible]をなすもので[illegible]に、誹諧體の連歌[illegible]二種は俳諧連[illegible]諧史研究の上[illegible]あり、且つ俳[illegible]るに重大な關[illegible]

わすれのこり

四睡庵吉葛【[illegible]【解説】安永[illegible]で流行した風[illegible]の他街談巷説[illegible]たもので、上巻[illegible]

流行言葉以下五十一則を收めてゐる。當時の江戸社會相の一斑を見るに足る所の興味本位の書である。文政七年の自序がある。（和田）

早稲田詩社　わせだしし　詩派　【解説】相馬御風・人見東明・加藤介春・三木露風・野口雨情（各別項）の五名が發起となり、明治四十一年三月に成立した。後に福田夕咲が加はつた。いづれも早稲田大學文科に在籍した關係ある者のみであるが、御風・介春・雨情はそのうち英文科出身の人である。この詩社の生れた年は詩壇が新しき活動に目醒めた年で、所謂口語詩（別項）の提唱もこの詩社の御風・露風によつてその試作二篇が「早稲田文學」誌上に掲げられた。中で御風の詩は、彼の「白百合」（別項）時代の詠嘆的な抒情主義に厭世的な自然主義の思潮を加味したものであつたが、東明・介春の詩は、當時の自然主義が既成道徳に反抗した思潮の反映としてのデカダン的傾向濃厚なるものがあつた。又三木露風は初め上田敏主宰の「藝苑」によつてその詩才を認められ、當時青年詩人中の白眉として北原白秋と並稱されてゐたので、詩社中でも詩壇の注目を惹いてゐたものの一人である。又野口雨情は詩人としては御風と共に最も先驅の一人で、彼は當時から民謡の詩人として知られてゐたが、その民謡の或るものは時代の口語を使用してゐたことに於て、詩壇の詩語開放運動に一種の先鞭をつけてゐたものとも見られる。かく早稲田詩社は異なる素質の五詩人によつて起され、時代の思潮たる自然主義的・デカダン的・新抒情主義的一面は反映したものの、一個の共通な主義主張を以て結社したものではなかつた。ただ期せずして交友的に彼等が一致し得たことと、また自然主義やデカダニズムが當時の青年の心理を支配したこととで、同じ傾向の思潮を詩歌の上に於て表現しようとした要求が、期せずして彼等にあつたのも事實である。この詩社の人々は一定の發表機關をもたなかつたが、當時の「早稲田文學」と「文庫」（舊文壇の人々から離れて、松原至文によつて當時編輯されてゐた）に據つてゐた。併しこの詩社は一年餘繼續したきりで、翌年自然的に解體し、御風・露風・雨情は詩社より離れてしまつたと共に、東明・介春・夕咲は他の青年詩人と提携して別に「自由詩社」（別項）なるものを起した。（川路）

早稲田派　わせだは　文學團體　【名義】早稲田の東京專門學校文學科の機關として創刊された雜誌「早稲田文學」を中心とする文學者の一派に與へられた名稱で、同時にその派の文學者によつて代表される文學の傾向を示すためにも用ひられる場合もある。【特色】この派の特色としては、（一）創作批評ともに何處までも地味で堅實な點、（二）現實的で浪漫的なものの殆どないこと、（三）社會的情勢に常に關心を有し、創作に評論にこれを取り入れてゐることなどを擧げることが出來る。從つてこの派からは花々しい創作や評論は生れない。なほ三田派や赤門派（各別項）に比して結束の固くないのもこの派の特色と見れば見られる。早稲田派とは稱せられるものの、島村抱月時代以後は、確乎たる結束があつたのではなかつた。【沿革】〔第一期〕坪内逍遙は明治二十四年十月、雜誌「早稲田文學」（月二回）を創刊し、日本の文學界に貢獻すると共に新人のために指導敎化の任にあたつた。即ち早稲田派は坪内逍遙を生みの親とする。早稲田派の存在を特にはつきりさせたのは、同二十五年、逍遙が沒理想論に就いて、「早稲田文學」の數號に亙り、堂々の陣を張つて謂はゆる千駄木派（別項）の主宰者鷗外漁史と論戰した時である。而もこの坪内逍遙の主張こそは、後の早稲田派の特色傾向をも自然に示したものであつた。鷗外が早くから理想主義を標榜してゐたのに對して、逍遙は自然主義・寫實主義の傾向を發揮した。やがて、金子筑水・島村抱月・後藤宙外・水谷不倒・伊原青々園（各別項）・五十嵐巴子・綱野天來・三木天遊等の思想家や創作家が輩出して、謂はゆる早稲田派の輪廓が築き上げられた。「早稲田文學」の創刊當時に於ては、早稲田派を代表する者は、坪内逍遙一人であつたが、三十年前後に於けるこの派の活躍は、西鶴から出發した硯友社（別項）一派と對立の形を取つた。即ち「早稲田文學」を機關として近松研究會が組織され上記の同人等、一二の例外を除いては、近松の影響を受け、宿命觀的小說を發表した。又青々園・抱月・宙外・不倒・小杉天外等が相寄つて「新著月刊」（別項）を出した。かくして小說に筆をとる者多く、青々園の「とりかへ心中」、宙外の「ありのすさび」、抱月の「競すべり」、巴子の「明暗」、不倒の「枯野觀葛」、天遊の「すゞ舟」、天來の「かさね襟」等、いづれも三十年前後の、謂はゆる深刻小說・悲慘小說の尖端に立つものであつた。さうして第一期の「早稲田文學」は、二十八年十二月第百二號を以て終つた。〔第二期〕次いで「早稲田文學」は、明治二十九年一月再刊され、改めて第一號を出し、坪内逍遙・島村抱月・後藤宙外・綱島梁川・金子筑水等が編輯の局に當つたが、これも同三十一年十月、遂に廢刊されるに至つた（三十年九月第四十二號で一時中絕、翌十月改めて第七年第一號とし、十二號で終つた）。この間は早稲田派興隆の準備時代と見ることが出來る。かくて同三十九年一月、五年間の留學から歸朝した島村抱月によつて、三度「早稲田文學」が再刊されたが、折柄擡頭した自然派勃興の機運に乘じて最も著しき活躍をなし、文壇の覇權はこの派に歸した。創作界には正宗白鳥を初め徳田秋江（近松秋江）・小川未明・吉江孤雁・窪田空穗・中村星湖・秋田雨雀・楠山正雄・中村吉藏（各別項）等新進氣鋭の士が簇出し、評論界には、長谷川天溪・片上天弦（伸）・相馬御風（各別項）・白松南山（杉森孝次郎）等が現はれて活躍した。又劇壇方面に於ては、三十九年に坪内逍遙を會長とする文藝協會（別項）が設立され、日本の新劇壇に一新生命を切り拓いた。こゝに於てか、早稲田派の存在は、日本の文壇に牢乎として拔くべからざるものとなつた。「早稲田文學」の編輯は、後に相馬御風・中村星湖が抱月に代つてこれに當つたが、この期に於ける相馬御風・三木露風等の早稲田詩社（別項）の運動も注目すべきものであつた。〔第三期〕大正期に入り自然主義が次第に衰退すると共に「早稲田文學」はなほ繼刊されて居りながら、一時のやうな勢力はなく、次第に早稲田派としての存在意義を失つて行つた。その後早稲田派から立つた作家も自然主義の傾向を追ふもの多く、加能作次郎・廣津和郎・谷崎精二・葛西善藏・宇野浩二・細田源吉・細田民樹・吉田絃二郎（以上各別項）・岡田三郎・下村千秋・戸川貞雄等、それ〴〵の特色を帶びてはゐるが、自然主義的、若しくは現實主義的傾向を多少とも現はしてゐないものはない。抱月去り、御風退ける後の「早稲田文學」の編輯は、中村星湖・本間久雄（各別項）これに當り、大正七年九月から、更に原田實・西宮藤朝・森口多里・細田源吉・宮島新三郎の同人組織となし、本間久雄がその主任に推され、主として新思潮派（別項）、即ち菊池寛・久米正雄・芥川龍之介等の赤門系統の文學者と相對立する形をとつた。併し同じ早稲田派に屬する者でも傾向が樣々に分れて來た爲めに、單に早稲田派といふやうな漠然たる範疇を以て律することは不可能となつた。なほ平林初之輔（別項）・青野季吉等の批評家が同じ早稲田派から出て、プロレタリア文學（別項）の促進に多大の貢獻を與へた點は特記すべきことである。而して「早稲田文學」は昭和二年十二月、本間久雄の海外留學によつて休刊されたが、昭和九年六月、吉江喬松・谷崎精二・岡澤秀虎等によつて再刊された。（宮島）

早稲田文學
東京專門學校
早稲田文學（創刊號）

早稲田文學　わせだぶんがく　「早稲田派」を見よ。

和莊兵衛　わそうべゑ　讀本　八卷　【作者】遊谷子　【名稱】詳しくは「異國奇談和莊兵衛」「異國再見和莊兵衛後編」。二篇ともに和莊兵衛といふ男が異國巡りをした譚といふ意である。【刊行】安永三年（前編四卷）、同八年（後編四卷）。【諸本】續帝國文庫・德川文藝類聚所收。【梗概】（前編）長崎の商人四海屋和莊兵衛といふ者、隱居して店を息子に讓つてからは、毎日漁を樂しんでゐたが、或る年の仲秋良夜、沖で大風に遭ひ、漂流幾日かの後不死國といふ處へ着いた。こゝは人が生れて死ぬことがないので、長壽の藥の代りに毒物を求めて食すといふ變梃な土地である。和莊兵衛は此處に逗留して二百年を經たが、それより三千世界を巡らんと志して鶴に乘つて出發し、先づ二三萬里を隔てた自在國に行つた。そこは美酒珍味が木に實り河に流れて多くの美人が住み、人に貧富貴賤はないといふ萬事結構づくめで、人は拚不自由のみを願つてゐる。次には一二萬里先の嬌飾國に來たが、こゝの人は表は風流三昧に暮しながら、内面の苦しさ言ふ許りなく、何れも出放題の見榮張りに日を送つてゐる有樣に、和莊兵衛は呆れて次の好古國に急いだ。見ると、そこは孔・孟・老・莊各派の者が寄合つて古を尚ぶを第一とする國である。更に自暴國に到つたが、こゝは又各々我儘勝手に振舞つて佛法も儒道もなく、老人は山に捨て妻が懷妊すれば夫は惡阻になるといふ大變な國なので、驚いた和莊兵衛は匆々に出發して大人國へと訪れた。此處では麥が竹藪のやうで人間の丈は五丈四五尺、總てが大きく豐かである。國人は和莊兵衛を珍しがり、小島のやうに飼つて可愛がつてくれたが、彼はこの國に聖賢の訓がないのを惜しみ、盛んにこれを說いたが、彼等は小人に大人の心は分らぬと笑つてゐるので恥かしくなり、一先づ日本に歸つた。（後編）併し故鄕の親戚知己は悉死に絕えてゐたので、和莊兵衛は再び異國巡りを思ひ立ち、或る日浦に釣して大龜の背に落ちたのを幸ひ、これに乘つて十萬里の海路恙なく清淨國に着いたが、こゝは佛國で腸を洗ひ清めねば入る事を得ず、且つ魚肉禁制で香の匂ひが滿ちてゐるので、俗人の和莊兵衛は居堪まらず、今度は十四五萬里先の長足國へと赴く。この國は手長島と長足國の二つに分れ、人々は各々國名の示すやうな特徵を有つてゐて、事ある毎に長足國では手長島の人手を借りなければ用が足りぬといふ不自由さ、そこで和莊兵衛は兩國の男女を配す事によつて自在な子を生ませ、更に聖賢の道を說いて良風を興し、得意になつて次の吝奸國に行つた。こゝは陸路五萬里の地點で、國人は口先では和莊兵衛を大に款待するが、その實皆はづれた吝嗇なのに呆れた。これに反して次の大膽國では、何れも下にも置かぬ待遇振りに見せる膽の太さ、世は樣々であると今更に感じて、和莊兵衛は更に金銀寶玉國に訪れた。折柄そこの大王は病氣で、これを慰めるために和莊兵衛は色街に伴はれ、そこで身につけた藝の限りを盡して大王の御感に入り、數々の寶を土產に賜はつたので、彼は又龜に乘つて出發し、盤瓠といふ男が犬で、女が人間の國の傍を過ぎ、龜からその近所の國々の說明を聞くと、先づ晏陀國とて食人種の住む國、日夜の時を全島鳴動するといふ雷鳴國、山谷に人の首の形に花咲く木がある大食國、石を燒く猛火が山中にある猛火國、猿のやうに尾のある人の住む猿似國、また長毛國とて全身に毛のある人の住む國、總身に斑點のある長い耳がある人々の長耳國、土を常食としてゐる土喰國、更にまた三珍國とて一粒の長さ三寸に及ぶ麥と、丈一丈に達する瓜と三四尺の尾を持つた狐の腹を割いて燈油を採り、傷口を縫つて放せばその狐が甦へるといふ三つの不思議をもつた國など、色々な國があるといふがこれ等には立ち寄らず、ただ女のみが住むといふ女人國へ、龜の諫めを卻けて上陸すると、唯一の男といふので大に持てたが、女王の館に禁足されるに及んで、逃れんとして侍女共に捕へられたと思ふと、雨に濡れて眼が覺め、今までの事は和莊兵衛が長崎の浦で釣する中の夢であつた。【解說】風來山人の「風流志道軒傳」（別項）の趣向に倣つたもので、西洋の「ガリヴー旅行記」にも通ずる異國遍歷譚である。そしてこれにはかの浦島說話も織り込まれ、後に馬琴などが盛んに用ひた支那の典籍の集錄も行はれてゐる。かやうな用意の上に夢物語として書き下されてゐるが、描寫は甚だ平板であつて、創作としての價値は尠いと言はねばならぬ。【影響】これを換骨奪胎したものに、列子の無何有鄕の遍歷を叙した「異國風俗笑註列子」（五卷、笑止亭作。天明二年刊）、芭蕉翁の架空國の遍歷を述べた「東唐細見噺」（四卷、作者不詳。天明三年刊）、和莊兵衛の大人國安智先生の說を論難し、神・儒・佛・仙道の大旨を說く「成仙玉一口玄談」（五卷、大江文坡作。天明五年刊）等がある。また馬琴はこれを粉本として「夢想兵衛胡蝶物語」（別項）を書き、國々に事件を構へて主人公を活躍させ、且つ彼に一貫した識見を與へ、諸國

の事情に卓抜な批判を加へ、優れた物語としてゐる。

【參考】和莊兵衛の出處　ダブルユー（新學界）○徳川文藝類聚解說　（寄野）

和俗童子訓　わぞくどうじくん　「益軒十訓」を見よ。

和田巖足集　わだいつたりしふ　歌文集　一巻一冊【著者】橘巖足の遺稿を、宇野東風が編したもの。【別名】橘の伊豆足が家の集【諸本】古板本はない。肥後文獻叢書第三巻・近代諸家集（國歌大系）所收。【内容】大體第一「歌集」、第二「長端短端日詠々草」、第三「醉のすさびの獨言」、第四「寄贈送懐歌三首並短歌四首」の四部に分れてゐる。第一の歌集には、短歌の外に長歌も含まれ、櫻花百首なども交つてゐる。第四の寄贈送懐には、楠公五百年祭に詠出したと云ふ長歌中の非常に長い歌がある。第三は主として雜文である（肥後文獻叢書には、本集と共に、國富祇陀岸編「和田巖足集補遺」部が加はつてゐる。これは、四季・戀・雜・今様・長歌に部立された本集に漏れた歌の追加である）。

【歌風】作者は熊本藩士で、宣長の門人長瀬眞幸に學んだ。性酒を好み、梟梅によせて巖足と號したといふ。從つて中島廣足と双璧の如く推賞されながら、歌風は全く鈴屋風を脫出してゐる。集中「萬葉集」と題し、「ならの世のふりにし文を我はもよ友とのみこそ朝夕は見れ」と云ふ一首があるが、彼は純粋に古代調の歌人であつた。字餘りや字不足の句の多いところ、意欲を赤裸に表出してゐるところ、かの久老（別項）に彷彿たるものがある。

おへど〳〵馬にかきつ・就しもの學のやつこしかきつかひけり

酒のまな友どちもがもしく〳〵に雪の降る夜は寂しきものを

の如きそれである。併し自然の觀照にも徹して、次の如き鋭い詠み振のものが、この集に光彩を添へてゐる。

大海の深き心にあらそひて雲のそぎへに山のそゝれる

みるからにまうら悲しも花ぐはし櫻は花の神にかあるらむ

一つ散り二つ散そひ風またで落葉の積もる夕暮の庭

又彼の國士的精神は、長歌の方面によく發揮されてゐる。　（齋藤（清））

【參考】和田巖足とその歌　新宮藏版

綿温石奇效報條　わたをんじやくきかうのひきふだ　黄表紙　三冊　十五丁十六圖【作者】式亭三馬【畫工】歌川豐廣【名稱】賣品綿温石の宣傳用著作であることを示す。角書には「自先達、御吹聽」とある。【刊行】享和二年泉市板【題材】八つの心中物、お千代半兵衛、お夏清十郎その他。

【梗概】〔上冊〕（1）綿温石の廣告文、一丁半にわたつてゐる。（2）綿温石取次所萬屋の店前、冷性の客たち綿温石を買ひに來る。風呂桶に入つたなり擔はせて來る者、馬上炬燵にあたりながら來る者などがある。（3）つめた屋のさむ三郎と女房おひえは大の寒がりで、亭主は金網で拵へた產籠のやうなものの中に入り、下から炭火で温めてゐる。（4）さむ三郎、女房は蒲團を何枚となく重ねて寢て居り、色事は暖かいものと思つてゐたが、結句抱火鉢が一番可愛い。女房もまた炬燵と首引をしてゐる。（5）綿温石の賣元藤田金六、さむ三郎の家に綿温石を勧める。〔中冊〕（6）温石の效果著しく、夫婦共大汗になり團扇で煽ぎ立ててゐる。（7）冷性のために子の出來なかつたさむ三郎の女房、一つの胴に八人の首手足のついた女の子を產む。（8）八人の子供、銘々或る者は本を讀み、三味線を引き、手習をするなど、色々の藝事を習つてゐる。（9）娘たち藝者となる。八人藝とて持て囃される。（10）八人のうち四人に色男が出來ていちやつく。あとの四人と氣が合はず、互に困る。（11）色男だち自分の女だけを拉れて行かうとしても、一つ身體ゆゑ儘にならず、引張風にする。〔下冊〕（12）あとの四人にも色男が出來る。（13）八人の女互に妬みやら羨みやらにて大喧嘩となる。親だちとり抑へる。（14）八人仲直りはしたものの、氣は解けず、各々勝手な我儘をいひ出す。親だちも困り切る。（15）八人の首、生きてゐてはとても儘にならぬ事と思つて、戀人同士手をとり合つて道行をする。お千代半兵衛、おなつ清十郎、おさん茂兵衛、おふさ德兵衛、おはん長右衛門、おむめ粂之介、お七吉三郎、おそめ久松の同行十六人。新淨瑠璃「猥取粉目緣」を附記してゐる。（16）仙人出現して娘だちの皮肉に分け入つた八天狗を逐ひ、八人を分身させる。八人の娘二親ともども仙人を禮拜する。（17）三馬が机に凭りかかつてゐる傍らに、泉市の主人稿本を手に持つて坐し、金六は仙方長壽綿温石と書いた看板めくものを展げ持つて立つ。

【構想】綿温石は江戸大傳馬町の藤田金六の製、冷より發る諸病を癒す效能があるといふ。三馬はその效能によつて趣向を立て、冷性の女が八ツ子を產むとした。而もそれ等が、胴一つに八人の首と手足のつくといふ畸形兒とし、また美しい女だちとしたことに滑稽の筋を起し、八人藝の起原、また八組の戀、八組の道行、更に仙人の出現から八天狗の退散、八人の分身のめでたきに終らせる。つまりは綿温石の銘、仙方長壽に附會したのである。三馬の趣向からいへば、どうしても胴一つに首八つでないと面白くないが、それを繪組みに出す段になると、首八つは餘りに多過ぎる。從つて、三馬はただ八人の女を一所に押し合ひへし合ふ形に畫かせた。三馬は板元の言葉として、卷末に、作者の下繪が惡いために畫工の工夫を難儀させて、作の趣向通りにならなかつたと斷わらせてゐる。けだし遁辭である。【史的地位】これは宣傳用として書かれ、しかも金六方の配本だけでなく、一の獨立した賣品黄表紙としても扱はれたのである。當時の讀者はもとより、さういふ態度を詰めるどころか、廣告の戲作化の趣向と技巧を喜んでゐた。實に黄表紙の特質はそこに存する。これより先き、寛政四年に京傳が本町二丁目香具所玉屋の宣傳用に「女將門七人化粧」を作つた。これは店開き當日の來客に配つたので、卷中にも賣買しないと斷わつてゐる。尤も事實は、その日が過ぎた後は、板元の鶴屋が賣品として扱つたことであらう。他にもその類例があるが、三馬のこの作になると、はじめから賣品を心掛けてゐる。彼みづからが販賣の化粧品江戸水の宣傳用合卷「江戸水幸噺」を賣品としてゐる態度を參照すべきである。三馬のこの作に於ける趣向は、「女將門七人化粧」といくらかの脈を引かないではないが、最も直接な粉本は京傳作、天明八年板の「一體分身扮接銀煙管」である。その作は「心學早染草」（別項）の系統に屬し、その善惡を男女に轉化し、更に胴一つに首二つの畸形兒といふ趣向を立てたものである。すなはち男は半兵衛、女はお夏であつた

が、年長じて後、半兵衛にはお千代、お夏には淸十郎といふ戀人が出來、二つの首は一夜がはりに戀人に逢ふ約束であつたが、半兵衛の横暴から首同士の喧嘩となつて、各々不自由の身となる。二つの首は死んで閻魔王に頼んで、二つの體に直して貰はうと決心し、戀人と謀つて道行する。いざ心中といふところへ和國流の首つぎの名人が來て、半兵衛の首を死人の胴に繼いでやる。二組の夫婦が出來る。この二組を八組とし、その首つぎを仙人に仕立て直したのがこの作であつた。（山口）

和田合戰女舞鶴　わだかつせんをんなまひづる　浄瑠璃　五段　時代物【作者】並木宗輔（外題年鑑）【名稱】和田合戰とは、和田新左衛門尉常盛と北條の嫡男江馬の太郎義時との爭ひであり、女舞鶴とは、板額女の紋が舞鶴であるのを利かせた。【初演】元文元年三月四日初日、豐竹座。【諸本】七行九十五丁本。（紀海音並木宗輔）淨瑠璃集（帝國文庫昭和四年版）所收。【題材】先行作「悅賀樂平太」（別項）に負ふ所が多く、構想の上に幾多原據を見る。

【梗概】〔初段〕（鎌倉御所）鎌倉では實朝が家督を繼ぎ、政子禪尼が政を輔佐してゐる。この日勅使中の院爲氏卿が下向して實朝を征夷大將軍に任ずる旨を傳へる。時に爲氏卿は座右にゐた實朝の妹齋姫に戯れる。姫も卿の和歌の擧を慕はしく思つてゐたので大に喜ぶ。これを見て和田左衛門尉常盛と北條の嫡男江馬の太郎義時との兩人は、我こそ姫の婿であると言ひ出して互に口論を始める。それは豫て藤澤入道親子が、和田・北條を不和にしようとして、双方へ姫を配せると云ふ賴家の遺言があると、吹き込んで置いたからである。二人が双物三昧にも及ばうとした時、阿佐利の與市の妻の大力女の板額が出てその爭ひを鎭める。（別殿）勅使爲氏卿を慰めるために能が催される。齋姫はこの機會に荏柄平太の妻の綱手の仲立で、爲氏卿との逢瀬を作つて貰つたが、卿は和田・北條の爭ひを氣遣つてつれなく去る。悲しみの餘り姫が死なうとした時、藤澤入道が來て姫に奸計を授ける。それは今日の紅葉狩の能に姫が末社の役であるのを幸ひ、維茂役の和田の枕許へ寶劍を置けば、必ず和田・北條の兩人は狼藉の罪に落ち、姫はめでたく爲氏卿へ輿入が出來ると云ふのである。（紅葉狩）いよ〳〵四番の紅葉狩が始まる。姫は戀のために寶劍を和田の枕許に置いた。シテ役の北條も藤澤入道に謀られて鐵杖を用意した。かくて鬼女退治の場は寶劍の渡合となる。荏柄平太の父城の九郎資國老人が漸く兩人を論し、姫は藤澤入道に預けられる。〔二段〕（鶴ケ岡）今日は放生會である。賴家の妾腹の子善哉丸は、鶴ケ岡の別當阿闍梨の許に密かに預けられてゐたが、子供心に門を出て鳥を買はうとして惡鳥賣にねだりかけられ、大騷動となる。其處に居合せた手車賣は、その鳥賣を抑へると見せて巧に善哉丸を奪つて逸走した。（藤澤入道館）荏柄平太も、妻子ある身にも拘らず、姫を戀して日毎に入道の館へ通つて來る。勿論姫は應じないので、平太は遂に姫を殺して出奔した。（同門外）この騷動に阿佐利の與市も馳せ着けたが、與市の妻の板額は平太の縁者であるので內へ入れられない。與市はその場を去らず板額を離緣して見せる。板額今は憚る所なしと、良人のために樓門を押破り大勢を追散らす。平太の父城の九郎は子の罪に依つて死罪となる。〔三段〕（御所）實朝公の御前では、母禪尼が荏柄平太の妻の綱手と一子公曉丸とを匿まつて渡さないので諸大名の評定が行はれる。實朝も母君へは手向ひ難く當惑してゐる。そこで大江の廣元は、孝も立ち法も立つ一計として、十一以下の子供の軍勢を向はせる事とした（軍勢玉の小戲）。（禪尼館）公曉丸の討手として子供武者が松明を翳して押し寄せた。獨り門を守つてゐた板額は、手柄を立てさせるために我が子市若を一間へ引入れた。併し板額は禪尼の口から、公曉丸は實は先君の妾腹の子善哉丸である事を聞かされ、初めて良人與市が身代りに立つべく、市若を遣したのだと悟る。尼君は善哉丸を出家せしめるに忍びず、先に與市と平太に命じて鶴ケ岡の別當の手から奪ひ取らせ、平太の子にして置いたのであつた。善哉丸を奪つて出奔した鳥賣と手車賣とは實は平太・與市の兩人である。併し流石に、丈夫の板額も我が子を斬るに堪へなかつたので、一人芝居をやつて一間の內なる市若に、實は替人平太の子だと信じさせる。市若は驚き恥ぢて健氣にも切腹した。與市は公曉丸の首を受取りに來て、涙を隱しつつ我が子の首を抱いて歸る。〔四段〕「道行こがれ松蟲」綱手は六十六部に姿を變へ、善哉丸を連れて都の方へ落ちて行く。（三條口）都の入口三條口へ懸つた時、綱手は願人坊主となつて善哉丸を尋ね歩いてゐる鶴ケ岡の別當阿闍梨に逢ふ。此處に綱手は若君を阿闍梨の手に渡し、自分は良人平太を探すべく都に向ひ、阿闍梨は深手を裝つて追手を謀り、無事に鎌倉へと下る。（小倉山）爲氏卿は、山莊に籠つて百人一首を撰んでゐる。此處に仕へる戀の深い車戸次夫婦は、綱手の貰ひ親なので尋ねて來る。また故ありげな浪人が爲氏に和歌の敎へを乞ひに來て泊る。その夜齋姫の幽靈が爲氏に戀の恨みを述べる。荏柄平太が現はれて事は現實となる。平太が姫を殺したとは僞りであつたのである。これを聞き知つた車戸次夫婦は注進して金にしようとする。綱手は親の慾と良人の忠義との板挾みになり、已むなく隣に紛らしてこれを良人に告げ、自分は姫の代りに親の手に傷つく。先に泊つた浪人は實は實朝公で、綱手の苦しむのを見て、「世の中は」の歌の終句「綱手悲しも」を思ひ附き、百人一首の一として爲氏に寄る。綱手も名が右大臣の詠歌の中に入つたことを喜んで瞑目した。〔五段〕（戰場）與市は兩軍斬り結ぶ中へ姫を殺したと思はれてゐる平太を連れて出で、彼を殺させてその意趣を晴させようとするが、平太に罵られて流石に兩人も恥ぢた。其處へ藤澤入道親子は和田・北條を討取りに來る。これ幸ひと與市・平太を初め和田・北條、一度に入道の兵を薙ぎ立てる。板額も武裝りゝしく立ち現はれ、散々に敵を惱まして遂に入道親子を生捕つた。

【解說】本作は正に宗輔の傑作で、和田合戰を脚色したものの第一に位する。全曲中二段目の切「板額門破り」、三段目の切「市若切腹」、四段目の口「阿闍梨の場」、同じく切「小倉山の段」等が名高い。板額の門破りは、朝比奈の門破りの飜案で、後永く歌舞伎に取り入れられた。この時は藤井小八郎が人形を遣ひ、その大きさは普通の二倍大であつたと云ふ。「市若切腹の場」は、最も趣向を凝らした所と云へるであらう。後、歌舞伎の「伊賀越乘掛合羽」（別項）の九幕目に借用されてゐる。「阿闍梨の場」は滑稽を主とした場面で、豐竹河内太夫が語つ

て好評であつたと傳へる。今のチャリ場なる言葉の起りは、この「阿闍梨場」が訛つたのだと云ふ。なほ三段目の子供武者の討手なども捨て難い思ひ附きである。
【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）　（鶴見）

私小說 わたくしせうせつ 「本格小說」を見よ。

和田酒盛 わださかもり 幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。舞の本（上田萬年校訂）・舞の本（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部所收。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。【類材】曾我物。「曾我物語」（卷六）と同材。謠曲にも「和田酒盛」がある。舞曲中の名作の一。遊女虎の純情と意地、曾我兄弟の友愛、五郎・朝比奈二勇士の力競べが主になつてゐる。草摺曳は和田合戰の時、朝比奈が足利義氏の鎧の袖を引きちぎつた史實（吾妻鏡卷二十一建曆三年五月二日の條）の轉化。【梗概】和田義盛が、一門九十三騎と共に山下宿河原長者の許で酒宴を開き、遊女虎を呼ぶと、虎は祐成が來てゐるので肯かず、母の怒りまで買つたが、祐成に勸められて席に出た。虎の母が義盛の機嫌を取るため虎に思ひざしをさせると、虎はその盃を汲まず、招かれて同席してゐた祐成にさし、祐成も受けたので義盛憤激し、祐成を退席せしめんとして一騷動起らうとした時、家にあつた時致は變を聽つて武裝して馳馬で駈けつけ、その力を試さうとした朝比奈義秀と草摺曳をした末、酒席に出て兄の急を救ひ、和田一門を降伏させた。【影響】歌舞伎十八番の一「矢の根」（別項）の外、「根元草摺曳」（草摺引參照）「正札附根元草摺」（同上）を初め、「草摺曳」の所作事の一類等、歌舞伎狂言の諸作品を生んだ。「曾我物語」と併せての影響である事は無論である。
【參考】朝比奈義秀（志田義秀）（東京の充實九ノ三・四）　（島津）

渡物 わたりもの 「移調」「雅樂」を見よ。

渡邊霞亭 わたなべかてい 小說家【本名】勝、初名甲子太郎【別號】初め朝霞、碧瑠璃園・先春高・流霞・綠園・霞の家・黑法師・黑頭巾・哉也翁・王孫樹庵・少霞・春帆樓・木母庵【生歿】元治元年十一月尾張名古屋に生れ、大正十五年四月七日大阪市天王寺松ケ鼻にて歿す。享年六十三。【閱歷】尾州藩士族渡邊源吾の子。最初醫者たらんとしたが、文筆の才豐かで、十一二歲より人々を驚かし、十六歲より小說を書きはじめ、爾來熱心に努力した。明治二十年頃上京し、某新聞に入社。同二十三年頃、國會新聞に轉じた。この間「お互樣」「浮雲」「三人同胞」等を發表して文壇に認められた。且つ同社長村山龍平の知遇を得て、直ちに東京朝日新聞に入り、愈々才華を發揮するに至つた。後、大阪朝日新聞に移り、遂に大阪を永住の地と定むることになつた。雜報に小說に流麗な文章をつづり、一方雜誌「浪花がた」を西村天囚等と刊行した。須藤南翠の後を襲うて社會部長となり、大正初年退社して客員となり、關西劇界のために盡す外、新聞に、雜誌に、その健筆を揮ひ、また講演に日もなほ足らざる有樣であつたが、大正十五年、心臟病で歿した。

渡邊霞亭

【作品】實に千餘篇、幾多の雅號の下に、小說・脚本・隨筆・漫錄等、往くとして可ならざるはなかつた。時代小說は、綠園・碧瑠璃園等の名で發表し、現代小說は主として黑法師・霞亭の名で書いてゐた。【代表作】後藤隱岐〇楠正儀〇大石內藏助〇渡邊華山〇荒木又右衞門〇木村長門守〇尾張宗春卿〇白河樂翁〇錢屋五兵衞〇高山彥九郞〇吉田松陰〇二宮尊德〇豐臣秀吉〇楠正成〇高野長英〇乃木大將〇渦卷〇想夫戀〇栗山大膳〇勝間〇女の力〇弘法大師〇國難〇水戶黃門〇六號室〇黑水晶〇高杉晉作〇明智光秀の妻〇阿波十郞兵衞〇井伊大老（以上小說）〇基督太平記〇土屋主稅〇渡邊華山〇栗山大膳〇夕霧伊左衞門〇荒木又右衞門〇安田作兵衞〇錢屋五兵衞〇阿波十郞兵衞（以上脚本）。その他、高田實の成美團のために數篇の脚本を書いた。
【批評】筆を執れば名文麗章瞬時に成つて、談話中でもこれを能くした逸話があり、新聞三面の雜報の如きも、忽ち優艷な字句となつて人々を驚かせ、晚年に至るまで健筆を揮ひ、その精力と文才共に驚嘆すべきものがあつた。而もその裏面には、絕えず他人の小說を讀破して時代に遲れぬやう懸命に努力してゐた。その新聞紙上に發表せる家庭小說は、每篇世上の好評を博し、「渦卷」（大正二年）の如きは、高田實等によつて上演され、渦卷模樣の流行までも持ち來した。又歷史小說を得意とし、その獨特の口語調は、よく當時の歷史小說界を風靡したのであつた。資性溫厚、趣味廣く、演劇は素より書畫・彫刻・茶道・花道・骨董に至るまで一隻眼を有して、常にこれを吟味することを忘れなかつた。その蒐集に成る江戶文學の貴重書は、現在霞亭文庫として東大圖書館に珍藏されてゐる。
【參考】霞亭先生著作年表　（坪內（士））

渡邊默禪 わたなべもくぜん 小說家【閱歷】明治三年六月山形縣南村山郡金井村に生る。山形中學校を經て早稻田專門學校を卒業。明治二十三年鄕里山形市に奧羽日報創刊、二十七年上京、やまと新聞に入社、東京每日・都を經て每日電報に入り、同四十三年退社した。明治二十九年、初めて「文藝俱樂部」に、短篇「不平鬼」「椰子の花」を揭げ、次いで東京每日・都等に、幕末の志士・俠客・俠女を材料とした長篇小說を執筆した。「堀のお梅」「小松嵐」「江戶櫻」「雷六郞」「女侍」等の新聞小說が、最も評判があり、今日の大衆小說の先驅とも云へるが、文章は新味に乏しいが、題材の多方面なのと練れた達筆がそれを補つた。新聞・雜誌等に執筆した長短篇が約二百九十種、そのうち單行本として刊行したもの、六十八篇百六十七冊に上つてゐる。　（千葉）

渡邊義方 わたなべよしかた 「花笠文京」を見よ。

わたりぜりふ 演劇【解說】互に聯絡のある臺詞を甲から乙、乙から丙、丙から丁と渡つていふ場合、これをわたりぜりふといふ。歌舞伎劇の花道、又は本舞臺で、特に主要な人物が遣ふ臺詞で、互に聯絡のある臺詞で、卽ちこれは厄拂ひ（別項）程でないにしても、相當リズムがあつてテキパキ筋を運び、きりをつける。世話物などには殊に多く、澤山の人物を萬遍なく、行き立つて使ふ意味に於て、これは巧みな方法である。例へば、默阿彌の「辨天小僧」大詰の「稻瀨川勢揃ひ」の場で五人男が並ぶ時の臺詞等これである。　（三宅）

渡忠秋 わたりただあき 歌人【姓名】本姓は鳥居氏。通稱新太郞【號】楊園・桂園【生歿】文化八年二月十日近江に生れ、明治十四年六月五日東京に歿す。享年七十一【墓所】京都南禪寺中天授庵【閱歷】夙に皇國の古道を慕ひ、京都に上つて香川景樹の門人となり、後、右府三條公に師事した。明治七年宮內省に召されて屋歌道御用掛となり、晚年に至つた。その歌は溫雅平明で桂園調の域を出でない。「若の浦の入江の氷とけにけり朝日の影にたづぞなくなる」【著書】讀史有感〇先入抄〇研哉抄〇桂園集等。　（相見）

渡鳥集 わたりどりしふ 俳諧集 夜・晝二冊【撰者】蓑田卯七、向井去來後見。【名義】卷頭に揭げる去來の「入長崎記」にある同伴の甥卯七との兩吟歌仙の發句「故鄕も今はかり寢や渡り鳥」によつた題號であらう。【刊行】寶永元年（國書刊行會俳諧書籍目錄）。【諸本】蕉門俳諧後集（俳書大系）所收【內容】夜の卷の末に「名ニ二卷ニ說」と題する正秀の文を跋として附し、晝の卷の末に、丈艸の元祿十五年仲冬の「賀ニ渡鳥集ニ句幷序」と題する文を跋として附してある。丈艸の文は撰集の賀句（句撰やみぞれ降る夜のみぞれ酒）に添へた序であり、正秀の文も題號に對する說を述べたもので、この種の文を跋に用ひた所は珍しき一趣向である。卷末には「渡鳥集作者」と標して、國別に百八十七人の作者名を錄してある。夜の卷に、去來の「入長崎記」及び去來・卯七兩吟歌仙、素行亭興行の支考・素行・卯七・去來等七吟歌仙、長崎影照院に於ける去來・素民（闕主）等六吟歌仙一折、元祿十五年落柿舍に於ける先放・去來・支考三吟歌仙、長崎梅ケ崎に於ける去來・鳳叩等六吟歌仙、元祿初め落柿舍に於ける卯七・去來等七吟歌仙、追加の田上山遊吟の卯七・素顯等九吟歌仙、以上の間に三句物一、二句物六、表六句一、火燵の方位を分つて詠んだ發句が七句ある。卽ち夜の卷は、七卷の歌仙その他連句の斷片を集めた連句の部である。晝の卷は、秋・冬・春・夏の順序によつて發句を集めた發句の部で、諸家の發句四百二十三句を收めてゐるが、作者は去來の親密な俳友の外、去來の一族及び長崎地方の門人俳人が主なるものである。四季の順序が秋で始まつてゐるのは、渡り鳥を卷初に揭えたからで、發句の部に於ても卷初の秋の部の初めに、支考から送つた芭蕉の「目にかゝる雲やしばしの渡り鳥」の句があつて、それに因んで諸家の渡り鳥の句が集められてゐる。なほ連句の部に於ける連句の季の順序が、發句の部の秋以下の季の順序に一致せしめてあるのも注意すべき點である。【價値】芭蕉に忠實であつた去來の一派の芭蕉歿後に於ける俳調を知るべき代表的な集の一つであり、且つ去來の最晚年の風調を見るべきものである。本集の撰集された頃は蕉門でも變風した人が彼此あつたのであるが、本集は變風しない人々の作の見られるものである。中には舊作も交へられてゐるが、それ故大して不調和を感じない。要するに變風しない自然の進みの蕉風の見られるものである。なほ去來一族及び長崎俳人の作の纏まつて見られるものとしても注意される。支考が元祿十一年に九州行をして歸省中の去來に落ち合つたので、支考も加はつてゐるが、支考はこの頃から變風の傾向を取つたけれども、この時はまださほどでなく、特に去來に合はしてゐる。兎に角支考に、この時「梟日記」と「西華集」（各別項）とが成り、去來に「旅寢論」（蕉門俳書）（別項）が成つたので、本集はこれ等の三書と比べ見るべきものでもある。　（志田）

和辻哲郞 わつじてつらう 批評家【閱歷】明治二十二年三月一日、兵庫縣神崎郡仁豐村に生れ、第一高等學校を經て、明治四十五年東大哲學科を卒業した。その前後に於て一時文筆を執つてゐたが、ニイチェ、キエルケゴオル等の詩人哲學者の研究に沒頭し、その後、佛敎美術の研究に轉じ、それから漸次日本思想史に集中されて行つた。また大正八年頃より東洋大學に、やゝ後に法政大學・慶應大學等に敎鞭を執つてゐたが、同十四年京都帝大助敎授に任ぜられ、現に同大學敎授として倫理學講座を擔任してゐる。なほ彼は早くより佛敎の研究に深遠なる造詣を有し、當代に於ても、その方面で有數なる學徒の一人とされてゐる。その著「古寺巡禮」は、佛敎古美術に對する著者の蘊蓄の片鱗を示した好著として、「偶像再興」と共に、江湖の推奬を受けて居り、また「日本古代文化」は、獨創的な見地より、日本古代文化を鑑賞批評した名著として共に有名である。「日本精神文化」の中にも、「源氏物語」「枕草子」などの文學作品に對する獨創に富んだ好論文が收められてゐる。その他、ストリンドベリーの「或る魂の發展」「痴人の告白」などの翻譯もある。【著作】ニイチェ研究〇ゼーレン・キエルケゴオル〇偶像再興〇古寺巡禮〇日本古代文化（別項）〇日本精神文化等。　（平林）

和唐珍解 わとうちんかい 「和唐珍解」を見よ。

和版書籍考 わはんしよじやくかう 書誌學 十卷【著者】幸島宗意【刊行】元祿十五年【諸本】解題叢書（國書刊行會編）所收。【解說】慶長から元祿年間に至る我が國の刊行書を擧げたものである。一々卷數・著者について記したほか、略解題を附して居り、これを神書・儒書・武書・史傳雜記・佛書・雜記・醫書・諸子百家・詩文尺牘・倭歌・倭字諸書・字書法帖の十二門に分ち、總て七百五十九種を錄してゐる。元祿頃迄の刊行の狀態を知る事が出來ると共に、群書の解題としても相當價値がある。　（岩淵）

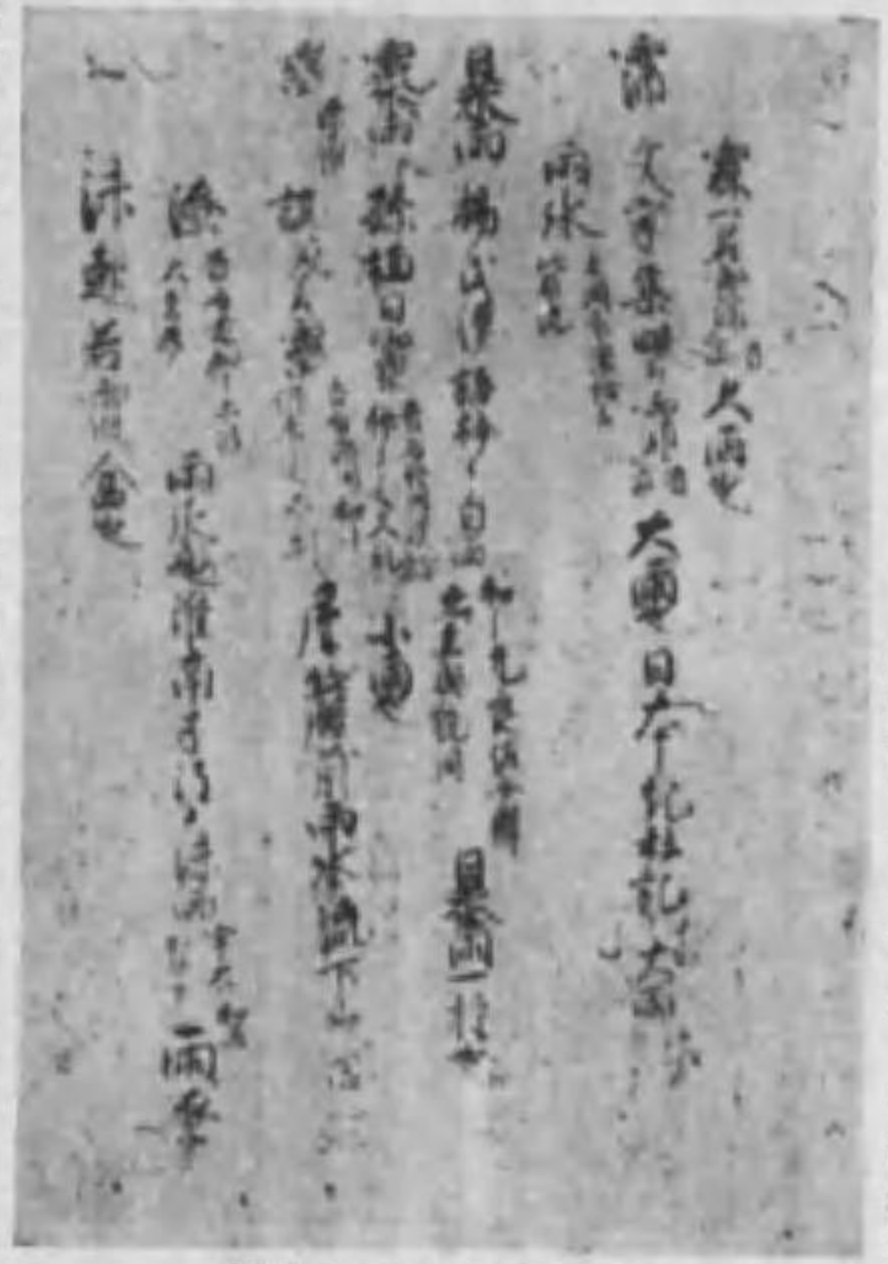
和風長壽樂 わふうちやうじゆらく 雅樂舞曲【名義】唐の長壽樂（壹越調）に對し、日本で作られた長壽樂の意。【性質】舞及び樂ともに全く絕えてしまつて、如何なるものであるかを知ることが出來ない。但し別に雙調曲の中に「和風樂」といふものがあつて、これを一に「和風長壽樂とも云ふ」といふことがあるので、或はこの曲は雙調の「和風樂」と同じものであるとも言はれてゐる。併しこれは別曲かとも考へられる（和風樂參照）。【沿革】起原は「續日本後紀」仁明天皇の卷に記されてゐる。卽ち「承和十二年正月乙卯、是日外從五位下尾張連濱主、龍尾道上に於て和風長壽樂を舞ふ。觀る者千を以て數ふ。初め謂ふ鮐背の老、起居すること能はざるべしと。袖を垂れて曲に赴くに及び宛ら少年の如し。四座僉曰く近代未だ此の如き者あらずと。濱主本と是れ伶人也。時に年一百十三。自ら此舞を作り、表を上つて長壽樂を舞はんと請ふ。表中和歌を載す。其詞に曰く、「なゝつぎの御代にまわへる百ちまり十の翁の舞ひ奉つる」。丁巳、天皇尾張濱主を淸涼殿前に召して長壽樂を舞はしむ。舞ひ畢つて濱主卽ち和歌を奏して曰く、「翁とて佗びやは居らむ草も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ」。天皇賞歎、左右涙を垂る。御衣一襲を賜ひ龍退かしむ云々」。併しその後、この樂舞の事に就いては何の記錄もない。　（田邊）

和風樂 わふうらく 雅樂曲【名稱】本邦製作

の樂の意。「弄春樂」ともいふ。【性質】左方樂。新樂、中曲。双調曲に屬する。拍子十四。【沿革】この曲を「和風長壽樂」（別項）と同曲であるとなし、尾張濱主が作つたとする傳が多いが、その作曲形式から見て疑はしい。「續敎訓抄」に「或記云く、此曲春の曼陀羅會のために、延曆寺信淨讓が所作なり。舞師船木氏眞舞を作る。（中略）。又云、此曲淨操大德が所作なり。天台の舍利會に春奏レ之」とある方が眞實らしい。（田邊）

和文（わぶん）　國語學　【名稱】雅文とも。【解說】文章語體の文語（文語文）の一種。平安朝に行はれた和歌の語や假名文の系統に屬するもので、平假名ばかりで、又は平假名に間々漢字をまじへて書くのが常である。用語は主として古來の純粹の日本語を用ひて、漢語その他の外來語はなるべくこれを避け、文法は平安朝の歌文の文法を標準とする。なほ漢文に對して、漢文又は漢文系統以外の文章語體の文語を和文といふ事がある。それは、廣義の和文である。

【沿革】和文は、漢文の如き外國語系統の文語に對して純粹の日本語による文語に屬する。これと同系統のものとしては、古く漢字專用時代から、「古事記」「祝詞」「萬葉集」の如き、傳誦の言語や歌謠の類を漢字に寫したものがあり、その書き方も樣々であつたが（文語參照）、そのうち、一字一音節の萬葉假名で書いたものから、平安朝の初期に平假名の文が發生し、主として婦人の間に行はれて歌や消息を書くために用ひられ、それから純粹の日本語による假名文の文學が發達して平安朝中期には隆盛を極むるにいたつた。この假名文は、その用語は大體平安朝の上流社會の口語に基づくものであるが、しかし平安朝に於ては雅語と俗語との區別が意識せられて、和歌の詞は、歌集の詞書や日記物語草子など散文の語との間に多少の差異があつて幾分古い形が用ひられ、また修辭的の表現が多かつたやうであり、歌集の序文の如きは、對句を用ひるなど漢文の影響を受けたと見られる所もあるが、しかしこれ等は、大體に於ては同種のものといふべきであつた。この種の文語が後世までも襲用せられて、その特徴を保ち、他の種の文語に對して自ら一系統をなすにいたつたのである。これが即ち後に和文といはるゝものである。かやうに、この種の文語は平安朝の口語に基づくもので、その後、時代が下るに隨つて口語が變化したにも拘はらず、和歌や連歌や物語や隨筆の如き平安朝以來の傳統を追ふ文學の語として用ひられたが、しかし時代の下ると共に、當時の口語や漢文その他の文語の影響を受けて、古に違ふところが生ずる事を免れなかつた。然るに江戶時代に至つて國學が盛んになるに及んで、歌文に於ても、後世の風を排して、直ちに古代の歌文を模範とする事となり、殊に宣長以後、古代語の研究が頓に進步し、その文法や語義が闡明せられ、古代の和歌と散文との用語上の差異までも攻究せられて、これを基準として歌文用語の誤謬を指摘しその匡正を目的とする書も多くあらはれ、正式の歌文のみならず、消息や戲文の類までも、古代の語彙と平安朝の語法によるものが國學者によつて作られるやうになつた。當時これを雅文と云ひ、後には擬古文とも稱へた。その作者としては、賀茂眞淵・本居宣長・橘千蔭・村田春海・清水濱臣・藤井高尙・石川雅望・黑澤翁滿などが名高い。この種の文は明治以後にも行はれ、殊に明治二十年代に入つて古代の國文學が講究せらるゝに及んで又盛んになり、敎科書にも採用せられ、その文法も學校で講ぜられ、明治の普通文の成立にも影響を與へたのであるが、純粹な形ではその後次第に用ひられる事が少くなつた。但し歌語としては、現今にいたるまで、多くは、この系統のものが用ひられてゐる（文語・平假名・雅語參照）。【參考】國語史概說吉澤義則　○日本文章論物集高見　○日本の文章佐藤寬　○文藝類纂卷三・卷四榊原芳野　○古事類苑文學部神宮司廳　○日本文章史大町芳衞　○雅俗語識別の時期吉澤義則（國語國文の研究）○語脈より見たる日本文學吉澤義則（國語教育及び岩波講座日本文學）○假名發達史序說春日政治（岩波講座日本文學）○玉霰本居宣長○さき草藤井高尙　○小夜時雨萩原廣道○玉霰窓の小篠中島廣足　○雅言用文章黑澤翁滿　（橋本）


倭名類聚鈔（眞福寺本）

倭名類聚鈔（わみやうるゐじゆうせう）　語學書　【著者】源順　【略稱】和名抄　【成立】醍醐天皇の第四皇女勤子內親王の仰せによつて編纂したもので、朱雀天皇承平年中の著である。【諸本】十卷本・五卷本・二十卷本の三種がある。十卷本は本書の原形を傳へるもの。五卷本は十卷本を合册したもの。二十卷本は後人が增補したものと認められてゐる。十卷本には京本・同一本（山田本及び細井本）・尾張本（大須本とも云ふ）・伊勢本・昌平本・曲直瀨本等があり、五卷本には下總本（天文本とも云ふ）があり、二十卷本には伊勢廣本・溫故堂本・活字本（元和三年刊）・慶安本・寬政本及び近年見出された古寫本零卷一卷（保阪潤治氏藏）等がある。刊本としては、二十卷本の活字本以下數種があり、又近年下總本を支那で印行し、大須本を古典保存會から玻璃版で出版した。江戶時代に於ては二十卷本が流行してゐたが、明治十六年に「箋注倭名類聚抄」（棭齋）が刊行され、爾後この書が一般に用ひられてゐる。この書は十卷本の京本を底本とし、他の諸本を以て校合したものである。即ち十卷本は、明治になつて初めて刊行せられたのである。この明治十六年版は、大正十年に縮刷せられ、昭和二年に同時に二種の複製本が出來た。【內容】本書は分類體の漢和字書で、その原本の形を存すると考へられる十卷本に於ては、二十四部百二十八門に分つて漢語を摘出し、これに音と意義とを漢文で註し、萬葉假名で和訓を加へたものである。二十四部は、

（1）天地部（天部・地部・水土等六門に分つ）。（2）人倫部（男女・父母・兄弟類等六門）。（3）形體部（耳目・臟腑等八門）。（4）疾病部（病類・瘡類二門）。（5）術藝部（射藝・雜藝等四門）。（6）居處部（居宅・門戶・道路等八門）。（7）舟車部（舟類・車類等四門）。（8）珍寶部（金銀類・玉石類二門）。（9）布帛部（錦綉類・絹布類二門）。（10）裝束部（冠帽部・衣服類等八門）。（11）飮食部（水漿類・酒類・飯餠類等八門）。（12）器皿部（金器・漆器等五門）。（13）燈火部（燈火類・燈火具等三門）。（14）調度部（佛塔具・祭祀具・征戰具等三十三門）。（15）羽族部（鳥名・鳥體二門）。（16）毛群部（獸名・獸體二門）。（17）牛馬部（牛馬類・牛馬病等四門）。（18）龍魚部（龍魚類・龍魚體二門）。（19）龜貝部（龜貝類・龜貝體二門）。（20）蟲豸部（蟲名・蟲體二門）。（21）稻穀部（稻穀類・稻穀具二門）。（22）菜蔬部（菜類・葷類等三門）。（23）果蓏部（果蓏類・果蓏具二門）。（24）草木部（草類・竹類・木類等八門）。

以上の如くである。二十卷本は序に四十部二百六十八門に分つとあるが、本文は三十二部二百四十九門になつてゐる。即ち十卷本よりも、時令部・樂曲部・湯藥部・官職部・國郡部・殿舍部の六部が多い。本書の編纂に當つて用ひた書は、「辨色立成」「楊氏漢語抄」「本草和名」「日本紀私記」「切韻」「唐韻」「爾雅」等の支那の韻書及び字書並に「周易」「春秋」その他の典籍が主なるものである。【價値】本書は分類體の辭書としては我が國最大のものであり、單に文字の音義のみならず、事物に關する說明もあつて古代の文物百般の研究に有益であるところから、古來註釋書の類に引用せられて後世に及ぼした影響は多大である。和訓には最も力を用ひて、盡くこれを附したから、古文獻の闡釋や、古代語研究に益するところ甚だ多い。漢字音の研究にも亦有力な資料を供する。一々出典を明かにした中に、古逸書もあつて、その方面からも注目せられてゐる。【末書】和名類聚抄釋義二十卷四册（寫本。契沖著と傳ふ）。「和名抄」から語を抄出して、語源・類語等を簡單に記したもので、著者が「和名抄」に書き入れたのを、後人が抄出したものであらう（契沖全集には收めてない）。○箋注倭名類聚抄十卷（狩谷棭齋著。文政十年五月稿成る。明治十六年出版）。京本を底本として十餘種の異本を校合し、和漢の古書に照して考證を加へたもので、「和名抄」の研究としては、實に空前絕後の名著である。なほ本書の原本には、卷末には校譌及び異體字辨があつたが、明治十六年出版の際これを除いたのを、近年正宗敦夫氏が謄寫版に附して刊行した。但し昭和四年に刊行した活版本には校譌、異體字辨及び索引を附してある。なほ棭齋には二十卷本にあつて十卷本にない「時令」「樂曲」等の部內について考證したのが、未定稿のまゝで殘つてゐたが、後、山田孝雄博士がこれを整理して「倭名類聚鈔考證附錄」と題したのを、謄寫版で正宗敦夫氏が刊行した。因みに本書の標題は、もと「倭名類聚抄考證」とあつたものである。○箋注和名抄訓纂一卷一册（森立之編。明治十九年五月刊）。棭齋の「箋注倭名類聚抄」の和訓をいろは順にし、原本の丁數を記した索引である。後大正五年、山田孝雄博士はこれを改訂して五十音順にし、「改訂箋注和名抄訓纂」と題し、正宗敦夫氏は、これを前記「倭名類聚抄考證附錄」と合册して刊行した。○和名類聚抄地名索引一卷一册（內務省地理局編纂。明治二十一年七月刊）。「和名抄」に見える地名を、その最初の字の音數に依つて次第し、同字の下を國・島・郡・鄕の四類に分けて列舉し、本文に註のあるものは、これを採錄してゐる。【參考】倭名類聚鈔箋注の異本について龜田次郎（書物の趣味三）（龜田）

和譯太郎（わやくたらう）「秋成」（あきなり）を見よ。

和與狀（わよじやう）「申狀」を見よ。

和良日久佐（わらひぐさ）「悅目抄」を見よ。

笑ひ話（わらひばなし）〔佛〕Les Droles.〔英〕Droll tales.【解說】從來は「おどけ話」といふ方が普通であつたが、それでは少しばかり範圍が狭くなる感がある。漢字でも「笑話」といふ語があるから、改めて笑ひ話の名を採用すべきである。「おどけ話」はおどけ者又は道化者のする話であつて、さうでない者が屢々笑ひ話をすることがあつた。人には夙くより笑ひの必要があり、道化者は寧ろその必要に促されて後に起つたのである。人が笑を催す場合は、何がをかしいかに注意を拂つて見れば、その性質を見分ける事もさして困難でない。笑ひ話の分類も、結局これを標準として出來る。多くの心理學的辨證もあるが、笑は要するに滿足の聲であつた。欲が遂げ求が得らるれば獨りでも人は笑つた事は、今も幼兒の動作などに於てこれを認めることが出來るが、後にだん／＼と群の生活に限られるやうになり、夙に說話と切ることの出來ぬ關係を結ぶやうになつた。人が他人との比較によつて、相手の自分よりも弱く、醜く、又は魯鈍なことを知ることが、もとは主要なる笑の刺戟であつた。それ故に如何なる民族でも、努めて敵を笑はうとしたのである。笑と戰爭とは深い關係があつたと同時に、笑はるゝは屈辱であり、笑ふは侵害であつた故に、人は笑を愼み、又笑はれざることを修身の目的としたのであつた。平和なる團體の生活では、笑ふべき事由は誠に少く、また笑ふべからざる拘束が多かつた。しかもこの滿足の聲は、既に勇氣元氣のために缺くべからざるものとなつてゐたので、百方その機會を求めて、終に假設想像上の「笑ふべきもの」を見出した。これが笑ひ話の根源といふべきものであつた。そのうちに笑の發見者の技能が錬磨せられ、彼等は更に進んで、自らその笑の相手となることを甘んずるやうになつた。これが日本に限らず、いづれの民族にも道化者の一役が、早く存立を認められる理由である。だから笑ひ話は凡そ笑はるゝ者の誰であるかによつて、これを敵・味方の二種類に分つことが出來る。異國人・隣村人、若しくは惡狀等の弱點をやゝ誇張してまでも批評せんとするは對敵行爲であつた。狐狸天狗の類の人に化するものも、やはり話に於ては、努めてこれを笑はんとしてゐる。おろか村・おろか聟等の話なども、根源は即ち一であつた。これに對してチャリ・ヒョウヒャクなどと稱して、仲間のうちに特に智能を缺き、若しくは普通に人のせぬ事を平氣でして、それを自ら語つて笑はるゝことを辭せざる者があつた。大抵は虛飾であり、又屢々職業としてこれに任じてゐたのであつたが、徒然無聊を愛せざる公衆は、彼によつて存分に笑の快樂を味はつたのであつた。この道化は同時に又敵を笑ふの技術をも解してゐた爲めに、二種の笑ひ話は往々にして混同した。が併し笑はれて怒る者のある話と、誰も抗議を申込む者のない話とは、性質が初めから別であつた。敵を笑ふ方の話の古いことはよく分つてゐる。第二の自嘲の說話も近代に入つ

て非常に發達したことは事實であるが、これに由つて前代には全くその存在を見なかつたものの如く推定することは出來ない。我々が神話時代と稱する社會に於ても、俳優は儀式として祭儀の醜く破らるゝ狀態を演じなければならなかつた。優れて正しく又誠ある人の幸運を叙述するには、方法として必ず花咲爺の隣の爺や、慾深婆の如きものを想像に上せる必要があつた。神の訓戒と作法とを解說するには、堅く守つて賞せられた者の側に、誤り欺いて災を受けた者の側を並べて見るが便利であつた。我々の滑稽文學は早くその芽生えをこゝに培はれてゐたのであつた。或は民間說話（民譚參照）の最も古く文學化すべかりしものが、この方面にあつたと言つてもよい。その上に人の生活には普通に天然の制限があつて、念願希望のみは遠く走り易かつた爲めに、こゝにも夢を實際の如く描寫する「大話」（別項）といふものの發生する餘地はあつたのである。人間の常の力では到底なし遂げ得ない事業、それを知りつつ誠らしく語ることは、卽ち一種の自嘲であり、弱點の暴露であるが故に、他人はこれを聽いて大に笑ふことが出來た。笑ひ話はこの普通の常識ある者の言はぬ事、人が私事として隱さうとする事柄を、無造作無遠慮に語り出す點からも發生し得た。笑ひ話の教訓的價値は、言はばこの弱點批判の假想的練習を經て、追々に今日の高さにまで押し進められて來たのである。（柳田〔國男〕）

わらんべぐさ　能狂言傳書　五册　【著者】大藏流十三代大藏彌右衞門虎明　【名稱】「昔語抄」と云ふのが本題であるが、ことさらに假名を避け、童子も能く讀む假名を以て記したとの緣から、卑下して「童子草」とも名付けられてゐる。【成立】奧書に、慶安三暦辛卯姑洗吉辰日の著とある。【諸本】この書、稀に斯道の一二家に書寫されて傳へられてゐるけれども、師家相傳の稿本には、「猶家々に相尋重而筆を加べし」とある文字通り、初傳本の上に更に縱橫の書き入れがあつて、その價値は一層大きい。【解說】「よしあしもむかしの人のことばのみかきつゞけたる物語なり」の歌に因んで付けられた「昔語抄」の名の示す如く、虎明が年少の折より見聞覺知した所を基として、狂言に關する古今の習義・規調を八十九段に分つて詳述したもので、能樂に於ける「花傳書」や「申樂談儀」（別項）に相當する。記述の範圍も、小にしては發音を論じ、大にしては春日猿能・多武八講能の座則を說き、或は又翁の大事を言ひ、又は面の目利に及び、さては四座の系譜に觸れるなど、殆ど申樂一道のことに亙つてゐる。而してその記述の態度たるや、文中に「おぼつかなき事は不書入」とあるものなどを見ても知られるやうに、甚だ信據すべきものの如くである。能狂言の研究上、全く唯一無比の參考書で、今日教示せられる所は甚だ多い。（[illegible]）

割り白（わりぜりふ）　演劇　【名義】いくつかに割られて表はされる臺詞の義。【解說】歌舞伎劇で、甲と乙とが、全く聯絡がなくて互に自分としては獨白の形で思ひ思ひの臺詞をいつてゐるが、最後はそれが不思議に、同樣な心持の言葉に一致する場合、これをいふ。普通は、一人は本舞臺に、一人は花道にゐる。それが何のかゝはりはないのだが、偶然お互の心を獨白のやうに、又互に一つづつ交叉して別々の白をいふ譯になる。著者特有の變つた獨白の一種である。例へば默阿彌の「一つ家」の本舞臺の老婆と、花道の權兒の場合、又は「十六夜清心」百本杭の清七と求女との場合等に見られる。この場合、普通の「渡り白」（別項）と違つて、全く別々の事をいひ合ふ。（三宅）

われから　小說　【作者】樋口一葉　【名稱】俗傳に、「われから」といふ蟲は、月に浮れて貝を出て泳ぎ廻るうちに、蟹などに殼を横取りされるといふ。從つて女主人公が婿子の良人から追ひ出される筋を本作の題名としたのである。【發表・刊行】明治二十九年五月、「文藝倶樂部」。一葉全集・明治大正文學全集・現代日本文學全集等所收。【梗概】お町は、この頃の外泊勝ちな夫の事を思ふと、その晩も眠れない儘に書生の千葉の部屋を見廻つたりした。彼女は何不自由なく育つたが、今は亡き父親の與四郎はもと小役人であつた。お美尾は彼の戀女房だつたが、やがて夫に滿足しないで虛榮に憧れるやうになり、お町を產むと間もなく赤子を置いた儘家出して了つた。激怒した與四郎は心機一轉遂に巨萬の富を成し、お町の聟に迎へた金村恭助は今政界に活躍してゐる。お町は家付きの妻として夫の恭助に甘え放題で暮して來たが、子種のない上に外出の多い夫の留守の心許なさを、使はるゝからのお追從などで辛うじて紛らせてゐた。折柄、夫の誕生日で、多くの來客に背の中のざわめきを避けて庭に下りると、他の女の聲に合せて夫の唄ふ聲が聞えて來る。その時感じた何故ともつかぬ憤りなさを、後で絹々と訴へても見たが、夫は輕く笑つてゐるだけであつた。求めて得られないお町の心は、仲働のお縫の口前にも乘せられ氣味で、次第に千葉に親みを感じていつた。その後、夫に妾腹の子のあることまで、ふと小耳に挾んだ翌日、子供を貰はないか、と夫に言はれ、さてはと、いよ〳〵恨めしく頓に氣も滅入つてあつた。さうした物思ひからの癪をその度に介抱するのは律儀な千葉であつたが、度重なるに伴れては變な噂も立つやうになり、世間の口の喧しさに堪へかねた夫から、遂にお町は別居を言ひ渡された。突然の事に、その夜のお町の心狀こそ誠に哀れであつた。【批評】お町と千葉の不義を主な事件とし、金村家の家庭內の生活と環境を背景としたもので、それ等に包まれたお町の世間知らずの我儘と、淫奔な母親から承けた血と、獨り寢の淋しさと、それ等が一緒になつて夫への反抗と愛慾の充足を煽つてゆく跡が、比較的自然に描かれてゐる。筆も達者で、情緖に捲き込まれてゆくお町の戀姿は、殊に鮮かに浮き上つてゐる。（[illegible]）

我等（われら）　雜誌　【刊行】大正八年二月、長谷川如是閑・大山郁夫を中心に、井口孝親・大庭柯公・丸山幹治等を同人として創立され、昭和五年に、改題して「批判」となつた。大正七年の米騷動に關聯して、大阪朝日新聞が、思想的な彈壓を政府と右翼團體から加へられた爲めに、同年秋、同社を退社した長谷川・大山・丸山・井口・鳥居素川・花田比露思等の言論發表機關として生れ、同時に退社した東京朝日新聞社の松山忠治郎・大庭柯公等が、それを支持した。【解說】創刊當初は、この雜誌の起つた動機に從ひ、當時の急進的傾向を代表し、デモクラシーの思想の普及を目的とした啓蒙的文化雜誌であつたが、大正九年春の森戸事件を機會に、次第に現實鬪爭的色彩を加へ、櫛田民藏・森戸辰男・河上肇等も、新に同人に加はり、漸次マルキシズム的な論調が現はれて來た。後には論壇を一般に公開したので、有名無名の新進學者思想評論家の登場を見るに至つた。然るに大正十二年の第一次共產黨事件その後、社會思想の[illegible]一般に甚だしい分化作用が行はれ、「我等」のやうな啓蒙雜誌の使命は、一先づ完了したといふ意見から「批判」と改題し、長谷川如是閑を中心に、櫛田・森戸・井口・嘉治隆一等が[illegible]助け、不偏不黨の立場から、一般無產階級運動の進展に助力する方針で進んでゐる。（千葉）

笑嘉登（わらひかど）　咄本　一册　【作者】立川銀馬　【畫工】[illegible]　【名稱】落咄と角書がある。「笑嘉登」は笑ふ門に、俗諺「笑ふ門には福來る」に據る。【刊行】享和元年　【諸本】[illegible]所收。【解說】全篇二十三章の笑話から成立つてゐる。[illegible]

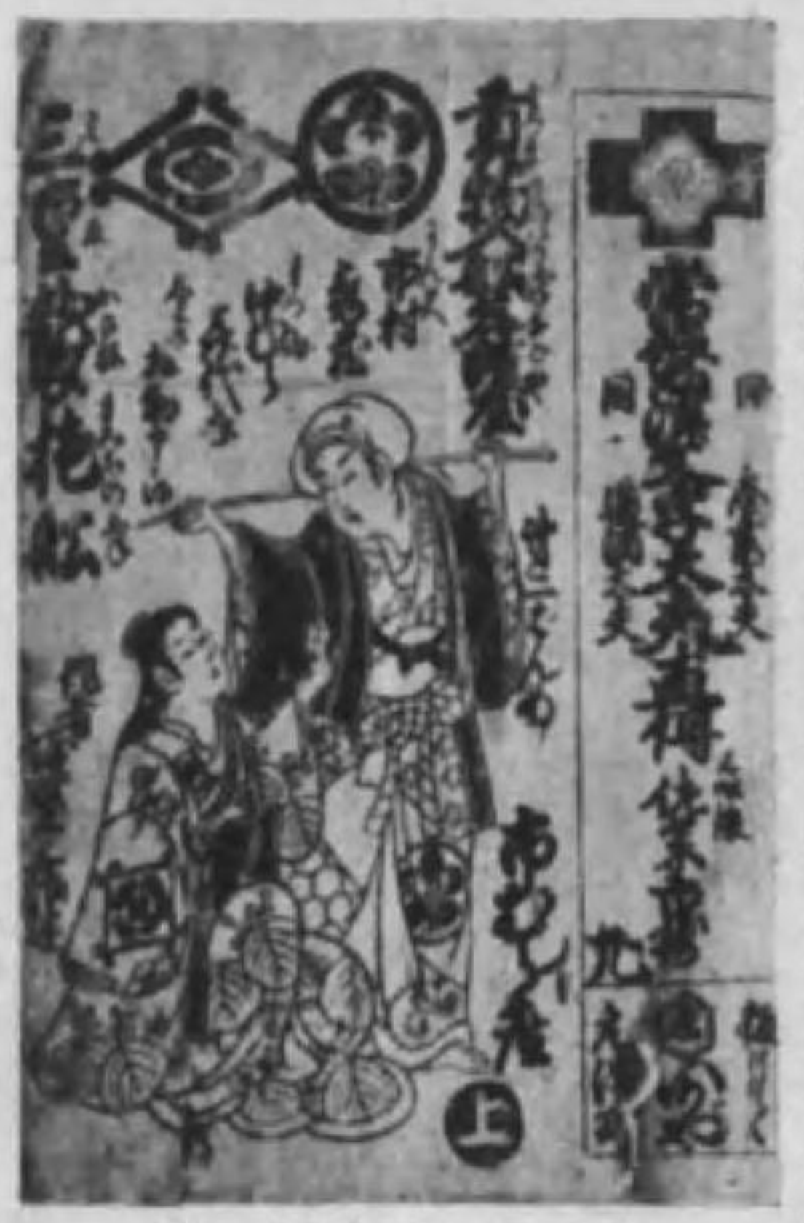
椀貸穴（わんかしあな）　傳說　【解說】二十年餘り前、我々がこの傳說の存在に心づいた頃には、[illegible]

（柳田〔國男〕）

椀久（わんきゅう）　所作事　狂亂物　【題材】椀屋久右衞門の事は[illegible]

演の「三重襲艶姿」（淸瀬、椀久松山）が古く、富本では安永二年正月森田座所演の「梅柳二人伴」などがあり、變化舞踊としては現に曲のみ行はれる長唄の「二人椀久」（又は四季の椀久）が古く、寬政六年の作といふ。最近では常磐津の「椀久色飾込」（田村西男作。淸朝、新曲椀久）や、淸元の「幻椀久」（岡村柿紅作）がある。（椀久末松山參照）

【其面影二人椀久】〔通稱〕二人椀久〔初演〕安永三年四月七日初日、江戶市村座「結館子伊達染曾我」第二番目大詰〔作詞〕中村重助〔曲節〕長唄〔立唄〕松永忠五郎〔作曲〕錦屋金藏〔振附〕二代藤間勘兵衞〔傳來〕曲は傳存、振は廢滅。但し大正三年十一月帝國劇場で復活。〔底本〕日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。〔內容〕椀久（九代市村羽左衞門）の狂亂を傾城松山（瀨川菊三郎、後の三代菊之丞）が追ひ、自ら椀久の姿をして井筒の連所作。歌詞は、享保十九年所演の「二人椀久」（前出）と大部分は同じであるから、曲も恐らく增補したに過ぎないと思はれる。八代市村羽左衞門十三回忌追善として演じたもの。



三重襲艶姿（常磐津正本）

【狂亂廓三面】〔通稱〕三面椀久・歌右衞門椀久〔初演〕天保十年二月十一日初日、江戶市村座「館扇面曙白浪」第二番目大切〔作詞〕二代中村重助〔曲節〕常磐津節〔太夫〕四代常磐津文字太夫〔作曲〕五代岸澤式佐〔振附〕二代藤間勘十郎〔傳來〕曲・振共に傳存。〔諸本〕常磐津全集所收〔內容〕椀久（四代中村歌右衞門）が狂亂して來り、面賣三五郎（十二代市村羽左衞門）より面を奪ひ、客・花魁・幇間の三つ面をかぶつて踊り分ける。傾城松山（坂東玉三郎、後のしうか）がこれに絡む。三つ面の踊り分けが眼目で奴道成寺や夜這星等と同じ狙ひどころ、演者の技倆次第で生きるものである。〔備考〕三代歌右衞門が、文政六年正月大阪角の芝居で演じた「千種の亂咲」を增補したもの。なほ常磐津には「梅柳對相傘」（通稱、椀久。弘化四年正月市村座）や長唄との掛合の「增補二人椀久」（嘉永三年九月同座）等があるが、廢曲となつた。（秋葉）

【參考】劇代集（二代澤田左安）〇元祿歌舞伎傑作集上卷（高野辰之・黑木勘藏共編）〇近世邦樂年表

椀久一世の物語　わんきういつせのものがたり

浮世草子　二冊【作者】不詳。西鶴といふ說もある。【名稱】題簽には頭に（大阪、堺筋）、下に繪入の記入がある。【刊行】奥に「貞享二乙丑歲二月二十一日、北御堂前安土町本屋、書林庄太郎開板」とある。【底本】賞奇樓叢書二期（大正四年珍書會刊）と新選繪入西鶴全集雜纂篇第一卷附錄に所收。

【梗概】〔上卷〕（一）椀久二十七歲の正月七日箕面山の辨才天に詣で、暫く假睡む中に、天女が夢枕に立つて、內藏の財產を自由に費ふためとて一個の鑰を授けられた。これより遊蕩に耽る。（二）椀久知人を訪ねて、夫婦喧嘩を見、妻は一生持つまじきもの、その費用を以て遊蕩をするがましと考へた。（三）若衆順之助を愛して、彼に與ふべき家を普請中、新町の遊女に心うつりて順之助を忘れ、作事中の家は荒してしまつた。（四）鷲の尾山の櫻見に贅澤の限りを盡くして人々を驚かした。（五）時は四月であるのに、九軒町の吉田屋で、正月事をして遊び、自身年男を勤むるとて座敷に一步五十兩まいた。（六）浮世をはかなむ袖乞の女に三百文を與へて、その黑髮を所望したが拒まれ、錢を返された。この事から思ひついて、これまで集めた女の黑髮を高野山に納めに上つた。そこで人生を觀じて、遊び心を去つて山を下つたが、乳森の遊女を見て、又元の遊び心に復つた。（七）丹波屋松山に逢ひそめ、次第に深くなつたが、妻が十八歲で死んだので、暫し謹愼の心になつた。〔下卷〕（一）窮して家屋敷を賣り、藤の森町に住家を求めて、こゝに妾久米と住んでゐた。或る日尼になつた姉妹等と逢ひ、旅費を惠まれて江戶行を思ひ立ち、妾を親許にかへした。（二）江戶行の途中、撞木町に遊び、逢坂山から引返して、藤の森町に歸つた。揚代の殘金取りに來た使が、彼が貧窮の狀を見て、却つて金と蒲團を惠んで行つた。（三）ぽんの長兵衞方に身を託し、遊び仲間であつた惣八と新町に行つて、昔馴染の妓達に逢ひ、松山の消息を聽いて歸途發狂してしまつた。（四）惣八に勸められて出家姿となり、鄕町の庵に住んだ。或る夜長堀の材木の上に眠つてゐると、こゝに或る女がたづね來て、その眠れる褥に女小袖を掛け、枕許に氷砂糖を置いて行つた。（五）鉢坊主となり、物貰ひして暮したが、折角貰つたものも惜しげなく乞食に與へてしまふ。（六）大川に舟を浮べた大盡に近づき、舟中の遊女の名を問うて怒られ、散々に叩き伏せられて水に落ちて死んだ。

【解說】延寶頃有名であつた蕩兒椀久事、椀屋久兵衞のことを小說化したものである（椀久參照）。上卷七章、下卷六章より成る。本書は浮世草子中の傑作を以て、目すべきではないが、文章は西鶴ではないとしても、彼一流の勝れた筆致に成るものである。今非常に稀覯の書で、筆者はただ故宮崎三昧藏本を見たのみである。賞奇樓叢書・西鶴全集共に、この本に據つたものであるが、原本に落丁があるので、何れも完璧でない。椀久の事の文學になつたものの最も古い一つであり、「新小夜嵐物語」と知られた「椀久二世物語」は、本書を襲いだものである。（藤村）

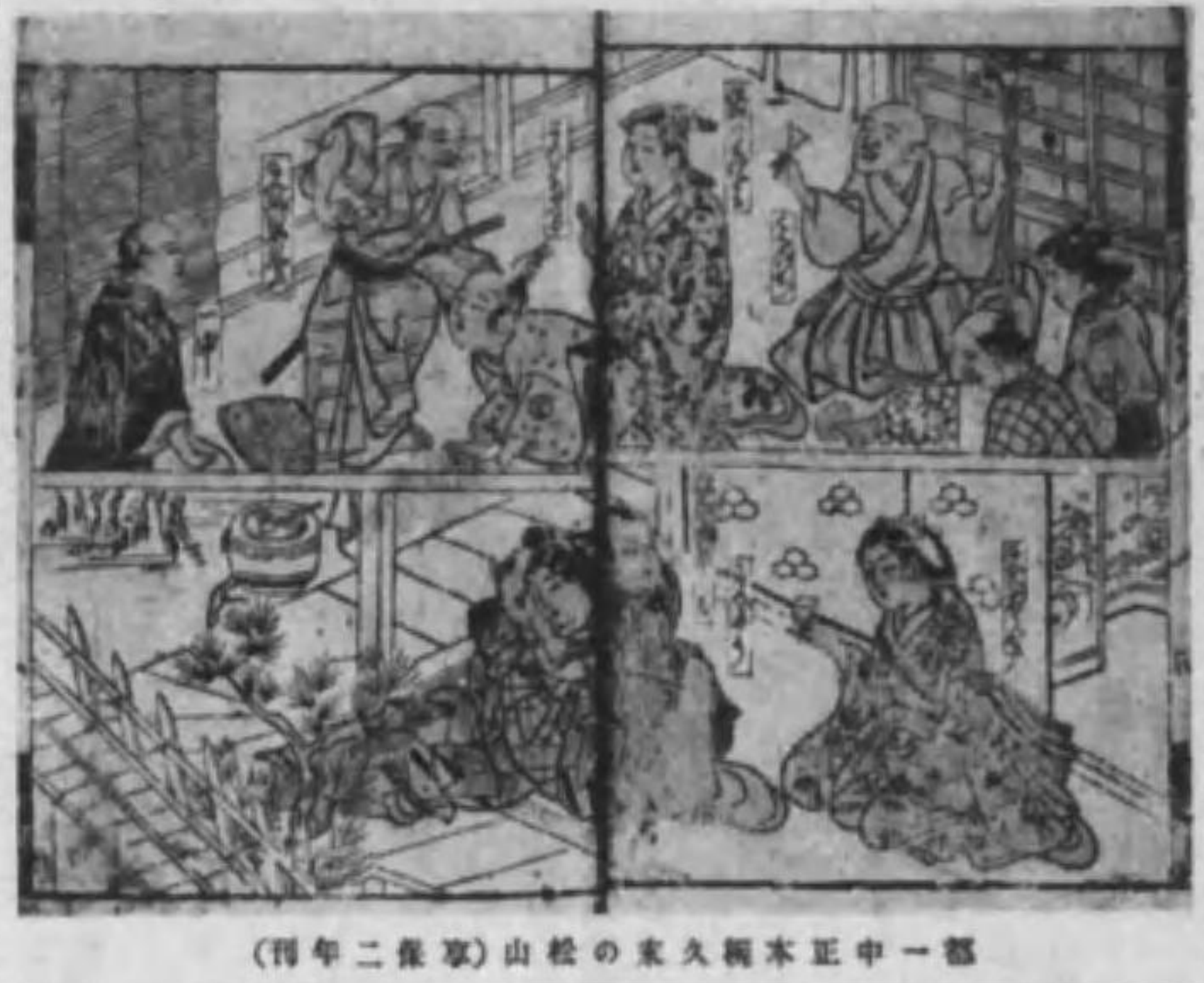
椀久末松山　わんきうすゑのまつやま

淨瑠璃　三段　世話物【作者】紀海音（豐竹若太夫正本）。別に都一中正本「椀久末の松山」については、近松門左衞門說、佐渡島三郎左衞門說などがある。【名稱】曲中の主要人物たる椀久と松山との名を、歌枕「末の松山」を以て結んだのであらう。【諸本】（一）若太夫正本。八行二十七丁本、大阪正本屋九左衞門版。名著文庫淨瑠璃名作集上卷所收。（二）一中正本。本文は大體同樣。八行二十六丁本、山本九兵衞版。世話淨瑠璃大全上卷所收。同繪入本、江戶近江屋九兵衞版（享保二年正月刊）。【興行】豐竹若太夫によつて上演されたのは、寶永五年三月三日

初日、「新利屋物語」の切狂言としてである。都一中によつて語られた年次は明かでない。

【題材】事實（椀久參照）は、「椀久一世の物語」（別項）によつて比較的忠實に綴られたと想像されるが、そこに描かれた椀久には遊興の幻想を追ひつつも、終に大盡の氣概を捨てぬ人品が見られる。而も落魄後の悲慘な生涯が描かれてゐる。大和屋甚兵衞は椀久に會つてゐたやうにも記されてゐるところから見ると、椀久を生き寫しといはれた甚兵衞の演技は、實事の摘寫を主として地狂言であつたであらう。然るに、その後、元祿年代の歌舞伎劇に於て、この實事が大盡の風格と松山に對する純情とを中心にして整頓され、地狂言と所作事との種々な形式を以て、流行するやうになつた。これを淨瑠璃化したものが本曲であると思ふ。若太夫正本と一中正本との製作の前後については說があるが、若太夫正本について、その作風が海音を作者とすると想像される點や、一中正本について、その一本に享保二年の江戶版がある事から、又原作のさう溯るまじき點などから見て、若太夫正本の方が先行曲ではないかと思はれる。

【梗概】〔上卷〕（新町揚屋表座敷）太夫松山の茶の夜會の催しに、椀屋久兵衞は一中等を連れて席に臨んだ（一中正本では、と・で一中が山めぐりを語る）。折から緣下に忍んだ駕籠舁作兵衞は、道榮（一中正本では初瀬）と契つた身の五十兩に詰まり、死ぬ覺悟で臨まうとして見舞はされた。椀久は二人に同情して、今宵節分の吉例に撒く筈の五十兩を與へようとしたが、豆撒を擬算してゐる家人の迷惑顔もある爲め、わが家に五十兩の急用を申し付けてやる。（奥座敷）一家中の集まつた中に立ち上つた椀久は、節分の祝儀を述べてから、一中（一中正本では才右衞門）の差出す柱掛に盛つた一步豆板を撒く。その中を小者連れの網笠姿が座敷へ通つたので、椀久は怒つてその笠をとると、親久右衞門であつた。久右衞門は伜から昨日受取つた五十兩の爲替金で、椀久を打つて意見した。その爲替金の封は破れて中から石瓦が出た。女房おさんと舅への義理の意見に、椀久は自害して詫びようとするを、久右衞門は親への面目かと怒る。松山が抑へて、椀久の自害の心は道榮達二人への義理のためと言ひつくらふので、久右衞門も改めて五十兩を投げ出し、伜の髻を切つて勘當した。一中は、椀久の跡を追はうとする松山をとめて、椀久の爲めに心ばかりの餞別とて十德を着せる。〔中卷〕（久右衞門宅奥座敷）舅は勘當の詫びにもと、椀久を奥座敷に謹愼させてゐる。初夜すぎて椀久の女房おさんが、次の間迄見舞ひに來たとも知らず、廓を憧れた椀久の眼前に、塀を乘り越えて松山が現はれた。松山は嬉しさに驅け寄つたが、緣先の石に胸を打つて悶絶した時、次の間から走出したおさんの水によつて息を吹き返した。松山は井筒屋の備前の客に請け出される事となつたので、椀久と駈落しようと、こゝ迄忍んで來たのであつた。松山の強い愛情に動かされたおさんは、二人を落とさうと申出る。松山もおさんへの義理に、心ならずも身請けの客に應じようと決心し、再び塀を乘り越えた。心變りを恨んだ椀久は、跡を追つて松の梢に足場の綱をかける。馳せ寄つて留めるおさんの手には、切り放された綱だけが殘る。〔下卷〕（椀久道行）松山を尋ねて狂ふ椀久の窶れた姿は、長町から道頓堀・阿波座堀・雜魚場・安治川・福島と經廻つた擧句、北濱邊りまで來て疲れ果てて芝の上に倒れた。通りかゝつたのは松山を請け出した備前の客早次郎で、この頃狂氣六法と噂のある椀久に錢を惠まうとする。椀久はこれを潔しとせずに戻したが、駕籠の松山は新町橋で拾つた金を、主も知れねば收めてくれといふ。椀久は悅んで、これを手にして踊り狂ふ。そこに道榮と作兵衞が落ち合つて、思惜じにとて椀久をわが家に連れようとする。松山は塀へ隱れて自害せんとしたのを、抑へて早次郎は、萬事を察して改めて松山に暇を出し、椀屋は屋敷の出入りではあり、椀を得るまで樂はうと、二人を相與にのせて備前をさして伴ふ。



都一中正本椀久末の松山（享保二年刊）

【構想】浮世草子の「椀久一世の物語」には、椀久の情人が松山ではあつたが、結局松山個人でなく、その餘の女性も撰ばれて、廓情調の追求に終始する所に、書名の如き一代記の內容が窺はれると同時に、小說としては散漫な結果を生んだのである。本曲に於てこの點は十分整理されて單なる大盡たらしめず、又松山の身請けされる筋もおさんへの義理を介在せしめてゐる等、構想が緊密になつてゐる。極めて簡單な情事を潤色するために、作者は先づ貞婦おさんを配して松山との對照を求め、事件の進行の上には、更に道榮作兵衞を點出し、或は一中を活躍させるなどの用意が見える。道榮等を下卷にも現はして、徒らに抹殺させぬ運びや、陽氣な豆撒の最中に久右衞門を編笠姿で出して場景を急轉せしむる技巧等に、作者の凡手ならざることを發見する。但し中卷で、松山をして高塀を越えさせる手法は、奇に奔つて、やゝ不自然の感を與へる。人物性格の解釋に、久兵衞なり、おさんなり、松山なり、悉く義理を重くして時に情に淡いとさへ思はれるのは、作者の態度を語るかに察せられる。若太夫正本に比し、一中正本に於ては、一中が相當活動してゐるのは、興行政策上當然である。【影響】椀久の戲曲は本作に於て、一完成を遂げたと見られ、今後の淨瑠璃も歌舞伎脚本も、大體將本作から出發してゐると見られる（歌舞伎所作事は、同樣的と見ら

れるが、この際「椀久」の後日譚）。【一、浄瑠璃】椀久隅谷笠（作者未詳。寶永七年豐竹座上演）。○椀久狂亂笠（野田宮松正本。上演年月未詳）（以上正本未見）○（椀久松山）元金歳越三段（作者、文耕堂。享保十八年十一月十五日初日、竹本座上演）。

【梗概】（上巻）（上鹽町椀屋下屋敷。吉田屋。番所前）椀屋久兵衛は叔父久右衛門の養子で商人役達藤儀の姫おきんを女房としたが、新町丹波屋の松山と契り、家をあけての放埒な遊びに耽る。おきんに懸想し家の横領を策謀してゐるのが番頭喜左衛門である。久右衛門が下屋敷へ勇蔵座中、御出入屋敷のお余役本郷定之進に遊興の味を覚えさせた上、家中の目附役たる友人若岡千右衛門で定之進その間に果し合ひを起させ、又用意物の屏風を盗み出してこれを皆久兵衛の家據とした。久兵衛は吉田屋で一夜に四季を造る趣向を構へ、定之進からの返金の百両を節分の豆に換へた。（中巻）（問屋）兩士の最期の場に久兵衛と松山の持物が落ちてゐた事から、久右衛門は國許へ召されて留守中ゐ久兵衛が蟄居してゐる處に松山が見舞ひに忍んで來たが、喜右衛門はこれを知つて里からおきんに連れ立つた喜右衛門の面前に松山を引出し、久兵衛と二人に面恥をかゝす。併し喜右衛門は久右衛門の責問から喜右衛門の陰謀を見露はし、久兵衛が松山から預かつた一刀によつて松山は喜右衛門の先妻の敵と分る。久兵衛は夢から覺めた如く、髪を切り、喜右衛門から十徳を貰つて謡ひ出る。（下巻）「物狂ゆかりの十徳」謡ひ歩く久兵衛を追つて姉妹は尋ね廻る。久兵衛は實は佯狂で、世の若者への見せしめといふ。久右衛門からの報らせに椀屋は滅びない事となり、久兵衛一同めでたく再びわが家に入る。〔「末松山」の改作であるが、脚色を複雑にして浄瑠璃式技巧に走つた憾みがある。名作とも言へぬが、下巻物狂の節は、「ゆかりの十徳」として歌舞伎に獨立して演ぜられて影響する所多い〕○（椀久松山）千代の若緑二段（作者未詳。宮古路豊後掾正本。初演年月未詳。「金屋柿」から生れた構想も見られるが、京助六の替設と孫た新供し、助六曲からの影響も指摘される。後段の入水の場面はや・奇に傾く感がある）。

【梗概】（京七條宗悦宅）勘當うけた後の久兵衛は松山にわが子を抱かせて、京の實父宗悦に詫言を思ひ立つて上京する途中、圖らず七條大宮に金佛三昧に溺る實父に出遇つたが、宗悦は久兵衛の養父たる兄久右衛門への義理で、己が養家たるおが家への義理とから作を入れぬ。「椀久松山道行」難波の地を求めて、親子三人は京橋に辿りつき、川面めがけて飛び込むと、もやひの船中に落ちた。そこには久兵衛を息に當てゐる作兵衛初瀬がゐた。そこに宗悦が追つて來て、勘當も許し、夫婦と孫を相構に歸すて歸る。

〔二、歌舞伎脚本〕別項「椀久」に於ける如く、元祿後に於ては所作事に多く、地狂言として獨立した場合は少かつた。而も多くは、他の世話物との綯ひ交ぜであつた。「助六」や「吾妻與次兵衛」などとの交渉が最も多かつた。尤もそれ等の脚色は、浄瑠璃に於て大體類似してゐたからでもある。○遊女胎内捜（中山金蔵、神山勘助作。享保五年京蛭子屋座。伊左衛門・助六・山崎與次兵衛・江戸屋辰五郎などが登場するが、この頃から與次兵衛との綯ひ交ぜが一系統をなす）○（二人椀久二人松山）江戸紫由縁十徳（並木五瓶作。享和三年春、江戸市村座。「金屋柿」の系統であるが、江戸脚本として成功した椀久狂言といふべきである）○椀久（黄海堂亭脚色。明治三十九年三月、大阪中座。「金屋柿」の改作で、上方の椀久として、今日も中村鴈治郎の出し物となつてゐる）○椀久末松山（村井弦齋脚色。明治四十五年一月、東京市村座。海音の「末松山」の改作。六代尾上菊五郎の所演である）。

【參考】世話浄瑠璃大全上巻解説（水谷不倒）○浄瑠璃名作集上解説（岡本勘蔵）○近世文藝名著標本集第一輯解説（石割松太郎）　（守随）

第三巻終

後記

こゝに日本文學大辭典第三巻を世に送つて、本辭典は全三巻の編纂・刊行を完了するを得た。最早剩すところは索引の巻のみとなつた。

憶へば、第一巻を刊行してから二年、第二巻を發售してから一年を經過し、この事業發企の當初よりすれば、既に七回、歳を送迎してゐる。而して本巻は刊行豫告の期を後るゝこと約十箇月にして、漸くこゝに編輯・校正の業を終ふることを得たのである。この間に、讀者の督促を受けたことも一再には止まらない。罪を江湖に負ふの自覺は、自ら責める鞭笞となつて、同人・編輯・校正の諸員は擧つて努力奮闘を重ねたが、項目の意外なる增加と、細字校正の困難とに阻まれて、進行豫定の如くならず、加之完璧たらしめ得ないまでも、能ふ限り不備の點を少くしようといふ慾から、終に一月々々と遲らせて、今日に及んだのである。これに就いては、こゝに謹んで讀者諸君の寛恕を請ふの外はない。併しながら豫想の頁數を超ゆること二百五十餘頁の大册を、豫定通りの價額を以て頒布し得るの一事は、必ず讀者諸君も編輯者・刊行者等と喜を共にして下さるであらう。

顧みれば、本書編纂七年間の勞は決して輕いものではなかつた。さうしてその苦心は獨り余等同人ばかりでなく、昭和三年以來、本書の爲に執筆せられた人々に於ても同樣であつたと思ふ。その中既

15123

に鬼籍に入られた人が數人ある。山口剛・西原柳雨・黒木勘藏・宮島新三郎・吉野作造・土田杏村・平林初之輔・巖谷小波・渡邊吉次・松居松翁・關根正直の諸氏がそれである。假令諸氏の豐富なる學殖の一部ではあつても、これを本書に依つて永く世に遺し得ることは、せめて故人の厚志の萬一に酬ゆる道ともなるであらう。思へば實に感慨無量である。就中、山口・黒木二君の如きは、病蓐に在りながら、なほ原稿の筆を斷たれなかつたといふ。この熱意・誠心は、本書の在らん限り、これを世に傳へたい。

本書に光彩を添へてゐる挿入の圖版は、その材料の選擇・撮影・印刷に、一通りならぬ苦心を重ねて成つたものである。又これが爲に貴重なる圖書の撮影等について、特に便宜を與へられた宮内省圖書寮・帝國圖書館・東洋文庫・内閣文庫及び伊藤松宇・上田萬年・佐佐木信綱・高野辰之・田中親美・松井簡治諸氏の芳志に對しては、こゝに謹んで感謝の意を表する。

千葉龜雄・柳田泉・木村毅の三氏には、執筆以外に明治文學に關して煩はすところが多かつた。特にこゝに記して感謝の意を表する。

なほ編輯・校正の事に終始關與して努力された新潮社員諸氏に對しても、こゝにその勞を謝する。

昭和九年五月二十七日

藤村作

昭和九年六月十日印刷
昭和九年六月二十日發行

定價一冊金十圓
特價八圓五拾錢

日本文學大辭典
第三卷

著作權所有
（全三冊）

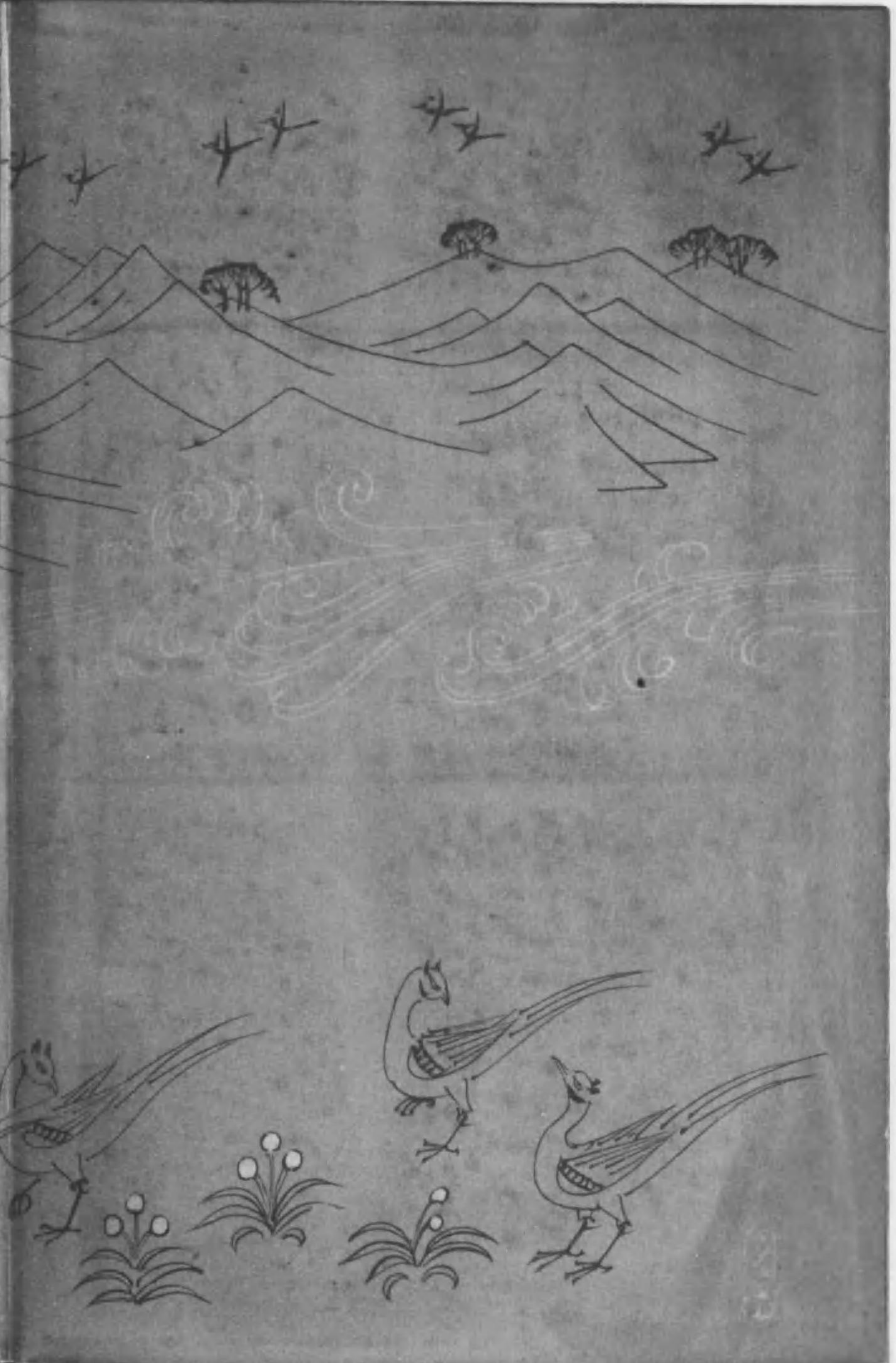
編纂者　藤村作
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込(34)八〇五番・八〇六番・八〇七番・八〇八番・八〇九番
振替（東京）一七四二番

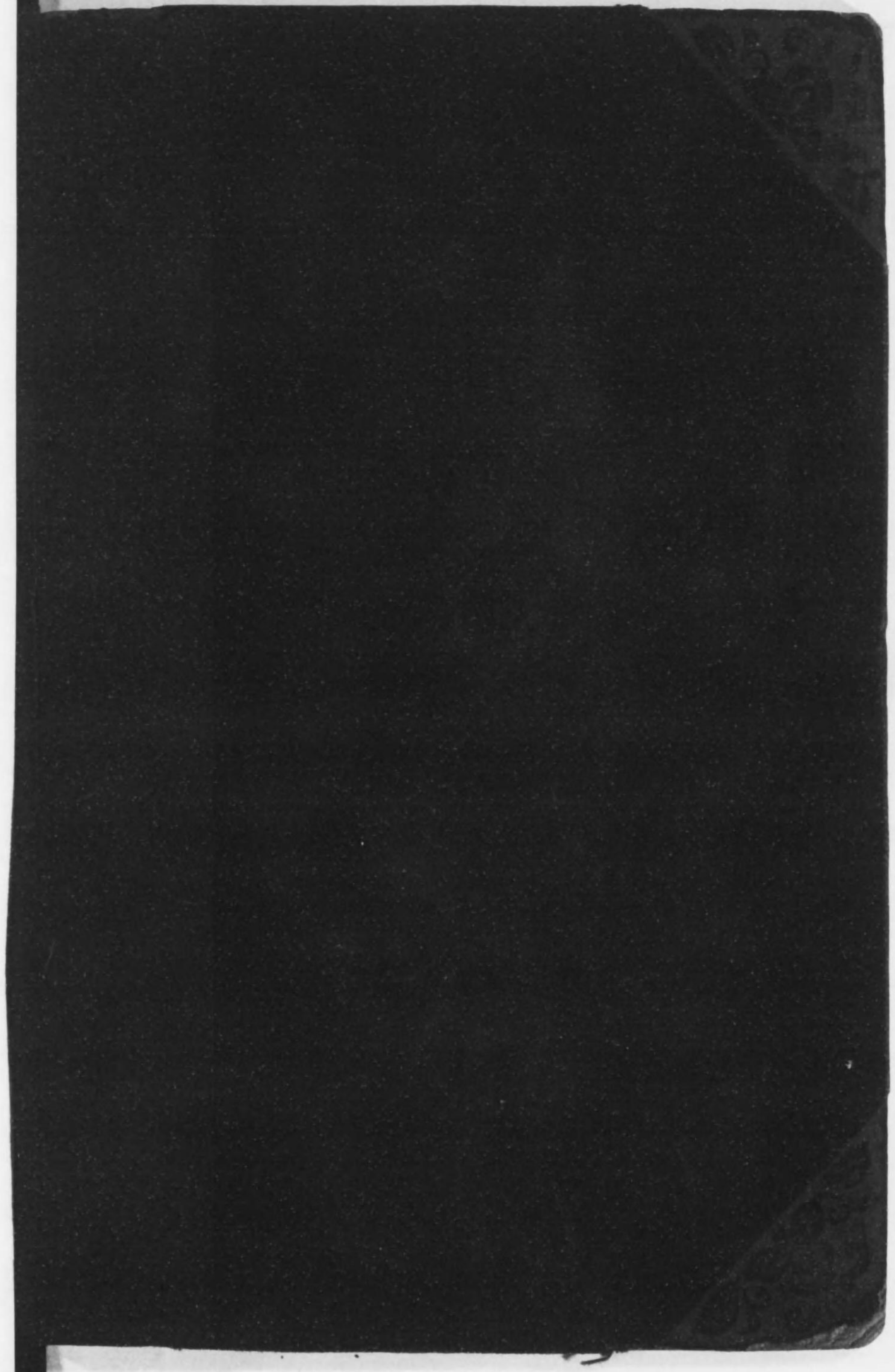
東京市小石川區西江戸川町二十一番地
印刷所　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

〔東京小石川區西江戸川町　植木製本所製本〕

第三卷增補訂正表

頁	段行	誤	正
三一	一ノ一三	「家說林」	「百家說林」
三三	一ノ一七	「漢人漢文手習始」	「韓人漢文手習始」
一二〇	三ノ一	「頰燒阿彌陀緣起」	「頰燒阿彌陀緣起」
一五五	三ノ一七	「有然法橋在唐日記」	「有然法橋在唐日記」
一三三	一ノ二二	座之 觀受宮	觀受宮 座之
三八六	二ノ三	「歌舞伎音樂」	「歌舞伎劇音樂」
四四九	四ノ一三	*neoren*	*neuren*
四五一	一ノ九	*Culturmutsicke*	*Culturmusicke*
四五二	一ノ一〇	*menschkeit*	*Menschheit*
五六一	二ノ二二	明かであるが、現存の	明かであり、萬葉集卷十六に出てゐる、豐前・豐後・筑前國の海人の歌の中には船歌もあると思はれるが、確實な船歌の
五七〇	四ノ一〇	(Alexandre Duma Père)	(Alexandre Duma Père)
六〇七	一ノ一五	諸禪師に って	諸禪師によつて
六二三	三ノ三二	明治三十六年、	明治三十四年より大正元年まで、
六九九	四ノ二九	(編補)	編名不詳(安永七年刊、橫本、百五曲收載、「[illegible]」の版本を交へ用ひて刊行)
六八五	挿繪說明	[illegible]	[illegible]



終